KAIZO

改造

失業問題特輯

七月號

日本地理大系（第六回配本）

山岳篇

時は夏、山岳の季節、二ケ年の歳月を盡して編纂せる全日本山岳篇を特に本大系の別卷として讀者に提す。北海の山々に始り奥羽關東の高峰を探つて全日本アルプスの神秘を撥く。靈峯富士の百態、歷史を育みし近畿中國の山嶽、焰吐く九州の山、遠く新領朝鮮臺灣の名山高峰を悉く網羅す。揭ぐる寫眞七百は之れ卽ち我第一流の山岳家が死を冐し想を罩め時を盡して撮影せるもの、而て山岳界の最高權威擧つて蘊蓄を傾け稿を寄す。本篇の如く完璧最高の山岳篇は古今斷じて他に類例なし。登山家は以て指針とせよ!! 綠濃く雲白き山岳に憧憬する男女は卽ち座右に備へて摩天の高峯、淸冽玻瓈の溪谷を心頭に描け

寫眞七百面 グラビア・ダブルトーン・網目版等最新印刷術に依る、美麗鮮明。

本文執筆家 小島烏水（總論）槇有恒（北アルプス）、冠松次郎（黑部、双六）、田部重治（御岳乘鞍）、武田久吉（白山、奥羽、植物）、野々垣邦富（南アルプス）、木暮理太郎（木曾山脈、關東、中部）、藤木九三（近畿、中國）、北川淳一郎（四國）、竹内亮（九州）、伊藤秀五郎（北海道）、田村剛（朝鮮）、生駒高常（臺灣）、矢野宗幹（昆虫）

附錄其他 全日本山岳高度表（木暮理太郎編修）、二頁大原色版（北齋の裏富士・小島烏水解說）、色刷地圖（日本アルプス。奥上州）

全上質アート・ペーパー
四六倍判・**定價貳圓八拾錢**

東京市芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二番

今東光著（最新刊）

岩田專太郎裝幀。著者題字。

四六判七一四頁
定價貳圓五拾錢
送料廿七錢

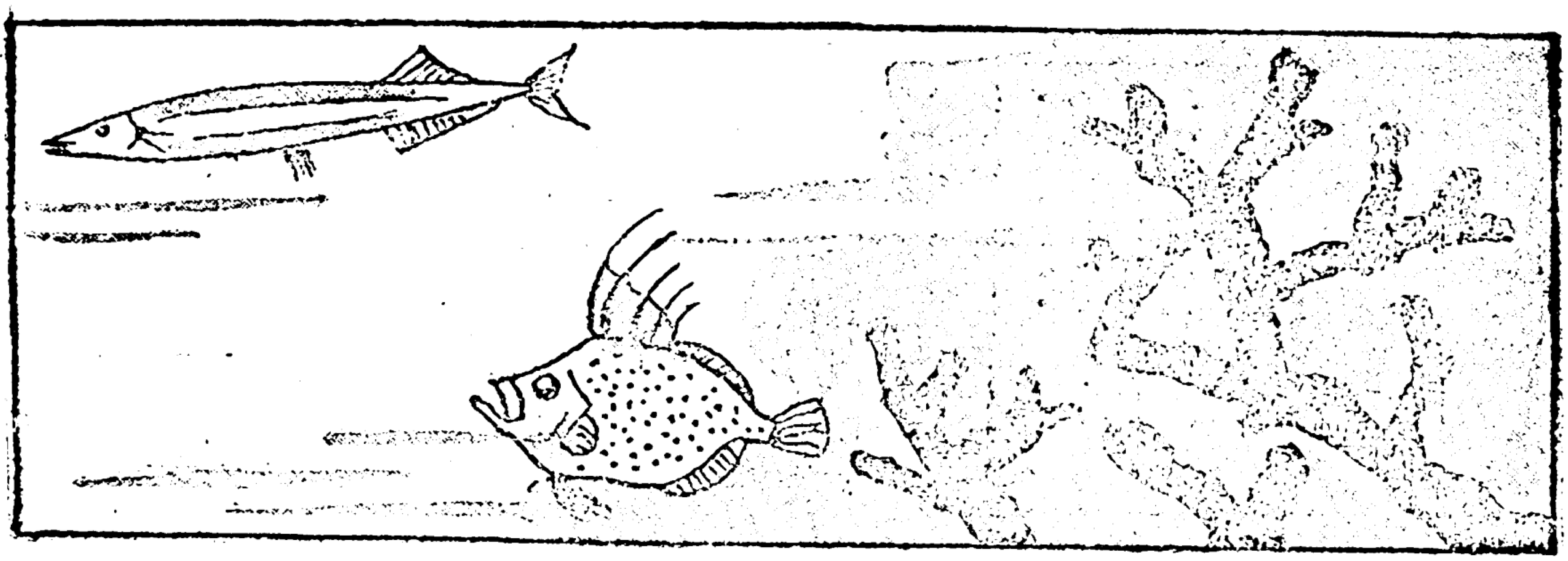
愛染地獄

新聞に映畫に熱狂的好評を獨占せる珠玉篇？

弟の愛慾の罪を自ら着、許嫁の純戀を振り棄てて飄々として家を出た榮之丞。刻々衰亡し行く江戸末期の混亂渦中に墮ち込めば、艶麗花の如き女賊おさらばお金の嬌眼の一閃に絞り上げられ、林田一味の外人暗殺陰謀に加擔すれば、捕獲の提灯飛來して血に渴する名刀平安城は怒り狂つた。

燒き付く如き紅裙を蹴つて韋駄天走るお金、お園を追ふ執拗蛇の如き紋之助、榮之丞を慕ふ亡者の如きお小夜。唐人お吉もお福も皆愛染地獄の坩堝に煮られ、愛慾の悽慘地上に充つ。淸新の解釋、潑溂たる筆鋒、興味津々閉卷を忘る。

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

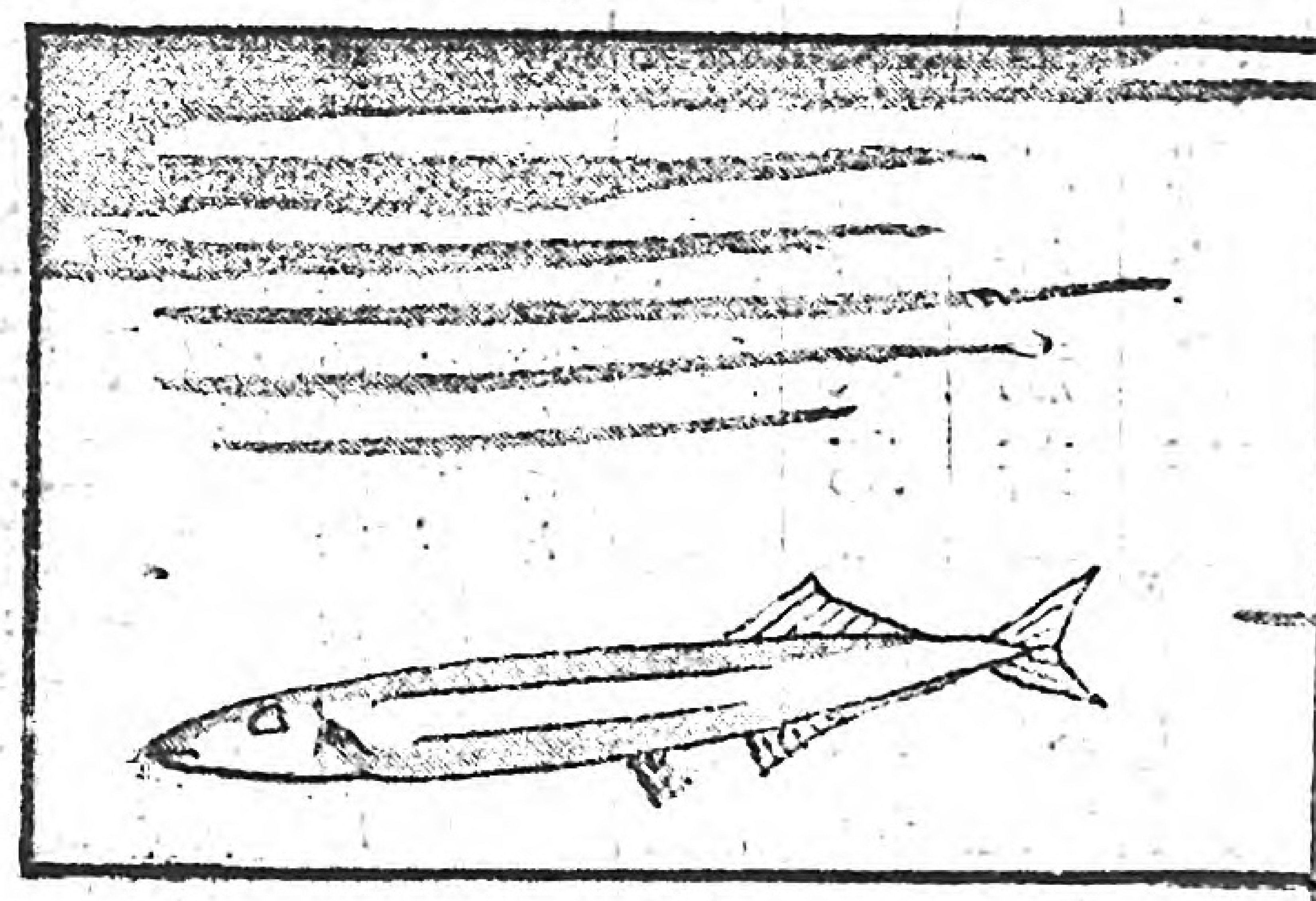


改造 七月號 目次



改造 七月號 目次





創作

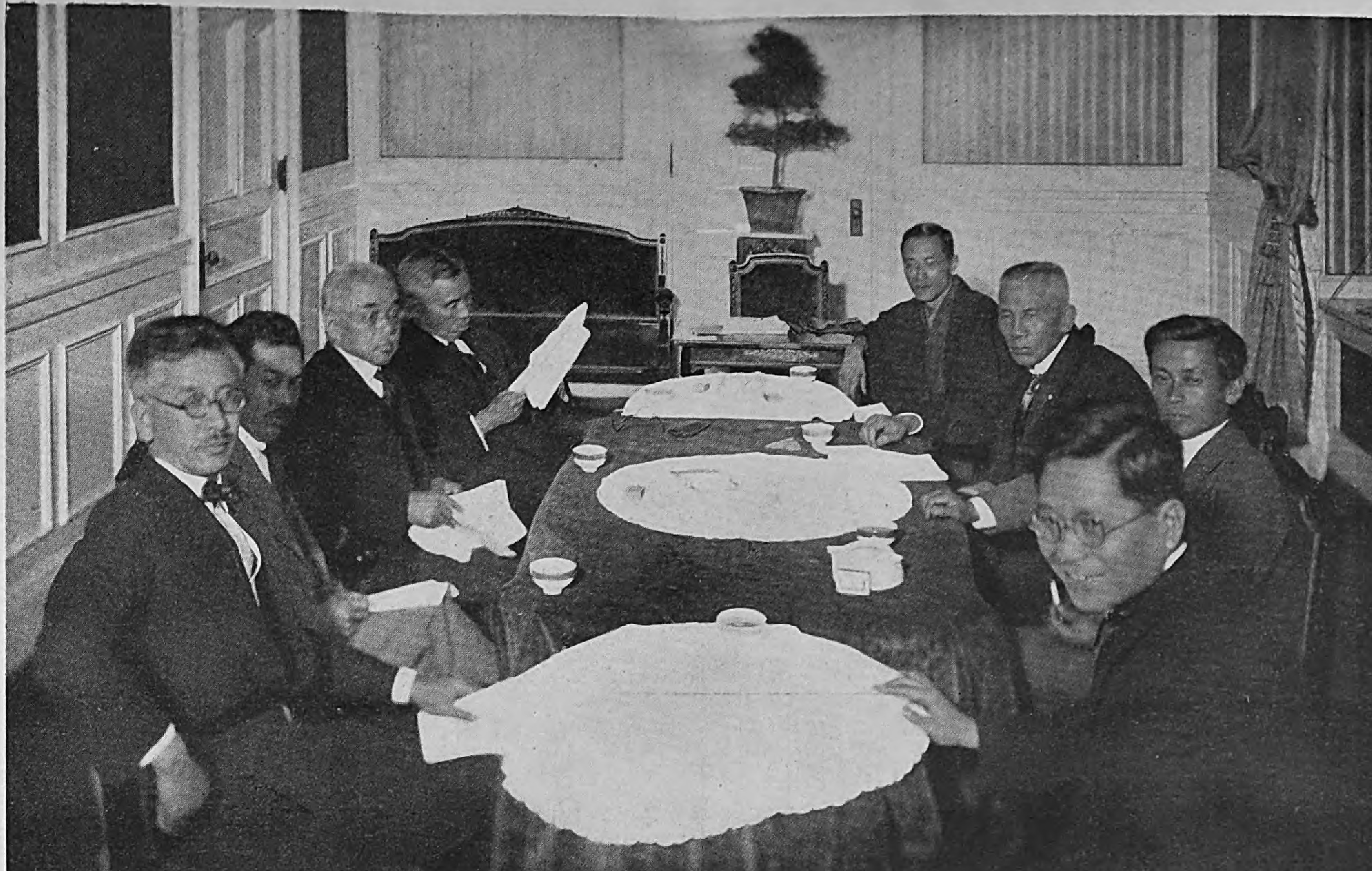


本社主催失業問題討論會

（向つて左より順に）那須皓氏・阿部賢一氏・安部磯雄氏・井上藏相・高橋誠一郎氏・安達內相・末弘嚴太郎氏・山本社長



改造七月號目次



本社主催失業問題討論會

（向つて左より順次に）那須皓氏・阿部賢一氏・安部磯雄氏・井上藏相・高橋誠一郎氏・安達內相・末弘嚴太郎氏・山本社長

濱口内閣漸く多事

濱口内閣の高等政策が悉く失敗し、事ごとに世人の危殆を招きつつあるは意想外である。ことに海軍統帥權問題に坐して軍令部長以下の總更迭を見たるは遺憾の極である。國民の疾苦今日の如き現狀に於て一つの形式問題を以つて内閣の基礎がぐらつくといふことは我國政治の不名譽であり、そして民衆の總意と、國民の利害とによつて政治が動いていない證據である。もしこうしたことで政局が轉換するやうでは公明なる政治も、民衆を基礎とする政治もいつまで經つても具現の見込がない。陰謀政治、寡頭政治がいつまでも我國を支配することとなる。現存の我財政狀態を以つてして、到底軍令部の希望する兵力量を實現することは不可能であることは七千萬民衆の均しく承認するところだ。このごろの街頭や田園が失業群に充ち、そして不景氣の聲に滿つることも萬人既知のことだ。この民衆苦を前にして絶對七割說を主張する人々の氣が知れぬ。三度の食事がとれぬ人々が幾百萬あるにかかはらずこの暴論に終始しやうとするのは氣狂の所業にあらずして何ぞ。さるにても濱口内閣がこの重大なる事局を擔任し、そして民衆の痛苦を背景にしてこの一事に坐礁して動きがとれなくなつておる政治手際の幼稚さ拙鈍さは歯痒き極といふべく、かくの如き狀態で、失業對策を乘切り、澎湃たる不景氣を打解し、そして勞働組合法制定を乘切ることができるであらふか。否々、陸軍の軍縮も公約であり、減稅實行も公約である。この公約を前にして一加藤の爲めに散々玩弄せられつつあるは何と心細き次第ではないか。

我々は毎日〱眼前に展開されて行く不景氣と、失業群の簇出とに心膽を寒くしつつある。財政緊縮もよろし、消費節約も徹底的にやるべし。しかし政治は生きものである。政治は勢ひである。何時までも舊聲明の政策を道學的に頑守する必要はない。今は政策の轉換期にある。ここに政策を一新するにあらずんば、内閣は崩解し、民衆の生活苦は遂に救ふべからざるの域に達せん。ただ内閣がここに新政策を樹立し得るや否やによつて民衆の期待を新たにする。さもなくんば軍閥のため、頑迷なる樞府、上院、反動派のために一揺りに揺り倒されん。この所を手際よくサッサとやつて除けてもらいたい。左顧右眄する必要は毫もないのだ。眞の底力を出すときは今のときを措いてないのだ。

失業問題討論會

出席者

安達謙藏　井上準之助
安部磯雄　阿部賢一
高橋誠一郎　那須皓
末弘嚴太郎　山本實彦

時日　六月五日午後六時より十一時まで
場所　東京會館

山本。御用繁のところを御集まり願ひまして恐縮にたへません。實は今夜お話していただく「失業對策」の範圍は非常に廣汎に亘りますが、……。たとへば失業の原因から、防止、對策、失業保險、財源問題、失業手當問題、勞働組合法案……と。而し第一に失業の原因に就きましてお願します……。しかし「資本主義の行詰り」であるとかいふやうな大きな原理問題に就きましては、成べく今夜はその討議をば避けたいと思ひまするが……。併しながら一應頭をば附ける關係上、この失業の原因といふものに對して、四五分間でも宜しうございますから、一つこの原因に就ての究明をばお願したいと思つて居ります。これは井上さんにお願したいのですが……。

井上。極く簡單に言ひますと、大正九年の財界反動後に、日本の仕事といふものは段々と縮小されて來て、それに世界的の影響、日本自身の關係から、亦ズーッと縮まつて來た。そればかりでも當然に失業者といふものは出て來たのであるが、現政府は、これ迄の放漫なる財政計畫を更へやうと斯ういふことで、昭和四年度に四億圓、昭和五年度に五億圓、といふ金を中央地方を通じて使ふことを止めた。その結果、即ち仕事が減つた結果、又當然に失業者が出て來て居る。それから、昨年の十一月くらゐから、世界を通じた不景氣が來て日本にその結果が現はれた――その日本に結果の現はれて來たのは、恐らくは今年の一月くらゐからが一番主もに眼に見えるやうになつたのでありませうが、一番結果が現はれて來たのは、例へて見れば、アメリカの綿が二割五六分下つた、同時に日本から言へば金解禁に依つて爲替相場が六七分上つた、その結果で綿がヨリ以上に下つた。その爲めにはどうなるかと言へば、紡績會社のストックとして有つてゐる綿がウンと下つた、それで紡績會社の持つてる所の……何と言ふかインナー・リザーヴとでもいふか、それがウンと減つた。恰も紡績會社が市場で大損失を來したのと同じ影響を來した。そこへもつていつて、株の値段がウンと下つた。その株の値段の下るといふことが、亦各種の方面に大に影響をしてゐる。それから、もう一つ世界の不況といふものを言ふならば、印度の關税政策、銀の値段が下つた爲に、日本の輸出が不利益になつた。今の紡績會社の例で言へば、原料の綿は下つた、その爲に自分の內部は惡くなつた、それに依つて製品は廉くなつたけれども、今度は世界の不況の爲に輸出が減るやうになつた。斯ういふ事の爲に、今日では紡績會社は二割……恐くは今度の操業短縮で二割三分にならうが……二割三分のマア操業短縮をやつてゐる。それが少くとも勞働者を解放するか或は勞働者の缺員を補充しないといふことに、各紡績會社はなる譯でありますから、さういふ風な事の爲に日本では失業者が出て來て居る。斯ういふことが、私は、大正九年から今日の眼の前に來て居る狀況に通じた失業者の出て來た原因だ、と斯うマア考へて居ります。

山本。さうすると、金解禁後の影響とこの失業との關係に就てのお話を聽かして頂きますか。若くは、この方の問題を先きに一つやりませうか。

井上。それに附加へて言へば、金解禁の準備として出て來ましたのは、只今申上げた財政の緊縮、消費節約といふやうな事である。そこで、金解禁をしたといふことの先づ實際問題から言ひましたならば、直後の影響で言へば、只今の財政緊縮、消費節約と、金解禁は

同じもの、所謂合致した結果と言つていゝのでありますが、それならば金の解禁は將來に亙つてはどうかと斯う言へば、そこは世間の人はいつも斯う言ひます、一割何分も爲替相場が下つて居つたが、金解禁に依つてそれだけ上つたから、非常な影響があると、斯う言はれます。それは議會の問題にもなつたが……。マア理窟はどうでもいゝが、實際は、日本の金輸出禁止の爲に爲替相場がどれだけ下つてゐるか——一番長い間下つて居つたのは幾らか。又ずうつと下つたことに依つて日本の經濟界に事情が出て來たその爲替相場の下つて居つたのは幾らか。斯う言ひますと、統計を取り、日本の經濟界の狀態を考へてみると、先づ四十六弗と見たのが一番正しいと思ふ。さうすれば、この爲替相場は三弗半下つて居りますから、割合にすると七分、斯う考へるのが一番正しいと思ふ。最近の例に依れば、去年の七月には爲替相場が一割二分下つて居つた。それは何時から下つたかと言へば去年の正月から下つたので、その前の十二月には矢張り七分しか下つて居らぬ。六ヶ月間に爲替相場が下つたとしてもそれに依つて日本の物價、日本の經濟事情が出來た根據を捺へるといふのは、非常な誤であります。矢張り七分爲替相場が下つて居つたと斯ういふのが一番正しい。大正十一年くらゐからズツと通じて考へてみると、それ位下つてゐる。即ちそれだけのものが日本の經濟界の全體に影響を與へて居つたと斯う觀るのが宜からう。金の解禁をして爲替相場が上つたと言へば、それは六七分の割合だけ、日本の經濟界、日本の物價といふものに及ぼす。即ちそれだけが直接金解禁に依つて、過去と將來に於てそれだけの差がある。斯う見るのが實際問題として一番正しいやうに思ふのであります。そこで、金解禁をした爲に一番直接影響を受けるものは何かといふと、それだけ丁度輸出が不利益になつた。その不利益はどうして補ひがつくかと斯う考へてみると、物價が日本では安くなる。論より證據、昨年の七月頃からの割合でいふと、卸賣で一割三分、小賣で一割一分下つて居ります。即ち爲替相場が上つた爲に輸出が不利益になり、その輸出が不利益になるだけ生産費が下り、生活費が下る。輸出が不利益になつて利益が少なくなつたやうに思ふけれども、この生産費の低下生活費の低下に依つて、それだけの不利益は補ひがつくと、斯ういふのが即ち金解禁をして爲替相場が上つて落ついた日本の經濟界に後に來る現象でありますから、その落つく迄には多少の經濟界の不安定、不利益、不均衡はありますけれども、經濟界が落ちつけば、將來に亙ることは、金解禁後のそれで補ひがつくと、吾々は考へてゐます。

山本。安部さんの立場から、今のお話の點に就いての御意見を一つお話

し願へませんでせうか。

安部。根本的の原因ですか。

山本。根本的の原因をちよつとお願ひしたいと思ひます。これは制度の上でも差支ないと思ひますが、兎に角、所謂緒論として、あなた方の評を一つ言つて貰ひたいと思ひます。

安部。これはもう別に珍らしい意見ではありませんけれども、總括的に考へてみれば、この不景氣といふのは、現在の所日本だけの問題ではなく、殆ど世界的になつて居る。又、不景氣といふものは、目下の不景氣ばかりぢやなく、度々これが起つて來る。さうすると、その原因は何處にあるかといふことになると、矢張り問題は、この世界を通じての經濟組織といふことに及んで來ます。私共無產黨の立場からいつも考へてゐるのは、今の經濟組織が、資本主義の經濟組織であるといふことが、一番根本的の原因であると私共は思つて居ります。その資本主義の經濟組織から、どうしてこの失業といふことが、殆ど定期的に、又恒久的に、それが起つて來るかと言へば、これはつまり、資本主義經濟の下にある所の分配の不平等からである。分配の不平等といふのは、何れの國に於きましても、その富が少數の階級に集まつて居つて、大部分の民衆は十分その分配に與かつてゐないこと。つまる所、大部分を占めてゐる所の民衆の消費力が、非常に乏しく不足してゐる。それが色んな原因になつて外に現はれて來る。これ今日の失業であります。言葉を換へて言へば、つまり世の中が不景氣になる、不景氣になるといふことは物が賣れないこと、物が賣れないといふことは、所謂消費者の側に立つてゐる所の多數の者の消費力が乏しいといふことです。それが遠い原因となつて、そして今大藏大臣からお話になりましたやうな極く直接なさういふ原因がありまして、さうした今日の不景氣といふものを作るやうになつた。これが大體今の無產黨の人々が觀てゐる所の一番根本的の原因だと私は考へてゐるのです。

山本。これに就て那須さん、何かありませんか。一つ根本の組織の問題と若くは失業の原因を成すことに就ての總括的のことを……。

那須。根本論は、今、安部さん、それから井上大藏大臣からお話がありましたが、私、少し小さな問題になるか知れませんけれども、一二氣附いた點を附加へますと、今まで日本は明治以來、毎年三萬町步乃至五萬町步位づゝ耕地面積が殖えて行つた。それが大正十一年くらゐを境として、殆どもう殖えなくなつて來てゐるのです。で假りに四萬町步の耕地が殖えるとすると、一家五人としても、二十萬人の人間が其處で生活することが出來る。それが今殆ど止つて來たといふことは、それだけ少くも農業の方面で人口の收容力が減つて

來たといふことを意味する。それから一方商工業の方面では、私は日本の商工業が非常に發展したことは、技術的進歩といふ點よりも寧ろ、生活程度が低く、勞賃が低く、その爲に生產費が廉いといふことが、非常に大きな要素に成つてゐるのではないかと思ふ。それが世界大戰中に、非常に生活程度と勞賃とが上つた爲に、日本の工業の生產費といふものが嵩んで來た。所が一方日本に於ける最も重要な工業は何であるかといふことを見ると、紡績工業と製絲工業、この二つの纖維工業である。これは勞賃の廉い地方に段々と動いて行く傾向を有つてゐる種類の工業だと思ふ。現に製絲業に於ても、紡績業にしても、支那が有力なる競爭者として現はれんとしてゐるやうな次第である。私は、日本としては今の國柄から考へて、もつと外の種類の工業に重きを置かなければならぬと思ふのです。まだ十分に發達してゐない廉い勞賃といふものに依つて發達して來た日本のこの二大工業、それが今は打擊を受けて居る。殊に製絲業などに就きましては、我國での實に重要なる產業であるに拘らず、その生產幷に販賣の組織に非常な缺點があると思ふのですね。さういふ日本に於ける有力なる工業が、先刻井上さんのお話になつたやうな意味から紡績業が殊に困つて居り、又製絲業は今私が言つたやうな意味からして困つて居る。斯ういふやうな事が、矢張り日本の產業界一般に隨分大きな影響を與へて來てゐるのではないかと思ふのです。

山本。さうすると、その販賣若くは分配の缺陷といふものは、丁度安部さんの仰しやつたやうに組織の上から缺陷があるのでせうナ。

那須。ありますね、色々な意味でありますね。例へば安部さんの仰しやつたやうな意味から言へば、日本の生絲の輸出商が無闇に先賣りしてしまつて、さうして日本の絲が安くなることを利益とする場合があるのです。日本全體に取つては不利益であつても、輸出商の資本主義的の見地から見れば利益になると、さういふ際に輸出商の執る行動が、往々にして日本の製絲業に非常なる困難を齎らしてゐることがあると思ふのです。

末弘。私はその點に就て、非常に漠然たることですがね、今の井上さんのお話も、それから安部さんのお話も伺つて、私等自分の立場から斯ういふ感じがするのです。日本の今の失業といふ問題の根本は、日本の金融資本の發達といふことゝ、日本の產業若くは產業資本のこの組織及それの行動といふものとの間に、可なり矛盾がある。さうして日本の金融資本の要求に追隨することが出來ない傾向が段々見えてゐる。そこへもつて來て、急に金融資本の方だけが卒然として世界と同じスタンダードに立つた爲めに、その企業者のさ

うでなくてさへ今まであつた矛盾といふものが、急に非常に大きな開きが出來た。そこに金融資本家側から言ふと、實に合理的なことをやられそして當然だと思はれたことの裏に、さうでなくてさへ追隨出來なかつたこの産業資本家が一層及ばなくなつた所がある。今の金融資本家が急に金解禁の結果世界的に開いた爲にその間非常な無理がある。そこに失業といふことが起るのは當然である。日本の一體産業の今までの組織が悪いのだ、――金融資本が世界的になるといふことは世界の大勢なんだから、それに追隨することが出來ないやうな不合理な産業をやつてゐるのが間違だと言へばそれ迄の話であるが、そこの今まで追隨出來ないといふ悩み、それが今の失業の状態だ。と私なんか寧ろそんな風に見たいと思つてゐるのです。

山本。どうでせうか、今までの安部さん、那須さん、末弘さんの議論に對して……。

井上。安部君の言ふことは、私の言ふことゝ少し根柢に於て違ひますが、私は那須君や末弘君の言ふのと大分近いのは、近代の經濟組織では、世の中の景氣不景氣といふものは免かれることがどうしても出來ない。農業國の昔の日本なら違ひますが、今日のインダストリアリゼーション、今日の經濟組織では、景氣不景氣はある。その景氣の時に、勞働者と仕事が一致してゐるならば、不景氣の時には、どんなことをしたつて失業といふものは出て來ます。人間が經濟組織の重要部分を占めて居る以上は、神經的に、景氣の好くなる時は何時でもいゝ計畫〱と、極端に盛になり過ぎる計畫を立てる。景氣が悪くなる時は、亦神經的にそれ以上に不景氣に考へる。實際の問題よりか何時でも景氣不景氣共に餘計に趨りたがる。だから、どんなことをしたつて、今日の經濟組織を考へるときは、人間の力で失業者を防ぐことは出來やしません。當然不景氣は來る、失業者は出來るのです。それはもう私は當然だらうと思ふ、少しも不思議はない。それが十年に一遍來るか二十年に一遍來るか、又原因は今度の如く世界を通じて農産物が出來過ぎた、それと同時に消費が減つたといふことで來るか、何から來るか知れないが、これ迄の……イギリスで言へば一八二〇年位からズッと御覧になると分るが、何時でも景氣不景氣が來て居る。それに亦失業者といふものは來るのである。これは私に言はせると議論にならない、今日の人間の力では失業者は防げません。何故ならば、景氣の好い時にキチッと出來た勞働者なら、不景氣になれば失業者が出るのは當り前の話です。だから私はその原因に就ては何にも不思議とは考へないのです。

末弘。その點は私も全く御同感です。唯私は斯う考へるのです。資本家から言はせると、今の世界の金融資本の要求するだけの利潤を産

まない、だから企業を縮めなければならないと資本家は言はれるけれども、それはあれぢやないのですかね、世界大戰以來、非常な好況の時に殖えた名義上の資本ですね、それをその儘減資…普通の一つの會社に例へてみれば、減資せずに置いといて、それに就ての利廻りをその儘或る程度に求めようとされゝば、必然會社の儲けが少いから、それで仕事を縮めなければならないとか何とか言はれてゐるのですね。それで、その名義上の資本本來から言へば、何とか減資すべきであつたのに、減資しないで、何とかうまく行く方法を恰も金解禁と言ふ形で與へたのではないか…。

井上。それはありませう、現代のことから言へば…、併し、時々末弘さんのやうな議論を聽きますが、それは時の問題です。金融資本家が、資本を下したがこれは五分に廻る外値切る所はないのだから五分まで資本金を減さうと斯う考へるか、或は拋つたらかして置けば資本が不用になる――非常に無駄になつて當然五分に減つてしまひます。それはもうあなた方が日常御覽になると同じことですね、戰爭中に三千萬圓入れて一割の配當を取つたものが、それが私が見てすら三分の一くらゐの價値になつてしまつたのが幾らでもある。それを金融資本家…と末弘さんの言葉で言へばその金融資本家が、その三千萬圓に對する八分なら八分の資本利潤を取らうとされるから無理だと言はれるけれども、それを取らうと言つてみた所で一年か二年は取れますかナ？　が天然自然に結局三分の一位に減つちまふ。さうすると三倍の生產力を有つてゐたものが、三分の一に減つてしまつて…資本金のメリツトといふものが三分の一に減つちまふ。生產資金が三分の一になると、勞働者も、三分の一になるかどうか知らんがウンと減るのは當り前の話ですよ。

山本。安部さん、どうですか。

安部。今の井上さんのお話は、現在の經濟組織といふものの上に立つてのお話ならば無論それはさうですね。併し、全然今の資本主義の經濟を離れて、社會主義の經濟組織といふものを頭に置いて考へるならば、總ての產業といふものが統一されます。その統一されるといふことは、需要と供給といふものが何時もバランスを保つてそして生產が總て行はれるといふことになるから全然今の失業者といふものはどんな事があつても起るといふことは私共考へないのです。產業組織の根本を改めてしまつて、日本だけで言ふならば、政府が總ての產業といふものを自分の一手に引受けてしまつて、丁度煙草專賣局が煙草の製造を管理してゐるやうな風にやれば、需要と供給といふものがピシヤンとバランスが取れるやうになる。さうなりさへすれば、經濟界の變動といふものは、唯天然に米が餘計出來たと

か棉が多く出來たとかいふ影響を蒙る以外には、人爲的の影響といふものは決して蒙ることはないと思ふ。

井上。それは私に言はせると、ステート・ソシアリズムで行かれるならばさう行けるけれども、現在の經濟組織の上から言へばさういふ事は出來ない。何故ならば、外國へ物を出しても、外國が今日の如く不景氣になつて來ると物を買ふことを減らす。とするとどうなるかと言へば、それだけ仕事を減さなければならない。その仕事を減らせば失業者が出て來る、利益が減る。それをば利益も減すまい、失業者も出すまいと思へば、國家が損をしてでもその仕事をやつて行かせる…勞働者を維持する爲に國家が何人(なんぴと)かに金を持つて來て貸して、そしてやつて行かせなければ出來ない仕事になつてしまふ。

安部。併し私は或る程度迄はですね、今の外國との關係は、今のやうにして置いては、餘ほど困難であると考へます。それにはソシアリズムと言つても矢張り國際的ソシアリズムを行うて行かなくてはならない。が、そこ迄でなくとも、結局は今の組織よりも進めてですね、日本なら日本だけでソシアリズムでやつて國家管理でやるといふならば、外國貿易が振はなくなつて五億圓とか六億圓とかのそこに損失があるといふことになれば、それは國家がやるのだから、今の生絲がどうしてもいけないといふことになれば今度は外の物に勞働力を差向けて、その方からそれを補つて行くことが出來ると思ふのです。

井上。そこの點です、私はソシアリストの言ふ所にどうしても理解の出來ない所があるのは、そこなんです。今、安部さんの言はれる如く、假りにこゝに紡績がある、それの品物を外國が買はなくなつたら、その紡績管理は國家がやつてゐるのだから、それを直ぐ外の物に向けたら宜からう、と言はれるが、その外の物を拵へても誰がそれを消費するのか、斯ういふのが一番今日の社會のむつかしい仕事なんです。內地の消費者の消費する物ならば宜いが、外國に持つて行かうといふならば、誰が買ふのかといふ先づその買ふ者を見つけなければならぬ。そこの所が非常にむつかしいのです。今日社會主義を唱へる人が言はれる所は、失業者が非常にある、この失業者くらゐその儘にして置くことの不利益なことはない。これに何物かを製造させなくちやいかん、と言ふが、その製造させる前に、その製造物を誰が消費するか、誰が買ふか、先づそれを見つけてそれからの問題でなければならぬ。それも、內地にて消費されるものならばまだ宜しいが、苟も事他國に行くといふものならば、買ひ手を探さなければならぬといふそこに二年や三年の時間を要する。そこが、

私は理窟はあつても實際に應用する問題としては非常にむつかしい問題であらうと、いつも考へて居るのです。

安部。それは確かに或る程度の困難は無論ありますけれども、私は、ソシアリズムが、國家のソシアリズムから世界のソシアリズムに變る迄には、多少の……多少どころではない大分年月がかゝると思ふ。さうすると、世界的のソシアリズムに移る迄には――國家だけのソシアリズムといふものを考へれば、今のやうな外國貿易といふものを漸次止めて行く必要があると思ふ。それは何故かといふと、全體外國貿易といふものゝ原則なるものは、有無相通ずるのであつて、本當に日本に無い物を外國から取るといふその方針で行かなければならぬ。それを、例へば紡績絲が支那に出來ようとするのに、強ひてその紡績絲を日本が拵へてそれを是非支那に賣らうとする、といふ所に私は外國貿易の無理があると思ふのです。總ての物は、皆國家で消費する物を標準として、生産を行ふ。そして是はどうしても日本では出來ないといふ物、例へば鐵なら鐵を外國から輸入する代りに、何かの方法を以て外國へ賣出す物を拵へるやうにする。斯ういふ風にならなければならぬ。どうも今までの外國貿易は、餘りに外國に賴り過ぎてゐるのであるから、その範圍は確かに縮めて行くことが出來ると思ふのです。

末弘。安部さんに伺ひますが、さういふ事が今の資本主義的支配を認めた儘で行はれ、若くは××なしにそんな事が實現される可能性があるのでせうか。安部さんの今言はれるやうな非常なユートピア・・私はそれは經濟的ユートピアだと思ふのですけれども、今の儘を續けて行つたのでは、そんな事は出來ないといふ感じが私には非常に強いのです。××があれば兎も角も、それでなければ、今の世界を支配してゐる所の金融資本主義を無視したやうな産業のやり方を政府の唯遣り繰りで以て、今まで外國貿易に賴り過ぎてゐるのを賴らないやうにすることは、私には、何だか出來ないやうな氣がするのですが……。

井上。斯う言ふことが出來ますよ。例へば、今安部さんの言はれたことを考へてみるとですね、實際的になると、日本は物を買はなければいかぬ――買はなければ立ち行かぬ國だから、買はうとすれば又賣りもせなければならぬ。が、アメリカならば安部さんの言ふ通りのことが出來る。アメリカは、外國から物を買ふ必要が無く、賣る必要はないのだから、內地でアメリカの國法の支配を受けてちやんと經濟的に行けるのですね。所がそれは日本やイギリスは行けないのだ。併しやらうといふ範圍はどこにあるかといふと、私が先刻言うた如く外國が不景氣になつて物が賣れなくなつた時にどうするか

といふことです。安部さんの言ふことに就ては私は眞理があると思ふのですが、このデイストリビユーションです、物の分配といふことに就て非常に考へなければならぬことは、資本主が、非常に大きな配當を取りながら、外國に物が行かなくなつたからと言うて直ぐ勞働者を解放するとか、或は勞働賃銀を下げるとかいふことは、安部さん等の唱へるソシアリズムから言うたら行はれぬと斯ういふことになる。今はさう迄は行つてないけれども、併しながらそれはこれから先きには必ず各人共に考へるやうになるかも知れない。さうしたら勿論ソシアリズムのこの主義といふものが總ての事業に採用されるから、相當な程度に迄行かなくとも、資本主が配當を減して勞働者を維持して、分配を成るべく公平にするといふこと位は行はれるだらうと思ふ。それを絶對的にするといふことは中々むづかしうございますよ。そして國家が今の話のやうにやつて行くといふことは日本のやうな國情では甚だむづかしいけれども……。

安部。私が眼を著けてるのはイギリスとロシアですが、ロシアは今末弘さんが仰しやつたやうに××で以てソシアリズムの理想を實現しようとしてゐる。それからイギリスの方は、今の勞働黨の根柢がソシアリズムです。これは議會に依つて政治の方面から——政權を握つて、さうして徐々に社會組織といふものを變へてソシアリズムの世の中にしようと斯う思つて居ります。この二つの國が今試験中なんです、どこ迄行くか疑問ですが……。併し可能性は十分ある、決して不可能だと言うて絶望する必要はないと思ふのです。

山本。この原理のことは成るべくこの邊で打切りたいと思ひますが、阿部賢一さん何かあなたからどうぞ……。

阿部賢。僕は斯う思ひますね、先きをどうするとかどうしないとか、いゝとか悪いとかいふことでなしに、實際の唯今の經濟の動きといふものからは、此失業といふものは避くべからざるものゝ一つだと思ひますね。將來もです。でその點、井上さんのお考と又少し違ふ所があるのですが、不景氣ならば無論失業者は來ると思ひます。今日のやうな世界の不況、フランスだけを除けば世界の不況である。そこへもつていつて、日本では井上さんがお話になつたやうに金解禁があつた。さうすれば失業者が生ずるといふことはこれは言ふを俟たないのですが、然らば景氣が好くなつたら、果して失業者が無くなるか。少し貿易が立直つて、それから國内の國産奨勵が利いて不景氣が立直ることが出來たとして、それで失業が無くなれば結構ですが、私は無くなることはないだらうと思ふのです。といふのはズツと統計を見ましても、亦經濟の動きを見ても、生産設備の完備といふものとそれから一方の需要力といふものは、非常に足並みが

違ふのですね。金さへあれば生産設備を整へることが出來て、隨分今まで百人とか千人とかでやつた事もスウヰッチ一つで出來ることになる。所が民衆の購買力といふものは、安部先生の仰しやつたやうに非常に貧しい。そこへもつて來て日本の人口は毎年々々七八十萬も殖える。十六七歳になつて仕事に就かなければならぬ者が年々二十萬以上もある、それだけの者には年々新らしく職業を與へなくてはならぬ狀態になつてゐる。さうなつて來ると、一方生産設備の非常な累進的完備と他方之に伴はない民衆の購買力の釘付との間の矛盾は、將來景氣が少し位直つた所で、必しも失業者をおつ拋り出すことが無くなるとも言へなからうと思ひますね。而してこれは社會主義化されても、貿易に非常に支配される限りは、日本の經濟は矢張りその影響を相當受けるだらうと思ふ。その點に就ては井上さんのお話の一部分は贊成してもいゝと思ひますが、併し失業といふものは特に日本のやうな國情の所では外國以上深刻に受けなければならぬといふことを豫期しなくてはならないでせう。

高橋。安部さん、人口增加の脅威といふものをお感じになりはしませんか。

安部。私は人口問題のことをお話する積りぢやなかつたのですけれども、今、高橋さんからお話があつたから述べて見ますが……。どうして失業對策の中に人口問題のことを論ぜぬのかと、私は非常に疑つてゐるのです。これに矢張りどうしても失業對策として考へなければならない。人口が減つたからというて、失業者が起らないとは必しも言へないことは、今、阿部賢一さんの言はれたやうな意味に於てさうだとも思ひます。けれどもこれ程失業が深刻になるといふことは、どうしてもその根柢に人口問題といふものが含まれるのです。簡單に言へば私は、今より十年前……それよりかもつと前から考へてみたのですがね。早稻田大學の浮田博士が二十何年前から産兒制限論を唱へたことがあるが、私も同感でありました。然し餘りに反對が多く、……國賊だといふやうな說もあつたから暫く鉾を收めて居つたのですが、十何年前から再び其說を唱へるやうになりました。矢張り産兒制限はどうしても今日日本ではやらなければならぬ、それは失業對策として考へてもいゝと思ふのです。

那須。私も今の安部さんのお話に贊成ですが、私のこの贊成といふのはそれは産兒制限論から言ふのでなく、人口問題が今日の日本の失業問題と關係があるといふことからです。先刻井上大藏大臣から、資本主義の經濟界に於ては週期的に恐慌が來、失業があるといふことは免かれないと言はれた。それは誰しも反對しないと思ふ。併しさういふ一般的な世界共通の事情以外に、日本と致しましては、明

治以來日本の農工商の產業が非常な速度で進んでゐる。さういふ生產力の發展に伴つて人口も殖えた。所がその生產力の發展が最近には今までのやうな速度で行かない、停頓してゐるに拘らず、人口增加の速度だけは變らない。この現象は一朝一夕にして止めることは出來ないから、どうしても失業といふものが含まれて居ると思ひますね。ですから、さういふ週期的に來るやつの外に、日本には永續的に段々と壓力が加はつて來るもう一つの要素があるやうな氣がするのです。

末弘。私はそれは、生產組織の行詰りぢやないかと思ふのです。あの德川時代の人口を見ますとあゝやつて土地を中心として土地經濟をやつてゐる限り人口の伸縮能力がない。だから御承知のやうに德川三百年の間は人口は實に增減してゐない。これに反して、明治になつてから資本主義に依つて日本の天然を開發し、それに依つて養ふだけの生產が急に出來たから、その生產の進む限りはそれに養はれるだけの人間が殖え得たのだけれども、今日の日本は、明治の時に採用した資本主義が行詰つて居る。それを產兒制限論者は人爲的に制限しようだの何だの考へるけれども、私などは反對です。それでなくたつて抛つとけば減るやうに出來て居る、現に每年減つて居る。誰も制限しろと言はなくても現に每年減つて居るのです。それは天然自然なりと私は信じてゐるのですが……。

安部。ちよつとその點に就て私は反對なんですが……。その減るといふのはですね、知識階級の如きその方法を知つてゐる人の間には無論何時の間にかちやんと行はれてゐるから減つて行くやうです。だから無學な貧乏人階級にその知識を普及したいのです。そこを私は強く言ふのです。知識階級は抛つて置いても自然にやつて居る、併しながらそれをこの儘にしてゐると……優生學上から見ても不利益ではないかと思ひますからね。

末弘。揚げ足を取るやうですけれども、果して所謂その知識階級が本當にその社會の健全なる階級で、無產者の勞働してゐる階級——或る意味からいふと知識の無いやうな階級が果して下等な不健全な階級でせうか。この國を永續させる要素はその何れを必要とするか——健全な要素は何れであるかといふことは、隨分大きな問題ぢやないでせうか。

安部。あなたの言ふのは、無產階級の味方として私共大變喜ばしいですね。

高橋。何ぢやないでせうか、產兒制限が行はれますと、社會主義運動は餘ほど其の力を弱くすることになりはしないでせうか。社會主義化には貧困といふものが一つの力のやうに思へますがね。

安部。私は無産階級運動をやつてますけれども、どうもさういふ風には考へられないですね。私は勿論無産階級のことを考へてますけれども、矢張り人類の幸福、人類全體の幸福といふことを忘れることは出來ないのです。

高橋。結局カタストロフイを經ないで、社會主義の社會に移り得ませうかね。

安部。私は今のやうに信じて居りますが、併しそいつは兩方共議論のある所です。それで私はロシアとイギリスとの兩方を今比較して居るのです。あの二つの行き方をジッと見てゐるのです。

高橋。それは併し氣の長い話ぢやありませんかね。刻下の狀態から將來の示唆は得られないでしやうか。ジッとイギリスあたりの經過を見てゐても、それが何時結果が來るか分らないぢやありませんか。今日の問題である失業から將來への轉換が考へられないですか。

安部。併し何も唯手を拱いて待つてゐるのぢやないのです。

高橋。そりや見てるのもいゝけれども、今、食へない者が現に居るのですからね。この情勢から……。

安部。それは問題が別なのです。今、食へない者をどういふ風にするかといふことは別の問題です。私はその最も手近い問題も考へてゐるのです。その眼の前の手近い問題と、今言つた遠大な方法とは、分けて考へる必要があると思ふのです。

高橋。だからこの刻下の問題を……。

安達。その産兒制限に就ての話は大問題であるが、その問題を唱へ出すといふことも一面大に必要のあることで、こゝに一つ考へなければならぬ事がある。それで井上さんのお話も伺ふやうにしたいのですけれども、今、安部さんの言はれるやうに、何とかして優良兒の制限はしたくないのです。そこで我輩も何とかしたいと思ひますのは、貧困の家庭に於ける結核患者の子です。それから天刑病者——癩病、さういふ病氣に罹れる人の産んだ子です。それ等は皆さん御承知でありませうが實にひどい。これ等を一つどうかすることが出來まいものかと思ふのですね。その意味から一種の制限論になりますがね。

高橋。それをやつた所でこの失業は救へないですね。それもいゝには違ひありませんけれども、失業にはどうですかね……。

安達。勿論失業救濟とは別です。今、産兒制限論が出たからちよつと言つたのです。

井上。私は政治的に考へて、産兒制限には大反對です。第一、今日この頃の狀態を御覽なさい、米は何故廉いかといふとですね、米なんかも、景氣の好い時は一人あたまに一石一斗何升といふものを食ひ

ますが、この頃の不景氣では恐らく一石くらゐしか食ひはしません。左樣にこの景氣不景氣といふものは物に影響するので、もう今日のやうに不景氣だといふと、默つて居つても人は減ります。あなた（安部磯雄氏）の言ふ如く良い者が減つて惡い者が殘るかも知れませんが、兎に角人は減ります。もう一つ政治的に考へて、日本は何にかアセットがあるかと斯う考へると、人間が多いから今日迄非常に國が隆になつた、それは個人から言へば貧乏しなければならぬから不愉快だといふかも知らんけれども、日本の國の富が世界に矜れるやうには中々なる氣遣はないから、そこで國のアセットから考へて、人口が多いといふことより外に何にもない。で、その結果はどうなるかといふと、日本はこれから非常に膨脹しなければならぬ。それからインダストリアルゼーションといふものを行つて、この殖える人口を調節して行くよりは、世界に立つて行けない國なんです。そこで私は政治的に考へると產兒制限なんといふことは非常に反對です。もう一つは、今日の日本の不況を以てして直ちに根本的に人間を減らさうといふ考を持つのは非常に早過ぎると思ふのです。日本がこの經濟的組織になつてからは、今度が初めての本當の不況といふことになるのです。この不況が果して何時どう變るか、今日の所まだちよつと分らない。この不況は世界的の不況です。一八二〇年からズーッと見るとラインはアップ・エンド・ダウンして來てゐるが、あのヨーロッパ戰爭の時代といふのは非常にアブノーマルなものだから、あんな事は平時に於ては考へられないとしても、併しこの平時の不況といふものがどう變化するか分らない時代に、今直ちに產兒制限をやつて人口を減らさうといふことはどうも私は政治的に考へて、日本の國の立場から言つて大反對なんです。では政治家なり國民の先達なりは何をするのかといふと、人間を殖やしてそしてこれ等の人々の扱ふ仕事を見つけよう、仕事をさせるやうにしようといふことに鋭意するのが現在の日本の指導者の務めです、仕事です。それを好い加減に減らして樂に暮せるやうにとフランスやイギリスのやうに人口の調節をすれば、日本人といふものは奮發しやしませんよ。日本人くらゐ餘儀なくされて始めて働く人間はないですよ。日本人は滿足したら皆懈けてしまふ人間だから、私はこの產兒制限は、將來何百年かの後は知らんが、今の現狀では大反對です。ウンと食つてウンと子供を拵へることを考へることだね。

高橋。併し今の問題として、不況の爲に食へなくて困る人間が增加して行くものならば、何かいゝ方法を教へて……制限が行はれてもいゝぢやないですか。

井上。この世界の不景氣が、これから先き五年も六年もズッと續くといふ前提で、人間を減さうと言はれるのか知らんが、そんなに世界の不景氣が續くや否やといふことは、誰にも分りはしません。今日のやうなアブノーマルの後に來た經濟界のこの代り目に、直ぐ根本的の問題をこゝに持出すことは、私はそれは非常な嘘だと思ふ。

高橋。ですけれども、現に不況の爲に子供が減りつゝあるとするならば、そしてそれが食へないで減つて行くものとすれば、もつと何か良い方法で減らすことを敎へたらばいゝぢやないか——つまり自然に委して、苦しい爲に子供を殺すとか何とかいふ事をやらせないでも、もつと良い方法で減らすことを敎へたらどんなものでせうか。

阿部賢。私はこの儘捨てゝ置けば日本人は疲弊する一方だらうと思ひます。現に今日既に民族的に疲弊して居る。そして今のお話のやうに食へない人が多數ある。それは丁度裸で機關銃の前に立つてるやうなもので、この儘で行けば、縱しんば人間は殖えても能率の非常に上らない非常に弱い人間ばかり出來るのではないかと思ふのです。

井上。ではあなた（阿部賢一氏）に尋ねるが、日本人がこれ迄四千萬か五千萬の人間であつた時に、本當に富裕に樂に食へた時代が日本にありましたか。私は過去に於ても日本人が樂に食つた時代は無いと思ふ、ありはしないでせう。皆苦心してゐる、それならばこそ今日のやうに日本人としての品性を保ち活動力を維持してゐるのですよ。

阿部賢。それが今日は極端です。もつとユツタリしなければ良くなる氣遣はない。

高橋。今の井上さんの議論と同じやうな意味で、社會主義的國家を實現する手段としては人口が多い方がいいと思ふのですよ。

井上。その點、安部さんの議論はソシアリズムから言へば反對ぢやないですか。ズッと人間を減らして個人の富をズッと殖やすといふことは、私は、ソシアリズムとは非常に主義に於て反しはしないかと思ふね。

高橋。私もさう思ふのです。人間を減らすことは、ソシアリズム實現を遲くする所以だと思ふのです。

井上。さうなればソシアリズムは要らなくなる……。

高橋。さうです、要らなくなつちまひますよ。富が一部に偏してゐるからこそ……人口が多くて富が一部に偏してゐるからこそ……

安部。イヤ私のは、人口を減すのが最後の目的ではないのです。唯吾々人類が幸福でありさへすればいゝのです。さうなりさへすれば、ソシアリズムであらうが、キヤピタリズムであらうが、そんなこと

は問ひはしないのです。

高橋。さうすれば、キャピタリズムの儘でも、産兒制限を行つてゆけば人類皆の幸福な時代が到達するとお考になりますか。唯、さうなりさへすればいゝのだとお考になるのですか。

安部。産兒制限の方は目下の問題として言ふのです。今はあまりにひど過ぎるからです。それをやつたからと言つて、社會主義社會が早く來るとは考へて居りませんけれどもね。それと、この問題はですね、唯國家をどうする斯うするといふやうな問題でなく、個人の問題ですから、縱令國家の爲め井上さんの仰しやるやうに人口が多いといふことがアセットであるにしても、一人々々の貧乏人が澤山子を抱へてゐて養へぬといふ狀態であるならば、そしてその人達にこの知識が缺けて居るならば、それ等の者が知り得るやうに、やれる方法を敎へるのが親切なやり方でないか。さもなければ、國家のアセットになるために、國家がこの澤山子供を持つて居る者を何とか補助しなければならぬ。ムッソリーニが今やつて居るやうな風にどうしても補助しなければならぬといふことになる。で、これは國家問題として考へるよりも、個人々々の生活問題として考へるべき問題ぢやないかと思ふのです。

高橋。つまり學說史的に言へば、近世の初まりから國家富强策として人口の增加といふものを考へて來て、人口の增加といふことは卽ち國家繁榮の萬能藥であるかの如く――丁度今井上さんのお話のやうに、考へて來た。そして十八世紀の半頃から、個人が眼覺めて、人口增加は却つて人類の不幸を齎すものではなからうかと考へるやうになつて、結局、人口增加を以て國家繁榮の萬能藥と見ることが、そこで一遍破產したのではないかと思ふのです。

安達。私は國民保健論からして產兒制限論を言ふのです。その點からは、さつき言つたやうに大に考へなければならぬことだと思ふ。併ながら政治的の議論としては、井上さんの論に贊成です。一體、西洋人と比較して吾々日本人は決して能力が劣つてゐるとは思はぬけれども、併し水平線を見ると、矢張りどうも歐米人の方が或る點では宜くはないかと思ふ所がある。尤も取除けはある、個人々々で優秀な者もあるにはあるがね。で、それならばどうして彼と競爭するかといふと、矢張り人口增加といふことが日本の歐米人に打克つ大なる要素であると思ふのです。數でこなして行くのだ。

安部。人口を多くして戰爭でもやりますか(笑聲)。

安達。イヤ、さうでない……(笑聲)。

末弘。私は、人口問題を失業問題の對策のやうに思ふのは邪道だと思つて居る。それは原因と結果とがあべこべだと思ふのです。その國

が恰も資本主義的に榮える時代になれば、人口の殖えることも何等恐れない。人口が多くて困るといふことは、その國の現在の資本主義に既に或る程度の行詰りが出て居るといふことだけであつて、そこは逆だと思ふのです。そこは原因結果をあべこべにして居る感じがするのです。

山本。この問題は色々話があるでせうが、この程度で打切つて頂きまして、今度は内務大臣に、失業の現狀と社會不安及び職業紹介所のこと、これは今度數をお殖やしになりましたし、それ等に關聯してお話をば願ひたいと思ひます。

安達。私は、失業者といふものは先きにもお話があつた通り斷えずあるものと思ふ。それで、幸ひに日本は、これ迄は歐米に比較してさう失業者を出さなかつた。今度初めて失業者が出て來て、失業問題が大分やかましくなつた。即ち初めての試練を經べき機會に出會した譯です。それだからして、こゝで以て日本の實際政治家は失業對策を誤らないやうにしなければならぬ。それで私當局者の一人として考へて居りますが、一歩を過つたならイギリスなりドイツなりのやうなことになつて、國家は非常に尠からざる負擔をせんければならぬといふことになるから、愼重に考慮してよすね、この趨勢を靜かに冷視して、そして徐ろに對策を講ずべきものといふ、これが私の根本の基礎となつて居るのです。それで無能と言はれやうが無策と言はれやうが、當分はジーッとして居つてこの失業問題の趨勢を見よう。それにはあなた方のやうな學者の御意見も吾々は參考として考へる。それから安部さんの立場のやうな政黨の御意見なども參酌するが、兎も角既に先進國には行掛りがある。幸ひ日本は斯ういふ問題に就ては行掛りを今まで造つて居らぬ。吾々が其行掛りの造り初めでありますから、非常に注意して、何と言はれやうとも當分推移を見ようといふ基礎觀念を持つてゐるのです。そうして眺めて居りますが、こゝに失業者の定義が違つて居るのです。又その數も今社會局で調べて居りますのは、度々新聞にも出てゐたし議會でも答辯したけれども、全く推定であつて、失業者の統計といふものは全然なかつたのである。大正十四年に一度拵へた許りでその後はないのです。それを昨年の九月一日から初めて統計を作つてみやうぢやないかといふのでやつてみた。それはどうして作るかといふと、大正十四年に調べたのがあるからそれを基礎として、地方長官に賴んでやつて調べたのですがそれが即ち昨年の九月一日からの調である。が、それは推定でありますから、私自分で自分の監督の下に作つた統計表だけれど信用をこれに置いて居らないのです。それで來る十月一日に更に、これは統計局で全國のものを調べますから、これは比

較的いゝものが出來ると思ひます。それで失業者の定義ですが、無産派の人々の御意嚮では、例へば東京なり大阪なりに居る者が失業して、そして郷里に歸る――即ち歸農する、歸農して父兄の膝下に居つて相當に家業を助けて行く、といふやうな者でも失業者であるとして、廣義に解釋されるやうだけれども、吾々はそれを失業者に認めないのです。それをやつてゐる者などは、縱令收入が少くても、兎も角も今日の日本の狀態では失業者でない。それを失業者に加へましては非常に殖えますけれども……。今日では非常に歸農してゐる者が多いのです。それから例へば鐵道が工事をしてゐる――今は隧道などを掘つて居りますが、それを中止したので、それ等の工夫は皆農村へ歸つて、百姓をするとか何かしてゐる。で、農村では非常に人口が殖えて行つて農家が行詰るから、矢張りそれも失業者だといふことを言へばさうも言はれるけれども、吾々はそれは失業者と認めて居らぬ。さういふ意味から調べてみますと、歐米の失業者の狀態と、日本の今日の失業者の狀態とを比較して、我國のはさう深刻でない。まだ〳〵歐米に比較すると距離幾許ぞ――非常な距離であると斯う思ふのです。それで、最近にも實は大阪、神戶、名古屋、京都あたりの毎月發表致して居る統計の方面で調査して居るのですが、その統計に依ると非常に少いのであります。所が世の中が斯う失業問題々々といふやうになつてゐるのに、――數は少い――といふこと世間に言ふと、それでは一向歡迎せられないやうな氣味があるらしく思はれる。さういふ氣風が確かにある、そんなに少いのは幸ひだと言うて呉れない。失業が多いと言ふ方が新聞でも大きな活字で取扱つて呉れる。斯ういふことは甚だ殘念に思ふのです。マア斯うして斷えず調をして居りますが、どうして調べたかといふと、一方は警察、一方は方面委員であります。大阪には日本一の完備した方面委員がありますが、これに依つて徹底的に調べて居るのです。さうすると推定の統計よりはウンと減つて居る、恐らく三分の一ばかり減つて居る。殊に京都の如きは失業者が近來激減しました。西陣で一旦失業者が出ましたが、これは西陣の小天地に於て織物のダンピングをやつた、それを知事が入つて止めさせるやうにしたりして調停しましたので、その代り賃銀は幾らか下げて居るのですが、兎に角あすこの數千臺の機は動き出して居ります。で、失業者の殖えるといふことは事實でせうけれどもが、世間で非常に深刻の如く言ふ程深刻ではない。又新聞の批評なり議會の質問などでも、救護扶助すべき憐れな狀態の人と失業者とをチヤンポンにして、よく批評して居る。例へば餓死した者が居る、それを解剖してみると胃の中には米粒が一つもなかつたといふやうな事を言つて居る。そんな

事は非常に人の神經を刺戟するけれども、實はそれは失業者ではないにも拘らず、さういふものと一緒にして人心の不安を唆るのですから困るのです。さういふ救護すべき者の問題と、失業者の問題とは、區別しなければならない。冷靜に考へるとそんな事もあるのです。それですから、一方には非常に失業問題を鄭重に取扱ふと同時に一方には冷靜に視て、この大事な場合に萬遺漏なからしめやうと斯ういふ考の下にやつて居るのです。それでどうするかといふ手段方法に就ては、失業手當をやるとか失業保險を設けるとか色々言ふが、斯ういふ事は餘ほど考慮しなければならぬと思ふのです。イギリスに於ける話は私があなた方に申上げる迄もなし、ドイツの如きもさうでせう、非常に今日向ふの政治家は後悔してゐるだらうと思ふ。へ、日本の失業者に手當として一圓とか一圓五十錢とかいふものを遣つたらどうなるでせう、殆ど失業者ばかりが簇出して遂には持て剩ますでせう。そんな事をしたら金は幾らあつても足らんことにならう。それならば無産派の言はれるやうに軍備でも半減するか。それも、今日の世界に於ける日本の國情からして不可能と思ふ。そこで吾々は國費を失業問題の爲め濫費しないやうに、而かも失業者に對して適當なる手段方法を執りたいと思つてやつてゐるのです。先進國の誤つたる處置などに追隨して同じく手を燒くことのないやうにしたいと十分考へて居るのであります。それから失業保險といふやうなことは、餘ほど考へなければならぬことでありますから、先づ勞働者と傭主との間の扶助救濟の意味に於ける一種の保險制度などを、今でもちよい〳〵行つて居りますが、今度失業對策委員會などでも研究しやうと思つて居ります。要するにさういふ基礎觀念の上に立つて、さうして今日の失業の狀態を注意して居る次第であります。それで失業救濟の爲にする事業、これは出來得るだけ緩和する爲めにやります。大藏大臣も同感であるから、地方の起債も許し、今日の自由勞働者の失業を出來るだけ緩和する。又知識階級の失業者に對しても出來るだけのことをやらうといふことを考へて居ります。が直接に失業者に向つて手當を給付するとか、失業保險で失業者に負擔させずに國家と傭主とばかりに負擔させるやうな不當なことなどをしたら、それこそ我國の將來に禍根を貽すものであると考へて居ります。出來るだけ失業救濟に總ゆる手段を講ずるけれども、さういふ先進國が手を燒いたやうなことはしたくない。救濟事業に就ては今お話したやうなことをするのですが、同時に民間の富豪や大きな會社なども救濟事業に働くやうに、新聞紙上で御覽になる通りに昨晚も三井三菱その他東京一流の人を官邸によびまして、お互に奮發しようぢやないかと言うて失業救濟問題を投

かけてみたやうな次第でありますが、非常な好感をもつて迎へられ、斯ういふ會は度々開いて貰ひたいといふことでありました。それから職業紹介機關、これは各國共にやつて居るし、出來るだけ多く造らうと考へて居ります。先だつての豫算では僅か東北……青森縣に一つ増しただけで、皆で五つでありますが、その下に小さいものが二百六十七あります。それを段々三百乃至四百と造つて、內容の改善は勿論ですが其機能を十分發揮さして行かうと思ふのです。これは失業者ばかりでないのみならず、普通の勞働者でも、今まで仲介者に所謂口錢を取られて居つたものを無くするので、大變な利益になることがあります。これが又失業者救濟の一つにもなるから、この職業紹介機關も出來るだけ機能を發揮することにするやうな方針を執つて居ります。大體さういふことで當分の推移を見てそしてやらなければ、ウッカリ失業問題に對して慌てゝ遽々然としてやるやうなことをしたら、百年の禍根を貽すものであると斯う私は考へますので、非常に失業者に同情を表して何彼と考へて居ると同時に、一方には靜に大勢の推移を眺めて居る次第であります。

高橋。結局、失業は今の經濟組織に伴ふもので、如何ともすることが出來ないから、うつちやつて置くといふのぢやないですか。

山本。高橋さん、ちよつと、前にこの非募債主義の問題と、この地方に事業を起して、それで調節するといふことゝ、この二つの事項に就て、大藏大臣から說明して貰つて、それから質問に這入つた方がいゝぢやありませんか。

末弘。その前に安部さんの言はれた根本問題に議論があるのぢやないでせうか。事業調節といふ問題に行く前に……。

山本。それでは安部さん、安達さんの御意見に對して、貴方の立場からやつて戴きまして、それから……

安部。それはちよつと私共社會民衆黨の事に觸れて居りますから、申上げて置きますが……。無論、私共は失業手當といふやうなことは本意ぢやないですね。あゝいふやうな、仕事をさせないで幾らかづゝ與へるといふことは、それは救恤事業とか、慈善事業とかいふものですからね。併しながら餘りに深刻になつて、さうして一方の救濟事業といふものがなか〳〵急に起らないといふことになれば、それ迄のほんの一時的のものとして斯ういふ方法を執るのも宜しくはないかと、斯う考へて居る。決して私共は之が良い方法とは考へてゐない。それで矢張り私共は、出來得るだけ、地方なり或は中央に於て、資本家が十分に事業を起して吳れゝば、それが救濟方法としてはいゝと考へて居ります。

安達。貴方の今夜のお話は、餘ほど我々の意見に接近することで、大

變喜ばしいことだと思ひます。

高橋。それは接近したといふよりも、事業家、資本家に依賴するやうに聞えますがね。

安部。僕のは資本家に依賴するのぢやない、依賴するといふと、語弊がありますけれども、斯ういふ際には資本家の方が非常に奮發しなければならんと、斯ういふのです。なぜならば、資本主義の經濟組織に依て優秀な位置に立つてゐる者は資本家であるから、當然、斯ういふ變動の爲めに失業者が起るといふことになれば、それに對しては、十分に資本家といふものは……。

高橋。併し、資本家といふものは、儲けがなければやらんものと假定して掛つた方がいいぢやないですかね。貴方の今の御意見では、資本家に犧牲を拂はして、資本家と妥協しようといふ態度が見えやしませんか。

安部。いやさうぢやない。共産主義なんかでは、さういふ風に考へて居るかも知れませんが……

井上。資本家のすることは儲けなければやらんといふことはどうかね。利益が少くとも、そこに長らくの利益を考へてゐるでせう。目前でない將來のことも考へてゐるでせう。それでなければ資本にならない……。

安部。それだから、資本家から寄附金を募ることは出來ないから、税を徴つて、それで以て產業道路を造るといふやうなことならば、ちつとも差支ないと私は思ふ。私共の考へはそれです。

末弘。私は、この問題に就ては失業といふものは、今の產業の組織として當然だといふ先程の井上さんの議論と同意見なんですが、同時に今の安達さんの言はれたやうに今こゝで周章てないでぢつと見てゐろといふ議論は、實際の政治家としては非常に賢明な策だと思ひますが、併し同時にそれは、どういふことになるかといふと、今の產業組織の當然の結果として大きな勞働需要のフラクチユエイシヨンが起る。その需要の一番少ない時の責任を極力產業そのものが負擔せずに、或は勞働者自からが困れば自分の生活を自分で縮少するといふことでどうにかなるだらうと考へる。それから又或る不安を家族制度が吸收してどうかして異れる、もう一つ歸農といふ方法で農村がどうかして異れる、だから、結局ぢつと見てゐると、有らゆるものが吸收して異れて殘つたものだけをどうにかしよう、どうにかしなくてもさうすれば、どうにかなるだらうといふやうな御意見であるが、今の資本主義を基礎として立つてゐる所の產業組織の下に於ける政治家の態度としては一見非常に賢明のやうだけれども、亂暴な言葉を使ふと、狡いといふ感じがある。それでなくて、大き

なフラクチュエイションの其の間の食へない所の勞働者といふものは、勞働者自からの生活を縮めろ、或は家族制度が吸收するから、ぢつと見てゐればいゝ、それから農村が吸收するから、ぢつと見てゐればいゝといふものの、農村は既に御覽のやうに人口過剩である。それに農村は吸收するからといつて、皆さういふやうなものに轉嫁して、後の殘る所を非常に少なくして、そこだけをどうにかしようと言ふのは資本主義の下に於ける政治家として狡いといふ感じがするのです。

井上。そこの所、內務大臣の言ふことを具體的に說明しますが、私は、イギリス・ドイツを例に取つて日本の勞働者と比較して見ますと、それはもう恐らく私に言はせると、今年の一月から出て來た失業者といふものと、前にある失業者といふものは全然區別して宜からうと思ひます。それは、斯ういふ例を取ると直ぐ分ります。戰爭後に英吉利には失業者といふものは恐らくは二百萬人近くありましたらう、それがずつと減つて見た所で七十五六萬、八十萬位しか減り得なかつた。然るに日本はどうかといふと、大正九年から十三四年迄に恐らくは事業の縮少の爲め、百萬人以上の勞働者といふものが職を失つてゐる。それが今、內務大臣の言はれる如く、大正十四年には、調べて見ると、十萬人ほかなかつた、失業者といふものは自由勞働者を入れて十萬人であつて、英吉利のファクトリイから出て來た失業者の二百萬人といふものとは全然違ふ、さういふことを考へて見ると、大正九年から大正十三四年迄に居つた百萬人の失業者、所謂業を失つて居る者はどこに行つたかと、日本でも尋ねて見ると、歸農したか何か知らんが、內務大臣が言はれる如く一部は歸農した、一部は家族制度のお蔭を蒙つた、卽ち仕事のあつたものが普通の狀態に歸つたと、斯う考へてもいゝ。そこで考へて見ると、イギリスのやうなファクトリイに居つて、それが卽ち先祖傳來の仕事である、斯ういふ勞働者の失業と、日本の今日の失業者といふものとは違ふ。私は、最近にファクトリイから解放されて出て來る者が本當の失業者と考へてゐるが、これ迄の失業者といふものは西洋の失業者といふものと大變違ふ。斯ういふことは、恐らくは誰が考へて見てもさうだらうと思ふ。それであるから、恐らく內務大臣の言つてゐる所も今のやうな所から言つてゐるのだらうと思ふ、私も同一な考へですが……。私、最近大阪に行つて、見て來ましたが、失業の問題は東京の問題ですね。大阪はあれ程の工場地でありながら、まだ失業といふものは——殖えつつあるけれども——さうシリアスな問題でない。それから考へて見ると、西洋の失業者といふものと、日本の失業者といふものとは非常に違ふ。東京はなぜある

かといへば、復興事業の濟んだ後、一萬人位、あそこで目立つて三月末日に急に一の失業者が出てゐる、それと同時に學校卒業生の職の得られん者と結付いて、それで今日は非常に問題を起して居る。これは慥かに大問題で當局者として大いに考へなければなりませんが、私に言はして見ると、最近です、だから、本當の西洋流のファクトリイから出て來た者が英國で百七十何萬人かある失業者と比較して見ると、日本は非常に少ない譯です。

末弘。私はその點は同感ですが、同時に斯ういふことも考へる。今の失業問題に就て、私、社會局の關係で何時もあすこでも言ふのですが、一體失業者〳〵といふことをトータル・アンエンプロイメントだけでお考へになつて、日本は數が少ないとか言はれるけれども、若しも眞に經濟的に將來の失業保險の場合を考へれば、今やつて居るやうなトータル・アンエムプイロメントだけを考へることは非常に間違つて居る。寧ろ大正十年位から今までの各工場に於ける勞働者に拂はれた賃銀の總額、その割合から實質的に失業率といふものを考へなければならん。將來の失業保險の場合に於て、日本の經濟界の動きで、どれだけの失業が出來るかといふこと迄行かなければ本當はいかないですね。今の失業統計といふものは實に不完全だと思ふ。

井上。日本銀行の失業統計を御覽なさい。

末弘。私は、あれはいゝと思つて居ります。

井上。あれは一番いゝだらうと思ひます。あれはファクトリイばかりのものです。

末弘。それで斯う思ふのです。日本では現在勞働組合が先づ發達してゐない爲めに、工場としては賃銀を減らすといふ方法で、一部失業を行つて全部失業といふものを防ぐことが事實上、非常に可能である爲に、トータル・アンエムプロイメントが少ないだけの話で、それは何かといふと、當然傭主である資本家が産業豫備軍を資本家自からが維持する責任があるのに、それを勞働者全體の間に損を押し付けて、勞働者にすつかり負擔さして資本家は負擔しないといふ現象を見て日本は失業者が少ないといつて喜んでゐることは、私は其の意を得ないことですね。

井上。併し、我々は現在の狀態では、先刻いふ如く、物價が一割一分下り、生活が下つてゐる、それだから、本當の意味をいふなら——是が安定せんから未ださういふ大きなことは言へませんけれども、何ヶ月か經つて安定したならば、私は、勞働者が賃銀を自から進んで下げてもいゝと思ふ。株主も配當を自から進んで減してもいゝし、當然株主の配當は減つて居ります。だから勞働者の賃銀も幾ら

か減していゝと思ふ。それも誰も禍を被らずに、それで事業を維持して行ける。今日の我々の政策の最大の最終の目的からいへば、そこにあるやうにすることを奬勵されゝば事業の調節もそれに依て出來ると思ふのです。
高橋。失業者を非常に出してゐるけれども、勞銀はあまり少なくなつてをらんといふぢやないですか。
井上。それは少なくなつて居るでせう。
高橋。いや減らんといつてゐますよ。
那須。さうして物價は安くなつてゐるのですから‥‥
井上。そこは、併ながら、高橋さん、私は安部さんにも聞きたいが、私は、そこは勞働者が非常に自覺の足らん所ぢやないかと思ひます。或る仕事があつて、株主の配當は減さずに、勞働賃銀だけ下げるといふことではいけないけれども、株主も配當を減し、この仕事を維持して行く上には尙ほ勞働賃銀も減すといふなら、勞働者も減したらいゝと思ふ。配當も減れば、勞働賃銀も下がり、物價も下るから、それに應じて行く、そこで初めて自分達の從事してゐる仕事を維持して行くことが出來る。それを無理遣りに俺は配當を減すのはいやだ、俺は勞働賃銀を減すのはいやだといへば、解散するか、仕事を廢めるより外仕方がない。斯ういふ時代にはそこが非常に必要な所ぢやないかと思ふ。
安部。それはさうです。それは勞働者も承諾すると思ふ、鐘紡のやうなことをしないで、先づ株主の配當を下げれば‥‥。
井上。その前提からいへば、必然生活費が下るといふことは前提なんだ、さうして行けば飯が食へる、それが本當だらうと、斯う思ふんです。
安達。結局、そこに治らなければならん。
井上。そこに治らなければ、世界的に競爭といふことは出來ない。
末弘。私、その點は全然贊成なんです。只それは實際財政限的失業對策だと稱するものです。
井上。そこはこのファクトリイから解放される勞働者が歸農するといふことが‥‥
末弘。その點は我々も認めるけれども、併し、大いに考へなければならんと思つてゐる。
安達。末弘さんは歸農するのを安心して喜んでゐるといはれるけれども、私は、安心して喜んではゐない。
高橋。併し、將來歸農の餘地はありますか。
末弘。いやないでせう。
安達。ないといへば、ないけれども、實際に於てはさうなつて行く。

阿部賢。それは外に行く所がないから……。もつとインダストリスが出來て居つたらいゝが、今はないから、田舍の從弟を頼つたり、兄貴を頼つたり、して歸つて行く。

安達。そこは東洋流の家族制度のお蔭で歐米とは餘程違ふのですね。

高橋。矢張りまだいゝ所があるのですね、食へない時には行けば食へるのですからね、幅があるのですね。(後記、これは高橋の言にあらず——高橋)

末弘。歸農といふことは、ファクトリイにゐた人間が完全に失業して歸農する、さういふことは歸農とは考へずに、例へば今の農村では何を非常に困つてゐるかといふと、農村に副業として道路工事とか、鐵道工事とか、さういふものゝ土工として得た收入が副業收入として非常にあつた、それが緊縮政策の結果、全部なくなると、農村の人が土工として得る副業收入が減る爲めに實質的には負擔は增してゐる歸農現象です。人は歸つて來ないから事が解決されてゐるやうですが、實質的に農村の負擔に於て、その分量といふものは、さつきの完全失業でなく、賃銀が減る、賃銀が減るといふことから見て行くと、農村が實に大きな負擔をさせられてゐるといふ所も見てやりたい。

安達。さういふ意味はあります。鐵道工事などは、あれで失業者が出ない。殊に今の鐵道工事は田舍の僻遠の地では農民が工夫になつてゐる。そこを中止すると、是等が皆歸つてしまふ。それで先年濱松の樂器會社の爭議が長く續いた、どうして續くかといふと、農村の子弟だから、罷業して置いて農村に歸つて農業を助けてゐた、それでストライキが續いた。さういふやうな意味で……

末弘。龜甲萬の醬油會社のあれなんかも、さうですね。

阿部賢。近頃の失業者數の多いのは機業と紡績が多數に失業者を出して居る……

安達。それは熟練職工として……

阿部賢。熟練職工もありますが、矢張りどちらかといふと、二十以下の者が六七割で、實に多いですね。それは子供ですから、どうしてゐるかといふと、都會に止つて婦人の中には醜業に從事する者もあるさうだが多くは行く所もないから、田舍へ歸つて行く、それは今末弘さんのお話のやうに農村の負擔でやつてゐる。手傳ひをしたくても仕事もありません、もう盆の時期でも濟めば、ぶら〱してゐる。兎も角もまあ生存——生活でなしに生存してゐるのですね。さういふ狀態です、それは日本と外國とは多少失業問題の性質は違ふだらうと思ひます……

安達。大いに違ひます。

阿部賢。併し、たゞ安達さんのお話のやうに傍觀主義——ウエイト・エンド・シイといふやうな傍觀の態度であるといふことは如何なものかと思ひます。問題は單なる生活問題でなしに、斯ういふこともあるですね、例の米騷動の時に……。

安達。それは一つの思想問題で、さういふ險惡なことのないやうに、我々、十二分の注意を拂つて居る。

阿部賢。米騷動の時に、米は六十錢になつたかどうか位でしたが……、今は米は安いですが、根本の生活が窮迫して來てゐる、表面平和のやうだけれども、裏面は××××××やうなもので、××××××××××××××いふやうな、さういふやうな時代はあるかどうか分らんけれども、兎に角、そこまで來てゐる。

安達。それは細心の注意を拂はなければならんのです。

末弘。私には失業問題をさういふ危險のやうなことに關聯して考へるのは、寧ろ邪道だと思ふのですね。

阿部賢。私は政治、經濟は、矢張り不可分のことだと思ふ。

末弘　さうでなく、根本の問題は、私は斯う思ふ。失業問題といふものは、資本家の立場からいふと、如何にも企業が立行かなくなると、執達吏が直ぐ押へに來るから、企業が成立たないといふことは大變のやうに思ふけれども、一體、失業者といふものは何かといへば經濟學者の言葉を使へば、産業豫備軍です。詰り次に景氣の好くなつた時に、直ちに働けるやうな豫備軍を作つて置く責任がある、詰り日本國民の間に將來の良い生産者を殘すといふ非常に重い責任があると思ふ。然るにどうも今の見方は、何だかその方は餘り考へないで、仕事がうまく行かなくなると、直ぐ執達吏か來る、企業が潰れるといふことの方が目の前に見えるから、大變なことのやうに思つて、後は勞働者自からが抑遜しろとか、家族制度がどうするとか、農村があれするとか、言ふやうなことを言つて、ネツキストゼネレイシヨンといふものを無視した議論だといふ感じが強い。傍觀主義には非常に反對です。

安達。僕のはたゞ傍觀主義ぢやない。

高橋。産業豫備軍が出て來るといふことは、詰りカタストロフイへの道、破局への道なんですね。末弘さんは、産業豫備軍といふのは經濟學者の言葉だといはれたけれども、經濟學者はそんな言葉を使はないのぢやないですか。それは社會主義者の使ひ出した言葉ぢやないかと思ひますね。兎に角、マルクスなんかのいふ産業豫備軍、あれが澤山出來るといふことは、破局への道ぢやないですかね。

末弘、産業豫備軍は、あれぢやないですか、昔の奴隷を使つて居つた時代に、仕事がない時でも飼主、奴隷の飼ひ主がたゞ食はして居つ

た、詰り夏は仕事があるが、多は仕事がない。それでも夏の爲めに食はしてゐた、あゝいつたものぢやないですかね。

高橋。内務大臣はペイするからといはれるけれども、今の事業家はその日〱もペイしないから……。（後記、高橋の言にあらず――高橋）

末弘。それはペイしないといふ意味は、資本家の立場だけからペイしないといふことを考へて、勞働者の立場を全然考へずにゐるが、勞働者の立場より全然ペイしないといふことは正しいかどうかな。

井上。私はペイするかどうかといふことは、事業そのものは資本だけではいかん、勞働者だけでもいかん、勞働者と資本家との分配を公平にして、仕事そのものを維持して行くといふことが一番主たることぢやないか、そこに分配の公平といふことに、若し國家眼からいふならば、立ち入つて行けるならば、立入つてでも行きたいといふやうな氣がする。

末弘。併し、大藏大臣の御議論は世界を支配して居る金融資本の要求といふものは絶對侵すべからざるものとしてですね。それは一應尤もだと思ひますが……。

井上。そんなことはいひはしない。

末弘。その方には叶はないから、後は産業が成立つ爲に勞働者も我慢しなければならんから……日本の社會が金融資本の支配を受けてゐる以上……

井上。さうでなしに、外にどう考へるか。それでなければ、ステートソシヤリズムのやうに國家が這入つて來なければ出來ん仕事でせう。例へば株主の配當も出來ない、配當も出來ないから、從て勞働者の賃銀も下げて呉れ、三割下げて呉れ、さうすれば、どうか斯うか維持が出來るから、下げて呉れといへば、勞働者が下げるか、下げないかといふことが問題です。勞働者が下げる場合、物價が下るといふことを前提として下げ得るならば、下げて仕事を維持して行くのが本當ぢやないか。それを勞働者が下げるのはいやといふならば、どうかといふと、仕方がないから、クローズしてしまふ、さうして行くより、我々の頭では考へられない。クローズしては困るならば、國家がそこに何をか持つて來て之に加へる、それならば、勞働者は解放されずに濟むといふことになる、斯ういふことになるより仕樣がない。

高橋。そこへ行く前に、資本家が餘りに取つてゐるといふことを考へなければならんと思ひますね。

井上。だから先刻言ふ如く、分配の公平といふことが考へられるでせう。

高橋。併し、分配の公平といつても、物差が違つて來るでせう、勞働

者流の物差と、資本家流の物差と、物差が違つて來るぢやないですか。

井上。それは人間社會のことだから、そんなこともありませう。

安達。今日の狀態では資本家がさう澤山に取れるかどうか、取れないぢやないですか。

高橋。併し、まだ非常に取つてゐますね。

安達。我々は資本家を助ける意思もない、資本主義でも何でもない、我々は細民に同情を持つて考へて居る。

末弘。日本の資本家は日本の特殊の事情から世界の金融資本から見て平均利潤以上の特別利潤を得る可能性があつたのが、段々世界の金融資本の影響を受けて特別利潤を多く得られなくなつた、世界の金融資本の許す平均利潤しか得られなくなつた、斯ういふ意味ですからして、私は大藏大臣の言はれる御意見は極めて科學的社會主義者の言ふことゝ實に似てゐると思ふ。實に科學的である其の裏に同時に、安部先生の仰しやるやうな社會主義の議論は成立たないといふやうな議論に行くですね。

山本。この問題は切上げて貰つて安部さんに目下の對策として今內務大臣が言はれた如く一人に一圓づゝ與れゝば國が堪つたものでない、併ながら、現下の失業者の殖える狀態及び此の人口問題から觀察して、どうしてもこゝへ恒久的對策と、それから緊急對策の二つをば出さなくちやならんと思ふのです。それで貴方(安部氏)が最も緊要な問題であるとする所の恒久的對策――例へば失業保險の如き――及び是非やらなければならんといふ焦眉の問題、この二つに對してお話を願つて、それから話をば展開して行きたいと思ひます。

安部。先にもちよつと申した通りに、失業手當といふことは、本當の焦眉の急として私共は唱へたですけれでも、これは比較的に重要でない。私共は矢張り事業を起すといふことで、是は無論、失業者が大體どの位數があるかといふことが決まらなければ、凡そどの位の金を要するかといふことは分りませんが、私は事業としては幾らもあると思ひます。例へば、六大都市の地下鐵道、或は産業道路――私は産業道路といふやうなことに最も重きを置いてゐるですが――國家の經費で以てやるといふことになると、是は非常に困難になる折角、緊縮政策で今の政府がやられてゐるのを、國家の財政の中からいろ〳〵工面をして此の産業道路なんかをやるといふことは、ちよつと困難であるのみならず、その効果もどうかと思ひます、それで、それに要する金は必要に應じて、是非今の有産階級に出して貰ひたい。それは此處(各無産政黨の見たる失業問題對策といふ一冊子)にあります通りに、資本利子税といふやうなものも宜からうと

思ひます。それから、或は相續税の率を上げる。さういふやうな方法に依て――是は永久に税を高くするといふ意味でなくして、臨時に失業問題の深刻になつた場合にのみやるといふのです。……法制上のことは私共、分りませんけれども、さういふことで失業者に仕事を與へる、これも所々に依て違ひます。失業者の多い所から段々と產業道路の開拓を始めるといふやうな方法を取つて行く、先づ實際問題として私共はさういふことを考へて居ります。

安達。今安部さんのお話では、失業手當といふものは重きを置かない、一時應急のことであると言はれたが、我々は一時的のことでもさういふことはしたくない。併し、安部さんから之に重きを置かれずに、一時的だといふお言葉を得たといふことは、一大進歩だといふと失禮ですが、喜ばしいことゝ思ふのです。失業手當をやるといふことを唯一の政策とせられんといふことは大變結構だと思ひますが、私は一時と雖もさういふことはしたくない。それから私は、產業道路云々といふことは、それは大體に於て同感であります。問題を具體的に言ふと違ふけれども、大體さういふことを起すといふことは……。現に東京に於きましても、市及び府に於て環狀線、放射線といふものがあります。あれは環狀線よりも、放射線の方が、東京市及び東京附近の人々に喜ばれるやうであるから、先づ放射線の方をやりたいといふ考へを有つて居ります。それから自動車道路の如きも、所に依て特別に許可してやらうといふやうなことで、營業の上から會社などを拵へて、算盤の上から出願する人があります。只、地下鐵道のこと、これも考へて居る、大阪は現に、一方に整理緊縮をやつて居るに拘らず地下鐵道を昨年の暮に許して居る。東京も考へて居る。今日も地下鐵道會社の人が來ましていろ〳〵意見を聞いて見た。それでさういふことは極くいいことゝ思ひます。只、財源の撚出の方法に付て、その方法は大いに論がある。併し、今意見を戰はすことは長くなるから、止して置きますが、要するに私の先に申上げましたことが――末弘さんは狡いと言はれたが、この場合、大事なことです。失業手當といふやうなことを周章てゝやらずにですね、失業問題では英吉利も縮尻り、其他の先進國も縮尻つてゐるけれども、日本は縮尻つて居らんから、周章ずに――是は決して傍觀ではない、周章てゝやらずに、さうして善處して行かうといふ考へ、即ち冷靜にして、さうして玆に日本獨得のものにして縮尻らんやうにして行きたいと思ふのである。安部さん方の議論が變化して失業手當もいゝことぢやない、已を得ず一時的の救濟にやらうといふのだといふことだが、救濟のことは別に考へなければならんと思ふ。是は別に今でも考へて居ります。例へば警視總監に研究し

て貰つてゐるのですが、日本の下級社會の生活は僅かで飯だけ食へるのですが、その方は、是は救護の方に這入る。さうすると臨時にどうかして行くといふやうなことは、警視總監などが考へて吳れて居ります。なるたけ失業手當などをやつて惰民を拵へないやうに、飽くまで努力奮闘して資産者階級も勞働者階級も皆汗みどろになつて、さうして働いて食つて行く努力主義で行くといふことを貧富貴賤を問はず徹底せしめたい。之に對して失業手當などをやると、遊民惰民を生ずるから、さういふ弊害は極力防がうと考へて居る。如何に日本の政治が民衆政治になつたからといつて、民衆に阿諛つてさういふことをしたら、百年の禍根を貽すと思ふのです。それには無産黨の方々の考慮を煩したいと思ふのですが、今夜の安部さんの話を聽いて、非常に我々の考へに接近したと思ひますが、もう少し言葉を換へていふたら、我輩が無産階級の意思を代表してゐると思ふのです。

末弘。安部先生の仰しやることは、たゞさういふ風に言はれる限りに於ては實に御同感ですが、金をどうして出すかといふ問題になると先生の根本主義を維持して居られる限り私は不可能だといふ感じを持つてゐる。要するに、金を出すといつたら、先程お話になつた稅を取つて來るといふ方法と、若くは後は募債——金を借りるといふ方法より外にないと思ふ。金を借りるといふ方は緊縮政策からしていけないと仰しやるですが、併し、それはいけないとして、然らば稅の方に行くかといへば、失業者を出さなければ成立たない程の産業が、この際、先程應急的だ一時的だと仰しやつたけれども、そんな稅を負擔する能力がないぢやないでせうか。

安部。金持にですか。

末弘。金持にといふのではない、企業が、さうしたら、成立たないぢやないかと思ふ。

井上。だから、安部さんの取出して居られるのは、總て金持ち稅ですよ。相續稅及び資本利子稅などは資本家の稅であります。それはあるでせう。狙ひ所はそこにあると思ふ。普段資本家がインタレストを餘計に取つて居るから、玆に至つて餘計出せ、斯ういふ意味でせう。

阿部賢。私は、安達さんの言はれた所の惰民なからしむるといふことは非常にいゝことゝ思ふ。所が現代の國民の間では、どこに惰民があるかといふと、華族、貴族、金持ですね。それは、一日作らずんば一日食はずといふやうな、さうならなければならん所だと思ふ。所が生産經濟が進んで來ると、自から勞せずに、働かずに、惰民であるのみならず有害な——人種としても、階級としても——人間が

隨分居ります。それを排除することも政治家のやらなければならん所の一つぢやないかと思ふ。そこで例へば、近頃行はれた金解禁は自分はずつと贊成して參りましたが、金解禁に依て矢張り株は非常に落ちたと思ひます、えらく落ちました。併し、國債は價額が非常に釣上げられた、事實此の國債を釣上げられたといふことは、是は國の政策としては必要なことであつたけれども、國債を有つてゐる人――日本の國債の半分以上は銀行、信託會社が持つてゐるのですが――さういふ人が、非常に努力したか、どれ程國家の爲めに貢献したかといふことを考へると、只、政策の變化に依て濡手で粟で金を摑んだといふやうなことがあつたといふことは、矢張り不公平だと思ふのです。民に惰民なからしむると仰しやるけれとも、勞働者に惰民なからしむるといふことばかりでなく、國民總てにそれを及ぼして行かなければならんと思ふのです。

安達。それは、その通りです。それにはどうするがいゝか……。

阿部賢。要するに財源問題からいつても、安達さんの惰民なからしむるといふ議論を發展すれば、そこまで行かなければならんと思ふのです。

末弘。それは、あべこべの結論を出すのではないか。非募債主義及び緊縮政策で、公債の値を釣上げて、寢てゐて定つた利息の這入る階級を保護した結果を來たしたので、だから、此際さういふならば、今の資本利子税などは、やらうといつたつて、さううまく行きさうもない。それよりは寧ろ緊縮政策を緩和して、金融資本家がもう少し損するやうなことをやられて、金を出して事業を起すより外、差當つて直ぐ行くやうな方法はないと思ふ。

井上。併し末弘さんは、さういはれるけれども、現代の社會に於て一番通じた弊害は、どこにあるかといふと、ボロウド・キヤピタル――借りた資本で政府が仕事をするから、それがスペキユレイションといふことになる、それが現代の通じた弊害ですが、そこの所は各國とも改めて行つて、インフレイションでなく、デイフレイションでやつて、とつちめて行かなければならん社會の狀態です。日本單りそれを行つても行はれない。私は日本が世界に逆行して、今公債を募つて事業を盛にしようといふやうな政策を採つても、とてもそれに打ち贏てない。世界の大潮流には……。さうしてやれば、矢張り不景氣が來て悪い結果が殘つて來るといふことになる。矢張り世界並みのことをして自分の內で治めるより外はない。

阿部賢。デイフレイションは、矢張りある程度まで必要ぢやないですか。

末弘。資本主義が之を支配して居る、これには敵はないといふ結論を

認めて行けば・・・

安達。私共は資本主義といふことを認めなければ、資本家にも同情しない。徹底せる勞資協調主義で行きたいと思つてゐる。我々の勞働立法も、そこに基礎を置いてゐるのです。

阿部賢。勞働者にも負擔さすが、資本家も負擔するといふ・・・・。

井上。たゞ分配の公平といふことが問題になるんですが・・・・。

阿部賢。分配の公平も、差しが違ふので困ると高橋さんは仰しやるけれども、どちらがより多く負擔するかといへば、餘裕のある者がより多く負擔するといふことより外仕方がない。

山本。末弘さん、今度の勞働立法が出來た結果、失業者にどういふ結果を及ぼすかといふことに就て・・・・。

末弘。私は、日本に組合法が出來ても、組合運動がすぐにどうなるといふやうな、直接の關係はないと思ひます。しかし組合運動と失業者との關係といふものは、今の英吉利を見ると、それは容易に分ります。イギリスの組合政策といふものは、日本の總同盟が希望して居られると同じやうに、資本家と約束して勞働の單價を下げないやうにやらうといふことを根本政策としてやる結果、そこに必然、勞働貴族だけが協定賃銀を得て後に生き殘るけれども、英吉利の產業の成り立つ爲めにどうしても出て來る過剩勞力は失業といふ形で以て出る。從てそこを逆に全國的にナショナル・アンエンプロイメント・インシュアランス——失業保險の方法で救ふといふことは英吉利として必要だと思ひます。だから、勞働組合の發達といふことは、必然に勞働の單價を如何なる場合にも下げないといふことになれば、失業者といふものが必ず後に出る。その失業者を今の失業保險で救ふてやる形に行くので、勞働組合の發達と、失業の問題は極めて密接な關係があると思ふのです。それなれば、今の英吉利の勞働黨の考へて居る所の勞働組合運動が勞働階級全體に何等かの幸福を齎らして居るかといふと、必ずしも齎らしてゐないと思ふ。勞働者の中の勞働貴族の安定といふことを與へて居るだけで、後の者は非常に不安定の位置にあるものだと思ふ。私は、勞働組合法が直ぐにさういふ結果を招來するとは思ひません。それは恰も小作法が出來たからといつて、小作關係が直ぐ變らぬと同じやうに、法律といふものは無力なものだと思ふのです。

山本。どうですか、安部さん、組合法案が出來た結果、失業者に對する影響としては、どういふやうな影響を豫想するのですか。

安部。勞働組合法が直接に失業問題にどうといふことは、私、餘り考へて居りませんが・・・・。

山本。それでは先のたゞ結びとして、內務大臣は財源問題をいへば、

二人の水掛論になるから、まア止めやうといはれるけれども、貴方（安部氏）が感じて居られる所の財源問題ですが、直接どつから捻出するかといふ、それをもう少し具體的にいつて貰つて、この項を終りにして置きたいと思ひます。

高橋。それは、寧ろ私は、安達さんの方に伺ひたい。（後記、高橋の言にあらず――高橋）

安部。それは相續税と資本利子税ですね。それも少ない所には僅かしか課さないが、段々に多く、累進的に課するといふ……。簡單にいへば、それだけです。

山本、それと關聯して、現在の失業者の殖える時代に、內務大臣は、昨日（六月四日）、資本家を官邸に招待されて對策を徴せられたやうですけれども、資本家階級が自から現場に當面してやらなくてはならんこと、及び所謂プロレタリアートが彼等に向つて要求する現在の第一の問題は何でせうか。

安部。失業問題に就いてゞすか。

山本。失業問題に對してせなくちやならないこと……。

安部。それは、少し道德論に這入つて來ますけれども、共存共榮といふやうなことは、資本家でも言つてゐることであるから、兎に角、國家といふものを我々が背負つて立つ以上は、負擔能力のある人が出來得るだけ此際負擔をするといふことですね。是が若し租税とか何とか、今までの國家の收入で以て、失業を救濟するといふやうなことになれば、國民全體が出した所の租税で失業を救濟するといふのであるから、恰度自分の身體の一部を腹の減つた時に切つて胃袋を滿足せしめるやうな結果になる。私は、さういふ風な結果を來さない爲めに、失業救濟といふものは、有產階級、殊に多額の資產を有つて、多數の收入を得てゐる人、その人から特に出させるといふやうな方法を講じたいと思ひます。

山本。それは、どういふやうな形式の下に……。具體的の何かありませんか。

安部。それは、法制上の問題になりますから、細かいことは分りませんけれども、相續税、資本利子税といふやうなものですね。

井上。私、そこでちよつと安部さんに尋ねたいことがあるが、昨夜、內務大臣が計畫された――我々も同席してゐましたが――ことは、亞米利加のフーバーが亞米利加の資本主に向つて、今は材料もうんと下つたし、勞働賃銀も下つた、又勞働者も非常に得易い時であるから、やるべき仕事があるなら、今一つやつて吳れ、斯ういふことを亞米利加中の資本家に訴へた。それと同じやうな意味だつたのですね。是は日本だつて言ひ得べき事柄だらうと思ひますが、安部さ

んそれはどうですか。

安部。それは結構です。

井上。私は、それは可能性のあることで資本主に訴へる方法ぢやないかと思ふ。

安部。それは、出來れば、問題はありませんけれども、それをどうしても聞かなければ、法律的に税を取つてやらうといふのです。自分が任意的に進んでやるといふならば、之に越したことはないですが、併し、新聞の報ずる所では、昨晩の被招待者若くは資本家は、餘りどうも政府の勸誘に對して滿足しなかつたといふやうな風に報じて居るやうぢやありませんか。

井上。併し、我々の政策の結果は、物價は下り、さうして一方には國産奬勵をして行くと、物價が下つた基礎の上に仕事は幾らか出て來ると、斯ういふことを期待してやつてゐる譯です。只、今の問題はその間の失業者をどうするかといふ問題になりますけれども、それだからあれは、實業家に訴へる方法として道理はあると思ひます。

安達。昨晩の會は、あの席で具體的の案が出來ようと思つて期待しては居りませんが、結果からして見ると非常に滿足して居ります。あの新聞に不平があつたと書いてはあるが、それは、政府に對する註文はあるでせう。大藏大臣に註文するとか、何とかいふことはあるでせう。今の時代では大藏大臣は、名譽の焦點でもあり、攻撃の焦點にも居られるから、當然何時でも大藏大臣に向つて尋ねて見るといふことはある。併し、非常に滿足する意味もある。今日も德川さんの送別會に行つて見ると、昨晩來た人が來て居りましたが、今度は向うであの會を催すといふことで非常に喜んでゐる。あゝいふ露骨な話をしてやつて貰ふと、大變いゝといふことであつた。あの第一回はあれで、段々具體化する積りなんです。今安部さんの言はれたやうに大藏大臣に對して大分註文はあつたですが……。

阿部賢。大分註文があつたやうですね。

安達。今日の新聞に漏れてゐることですが、一種の社會政策の資金に富籤を拵へて呉れといふやうな話もありました。

末弘。それは公債ぢやないですか。

安達。獨逸あたりにあるやうな富籤であります。支那でも御承知のやうにやつて居る。

安部。ブラジルでもやつて居りますね。

安達。西洋ではいろ／＼やつてゐる所がありませう。

高橋。博打をやらすやうなものですね。

那須。ちよつと安達さんに申上げて置きたいですが、失業問題の對策として、主として都會の企業者、商工方面の企業者を集めて、是等

に確かり仕事をしろといふやうなことを、昨晩お話になつたと思ひますが、田舍の方にもやるべき仕事がいろ〱ある、それをどうかお忘れないやうにお願ひしたい。殊に內務省の一月の調査なんか見ましても、今年の一月に工場を解雇された者が約七萬人、其內約二萬人は他の工場で職を見出して、五萬人が失業者である、其內二萬八千人といふものは、所謂歸農してゐるが、農村には何も仕事がない、只、人間ばかりが殖える。所が、全然仕事がないかといひますと、先刻、私は開墾事業が進まないと申しましたが、まだ山野で開墾出來る餘地が、內地の府縣だけで百萬町步、北海道も入れますと百六十萬町步ある。然るに是はオルガニゼイションが出來てゐない爲に、開墾が進まない。最近埼玉縣の入間郡で調べましたところ、入間郡だけで一萬町步、開墾の出來る所がある。あの東京の手近にこんな土地があるのに、人口問題をやかましく言はれるのは、俺には分らんと地元の人がいつて居りました……。先刻末弘さんの言はれることを裏書するやうになりますが、私はオルガニゼイションを適當にやれば、是は大藏大臣にさう澤山お願ひしないでも、割合に僅かばかりの金で相當の人に仕事を與へることが出來るし、それが收支償ふ仕事になります。

安達。確かにそれがある。貴方のお話は慥かに今日の問題に或點肯綮に當つてゐると思ひます。昨晩も其の話がありましたし、先達つての地方長官會議の時にも話しました。北海道の如きは、御承知の通りに、前獨逸大使ゾルフ氏、あの人が北海道に行つて戾つて來て、外務大臣に俺の眼で見れば日本はまだ三十年間は人口問題などを懸念する必要はないぞと言はれたさうです。北海道は御承知の通り、各府縣でも就中東北、又九州でもあれだけ發達してゐるやうですが、宮崎縣なんかは、九州の北海道といふ位で、人口の稀薄な所であります。で段々棉なんぞ植ゑたらどうかといふ說もあるのです。さうすると、原料の輸入に大關係を及ぼすですね。それで朝鮮及び內地に亘つてもう少しさういふ風なことを研究しようぢやないかといつたのです。確かに缺陷は大いにあると思ひます。それで務めて見ます。那須さんがいふ通り今の日本に勞働者が歸農する餘地がある以上は……。

末弘。土地の開墾が出來ないといふことは、組織が惡いといふ方面は確かにあると思ふが、私は、今日の日本の金融が或程度に於ては、さういふ方面に資本が行かないやうに出來てゐるのぢやないかと思ふ。それから同時に、日本の今の資本家がまだ明治時代の泡錢——學問的にいへば特別利潤を非常に得た其の習性が拔けないですね。殊に今度の產業合理化なんかも、一番異議のある點は、資本主義の

理論的の結論で平均利潤に落付かせる、それに依つて滿足させるといふことですね、そこへ持つて來るとすれば、日本の資本はもつと片寄らないで働く餘地がある、そこへ行かなければ農村企業といふものは動いて來ない。特別利潤を何とかして狙はう、國際的にも國内的にも狙つてゐるのでは、如何に組織をよくしても結局は駄目だ其の意味の產業合理化……

阿部賢。那須さん、それには開墾第一ですかね。

高橋。併し、今は販賣の組織が出來てゐないですね。私は大磯に居りますが、大磯近在の百姓は、二宮にも市があり、平塚にも市があり、兩方に出すことの出來る割合に有利な位置にあるですが、それで去年の夏あたり或る百姓が、子供に茄子を百七十持たして平塚の市へ出したですが、子供が三錢持つて歸つて來たです。「三錢かよう」、「うん」といふことで泣きさうな顏をしてゐました。この頃は副業として乳牛を飼つてゐるものがある。其の乳を森永が買ひに行くが、一升十七錢です。斯ういふ値段で買つて行く、まるで販賣の組織がなつてゐないですね。

井上。高橋さん、私は、小賣値段を引下げることを機會ある每に唱へてゐるですが、日本の組合といふものは非常に惡い仲間でしてね。中にゐる者が暴利を占めてゐる。東京では神田の青物市場、あれが始末に負へないどうしても抑へられない。あれの改善には、あれを市で監督しなければ、小賣値段はどうしても下りません。

安達。中間に暴利を貪つて頭をはねる奴が大分あるのですね。之を除去する必要が確かにある。

井上。是は經濟政策では、どうしても小賣が下りません。通貨收縮とか、緊縮とか、消費節約とかいふやうなことでは到底下りません。青物市場、それから屠牛場などは迚もいかんですよ。手に取つて監督して行くより外には仕樣がない。

末弘。併し、私は寧ろ其點は今の小賣商といふのは、彼等が食ふ必要上絕對なものであつて、經濟組織から見れば不合理だらうが、あれがあるから、彼等は活きて行ける。だから、あゝいふ風な中小商工業が潰れて、亞米利加あたりのやうに夜になると、街がすつかり暗くなるやうに中小商工業が統一されたならば、貴方の仰しやるやうなことが出來るかも知れんけれども、さうでなければ……

井上。是はさうぢやない。市場がうんと取るのです。市場の整理と監督を大に必要とするのであります。

山本。非常に長くなりましたが、最後に恒久的解決策として失業保險に對する御意見を皆さんから簡單に伺つて會を閉ぢようと思ひます。政府としては、まだ現在やらうといふやうな決心は持たれんで

せうか。

安達。持ちません。それは先刻も簡單に申上げましたが、失業保險なんかは、英吉利では、國家が三分の一、勞働者が三分の一、資本家が三分の一位の負擔ですが、少し違ふけれども、概してさうですね、それをやつて居つて、今日尙ほ足らずして國家は其上に特別の金を貸して居る。其金が回收が出來ずに、年々歲々增加して行くといふやうな狀態で非常に困つてゐる。さういふ風にして國家が失業保險をやるといふことは、餘程考へなければならん。去りながら、何とか緩和したいといふ考へは持つてゐるので、今失業共濟組合みたいなものに、失業保險に代るやうなことで、勞働者も出し、資本家も出して行く案はなからうかといふやうな考へを持つて居ります。さうして政府としては、今度失業對策委員會などにそれを諮つて、さうして十分研究して行からと思つて居ります。

末弘。私は、今のイギリスに行はれてゐる失業保險といふものは、寧ろ資本主義を基礎にして經濟組織を營んでゐる限り、理論的に當然の結論で、あそこへ行かなければならんと考へるのです。從てイギリスが若しも失業給與金を出すために財政的に困るといふならば、それはイギリスの資本主義が世界的に見て行き詰つてゐるといふだけの意味だと思ひます。最近、英吉利の或る失業問題の大家が短かい物を書いてゐるが、其中に斯ういふことを言つてゐる。非常に面白い、あの英吉利流の國營失業保險といふものは、非常に金が掛つて困る、英吉利の産業を妨げる大きな原因であるといふが、そこに又考へなければならん問題がある。それは始終經濟界のフラクチユエイションに應じて、人が要らなくなれば直ぐ出してしまひ、要ればまたどん／＼採るといふやうな不健實な營業をしてゐる人間が、健實な營業をしてゐる人間を犧牲にして、あの保險のお蔭で不健實な企業者が得をする。それがイギリスの産業を害してゐるので、全體としては、あれがイギリスの産業を成立たせない程の害を與へてゐるものだと思はない。寧ろ勝手に失業保險あるを幸ひに、人が要らなくなると出してしまひ、要ると採るといふ、さういふことをやる奴が增えるから困る、其點を考へ直せば、イギリスの今のナショナル・アンエムプロイメント・インシユアランスは、まだ成立つ餘地があるのぢやないかといふやうなことを言つてゐる。是は確かに達見だと思ひます。其の點を考へれば——內務大臣はイギリスのは非常に失敗だと言はれたけれども、失敗ぢやない、まだ行く餘地があるので、其點は英吉利の失業保險制度といふものには、其點はまるで考へてない。だから、企業者お互ひの間を皆平等に見てゐるけれども、或る奴は非常に得をしてゐる、而もそれは不健實な奴で、健

實な者は損をして居る。保險料ばかり拂つて得をしない者と、片方では保險料は少ししか拂はないで、澤山雇つて、出す時はうんと出すといふやうなことで得をしてゐる者とある。今のさういふ弊害を防ぐやうな組織方法はないだらうかといふことが今後の問題だといつてゐるが、今の國營失業保險が失敗であるといふのはまだ早い。失敗であるか、ないかといふことは、研究する餘地があるのぢやないかと私は思つてゐるのです。

那須。私は、進歩した形でやつた方が宜いと思ふ。たゞその額ですねそれは餘り澤山やらんでもいゝ。私、向うへ行つた時に、スイッツルの失業勞働者が爲替相場の下つたドイツへ行つて、國で働いてゐる時よりもずつと贅澤をしてゐて、歸る時には有らゆる物を買ひ込み、犬まで買つて歸るといふのと一緒に汽車に乘つたことがあるですが、それはえらいものでした。日本ではさういふ心配はないけれども。

阿部賢。私は、失業者の身になつて見ることが必要なんぢやないかと思ふのです。それから社會的に見るのも必要なんで、矢張り何か希望を與へるといふことが非常に必要だと思ひます。景氣が悪くなると政府は是だけのことをするのだ、是だけの詮議をしてゐるのだといふことを知らせるだけでも、どれ程、國民の氣持を柔らげるか分らんと思ふ。失業保險の具體的の問題になると、必ずしもイギリスだけにあるのでない、ドイツにも、どこにもある。ドイツ、イタリイなどでは、傭主と勞働者の共濟的のもので、國家は必要に應じて補助金を出して居るが、ことに依れば、日本に於ても、さういふ時には補助金でも與へるか、或は何かの方法を以て仕事を與へるといふやうな方法を加味すれば、何等の憂ひがない所か、まさかの時には生存が營んで行けるといふやうな希望を與へるだけでも、非常に必要ぢやないかと思ひますが、どうですか。案の內容に至つては外國の案が失敗したと考へて貰はずに、希望を與へてさうして共に解決するといふやうな方針で行くのがいいぢやないかと思つて居ります。

高橋。無論、さうですね。結局、與へないたつて、與へてやらなければならんやうになるだらうと思ひます。

阿部賢。與へずして棄てゝ置くよりも、與へて又害を防ぐこともありますから……。

安達。日本獨特の名案を貴方々に案出して貰ひたい。さうして採つて以て行ひたいですね。

井上。併し、現代の日本の財政狀態から考へて見ると、容易に實行の出來る問題でないと思ひます。

阿部賢。併し、やらなければ、更に多くの問題を生ずるでせう、

山本。失業保險をやるとして、大體經濟狀態から調査されたことがありますか。

井上。はつきりした數字的には訴へたことはない、容易に決斷の付かん問題でね。

安部。無論、私は何等かの形を以て斯ういふものが出來るといふことは望ましいことでありますけれども、恐らく各國に於ける社會保險の中で私は一番むづかしい問題だと思ふですが、先づ今、日本に於ては、是よりももつと急を要する解決法があるのですから、此問題を少々後廻しにしても差支ないと思ひます。兎に角、世界中のやつてゐる所を參考に供して、日本で一番いゝ方法を案出して、斯ういふものが出來るといふことは、私共、無産階級としては非常に望ましいことだと考へて居ります。

山本。貴方(那須氏)、農村問題の方は專門だから、農村をひつくるめての失業者の狀態に付て、どうすれば彼等の要求に應ずることが出來るかといふこと‥‥

那須。農村に起す仕事ですか。

山本。仕事及び失業手當なら失 當に就て、現在一番緊急と信ぜられてゐる所を一つ‥‥

那須。農村は二三男がどん／＼都會に出ます。都會では四十才以上位の勞働者は一度解雇されると再び職を得ることが非常に困難です。其の地位は農村から出て來た二三男によつて埋められて仕舞ふ。此農村の二三男階級の人間に、農村に於て仕事を與へれば、都會の失業はそれだけ減るし、非常に救濟される。是等に仕事を與へるのは、先刻申した開墾事業ですが、是が差當つて直ぐにも出來る仕事で、一年に三萬なり五萬なりの人を收容することは不可能でないと思ふのです。併し、たゞ個人の自由に委して置いては駄目です。場合に依ては、地主が開墾を承知しない時には、之を強制徴收する位な、かなり強い權力を發動させてやる。又さういふ二三男でも一人ぼつちでやらしては駄目ですから、適當の團體を作らして、適當の指導者を置いて、さうして若干の元手を貸してやる是には大藏大臣の御配慮を得なければならない。それから山國の方では、山林の間に仕事がいろ／＼殘つてゐるらしい、今、山林の地元の人間が一個の勞働者となつて、山の用益權は都會居住の大資本家に移つて居るやうなのが尠くない。都會の資本家なんかは木が安いとちつとも木を切らない故に、地元の人間にはちつとも仕事がない。所が、なぜ木が安いかといふとそれは停車場へ持つて來る運賃が掛かるからです。御料局の或る技師の話を聞くと、北海道の御料林から停車場へ

持つて來る運賃がその停車場から東京へ持つて來る運賃より餘計掛かる。だから、山林鐵道を敷けば、非常に有利である。鐵道には投下した資本に對する十分の利廻を得るのみならず、同時に山林が非常に有利となる。さうすると、アメリカなんかの材木とも競爭力が出て來る。さういふ點で經營にへまをやつてゐる所が多い。かゝる山にさういふやうな土木事業を起こすやうなことも、是も一つの方法として考へなければならんと思ひます。

山本。要するに、不景氣で生活が不安ですから、彼等に生活上の光明を與へて、元氣を出させるといふことは政治家としての一の任務であると思ひますが、手當をば出すことが出來んといふと、是は彼等に失望を與へる。然らば、どういふやうな言葉を以て彼等に元氣をば與へ、さうして前途に光明を抱かしめるやうにしてやるか、若し具體案があつたならば、只一言づゝ欲しいと思ひますが……。今まではのは總て間接的に働くこと、若くは永久的に働くことであるやうに聞いたですけれども、阿部さん、何か此以外の方法を以て、さういふやうな道をば開いて何するといふやうなことはないでせうか。

阿部賢。矢張り今はデイフレイション——通貨縮少の時期ですけれども矢張り那須さんのお説、それから大藏大臣のお説などのやうに、地方に適當な事業を促進して行くといふことに力を注いで戴いたらいゝと思ふ。租税を財源にすればインフレーションをある程度まで防き得るが、併し募債となれば公債の元利の償還といふやうな問題になり引いては税制の問題になつて來るのであるが、其の税制の負擔の問題は、矢張り貧乏人を苦しめずに、有り餘つてゐる人が負擔するといふやうな立前の下に、もう少し事業を増してもいゝぢやないかと思ひます。それから、今、特に國産奬勵といふことを立前として居られるが、材木などもアメリカ材は、立前として使はない、日本材を出來るならば、使ふといふやうにして、或程度まで思ひ切つてやつて一方縮少する所は縮少してやつて戴くのですね、目前は……。保險はどうせ御提出になつても之から今年も過ぎてのことであるから、目前の問題としては、事業を創造するより仕方がないと思ふのですが……。

山本。地方の事業に對して公債を許可される額といふものは、豫め大藏大臣としては、此位といふやうな御案があるのでせうか。

井上。何も決めて居りません。例へば此の仕事を止めれば、失業者が出るといふやうな場合はその地方債は持續してやる、それから最近は國産品を製造するものは、或程度の緩和をしてやるといふやうなことにして、今阿部君のいふやうな點は十分今已にやつて居ります。

阿部賢。それから今一つやつて戴いたらいゝかと思ひますのは、職業紹介の機能を盛にして勞働の調節を計る、地方的の調節を計る爲めの勞働者移動の鐵道運賃、あれですね、あれは半額ださうですね。

末弘。それは團體的の場合なんだらう。

阿部賢。矢張り半額ですか。それを出來るならば、八割、出來るならば、時に應じては全額免除して戴いたらどうか。此事は頻りに言ふけれども、鐵道の方の御都合があつて、それが出來ないといつて居られるさうですが、勞働の疏通をもつと簡易に計り、運賃なども、もう少し安くしてやるやうなことも時に依て必要だと思ふのです。それから先にちつとも出なかつたが××××××の問題といふことですが……

井上。その問題は後で……。

山本。まだ軍備緊縮によつて出で來た費用を失業救濟に充當するとかいろ／＼な重要な問題が澤山に殘つて居りますけれども、時間がありませんから、此の位で閉づることに致します。どうもいろ／＼有難うございました。

豫告

第二回 失業問題討論會

出席者

山川均氏
大山郁夫氏
麻生久氏
高橋龜吉氏
赤松克麿氏
實業家（交渉中）

（以上諸氏の討論は改造八月號誌上に掲載す）

無產政黨中間合同とその展望

森戸辰男

一

總選擧直後さしも高潮に達したかに見えた無產政黨『合同機運』は三ヶ月後の今日、つひに停頓に瀕し、失敗に終つたのであるか。

選擧の失敗を機緣としてあたかも劇的に實現される全無產政黨の即時無條件合同の可能を信じつつ、あるひは信ずるが如く裝ひつつ、之に向つて努力したところの無條件即時全合同論者(以下單に「全合同」若くは「全合同」論者といふのはこの意味である)にとつては、それはたしかに停頓であり、失敗である。これらの人々は一時盛んに次のやうに煽動したものだ。現情勢の下において「全合同」はただに可能であるのみならず、大衆の熱求である。しかるにこの可能なるものが實現されぬのは、少數の幹部が自己擁護の利己心から大衆の熱求を阻止してゐるからだ。大衆はこの一握りの反動幹部を蹴とばして即時に全合同を樹立せねばならぬ、と。極めて粗朴的な、しかも我國無產政黨の分裂狀態および合同難の根本因を少數幹部の意志に求める點においては、英雄主義的でさへあり、他方、全國政黨の現幹部に對して反對的地位にある反幹部派および地方政黨にとつては最もお誂へ向きなこの分裂・合同觀の批判はそれとして、三ヶ月後の今日、さしもの熱烈さを傳へられた壓倒的な大衆の欲求が、一握りの利己的幹部を蹴とばすといふ簡單な手續を完了する代りに、却つて前者が後者によつて一蹴され終つたかの如き奇觀を呈するに至つてゐる。だが、其際、一蹴されたものは、もちろん、大衆の眞面目な戰線統一への欲求ではなくて、益々その空想性が明かになつて來たところのかの「全合同」論であつた。のみならず、之を一蹴したものは、皮肉にもあの一握りの反動幹部ではなくて、現實的認識に醒め來つた大衆自身であつたのである。なほ、「全合同」への大衆の熱求が、合同問題のニュウス・ヴァリュウの減退とともに影をうすめ、反對派及地方無產の部分合同への方向轉換とともに、極度に之を重視したかに見えたこれらの人々によつてさへ、副次的重要性をしか認められぬに至つた事實もまた、大衆の熱求としての「全合同」論の本質に對して吾々に幾多の洞見を與へるであらう。

要するに、もし合同機運に停頓と失敗とがあつたとすれば、それは大

衆の熱求と稱して提唱された「全合同」論の停頓と失敗とにほかならならぬのである。

しかし「合同機運」の中には上記の「全合同」運動と竝んで他のヨリ堅實な「合同運動」が存在してゐた。それは鬪爭力の增大を伴ふ統制ある永續的合同が可能なるためには、「合同すべき諸黨派間に指導精神の同一又は近似と一定程度の相互の信賴が絕對に必要である」との見地から、現狀の下において「全合同」の不能を見透すと同時に、最も現實性に富むものとして「大衆・全民を中心とし地方無產の或者・其他を加へたる中間合同」から出發し、事情の發展に應じてこの範圍の擴大を謀ると共に、合同不能の友黨に對しては共同鬪爭を通じて接觸を保つて行かうとするものであつた。この中間的部分合同論は一部の人々からは全合同を妨げて合同機運を抑止せんとする反動幹部の陰謀として批難の標的となつたにも拘らず、實はそのお蔭で合同機運が空騷ぎに終ることから救はれたところの唯一可能な合同方針であつたのだ。さうして其後の事實の經過もまたこの合同方針の現實性を實證しつつあるかに見える。

先づ第一に、吾々は、多くの遺憾な點を持ちながらも、ともかく、合同不能の諸黨間において、失業對策共同委員會・對鐘紡共同鬪爭委員會・東京市電爭議應援・同組合防衛共同鬪爭委員會・議會對策共同委員會等々の如き幾多の共同鬪爭委員會の成立を見ることができた。第二に注意すべきは、去る六月一日、大阪において組合同盟と全國同盟とが合同して新たに四萬の組織大衆を持つ「全國勞働組合同盟」を設立したことだ。分裂に分裂を重ね來つた我國の運動に一新轉機を劃するかにも見えるこの合同の投じた波紋は單に經濟戰線に止まらず、必ずや政治戰線にも及ぶであらう。さうして現に同大會は政黨問題に關して「支持諸政黨」（大衆・全民・勞農大衆）の合同を要求してゐるが、この有力なる經濟團體の決議の政治戰線への影響は頗る重大であらう。越えて六月四・五日、第三に、東京に開かれた大衆黨の中央執行委員會および中央委員會も亦、久しく動搖的であつた同黨の態度を確定することによつて、合同の機運に一段の具體性を與へた。即ち、同兩委員會の決定した合同方針は、新聞の傳ふる所による「全民黨との合同については何等の異議はないが、統一協議會は一政黨と認めず、地方の情勢を見て各地方政黨別に合同を考慮する」といふにあるらしい。かくて總選擧直後俄に擡頭し、屢々空想と思惑と策動の對象とさへなつたところの合同機運は、幾變轉の後大衆・全民を中心として地方無產の或者を加へた中間部分合同として、一先づ、結實せんとしてゐるのである。此の如き中間合同が早晚成立するものとして、なほ之に對して少くとも二つの疑問をかけることができる。先づ第一には、「全合同」および偏左・偏右の合同が不能であり、中間合同のみが現實可能であるとの見透しが諸方に承認されたにも拘らず、この中間合同の實現がかくも遲れたのは、そして今後とも多少紛糾の餘地を殘してゐるのは何が故か。第二に、新合同黨は如何なる性質を有して居るか、そしてこ

の問ひと結びついて、それは果してヨリ大なる合同への發展性を持つてゐるか。私は山川均氏が私の合同觀【『無產政黨全合同は可能なるか』本誌五月號】と「對照」しつつ、多くの點において之を反駁しつつ展開された同氏の合同觀乃至單一政黨論【『無產政黨合同の可能と不可能』本誌六月號】を顧みつつ、この問題を究明して行きたいと思ふ。けだし私もまたこのことは「合同機運のうちから幸ひに部分的な合同が達成せられた後においても、いなその以後においてこそ、一そう廣くそして一そう明瞭に、大衆の理解に訴へる必要のあるものだから」。

二

だが、何によりもさきに强調しておかねばならぬのは、吾々の見解の對立部分ではなくて、共通部分である。といふのは、これは目前の合同問題の取扱について恐らくは公共的認識と考へられるものであるから。即ち吾々の共通意見は(1)政治戰線の全的統一への大衆の欲求の存在することだが(2)當面の問題としては、この欲求はそしてその一種・である「全合同」は實現不能であり、(3)最も現實性に富む合同が中間的部分合同であるとは云へ(4)この部分合同はヨリ大なる合同に向つて發展擴張さるべきであり、從つて(5)全的な統一・合同の對立物ではなく、寧ろそれへの發足點であること。他面において(6)世界の少くとも先進國の無產政黨の世界を對立する二大陣營に分裂せしめてゐる二つの指導精神が云はば客觀的に存在して居り、且つ(7)この兩精神は(永久に又は少くとも近き將來においては)到底融和しえざるものであること。

かくの如き廣般なる共通地盤に立ちつつも、なほ吾々の意見を對立に導いてゐるものは何か。私の考へでは、少くとも次の三點をあげうると思ふ。曰はく(一)山川氏の側における「單一無產政黨論」とその實踐形態たる所謂「全合同」論との混同。(二)地方無產政黨の評價、從つてその取扱方に關する、および(三)我國無產政黨の指導精神に關する、吾々の見解の相違。

三

第一に、山川氏はまづ私のなした「全合同」論の社會的素性の分析に對して異議を挾まれる。私は私の論文のこの箇所で、現實の事情に詳かでない第三者及大衆の、それ自身としては正しいが、しかし衝動的・非現實的な合同欲求が、現實の事情を知悉し、多くの場合、「全合同」不能の見透しを持ち、往々內心では之を希望してさへもゐないところの政客によつて小兒病的合同論ともいふべき「全合同」論に加工せられ、この加工品が大衆の熱求として再び市場に搬出される社會的過程を分析したのであつた。さうして部分合同が少數反動幹部の陰謀であり、「全合同」論が大衆と正義者の要求であるかの如く喧傳されてゐた當時、「全合同」論の此の如き素性洗ひは、問題の社會的重要性に鑑みて、特に部分合同の主張者にとつては絕對の必要事であつたのだ。この政治的・社會的必要に目を蔽うて「行文に現はれた以外の動機」「成心」(靑野季吉氏はそれを新黨書記長の內約らしく註解された)を探し求められるのは、(例へば東朝文藝時評における森田草平氏)一定の「成

心」の持主でない限り、社會的・政治的情勢の外に立たれてゐる文藝批評家にのみ許される想像の特權であらう。それはともかく、山川氏の立場よりするもなほ、その空想性と策動性とを否定し去ることのできないであらうやうな戯畫化されたる當面具體の「全合同」論の素性調べを、山川氏自らの圓熟せる全合同論の素性調べであるかに混同されてゐるのではなからうか。この疑問は次の考察によつて一層深められる。

次に、山川氏は私が「全合同」を部分合同の對立場と解したことの誤りを指摘される。私も亦、山川氏の全合同論はたしかに部分合同の對立物ではないと思ふ。だが、全合同論のエピゴーネンによつて實際の世界に飜譯されたとき、それは即時無條件全合同といふ具體的姿を採り、當時存在してゐた部分合同論に對して正面衝突の形で對置されはしなかつたか。實際、人々は即時無條件全合同を以て當面追求さるべき目標であるとなし、從つて「一定の條件の下に合同を提唱し、或るひは部分的合同を策するが如きは、實に現存の無產階級の戰線分裂狀態を固定し、單一無產政黨の可能性を永遠の彼方に押しやる」ものとして猛烈に之を排擊したのであつた。全合同論一般においてはあるべきでない筈のこの對立が合同運動の實踐においては厳として存在し、しかもこの對立を主たる樞機として合同運動が展開したかの觀さへも呈した。さうして私の指摘したのはまさにこの事態であつたのだ。更に、この點では山川氏と全然同一の見地から所謂「全合同」論者のこの小兒病的對立觀を批判したところの私をば、恰もこの小兒病的對立觀の信奉者であるかのやうに考へられてゐるとき、山川氏は二重の誤解をしてゐられるのではなからうか。

四

以上の如き假想上の對立の背後には、しかし、吾々の見解の對立をよぎなくするところの實際上の見解の相違がある。さうしてそれは合同問題の實踐とも極めて重要なる關係を持つてゐる。まづ、その一つは──これが第二點である──地方政黨の評價並に取扱方に關するもので、この點に關する二つの見解の對立・抗爭こそ、可能なる中間合同の具體化を今日まで澁滯せしめてゐた主因であつたのだ。尤もこの問題については、今日では既に大多數者の間ではほぼ意見の一致を見るに至つたらしいが、なほ此後とも多少の紛糾の餘地がないでもない。

地方政黨について、私は之を性質上においても分量上においても、「全然無視してよい」とは決して考へてゐない。が同時に山川氏および地方政黨の直接間接の關係者の持たれてゐるやうな高い合同價値をそれに認めてゐないこともたしかだ。特に合同におけるこれらの諸々の地方政黨の取扱方については、私は、かつて書いたやうに、「これらの地方諸政黨はその內容・素質において極めて雜多であるので、思想上にも實際上にも之を一團として取扱ふことは甚だ失當である」と今も信じてゐるし、そしてこの考へ方は大體、「全國協議會」に對してもまた適用しさるべきものと考へてゐる。

之に對して山川氏は地方政黨を先づ量的に重視せられる。特に僅か

四名の候補者を立て一萬九千しか得票しえなかつたたつた一つの黨派全民黨に對比して、二十餘名の候補者を立てて七萬七千といふ成績を收めた地方政黨——それは協議會だけにも十一黨(!)ある——の量的偉大を誇示されてゐる。まことに數だけは少くとも大きい。しかし假りに地方政黨を一黨と假想し、この數字を平面的に讀んだとしても、兩黨の實力についてはこの同じ材料から必ずしも山川氏と同じ結論が出るには限らぬと思ふが、それはともかく政黨の實力の價値判斷においては得票の數のみならずその性質・黨の實體・鬪爭經歷等が十分考慮されねばならぬ。日本最大の產業都市における最も充實せる七千の組合大衆を背景とする全民黨を、單に浮動票數と候補者數との量的比較によつて、地方政黨より劣勢視する斯の如き態度が果して正しいといへるであらうか。現に社民黨を除いた總ての黨派が、地方諸政黨をではなく、全民黨を最も望ましき合同對象となしたといふ一客觀的事實だけでも、山川氏の評價方法の錯誤を示唆するに十分ではなからうか。

次に、山川氏は地方政黨の性質上の意義を重く見られるらしい。この重視される性質が何であるかは不明であるが、その一つは恐らく地方政黨の地方分布性であらう。しかし、地方政黨が殆んど無聯絡に各地方に散在してゐるといふ事實は、他面からは、また、その黨としての統一的性質を脅かすものとも見られる。或は地方政黨の多くが「全合同」を要求してゐるところから、彼等に合同の「選民」としての特別價値を認めようとされるのかも知れぬ。しかし山川氏が屢々云はれたやうに、口と決議で「全合同」を最も高く絶叫する者が必ずしも合同の最適者ではない。それは地方政黨の個々についてその實體、經歷等を精査して後始めて決定さるべき事項であらう。或人はなほ、地方政黨の左翼性を強調し、之を含むことによつてのみ合同黨はその右翼化を防ぎ、發展性を確保しうると考へる。之に對してもまた私は答へたい、地方政黨は全體としては右翼とも左翼とも決定しえない、と。從つてもし假りにそのことが問題であるとすれば——實際には問題はそこにあるのではないが——ここでも亦地方政黨の個々について之を決定すべきであつて、十一把からげに之を決定すべきではなからう。

最後に、山川氏に從へば、全地方政黨若しくは全國協議會は一黨として取扱はるべきである、何となればそれは「全國政黨の看板をかけ替へたなら…全國政黨の實質を備へたものになる」のだから。さうして此の如き見地に立たれればこそ、最後の「全合同」の次には次善の三黨合同、然る後二黨合同といふ形式的な合同順序をも主張されるであらう。しかし私は全地方政黨が單なる看板のかけ替へで實質上の全國政黨に轉化するといふ奇蹟に對して極めて懷疑的であるのはもちろん、合同に對する團體取引をその主要目標とすることが「無產政黨統一全國協議會」といふその名稱からも明かなこの團體をも一個の統一的鬪爭團體たる一政黨として取扱ふことに多くの疑問を挾むものである。事實、協議會の成立後においてさへ、表面上の聲明はとにかく、實際には地方諸黨の合同態度は地方的にまちまちなのではないか。或

は中間合同に反對の處もあり、或は中間合同に賛成でも黨內事情が參加を困難にする處もあれば、黨內事情が之を許しても歷史的・地方事情が之に困難をおく處もあり、或は參加に內外いづれからの障害もない處もある、といふふうに聞いてゐる。だとすれば、地方政黨の合同の參加は、地方政黨たる特質に應じてその地方地方で各別に政黨の實體・經歷・地方關係等を十分考慮した上決定さるべきであらう。從つてまた、全合同の次には三黨合同」といふ形式主義の〝合同方針ではなく、全合同の次には、重要なる二黨、大衆・全民の合同を中心とし、この基本的合同を妨げ、もしくは新黨の統一的存在の障害とならざる限り、なるべく多くの地方政黨を之に加へんとする實質主義的な合同方針の妥當が理由づけられるのである。けだし合同の望ましきは一切の合同希望者を無批判に寄せ集めて尨大な、しかし連帶も統制も結束力もない烏合的集團を造ることはでなく、鬪爭力擴大の條件たる連帶と統制と結束力を持つ大衆的團體を結成することに存するのだから。

五

吾々の見解の實質的相違の他のものは——之が第三點である——我國無產政黨の指導精神に對する見方、從つてまた中間合同の本質と發展性とについての判斷に關係する。この點につき、山川氏は世界的に無產政黨を二大陣營に分けてゐる對立せる指導精神の存在は之を承認せられるが、我國の「無產政黨の分野はかやうな意味での異つた指導精神を精密に代表するものではない」とされる。さうしてその論據として（一）我國の無產政黨の指導精神は「反ブルジョア的」以上の積極的內容においてはいまだ多く固定してゐず（二）各黨はその綱領および（三）構成要素において大差なく、（四）その成立の上から見て「組合運動のいきさつや無產政黨樹立運動における偶然に決定せられた分野である」こと等を考へられてゐる。

ところで、山川氏が、我國無產政黨の指導精神はまだ固定化し了つてゐず且つそれが精密に世界的な指導精神を代表するものでない、とされる點については恐らく何人も異議はなからう。だが、このことは問題の指導精神が著しく世界的な指導精神によつて影響せられ、その內容がいづれの形においてこの世界的精神にオリエンテイーレンして居り、且つその方向に向つて固定せんとする不斷且つ急速な傾向を示してゐる、といふ事實を否定するものではない。數年來、我國無產政黨の問題がこの世界的指導精神の問題を中心として回轉してゐた事實を思ふときに、我國無產政黨の指導精神がこの世界的指導と緊密なる一定の關係を持たぬかにも聞えるやうな言說を山川氏の如き這般の事情に精しい方の口から聞くのは私にとつてはまことに以外である。なほ官權から强要された型に盛られた綱領における言辭の類似や黨の構成分子の類似は指導精神の類似の論據としては此上もなく薄弱であるし特に山川氏は政黨の分野が「組合のいきさつや無產政黨樹立運動の過程における偶然」で決定されたことを示すことによつて、それが世界的指導精神と密接なる關係なきことを立證しようとされたらしいが、亦

實はまさにその反對で、これら二つの過程が問題の世界的指導精神の對立と密接な關係を持ちつゝ行はれたことは、多くの人々の承認するところではなからうか。果してしからば、我國の無產政黨の分野は世界的指導精神の對立を精密には代表してゐないが、極めて密接に之と關聯して居り、從つてたとへ指導精神は世界的の意味では未だ確立固定し了つてはゐないとはいへ、急速にその方面に向つて固定化しつつあるものと云へよう。此の如き事態の下において、無產政黨の「全合同」の可能を信じ、特に之に向つて運動するが如きは、山川氏の見地からするも、空想たり欺瞞たりの危險を多分に冒すことではないであらうか。從つて此の如き過誤もしくは罪惡を犯さざらんがために、吾々は「指導精神の同一又は近似」を有効・可能なる合同の條件としなければならぬのである。

では、中間合同の指導精神は具體的に何であるか。未成の團體の指導精神は何人も確定的に豫斷しえない。しかし、少くとも消極的に、それが非合法黨及之への意向を有する種々の色合の極左主義でも、右翼社會民主主義でもなからうといふことはほぼ云ひえよう。從つて、之を積極的に把捉することは更に困難だが、私個人の豫測では客觀的に見て、現段階においては恐らく一應、純正社會民主主義乃至左翼社會民主主義を重心とし左・右の兩側において之と近似し協調しうる主義、思想をも包容する屈伸性に富む指導精神といふところに落着くのではあるまいか。だが、かゝる一定の指導精神を持つところの中間合同は果して將來の發展性を持ちうるか。然り。もし社民黨の一部がその極右主義に滿足せずして、勞農黨の一部がその中に殘有する極左主義にあきたらずして、兩黨より分離するが如き場合には、新黨を中心とする大合同が可能とならう。或はまた將來、共同鬪爭其他の過程を通じつつ社民黨および勞農黨內においてその極右社會民主主義と極左主義への志向を持つところの指導精神とがヨリ堅實なるものにその支配を讓ることがあればその場合において始めて新合同黨を中心とする全合法政黨の合同は可能となるのである。それゆゑに、山川氏のされてゐるやうに、現狀の下で指導精神に沒交涉な合同が可能であるかのやうに考へることが空想であると同じく、氏の如き發展の後にも一定指導精神の下に全合法政黨の合同が全然不可能であると主張することもまた均しく沒理ではなからうか。

今日、世界における無產政黨の陣營は客觀的な指導精神を基準として急速に再整理されつつある。社會民主黨、場合によればその中での右黨・左黨、共產黨、場合によれば、その中での右黨左黨といふふうに。さうして我國の無產政黨の陣營も亦この大勢と共に動き、此の如き線に沿ふところの整理に向つていそぎつつあるものと、私は觀測する。しかるに、山川氏はあたかもかやうな世界的な大勢を無視して或は意識しつつ之に逆行して、無產政黨に向つて指導精神を度外視する「單一政黨の結成へ」と叫ばれる。私は恐れる、この意味での單一政黨の理論が完成され行くに比例して、之を可能とする社會的基礎が愈ゝ失

はれ行きつつあるのではないか、と。なほ、山川氏自身に從ふも、一定の指導精神を中心とする共產黨と右翼的社會民主黨とは單一無產政黨中には包容されえない。同じ論理からすれば、左翼的社會民主黨も、右翼的共產黨も、一定の指導精神を中心として結合する限り、均しく單一無產政黨の外にあるべきであらう。さすれば單一政黨はこれら諸々の主義者の中自らの黨派を造り又は之に參加しえず又は之を欲せぬ者のみがその主義を信奉しつつ、意識水準の低き其他の反ブルジョア的大衆と共に結成する黨であるといふことになる。特定指導精神を中心とする各黨が各〻現に大衆政黨であり又はあらんと意圖としてゐる今日、客觀的指導精神に對してかくも無慾なる或は雜食的なる單一政黨のために、統制と結束ある大衆政黨としての有望なる將來を否一般に存在の餘地をさへ――想像しうるであらうか。

六

私は常に山川氏の犀利・剴切な政治・社會批評に推服してゐるものだが、それだけに、この慧眼なる山川氏において、上記のやうな地方無產政黨觀と單一無產政黨論とが兩つながらかくも熱心な全幅の支持者を見出してゐることを不思議に堪へず思つてゐる。尤もこれら兩見解は別々のものではないのだが。といふのは、山川氏は主として政治意識の未分化・未發達狀態における個々の地方における協同戰線黨を以て單一政黨のモデルと考へられ、更に、全國政黨が戰線統一の無能を立證した曉には、地方政黨の全國的結合――指導精神・相互の信頼において恐らく無條件なこの合同は易々たる看板のかけ替へによつて完成されうる――によつて戰線統一の新形勢が馴致されるといふやうに見られてゐるらしいが、もしさうならば、地方政黨及その結合が山川氏の單一政黨論にとつてそれの現實性を證明する最も貴重な證據であるとともに、單一無產政黨の理論はこれらの地方政黨とその結合とに戰線統一のための選士としての光輝ある「存在理由」と社會的重要性とを賦與することによつて、兩者は密接不離・相互支持の關係におかれあるものと觀察されるから。だが、人あつてこの結び合はされた兩者の關係を切斷し、各々を獨立の社會事象として客觀的に評價する場合には、單一政黨論の現實性についても、地方政黨の社會的重要性についても、自ら別異な判斷がなされざるをえないのではなからうか。

山川氏の合同觀、ことに指導精神に拘はりなき全無產政黨合同の主張は、たしかに、政治的實踐の彼方にある第三者および政治意識の未發達狀態にある大衆に對しては最も公平な合同理論として強い說得力と魅惑力とを持つてゐる。丁度、インテリゲンチヤの人間的・全體的見地が、同じ種類の人々によつて少くとも一度は最も公平な理論として信奉されるやうに。さうして吾々の問題についての山川氏の所論の光彩と强味は、だがそれと共にそれに含まれてゐる致命的な弱點も亦、山川氏の立場が種々の意味において無產政黨界のインテリゲンチヤにも擬しうるところの地方無產政黨の局限された立場によつて、恐らく無意識的に、制約されてゐるといふ假定から出發するとき、矛盾なき全一體として理解されうるやうに、少くとも私には考へられる。

（一九三〇・六・九）

本邦紡績業における技術的合理化

有澤廣巳

一

今日、綿工業はその生産價額の點よりみるも、その雇傭勞働者數よりみるも、その投下されたる資本の大いさよりみるも、その經營規模よりみるも、その輸出額よりみるも、我國におけるキイー・インダストリーの一である。元來、綿製品は大衆的消耗品であり、我國自身が既にこれが廣大な國內市場であるのみならず、實にアジアそのものが世界における最大の綿製品市場である。このことは、我國における低い勞働賃銀と長い勞働時間と共に、アジア市場において樞要の地位を占める我國の綿工業をして、素晴しいテンポをもつて發展せしめた。既に綿絲にあつては日淸戰爭前後において國內市場を確保し、次いで朝鮮に進出し、日露戰爭前後においては、支那市場において先づ米國品を驅逐し、進んで英國品と競爭した。大ざつぱな云ひ方をすれば、綿絲業における生産能力は、既に日露戰爭前において、勿論相對的意味においてゞはあるが、國內市場の消化力以上に達してゐた。だが資本蓄積はそれ自身の目的をもつ。生産能力の擴張はそれがために停止しはしない。海外市場は益々獲得されねばならぬ。歐洲戰爭は我が綿工業にアジアの廣大なる市場を開放したが、だがまた他方において、支那印度その他の植民地における綿工業をも急激に發達せしめた。こゝにおいて我國綿絲紡績業は漸次その內的構成を變化せざるをえなかつた。綿絲の細番化、紡績會社の織布兼營化がこれである。即ち綿絲輸出においては太絲に代へるに細絲をもつて後進國の紡績業に對抗すると共に、他方、綿絲生産能力の相對的過剩部分を織布原絲の生産に向け、綿絲輸出に代へるに、綿布輸出にと轉換した。

第一表を見よ。諸君はそこに綿絲出來高の增加に拘はらず、綿絲輸出高の遞減を見るだらう。だが同時に內地需要の遞增を見るだらう。この內地需要の增加は、綿布原絲の需要の增加、從つて織布生産高の增加を語るものに他ならない。

そこで織布生産高であるが、「本邦織布生産高が幾許に達するかに就いては、正確なる統計を缺く」だが「その原絲消費高よりみて聯合會

第一表　紡績綿絲內地需要高　（單位二梱）

年	綿絲出來高	綿絲輸入高	綿絲輸出高	內地需要
大正 2 年	1,352210	1,266	468,736	1,050,512
8 年	1,570782	3,907	230,333	1,699,306
10 年	1,811350	2,579	328.260	1.521,869
12 年	2,171153	6,332	248,324	1,931,161
14 年	2,436783	3,541	310,801	2.129,623
昭和元年	2,607746	2,937	205,550	2,405,133
2 年	2,529692	2,821	137,654	2,415,859
3 年	2,451862	3.663	71,655	2,383,870
4 年	2,782586	4,238	67,400	2,730,424

綿絲紡績事情參考書に據る

（大日本紡績聯合會）所屬生產高は全國總生產高の約三分の一に當るものと見られてゐる」（昭和三年中ノ紡績業）から、今、本邦織布生產高の狀況を大日本紡績聯合會調によつて示せば、第二表の如くである。

これらの、特に大戰後における著しい織布生產高の增加は、決して國內市場において消化されるのではない。ではなくしてその少なから

第二表　原絲需要高と織布出來高

年　次	運轉臺數	原絲需要高	織布出來高
	臺	梱	千碼
大正 2 年上	25975	110,315	204656
下	23623	117,054	212066
8 年上	39455	223,384	358478
下	45483	233,587	380478
12年上	53317	321,915	503369
下	52626	300,005	497313
14年上	62601	332,759	58283
下	63350	353,422	597212
昭和元年上	64905	367,619	641903
下	66492	368,218	63582
2 年上	67898	373,896	660098
下	65658	359,021	634571
3 年上	68601	362,819	638146
下	72611	394.701	713888
4 年上	70210	418,622	762876
下	67070	422,068	775373

備考　綿絲紡績事情參考書に據る。但し原絲需要高は封度にて表はされてゐるが本表にては一梱四〇〇封度建にて換算しておいた。

ざる部分は輸出の激增となつて現はれてくる。例へば前の「昭和三年中ノ紡績業」においても「紡績會社兼營のものは輸出向大巾織機が大部分を占めてゐる故、輸出綿布の大部分は紡績會社製品と見て差支ない」と云はれてゐる。

全國の織布輸出高の數量統計については適當のものがないやうである。で茲には不完全ではあるが價格統計で滿足しなければならない。」

だがこれをもつても、戰後如何に綿布輸出が意味を加へつゝあるかを看取するに足る。第三表を見よ。

第三表　綿製品輸出高表　（單位千圓）

年次	綿織物生産價額	綿織物輸出價額	綿絲輸出價額
大正 2年	――	33,605	70,997
3年	117,145	34,804	78,554
8年	789,965	280,311	114,232
9年	591,427	334,966	152,392
10年	533,578	203,673	80,568
11年	735,218	222,052	114,723
12年	511,971	234,754	78,511
13年	633,427	326,587	109,610
14年	703,025	432,850	123,116
昭和元年	617,284	416,254	70,716
2年	579,058	388,836	38,791
3年	――	352,217	25,894
4年	――	412,706	26,755

備考　工場統計表及び本邦經濟統計に據つて作る

今、これらの事實からして、大膽なる結論を引き出せば、本邦における綿織物の生産能力の六〇%前後のものは、今日專ら海外市場に向けられてゐるといふことが出來るのである。そうして綿絲の生産高中その少部分が輸出されるに止り、大部分が原絲として織布部門によつて需要せられる今日においては、我國の棉工業全體の浮沈は專ら綿布輸出の増減にかゝつてゐると云ひうる。特にこのことは織布兼營の紡績會社については一〇〇パーセントに妥當する。これ我國紡績資本が支那に印度に瓜哇にアフリカに、先進諸國との激烈なる鬪爭をさへ辭することなく、敢然として海外市場の開拓に狂奔せざるをえない主要原因である。

では本邦綿布の主要海外市場はどこか？　第四表はこれに答へるであらう。

	一九二九年		一九二八年	
	數量（千碼）	價額（千圓）	數量（同上）	價額（同上）
支那	五六〇、六〇五	一二五、〇二五	五三一、四三〇	一五八、四九七
英領印度	五八一、一〇五	一〇九、一三八	三五七、七一〇	七〇、一八五
蘭領印度	一九三、四四三	四二、三八三	一七一、七〇七	三九、二七五
埃及	一〇七、四〇四	二四、四〇九	七七、五九六	一七、六三七
その他	三〇八、〇〇三	一三一、八五一	三六〇、四五五	六六、六三三
合計	一、七九〇、五六〇	四二三、七〇六	一、四一八、七九八	三五二、二一七

支那、印度及び瓜哇である。これらの三大市場の合計は總輸出額の凡そ八〇%を占めており、特に英領印度は昨年において顯著なる増加を示し、その價額においては尚支那に及ばないけれども、數量においては之を凌いでゐる。

印度、印度、印度、その底知れぬ富を藏する印度において、總計においては未だ遠く及ばないが、だがしかし生地綿布及び糸染綿布においては、最近二三年間に、日本綿布は完全に英國商品を抑へた。

（單位千碼）

年次	一九二九年	一九二八年	一九二七年
生地綿布			
英國	八七、七三三	一二四、二一七	一六六、二四一

日本	三二四、五一二	一七三、八八五	一八四、一三〇
絲染綿布			
英國	四一、三一五	四五、四一三	四二、六〇三
日本	六〇、九六九	四八、五三四	五六、八九六
加工綿布			
英國	一、一三一、五四八	一、三七二、八八二	一、三一一、三五八
日本	一三五、一〇九	八四、〇八四	九〇、五四三
總計			
英國	一、二八三、九四九	一、四七二、五七四	一、五四六、六三一
日本	五三七、三七〇	三〇八、九三〇	三三三、八一〇
其他	一三七、二八六	一五九、三三六	一三〇、二八六
計	一、九五八、六〇五	一、九四〇、八四〇	二、〇一〇、七二七

ランカシヤー資本は前には支那において日本紡績資本に壓倒されたが、今やその最も堅固を誇つた保塁、印度さへも日本綿布に侵略されんとしつゝある！　何を賭しても印度市場を確保しなければならぬ。

在リバープール日本領事の報告によれば、

「マンチェスター商業會議所内に其本據を置く綿業團體聯合會は數ケ月以前より海外重要市場に於けるランカシヤ製品の販路擴張に對して各部門に亘る綿業關係者協力の下に其の方法を畫策しつゝありしが、茲數日來俄に該計畫具體化し來り、既に職工組合側をも含む紡績、織布、仕上、包裝等各部門の賛成を得るに成功したるものの如し、而して其方法は同委員會が曩に支那に對し對日競爭を目的として試み來れる東洋織物會社の成績相當良好なるに鑑み再び同樣の方法に依り右東洋織物會社とは別に新たなる一の綿製品共同販賣シンヂケートを組織し、且つ試驗的に一重要市場に對し、生產品種を一種に限定して能力を之に集中すると共に、大量生產に依り出來得る丈價格を低廉ならしめ以て競爭國に對抗せんとするにあり、……當館に於て調査せる情報を綜合すれば、……其對抗目的が日本にあるは勿論にして又最近綿業關係者の多くがマンチェスターを訪問したる印度通商事務官に接近し居たる形跡竝に四圍の事情等に徴すれば其目的とする市場は印度なるべし……」と。

註、なほ瓜哇における日本綿布の進出についてはアムステルダム通信によれば、總近日本品の輸入は猛烈なる勢を以て增加し、一九二九年には蘭國及英國は同地に夥しき綿絲綿布のストックを擁して賣捌口を見出しえざる有樣となつてしまつた。斯かる變化が急に生ずるに至つた原因は決して瓜哇市場購買力の低下したるにあらずして既に英領印度、支那、英領東部亞弗利加に於けると同樣インドネシアにも其の鋭鋒を現はして來た日本の競爭に優れた點のある結果に因るものである。日本は廉價に生產し得る利益の外に南洋方面に對し政府の補助を受けて居る航海線を有してゐる。又日本人の意見として發表せられたるもの等を通讀するに日本の紡績業は印度に進出し沽買の斯業を其手中に收めんことを夢みて居ることが窺はれる。」云々（大日本紡績聯合會月報第四百五十號）

だがランカシヤ資本はシンジケートをもつて日本綿布と競爭するよりも、もつと即效的な行動に出た。即ち、印度輸入綿布關稅引上げである。印度自生のボンベイ紡績資本と本國ランカシヤー資本との對立

にも拘はらず、綿布關税增率案は印度綿業の保護と國庫收入の增加とを口實として、三月卅一日六二票對四二票をもつて立法議會を通過し四月四日より實施されるに至つた。新税率案によれば、

I晒もしくは反染にあらざる平織生地綿布にして織出ヘッチングのなきもの、または九ヤール以上のピース（中途に織出しヘッチングなきもの）にて輸入されたる場合

（イ）イギリス製品には從價一割五分かもしくは一ポンドに三アンナ半か何れにしても高き方を課す。

（ロ）イギリス以外の外國品には從價二割かもしくは一ポンドに三アンナ半か何れにしても高き方を課す。

II右以外の綿布の場合

（イ）イギリス品には從價一割五分を課し。

（ロ）イギリス以外の外國品には從價二割を課す。

かくてランカシヤー商品は印度市場においては外國品、即ち日本製品に對して五分の特惠をもつて保護されることゝなつた。

だが新税率は日本製品にとつては特に苛重である。なぜなら生地綿布に對しては從價二割か若しくは一ポンドに付三アンナ半か何れか高き方を課せられるのであるが、その正に生地綿布において日本製品は印度市場におけるランカシヤ商品を壓倒したのであつたから。今、紡績聯合會の發表によれば、新舊率の開きは次の如くである。

	新率	舊率
（一）生地綿布		
金巾	二五％	一一％
粗布	三六％	一一％
綾木綿	三五％	一一％
その他	三〇％	一一％
（二）晒及加工綿布	二〇％	一一％

即ち舊率に比して金巾は十二割七、粗布は二十二割七、綾木綿は二十一割八、その他は十六割六、晒及び加工綿布は七割二の驚嘆すべき增率である。從つてその税額も驚くべき增加で、紡績聯合會が昨年の輸出高を基準として算定した所によると、舊税額の約千二百萬圓から二千六百四十二萬圓と、その間千四百四十二萬圓の大增税となる。「まことに日本紡績にとつて未だかつて經驗しない大打擊である」（エコノミスト第八年第八號）

前には年初以來の銀價慘落により、支那市場の購買力の激減による打擊をうけ、今また印度市場における日本綿布禁止的の關税引上に當面した我國紡績資本は、果して如何にしてこの困難を克服しようとするであらうか。聽け！大日本紡績聯合會の聲明書を。

『印度議會は英國綿布に痛痒を與へない程度の申譯的修正を加へてとうとう差別的關税案を通過した。……日印通商條約の精神より見るも將た又其正文に照らすも誠に我國を無視した仕打で怪しからぬことゝ思ふ。我が外交當局者は無論此儘に事態を看過せぬと信ずるが、我々當業者としても今後あらゆる機會に於て此れが是正に努力せねばなら

ぬ。乍併我々は關稅引戻運動のみに沒頭して、目前にせまる輸出販路の維持改善に關する方策を怠つてはならぬ。往年華府會議で支那の關稅自主權が討議せられ將來必然的に支那で關稅の高めらるゝことを自覺した我々當業者は支那の各地に紡績企業の進出を企て國內的には「太糸より細糸へ、生地綿布より加工綿布へ」の機運を釀成した。爾來遲々ながらも綿絲の細番化、綿布の高級化は事實に於て行はれつゝある。思ふに此度突發した印度の差別關稅の實施は我國當業者を驅り生地綿布より晒に厚地綿布より細地綿布への道程を邁進せしむるであらう。そして其結果は當然印度綿の本邦輸入を減じ逐次米綿を以て之に代ふる事となり延て一般日印貿易にも波及する所が少くないと信ずる。

元來我々は國際的分業を希望するものであるが、こう云ふ事態に陷られては厭でも應でもマンチェスターの製品と白兵戰を交へぬ譯には往かぬことゝなつた。甚だ遺憾ではあるが我々當業者には恐らく深き決心と相當の準備があることゝ信ずる。看來れば此頃の世界は到る處で關稅戰が行はれ日を追ふて其辛辣味を加へる。印度に於ける差別的綿布關稅の設定及本邦綿絲に對する期限附關稅の延長の如きは卽ち其最も極端なるものであるが、一方から見れば斯かる難境を突破してこそ初めて我國綿業の大を爲す所以であると信ずるから吾々は一層の勇氣を以て邁進すべきである」(大日本紡績聯合會月報第四百五十一號)

傳統を誇るランカシヤ綿業資本に對する日本綿業資本の宣戰の布告だ。アジア大陸に綿製品市場獲得のための白兵戰が交へられんとしてゐるのだ。市場獲得鬪爭は尖銳化した。

この具體化した市場獲得鬪爭を前にして、日本綿工業には如何なる「準備」があるか。如何なる「決心」があるか。本邦紡績業に於ける技術的合理化は正にこの宣戰布告のエレメンタールな物質的基礎でなければならぬ、私は次に之をみよう。

二

『マニュファクチュールのもとに於ける各種行程の分化は、分業それ自身に依つて與へられた原則であるが、發達したる工場に於いては反對に、各種行程の連續が必須の條件となるのである』(資本論第一卷新潮社版四八七頁)

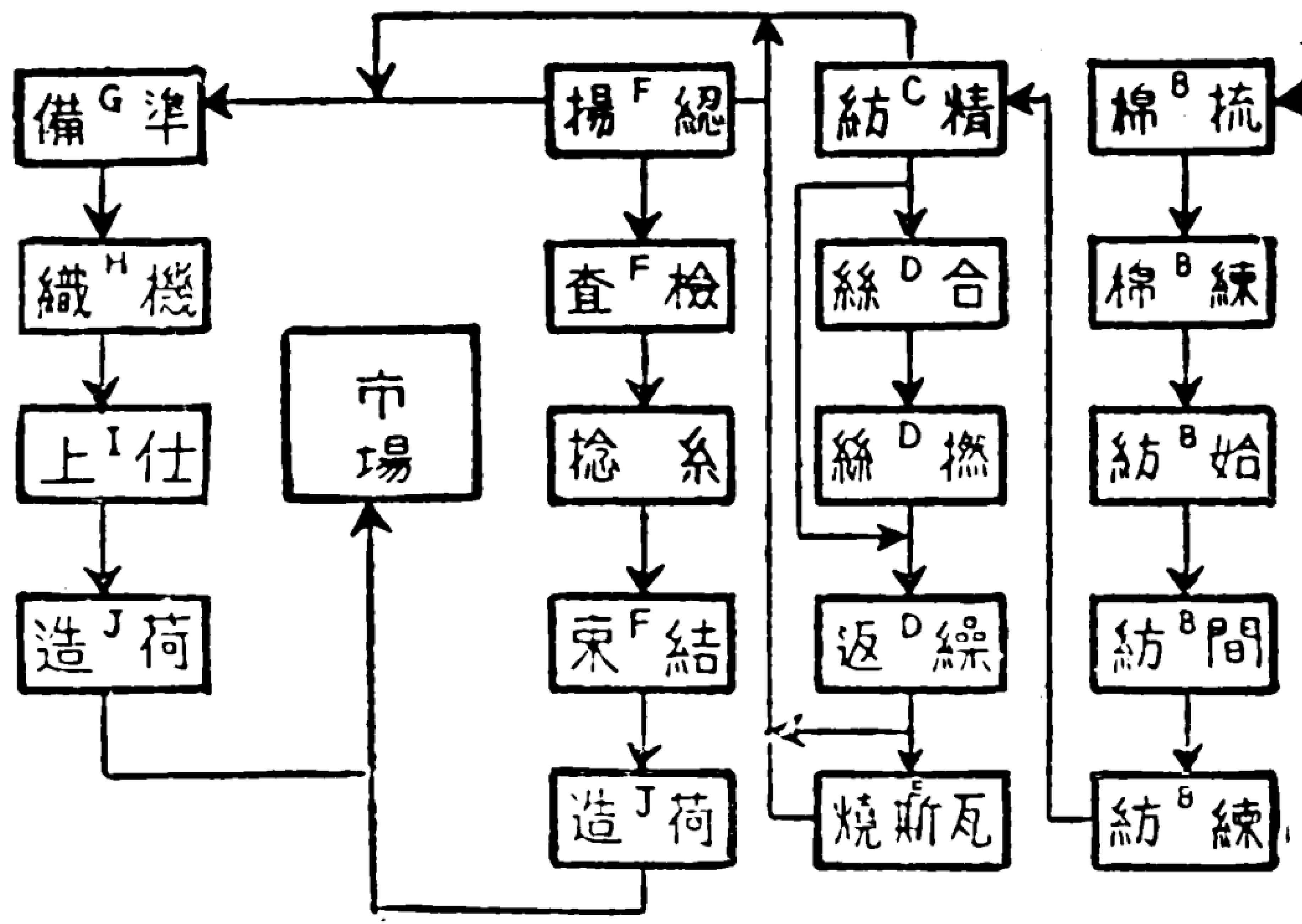
先づ理解を容易にするために、綿絲紡績業における生產の各種行程の系統圖を示さう。

紡績業における技術的合理化は、かゝる複雜な工程に流動勞働の原則を技術化し、勞働行程を流動的ならしめると共に、之を短縮化するにある。それは引いては勞働の强度の增進となり、生產能率の增加となるであらう。

ところで、本來の紡績部門における技術の發達は、他の工業に較べて最も早く、既に十八世紀の半ば頃から後半にかけて大いに進み、十九世紀に入つては自働精紡機が發明され、次いで中葉にはリングの發

明をみ、紡績機械の發達はほゞ完成したのであつた。從つてその後に於ては、革命的なる若しくは劃期的なる發達といふ樣なものは現はれ

(統計集誌第五百八十四號に據る)



ず、廿世紀に入つても我々の知る限りでは、未だ紡績の如何なる部門にも根本的な變革は起つてゐない。起りえた改良は全く將來の埒內で、しかもたゞ部分的に行はれてゐるにとゞまる。之に反して織布、その他仕上げ部門においては十九世紀以來今日に至るも尚不斷に多くの進歩が記錄されてゐる。

さて、我國紡績業について見るに、十九世紀の後半即ち紡績部門における技術が一應完成した頃、始めて創業されたために、その採用した技術、設備は當初より殆んど完全なものであり、ことにそれ以前において何んら新技術の採用を妨げるが如き施設がなかつただけ却つて有利であり、自由に新技術の採用が行はれた。例へば今日ランカシヤーで紡績業の合理化を論ずる際常に問題となるリング精紡機によるミュール精紡機の置換へは、後進國の我國においては夙に解決されてゐる。鹿兒島に輸入された精紡機以來明治二十年頃まではミュールの採用が行はれたが、リングの普及に伴ひ、その後は殆んどリングのみを採用し、今日先進國イギリスとの競爭を有利に戰ふことが出來る有力たる原因となつてゐる。

註。リング紡精機は操作の簡單なること、容積が少なくて濟むこと、生產能率の高いこと等をその特長とするが、最近の萬國紡織聯合會調によれば日英米のリングとミュールとの比例は次表の如し(單位千錘)。

	一九二八年一月末			
	リング	ミュール	リング	ミュール
イギリス	一三、四五五	四三、六四六	一三、四四八	四三、三三〇
アメリカ	三三、七六一	二、四八八	三三、三三五	二、〇〇〇
日本	六、〇七九	七七	六、二九五	四一
世界統計	一〇一、四七二	六三、五〇七	一〇二、六六〇	六二、五四四

世界全體としてリングの絕對的增加、ミュールの絕對的減少、特に我國におけるミュールの極端に少いことは注目に値する。

我國紡績業における技術的合理化は、戰時戰後における市場の推移に應じて、生產能力と販賣可能性との均衡を回復せんとする過程において、着手された。紡績業は戰時及び戰後直後における莫大なる利潤の蓄積を擁し、合理化に要する資本の比較的豐富であつたがために、

他の產業に比していち早く之を遂行することができた。更に昭和四年七月一日より實施せられた深夜業廢止の準備＝對抗策として、大正十三年頃からして、顯著なる合理化過程の進行をみたのであつた。

以下技術的合理化の主要項目について略述しよう。

（一）エネルギー經濟

I 石炭利用の改善。石炭利用における種々の技術的改良は次に示すごとき結果を生むでゐる（大日本紡績聯合會調による）。即ち大正十一年十二年頃の狀態に比し、大正十五年以降においては、石炭消費の減少、火力使用馬力の著しい減少の傾向と共に、一時間一馬力あたり消費石炭量の減退を明かに示して居る。大正十二年上半期に比べると昭和四年の後半期には三分の二の石炭をもつて同一馬力を發生せしめてゐる。これは火力が他の動力によつて代位せられると共に、石炭利用方法の改善の跡を物語るものである。

	石炭消費高	火力炎使用實馬力	一馬力一時間石炭消費高
大正十一年	一四六五五七五封度	一二六一二四	七・〇四〇封度
大正十二年	一三二八八五七	一一三七七九	六・九一〇
大正十三年	一二一二九一九	一〇三〇八一	六・六七七
大正十四年	一一二八一八三	九六六七〇	七・二一四
大正十五年	一〇〇七三九七	九一三六九	五・八六〇
昭和二年	八五七四七九	七八三三二	五・七七八
昭和三年	六九六八二七	六七一二〇	五・五九六
昭和四年	五七七一一四	五二一一一	五・六八三

II 電氣化。一般にわが國の工業における技術的合理化の主要方向は動力の改良、ことに電氣化といふ點にある。そして就中その傾向の顯著なのは紡績工業である。

先づ最初にわが國紡績工場における動力の電氣化が如何なる程度まで進むだかを見よう。（大日本紡績聯合會、綿糸事情參考書により算出）

	電力水力及瓦斯	全動力中に占める電力水力及瓦斯の割合
大正11年上	67,1千馬力	50,9%
下	71,7	54,0
12年上	82,5	57,7
下	77,0	58,4
13年上	84,3	61,1
下	89,9	64,7
14年上	109,5	68,6
下	112,1	70,9
15年上	125,4	72,0
下	125,5	73,5
昭和 2年上	140,9	77,7
下	130,8	77,8
3年上	144,1	79,9
下	149,7	83,0
4年上	171,0	86,1
下	177,9	87,9

即ち大正十一年以降十四年までに至る四ヶ年間に動力使用實馬力數は絕對額に於て約二倍となり、電力の全動力に對する割合は約二十%を增加した。其の後十五年昭和二年昭和三年においてはその絕對數の增加率及び相對的增加率共にやゝ減じたが、昭和四年になつて再び增加率は絕對數ならで相對數において飛躍的に增加し、四年度後半期に

おいては紡績工場において使用される動力は遂に九割近くまで電氣化されるといふ驚くべき記錄を示してゐる。

わが紡績工場の電氣化の程度傾向が如何に進むでゐるかといふことは英米獨の紡績工業の電化の數字と比較する事によつて明かとなる。一九二四年の統計によれば英國は一九%獨米は約五九%である。(マンチエスター・ガアデイマンコンマーシャル、一九二九年八月)技術的に見てもわが紡績工場は最初單相反撥電動機を採用し次に三相直捲整流子電動機となり、進んで三相分捲整流子電動機の出現となり、やがて最も近き將來において、直流分捲電動機時代が展開せんとしつゝある。これを他の産業部門の工場に比べると電化技術が最もよく進んでゐることは專門家の一致して說くところである。(工學博士伊藤奎二氏「紡績工場における電氣設備及び照明に就て」「紡績界」所載論文參照)しからば電氣化を行ふ目的及びそれによつて得られる利益はいかなるものであらうか。こゝにその一々を詳述することは出來ないが要項のみを列記すれば次の如くなる。

A　精紡機の單獨運轉。

精紡機の單獨運轉は電化の第一目的とされる。單獨運轉による利益の主なるものは次の如し。

(一)　精紡機による生產高を增加すること。

(二)　精紡工費を節約すること。

(三)　女工手を節減すること。

(四)　糸質をよくすること

(五)　障害による危險を少くすること。

(六)　塵埃を少くすること。

(七)　冬期は通風に便なること。

單獨運轉による不利益はたゞ勞働者の側においてのみ現はれる。彼等は極度の緊張を强制される。

B　動力費の經濟なること。

動力費に於ける經濟は、いかなる工場も之を電化することによつて得られるわけではない。複雜なる諸條件が考慮されなければならぬ。ただ種々なる經驗の示すところによれば、大工場における電化が動力費の節約を結果することについては疑ひないところである。

C、動力の分配容易なること。

動力分配の容易なることは電力の第一特質である。

D、原動室の位置の如何に係はらず工場を任意の場所に選定し得ること。

E、動力機械の取扱簡單なること。

起動及び運轉停止がスヰッチの開閉によつて行はれ、極めて簡單であるのが電動機の特色である。

F、照明を得ること。

深夜業廢止以前は勿論、廢止後も早曉より就業し、夜業を長時間行ふ紡績工場において、照明が生產に重大な影響をもつことはいふまで

もない。完全なる照明、より明るい照明が生產能率の增進を齎したことは多くの報告に現はれてゐる。照明技術の發達と電球製造技術の不斷の改良とは、同一燭光に對する電力消費量を著しく減じ、照明としての電力の地位を確固ならしめた。

G、瓦斯糸工場にて瓦斯燒代用にすること。

今日のところ「バーナー」の問題が未解決で、未だ試驗時代である。

（二）紡織機械の改良

『機械の進步は、絶えず縮小される所の時間を以つて、ますます巨大の生產物を供給し得せしめると同時に、如何に各時間單位の持續中にますます多くの勞働を流動せしめ、ますます集約的に勞働力を搾取せしめる組織的の手段として役立つかといふことである。』（資本論第一卷同上五四三頁）

I紡績機械。紡績機械において特記すべき改革の行はれてゐないこと、及びその理由は既述した通りである。たゞ紡績の前工程である開棉及び打棉工程と梳棉工程とにおいて若干の改良が行はれ、ハイ・ドラフト紡機が用ひられるに至つてゐることは注目すべきであらう。精紡機の牽伸裝置に新たな考案を施し、紡績における前工程の一部を省略し、これによつて機械と勞働者とを節約せんとするハイ・ドラフト紡機は數年前に於て發明された。そして既にヨーロッパ大陸諸國並にアメリカ合衆國においては この機械は相當多數使用されてゐるが、我國では未だ少數で、僅かに天滿織物、大阪莫大小紡績、合同紡績、倉敷紡績等の數社の工場を數へるにすぎず、總錘數約二萬一千錘である。しかし目下計畫建設中の東海紡績、吳羽紡績の工場は全部ハイ・ドラフト紡機を採用して居り、最近の注文にかゝるリングはその六〇%までハイ・ドラフト紡機である。さらに大日本紡績、內外棉、日華紡績等の在支工場にもハイ・ドラフト紡機を裝置してゐる。

ハイ・ドラフト紡機にいかなる利益があるか。現在スピンドルの回轉は機械製造者の豫想せる範圍において極度の速度に達してゐる。時には豫想を超えてゐるものもある。從つて新たにハイ・ドラフトを採用しても、これ以上スピンドルの回轉を速くすることは出來ない。それ故假令ハイ・ドラフト紡機を採用してもそれがために精紡機の生產額を增加することにはならない。生產額には直接に關係がないのである。たゞハイ・ドラフトを採用すれば精紡機の前工程である始紡、間紡、練紡、の三工程中どれかを省略し、やや太い粗糸をそのまゝハイ・ドラフトの精紡機にかけることが出來るのである。前工程における省略については間紡若しくは練紡を拔くこともあれば、或は普通ドラフトと同樣に三紡機を通すことにし、三紡機をそれ〴〵幾臺かづつ竪に減らすといふ方法もある。その中練紡を拔くのが最も普通とされ、練紡省略がハイ・ドラフトの最も顯著な特長として擧げられてゐる。世界最大の紡績機械製造會社プラット・ブラザース會社のカタログにより、普通ドラフトとハイ・ドラフトとの所要機械の數の比較を示せば次の如し。

	普通ドラフト　台	ハイ・ドラフト　台
ホッパー・ベールブレーカー	三	三
ホッパー・オープナー	三	三
ホッパー・フィーダー	三	三
エキゾースト・オープナー	三	三
クライトン・オープナー	三	三
シングル・仕上スカッチャー	八	八
ロービング・ウエスト・オープナー	一	一
シングル・カーディング	一四四	一四四
ドロー	一二	一二
粗紡機一〇〇錘立	一二	一二
間紡機一四四錘立	二四	二四
練紡機一八四錘立	五六	―
精紡機四八〇錘立	一五四	一五四

練紡機の省略により、ハイ・ドラフトはそれだけ機械に投ずる費用を節約し得る。工場建物も狹くて足るが勞働者をも節約出來る。この三點がハイ・ドラフト紡機の普通ドラフト紡機に優る點であつて、新工場建設に當りハイ・ドラフト紡機を使用するときは、普通ドラフトに比し、機械代に於て一五%、工場建坪に於て一〇%、更に運轉に際し勞働者に於て一〇%を節約し得ると見積られてゐる。だがハイ・ドラフト紡機には、これ等諸利益の反面に、不利益のあることも、從來の經驗から認められてゐる。即ちハイ・ドラフト紡機製品は、普通ドラフト紡機と原料を全然同じくする場合、絲殘稍や多く、糸質劣る。またハイ・ドラフト紡機は糸切れ稍多く、生產額も若干劣る。然しハイ・ドラフト紡機の普及を妨げてゐるのは、これ等の不利益よりも、むしろ、その利益の一半である建設費の低廉なことが、新設若くは增設の場合に限られてゐることである。改善してハイ・ドラフト紡機を設置しても、何等その工場建坪の節約による建設費低廉といふ利益を蒙らず、改善費を要するだけ結局損である。殘る一半の直接生產費低減の利益が爾餘の不利益と相殺して、餘りあるや否や、この點が今日では甚だ疑問である。

最近、ドイツのハルトマン紡績機製造會社はスーパー・ハイ・ドラフト装置の精紡機を製造發賣するに至つた。これは普通のドラフト装置と、カサブランカス式ハイ・ドラフト装置とを一臺の精紡機に組合せ装置せしもので、この機械によれば前工程の粗紡機三工程を悉く省略することが出來る。從つて全體の機械は甚だしく少くなる。しかし精紡機の装置が複雜であるから、その價格は普通ドラフト紡機に比し、著しく高くなる。この機械は、歐洲方面においても未だ一般に實用化するところまで普及して居らず、我が國に於ては一二の大會社が實驗に着手した位で、何れにしろ猶ほ試驗時代である。

かくの如く何んらの劃期的な新技術の出現がない狀勢のもとにおいて、技術的合理化を行ふために採用された方法は、機械の運轉スピードの增加であつた。いかなる程度にこの增加が行はれたかは何等公けに發表されたものなく、又之を外部より窺知することは困難である。

萬國紡績聯合會書記長アーノ・エス・ペアースの最近發表せる視察報告書「日本及支那の棉業」は我が國の多くの紡績工場の實狀を詳細に記述し、リング・精紡機の回轉速度に關する結論として、三十番手乃至四十番手に於ては一萬一千回、十六番手乃至二十番手の太糸に於ては九千回といふ高速度を出してゐると述べてゐる。我々の調査せるところによれば、從來スピンドル・スピードは大體一分間九千六百回を標準として製作されてゐた。ところが現在では、ペアースの記述以上の即ち一萬一千回以上の高速度を出してゐるものが少からずある。さらに最近では一萬四千回の回轉を行ふことが實際に試みられてゐる。勿論かくの如く製作者の標準回轉數以上の高速度を出すことは、機械をそのまゝでは不可能である。そのために精紡機をソケットに入れ、その中に油をみたし、自働調節を行はしめる特別裝置が採用されつゝある。

運轉速度の增加は單に機械の改良のみによつて可能となるものでない。原料棉花の品質を若し從來のまゝにしておくならば、速度の增加に從ひ糸の切斷回數は益々增加する。切斷回數が增加すれば、到底所期の生產高の增加を見る事ができない。原料棉花の良質のものを使用すれば、糸の切斷も少くなり、機械の回轉を速めることが可能となり、其上勞働者の數をも減ずることができる。かくすれば、原料代は高くつくが、それは生產高の增加、勞働者數の減少で相殺して余りある。

近年における我紡績會社の使用原棉の種類に就て見ると、次の如くに變化してゐる（大日本紡績聯合會發表による）。

原棉消費割合（%）

	印棉	米棉	其他棉	合計
大正十三年	五八・三	二九・一	一二・六	一〇〇・〇
大正十四年	五六・五	三三・六	九・九	一〇〇・〇
昭和元年	五三・八	三九・三	六・九	一〇〇・〇
昭和二年	四六・五	四七・二	六・三	一〇〇・〇
昭和三年	四四・六	四四・九	一〇・五	一〇〇・〇
昭和四年	四九・三	四三・四	七・三	一〇〇・〇

右表によれば印棉使用量が次第に衰退して、品質のよい米棉の消費量が增加してゐることがわかる。昭和三年において米棉使用量は印棉より多くなつた。然しこゝで注意をせねばならぬことは製出番手の變化である。我紡績業は一般的傾向として、製出番手は常に高上しつゝあり、太絲中心から中絲中心に移つた。この變化に伴ひ棉花の消費も高級な米棉に移るのもまた當然の結果である。いま番手別生產高の變化を窺ふに次の如くである。

綿絲製產番手別割合（%）

	太絲	廿手	中絲	細絲	計
大正十三年十二月	三四・六	三一・〇	三一・一	三・三	一〇〇・〇
同　十四年同	三二・九	三三・三	三〇・七	三・一	一〇〇・〇
昭和元年同	三二・三	三二・七	三一・九	三・一	一〇〇・〇
同　二年同	三〇・三	三三・八	三三・五	三・四	一〇〇・〇
同　三年同	三〇・九	二八・六	三六・九	三・六	一〇〇・〇

同　四年同　三〇・〇　三二・二　三四・〇　三・八　一〇〇・〇

右表によつて、生産高合計に對する各番手の占める割合を見れば、太絲は大正十三年十二月に三四・六パーセントであつたものが、昭和四年十二月には三〇パーセントに低下し、廿手も同樣低下の傾向を示してゐる。然るに中絲は反對に三一・一パーセントから三四パーセントに向上し、細絲も微弱ではあるが增加の傾向を示してゐる。平均番手の高まつたことが歷然と現はれてゐる。

けれどもこの番手の增加程度は前述の米棉消費增加に比すれば遙かに少さい。即ち近年に於ける我國紡績業の優良棉花使用量の增加した原因は、生産平均番手の向上のみに依つて說明し得ざるものがあると云はなければならない。而してそれは、主として回轉速度增加のための必要によつて行はれたものである。

註。ハイ・ドラフト紡機に就いては紡織界（昭和四年七月號）及びダイヤモンド（昭和五年四月十一日以下の諸號）所載の諸論文を參照せよ。我國紡績業の使用棉化の品質の變化と機械運轉回數の增加との關係につきては東洋經濟新報（昭和五年三月二十日號）によるところ多し。

II織布機械の改良。紡績機械に比べると織布機械に於ける發達は著しい。特に我が國に於ける革新は注目すべきものがある。されば前述べアースもその報告に於いて「一般的にいつて、歐洲は混棉に關することを除けば、恐らく紡績部門において學ぶところ余り多くはないであらう。日本が歐洲に重大な敎示を與へるところは織布部門においてよある。」（前掲書七八頁）と結論してゐるのも確かに至言であらう。

織布工程における發達の中心は自動織機である。從來の力織機に代へるに、停止裝置（ストップ・モーション）付力織機をもつてし、進んでノーストップ式自動織機（米國ドレーパー社製作。コップ・チェンヂである）或はスターツフォード社製作シヤットル・チェンヂの自動織機を採用し、さらに最近にいたつては世界に誇るべき豐田式自働機械が製作されるに我國において若干の自働織機はじめ我國において若干の自働機械が製作されるに至り、輸入織機を驅逐するとともに、海外に輸出されるにいたつた。ことに本年豐田式自働織機はその特許使用權を英國のプラット紡織機製造會社に讓つて世界的に著名になつた。我國の主要なる自働織機製作業者とその所在地その型式等を示せば次の如し。

	所在地	緯絲補充の型式
株式會社豐田織機製作所	刈谷	シヤットル・チェンヂ
野上式自働織機株式會社	名古屋	コップ・チェンヂ
遠州織機株式會社	濱松	コップ・チェンヂ（ドレーパー類似）
株式會社大阪機械工作所	大阪	シヤットル・チェンヂ

これらの會社の製品は、機械の操作に當る我國の勞働者の事情を特に顧慮して、その機構複雜ならず、取扱ひが容易にして、その職工養成が短期間にて足るのを特色としてゐる。

新式織機は勞働者の仕事を甚だしく奪ふ。一人の勞働者の力織機受持臺數は古くは二臺であつた。兩三年前においても普通の三巾織機勞

働者一人當り平均四臺には達しなかつた。今日では四臺乃至六臺となつてゐる。能率よき工場では平均受持臺數が六臺になつてゐるものもある。普通の織機に停止裝置を施すことにより織疵の生ずるを防ぎ、受持臺數の增加を計ることができる。停止裝置付織機の受持臺數は現在八——十二臺で、平均約十臺と計算されてゐる。自働織機を採用すれば、それは二〇臺乃至三〇臺となる。豐田式自働織機の實修工場たる刈谷工場では四〇臺乃至五〇臺を一人の勞働者が受持つてゐる。これは宣傳のため熟練勞働者を使用してゐるので、一般工場における平均勞働者によりこれだけの能率を擧げることは勿論困難である。ペアースの引用する大日本紡績聯合會の計算發表によれば自働織機平均二四臺、然らざる織機平均五・五臺が一人の勞働者の受持になつてゐる。

我國において自働織機はペアースのいふ如く、大なる成功を收めてゐる。その利益は充分に認められた。現在尚多く存する平織機も遠からずして、悉く自働裝置を施こされるに至るであらう。

新式機械の採用とともに織機運轉速度が增加し、一臺一日當り平均生產高が增加したことはいふまでもない。

大正十一年以後に於ける我が國紡績會社運轉織機臺數、一臺一日平均出來高及び總織工一人あたり臺數の變化を示せば第四表の如くである。平均出來高は大正十四年頃より漸增し、一人あたり受持織機臺數は昭和二年度上半期から激增して、合理化のより一層の進展を物語つてゐる。(大日本紡績聯合會、綿絲紡績事情參考書により計算)

第四表　織布部門に於ける能率の發展

		運轉臺數	一臺一日平均織布出來高	織工一人當平均臺數
大正11年	上	49,846臺	49.24碼	1.09
	下	52,219	48.25	1·13
12年	上	53,317	53.90	1.10
	下	52,626	53.23	1.09
13年	上	54,449	54.88	1.07
	下	58,252	55.26	1.13
14年	上	62,601	58.47	1.16
	下	63,350	59.24	1.12
15年	上	57,608	60.73	1.12
	下	65,658	61.55	1.18
昭和2年	上	67,808	62.66	1.26
	下	65,653	59.56	1.39
3年	上	68,601	64.73	1.58
	下	72,611	64.97	1.64
4年	上	70,210	67.67	1.62
	下	67,070	62.77	1.60

(三) 工場規模の變化

サー・エス・ジェー・チャプマンとティ・エス・アシュトンとの有名な共同研究の報告「主として纖維工業における經營の規模」(一九一四年)及び約十年後に行はれたアシュトンの同一問題に對する引續いての研究報告によれば、紡績專門工場の有する紡錘の數、兼營工場におけるの錘紡織機に對する割合及びその絕對數にはノーマルな大きさと形と

ある。さらにこれらの大さと形とは時の進むにつれ増大する傾向がある。かゝる工場規模の決定要因は、機械力供給の諸條件、當該地方で間にあふ補給、機關の最大有效量、動力傳導の經濟と失費等が主要なるもので、從つて、これ等の要因における變化が決定される規模を變化さすのである。

第五表　我國紡績工場規模の變遷

錘數(單位1000)	大正9年6月30日		大正13年12月30日		昭和3年6月30日	
	工場數	%	工場數	%	工場數	%
0以上	5	3.7	4	2.4	2	1.1
2.5 〃	4	3.0	3	1.8	4	2.2
5 〃	7	5.3	4	2.4	5	2.8
7.5 〃	7	5.3	5	3.0	1	0.6
10 〃	24	18.0	35	20.8	28	15.5
15 〃	16	12.0	18	10.7	17	9.4
20 〃	14	10.4	21	12.5	23	15.5
25 〃	10	7.5	11	6.5	13	7.2
30 〃	13	9.7	25	14.8	20	11.0
35 〃	6	4.5	6	3.5	9	5.0
40 〃	3	2.3	4	2.4	9	5.0
45 〃	7	5.3	5	3.0	7	3.8
50 〃	7	5.3	9	5.3	11	6.0
60 〃	3	2.3	6	3.6	8	4.4
70 〃	3	2.3	5	3.0	8	4.4
80 〃	0	0	2	1.2	4	2.2
90 〃	2	1.5	3	1.8	3	1.7
100 〃	1	0.8	1	0.6	2	1.1
110 〃	0	0	1	0.6	0	0
150 〃	1	0.8	1	0.6	2	1.1
合計	133	100.0	168	100.0	181	100.0

(大日本紡績聯合會綿絲紡績事情參考書による)

我國における紡錘の數は、最近一ヶ年間に約三十萬錘づゝを增し、次に示すごとく大正九年六月末の三百六十九萬錘になつてゐる。九ヶ年に於ける約百八十四萬錘の增加が、わが紡績工場のノーマルな規模をいかに變化せしめたであらうか。各紡績工場に於ける紡錘數については我々は正確な統計を持たぬ。大日本紡績聯合會が綿絲紡績事情參考書中に發表する不完全な統計を利用して調査した結果のみを簡單に次に示さう。(第五表)

これに現はれたところは次の如き現象である。

一、一萬錘以下の小工場の激減、六萬錘以上の大工場の激增。

二、一萬錘乃至四萬錘の中工場の割合は殆ど變化せず。

三、しかし中工場內部に於ける分布を見れば、從來最も典型的な紡績工場の大きさと考へられた一萬錘工場が最近ではその數を減じ、すべての設備を凡そ倍加した二萬錘三萬錘單位の工場への移行が見られる。經營單位の規模は著しく速に擴大された。

(四) 勞働能率の增進

『資本家の手に保有されてゐる機械は、同一の時間により多くの勞働を搾出すべき組織的に充用される所の對象手段となる。これは二つの方面から行はれる。即ち一方には機械の速度が高められる結果、他方には又、同一の勞働者に依つて監視さるべき機械の範圍、換言すれば彼の勞働すべき範圍が擴大される結果として行はれるやうになるのである。』(資本論第一卷同上版五三二頁)

新式機械の採用、工程の改良等はそれ自身勞働の生產力を增加する

が、それにも增して勞働の强度化を增進せしめた。「機械の速度」が機械製作者の豫定速度以上に高められたことは既に述べた。こゝには「勞働すべき範圍」が如何に擴大されたかを示すべきである。

大正十一年以降における紡績工場に働く勞働者數及び運轉錘數、この二つの數字を基本として勞働能率增進の結果を算出したのが第六表である。（大日本紡績聯合會「綿絲紡績事情參考書」により算出）

第六表
紡績業における作業率の發展

年次		一万錘當り職工數	女工一人當り錘數
大正11年	上	433人	29.2錘
	下	437	30.3
12	上	401	32.6
	下	405	34.5
12	上	381	34.3
	下	365	36.8
13	上	372	34.7
	下	372	34.8
14	上	370	34.8
	下	360	35.8
昭和 2	上	354	35.4
	下	350	37.2
3	上	326	40.0
	下	310	42.2
4	上	288	44.7
深夜業廢止後第一期	下	265	48.1

この統計は紡績業に於ける重大な諸現象を暗示してゐる。先づ、勞働能率は一萬錘職工數及び女工一人當錘數に現はれたところによれば、大正十一年以來常に增加してゐる。そしてその增加率は昭和二年金融恐慌の突發、操業短縮の開始以后急激に高騰した。

だがそれにも增して重大なことは勞働者の絕對數の變化である。大正十二年の關東大震災の影響を受け、十三年上半期には運轉錘數の減少、從業勞働者の減退の傾向が現はれたが生產設備の完成とともに直ちにまた增加の傾向に移つた。ところが大正十五年を頂點として昭和二年以后は漸減の傾向に移り、生產設備の增加にも拘はらず絕對數は十五年に比し、昭和四年度において尙一五％も低位にある。

從業勞働者の絕對的減少の傾向は操業短縮を行つてをらぬ織布部門においても特に現はれてゐる。第七表に示すごとく、大正十五年に比し今日の從業員數は約二〇％の減少である。

第七表　織布一日平均職工員數

		男	女	合計
大正15年	上	9,138人	49,071人	56,208人
	下	9,294	47,283	56,577
昭和 2年	上	8,979	44,728	53,707
	下	8,317	39,030	47,347
3年	上	8,115	35,390	43,505
	下	8,404	35,503	43,907
4年	上	8,598	34,873	43,471
	7月	8,393	33,577	41,979
	8月	8,210	32,400	40,610
	9月	8,294	33,446	41,740
	10月	8,376	33,517	41,893

これら從業勞働者が生產設備の增加、生產高の增加にも拘らず絕對

的に減少する所以は、主として勞働能率增進（勞働の强變化）の結果であること、まことに大日本紡績聯合會がその「昭和三年中ノ紡績業」において揚言する通りである。（織布部門に於ける作業率の躍進については第四表を參照せよ）

かくて他の産業部門におけるが如く、生産能率の增進、生産高の增加、従業勞働者の絶對數の減少これがまた我が紡績業に於ける技術的合理化の歸結であつた、そしてまた合理化の矛盾の端初でもあるであらう。

戰後十年間における本邦紡績業の發展、特に大正十五年以降における目醒しい經營の合理化は、たまたま印度輸入綿布關税引上げを機緣とし、本邦紡績資本をしてランカシヤー資本に對し宣戰を布告せしめた。それはたとへ關税引上げがなくとも早晩起るべき必然であつた。世界市場における市場獲得の白兵戰、それは洵に合理化過程の內藏する矛盾發展の免れがたき一歸結である。

附記　本篇の後半は經濟學全集第十八册「産業合理化」の一部として執筆したものであるが、改造記者の勸説により、ここに多少の訂正を加へて發表することにした。

藝術主義の理論

西脇順三郎

（一）

文學に於ける藝術とは如何なるものであるかといふ問題に近づく爲には、勿論文學とは如何なるものであるか及び藝術とは如何なるものであるかといふ二つの大問題が横はつてゐるから、是等の可成り渺漠たる二つの野原を横切らなければならない。故に此處では、文學的藝術の問題へ正當に近づくことさへも出來ない。けれども、こんな考へ方は單に表面的な合理的思考の世界に極めて簡單に起る判斷の態度に過ぎない。こんな態度を出來る丈け避けて考へたいと思ふ。

藝術といふイデオロギイは與へられた思想（思考の體系といふ意味にて）から出來てゐるから、藝術といふ言葉の意味する世界は、その構成思想によつて定まる。時代にもその論者にもによつて相違する。ヘーゲルの藝術觀念はロマン主義的思想から出來てゐるし、ボオドレエルは彼の思想から藝術といふ意味を與へてゐる。世の藝術學者乃至哲學者は、藝術の普遍乃至不變的性質を求めてゐるから、藝術の觀念は人によつて異るといふ説には反對するであらう。けれども、藝術の絶對的觀念があるといふ考へ方は、藝術の觀念を構成する絶對的な思想があるといふ考へ方に結局等しくなる。特に藝術の爲めにのみ存在する絶對的思想があるとは、私見としては、考へられない。兎に角、「藝術」といふ言葉を使用する場合は、「犬」といふ言葉を使用する場合よりも、その意味の價値は不明である。けれども、さうかといつて、藝術といふ言葉を用ひないことも不便であるから、使つてゐる。

藝術其自身と藝術の觀念とは全く異る世界に屬する。これは餘りに明かなことであるが屢々混同される。藝術學を知らなくとも、藝術品を作ることが出來る。藝術學をして藝術を作らせることは、丁度、その邊に居る大工に七絃琴を造らせて失敗する結果を生むことになると同じことであらう。勿論藝術學の學としての價値は存在する。即ち學としては成立する。學として成立すれば、藝術學は大半の目的を達してゐる。學者が出來るが藝術者は必ずしも出來ない。藝術は植物に屬するならば、藝術學者は植物學者に當る。偉大な植物學者でも自らキャ

ペッになることも出來なければ、キャベツの生命を造ることも出來ない。藝術は人間の生物乃至植物としての生命の世界に屬するが、「學」は多くの場合觀念としての人間の世界に屬するのみである。この生命といふ言葉を用ひた意味は、表面上の生活を意味するのでなく、生活の根本となつて流動してゐる生命力をいふ意味とする。生活といふことに關聯して十九世紀から殊に盛りになつた社會學乃至社會思想乃至ミリユウの觀念を藝術の觀念の中に入れて來た。文學評論の批判の根柢を社會學的にすることは一時流行したが今日の多くは心理的批判となつた。バルコンにカーネイションの花が戰慄する場合其の社會價値を文學の中に求めたこともあつた。物理現象も心理現象もすべて社會價値に見積ることは非常に詩的である。けれども社會價値は觀念の世界に屬するのであつて、社會學は學として成立するが、藝術それ自身ではなくなる。要するに藝術を說明するためには、觀念形態とか原則理論とかによらずに成すべきものであると思ふが、その仕事は極めて困難なものであらう。藝術に關する觀念をつくることは可能であるが、藝術それ自體は直感による以外に方法がない。その直感は如何にして表現し得るか。また藝術といふ方法による暗示乃至象徵による記述によらなければならない。然しこんなことは此處で行ふのではない。單に藝術に關する自分自身の思考としての思想を述べるに過ぎない。また、藝術の觀念を少し批評するに過ぎない。決して自分は藝術を最大な人間の生命を賦與するものとも考へない。或る宗教的な詩人が、風景の記述に、餘り美しい景色のために、神を忘れさうになつたと心配するところがあるが、自分などは床屋の中でも藝術といふことを忘れる。また汎神論者ならばジヤガタライモの畑を見ても神を想ふのが正常であるが、自分は恐らく杏子の花咲く森の前でも勿論藝術を忘れるだらう。ラ・ジオコンドを見た時などは別に藝術といふ意識の特別な心理的な世界から、その藝術に接したとは思はれなかつた。藝術を拜む人達の間には、藝術の觀念に、感情を加へて非常に感傷的になる例がある。

　藝術のための藝術といふことは結局は美のための藝術になる。美も亦美學があつて學として考へやうとする。これも亦美學を知らなくとも美を感ずることが出來る。美的經驗は他の經驗よりも優れてゐるといふ價値說は何を價値の標準としてゐるか。リチアヅ氏の言によれば「私的な天國」を美の專門家に與へてゐるにすぎない。「汝の眞珠の涙はほとばしり、薔薇と百合の間に落ち……」などと詩を書いてゐる時の經驗と、顏を洗つてゐる時の經驗との差は樣式の差であつて心理的活動として質的價値は異らない。藝術とか美とかを他の人間の行爲よりは優れた價値があると考へるのは、觀念價値であつて、また、思考の傳統的習慣にすぎない。文學批判の態度は自然科學的乃至心理學乃至生物學的であることを主張する。優劣を決定する價値批判は觀念價値にすぎない。文學や藝術の哲學的乃至社會學的批判は觀念批評であつて優劣批判に結局終る。猿は人間よりも劣つてゐるとか、單葉植

物は複雜よりも優れてゐるとか、などの批判は自然科學の目的ではない。要するに藝術と稱するものを觀念價値とせずに、心理價値として考へたい。

藝術のための藝術を主張する文學家は多くは藝術が他の價値よりも、優れた價値をもつてゐると考へるからである。この場合の藝術の爲の藝術派は、私見としては、不贊成である。藝術といふ經驗は、他の經驗と質に於ては同等の價値しかもつてゐるものに過ぎない。藝術の理論家は藝術的乃至美的經驗といふことを特別な心理的經驗として考へてゐる。これは、近頃の心理的批判によつて反對されつつある。

以上は藝術的經驗價値は他の一段經驗價値中如何なる位置にあるかを考へた。次に藝術といふ經驗は他の經驗と如何なる樣式の差別が出來るかと云ふ問題になる。この問題は種々の方面から考へられる。けれども經驗の發生の樣式に關することは第一に考へ得る。即ち藝術作品によつて創造された經驗は然らざるものと區別が出來る。換言すれば藝術作品といふ手段によつてのみ構成された經驗。

藝術は一つの方法であるといふ考へ方に反對する人達は、藝術作品の効果と、その効果を與へるために用ひられた方法とを混同するからである。今日通俗に認められてゐる藝術理論としては、藝術は何を表現してゐても構はないが、其の表現が美でなければならないといふことがある。先づ美とは如何なることであるかといふ問題になる。けれどもこの問題は美の理論家に讓る。次に表現といふことは少くとも文學に於ては如何なることであるか。この問題も藝術學の理論としても、また近來の象徴論乃至意味論に關係が深いから、此處で考へる能力がないが、しかし表現が美しいといふことは、どういふ意味か、多くの理論家は說明をしてゐない。表現の方法が美しいとする場合か、表現されたものが美しいのか、また、表現することが美しいといふのか不明である。藝術作品それ自體が藝術の直接な對象であつて、藝術は何んでも對象にしても構はないといふことは考へられない。藝術は藝術作品を作る方法であるから、表現するといふ意味は、作るといふことに他ならない。美しく作るといふことは、美しい作品を作るといふ結果に過ぎない。けれども藝術主義の困難とする點は、美しいものとは何んであるか、または、美しいものゝ經驗は人間の生命の流動せる世界に至上な價値があることを證明出來ないことである。また、具體的には、藝術主義には、感覺と感情に特に中心を置く一つのロマン主義時代からの傳統的な弊害がある。

(二)

文學作品は思考(パンセ)の世界を作ることである。しかもこの世界は特種の世界であつて即ちポエジイの世界である。ポエジイと稱する名稱はヘーゲルなどの分類によると文學に於ける藝術といふことに當る。ポエジイの思考の世界は其の構成の精神機能をファンダジアに中心を置く。

哲學は人間の生命力としての活動を說明する仕事であるが、ポエジイは其の生命の光りを刺戟する仕事であると思ふ。この方法には種々あることは歷史によつて知ることが出來るが、自分が今日のところ好む方法は、二つの相反する力を接觸せしめて、其の間に電光の如き光りを得ることである。この方法は、いま一つの說明を可能とする。即ち其の二つの相反する力の一方を他の一方にて修正乃至破壞することである。人間の生命意識は、例へば、現實の物體の世界にのみ深く住む場合は、その生命のエラン・ヴイタルは睡眠するか死するものである。また反對に非現實的世界にのみ住む場合も亦同樣に生命力が死んで行く。

この種の作品構成の方法には、その作品中に非現實の世界のみを呈供する場合と、現實と非現實を同時に混入せしめて置く場合とがある。また、單に現實と非現實との聯結でなくとも、相反する對象なれば、同樣な效果を生ずることになる。例へば神と惡魔でも、天國と地獄とを聯結するなど。

相反するものの聯結の理論は、最もロマン主義の藝術論として完全なヘーゲルの說でもある。即ち個別性と普遍性との調和するもの、換言すれば、その相反するものが一物となつて存在する場合である。

また、クロオチエ氏の言の如く、偉大な作品にはロマン主義と古典主義が混入してゐるといふ說も同樣な理論から來た說明である。

次に此の主義の理論を說明するために、一つの認識上の現象を用ひることも出來る。或る一つの對象を知るために、その對象と相反して對立する對象を呈示することである。非現實の世界を呈示することに依つて、現實性の世界を深く知らしめることである。事實、善人といふことを知るには、先づ惡人を知つて、それと反對なことを知れば、直接善人といふことを知らうとするよりは、印象も深く、尙、簡單な場合がある。モリエルの喜劇の目的も同樣な方法であらう。

今日のシュルレアリスムの文學は現實によらないとか不合理であるから惡いとか非難されてゐるが、一方からみると、その非難する人達の考へとは根本的に創作の理論が異るものである。勿論、自らシュルレアリストと稱してゐる詩人（佛蘭西に於てさへも）中には、單に非現實の爲に非現實を好む者があるが、それは全く誤つてゐると思ふ。

またシュルレアリストの中には、夢とか、或は潛在意識を重んずる人達もあるが、それも、それだけでは生命の光を生むことが出來ない。ハツクスリイ氏が非難してゐる點は、惡いシュルレアリストの側をのみ考へてゐるらしい。

次に、相反する力を同一の作品中に入れて作ることは、また他の說明も可能となる。人間の生命的活動の世界を暗示するとも考へらる。即ち人間は二元的に活動する不合理の世界に事實ゐる。いつも二つの相反する點の間を動いてゐる。この事實は、單に人間は呪はれた矛盾の動物といふのみでない、生命力の調節作用とも、病理學的には、衞生法とも考へらる。例へば、合理性のみを追つては、破滅せざるを得

ない。また、反對に感情や感覺のみを追つても非常に憂鬱となつて遂に亡ぶ。

次に、極めて不明瞭な思考の世界を作品として呈供することも、同一な創作理論である。生命の力が、いつも明瞭な概念の世界とか數學的に正確な世界にのみ働く場合、ポエジイとして不明瞭な世界を求める現象がある。

また、此の種の作品には、相反する力の內在する理由から、一つの律動を感じ得る一つの有機體ともなる。運動の要素として二つの相反す力があるからである。藝術の作品には、も早や、外面的な物象とか日常生活の事件などの繪畫的寫實を必要とするのでなく、內面的な力のみを呈供することになる。作者が如何に手足を動かしても、怒鳴る言葉を入れても其れは表面上の効果を出すに過ぎなく終ることがある。作品それ自身が有機體となつて律動してゐなければ効果がない。

次に、創作理論として、自分の好む樣式は、作品に表はれてゐる思考の世界が、その概念の聯結が不明瞭なものである。換言すれば意味が確然とならないものをいふ。この種の作品は傳達作用が極めて惡いことは勿論である。故にトルストイやリチアヅ氏などの反對するところである。また、この種の作品は當然の結果として非論理的である。けれども作品に表はれてゐる世界が、それが爲めに、流動する印象を與へる。次に、また何等の觀念を作らない。また概念的にならない。ただ單に、精神活動が、それ自身として不定限に流れて動いてゐる。要するに、此の不明瞭なポエジイも結局は、明瞭な世界に對立して初めて藝術上の効果を出すことは勿論であるから、單に不明瞭な世界の價値のみの爲めに成立してゐない。

以上は簡單に、二つの相反する作用を作品の創作理論とするものを考へたのに過ぎない。一方から考へると、この理論は、一種の藝術上のデアレクテクである。尤もこの理論は、昔から考へられてゐるポエジイの理論で殊に、ヘーゲル等のロマン主義的な思想の一つではあるが、美の構成の一つの理論ともなつてゐる。又、この說は所謂、聯想上最も遠い二つの對象を聯結するといふ理論とも同樣なものである。

シュルレアリストの中で、現實を認めないといふ者があるが、それは誤りである。現實をのみ認める者と等しく、矢張り誤りであると思ふ。シュルレアリスムは現實と非現實との對立に於て初めて成立するものであるから、現實のみを認めることも、非現實のみを認めることも、シュルレアリスムの藝術理論を構成することにならない。超現實の世界のみでは、直ちにシュルレアリスムの効果でもなく、一般ポエジイでもない。しかし、それが現實（通常の現實の意味――ヘーゲルの意味）に對立して初めて詩的となるものである。以上の如き說明に於て、シュルレアリスムを認めるものであるから、若し、さうでなく別の理論とすれば、私は認めない。超現實だけに目的をもつものとすれば何等の價値がないと思ふ。ブルトン氏などの說明は、不明瞭なところがあるが大體一致するやうに思はれる。シュルレアリスムは根本

理論としては新しいものでない。昔からのポエジイの理論にその根本作用は一致すべきである。

超現實といふものが成立する爲めには「通常の現實」があるからである。實際上、對立の上で成立するに過ぎない。超現實はそれ自身獨立して存在をするとは考へられない。また、此の名稱はボオドレエルのシユルナチユラリスムといふことに關聯して確か、アポリネエルとゴオル氏だつたか（ゴオル氏の出してゐたシユルレアリスム第一號にあつたと思ふ）忘れたが、相談して造つた言葉であつた。ボオドレエルは自然といふことを嫌つて、それに對立して人工的であることを主張した。人間化した考へから前者を女に比較し、後者をダンデイに比較して、後者を賞め女をくさした。彼の自然といふことはヘーゲルなどの「通常の現實」に當るものであつた。

要するに藝術は「通常の現實」に對立して存在してゐるといつてよい。けれども今日の藝術が普及して、遂に「通常の現實」になつたときは、其の藝術に對立して、新しい藝術が興つて來る。けれども、その現象は內容こそ異れ、矢張り、同一の理論を有する藝術活動である。藝術の樣式內容などは將來變化するに相違ないが、藝術活動は恐らく永く續くと思ふ。ところが、その藝術活動自身が「通常の現實」となつた場合、例へば其に對立する藝術が出來た場合は、その新しい藝術は以前のものと同一の組織に立つてゐる藝術でなくなる。けれども同一の創作理論に立つた藝術である。結局、二つの相反する藝術組織を對立させて構成された一つの「藝術の藝術」とでも稱すべき藝術活動があることになる。故に此の種の創作理論に立つ藝術活動は多くの藝術組織の發達を促すものであることを知る。

二つの相反する乃至異る力を對立させて構成する創作理論は藝術活動の理論の說明であるのみならず、クロオデル大使の所謂宇宙構成の理論ともなる。また、時間の認識ともなり、また所謂エラン・ヴイタルの說明にも關係があると思ふ。死んで行く現實の中に造られる現實の理論である。生きるために死んで行くデイオニソスの祭禮の理論でもある。

二元的創作理論は藝術活動、美の構成、創造的進化、等の理論として、今のところ自分の信じ得る說であると思ふ。

次に、一元的藝術の創作理論とは如何なるものであるか考へ得るか。私見としては、外面的の現象を、その外面的形態に於て、單に模倣する術のことであると思ふ。これは精神價値を重んずるヘーゲルが既に否定したところである。また、歷史的にみても、一元的な活動は生命力を失つてゐる。合理主義はそれ自身破壞的な批判に終る。また不合理主義も同樣な運命をもつてゐる。

藝術作品の內容は二元的創作理論に立つた精神活動である。藝術的知覺をすることとは、此の內面的精神活動の組織が、物象に流れ込むことに過ぎないと思ふ。文學の場合物象とは思考の世界である。換言すれば此の思考の發生する根源は其の精神活動である。更に換言すれ

ば、二元的精神活動の內面的組織から思考が流れ出て、それが作品の體を形成するものであると思ふ。

「作品の形式」といふことを考へ得るとすれば、何をいふべきか。それは作品の內容としての精神活動の組織の形式を意味するものであると思ふ。作品の體を形成する思考の世界の形態の形式を意味すべきでない。その理由は、作品の體の形式は內容たる精神活動の組織を少しも表はしてゐない。丁度、噴水から溢れ出た水が、その噴水の形がどんなものであるか示すことが出來ないのみならず、噴水から出たかコップから出たか、其れ自身示すことが出來ない。いま自分が「永遠……寶石……夕暮……」と書いたと假定する。その場合其れ丈けでは、讀者は、自分がなせさう思考したか、何物かを暗示するのか、其等の物を嫌ふといふのか、好むといふのか、其の實際の意味を知ることが困難である。其等の言葉の概念を知ることが出來ても、其等の概念の使用價値としての意味が明らかでない。即ち其等の概念それ自身は、自分の精神活動の何物をも直接に示してゐない。

次に、「永遠は寶石の如き夕暮である」と云つた場合も「永遠」に關する自分の論理的判斷を示すのか、何物かを暗示せんとするのか、又は、皮肉でさういつたのか、不明である事は、其の判斷の形式が直接には作者の精神活動の組織を示すものでないからである。

藝術活動であるか否かを決定するものは、表出されてゐる思考の世界それ自體でない。その思考の世界が流れ出る源泉であるところの作者の藝術的精神活動の組織の上に、その思考の世界が有機的に構成されてゐるか否かで、その思考の世界が藝術的作品であるか否かに決定される。例へば、二元的藝術理論の上に立つ作品の場合は、その作品としての思考の世界が、二元的に對立された二つの相反する乃至異る對象の一つを呈供するか、また兩者を混入融合して、呈供すれば、その思考の世界は初めて藝術活動となる。簡單に云へば、與へられた思考の世界が藝術創作組織を構成してゐるとき、初めて、その思考の世界が藝術作品となる。作者からみれば、その組織を作るやうな思考の世界を作るのである。即ち二元的藝術活動を發生せしむるやうに、思考の世界を組織立てることである。

次に、文學上の藝術派では「形式」とか「形態」といふ觀念を用ひる場合があるが、それは造形藝術論の推論的な模倣に過ぎない。藝術は作者の精神活動の組織である。若し藝術の形式といふ觀念を許すとすれば、それは精神活動の組織の形式をいふべきであると思ふ。いま、コップの中に水を入れてみる水の形を定めるものはコップの形である「形式が內容を決定する」といふ論を考へてみる。先づ形式と內容といふことは何んで決定するか。次に、若し水を內容として、コップを形式とすれば、どうなるか。「形式の形」が「內容の形」を決定するが、併し內容そのものを決定してゐない。ただ「內容の形」だけを決定するに過ぎない。若しコップを內容として水を形式とすれば、『內容の形』が『形式の形』を決定することになる。こんな考へ方は魔術のやうなもので面白いけれども、よくわからない。結局文學の作品を造形藝術の理論で推論することは困難である。文學の作品は、コップの中に水を入れた場合でなく、寧ろ、コップから流れ出た水のやうなものでないかと思ふ。

沒落への轉向期に立つ日本資本主義（二）

猪俣津南雄

二、生産は如何に發展したか？

(1) 一應の要約

吾々はこゝで一應、前段に說いたところを要約しておかねばならぬ——

戰後金輸出禁止中における日本資本主義の發展の根抵にあつてその諸特質を決定したものは、戰時市場の急激・著大なる收縮と共に現實化したところの特殊の深大矛盾であり、その不可避的な展開であつたことを吾々は見た。言ふ迄もなく、此の深大矛盾は、世界戰爭を楔機として沒落期に入り込める世界資本主義の、その一環としての日本資本主義に生じたものである。

ひとしく深大でも、なかんづく基本的な矛盾は、戰時において恐しく發展した生産力と、戰後急激に收縮したる市場との間の矛盾である。戰時における滅茶苦茶な蓄積によつて異常な膨脹を遂げた日本資本の巨大なる一部分は、此の矛盾の不可避的な爆發であつた大正九年恐慌の當時に、既に、利得能力を喪失して「過剩資本」と化了した。しかるにまた、戰時において極めて急激に、そしてそれだけ一層無政府的に行はれたところの、資本の金融資本化の過程は、豫想される利得の資本化を意味する擬制資本の驚くべき膨脹と結びついてゐた。しかも此の尨大な「紙上の富」の基礎の上に、銀行信用一般の膨脹および時に尨大な固定貸附がつくり出されてゐた。資本主義經濟の全建築の土臺をなすところの生産資本の巨大なる一部分がにはかに利得能力を喪失して過剩資本と化したとすれば、その利得の豫想に基づいて膨脹したる擬制資本や信用の上部構造もまた、破局者的な急收縮を餘儀なくされる。

資本主義は、大衆の消費力を增大せしめることによつて生産力對市場の均衡の破れを回復することは出來ぬ。從つて、かの深大矛盾のう

ちに捉へられたブルヂョアーとしては、たゞ過剩資本を切捨て、「資本の整理」をやる外はなかつた。大正九年の恐慌は、資本主義的發展の本來の法則に從つて、當の矛盾を暴力的に解決すべく、即ち過剩生産物と過剩資本との破壞を強行すべく、未曾有の狂暴さをもつて襲つて來たのだが、無準備の金融資本ブルジョアジーは、その異常なカタストロフの前に戰慄し、また尨大な固定貸附を失ふことに恐れをなし、有らゆる阻止的手段をもつて恐慌の發展を喰ひとめた。

しかしながら、恐慌を喰ひ止めたことは、即ち、過剩資本を持越すことに外ならなかつた。としてそれこそ、異常に增大したままの生産設備と、甚しく收縮した市場との間の深大矛盾——即ち恐慌の實體そのもの——を持越すことを意味したのである。更にまた、此の基本的な矛盾と共に、利得能力を喪失した資本——過剩資本——と、利得の豫想に基づいて膨脹したまゝの擬制資本との間の深大矛盾、並びに此の擬制資本の基礎の上に膨脹したままの信用（特に固定貸附）との間の深大矛盾——即ち金融恐慌の實體そのもの——を持越すことを意味したのである。

が、ブルヂョアジーはブルヂョアジーらしく、たゞに九年恐慌の發展を喰ひ止めんとしたのみでなく、それによつて不可避的に持越されたる深大矛盾の、恐慌への再爆發をも抑止せんと企てた。否な、深大矛盾それ自體をさへ解消せしめんと試みた！　いかにしてか？

彼等は、正貨の激減を防ぐために（一）金輸出禁止を繼續した。（二）利得能力を失つた資本を直接的に「救濟」した。（三）更に一般的・間接的な方法としては、外國資本の競爭に對抗し得るやうに輸出奬勵金を與へ、關税を引上げ、「國産愛用」を奬勵した。（四）また、人工的な市場を與へるために、財政の膨脹をも厭はずに大規模の土木・鐵道を起工した、等、等。

が、もちろん、かゝる恐慌克服の企ては、資本家同士の激烈なる鬪爭を通じてのみなされねばならなかつた。從つて強大資本は、必然的に、（五）集中化・獨占化・統制化の運動と鬪爭とをリードせずにはゐなかつた。また、（六）彼等はイチ早く自己企業の「合理化」を遂行した。更にまた、言ふ迄もなく、支配的ブルジョアジーは、（七）「恐慌克服」（！）を目指す之等すべての方策の遂行に要する一切の費用と負擔と犧牲とを、直接にか間接にか悉く勞働者・農民・小市民大衆に強ひんとした。そして此の企ての最も尖鋭な現はれこそが、「資本攻勢」であつたのである。

が、かくの如きブルヂョア的努力と手段と方法とは、その本質上必然的に却つて既成の諸矛盾を擴大再生産し、ヨリ大なる強度と規模の爆發へと導かずにはゐなかつたのである。

金輸出禁止のために生じた爲替相場の下落と、利得能力なき資本を救濟し保護するための諸方策によるインフレーションとは、物價の下落を阻止し、假空の景氣をつくり出した。そしてその病的な諸刺戟の下に、資本は增投され、生産規模は擴張され、「整理」せらるべき多數

の資本家企業もまた負債に負債を積み重ねて餘命を長らへた。かくして、過剰資本への過剰資本の累加が行はれ、合理化による勞働能率の增進も加はつて、生產能力はます〳〵高まり、生產は增加したのであつた。

　生產設備は增大し、從つて生產も增加しつゝあつたが、しかしその間に大衆の消費力と購買力は却つておとろへていつた。資本攻勢は、勞働者階級が好景氣時代に辛うじて戰ひとつたものを悉く奪ひ去り、實質賃銀と勞働條件とを再び半植民地的水準に引下げた。强大資本による金融の統制や企業の集中化や合理化が進めば進むほど、中小資本家の倒產が生じ、小生產者達は大量的に沒落し、勞働者の失業は增大した。高められた關稅や、獨占價格や、インフレーション物價や、圓價下落による諸負擔は、大衆の背に加重されてきた。

　國內市場の涸渇化にかてゝ加へて、海外市場の困難が增大した。更にまた金輸出禁止の政策そのものが惹起すところの貿易上の障碍と國內取引の萎縮化とが加はつてきた。

　かやうにして、生產設備及び生產と、市場との間の均衡はます〳〵破れ、基本的な矛盾はいよ〳〵激化し、生產過剰が著しくなるにつれ、インフレーション的な諸刺戟は遂に物價を釣りあげる力を失つてきた。そこで、大正十四年から十五年にかけて、物價は、爲替相場の回復と相俟つて、決定的な下落傾向をとり始めた。從つて、事業會社の利益率もまたかなりに低下し始めた。しかるに一方、過剰資本に累加される過剰資本の基礎の上に膨脹傾向を續け來たれる擬制資本と信用とは、まさに基本的な深大矛盾が爆發點に近づいてきた恰度その時に、「證券景氣」の名の下に病的な大膨脹をやつてのけた！　インフレーション政策が演じた最後の曲藝!!

　一方には基本的矛盾の激化による生產資本の利得能力の激減、他方には、その利得の豫想の上に成立する擬制資本と信用の大膨脹。此の深大矛盾の爆發こそが、あの金融恐慌であつたのだ。金融恐慌は、ブルヂョアジーによる恐慌克服の一切の努力の强制的淸算であり、同時にインフレーション政策の暴力的埋葬であつた。資本主義の無政府性は美事に勝利した。

　これよりさき、集中化・獨占化・統制化の運動をリードしたコンツェルン型の巨大金融資本は、その掌中にある一切の勢力を動員し、一切の經濟上及び經濟外の壓迫と妨害と誘惑とにより、インフレーション政策の下に着々として自己の支配權を產業及び金融の上に押し擴げつゝ、自己の繩張りだけは恐慌の衝擊にも堪へ得るほどに固めてゐた。そしてインフレーション政策そのものゝ必然的な行詰りと破綻とが近づくにつれ、此の政策を利用されるだけ利用しつくした彼等は、今はたゞ自己の制覇の遂行を妨げるのみとなつたところのそれを放擲して、デフレーション政策への轉換を策してゐたのであつた。が、しかし、まさにその轉換の過程において、彼等は狂暴な金融恐慌の衝擊をうけ、恐慌の發展を喰ひ止めんがために又もやインフレーション的

方策に走らずにはゐられなかつた。

恐慌對策としての「特融」のからくりは、大銀行への急激な預金集中と、「變態性金融緩漫」とをつくり出した。そこに發生した全然新らしき矛盾―預金の激增と同時に起これる貸出の減少――は、彼等による（一）有價證券投資――所謂手持證券――の激增と、（二）金利の低下と、（三）銀行利益率の減少とを惹起した。しかるにまた、同じ「特融」のからくりは、――弱小銀行及び中小商工業者に對する關係においては、――一方には貸附資本の過剩、他方には貸附資本に對する飢餓といふ、甚しき矛盾をも新らたにつくり出したのである。

廣汎な中小工業者層は、恐慌後の市場の萎縮に加へて、極度の金融難に突き落されたから、彼等の大量的沒落は恐しいテンポで進行し始めた。勞働者の賃銀切下げは一層甚しく、失業は激增し、工場勞働者總數の絕對的減少さへが始まつた。かくして、大衆の消費力・購買力は今や格段におとろへてきた。

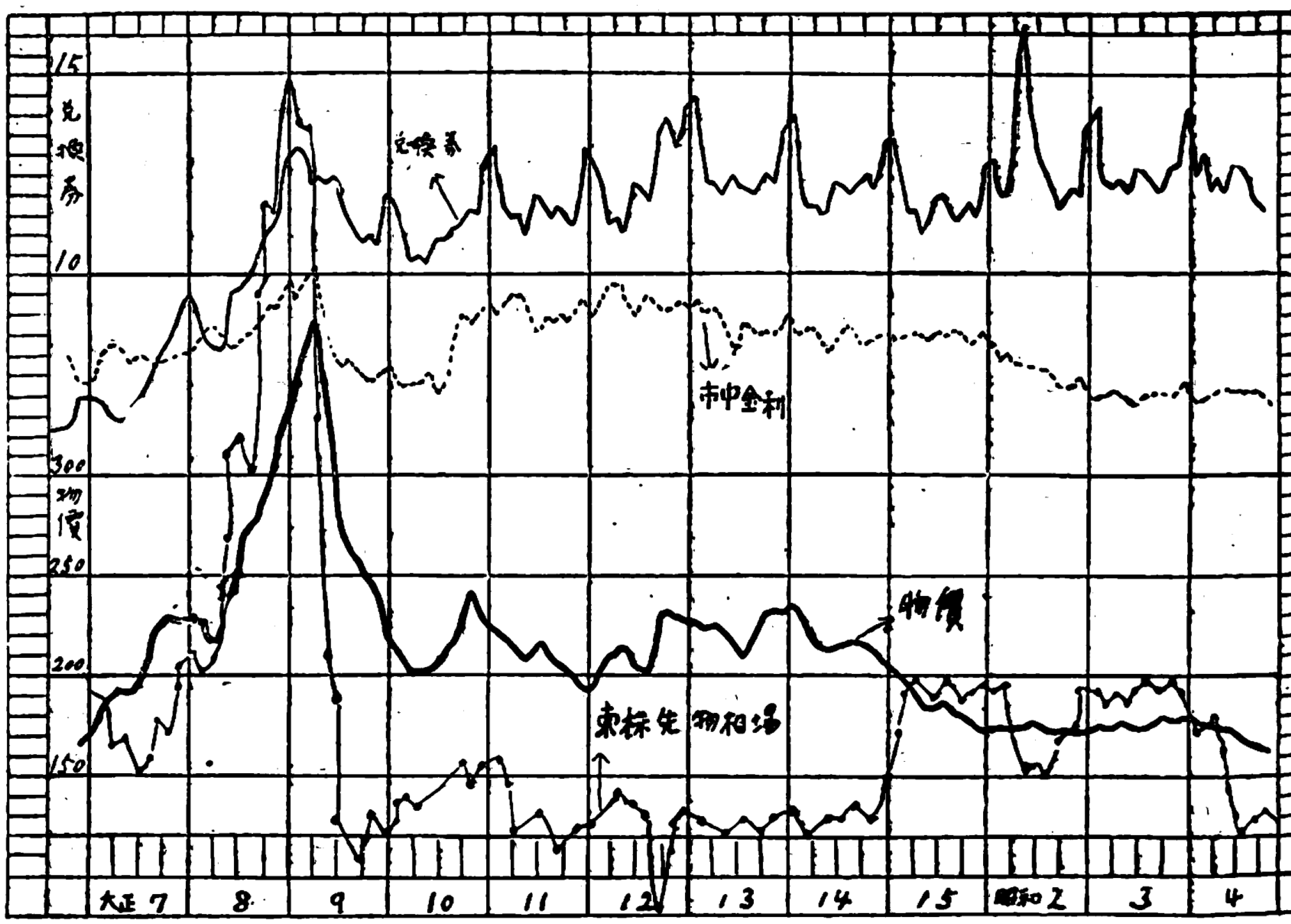
しかるに、大衆の消費力・購買力のおとろへの大なるにも拘らず、生產設備・生產力はむしろ却つて增大した。「特融」による救濟は、比較的大なる諸企業における過剩資本を生き長らへさせたのに加へて、特融インフレーションと「金融景氣」は、商品市場外の要因でありながら、「事業界」をも刺戟し、昭和三年・四年の事業計畫資本を大正十年以來の最高額にまで高めた。またもや、過剩資本の上に過剩資本が累加された。恐慌直後にも拘らず、生產過剩の繼續と漸增！金融恐慌と、そのブルヂョア的對策とは、新しき矛盾をつくり出したのみでなく、その作用を通じて更に古き矛盾をも擴大再生產した。

が、かゝる事態は、必然的に事業會社利益率の激減をひき起さずにはゐなかつた。この激減は、――恐慌後金利の負擔は稍ゝ緩和され、また物價の激落はなかつたにも拘らず、――消費力・購買力のおとろへによる市場の收縮が著大であつたから生じたものに外ならぬ。

生產資本の利得能力の喪失はます〳〵甚しくなつてきた。しかるに、これに對する――信用の膨脹といふ矛盾は恐慌によつて幾分か緩和されたとはいへ、――利得の豫想に基づくところの擬制資本の膨脹といふ矛盾の方は、特融インフレーションのために、更に深大化されたのであつた。基本的な深大矛盾の增大と共に、派生的な矛盾もまた尖銳化した。

物價は、爲替の再低落にも拘らず、大勢的な落調を改めなかつた。支配的金融資本でさへも、もはや他の資本の利潤を犧牲にして自己の利益率を保持することは出來なくなつた。爲替相場は再び甚しく變動をした。うち續く入超に、國際貸借の改善は全く絕望的となつた。正貨の減少は危險點にまで達した。しかも國際信用の低下は、外資の輸入を不可能ならしめた。かくして遂にインフンショーン政策の破綻は完結し、デフレーション政策への轉換と、金解禁とは、今や全く命令的となつたのである。

グラフ（一）



備考—、このグラフは、昭和四年十二月一日の「エコノミスト」及び昭和五年二月八日の「東洋經濟新報」を參考にして作成した。（一）兌換券は各月平均發行高、（二）金利は東京コール無條件、（三）物價は日銀調査東京卸賣指數。

(2) 景氣の發展

以上において吾々は、日本資本主義の、戰後金輸出禁止中の發展を、主としてその質の方面から論定した。吾々は進んで、それを更に量的方面から觀察するであらう。觀察の焦點は、當然に、生産の上におかれねばならぬ。が、生産の發展は、景氣の發展と密接な關係がある。從つて先づ、景氣の發展を一瞥するであらう。

グラフ（一）は、通貨膨脹の趨向、金利の高低、物價の運動、及び株價の動きを示す。

戰後金輸出禁止中の發展は、絶えず恐慌に爆發せんとする深大矛盾を胎んでの發展であつたから、此の期間における「景氣」を左右した主要な要因は、通貨及び金利でなければならなかつた。

通貨に關しては、金輸出禁止による多額の正貨の國内保有と、他のインフレーショニスト的諸政策——いづれも恐慌克服（1）のためのもの——によつて、大正十年の春以來昭和三年まで、大體において膨脹傾向を續けたことがはつきりと看取される。

九年恐慌前後に生じた著しき金利低落は、インフレーション的諸要素と共に、十年下期から十一年初にかけて金融景氣をつくり出したが、此の「景氣」と共に金利は再び昂騰し、通貨の膨脹にも拘らず、戰時の最景氣時代の高位を保持して大正十二年に及んだ。大正十三年からは相當に低落したが、尚は大正七年の水準を下らなかつた。此の

「變態的」な高金利こそは、インフレーション時代における銀行資本の高利潤の特殊の源泉だつたのだ。大正十年から十四年にかけての金利

第九表

會社・銀行の利益率		
年次	全國工業會社	全國銀行
大正八年	―	割 2.50
〃 九年	割 2.09	2.44
〃 十年	1.57	2.18
〃 十一年	1.86	2.05
〃 十二年	1.90	2.01
〃 十三年	1.70	1.98
〃 十四年	1.52	1.78
〃 十五年	1.21	1.97
昭和二年	1.22	1.18
〃 三年	1.25	1.67

下落は僅かであつたけれども、しかも十五年の證券景氣をつくり出すのに十分だつた。が、金融恐慌後の「變態性」金融緩漫は、金利をも遂に決定的な低落に向はしめた。

物價の運動は、インフレーション時代にはひどく生産から遊離し、主として通貨及び爲替によつて左右された。大正十年の物價の反騰は、金融景氣を反映し、(十二年下期の騰貴は震災によるのだが)、十三年から金融恐慌までの動きは、爲替相場――(そのカーヴはグラフ面の複雜化を恐れて現はさなかつたけれども)――の一上一下を殆ど復寫的に反映した。が、遂には大衆消費力のおとろへによる生産過剩が物價の方向を決定し、特に金融恐慌後は、インフレーションや爲替逆調にも拘らず、大勢的な落調に轉じてゐる。

第十表

物價指數		
年次	大正三年基準	大正八年基準
大正三年七月	(基準) 100.0	40.7
〃 八年	247.8	(基準) 100.0
〃 九年	272.8	110.0
〃 十年	210.8	85.0
〃 十一年	206.0	83.1
〃 十二年	209.5	84.5
〃 十三年	217.3	87.6
〃 十四年	212.2	85.6
〃 十五年	188.2	75.9
昭和二年	178.6	72.0
〃 三年	179.8	72.5
〃 四年	174.8	70.5

年々の手形交換高を示した第十一表は、日本資本主義の發展に關す

第十一表

手形交換高 (單位千圓)		
年次	實數	指數
大正三年	10,269,770	(13)
〃 八年	77,203,769	(基準) 100
〃 九年	74,330,792	96
〃 十年	68,513,198	88
〃 十一年	72,014,814	93
〃 十二年	68,341,282	88
〃 十三年	74,259,041	96
〃 十四年	83,662,285	108
〃 十五年	88,935,508	115
昭和二年	62,436,060	80
〃 三年	68,411,259	88
〃 四年	58,020,781	75

る種々なる「變態性」を示してゐる。（一）生産と同樣、當然に增加すべき筈の手形交換高が、殆んど增加を示さない。（二）十四年——十五年の增加は「證券景氣」を反映する。（三）昭和四年の交換高は、金融恐慌の年度よりも却つて減少してゐる。等、等。

通貨と金利とが景氣を左右したことの當然の結果として、景氣の變動は、物價のカアヴではなく、株價のそれに最もよく表現されてゐる。大正十年——十一年の金融景氣、十五年の證券景氣、昭和三年の金融景氣。後の二つの場合を見よ。株價の騰貴は全く物價運動から獨立した騰貴であつた。物價の運動はすでに、通貨や爲替によるよりはむしろ物質的生産そのものによつて左右されるに至つたのだから。

そこで、次の結論は不可避的であり、また極めて重要である——

かやうに、此の八・九年間の景氣の動きが生産の運動から遊離してゐたといふことは、此の發展の一期間には本來の意味における景氣の循環は全く無かつたといふことに外ならぬ。そこには、資本主義の生氣ある律動的な發展のあとは全く見られない。たゞ、ヒステリックな昂奮や狂燥と、反動的な滅入りや、內攻的な沈鬱や、致命的な危機や、加はる衰弱——さうしたものの埒もない一連續があるのみである。また、その筈ではないか。それはたゞ運命的に持越された深大な諸矛盾が——それを克服せんと焦燥するブルヂョアジーの一切の努力にも拘らず——執拗に自己を擴大し尖銳化してゆくところの、陰慘な一過程に過ぎなかつたのだから。

では、かうした事態のうちに生じた生産の發展は、如何なるものであつたらうか？　これは基本的な問題である。

(3)　生産の發展

戰後金輸出禁止中における生産の發展の一特徵は、發展の不均衡の甚しさである。

各種の生産物を、消費資料と生産資料とに分類し、消費資料の代表的なものとして、綿織物、紙、陶磁器、砂糖、醬油、酒、茶、罐詰、帽子、疊表、瓦の十一種をとるならば、その生産の平均指數は第十二表の如くである。（大正八年を基準としたのは、同年の生産を戰時の最高と見、戰後の生産が戰時最高を拔いたかどうか、またどれだけ拔いたかを明瞭ならしめんがためである）。

これによれば、消費資料の生産指數は、大正九年に七%を減じ、その後やゝ增加して十一年には戰時の最高水準に接近したが、十四年以後は却つて減少を示してゐる。もつとも、前記十一品のうち八品までは生産物數量の數字が得難いために生産物價格をとつてあるから、大正十五年以後の價格下落を考慮に入れなくてはならぬ。が、これらの生活必需品の價格下落は比較的少なかつたから、それを考慮に入れても尙ほ、大正十年以來の消費資料の生産の增加が停滯的であつたといふことは否まれぬ。

更に、日本農業の主要生産物であり、日本人の主要食料品であると

ころの、米、及び麥三種の生産の平均指數を見るも、生産の増加はやはり停滯的であつた。(米麥にあつては、生産物數量の數字がとつてある。)

第十二表

消費資料十一品の生産平均指數	
大正八年	100
大正九年	93
大正十年	94
大正十一年	98
大正十二年	92
大正十三年	98
大正十四年	97
大正十五年	97
昭和二年	89

これらの食料品にあつては、外國または植民地(朝鮮・臺灣)から

第十三表

米及麥三種の生産の平均指數	
大正三年	91
大正八年	100
大正九年	86
大正十年	90
大正十一年	95
大正十二年	85
大正十三年	87
大正十四年	96
大正十五年	91
昭和二年	95
昭和三年	94
昭和四年	91

の輸入品が國内生産を補つてゐるが、前揭の生活必需品の多くのものにあつてはそれがない。かく、生活必需品の生産増加は停滯的であつたのに、同じ期間における人口は第十四表の如く増加してゐたのだ。

第十四表

内地人口		
年次	實數	指數
大正三年	54,142,441	(94)
〃 八年	57,233,906	100
〃 九年	57,918,671	101
〃 十年	58,697,136	102
〃 十一年	59,460,252	103
〃 十二年	60,257,931	105
〃 十三年	61,081,954	106
〃 十四年	62,044,649	108
〃 十五年	63,006,595	110
昭和二年	63,862,538	111

大正八年の一〇〇から、昭和二年に一一一に増大したところの人口増加を考慮に入れよ。生活必需品の生産増加の停滯といふ事實は、大衆の消費力・購買力のおとろへをいかに如實に示してゐることか。

第十五表は、前記消費資料の個別的生産指數を示す。

しからば、代表的な生産資料たる工業品六種——銑鐵、鋼材、洋灰、工業藥品、綿絲、生糸——の生産はどうか。その平均指數は、消費資料の場合との驚くべき對立において、甚しき増加を示す。(工業藥

品の外はみな生產物數量をとつてある)。

第十五表

消費資料の生產(指數)

年次	綿織物	紙	陶磁器	砂糖	醬油	酒	茶	罐詰	帽子	疊表	瓦	平均	年次	米	麥	平均
大正三年	14	22	24	90	—	74	44	—	—	—	23	41	大正三年	93	89	91
八年	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	八年	100	100	100
九年	67	102	97	84	98	119	102	103	85	76	86	93	九年	103	69	86
十年	64	83	83	110	116	87	88	98	84	103	116	94	十年	90	90	90
十一年	62	81	93	90	105	112	102	126	89	98	118	98	十一年	100	90	95
十二年	67	78	100	85	116	113	107	60	70	98	120	92	十二年	91	78	85
十三年	72	76	105	117	124	111	101	65	81	98	124	98	十三年	94	80	87
十四年	74	83	120	100	125	106	109	56	90	90	114	97	十四年	98	94	96
十五年	71	91	114	108	149	106	99	72	92	73	92	97	十五年	91	91	91
昭和二年	70	89	115	111	124	99	93	52	71	74	81	89	昭和二年	102	87	95
三年	75	—	118	—	—	94	97	—	76	79	81	89	三年	99	88	94
四年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	四年	95	87	91

此の一見すばらしい生產增加は、しかし、種々なる意味において「病的な肥大」に過ぎなかつた。

洋灰の生產增加は最も飛躍的であるが、これは、社會の「富」の一大破壞——震災——の結果に過ぎなかつた。洋灰に次いで著大なる鐵生產の增加は、關稅の防壁と、多大の補助金と、「國產愛用」と、鐵道の濫設と、極めて高價な帝國主義的政策による支那の鐵資源の壟斷とによつて、かち得られた。かゝる高度の保護と獨占との下に、鐵工業は合理化を遂行し、大正九年には鋼材國內消費高の三割三分をしか生產し得なかつたのを、昭和四年には七割五分を生產し得るに至つたのであつた。(「國產愛用」主義の重要な一意義は、高い品物を買はせたことにある)。更に綿絲と生糸の關する限りでは、その生產增加は言ふまでもなく主として輸出增加に基づくのだが、——生糸にあつては特に米國の「繁榮」に基づくのだが——、しかしこれら及び鐵・鋼材・洋灰の如き生產資料の生產に見られる格段の增大は、內外市場の眞の受容能力に適應したものでなかつたことは明らかである。

最も容易に生產過剩に陷りやすい之等の產業諸部門の生產は、明らかに多大の過剩生產を含んでゐた。そのことは、大正十五年以來の產業資本利潤率の低落によつて明らかなのだが、しかもその過剩生產たるや、「常態」的な發展の好景氣末に生ずる過剩部分よりは遙かに大なるものであつた。從つて、沒落の世界資本主義の一時的相對的安定が崩れて恐慌期が展開されるや否や、また自國のインフレーション政策

第十六表

生產資料六品の生產平均指數	
大正三年	61
大正八年	100
大正九年	95
大正十年	96
大正十一年	108
大正十二年	122
大正十三年	128
大正十四年	145
大正十五年	171
昭和二年	186

の破綻が完結して金解禁を餘儀なくせしめるや否や、これらの生產資料の生產は、俄然たる大收縮に陷る筈のものである。事實において、金解禁後の今は、洋灰は五割の、鋼材及び紡績は三割の生產制限をやつて尚且つ市價維持に苦しんでをり、カルテルらしいカルテルを持たない生糸は、「補償法の出動」にも拘らず、混亂に混亂を重ねてゐる。

かやうな過剩生產は、インフレーション的な諸刺戟の下に、眞の市場の狹隘な限界を無視して遂行されたところの生產設備擴大の結果であり、合理化による生產能率增大の結果である。生產は甚しく消費力を超過して增加したが、生產能力の增加は更に生產の增加よりも甚しかつた。この關係においては、發電力の驚くべき增大を想起すれば足る。發電力の指數は、大正八年の一〇〇から昭和三年の二五九に飛躍した（第十七表）。そしてそれはまた不可避的に電力そのものゝ過剩を來たさせずにはゐなかつた。

更に、事業計畫資本は、恐慌の大正九年においても五十一億圓に達し、十年に至るも尚ほ二十億圓以上を保ち、その後は勢ひ減少して、大正十三年には十億に落ちたが、十四年には再び增加し、十五年には十七億弱、昭和二年は十五億半、三年は十五億弱に達してゐる。（第十八表）

客觀的な市場の制限を無視した生產能力の增加が如何に甚しかつたといふことは、比較的僅かな生產增加がある每に各產業は生產制限を餘儀なくされ、生產制限にも拘らず市價の維持は次第に困難となり、利益率は漸減し、やがて激減したことによつて明らかである。

鐵生產を刺戟してその著しき增加を可能ならしめた一要因は、鐵道及び船舶の大建造である。鐵道哩數の增加は第十九表の如くであつ

第十七表

發電力（單位キロワット）		
年次	實數	指數
大正三年	1,106,058	(50)
〃 八年	2,182,651	100（基準）
〃 九年	2,567,783	117
〃 十年	2,769,737	126
〃 十一年	3,058,609	140
〃 十二年	3,112,001	142
〃 十三年	3,509,798	160
〃 十四年	4,242,604	194
〃 十五年	4,853,663	222
昭和二年	5,384,290	246
〃 三年	5,662,206	259

第十八表

事業計畫資本(單位千圓)	
年次	實數
大正二,三年平均	315,585
大正八年	4,068,475
大正九年	5,113,629
大正十年	2,236,195
〃 十一年	1,491,700
〃 十二年	1,482,244
〃 十三年	1,003,790
十四年	1,330,259
十五年	1,678,168
昭和二年	1,558,479
〃 三年	1,488,015
〃 四年	1,002,044

て、此の不況時代八年間の增加は、實に、戰時の好況期を含む先行八年間の增加と殆ど同一のテンポをもつて行はれた。かくて、鐵道哩數は、四二%增加したが、同期間における鐵道貨物噸數は二八%しか增加しなかつた(第二十表)。鐵道の增加が、商品生產の增加と權衡を失して大なるものであつたことは明らかである、かゝる鐵道の「濫設」が人爲的な景氣維持策に基づいてゐただけそれだけ、また鐵道の增加率が大なりしだけそれだけ、金解禁後の鐵道收益の減退は著大でなければならず、今後の建設は甚だしく緩漫でなければならぬ。

船舶の總噸數は、戰後の海運界の急收縮と自後の甚だしき不振とにも拘らず、かなりのテンポをもつて增加した(第二十一表)。このことの金解禁後における意義は、鐵道の場合と同様である。

商品生產の全體としての發展については間もなく述べるが、交通機關の發展はそれとの權衡を失する急テンポのものであつた。鐵道や船

第十九表

全國鐵道哩數(單位哩)		
年次	實數	指數
明治四四年	5,606	(68)
大正八年	8,208	100(基準)
〃 九年	8,475	103
〃 十年	8,882	108
〃 十一年	9,362	113
〃 十二年	10,009	121
〃 十三年	10,414	126
〃 十四年	10,884	132
〃 十五年	11,345	138
昭和二年	11,723	142

第二十表

鐵道貨物噸數(單位噸)		
年次	實數	指數
大正三年	35,272,875	(58)
〃 八年	59,979,833	100(基準)
〃 九年	56,623,871	94
〃 十年	57,394,029	95
〃 十一年	64,070,573	106
〃 十二年	64,782 436	108
〃 十三年	70,057,345	116
〃 十四年	71,939 246	119
〃 十五年	73,602,765	122
昭和二年	77,383,650	128
〃 三年	78,506,849	130
〃 四年	73,979 457	123

舶もさうだが、自動車の如きは全く飛躍的な增加率である(第二十

二表)。

次に、均しく生産資料の範疇に屬するにしても、石炭、石油、銅の如き我國の主要鑛産物はどうかといふに、これらにあつては、上記の

第二十一表

汽船噸數(單位千噸)		
年次	實數	指數
大正三年	1,578	(62)
〃 八年	2,841	100 (基準)
〃 九年	3,012	106
〃 十年	3,168	111
〃 十一年	3,255	114
〃 十二年	3,323	116
〃 十三年	3,521	123
〃 十四年	3,497	123
〃 十五年	3,608	126
昭和二年	3,671	129
昭和三年	3,754	132

第二十二表

自動車(乘用、貨物用非一單位台)	
年次	實數
大正三年(末)	10,66
〃 八年	7,051
〃 九年	9.999
〃 十年	12,117
〃 十一年	14,866
〃 十二年	21,765
〃 十三年	27,237
〃 十四年	32,027
〃 十五年	40,070
昭和二年	51.862
〃 三年(六月末)	55,734
四年(〃)	73.325

工業生産物とは反對に、生産の増加は停滯的である(第二十三表)。石油の如きは絶對的な減少をさへ來たした。銅は、輸入禁止的な高率關税の保護により、石炭は撫順炭の輸入制限によつて、國内市場を維持しつゝ、いづれも合理化を遂行したにも拘らず、微弱な生産増加をかち得たに過ぎない。高度の保護と獨占とは、たゞ全産業の基本的原料を高價ならしめたのみである。

かくて、(一)消費資料の生産と、生産資料の生産との間の發展の不均衡、(二)工業生産物の生産と、鑛産物の生産との間の發展の不均衡、(三)工業生産物の生産と、農産物の生産との間の發展の不均衡、(四)交通機關の發展と商品生産全體の發展との間の不均衡は、戰後金輸出禁止中の發展の一大特徴をなしてゐる。

では、代表的諸生産物の全體としての發展はどうか? 前掲第十五表の消費資料十五種の指數、及び第二十三表の生産資料八種(銑鐵と重複をさけるために鋼材を除く)の指數の總平均を第二十四表に示す。

先づ、戰時景氣の反動として生産が最も減退した大正九年を基準とすれば、六年後の大正十五年の生産は一八%の増加を示した。此の期間の年平均増加率は三%である。金融恐慌年度の生産の増加率は減じて二%であつた。そこで、昭和三年及び四年の増加率はやはり三%づゝであつたと假定すれば、昭和四年の指數は一二六見當であらう。

更に戰時景氣の頂點たる大正八年を基準とすれば、生産は大正九年

第二十三表

生産資料の生産(指數)

年次	銑鐵	鋼材	洋灰	工業藥品	綿絲	生絲	平均	平均(洋灰ヲ除ク)	年次	石炭	石油	銅	平均
大正三年	53	51	54	—	86	59	61	62	大正三年	71	117	89	92
八年	100	100	100	100	100	100	100	100	八年	100	100	100	100
九年	88	97	118	80	94	91	95	90	九年	95	99	86	93
十年	80	101	139	67	94	98	96	88	十年	83	99	70	84
十一年	93	119	163	58	116	100	108	97	十一年	88	91	69	83
十二年	100	148	196	68	113	106	122	107	十二年	92	89	75	82
十三年	98	164	193	86	107	119	128	115	十三年	96	89	89	85
十四年	115	199	219	80	126	130	145	130	十四年	100	83	84	89
十五年	135	240	281	91	135	144	171	149	十五年	100	76	85	87
昭和二年	150	253	315	113	131	155	186	160	昭和二年	107	73	84	88
三年	183	308	340	—	127	166	—	—	三年	108	82	86	
四年	—	—	—	—	145	—	—	—	四年	102	—	96	

に八%を減じ、大正十三年に至つてほゞ戰時最高にまで回復したが、大正十五年の生産は戰時最高に比して僅か九%を增したにすぎぬ。昭和三年及び四年の生産を前同樣に推定すれば、四年の指數は一一六見當となり、戰時の最高を越ゆること一六%である。

いづれより見るも、戰後の日本資本主義の發展は、その基本的要素たる生産の關する限り、甚しく緩漫であつた。かゝる發展のテンポは、それ自身すでに、嚴密な意味における上向的發展のテンポといふよりはむしろ停滯的發展のテンポに近いといはねばならぬ。しかも問題はそれに盡きるのではない。周知の如く、「解禁」恐慌は今や生産の激減を惹起しつゝある。インフレーション政策の不可避的な破綻の故に餘儀なくされた金解禁によつて生ずる生産の減退が、例へば三〇%以上に及ぶとせよ、――現に吾々は主要諸産業のカルテルがすでに三〇%乃至五〇%の減産をやつてゐることを知つてゐる――、しからば即ち「解禁」恐慌期の生産は、九年恐慌期の生産の低落の底より深く落ち込むであらう。さうしたドン底から發足する資本主義日本の生産は、その後果して如何なるテンポで發展をつゞけるであらうか?これこそ、「興味ある問題」でなければならぬ。

この點の究明に向つて進む前に、貿易の發展に一瞥を與へておかう。

貿易の發展は、所詮、生産の發展とかけ離れた道を步むことは出來ぬ。が、大正九年恐慌期における生産の減退は一〇%であつたのに、

第二十四表

年次	大正八年基準	大正九年基準
大正三年	63	68
大正八年	100	109
大正九年	92	100
大正十年	92	100
大正十一年	97	105
大正十二年	96	104
大正十三年	100	109
大正十四年	105	114
大正十五年	100	118
昭和二年	110	120
昭和三年(推定)	113	123
昭和四年(推定)	116	126

貿易の減退は三三%に及んだ。(但し、この減退は大正十年に起つてゐる)。その後の貿易は、生產と同樣、大正十三年に至つてほゞ戰時の最高水準をとり戻し、十四年には戰時最高を拔くこと一四%に達したが、これは震災直後の輸入の激增に負ふこと大である。從つて大正十五年以後は再び戰時最高以下に下り、昭和四年に至つてやうやく戰時最高を超ゆること二%の增加を示した。この大正十五年以後の貿易の減退は、一面においては明らかに世界資本主義の一時的相對的安定が崩れ始めたことを反映する。

三、「解禁」恐慌とその深度

(3) 「解禁」恐慌の特異性と異常性

大正九年以來持ち越されて、絶えず恐慌へと爆發せんとしつゝあつた深大矛盾は、それを抑止し克服せんとするブルヂョア的手段・方法の本質の故に、却つてます〳〵擴大再生產されてきたことを吾々は見た。かゝる諸矛盾の不可避的な爆發として金融恐慌が荒れ狂つてからは、矛盾の或る者は一應はやゝ緩和されたけれども、恐慌の發展を阻止せんとするブルジョア的方策――「特融」等――は又もや新しき矛盾をつくり出し、その作用を通じて古き諸矛盾もまた激化したことを吾々は見た。基本的な矛盾――生產力對市場の矛盾――は、尙ほ一層の深大化を來たし、派生的な矛盾――生產資本の利得能力喪失と擬制資本の膨脹との間の矛盾――はます〳〵尖銳化したことを見た。

恐慌に爆發せんとする深大矛盾がそこにあつて、たゞ金輸出禁止=インフレーション政策によつて爆發が喰ひ止められてゐたのだとすれば、かの昭和二年にはデフレーション政策への意識的轉換の企てが導火線となつて金融恐慌の爆發を見たのと同じやうに、今やインフレーション政策の破綻の完結の故に餘儀なくされた金解禁を楔機として、爆發すべきものが爆發せんとするのは當然すぎる當然でなければならぬ。

「解禁」恐慌はいま吾々の眼前に展開しつゝある。――物價の激落、市場の混亂と萎縮、擬制資本や信用の急激な大收縮、破產者の續出、生產の激減、失業者群の激增。

これらの諸現象の同時的乃至は繼起的な發生は、生產力對市場の深

大矛盾が恐慌によつて解消せられんとする際にのみ必然的に吾々の前に現はれる。むろん「解禁」恐慌は、かつて周期的好景氣の後に來るのを常としたやうな古典的な恐慌ではあり得ない。が、世界資本主義の沒落期における恐慌は、好景氣の後にのみ來るのではない。金融恐慌の直前にも好景氣らしい好景氣はなかつた。世界大戰後の戰敗國においては、好景氣どころか、戰禍によつて生産力は激減したにも拘らず、大衆の消費力・購買力は更に甚だしく激減し、それによつて生産力對市場の矛盾は深大化したために、「飢餓」恐慌を見たではないか。恐慌へと爆發すべき實體――基本的矛盾の深大化――がある限り、その現實の爆發は不可避的である。

從つて、現在の恐慌の原因を、金解禁に歸するのは誤つてゐる。恐慌の實體基本的な深大矛盾――さへ存在しなかつたならば、金解禁の結果は例へば一二の國の場合のやうに「平穩」であつたかも知れぬ。金輸出禁止は、恐慌への奔流を喰ひ止めてゐた堰であつた。奔流の力に壓倒されんとしたブルヂョアジーは、若干の「準備」を頼みとして今やその堰を取り去つたのだ。それだけのことである。その金解禁のやり方が「拙劣」であつたとしても、そのことはたゞ恐慌を激化せしめる拍車としての作用をなすに過ぎない。從つてまた、金解禁が「意識的」になされたといふことや、金解禁後の諸現象が多かれ少なかれ豫期されてゐたといふことは、毫もそれの恐慌現象たる本質を變ずるものでない。戰爭の慘禍が革命を惹き起すまでに深刻化したために戰爭が「意識的」に打切られ、「平和」の到來による戰時市場の急收縮のために生ずる恐慌諸現象が多かれ少なかれ豫期されてゐたといふことが、毫もその恐慌現象たる本質を變じないのと同樣である。

第二十五表

輸出入貿易（指數）

年次	輸出	輸入	合計	入超
				單位百萬圓
大正三年	28	27	27	4（出超）
〃 八年	100	100	100	74
〃 九年	92	101	100	387
〃 十年	59	74	67	361
〃 十一年	78	86	82	252
〃 十二年	68	91	80	534
〃 十三年	86	112	99	616
〃 十四年	109	118	114	237
〃 十五年	97	109	103	332
昭和二年	94	100	97	187
〃 三年	93	101	97	225
〃 四年	102	101	102	68

とはいへ、「解禁」恐慌は、若干の「準備」の下に「意識的」になされた金解禁を契機として發展し、從つてその發展は多かれ少なかれ豫期されてゐただけそれだけ、然らざる場合の恐慌に比して尖銳さを減ずる傾きはあらう。恐慌（クライシス）は必ずしも×××を伴ふとは限らない。が、しかしまた、一の恐慌が×××をもつて始らなかつたとしても、それが發展して一定の深度に達してから×××を持つことはあり得る。

「解禁」恐慌が尖鋭さを缺くかも知れぬといふことは、此の恐慌は深刻なものでない、といふことにはならぬ。まさにその反對である。どうしてか？

（一）此の恐慌が暴力的に解決せんとしてゐる諸矛盾は、金輸出禁止＝インフレーション政策によつて擴大再生產されたために異常に深大である。

（二）金解禁による特殊の正貨流出といふ異常な要因が加はつてゐる。

（三）歐洲諸國は、紙幣を紙屑と化した荒唐なインフレーションからデフレーションに轉換する際に、「安定化」恐慌（スタビリゼーション・クライシス）を持つたが、あの場合は、今日の日本の如く生產力增大の後をうけたものでなかつたから基本的矛盾はそれほど深大でなかつたし、且つまた世界資本主義が相對的安定の段階に入り込む際のことであつたから、あの恐慌は「安定化」恐慌であり得た。しかるに今の日本の恐慌は、同種の轉換に際して生じてはゐるが、——またインフレーションそのものはあの場合のやうな甚だしいものではなかつたが——、しかし相對的安定期における內外の生產力の甚だしき增大の後をうけて基本的矛盾は此の上もなく深大化してゐる上に、世界資本主義はもはやその相對的安定を失つて「第三期」に轉入したのだから、此の恐慌は世界恐慌との合流によつて異常に深刻化されねばならぬ。

「解禁」恐慌の過程は、これらのすべての理由により、またブルヂョア的對策も作用することにより、恐らくはなか／＼長期にわたり、且つ多くの曲折を持つであらう。そしてその營む作用は、全體として、經濟的にも社會的にも極めて××でなければならぬ。

(4)「解禁」恐慌の深度

では、「解禁」恐慌はすでにどれほどの深度に達したであらうか？

人工的につくり出されてゐた市場を、現實の消費力・購買力にまで收縮せしめ、且つ「不自然」に膨脹した生產及び生產設備をもその水準にまで切り下げんとする恐慌作用は、急速なる物價下落を通じて起こりつゝある。

「東洋經濟新報」の物價指數によれば、本年四月末の指數は、金解禁豫測の影響の現はれ始めた昨年六月末に比して一五・五％の激落を來たした。そして同じ期間における爲替相場の騰貴は一一・三九％である。卽ち物價の下落は、爲替の騰貴率をすでに遙かに凌駕した。金解金による物價下落は、爲替の騰貴率以上に出ないであらうといふブルヂョアジーの期待は、全く裏切られた。けだし、金解禁を契機としての物價下落が、生產力對市場の矛盾を暴力的に解決せんとする恐慌現象としての物價下落であることの當然の結果である。

物價に對米爲替指數を乘じた金物價を見るに、本年四月末は昨年六月末に比し四・五％の低落を見た。しかるにこの間において世界の物價は昨年の秋以來一齊に下落し、殊に昨年十一月の米國株式恐慌以後

は一層急激に下落した。本年二月末における十ヶ國平均指數は、昨年六月末に比して六・一%、の下落を示してをり、英國の本年四月末指數は昨年六月末に比し一七・二%激落し、米國のそれは、一二・四%激落してゐる。卽ちこれらの下落は、同期間におけるわが金物價の下落より遙かに大である。從つて、物價の國際的平準作用が行はれる限り、日本物價は前途尙ほ七・八%の低下を來たさねばならぬ。

　これに加ふるに、日本資本主義それ自身の恐慌過程を考慮に入れるならば、今後の物價下落は尙ほ一〇%以上に及ぶ可能性があると言はねばならぬ。現に、日銀の物價指數(第二十六表)によれば、五月中も物價下落は繼續したのみならず、下落率もまた四月より更に增大した。

第二十六表

東京卸賣物價指數 日銀調査, 明治33年10月=100	
昭和四年五　月	223.00
昭和四年六　月	221.71
昭和四年七　月	219.57
昭和四年八　月	218.45
昭和四年九　月	217.54
昭和四年十　月	216.21
昭和四年十一月	211.09
昭和四年十二月	204.96
昭和五年一　月	201.40
昭和五年二　月	199.80
昭和五年三　月	195.90
昭和五年四　月	192.80
昭和五年五　月	189.40

物價の關する限り、「解禁」恐慌はすでにかなりの深度に達してゐるに拘らず、ドン底まではまだ大なる距離があると言はねばならぬ。しかも物價こそ、此の恐慌過程における決定的な要因なのだ。

　商品市場の混亂は、周知の如く、生糸及び肥料において最も激しく現はれた。株式取引所はしば〳〵立會の停止や延期をやつた。

　主要諸產業のカルテルは、いづれも高率の生產制限を餘儀なくされた。石炭は一割、生糸・絹紡は二割、鋼材・過燐酸肥料・麻糸は三割、洋紙は三割五分、さらし粉は四割、洋灰は五割三分八厘、等、等。砂糖もまた大量の棚上げをやつてゐる。

　生糸の市價は、暴落に暴落を重ねて來たが、六月四日の新聞は、『八十圓臺割の危機刻々迫る』と書き、有力製絲業者も糸價は尙ほ低落の觀測であると報じてゐる。昨年六月から本年五月末に至る一年間の橫濱神戸兩市場における生糸總賣行高は、前年度に比して二二%を減じた。強固なカルテルを持ち得ない此の產業部門においては、當然に起るべき生產の激減はたゞ小製糸業者の大量的沒落によつてのみ實現されるであらう。

　紡績は、最近に至つて二割の操短を更に三割に擴張した。然るに綿糸價は皮肉にも操短擴張決定の直後に急落した。新聞によれば、綿糸は『底拔的暴落に全く恐慌狀態』を呈しつゝある。また『原價採算は次第に惡化の度を强め……この際自由操短まで行くに非らざれば現下の苦況は到底打開し得まいとされてゐる』。こゝにその徵候が見られるやうに、恐慌はカルテルをさへ破壞せんとする勢力を示してゐるの

だ。

第二十七表

綿糸の原價割れ

銘柄	原價	市價	比較不利
八〇手	五二四円	四九〇円	三四円
六〇手	三九〇	三五五	三五
四二手	二六〇	二四二	一八
三二手	二二〇	一九七	二三

四月中の綿織物の生產は三月より更に減退し、前年同期に比すれば二八%を減少した。大阪泉南織物業組合は最近五〇%の減產を決定した。他の諸地方の組合も續々これに倣ふであらう。紡績會社製の綿布もまた著しき減產傾向を示しつゝある。

石炭は、一割の送炭制限にも拘らず、二百五十萬噸の貯炭を持つてゐる。これは前年同期に比して二〇%の增大であり、大正十四年以來の最高記錄である。

鋼材のストックは、三割の生產制限に拘らず、五萬噸に達して、三割の限產を五割に擴張すべき必要に迫られてゐる。電氣銅の滯貨は、前年同期の三倍餘に上つてゐる。

かつて、銅、鋼材、洋灰は、ストック處分のためにダンピングをやり始めた、——銅は歐州へ、鋼材は支那へ、洋灰は南洋へ！ 尙ほ、「東洋經濟新報」の調査によれば、本年一月から二月乃至三月に至る間の主要商品の消費高（乃至は供給高）の、前年同期に比する減少の率は第二十八表の如くである。

第二十八表

	減少率
石炭消費高（一月——三月累計）	19%
鋼材供給高（一月——二月累計）	12%
銑鐵輸入高（一月——三月累計）	37%
銅消費高（一月——二月累計）	22%
洋灰消費高（一月——三月累計）	21%
米材横濱入荷高（一月——三月累計）	82%

鐵道の收入は激減した。四月一日から五月廿日に至る五十日間の國有鐵道の收入は、前年同期よりも五百五十餘萬圓を減じ、一日當りの減收十一萬圓であるが、この減少額の過半は貨物噸數約百萬噸の減少に基づいてゐる。鐵道貨物噸數の減少は一月から三月までは微弱で、四月に至つて始めてやゝ鋭く現はれたのだから、當然に起るべき減少の起るのはこれからでなければならぬ。從つて、『本年度中の減收總額は或は三千萬圓を突破するかも知れぬ』といふ豫想は、むしろ過小に失してゐる。

更に貿易を見るに、一月から五月上旬までの輸出入總額は、前年同期に比し四億三千五百萬圓——二五%を減少した。物價の下落率を差引き、數量における減少のみを推定するも、優に一〇%に達する。し

かも、四月および五月（中旬下旬を含む）の減少率は一層甚だしく、それぞれ三三%および三四%となつた。特に五月は、例年の出超期に近づいたにも拘らず、却つて入超の增大を見た。なかにも「輸出の大宗」たる生糸の輸出減少率は、一月――二二%、二月――三三%、三月――三七%、四月――四五%、五月――四四%と加速度的にひどくなり、一月――五月の減少額累計は、三億七千萬圓の巨額に達した。

以上の如き諸事實を綜合して考察するならば、生絲の觀點より見ても、「解禁」恐慌はすでにかなりの深度に達してゐるに拘らずドン底までは尙ほ大なる距離があるといふ結論は強まるのみである。と同時に、「解禁」恐慌は、特に著しき生產過剩に陷れる生產諸部門の生產を否應なしに半減せしめ、他の諸部門の生產をも二〇%乃至三〇%の減少を來たさしめねば止まぬであらう――減少のテンポは別としても――といふ結論は不可避的である。果して然らば、「解禁」恐慌期（昭和五年乃至は六年）の生產全體は、正に大正九年恐慌期の水準以下に陷沒する。

此點と直接に關聯して、事業新設增資計畫資本の鋭どい減少は最も注目に價ひするであらう。第二十九表は、一月――四月の計畫資本總額が前年同期に比して六〇%(!)を減じ、なかんづく製造工業における減少が最も甚しいことを示す。

第二十九表

銀行會社計畫資本調

（日銀調――單位千圓）

年次		運輸業	製造工業	其他	合計
一月――四月累計	昭和四年	四八、二七〇	一〇八、二六五	二七一、八九五	四二八、四三〇
	昭和五年	一四、五三〇	三四、三三〇	一二一、六八〇	一七〇、五四〇

では、失業者は？

内務省社會局が昨年九月から始めた失業調査統計は、全人口の僅か一割を對象とし、その調査方法も甚だ粗雜な推定な手加減によるもので全く信をおくに足らないが、それでも二月の全國失業者數を三十五萬人と報告した。そしてその增加は十月に三萬人、十一月に一萬人、十二月に一萬五千人、一月から二月に三萬五千人であるといふ。この調査は、失業者數の過小評價をもつて著名であるが、しかもその加速度的な增大を陰蔽することが出來ない。

更に、社會局の工場及び鑛山勞働者移動調によると、五十人以上の工場の本年二月末現在の全國職工數は百十九萬人餘で、昨年六月末に比すれば十八萬三千人を減じてゐる。この期間における解雇職工數は、五十一萬三千人で、前年同期より約四萬人(八%)增加した。解雇者の增加は、製絲業(一四・〇%)、織物業(一〇・五%)、紡績業(二・八%)に著しく、その他にあつては尙ほ微弱である。鑛山勞働者の失

業乃至解雇增加は、この調査にはまだ現はれてゐない。

が、右の統計は、(一)二月以後の情況を示してゐない。しかるに、同じく五十人以上の工場に關する日銀調査の勞働者指數は、第三十表の如く、三月の減少率は二月のそれよりも大なることを示してゐるし、諸般の情況は、四月は三月よりも、五月は四月よりも更に大なることを推定せしめるに充分である。加ふるにこの調査統計は、(二)最も甚だしく失業者を出してゐる五十人以下の工場を除外してをる。更にまた、(三)工場鑛山以外の勞働者が全く除外されてゐる。しかるに、例へば地方土木建築業組合の議會に提出した調査は、同業關係の失業者だけでも東京二十一萬五千人、全國で約七十萬人に達すると報告した。

第三十表

工場勞働者指數(日銀調)

年次	勞働人員	定額賃金	實收賃金
大正十五年	100.0	100.0	100.0
昭和二年(上期)	96.7	99.9	101.7
(下期)	92.8	99.8	102.4
昭和三年(上期)	90.6	99.3	104.5
(下期)	90.0	98.8	106.1
昭和四年(上期)	91.0	98.7	105.1
(下期)	91.1	98.4	102.6
昭和五年一月	88.7	98.6	100.4
二月	87.8	9[illegible].4	101.8
三月	86.7	98.2	102.8

かくて、五月末の失業者數は優に百五十萬人を超えたと見るも決して過大ではない。しかも、失業者の洪水はまだ始まつたばかりである。『新聞の報導は、泉南泉北全工場の閉鎖、播州織物組合の休機斷行、和歌山紀陽織物の破產(之による五百の失職者は解雇手當なきため歸鄕すら不可能)等、織物業の慘狀を傳ふるのみならず、最近殊に、大阪機械工作所、大阪鐵工所、吳其他海軍工廠、藤永田造船所、川崎新田富士電機等に於ける大量的馘首、磐城炭坑の一部休坑、富士製紙の北海道二工場の閉鎖、大阪琺瑯の閉鎖等、各種の事業に亘つて打擊の漸く顯著なるを報じてをる。又、大阪方面の小工場においては工場主がその工場閉鎖に當つて解雇手當の支給が出來ぬため、職工を置き去りにして逃亡しつゝあると言ふ。卽ち、工場鑛山勞働者の解雇失業情況は、今後においてこそますます深刻化すべきものと思はるゝ。』といふ東洋經濟新報の觀測は全く正當である。最近の新聞は更に、芝浦の東京鐵骨や星製藥の大量的馘首、北洋漁夫の失業を報じた。造船業全般に亘る「職工整理」の危機も迫つて來た。續出する繫船や停船のために海員の大量的失業が始まつた。失業の巨浪は鐵道從業員をも襲ふであらう。國有鐵道は合理化によつてすでに數千人の「冗員」をつくり出してゐる。事業の新設・擴張が殆ど停頓したことは、首切られる者の大多數を赤裸々の失業者たらしめるのであらう。

が、──「解禁」恐慌の衝擊は、今迄のところ株式取引所を最も激しく震撼した。吾々は、金融恐慌後、生產資本の利得能力はますます減

少したにも拘らず、その利得の豫想に基づける擬制資本の膨脹は却つて甚だしくなつたことを見た。この矛盾の暴力的解決者たる「解禁」恐慌は、先づ擬制資本の賣買價格を容赦なく引き下げてしまつた。東洋經濟新報の株價指數表によれば、四月末の指數は、金融恐慌以來の最高なる三年六月に比して三五%下落し、十一ヶ月前の昨年六月末に比して二六%下落した。うち一四%の下落は最近の四ヶ月間に生じてゐる。が、擬制資本價格の下落は、株式總價額の減少に更に鋭く現はれてゐる。東京取引所上場株の總價額は、一月初の二十四億四千萬圓から四月初の二十二億六千萬圓に激減し、遂に總拂込資本額以下に減少した。そしてその後の一ヶ月間に、更に二億六千萬圓の激減を來たして二十億となつた。總拂込資本額より少なきこと實に三億圓である。五月初と一月初とを比較して言へば、株式總價額の「値下り」は實に四億四千萬圓——一八%——なのだ。

第三十一表

東京取引所上場株總價格(單位千圓)	
總拂込資本額(一月初)	2,302,008
一月初	2,441,659
二月初	2,530,768
三月初	2,404,192
四月初	2,265,999
五月初	2,009,521

「解禁」恐慌は、擬制資本價格を激減せしめることにより、過剩資本が施してゐた利得能力の粉飾を、否應なしに引き剝がした。「蛸配當」や「過大配當」の諸會社は、いよ／＼減配を餘儀なくされ、債權者たる銀行の要求に遂に屈服せんとしつゝある。次ぎの順番は擬制資本そのものの切捨てであり、「減資」である。金融資本の巨腕による整理と併合と統制の舞臺面は、『いよ／＼本筋に入つてきた』。若干の横着者は、「買入減資」の名の下に、株價の釣上げを企てゝ失敗し、生眞面目で道化役をつとめてゐる。

再三のガラによる取引所混亂に、「株界救濟論が擡頭」した時も、金融資本は、前年の公債下落の時とは全くあべこべに、そしらぬ顔ですましてゐた。井上藏相は、『最近株價の安定せざる根本原因は、事業會社の實體が不透明で……外間から窺知し得ざる實狀にあることで……との會社の實體を透明なるものとし投資家をして安んじて株に投資し得るやう誘導するにあらざれば、株價の安定は期し難い。故に自分は及ぶ限り事業會社の整理建直しについては努力してゐる次第である』と顧みて他を言ひながら金融資本を代辯した。政友會も、持ち出しかけた「救濟案」をうやむやにした。けだし金融資本の銀行部門は、その手持有價證券の九割三分までは公債社債である上に、手持株券や担保株券の、金解禁による値下りは——彼等はちやんと豫定してゐたから——前もつて償却しておいたのだ。また、さきに「金解禁即行の決議」やら「解禁延期の勸告」やらをやる度毎に株價を動かして儲けた彼等としては、今こそ解禁相場の賣方に廻つて大儲けする絶好機會となさねばならぬ。が、それよりも何よりも、或る程度までの株價下落こ

そ、そしてその機に乘ずる整理・併合・統制の貫徹こそ、彼等の制覇のために必須なのだ。彼等は彼等で、相互の爭覇戰の暗中飛躍に忙しい。だから彼等は、「株式に對する有力銀行の協同融資」や「有力銀行の聯盟による株式の買出動」の案などは、問題にさへしなかつたのだ。

だが、株價下落は、今や、彼等の必要とする「或る程度」以上を超えんとしつゝある。花形株中の花形とうたはれた「鐘紡」すらが、「武藤式溫情主義の沒落」と共に激落し、昭和四年中の最高二百七十五圓にも騰つたものが、本年四月中には百七十一圓に墜落した。六月始めには、又も百四十五圓にまで落ち込んだ。そして尙ほも「底拔け」の「慘落」を續けつゝある。――むろん一切の「雜株」をリードして!!

恐慌過程にあつても、物價や生產や取引が、一時的な反騰や增大や好調を呈しては又た反動期に更に落ち込んでゆくのと同じやうに、株價も決して直線的な下落を續けはしないであらう。だが、解禁恐慌は、擬制資本そのものが激減せしめられて生產資本の利得能力相應の量に近づくまでは、擬制資本價格――株價――の壓迫を續けんとするであらう。

三、沒落への轉向期

(1) デフレーションの矛盾

吾々は結論へ急がねばならぬ。(以下の諸項は、紙面の制限のため本稿ではたゞ要綱を示すことをもつて滿足しなければならぬ。)

全面的なデフレーションの進行は、諸矛盾を激化せしめつゝある。巨大銀行の一重役の告白によれば、『金解禁後の不況は意外に(!)深刻化してきた』。支配的金融資本は、金解禁の衝擊から金融機構を防衛すべく、一切の努力を集中し、有らゆる犧牲を强ひつゝあるに拘らず、矛盾はまさに金融部面に成熟しつゝある。

金解禁以來の正貨流出は、二億二千萬圓にのぼり、正貨準備は十億圓から八億七千萬圓に減少した。十五億の兌換券は二〇%ほど收縮し、五月には最低十億三千萬圓にまで下つた。

金融資本の銀行部門は、日本の正貨を引渡して海外貸入金の大部分を返濟し、自己の利子負擔を輕減することに成功したのだが、しかしそのために日銀の民間預金は一億圓餘減少し、それだけ銀行の手元を逼迫せしめた。

加ふるに、銀行預金一般の絕對的減少が始まつた。四月末の全國普通銀行の預金は、前年同期より三億圓を減じたが、うち二億圓の減少は最近の二ヶ月間に生じた。東京交換所組合銀行の預金は一月から五月中旬迄に五千萬圓の減少を來たし、五大銀行(六大都市本支店勘定)の預金は、一月末から四月末の間に七千萬圓を減じた。預金搔き集めの競爭は激烈を極めてゐる。(郵便貯金の增加率も著しく減少した)。

他方、全國普通銀行の四月末の貸出は、前年同期に比し、三億二千

萬圓を減じ、うち一億二千萬圓の減少は四月中に起つてゐる。しかし、この近時の減少は、地方の弱小銀行に生じてゐる。大都市の强大銀行は、彼等の顧客を蠶食し、彼等の犧牲において自己の貸出の若干の增加をさへ克ち得たのだ。（『不當貸出競爭の激增に惱み拔いた地方銀行』が頻々として『大銀行の横行を日銀に訴えて來る』――五月二十九日東朝）。地方銀行の××は續出した。彼等及び彼等と運命を共にする中小商工業者の沒落の慌しさは、今や金融恐慌當時に比すべくもない。（不渡手形は激增してゐるが、多くは小額手形である。）

强大銀行における貸出の增加は僅かでも、預金の減少がヨリ甚だしいために、東京交換所組合銀行の貸出の預金に對する割合は、早くも一〇五％に達した。五大銀行の貸出率も高まつて七四％になつたが、そのうちの一行のそれは一〇九％にのぼり、同行東京本支店勘定（五月二十四日）の分は實に一二四％に及んでゐる。――このことのうちに、

第三十二表　五大銀行預金（六大都市の分）

	三井	三菱	住友	第一	安田	合計
昭和四年十二月	五七六、九（百萬圓）	五八二、六	五〇一、七	四五三、六	三七五、四	二、四九〇、〇（百萬圓）
昭和五年一月	五九四、〇	五九〇、三	四九八、九	四五〇、九	三五八、三	二、四九二、四
二月	五七九、五	五八三、八	五〇二、一	四四四、八	三四六、六	二、四五六、八
三月	五六九、八	五八一、六	四九五、四	四四二、二	三四三、七	二、四三三、七
四月	五六二、一	五七六、三	四九八、六	四四二、八	三四三、四	二、四二三、二

第三十三表　五大銀行貸出（六大都市の分）

	三井	三菱	住友	第一	安田	合計
昭和四年十二月	六二八、〇（百萬圓）	二八四、六	三七八、二	三三四、八	三六四、七	一、九九〇、三（百萬圓）
昭和五年一月	四一三、八	二九〇、九	三六〇、〇	三三七、二	三[illegible]二、〇	一、七七三、九
二月	四一四、六	二八八、七	三五一、八	三三六、七	三七〇、三	一、七五二、一
三月	四一九、八	二八一、四	三五五、五	三二九、三	三七〇、〇	一、七五六、〇
四月	四一五、八	二八六、六	三六五、四	三二八、七	三七五、四	一、七八一、九

貸出や預金の獲得競爭の熾烈化とは別に、彼等の間の特殊の利害對立の尖鋭化が見られる。

金融恐慌直前の貸出率は、東京組合銀行一二四％、五大銀行八二％であつたのに對し、最近の貸出率はそれぞれ一〇五％、および七四％である。しかし、金融機構に對する×××から見れば、今の場合は僅かな高率化でもが大なる意義を持つ。何故なら、前の場合には預金が增加しつゝあつた。しかるに今の場合の貸出の高率化は、預金の減少と、貸出氷結の現實化とに基づいてゐる。

强大銀行における貸出の增加は、弱小銀行を犧牲としての增加であるばかりでなく、强大銀行それ自身の貸出の回收不能、氷結化に基づいてゐる。この氷結した貸出は疑もなく巨額にのぼる。それは擔保物――株券にしろ商品にしろ――の驚くべき値下りといふ賭場き一事からも想像に餘りある。（最大銀行の貸出增加の一部は、諸會社が起債不

可能のために餘儀なくされた借入金に基づいてゐる)。が、一般に、今の銀行の手元が、僅かな貸出増加や預金減少によつて、異常に逼迫し易いのは、金融恐慌以來、銀行資金の著大な部分が有價證券に注ぎ込まれたことによる。今や、株券は暴落し、公債の市價は辛うじて維持されてゐる。銀行は、直接の損失と、ヨリ以上の値下りとを恐れ、手持證券を處分して資金化することが出來ない。

金融恐慌後の「變態性」金融緩漫の矛盾は、貸出の減少に對して預金は却つて激増したことにあつた。「解禁」恐慌がつくり出した矛盾は、恐慌にうち克つために豐富な貨幣資本の必要が最も切實となつた恰度その時に、その最大源泉たる預金は否應なしに減少し、貸出の回收と手持證券の資金化とが不可能となつたことにある。恐慌過程における物價下落・生產激減・利潤涸渇に基づく預金減少を阻止する方法は、ブルジョアジーは持ち合せない。前の場合には預金利子を引下げて矛盾を緩和し得たが、今の場合の預金利子の引上げは、自らを死地に陷れる。

現在の如き不況期に處するブルヂョアジーの常套手段は、低金利政策である、その必要はます／＼死活的となりつゝある。英・米の中央銀行はすでに金利を引下げた。しかるに、日本ブルヂョアジーは、金利低下の要求がます／＼熾烈化してきた恰度その時に、「特融」六億の貸附に縛られた中央銀行を持ち、且つ正貨流出防止のために却つて金利を高めねばならぬといふ矛盾に陷つてゐる。

市中金利は恐慌の強制作用によつて高まつてきた。日銀は特融回收をあせり出した。貨幣資本の獨占者たる大銀行は、遊資を持つてゐる。だが、まさにその獨占の故に、彼等にとつて「合理的」な融資・放資の範圍は今や異常に狹まつてゐる。そこで彼等は、國內の諸企業に對しては整理を強要しつゝ、自らは外國に放資する！それがために、正貨は尙も流出し、爲替は正貨現送點以下にさまよつてゐる!!

金融資本家による海外放資に加ふるに、貿易は輸出減退の甚しさの故に入超を續けんとしつゝある。貿易外の受取勘定も減少しつゝある。ヨリ以上の正貨流出は、低金利政策を全く絕望的ならしめるのみでなく、正貨準備そのものゝ××××××××××。今や、金融資本相互の間の爭覇のための競爭が熾烈化して、巨大銀行間の預金獲得・貸出競爭も激烈で、しかも特殊の利害對立が深まつてゐるといふ事情は、この際の資本主義×××性の××のための有力な要因をなしてゐる。

金融資本が、金融機構防衞のために、有らゆる犧牲を他の經濟諸部面と勞役者大衆に強ひつゝある間に、金融資本支配下の重工業――石炭、鐵、造船、製紙、等――の受ける打擊はます／＼強まつてきた。金融資本の商業部門もそれに劣らない、――いかに上手な投機をやつてゐるにしても！

だが、最も重大な矛盾は、階級對立の形態において尖銳化しつゝある。**小生產者の大量的沒落、農民窮乏化と反抗、特に失業者軍の加速**

度的增大。

ブルヂョア政府は、一時的にでも事態を緩和すべき「失業對策」をすら持つてゐない。また、持つことも出來ない。税源は涸渇した。土木・鐵道の大規模の起工は、インフレーション時代の後をうけて、もはや不可能になつてゐる。國內で巨額の公債などを募らうものなら、公債は暴落する。公債市價は、國債償還や國債整理によつて辛うじて維持されてをり、しかも公債市價の維持こそが、金融機構防衞策の一大支柱なのだ。また、言ふ迄もなく、巨額の內債募集は、必然的にデフレーション放策の放棄となり、埋葬となる。

失業問題の尖銳化、正貨準備及び金融機‥×××に迫られた場合に、日本ブルヂョアジーの取り得る「對策」は二つに一つだ。金輸出の再禁止か、非常手段的外資輸入か。

金輸出の再禁止は、インフレーションへの逆戻りであり、もとの筋書を——ヨリ甚しく惡化した條件の下で——蒸し返すのだ。

では、外資輸入は？　——金融資本は先づ、——現に最近にもやつたやうに——、高利外債に應募して儲けるであらう。同時に一方、外資をば整理資金や、合理化資金に使用せしめて、自己の安全有利な融・放資のための地盤を築かうとするであらう。だが、假りに外資輸入に成功したとしても、それは一面には不可避的にインフレーションとなるのみでなく、また法外な高利の負擔を大衆の肩に加重するのみでなく、英・米金融資本への屈從による日本帝國主義の全線的退却を餘儀なくせしめるであらう。此の屈從への傾向はすでにロンドン會議にも現はれたかに見られる。だが、日本ブルヂョアジーは、さうした全線的退却を忍び得るであらうか?!

(2) 結語

今春の一論文において吾々が論證した通り、沒落の世界資本主義は、その一時的相對的安定が崩れて遂に「第三期」に轉入した。米國の取引所恐慌に始まつた世界恐慌の過程は今や進行しつゝある。生糸、綿糸、銀塊、ゴム、砂糖、小麥、金物等の國際的商品は一齊に低落を續け、どこにも滯貨の山積がある。代表的な米國株のスチールやアナコンダも低落を續けてゐる。紐育準備銀行の金利引下げは利かなかつた。この引下げにも拘らず、他の諸國は恐慌狀態もしくは恐慌懸念のために、米國資本の輸入を欲しても敢えて爲し得ないのみでなく、却つて比較的に安全有利な米國有價證券への放資を增加せしめつゝある。最近に報導された英國貿易の激減や、ランカシアの工場閉鎖や、失業者大群の投出し等は、たゞ發展しつゝある世界恐慌の比較的尖銳な現はれにすぎない。印度には革命的動亂とボイコット、支那にもまた革命的動亂、銀塊暴落、上海の倒產者續出、失業群の增大、等、等。

——日本の資本家は、海外の市況が立直りさへすれば、と言つてゐる。が、日本の「解禁」恐慌は、それ自身、或ひは輸入激減により、或ひは日本商品のダンピングによつて、世界恐慌を深刻化せしめる一

大要因をなしてゐるのである。

「解禁」恐慌に處する金融資本ブルジョアジーの意圖は、金融機構の安全を保持しつゝ、自己の利害中心の整理を徹底せしめ、合理化による資本利潤の高率化を實現せんとするにある。そして恐慌の負擔をすべて勞役者大衆に轉嫁せんとするにある。これに對して、デフレーシヨンの矛盾の展開は、彼等のうち克ち難き障碍をつくり出しつゝあることを吾々は見た。が、假りに諸々の條件の「幸運な」結びつきにより、ブルヂョアジーによる恐慌過程のコントロールが、或る程度まで成功的であり得たとして、彼等による整理と合理化とはいかなる効果を擧げるであらうか？

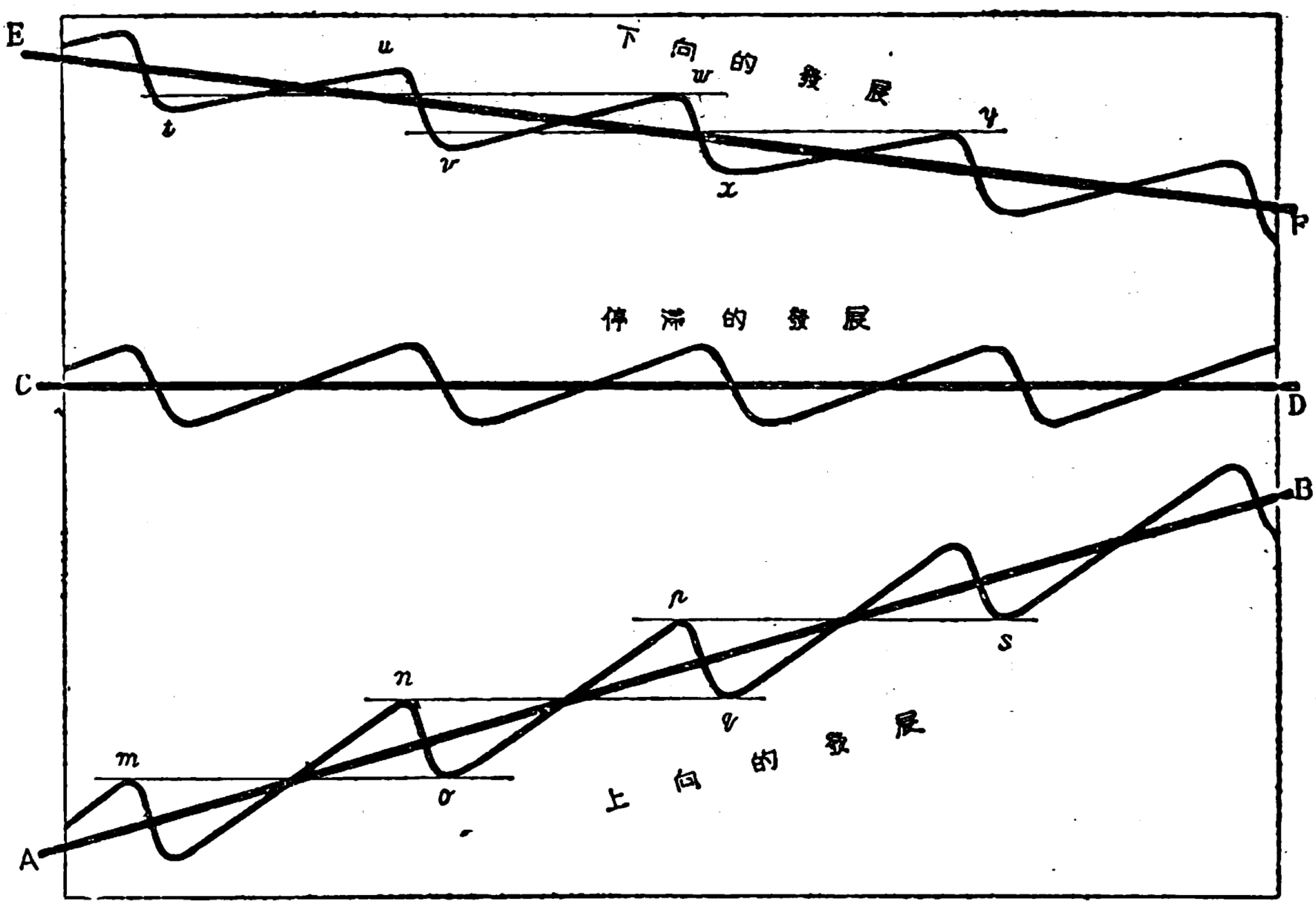
彼等による整理と合理化とは、小生產者を大量的に沒落せしめ、農民大衆の窮乏化を深め、失業者群を激增せしめることにより、また關稅の引上げ——「國產愛用」はその前提である——により、獨占價格により、帝國主義的負擔の增大により、たゞさへおとろへた大衆の消費力を更に激減せしめるのみである。彼等による整理と合理化とは、かくして國內市場をますます狹隘化せしめずにはおかないが、しかし國內市場を狹隘化せしめるほどには決して海外市場を擴大せしめ得ないであらう。何故なら、(一)日本輸出品の大半は半手工業的な生產物であり、現代的合理化を施す餘地は殆ど無く、あつても甚だ狹小である。(二)合理化を適應し得る諸產業は、合理化資金に缺乏してゐる。(三)日本資本主義は、もはや、世界の合理化運動において、決定的に立ち後れてしまつてゐる。米、獨、英、佛の諸國は、一時的相對的安定の時期において、急速に合理化を押し進め、その必然的な結果として、一方では失業者の激增と小生產者の沒落と農民の窮乏とを來たして消費力を減退せしめ、他方では生產及び生產能力の激增とその不可避的な過剩とを來たしたことが、——まさにそのことが一時的相對的安定を崩壞せしめ、世界恐慌を展開せしめてゐるのである。しかるに、日本資本主義は、これから合理化をやらうといふ!! また、やつたにしても、他の諸强國のブルヂョアジーは、ヨリよき條件の下に、ヨリ以上の合理化をやつて對抗するであらう。

世界的規模における生產能力の過剩、生產の過剩が、かくも甚しくなつたその時に、尙ほも合理化を進めることは、たゞ全般的の危機を加速度的に深めるのみである。農民の商品生產者化の過程が終了し植民地を自己の市場たらしめることが帝國主義資本にとつて不可能となつた今日における合理化は、たゞ資本主義の墓穴を深く掘り下げるのみである。

日本ブルヂョアジーが唯一のしかも最大の期待をかけてゐる產業合理化は、日本資本主義の上向的發展を可能ならしめるほどに海外市場を擴大せしめることは不可能であらう。

吾々は、若干商品の海外市場の若干の擴大や、若干の新產業——例へば人絹、自動車、電氣、等——の發達や、金融資本支配下の諸企業の利潤の若干の高率化などの可能性を否定しやうとするのではない。

グラフ（二）



問題に、資本主義全體としての發展であり、その上向的發展である。

こゝに上向的發展といふのは、生産を尺度としてのそれである。グラフ（二）は、かゝる發展の典型を示す。資本主義の上向的發展における生産は、少なくともＡＢ程度の上向線を中心としてｍｎｏｐ‥‥の如きカアヴをゑがいて増大しなければならぬ。此のカアヴの特徴は、ｏｑｓ等の恐慌期の生産水準が、前周期の好況期の生産水準たるｍｎｐ等とほゞ同位を保つてゐることにある。戰後の米國資本主義は、最近の恐慌までは明らかに上向的發展を遂げてをり、しかもそのテンポは、ＡＢ以上の急角度をゑがくほどに急速なものであつた。

前段において吾々は、最近の過去における資本主義日本の生産は、次の如きテンポをもつて發展したことを見た。

前の好況期（大正八年）	一〇〇
前の恐慌期（大正九年）	九二
最近の最高水準（昭和四年）	一一六（推定）

吾々は更に、「解禁」恐慌期の生産は、――インフレーションへの逆戻りを演じない限り――、著しき減退を來たすであらうことを論定した。

もし、一五％の減退を來たすとすれば、生産は昭和四年一一六から九九に墜落する。九九にまで落ちた生産は、今後上向的發展のテンポをもつて増加するためには、次の恐慌期までに少なくとも三〇％を増加して一二九とならねばならぬ。即ち、次の恐慌期までを七年とみれ

ば、年平均の増加率は四・三%、五年とみれば六・〇%でなければならぬ。これは、インフレーション時代（一年――十五年）における生産増加率の一倍半乃至二倍のテンポをもつて増加せねばならないことを意味する。もし「解禁」恐慌期の生産減退が二〇%に及ぶならば、それは二倍乃至三倍のテンポでなければならないことになる。かゝる發展――上向的發展は、可能であらうか？　不可能である。

吾々はすでに、ブルヂョアジーの最後の期待としての整理と合理化とは、國内市場を狹隘せしめるほどには決して海外市場を擴大せしめ得ないであらうことを見た。加ふるにまた、（一）高利地代による農業生産力の停滯と農民の極度の窮乏化、（二）小生産者の大量的沒落にも拘らず、消費の民族的特異性の故に不可避に殘存する廣汎な手工業乃至半手工業的生産者層の存在、（三）金融資本の成立にも拘らず、獨占的商業資本の強き殘存、（四）生活必需品の相對的高價、（五）基本的原料資源の缺乏、（六）重工業の弱さ、（七）主要輸出品たる日本生糸および紡績の、國際的商品としての盛期の終焉、（八）生産技術水準および勞働能率の低位、（九）帝國主義的負擔の加重と、減税の不可能、（一〇）金保有高の貧少、（一一）金融機構の弱さ、（一二）米國「繁榮」の終末、（一三）支那および印度の革命的動亂、等――これらすべての、日本資本主義の發展に對する諸障碍は、デフレーション時代に入つてますく激化してゐるのである。

日本資本主義の上向的發展はもはや不可能となつてゐる、が、しかし、吾々はまだ日本資本主義が下向的發展を開始したと論定すべき材料は與へられてゐない。下向期發展にあつては、グラフ（一）にその典型が示してある通り、好況期の生産水準たるwy等が前周期における恐慌期の生産水準たるtv等よりも極く僅かだけ上位にあるにすぎないことを特徴とする。

かくして吾々は、今後の日本資本主義は、停滯的な發展のテンポをとらねばならぬといふ結論に到達する。停滯的發展といつても、グラフ（一）に示された典型のやうに水平のCD線を中心とするカアヴではなくて、微弱な下向線もしくは上向線を中心としてカアヴをゑがく發展であることを妨げぬ。また言ふまでもなく、カアヴそれ自身は、グラフの如き規則正しき波狀をゑがく必要はなく、いかに不規則な波狀をゑがいても構はない。が、いづれにせよ、日本資本主義がすでに停滯的發展の段階に入り、上向的發展のテンポを持つことはもはや不可能だとすれば、現段階はすでに下向的發展――沒落――の段階に降りすることを意味し、沒落はすでに――抽象的な不可避性ではなく――具體的な不可避性となつて來たことを意味する。そしてその意味において日本資本主義は、沒落への轉向期に入り込んでゐるといはねばならぬ。

金融恐慌當時において吾々が、日本資本主義の發展の見透しを確立すべく、與へられた諸條件の分析を試みた際には、生産に關する諸資料が尙ほ不足し、且つ世界資本主義の相對的安定期の繼續期間に關す

る明確な見透を持ち得る時期に達してゐなかつたけれども、日本資本主義の陷つてゐた深大矛盾の諸特質を認識し得た吾々は、『日本資本主義は、現在の安定の型の性質上、最も樂天的な發展方向を假定しても、大衆の生活水準を長期に亘つて向上せしむることはあり得ない』といふ結論に到達した。が、今は早や、日本資本主義が停滯的發展の段階に入り込んだとすれば、大衆の生活水準は今後ます〳〵低下するであらうといふ結論は不可避的である。この基礎的な社會關係の地盤の上に、今後の政治と、階級鬪爭とは發展するであらう。

いふまでもなく、停滯的發展の段階から下向的發展の段階への輸入は、單なる經濟過程としては決して生じないであらう。ブルヂョアジーは、沒落の段階への轉入を阻止するために必死の努力を續けるであらう。そしてそれは必然的に、内にはプロレタリアートに對し、外には×××および××××大衆と、他の帝國主義ブルヂョアジーに對する××××の異常なる×××を通じ、致命的な××××××と××とに導かずにはゐないであらう。

（一九三〇・六・八）

兵力量決定に於ける政府及び軍部の關係

佐々木惣一

緒言

曩にロンドン會議に於て行はれた海軍縮小協定に際し、我國の全權は、政府に向て、該協定に於て我國の保有すべき海軍兵力量に付て、請訓し來つた。政府は、海軍兵力量の決定に付て、海軍軍令部の意見を參考したのであるが、兩者の意見の一致を見ることが出來なかつたので、政府は、遂に、海軍軍令部の意見に拘束せられないで、政府自身の判斷に依て、海軍兵力量の決定に關する意見を定め、之を上り、御裁可を得て、回訓した。海軍兵力量を決定する、といふのは、我國の海軍兵力量を如何にするかを定める、ことである。海軍軍令部は、決定せられた兵力量は國防上不十分である、とするの意見を維持し、加藤海軍軍令部長は、政府が前記回訓を爲した後、何事かを上奏せられた。之が當時新聞紙上傳へられた事實の摘要であつて、之に關して、問題起り、議論紛々、今猶ほやまないこと、世人の知る通りである。

世間で問題としてゐる點は、主として次の三つのことである。第一に、決定せられた海軍兵力量が我國に取て適當のものであるかどうか。第二に、右の決定が、外國殊に米國の威力に壓せられて、餘儀なくされたのではないか。第三に、政府が海軍軍令部の意見に拘束せられないで、政府自身の意見に依て、海軍兵力量の決定に付て輔弼したことは、何等かの點に於て、國法に違反してゐるのではないか。世間の議論は多岐に亘つてゐるけれども、結局、右の三點に歸着するのである。第一の點は國家政策の論であり、第二の問題は對外感情の論であり、第三の問題は法理の論である。問題を正視するが爲には、截然と、右の三點を區別せなければならない。殊に、第三の法理の論を爲

すに當ては、冷靜に判斷し、他の兩點に關する見解に束縛せられざること、最も必要である。余は本論に於て、唯法理の論を爲さうとするに過ぎない。尤も、之に就ては、余は既に別の機會に於て卑見の大要を公にしたのであるが、（五月一日乃至五日大阪毎日新聞所載）今又、改造社の懇請に逢うたので、更に稍詳しく述べて見よう。思ふに、海軍縮小協定は既に成立したのであるが、それは今後條約として批准せられねばならないし、又、其の前に樞密院に諮詢せられるであらうから、其の際にも亦必ず議論を生ずるものと察せられる。故に、此の問題は、實際問題としても、未だ解決せられざるもの、と云ふべきである。且、此の問題は法理の論としては、種々の論點に觸れるものであつて、此等の論點を明にせなければ、之を正確に判斷することを得ないのであるが、卑見に依れば、其の論點中未だ世間に明にせられざるものがある、と思はれる。故に、今、かゝる重大な實際問題の起つた場合、專門的見地より、判斷を下して置くことは、學究の任務である、と思ふのである。

重ねて問題を示して置く。兵力量の決定に付、政府及び海軍軍令部の意見が一致せない場合、政府は、海軍軍令部の意見に拘束せられないで、政府自身の意見に依て、輔弼を爲し得るものであるか。換言せば、政府は、海軍軍令部の同意を得たる所のものに依るに非ざれば、輔弼を爲し得ないものであるか。此の問題は、兵力量の決定に於て、政府及び海軍軍令部が如何なる關係に在るか、といふ問題に外ならない。之を解決するには、一應、（一）兵力量の決定に於て、政府が如何なる職責を有するか、といふこと、及び、（二）兵力量の決定に於て、海軍軍令部が如何なる職責を有するか、といふこと、の二つを分て、之を別々に引き離して考へ、而して、最後に、（三）兵力量の決定に於て、政府及び海軍軍令部が如何なる關係に在るか、を考ふべきものである。蓋し、一方に於て、政府が、兵力量の決定に於て、何等の職責をも有せず、即ち何等參與し得ないものであるならば、政府が之に付て輔弼したことは固より違法である。單にそれだけで問題は解決する。從て、政府と海軍軍令部との關係といふことは問題とならない。又、他方に於て、政府が兵力量の決定に於て、何等か職責を有すとしても、海軍軍令部が、兵力量の決定に於て、何等の職責をも有せず、即ち何等參與し得ないものであるならば、又それで問題は解決する。更に、政府と海軍軍令部との關係といふやうな、問題は起らないのである。然れば、兵力量の決定に於ける政府及び海軍軍令部の關係を知るが爲には、一應、兩者の職責を別別に考へて、而して後、兩者の關係に及ばなければならない。云ふまでもないが、茲に政府とは國務大臣全般の義である。

第一　兵力量の決定に於ける政府の職責

政府は、海軍兵力量の決定に於て、何等かの職責を有するものであるか。之を判斷するには帝國憲法に依るべきである。海軍兵力量の決定とは前にも述べた通り、國家の意志として、海軍の兵力量を如何にするかを定める、ことであつて、固より國家の作用である。此の國家の作用は、帝國憲法に依れば、天皇の大權に依て行はれるものであつて、帝國議會の參與に依て行はれるものではない。即ち、海軍兵力量を決定することは所謂帝國憲法上の大權作用に屬するのである。然らば、其の大權作用は政府の輔弼に依て行はるべきものであらうか。換言せば、海軍兵力量の決定は政府が職責として輔弼すべき國務なりや否や。之に就ては、先づ、一般に、政府の輔弼すべき國務に種類上の限界ありや否やを考へ、次に、限界ありとせば、兵力量の決定を右の限界に照して見なければならない。

一　政府の輔弼すべき國務の限界及び其の限界としての統帥作用

一　政府の輔弼すべき國務の限界の存在。帝國憲法に依れば、天皇の國務上の行爲は總て政府の輔弼に依て行はるべきものである。帝國憲法第五十五條に「國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ、其ノ責ニ任ス」とあるは即ち此の趣旨に外ならない。帝國憲法の規定が右の如く解釋せらるべきものであることは、帝國憲法が採用してゐる所の立憲主義の精神よりして、當然の結果である。蓋し、立憲主義よりせば、凡そ天皇の國務上の行爲に付ては、帝國議會に於て責任を問ひ得るの方法がなくてはならない。帝國憲法に依れば、天皇の國務上の行爲に付て、帝國議會に於て、責任を問はれ得る國家機關は、唯政府あるのみである。然るに、天皇の或國務上の行爲に付て、帝國議會に於て、政府の責任を問ひ得るが爲には、其の行爲が政府の輔弼に依て行はれる、とせざるを得ない。故に、凡そ天皇の國務上の行爲は政府の輔弼に依て行はれる、と云ふことを要するのである。

然しながら、今日我國の憲法（單に帝國憲法のことを云ふのではない）に於ては、前記帝國憲法の規定が、或範圍に於て、其の效力を停止せられて、天皇の國務上の行爲でありながら、政府の輔弼すべきものでない、と解せられてゐるものがある。それは軍の統帥及び榮典の授與の作用たる行爲であるが、榮典の授與のことは、今の問題でないから、玆に之に說き及ばない。軍の統帥の作用たる天皇の行爲も國務大臣の輔弼の外に置かれてある、といふことは、其自身詳論するを要せ

ることであるけれども、茲には唯其の要點を示すに止める。

二　政府の輔弼すべき國務の限界としての統帥作用。

凡そ國家が軍に關して有する事務を軍務と云ひ、軍務の爲に行はれる國家の作用を廣く軍務作用と云ふ。軍務は總て國務である。故に、統帥の事務も亦國務であつて、天皇が大權に依て統帥作用を行はせられる場合にも、矢張、國務上の行爲を行はせられるのである。決して天皇の個人的行爲卽ち私務上の行爲を行はせられるのではない。蓋し、天皇が統帥作用を行はせられる場合に於ても、矢張、國家の統治權の總攬者たる元首として、國家の統治の大權を行はせられるのである。唯、天皇が統帥作用を行はせられる場合には、其の地位に於て、天皇を大元帥と稱したてまつり、其の大權を統帥大權と稱するに過ぎない。國家の元首たる地位以外に別に大元帥たる地位があり、統治の大權以外に別に統帥大權なる大權がある、のではない。然れば、天皇が統帥として行はせられる行爲も、矢張、國務上の行爲である。世間、往々、統帥作用を、國務に對立せしめて、國務でない、といふやうなことを、不用意に云うてゐるのは、人をして誤解を起さしめる言葉である。唯、法理を說く場合に、普通、國家の軍務作用を統帥作用と其の他の作用とに分ち、前者を軍令作用と云ひ、後者を軍政作用と云ふ。併し、之は名稱のことであつて、所謂軍令作用も所謂軍政作用も共に國家の作用であり、天皇の軍令作用たる行爲も軍政作用たる行爲も共に國務上の行爲である。若し、統帥作用が國務でないと說き、單に其の故に、國務に付輔弼するの職責を有する政府の輔弼の外に在る、といふやうに論ずるならば、それは、唯言葉のあやつりであつて、實質上は、問を以て問に答ふるものに外ならないのである。それ故に、問題は、統帥作用たる行爲も國務上の行爲であるとして、而して、政府の輔弼の外にあるや否や、といふことに在るのである。

天皇の統帥作用を以て國務上の行爲であるとするならば、帝國憲法の規定其のものよりすれば、政府に於て輔弼すべきものである。蓋し前に述べた如く、帝國憲法に依れば、凡そ天皇の國務上の行爲に付ては、政府が輔弼すべきものであつて、而して、帝國憲法自身に於ては、それが統帥作用を政府の輔弼の外に置いた、と考ふべき理由を一つも見出さないのである。此の解釋は、統帥作用といふ事の性質に照して見ても、又、帝國憲法施行前の慣行に對して見ても、更に又、帝國憲法中の統帥の規定に徵して見ても、何等差支を見るものでない。

(一) 統帥作用といふ事が、性質上、政府の輔弼に依て行はれ、從て帝國議會に於て責任を問はれる、といふ手續と相容れない、と說明するならば、それは、卑見に依れば、一つの獨斷に過ぎない。若し、果して、兩者が性質上相容れないものであるならば、帝國憲法が性質上

相容れないものを結び付けてゐる、といふ筈がないのであるから、帝國憲法自身が統帥作用を政府の輔弼の外に置いた、と云ひ得るであらう。併し、統帥作用といふ事が、性質上、政府の輔弼從て帝國議會に對する責任と相容れない、といふやうなことを斷定し得るものでない。此の事自身もつと說明を要するけれども、玆には之を省く。要するに、事の性質から、帝國憲法自身が、統帥作用を政府の輔弼の外に置いた、と結論し得るものではない。(二)帝國憲法施行前の慣行を見て、帝國憲法が、統帥作用を政府の輔弼の外に置いた、と說明するならば、それは、卑見に依れば、本來、帝國憲法の意味に關する誤解を含んでゐる。帝國憲法施行前昔からの慣行に於て、統帥作用が、常に、一般國務を行ふ所の國家機關と全く離れた特別の國家機關のみの輔弼に依て行はれた、と、正確に、云ひ得るかどうか、は研究すべきことであるが、併し、それは今は問題でない。縱令帝國憲法制定前の慣行がさうであつたとするも、之を基礎として、帝國憲法自身より推論せられる解釋を左右し得る、ものではない。元來、帝國憲法は、國家統治權の發動に就て、多くは、新なる原則を設けたものであつて、之に依て從來の慣行を變更することは、毫も差支ない。帝國憲法が從來の慣行を變更することを得ないものであるならば、帝國憲法其のものが根本に於て意味を失ふであらう。現に、天皇の國務上の行爲が國務大臣の輔弼に依て行はれるを要す、といふこと自身も、從來の原則を變更したものである。それ故に、帝國憲法其のものを、從來の慣行に合ふやうに解釋せねばならない、といふ理由は決してない。却て、從來の慣行は、存續するが爲に、帝國憲法に矛盾してはならない、のである。而して、從來の慣行が帝國憲法に矛盾してゐないかどうか、は、全く、帝國憲法が新に設けた所の精神殊に立憲主義の精神に照して、解釋すべきである。之を統帥作用に就て云へば、帝國憲法施行前に、慣行上統帥作用が政府の輔弼に依らずして行はれてゐたとしても、それが爲に、當然に、其の慣行が存續する、と云ふの必要はない。その慣行が帝國憲法の基礎たる立憲主義の精神に合しないものであるならば、それは、帝國憲法と矛盾してゐるものであり、從て、帝國憲法に依て廢止せられたのである。然るに、立憲主義よりすれば、前に述べた如く、凡そ天皇の國務上の行爲が政府の輔弼に依て行はれる、ことを要求するものであつて、別に統帥作用を除外するの理由がないのであるから、所謂從來の慣行なるものありとするも、それは帝國憲法に依て廢止せられた、と云はざるを得ない。故に、帝國憲法施行前の慣行を引用して、帝國憲法自身が、統帥作用を、政府の輔弼の外に置いた、と結論し得るものではない。(三)帝國憲法中、統帥に關する規定として、第十一條がある。之と關連するものとして、第

十二條にある。此等の規定からは、決して、統帥作用が政府の輔弼の外に在る、と結論し得るものでない。此のことは便宜上後に説明する。

然しながら、此の問題に就ては、飜て更に、帝國憲法施行後の慣行を見なければならない。之が重要な點である。帝國憲法施行後に於て、統帥作用たる行爲は政府の輔弼に依らずして行はれ、今日に於ては、それが慣行となり、一般社會の觀念に依て承認せられてゐる、と考へられる。故に、今日に於ては、統帥作用は政府の輔弼の外に置かれてゐる、といふ慣習法が成立してゐる、と云はなければならない。

要するに、我國の憲法法理としては、統帥作用は、帝國憲法自身の解釋に依るのではなく、又、帝國憲法施行後に成立した慣習法に依て、政府の輔弼の外に在る、と云ふべきものである。それは、統帥作用といふ事の性質に照して見て、又、帝國憲法施行前の慣行に對して見て、更に又、帝國憲法中の統帥の規定に徴して見て、結論せられるのでない、といふことは、前に述べた通りである。唯、最後の點に就て、左に別に説明して置きたい。

三　帝國憲法中の統帥の規定の解釋。統帥作用が國務大臣の輔弼の外に置かれてゐるや否やの問題に付て、世間、通常、帝國憲法第十一條「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」、第十二條「天皇ハ陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ム」、の規定を引用し、兩條を對照せしめ、此の兩條の別々に存することを理由として、第十一條所定の統帥は國務大臣の輔弼に依らずして行はれ、第十二條所定の編制及び常備兵額を定むることは國務大臣の輔弼に依て行はれる、と説明する。然しながら、卑見に依れば、帝國憲法第十一條、第十二條は、決して、國務大臣の輔弼に依るや否やといふことを標準として、區分せられた、ものではない。兩條は、帝國憲法第一章中の他の條規と同じく、天皇の大權作用として、帝國議會の參與に依らずして行はれる作用を示した、ものである。即ち帝國議會との關係を示したものである。決して國務大臣との關係を示したものではない。故に、其の作用が國務大臣の輔弼に依て行はるべきや否や、といふことに付ては、第十一條、第十二條共に何等言及してゐないのである。それが國務大臣の輔弼に依て行はるべきや否やは、唯、帝國憲法第五十五條の解釋に依てのみ定まることである。帝國憲法第十一條が統帥の事を規定し、第十二條が編制及び常備兵額を定むる事を規定してゐるからとて、兩者を對照して、第十一條の規定する作用が國務大臣の輔弼の外に置かれ、第十二條の規定する作用が國務大臣の輔弼の內に置かれてゐる、といふ如き説を爲し得るものではない。要するに、右兩條は、其の規定する作用が國務大臣の輔弼の外か內か、といふことを明にするが爲には、何等役立

つものでないのである。それにも拘らず、世間此の説を爲す人多く、此等の人は常に彼の伊藤博文公著「憲法義解」の所說を引用して其の論據とする。元來帝國憲法の解釋に關して、如何なる程度に於て、從て如何なる用意を以て、「憲法義解」を參考とすべきか、といふやうなことは、今措て問はずとし、茲に、假りに、前記帝國憲法の條規の解釋に關する、「憲法義解」の所說に從ふとしよう。余の解する所に依れば、「憲法義解」の所謂は、必ずしも、世間に云ふが如く、編制及び常備兵額を定むる作用が國務大臣の輔弼に依て行はれ、統帥作用が國務大臣の輔弼に依らずして行はれる、といふの趣旨とは思へない。此のことを明にするには、「憲法義解」が、帝國憲法第一章の大權作用の條規に關して解說する所を、全般的に示すの必要があるのであるが、茲に之を爲すことは、適當でないから、左に簡單に卑見を示さう。

通常、「憲法義解」が、第十二條の、軍の編制及び常備兵額を定むることの解に於て、「此レ固ヨリ責任大臣ノ輔翼ニ依ルト雖」といふ文句を用ゐてあるに反して、第十一條の、統帥のことの解に於ては、「責任大臣ノ輔翼ニ依ル」といふ文句を用ゐてないから、統帥作用は國務大臣の輔弼に依らずして行はれるの趣旨である、とする。然しながら、「憲法義解」の帝國憲法第一章大權作用の條規の解を通覽するときは、第十二條に「責任大臣ノ輔翼ニ依ル」と云ふのは、決して、特に第十一條と對照して、第十一條の統帥作用が國務大臣の輔弼に依らざること、を示すの趣旨でない、ことが分る。若しさういふ趣旨であるとするならば、同じ論法を以て、他の大權作用、例ば帝國憲法第六條の法律の裁可、第七條の帝國議會の召集、開會、閉會、停會、衆議院の解散、第十六條の恩赦の作用等の、亦、國務大臣の輔弼に依らずして行はれる、と云はざるを得なくなるであらう。何故なれば、「憲法義解」は帝國憲法第六條、第七條、第十六條等の解に於ても、單に、至尊の大權に依て行はれ、帝國議會の參與に依て行はるゝものでない、といふことを云ふに止まり、それが國務大臣の輔弼に依るのである、といふことを云うてゐないからである。而して、法律の裁可、帝國議會の召集、開會、閉會、停會、衆議院の解散、恩赦等の作用が、國務大臣の輔弼に依らずして行はれる、といふことの不當なるは、疑ない。然れば、「憲法義解」が、第十一條の解に於て、國務大臣の輔弼に依ることを云はないからとて、それが爲に、同條示す所の統帥作用が國務大臣の輔弼に依らないで行はれるとするもの、と云ふことは出來ない、と思ふ。「憲法義解」の所說を全般より見るときは、其の趣旨、主として、帝國憲法第一章示す所の國家の作用が、專ら天皇の大權に依て行はるべく、帝國議會の參與に依て行はるべきでない、といふこと

を示すに在ること、明である。故に、「憲法義解」が、第十二條示す所の編制及び常備兵額を定むることに就て、「責任大臣ノ輔翼ニ依ルト雖」と云うたからとて、それは、第十二條の規定其のものの有する趣旨を示したのではない。前にも述べた如く、帝國憲法第一章の規定に、國務大臣の輔弼の問題とは無關係のことであつて、唯、帝國議會との關係を示すものである。現に、「憲法義解」自身が、第十二條の解に於て、冒頭本條の趣旨を示し、「本條ハ陸海軍ノ編制及常備兵額モ亦天皇ノ親裁スル所ナルコトヲ示ス」と云うてあるのである。即ち、「憲法義解」は、第十二條の解に於て、「責任大臣ノ輔翼ニ依ルト雖」と云うたからとて、之に依て、第十二條其のものが、其の示す所の作用が國務大臣の輔弼に依る、ことを定むるの趣旨である、と云はんとするのではない。況して、之が爲に、第十一條を、第十二條と對照せしめて、國務大臣の輔弼に依らざる作用を示すもの、とするのでないこと、勿論と思ふ。

之を要するに、帝國憲法第十一條、第十二條の對照よりしては、統帥作用が國務大臣の輔弼の外に在る、と云ひ得るものでない。且前にも述べた如く、帝國憲法全般の解釋からも、亦、さう云ひ得ない。唯、併し、前に述べた如く、帝國憲法施行後の慣習法に依て、さう云ひ得るのである。

四　統帥作用論の前提的意味。　右述べた如く、軍務作用中、統帥作用は政府の輔弼の外に在るが、統帥作用以外の軍務作用で政府の輔弼の外に在るもの、はない。故に、今の問題、即ち、兵力量の決定が、國防の方面から見て、政府の輔弼の外に在るか否か、といふ問題の考察に於ては、實は、問題其のものが、統帥作用は政府の輔弼の外に在る、といふことを前提として、始めて成立するのである。而して、兵力量の決定が統帥作用なりや否やに依て、問題は解決せられるのである。然れば、此の問題の直接の解決の方法としては、兵力量の決定が統帥作用であるか否かを明にすることを以て、十分とし、統帥作用が政府の輔弼の外に在る、といふことは、前提として置てよいのである。然るに、今回此の問題の起るや、世間に於ては、統帥作用が政府の輔弼の外なるや否や、といふことが重要な問題として論議せられ、兵力量の決定が統帥作用であるか否か、といふことは、寧ろ、輕視せられてゐるやうである。これは、本問題の直接解決としては、本末顚倒の考方であるけれども、併し、それは、目下世論の焦點であるから、本論に於ても、右の如く其の大要を論じたのである

そこで、次に、兵力量の決定が統帥作用なりや否やを明にせなければならない。

二　兵力量の決定と統帥作用

一　統帥作用の意義。　兵力量の決定が統帥作用なるや否やを決するには、先づ、統帥作用とは何であるかを明にせなければならない。統帥作用の何たるかに就ては、世間にはつきりとした觀念がある、と云へないからである。卑見に依れば、國家の或作用が統帥作用たるや否や、を定むるに當ては、其の作用を、其の作用を受ける相手方、及び、其の作用の關係する事項、の兩面から、考察せなければならない。即ち、其の作用を、作用の客體及び作用の對象の兩面より觀ることを要する。(一)作用の客體より觀るときは、或作用が統帥作用であるのは、其の作用が軍に向けられる意志作用である場合である。軍に向けられる意志作用でないものは、統帥作用ではない。又、(二)作用の對象より觀るときは、或作用が、如何なる事項に關係して行はれるとき、統帥作用であるか、といふことを考へなければならない。統帥作用の對象を明にすることは困難である。そこで、種々の見解を生ずる。或は、極めて廣く解して、苟も軍に向けられる意志作用である以上、それが如何なる事項に關係してゐるかを問はないで、總て統帥作用であるとし、或は、軍に向けられる意志作用中、嚴密なる意味に於ける軍事行動の指揮として軍に向けられるものに限り、統帥作用であるとし、或は、軍事行動を指揮するもののみに限らないで、軍事行動の準備として軍に向けられるものをも、統帥作用である、とする。併し、統帥作用の對象は何であるにしても、それが軍に向けられる意志作用である、といふことは、忘れてはならないことである。即ち、軍に向けられる意志作用でないものは、それが如何なる事項に關係してゐても、統帥作用ではない。從て、國家の或作用が統帥作用なるや否や、を定むるに當ては、先づ、第一着手として、それが軍に向けられる意志作用なるや否や、を見なければならない。而して、それが軍に向けられる意志作用でないならば、其の點でそれが統帥作用でないのであるから、更に其の作用を對象から見るの必要はない、のである。

二　兵力量の決定と統帥作用。　兵力量の決定、即ち兵力量を如何にするかを定むることは、國家が軍に意志作用を向けるものではない。それは、勿論國家の意志作用であるけれども、併し何等軍に向けられるものではない。故に、單に其の理由のみで、既に、それが統帥作用でない、こと明である。

三　兵力量の決定に於ける政府の職責

一　兵力量の決定と政府の輔弼。　既に斯の如く、兵力量の決定

が統帥作用でないとすれば、前記第一の項に述べた理論に依り、政府の輔弼の外に在るものでない、こと當然である。故に、それは政府の輔弼に依て行はるべきものである。

唯、此の場合、推理上注意を要することがある。兵力量の決定が政府の、輔弼に依て行はるべきである、といふの理由は、唯、それが統帥作用でない、といふ點に在るのであるから、それが如何なる作用であるかは、問題でない。論點は統帥作用であるかどうかに在つて、如何なる作用であるかに在るのではない。故に、それが統帥作用でないと云ひ得れば、それで十分である。更に、それが帝國憲法に所謂編制又は常備兵額を定むることであるかどうか、といふことを論ずるの必要は、毫もないのである。蓋し、既にそれが統帥作用でないとすれば、それが政府の輔弼に依て行はるべきことは、凡そ天皇の國務上の行爲は政府の輔弼に依て行はるべし、といふ一般原則の適用として結論せられるのであつて、何等か特定の種類の國務上の行爲が政府の輔弼に依て行はるべし、といふことから結論せられるのではないからである。要するに、それが軍の編制の作用なりや否やといふやうなことは問題ではなく、それが統帥作用なるや否やといふことが問題なのである。此のことは、軍に關する國家の作用が、單に統帥作用及び編制作用の兩者のみに限られるならば、別に注意することを要しないけれども、軍に關する國家の作用は、統帥作用及び編制作用以外にも種々有るのであるから、注意することを要する。蓋し、軍に關する國家の或作用が政府の輔弼に依て行はるべきかどうかが問題となつた場合には、それが統帥作用でない、といふことを示すを以て十分とする、といふ見地と、他の如何なる種類の作用たるかを示すを要すとする見地と、大に其の主張の方法を異にせざるを得ないからである。

此の如く、政府が、兵力量の決定に付て、それが統帥作用でないといふ理由で、輔弼するのである以上、其の輔弼は參與すべからざる統帥大權の作用に參與したのではない。政府が參與すべからざる大權作用に參與することを指して大權の干犯と云ふとせば、此の場合、政府の輔弼を以て統帥大權の干犯なりと云ふ、ことは中らないのである。

二　兵力量の決定に關する政府の立憲的責任。　政府が右の如く兵力量の決定に付て輔弼する以上、之に關して、帝國議會に對して責任を有することも亦當然である。帝國議會に對して有する責任を立憲的責任と云ふ。故に、政府の輔弼に依て決定せられたる兵力量が適當のものなりや否やの點に關して、帝國議會に於て、政府の責任を問ひ、即ち批判し、質問し、場合に依て政府を難詰することは、固より許される。而して、兵力量の決定に關して、帝國議會が此の如く政府

の責任を問ひ得るは、全く、それが政府の輔弼すべき國務上の行爲であるからである。さうでないとするならば、之に關して、政府が帝國議會に對して責任を有するの理由なく、從て、帝國議會に於て政府の責任を問ふことも亦許されない、こととならざるを得ない。然れば、兵力量の決定を以て、政府の輔弼に依らずして行はれるとすることは、實は、同時に、他方に於て、帝國議會が政府の責任を問ふの權限を縮小することゝなるのである。而して、それは、結局、天皇が兵力量を決定せられるといふ大權作用（それは前述の如く統帥作用ではない）に關して、帝國議會に對して責任を有する者をなくする、ことに外ならない。此の如きことの立憲主義に反すること云ふまでもない。或は云ふ、この場合、兵力量の決定に參畫する所の海軍軍令部長が責任を負ふのであると。成程、後に述べる如く、海軍軍令部長は其の職責として兵力量の決定に參畫する。併し、帝國議會に對して責任を負ひ得ない。何故なれば、天皇の大權作用に關して、帝國議會に對して責任を有する者は、帝國憲法上、國務大臣あるのみであるからである。故に、帝國議會に於て、兵力量の決定に關して、國務大臣の責任を問ひ得ないとするならば、結局、之に關しては一般に責任を問ふこと其のことが法上不可能となる のである。此の如き結果は勿論不當である。その時々の海軍軍令部長が、いかに明白に、自己に於て責任を負ふ、と云うて見ても、法上帝國議會に對する責任を負ひ得ないのであるから、如何ともし難いのである。勿論、海軍軍令部長が天皇より責任を問はれる、ことはあり得る。併し、それは、玆に問題としてゐる所の責任即ち立憲的責任とは、全く別のものである。

三　兵力量の決定に於ける國防上の考究と政府の輔弼。

兵力量の決定に當ては、政府は種々の方面より之を考究しなければならない。國防（軍の力を以て國を護ること）の方面から考究することは、勿論最も重要である。併し、單にそれのみでは十分でない。更に、外交、財政、經濟、世界の平和などの方面からも考究すべきものである。從て、政府は、決定せらるべき兵力量が、國防といふ方面からも觀て、適當なりや否やを考究し、之に付て、天皇を輔弼したてまつるべきものである。國防の方面から考究することが政府の職責でない、と云ふべき理由はない。何故なれば、決定せらるべき兵力量が、國防の目的を達するが爲に、適當なりや否やを考究したからとて、之が爲に、兵力量の決定が統帥作用となるのではなく、從て、政府が統帥作用を輔弼することゝなるのではない、からである。併し、此のことは政府が一般に國防の爲にする國家の作用に付て輔弼し得ると、いふのではなく、それが、國防の爲にする國家の作用にして、統帥作用ではないから、政府が之に付て輔弼し得る、といふのである。よく之を理

解するが爲には、更に、國防と統帥作用との關係を明にする必要がある。

今の問題、卽ち、政府が兵力量の決定に付て輔弼し得るや否やの問題に關し、世間、之を、政府が國防に付て輔弼し得るや否やの問題なりとし、而して、國防は統帥作用でないといふことを理由として、之に付て政府が輔弼し得る、といふ見解が廣く行はれ、現政府も亦此の見解を取つてゐるやうである。併し、卑見に依れば、これは、國防と統帥作用との關係に就ての考方に於て、一の混雜に陷つてゐる。國防とは外國に對して軍の力で我國を護るといふことであつて、國家作用を其の目的から觀たものである。之と異なり、統帥作用とは、或目的の爲に、軍に意志作用を向けるといふことであつて、國家の作用を、寧ろ、其の樣式から見たものである。其の目的よりせば、統帥作用は、國防の爲にせられることもあり、又國內の擾亂や秩序破壞を防壓するが爲にせられることもある。故に、國防が統帥作用であるかどうか、といふ問題は、問題自身混亂してゐる。國防の爲に、軍に向けられる統帥作用が行はれることもあり、軍備を決定するといふ國家作用が行はれることもある。兵力量の決定は、國防の爲の事でもあるが、統帥作用ではなく、軍備を決定する作用である。統帥作用でないから、政府の輔弼すべきことなのである。それ故に、國防が、統帥作用でないとし、其の故に、兵力量の決定が政府の輔弼の內に在るといふ、曩に政府及び世間普通の人の主張したやうな、見解は、全く區別すべき二つの見地を混同した、ものと思ふ。實際に於ても、國防といふ目的の爲に、軍の統帥といふ國家作用が行はれてゐるのであり、且、寧ろ、それが軍の統帥の行はれる場合中最も重大なるものである。唯國防の目的の爲にする國家作用であつても、統帥作用でないものもあり、それが政府の輔弼に依て行はれるのであつて、彼の兵力量の決定は卽ちそれなのである。

そこで、所謂國防計畫といふ言葉の意義に言及するの必要に立ち到つた。國防計畫なる語は屢々用ゐられるけれども、其の意義決して明瞭でない。國防の爲に、軍を指揮して行動せしめる計畫を指して、國防計畫といひ得る。此の國防計畫は統帥作用である。併し、又、國防の爲に、如何なる軍備を有すべきかを定める計畫を指して、國防計畫と云ひ得る。此の國防計畫は統帥作用ではない。前者は軍令作用たる國防計畫であり、後者は軍政作用たる國防計畫である。政府は、軍令作用たる國防計畫に付て輔弼し得ないけれども、軍政作用たる國防計畫に付ては、輔弼し得るのである。國家が實際上國防計畫を立てるに當ては、前記兩種の國防計畫は相互關連し、卽ち、一は他を參酌して立てられるのであつて、其の結果、國家全體から見て、國防の爲にす

る計畫が完全なるを得るのである。而も、所謂國防計畫中、前記兩者は、國家作用として、其の性質を異にするものであるから、之を明にすべきであり、且之を明にすることに依て、國家機關の權限が定まり、之に依て以て、國家作用の運行の圓滿を期し得るのである。

第二　兵力量の決定に於ける海軍軍令部の職責

海軍軍令部は、兵力量の決定に付て、其の職責として、如何なる狀態に於て、參加するものであるか。之を判斷するは、帝國憲法に依るのではなく、海軍軍令部條例に依るべきである。同條例は海軍軍令部の職責を規定するものであるが、同條例に依て其の職責を明にするには、先づ、海軍軍令部の管掌する事項の種類と、海軍軍令部に於て其の事項に付て執務する手續と、を分て考察するの必要がある。而して右の兩面から、海軍軍令部が、兵力量の決定に付て、如何なる狀態に於て參與するか、を見るべきである。此のことは、政府と海軍軍令部長との關係を知るが爲に、殊に必要である。前述の兩面を分たなければ、右兩機關の關係を明にしようとするの推理の上に、混雜を來たすの虞がある。

一　海軍軍令部の管掌事項と兵力量の決定

一　海軍軍令部の管掌する國防及び用兵。　兵力量の決定に於て、何等か海軍軍令部の所管事項があるであらうか。海軍軍令部條例第一條には、「海軍軍令部ハ國防用兵ニ關スル事ヲ掌ル所トス」と規定してある。故に、問題は、海軍の兵力量を決定することに付て、何等か、國防、用兵に關する事なるものがありや否や、といふことに歸着する。之に付ては、先づ國防、用兵に關する事、と云ふの意義を明にして、次で、それと兵力量の決定との關係に及びたい。其の意義明瞭なる如くにして而も甚だ不明瞭であり、且、今回の場合に於ても、其の意義を明にしてないことが問題を混雜せしめてゐる、と思はれる。海軍軍令部條例に「國防用兵ニ關スル事」とあるは勿論國防に關する事及び用兵に關する事の二つの事を指す。便宜上順序を變じ、用兵、國防として說明しよう。

二　用兵に關する事と兵力量の決定。　用兵即ち兵を用ゐるといふことは、疑もなく、軍に意志作用を向けることである。海軍軍令部が用兵に關する事を掌るといふのは、苟も用兵に關係を有する事を掌るの義ではなく、用兵其のものに付ての事を掌るの義である。然るに、兵力量を決定することは、用兵に付ての事ではない。故に、海軍

軍令部は、海軍軍令部條例に所謂用兵に關する事を掌る者としては、兵力量の決定に參與するものでない。

三　國防に關する事と兵力量の決定。　國防とは何であるか。それは、單に國防といふ文字を用ゐる場合に如何なる意義を有し得るか、を考ふべきではない。海軍軍令部條例中に用ゐてある、その國防といふの何であるかを考ふべきである。今の問題に際し、世間、國防の目的を達するは、獨り軍の力のみに依るのでなく、財政、外交等の力にも依るものであるから、軍部のみが參與すべきでなく、政府も參與すべきである、とするの論が多い。併し、それは海軍軍令部條例に所謂國防の意義を適當に解すものではない。同條例に所謂國防とは、矢張、軍の力を以て、他國に對抗して、我國を護るといふことである。海軍軍令部が、右の意味での國防に關する事を掌るといふのは、苟も國防に關係を有する事を掌るの義ではなく、國防其のものに付ての事を掌るの義である。

さて、兵力量の決定に付ては、前述の如く、種々の方面から之を考究するのであるけれども、其の最も重大なるものは國防の方面から考究することであつて、國防の方面からは、必ず考究せられなければならない。從て、兵力量の決定に付ては、海軍軍令部は、海軍軍令部條例に所謂國防に關する事として、之に參與するものであること、勿論である。尤も、國防に付ての國家作用には、統帥作用即ち軍令作用たる國防計畫と、軍政作用たる國防計畫と、區別あることは、前に之を述べた。海軍軍令部條例が海軍軍令部の管掌事項として、國防に關する事といふのは、右兩者を含んでゐるのであつて、海軍軍令部は獨り軍令作用たる國防計畫のみならず、軍政作用たる國防計畫をも掌る。兵力量の決定に付ては、軍令作用たる國防計畫の問題にないのであるが、軍政作用たる國防計畫の問題として、海軍軍令部が之に參與するのである。尤も、國防の爲にする統帥作用も、畢竟、用兵といふ作用に外ならないのであり、即ち、國防の爲にする用兵なのであるから、海軍軍令部條例が海軍軍令部の管掌事項として、國防、用兵とならべ示すことは、國家作用の分類としては精密なものでない。併し、それが爲に、用兵は統帥作用であるが、國防は統帥作用でない、と云ふの必要はあるまい、と思ふ。用兵とは、統帥作用といふと同じく、國家作用を其の樣式から見て云ひ、國防とは國家作用を其の目的から見て云ふもので、兩者は其の觀察點を異にしてゐるのである。海軍軍令部條例が國防、用兵と併稱してゐるからと云うて、必ずしも、兩者を、統帥作用なる國家作用の樣式、といふ一つの觀察點から觀て、之を標準として、論理的に對照せしめたもの、と解釋するの要はない。凡そ國家制度の規定といふものは、必ずしも常に論理的の說明を爲してゐる

ものではないのである。故に、用兵が統帥作用であるからとて、國防が統帥作用でない、といふの必要はない。國防に付ての事の中、軍政作用たる國防計畫が統帥作用でないのである。而して、兵力量の決定に付、海軍軍令部が參與するのは、軍政作用たる國防計畫を掌る者としてするのである。

二　兵力量の決定に於ける海軍軍令部の執務の手續

兵力量の決定に於て、政府と海軍軍令部との關係の問題は、兩者が如何なる交渉を有するかの問題である。元來、兩者が、其の管掌事項として、共に、之に參與し得るのでなく、何れか一方が之に參與し得ない、とするならば、兩者の交渉は存しないのであるから、兩者の交渉の有無を知るが爲に、前記の如く、先づ、海軍軍令部の管掌する事項の種類を明にしたのである。併し、兩者の間如何なる交渉の存するか、といふことに就ては、更に、海軍軍令部の執務の手續を見るを要し、寧ろ、之を一層重要とするのである。

海軍軍令部には、其の首長として海軍軍令部長があり、海軍軍令部長の下に、之を補助する幾多の機關がある。

海軍軍令部は、國家の兵力量の決定に付ては、國防に關する方面から、其の意見を立てる。海軍軍令部の意見は、之を海軍軍令部より政府に進言する。又、政府は、之に付て天皇を輔弼したてまつるに當て、必ず海軍軍令部の意見を求むべきものである。併し、茲に最も重大なるものは、海軍軍令部長が、國防に關して、政府を離れて、獨立して、天皇を輔弼したてまつる、といふ職責を有する、といふこと、及び、其の職責が、兵力量の決定に關して、如何なる作用を爲すか、といふことである。これは、兵力量決定に於ける政府と海軍軍令部との關係、といふ問題に於て、最も重要の論點であるから、項を別にして考へよう

三　國防に關する海軍軍令部長の輔弼と兵力量の決定

一　**海軍軍令部長の輔弼の職責**。海軍軍令部長は、或場合に、政府を離れて、獨立して、天皇を輔弼したてまつる。此の事は、海軍軍令部條例に於て示されてゐる。同條例第二條には「海軍軍令部長ハ天皇ニ直隷シ帷幄ノ機務ニ參シ」とあり、同條例第三條には「海軍軍令部長ハ國防用兵ニ關スルコトヲ參畫シ親裁ノ後之ヲ海軍大臣ニ移ス」とある。是れ海軍軍令部長が國防及び用兵に關する事に付て、政府と離れて、獨立して、天皇を輔弼したてまつる、ことを示すものであ

る。其の場合に爲さるゝ上奏が卽ち所謂帷幄上奏である。之を帷幄に於ける輔弼と云ふ。帷幄といふやうな語は、制度上普通に用ゐられてゐるのではないが、前記海軍軍令部條例の外、參謀本部條例第二條にも「參謀總長ハ帷幄ノ軍務ニ參畫シ」とあり、軍事參議院條例第一條にも「軍事參議院ハ帷幄ノ下ニ在リテ重要軍務ノ諮詢ニ應スル所トス」とあり、戰時大本營條例第三條にも「參謀總長及海軍軍令部長ハ各其ノ幕僚ニ長トシテ帷幄ノ機務ニ奉仕シ」とある。卽ち、帷幄の語は、專ら軍に關する國家作用に就て用ゐられてゐる。併し、法上の性質から、帷幄に於ける輔弼、といふの概念を立てるならば、必ずしも軍に關する國家作用に限ることを要せず、凡そ、國家作用に付て、政府と離れて、獨立して、天皇を輔弼する、といふことであるとしてよい。嘗て外交調査會なるものを設け、天皇の側近に在て、外交に付て、天皇を輔弼するの機關としたことがある。是れ又一種の帷幄に於ける輔弼と云ひ得るのである。然るに、此の如き帷幄に於ける輔弼なるものが、帝國憲法上許されるや否や、換言せば、帷幄に於ける輔弼の帝國憲法上の根據如何は、根本的の問題である。故に、今海軍軍令部長の帷幄に於ける輔弼を示すに當り、先づ一般の問題として帷幄に於ける輔弼を考へ、次で當面の問題に及ぶことゝする。

二　帷幄に於ける輔弼。　帝國憲法の法理よりすれば、凡そ天皇の大權作用に付ては、それが國務大臣の輔弼に依て行はれるものである以上は、他の機關が、政府と離れ、獨立して、天皇を輔弼したてまつる、といふことは、許されない。かゝることは、帝國憲法自身の認めてゐる場合に限り許されるのであつて、それは樞密顧問に就て、帝國憲法が、認めてゐるだけである。此の原則は、帝國憲法が、明文を以て示してゐるのではないが、帝國憲法の性質上、當然此の如く解しなければならないのである。蓋し、立憲主義の根本的要求に從へば、天皇の大權作用に際し、有力に天皇を輔弼して、實際上天皇の行爲に參與したてまつつた者は、其の大權作用に付て、帝國議會に對して責任を有すべきものである。國務大臣以外に於て、有力に天皇を輔弼して、實際上天皇の行爲に參與したてまつつてゐて、而も帝國議會に對して責任を有せない、といふやうな者のあることは、根本に於て、立憲主義に反することである。唯、國務大臣の輔弼に依らずして行はれる作用に付ては、始めより帝國議會に對する責任を問題としない趣旨であるから、之に付ては、帝國議會に對する責任を有しない者が、輔弼しても差支ない。然しながら、苟も國務大臣の輔弼に依て行はれる大權作用である以上、之に付て、政府と離れて、獨立して、天皇を輔弼する者があつてはならない。此の場合と雖、固より、國務大臣も亦形式に於て輔弼するのであるが、併し、必ずしも常に、他の有力なる輔

弼者と同一の意見を有する。とは限らない。或大權作用に付て、國務大臣と國務大臣以外の者とが共に輔弼した場合、若し、それが、國務大臣の輔弼する所に反して、國務大臣以外の者の輔弼する所に依て、決定せられたならば、其の結果は如何であらうか。此の場合、有力に輔弼して、實際上天皇の行爲に參與しながら、而も帝國議會に對して何等責任を有しない者がある、こと丶なる。此の場合と雖、勿論、國務大臣は、辭職せざる限り、帝國議會に對して責任を負ふのであるが、併し、玆に必要なことは、唯責任を負ふ者がある、といふことではなく、實際上有力に大權作用に參與した者が責任を負ふ、といふことである。故に、帝國憲法に就て、國務大臣以外の者が、實際上有力に大權作用に參與しながら、帝國議會に對して責任を負はないで、國務大臣が之を負ふ、といふやうな結果をもち來すが如き、解釋を爲すことは、適當でない。然れば、帝國憲法の法理に依れば、凡そ天皇の大權作用に付ては、それが國務大臣の輔弼に依て行はれるものである以上は、政府を離れて、獨立して、天皇を輔弼したてまつる者は、帝國憲法自身の認むる樞密顧問以外には、存し得ない、と推斷すべきである。反面より云へば、政府を離れて、獨立して、輔弼すること、即ち、帷幄に於ける輔弼なるものは、國務大臣の輔弼に依らずして行はれる大權作用に付てのみ、存し得るのである。是れ、曾て外交調査會の設置に際し、憲法違反論が起つた所以である。

三　國防に關する帷幄輔弼の限界。一般に帷幄に於ける輔弼に就て右に述べた理論は、軍に關する大權作用に關しても、固より同じである。即ち、軍務作用に於ても、帷幄に於ける輔弼は、單に、國務大臣の輔弼に依らずして行はれるもの丶みに付て、あり得るのである。此の點よりして、軍務作用中、統帥作用たる軍務作用と、統帥作用に非ざる軍務作用と、を分たなければならない。前述の如く、現行の憲法の法理上、(必ずしも帝國憲法のみの解釋といふのではないが)軍務作用中、統帥作用は、且統帥作用のみが、國務大臣の輔弼に依らずして行はれるものである以上は、統帥作用たる軍務作用に付ては、政府を離れて、獨立して、輔弼すること、即ち帷幄に於ける輔弼があり得るが、併し、統帥作用に非ざる軍務作用に付ては、帷幄に於ける輔弼はあり得ない。

之を海軍軍令部長の職責に就て見よう。(一)用兵は常に統帥作用であるから、之に付ては、常に、帷幄に於ける輔弼が許される。(二)今問題となつてゐる國防に付ては如何であらうか。國防とは、前述の如く、軍の力を以て國を護ることであるから、國防の爲にする作用は、固より軍務作用である。併し、國防の爲にする軍務作用は必ずしも常に統帥作用たるものではなく、其の中、唯、國防の爲に軍に意志作用

を向けること、これのみが、國防の爲にする作用で、且、統帥作用たる軍務作用である。從て、之に付ては、且之のみに付て、帷幄に於ける輔弼が許される。之と異なり、國防の爲に兵力量を如何にするかを定めることは、前にも述べた如く、統帥作用ではないから、國防の爲にする作用で、且、統帥作用に非ざる軍務作用である。從て、之に付ては帷幄に於ける輔弼は許されないのである。故に、國防に關しても、常に帷幄に於ける輔弼が許されるのではない。是れ帝國憲法の法理である。然るに、帝國憲法以外の現行制度たる海軍軍令部條例は、前に述べた如く、單に「帷幄ノ機務ニ參シ」と云ひ、又「國防用兵ニ關スルコトヲ參畫シ親裁ノ後」と云ふ。文字のみより見ると、海軍軍令部條例に依り、海軍軍令部長は、廣く國防の爲にする作用に就て、統帥作用たると否とを論せず、帷幄に於ける輔弼をなし得る、ものゝ如く見ゆる。併し、決してかく解すべきものではない。帝國憲法及び帝國憲法以外の法制は皆連絡を有するものであつて、而して、其の根本的見地を定めてゐるものは固より帝國憲法である。故に帝國憲法以外の法制を解釋するに當ては、其の結論は、帝國憲法の規定や精神に反する結果をもち來さざる範圍に於て、許さるべきものである。然れば、海軍軍令部條例が、單に、國防に關する事を示して、之に付て、帷幄に於ける輔弼のことを規定してゐても、それは、國防に關して統帥作用たるものに付て、帷幄に於ける輔弼を定めた、ものと解釋せざるを得ないのである。若し、實際の取扱に於て、國防に關して、統帥作用に非ざる軍務作用に付て、帷幄に於ける輔弼が行はれ、帷幄上奏なるものが爲されることがあるならば、それは、唯、當局者が、個々の場合に、其の軍務作用が統帥作用なりや否やの、事實の認定を誤つたもの、と云ふべきである。之が爲に、其の作用が統帥作用でないといふ事實には、少しも變化はない。又、統帥作用に非ざる軍務作用に付ても、帷幄に於ける輔弼を許す、こととなるのではない。然れば、帝國憲法の法理に依り、海軍軍令部長は、國防に關して、統帥作用に付ては、帷幄に於ける輔弼を爲し、帷幄上奏を爲し得るけれども、統帥作用に非ざる兵力量の決定に付ては、帷幄に於ける輔弼を爲し、帷幄上奏を爲し得ないのである。併し、兵力量の決定に付て、帷幄に於ける輔弼を爲し得ない、といふことは、決して、兵力量の決定といふ國家作用に參與し得ない、といふことではない。前にも述べた如く、國防に關する事は、統帥作用たると否とを問はず、海軍軍令部の管掌事項であるから、海軍軍令部長は、國防に關して、統帥作用に非ざる作用に付ても、意見を立て得るのであり、又立てなければならない。之は海軍軍令部の管掌事項を定むる海軍軍令部條例の規定の結果である。然しながら、意見を立て得ることゝ、立てた意見を以て如何に處

置すべきかといふこと、は別である。海軍軍令部長は、統帥作用に非ざる作用に付ては、其の意見を以て、政府に進言すべきものであり、政府も亦之を聽くべきものである。而も、海軍軍令部長が、之に付て、政府を離れて、獨立して、天皇を輔弼する、ことは、許されない。之は帝國憲法の法理である。此の法理は、海軍軍令部の管掌する事項の種類と、海軍軍令部が其の事項に付て執務する手續との、區別を明にすることに依てのみ、知られる。是れ、曩に、此の兩者を區別するの必要ある．ことを述べた所以である。

第三　兵力量の決定に於ける政府及び海軍軍令部の交渉

一　政府と海軍軍令部との交渉

以上述べた所に依れば、國家が兵力量を決定するに當り、一方、政府は、天皇を輔弼するの職責を有し、他方、海軍軍令部は、國防に關する事として、計畫するの職責を有する。そこで、政府及び海軍軍令部の交渉を生ずる。從て、兩者が職責として行ふ所の行爲は、何等かの方法に依て、調和せられなければならない。然らずんば、國家の作用は決定せられない。殊に、海軍軍令部長が、事實の認定を誤り、それを統帥作用なりとして、帷幄に於ける輔弼を爲す場合には、政府の輔弼と海軍軍令部長の輔弼とが、如何にして調和せられるであらうか、といふことは、國家作用の決定に關する重大の問題である。考察を正確ならしめるの必要上、兵力量の決定に於ける政府及び海軍軍令部の交渉を、海軍軍令部長の輔弼といふことを離れて、一般に存する交渉と、輔弼を通じて存する兩者の交渉とに分つ。

二　一般に存する兩者の交渉

政府は、兵力量の決定に付て輔弼を爲すに當て、法上海軍軍令部の意見を參考するを要する。海軍軍令部の側から云へば、意見を政府に進言すべきものであるが、政府の側から云へば、海軍軍令部の進言あらざる場合でも、之に向て意見を求むべきものである。政府が之を怠つて、海軍軍令部の意見を參考することなくして、輔弼するならば、そこに、手續上の違法の點がある。而して、右の參考は、矢張政府の態度に關する法の制限であつて、單に運用の便宜に止まるのではない。併し、政府が海軍軍令部の意見を參考するを要す、とは、其の同意を得るを要す、といふのではない。運用としては、政府は、充分に海軍軍令部の意見に傾聽し、其の意見を尊重して政府自身の意見を定め、之を以て天皇を輔弼したてまつるを適當とし、實際にても然う

であらう。然しながら、政府が、どうしても海軍軍令部の意見に贊同し難い、といふ場合があるならば、政府は、海軍軍令部の意見に拘束せられないで、政府自身の意見を以て、天皇を輔弼したてまつるの外はない。決して、法上、政府が海軍軍令部の同意を要する、のではない。政府が法の制限として同意を要す、とすることは、或場合に、兵力量の決定に關する政府の輔弼を不可能ならしめる、ことなのである。兵力量の決定に關する政府の輔弼を不可能ならしめることは、即ち、兵力量の決定といふ國家作用の成立を不可能ならしめる、ことに外ならない。此の如きことは認めらるべきものでない。さて、今回の場合に於て、現政府は、海軍軍令部の意見を參考した、と公言してゐるのであるから、玆には之を信じて判斷するの外なく、其の限りに於て、現政府の處置は違法ではない。唯、之を參考するの態度に就て、巧拙の論は生ずるであらう。併し、それは、執務技術の問題であつて、法の問題ではない。

三　輔弼を通じて存する兩者の交渉

一　海軍軍令部長の帷幄輔弼と政府の輔弼。兵力量の決定に付ては、前述の如く、卑見に依れば、政府は輔弼すべきものであるが、海軍軍令部長は、それが統帥作用でないのであるから、帷幄に於て輔弼すべきものでない。即ち、一は輔弼の權限を有し、他は之を有しない。故に、法上は、兩者間には何の交渉も存しないのである。併し、實際上、海軍軍令部長が、兵力量の決定に付て、輔弼することがあつたとすれば、實際上、兩者間に何等かの交渉を生ぜざるを得ない。之を如何に解するならば、兩者間の調和を保ち、以て國家作用の成立を可能ならしめ得るであらうか。

海軍軍令部長が、實際上、兵力量の決定に付て、輔弼する、といふ事實は、前に述べた通り、卑見に依れば、憲法違反である。併し、憲法違反でない、といふ主張もあらう。そこで、右の事實に關する政府及び海軍軍令部長の交渉を考へるに當ても、右の事實を違法とするの立場、及び、之を適法とするの立場の兩者を分て、考へなければならない。

第一に、違法論の立場に於て考へよう。前述の如く、海軍軍令部長が、兵力量の決定に付て、輔弼することを、憲法違反なりとする立場からすれば、實際上海軍軍令部長が輔弼することがあれば、それは、事實の認定を誤り、兵力量の決定を統帥作用なりとする、の結果である、と云ふの外はない。此の場合、政府の側に於ては、それが統帥作用ではない、といふ事實の認定を爲し、從て政府の輔弼すべき作用である、として、輔弼すること、少しも差支ない。政府が海軍軍令部長

の事實の認定に從ふを要する、といふことはない。實際の處置としては、此の事實の認定に就ても、政府は、海軍軍令部長に向て、其の判斷を述べるであらうが、併し、海軍軍令部長も、亦、其の權限として、事實の認定を爲すのであるから、事實の認定に付て、兩者の意見一致せざることもあり得る。此の場合、政府は海軍軍令部長に依る事實の認定に拘束せられるものではない。政府が、それは統帥作用に非ず、と認定して、さて、之に付て、輔弼するに當ては、海軍軍令部長の意見を聽くを要すること、而も、之に贊同し難いとき、其の意見に拘束せられないで、政府自身の意見に依て輔弼したてまつるべきこと、これは、前に、一般に存する政府と海軍軍令部との交渉に就て、述べた通りであつて、特に輔弼を通じて存する兩者の交渉の問題ではない。特に輔弼を通じて存する兩者の交渉を考へて見るに、政府は、海軍軍令部長が、如何なる意見を以て、帷幄に於ける輔弼を爲したか、を顧みるを要せず、政府自身の意見を以て、輔弼したてまつるべきものである。此の場合、政府は、必要を認めるときは、それが統帥作用でなく、從て政府の輔弼すべきことである、といふことをも、叡聞に達したてまつることを得る。

第二に、適法論の立場に於て考へよう。即ち、假りに、海軍軍令部長が、國防の爲にする作用である限り、統帥に非ざる作用に付ても、帷幄に於て輔弼し得る、とするの立場に立て、政府及び海軍軍令部長の交渉を考へて見ても、政府は、海軍軍令部長が、如何なる意見を以て、帷幄に於ける輔弼を爲したか、を顧みるを要せず、政府自身の意見を以て、輔弼したてまつるべきものである。此の場合にも、政府が、其の輔弼の意見を立てるに先て、法上必ず海軍軍令部長の意見を聽くべきこと、而も、之に贊同し難いとき、之に拘束せられないで、政府自身の意見を以て、輔弼したてまつるべきこと、これは第一の場合と同樣である。然しながら、それは、一般に存する兩者の交渉の問題であつて、特に輔弼を通じて存する兩者の交渉の問題ではない。

之に依れば、海軍軍令部長が、兵力量の決定に付て、帷幄輔弼を爲した場合には、それを違法と解するも、適法と解するも、政府自身は、毫もそれに拘束せらるべきでない、のである。

二　帷幄上奏に對する親裁。　然るに、以上、政府及び海軍軍令部長の輔弼を通じての交渉の問題に關して、注意すべきことがある。それは、海軍軍令部長が帷幄に於ける輔弼として爲した上奏の取扱のことである。之に就ては、海軍軍令部長條例第三條「海軍軍令部長ハ國防用兵ニ關スルコトヲ參畫シ親裁ノ後之ヲ海軍大臣ニ移ス」、といふの規定を參照せなければならない。此の規定の適用の結果は、卑見に依れば、海軍軍令部長が統帥作用に付て帷幄上奏を爲したか、統帥作用

に非ざる軍務作用に付て帷幄上奏を爲したか、といふことに依て、自ら異ならざるを得ない。蓋し、親裁とは天皇親ら處理遊ばされることであつて、其の處理の方法は、親裁といふこと其のことだけでは、定まらないで、親裁せられる事項の性質と結合して、定まるのである。

（一）海軍軍令部長が統帥作用に付て帷幄上奏を爲した、とするならば、海軍軍令部長の上奏に對する親裁といふは、天皇が、其の親裁に於ける意志に依て、直に、國家の意志を成立せしめたまふ、ものと考へられるのである。此の場合、固より、政府は毫も參與するの餘地を持たないのであるが、それで差支ない。何故なれば、其の作用は政府の輔弼の外に在るものである、からである。併し、（二）海軍軍令部長が、統帥作用に非ざる軍務作用に付て帷幄上奏を爲した、とするならば、海軍軍令部長の上奏に對する親裁といふは、天皇が、其の親裁に於ける意志に依て、直に、國家の意志を成立せしめたまふ、ものとは考へられない。其の理由は帝國憲法の法理に在る。帝國憲法の法理からすれば、此の場合にも、前に述べた理由に依り、必ず國務大臣の輔弼があるべきものであるから、海軍軍令部長の帷幄上奏があつても、天皇が、海軍軍令部長の上奏意見のみを聽かれて、直に、國家の意志を成立せしめたまふ、といふことはあり得ない。故に、此の場合の、海軍軍令部長の帷幄上奏に對する親裁に在ては、天皇が、其の親裁に於ける意志に依て、直に、國家の意志を成立せしめたまふもの、とは考へられないのである。然れば、此の場合には、親裁に於ては、天皇が、海軍軍令部長の上奏した意見を御參考遊ばされる、といふの聖旨が下される、と考ふべきである。從て、此の場合の親裁に於ては、通常所謂裁可があるのではない。通常、裁可といへば、天皇が國家の意志を成立せしめたまふの聖旨である。そこで、右の意味に於ける親裁があつた後、政府は、尙ほ、政府自身の意見に依て、輔弼したてまつるの餘地を有するのである。それは必要のことである。何故なれば、其の作用は政府の輔弼に內に在るものである、からである。今の問題たる兵力量の決定に就て云へば、海軍軍令部長が、之に付て、帷幄上奏を爲して、親裁があつた後と雖、尙ほ、政府は、之に付て、輔弼し得る、こととなるのである。

四　帝國議會に對する責任者

以上述ぶる所に依れば、政府は、兵力量の決定に付て輔弼したてまつるに當り、國防に關する事として、法上、海軍軍令部の意見を聽くことを要し、又、實際上海軍軍令部の意見を尊重するを適當とするけれども、若し、其の意見に贊同し難しとするときは、海軍軍令部の意見に拘束せられないで、政府自身の意見を以て、輔弼を爲し得る。此

の場合、海軍軍令部長が、帷幄上奏を爲したとするも、尙ほ、政府は、政府自身の意見を以て、輔弼して差支ない。それが國防計畫（統帥作用に非ざる所の）に關するといふことは、少しも政府の輔弼を妨げるものではない。從て、兵力量の決定に付て、政府は、國防計畫の方面からも、帝國議會に對して責任を有する。帝國議會に於て、兵力量の決定に就て、國防計畫の方面からも、質問し、批判し得る。但、帝國議會に於て、國防計畫に就て、如何なる程度に迄、論議することが、國家の利益であるかは、別個の問題である。今日の如く、帝國議會に於て論議せられる事項が直に他國にも知られる、ことの避け難い國際的事情の下に在ては、國防計畫に就ては、帝國議會に於ける論議にも、自ら一定の限界があるべきである。即ち、國防計畫に就ても、勿論、質問も差支なく、答辯も必要ではあるが、併し、それは國防計畫の内容を逐一明示すべし、といふのではない。それに或限界の存することを忘れてはならない。故に、帝國議會に於て國防計畫に就て論議する者は、國家的見地よりして、愼重なる用意を持たなければならないのである。然れば、今回の問題に於て、現政府が、其の公言するが如く、兵力量の決定に付、回訓に際し、海軍軍令部の意見を參考したけれども、到底其の意見に贊同し難しとして、遂に、之に拘束せられないで、政府自身の意見に依て輔弼したこと、從て、政府が、國防計畫に付て、帝國議會に對して責任を負ふ、といふことは、毫も、帝國憲法其の他の法に違反するものではない。



海の王者と海賊

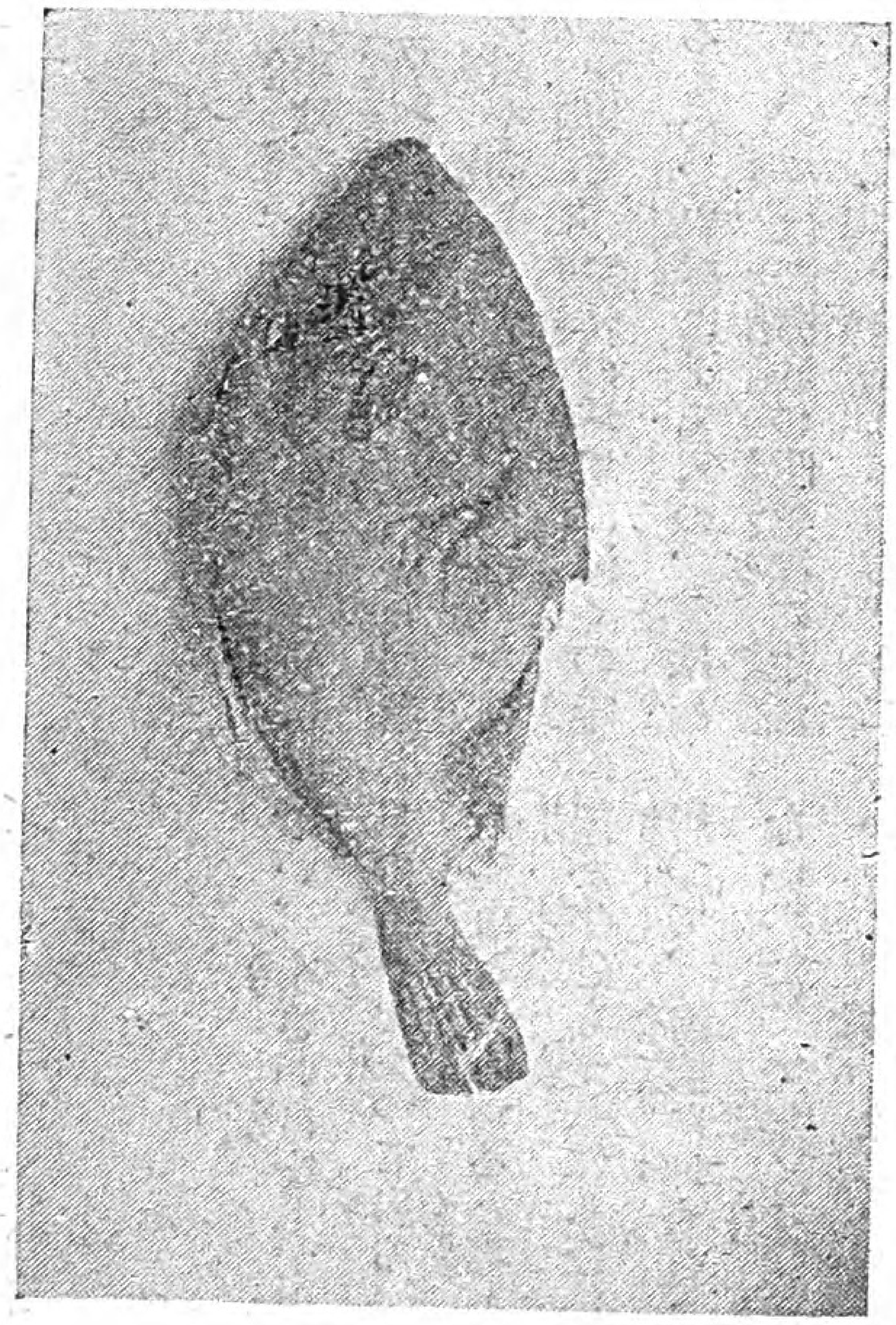
三浦定之助

お魚の職業即ち食糧難の解決と云ふ事は容易ではない。生を海底に受くるもの、陸上の諸動物と同じく弱肉強食適者生存の理は爭はれず、弱きものも強きものも夫れ〴〵の敵を有し、各々攻防の秘術を盡し同族永存の爲めには特殊の專門職業を以て、獨特の持場に働くの唯一途あるのみである。泥中に潜入するもの、岩礁によるもの、又は海面上層に居つて死ぬ迄土地を見ないもの、又は深海底の暗黑裡に生涯太陽を見ないもの等、吾人の想像も及ばない程千差萬別がある。今二三の著名なるものに就て述べて見よう。

砂を吹く魚

砂を吹く魚にはかははぎ、ぐ、たなご其他未だ〴〵あらう。彼等の鰭は軟かで力が弱くつて、一生懸命に走つても潜水夫が後から急いで行けば、追ひ付かれる程度だ。武器と云ふ樣なものも別に持つて居ない。小さい口をして居ても體格はぶく〳〵肥滿して居て、食糧難などの連中を笑つて居る。一體何を喰つて美肉を貯へて居るのか。死んだ鰮などを與へると喜んで貪り喰ふが、海底で之等の魚を捕ふる事は愚か半分も走りはしない。之れは彼等が砂を吹くと云ふ妙技を持つて居つて、海底に埋もれる無盡藏の好餌をとるから、食糧難などは知らないのだ。で早く走る必要もなければ、敵を攻擊すべき武器も要らないのだ。彼等は砂を吹き飛ばすばかりでなく、海藻の藪でも何んでも吹き飛ばす。吹く事が彼等の商賣だ。潜水夫が砂泥の海底に一度行くならば無數の小孔が一杯に出來て居るだらう。此穴の持ち主はごかいいとみゝずとか云ふ樣な裸蟲の住宅である。時には小えびとか小かにの樣なもの、又は毛蟲の樣なものもあるだらう。一度海底に抛り出されるや急に身を匿すと云ふ事が出來ない連中だ。常には孔の入り口に出て來て、海底の有機物を食糧として海水と共に採り入れて居る。時

には自分から出す粘液で泥を固めて一寸位の土管を造つて居る蠕蟲もある。今、水力の強い細い喞筒の水を吹き付くるとすれば、海底の砂底は黄塵の如く水中に舞ひ上り、圓錐形の土砂の穴が出來ると共に、小蟲共は地雷火に罹つた人の如く撒布される。そして再び土中に入らうとして藻掻く所を悠々として拾つて喰べる連中である。ふぐの様な腹の力の強いものもあるだらう。又はかわはぎ、たなごの様な頭は長く尖つて口が小さくポンプの筒先の様な連中もあるだらう。尚ほ海中の砂底は、土砂は甚だ輕い。陸上での半分もないから少しの風が吹くと舞ひ上る程度のものだ。此内に無盡藏の美肉が至る所に匿されて居るのだ。之等ポンプ屋の得意思ふべしである。十邊も吹くときは、一日の食糧は充分に出來るであらう。之等の魚類は常に五疋か十疋打連れて歩いて居る。其内の一疋が吹いて餌料が砂上にばら撒かれると遠慮もなく仲よく食ぶて居る。時によると吹き飛ばした當の魚より、お付の連中が澤山に喰べるが、權利の爭ひなどは同族の間には決してない。否同族のみか他の魚も躡いて喰ひに來るが平氣だ。之れ如何に彼等が食糧に豊富であるかを示すものである。時にはふぐなどが巨萬の大群を爲して、夜間、淺所に押し寄せて來て強大なる腹の力でポンプ屋を開業する。潜水子が早朝の仕事には時に出合はす事もあるが、黄塵高く濁りを爲し、其跡は間隙なく引つ繰り返へされて農夫が畑を耕作したかの様である。之等の魚の小さいものは主として海藻の葉などを吹いて居る。之れに附着して居る小蟲を喰つて居るが、子供がおもちやの水鐵砲を遊んで居る様で可愛らしい。衣食足りて云々とあるが之等ポンプ屋の魚は實に平和のシンボルである。ふぐとは古人がよく名づけた。之れ砂を吹くの意であろう。ふさはしい名である。時にはあんこうなど云ふ魚が砂泥に匿れて居る。彼の頭の邊を吹くと彼あんこうは巧みに頭の前方にある餌料に似たひげをふら〳〵と動かす。一寸食指が動いて近寄るや否や、胃袋の怪物の様な、大きい虎鋏の様な、内に曲がつた歯のある出る事の出來ない長い袋の中に抛げ込まれて仕舞ふ。みしま女郎とか山の神とかおこぜの如く潜水夫など一寸觸れる丈けで氣絶する様な毒刺が内には數本もある。斯様なものも平氣で呑み込んで仕舞ふ。時には胃袋に突き刺して居るのがある。が、平氣だ。胃袋の怪物實に斯様な猛毒の魚を與へて二時間もすると形もない程に消化されて居る。ふ



砂を吹く魚　かわはぎ

ぐの猛毒も厭ひはしない。時には體全體の胃袋に一杯詰め込んで尙ほ足らず、咽喉から之等喞筒屋共の半身が入り切らないで出て居るのも稀れでない。

露天掘の魚

滿洲邊で石炭の厚層が地下淺い所にある時は、一時上土地を除けて其下の石炭を搬出し、其後は順位に他の部分の上土は其跡に埋められて地下石炭が搬出される。之れは露天掘と云はれて居る。若し石炭の代りに甘い餌料があるとして、然も前述の如く海底下淺い土中に澤山あるとする、而して前記石炭に於けるが如き採餌法をとる魚ありとすると、之れを露天掘の魚と云つてもいゝ。之等も平和の魚である、その露天掘はほうぼう、かながしら、みしま女郎の樣な胸鰭の紫色をした丈夫なもので、實に之れは鋤とも鍬とも又しよべるともなるものである。其他體の安定を計る爲めに三本又は五本位の强い足がある。而して尾鰭の力が至つて弱く泳ぐ事も一番遲い魚の連中で、潜水子の近づくや大なる紫色の胸鰭を擴げてわざと水の抵抗を大きくしながらのろ〳〵と歩く連中で、ぎゆう〳〵と怪聲を發するものもある。敵を防ぐべき毒刺を背鰭や胸鰭に持つて居るものもあるが、他を攻撃する樣なものは何物もない。前に述べた樣に小蟲や蝦蟲が海底に滿ちてゐるが、殊に潮流がよく當る傾斜の海底には濃密に肥滿せる好餌料が海底一寸に敷き詰められて居る。之は彼等が選ぶ絶好の鑛區である。海底の工夫達はかながしら等の樣に何千疋と一隊を爲すものがあるが、みしま女郎の樣に一疋又は二疋位のもある。鑛區の中心に强い三本か五本の足をざぐりと突き込んで體の安定を計り、大きい背鰭は緊張して共に體の安定を計る。而して胸鰭の採工具とも土砂運搬器とも云ふべき便利な道具でばた〳〵と砂でも泥でも小石でも輕々とはね飛ばす。一分か二分で半米突位の凹所は放射狀に造られる。上土地が除けられるに從つて甘味い蠕蟲が半身を現はし、慌てて引つ込まうとする奴を食ふに便利な樣に、頭迄扁平になつて居る。又頭の圓い工人共は、口の周りに出來て居る數本のヒゲが自由に働いて吾人の手の如く、食餌を口中に運ぶ。尙ほ小さい餌料が泥砂と共に後方に送り出されたものも澤山あるが、同族のものが御馳走になるのみならず、色々な小魚共が遠慮な

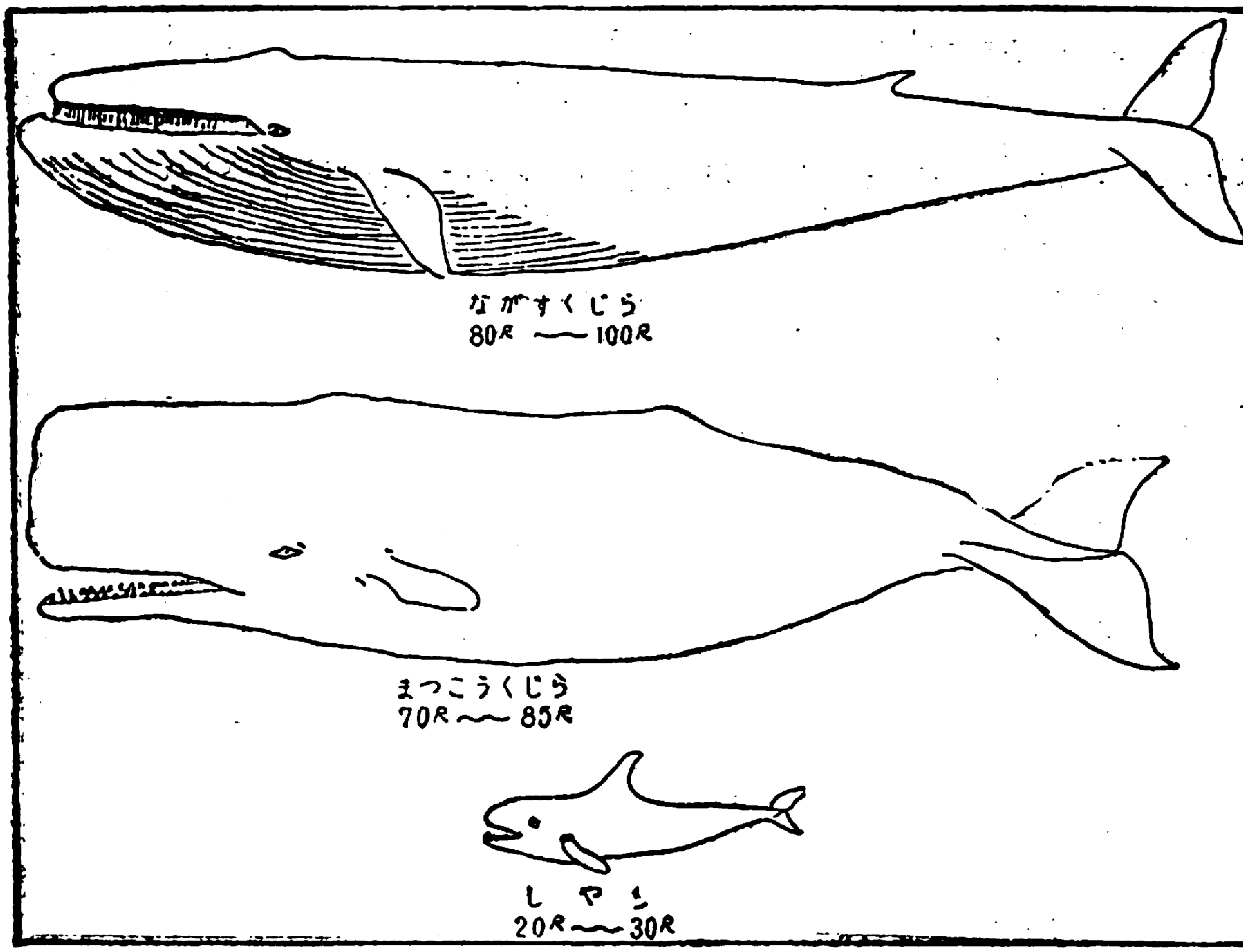


露天掘の魚　かながしら

く頂戴して居る。はぜ、かに、たひの仔などが彼等の居候である。斯くして傾斜のある海底の砂泥は浪のある毎に上から崩れて來る。勿論好餌が一杯混つて居る。疲れると他のものが交代で來る。彼等が作業場は一體に濁りを生ずる。何千と云ふ工夫共が列を爲して砂煙りを擧げて作業前進する樣は壯觀である。恰も一隊の軍人がざんごうに依つて硝煙に咽ぶが如くである。多くは夜間又は未明に作業を終つて、夜が明けるとさつさと沖合深所に安全の地帶を求めて休息する。時にはたこ入道の樣な恐ろしい奴もよく斯樣な砂底に穴を造つて埋れて居る。砂が段々と崩れて來る。入道は手の先きをわざと恰も蟲が掘られた樣にくる〳〵と卷いたり伸びたり苦しむ狀を爲す。蠕蟲と間違へた工人共は、大きい餌とばかり喰へ込む。智者のたこはその手の先を蟲の如く彼等の呑み込むに任せる、否自ら手先を押し込んでやる。而して彼等の咽喉部に於て、二列の吸盤は一時に働いて、魚を捕へるや次ぎ〳〵に恐ろしい手を出して來て、魚はぐる〳〵卷きにされる樣な慘狀もある。然も貪慾なたこは好漁場に於て次ぎ〳〵の交代者を獲る事が珍らしくはない。之等の鑛區作業場は潛水夫がすぐ見分けする。卽ち海底が濁りを發して掘り返へされた蟲穴のない海底の一部が判然と見える。斯樣な附近には海底の工人達の恩惠に預らうとして、集まつて來た魚とか、又は之等工人達を襲ふべく集まつて來た魚が甚だ多いので、釣などやると絕好の漁場である。

海の王者　大鯨

彼等の體格の偉大は云ふ迄もない。小は五〇尺六〇尺から大は二百四十尺に至ると云ふ稀有のものもある。其内のあるものは牛角の樣な丈夫な、何十枚といふ齒をもつて居る。彼等の速力は自働車又は汽車に相當する。厚い油皮の外套を着込んで居るから、寒さを知らない。或るものは八百石の油からなる高價な外套だ。暖かい所では油層の厚さの薄い夏外套を着るものもある。常に大洋に潮吹きながら、强大なる尾鰭のプロペラーを翻へすと、一氣に太平洋を横斷し、又は南洋から北洋に縱斷する。豐滿なる美肉は十萬又は二十萬ポンドに達する。最高等なる哺乳動物の遠大なる智謀を有し、海底の塵埃の如く無盡藏にて、然も馬鹿な低能者いわしとか小えび等を採取する。まことに海なればこそ彼等の巨體を養ふ事が出來るし、又其重體を運搬する事が出來るのだ。一日によく五噸乃至十噸のいわしや小えびを要するが、食糧難など云ふ事は未だ知らない。此ぜいたくな暮しをして居る海のブルジョアは悠々と氣の向く儘に對岸へ洋行を思ひ立ち、又は北極探險もすれば、南方樂洋の遊覽もやる。彼等の日常を養ふ經費の爲めに一疋づゝの鰮を捕へて食べたり、二三疋づゝの小あみを拾ふならば巨資を擁する資本家が一文商賣の駄菓子屋をやるに似て其日の食糧などは到底思ひもよらない。此處に專門の職業がなければならない。彼等はいわしや小えびの群集を見出すや遠卷きにグル〳〵と回る。突然の海



中ツエッペリン襲來に驚き果てた小魚共は、逃るべき何ものも忘れた烏合の集と化す。 滄溟のブルジョアは次第に其周圍を小さく縮めて遊弋し、遂には五噸も十噸もある様な大きい鰮や小えびの握り飯を造り上げて仕舞ふ。 時には海面に一尺も二尺も高くなる程鰮を盛り上げる。 沖のかもめや色々の海鳥が何處からともなく集まつて來て、好機逸すべからずと御馳走に預つて滿腹する。 海の握り飯屋は大口を開いて、一噸も二噸もある大きい小魚の握り飯を口中に抛り込む。 恰もほうきで塵埃を掃き集めてゴミ箱に捨てる様である。 或る時は數百の群鯨が、數千噸の小魚の塵埃を、朝の掃除一回で各滿腹する事もある。 實に百萬の鰮ありと雖も一頭の鯨に敵すべくもあらず、何等武力と努力等を要しない。 斯くて低能な魚類と異なつて、情慾に燃えた彼等は友情に母性愛に又戀愛に大洋を舞臺として躍り狂うて居る中に、彼等は咽喉の穴が段々と小さくなり、唯一の武器たる歯はひげに變つて仕舞つた。 歯があつて咽喉の孔が大きいものもあるが彼等は鬪爭と云ふ事は全然忘れて仕舞つた。 げに鯨は、武力のない豐滿なる美肉で、侵略者を防げない。 彼等に永久の平穩があり得ないのは勿論である。 何日からか武勇の海賊しやちをして名をなさしめて居る。 美食に飽いた數百の王者達のジャズの舞臺は、一度海賊達の聲を聞くや、戀の道連れも親子家庭愛もものかは、悲鳴を擧げて離散し百里の外に狂奔する。

海賊しやち

以上の圖は凡そ同じ比例をとつて大きさを現はした圖である。滿一年もすると鯨の仔はしやち位の大きさになるだらう。未だ乳放れのしない樣な子供大しかないしやち、如何に武勇のシンボルとは云へ格鬪すべく餘りの相異である。彼等の内には丈夫な齒を持つて、又咽喉の孔も大きい連中が澤山ある。百萬の鰮が一頭の大鯨に敵すべくもないのは仕方がないとして、數百の群鯨が如何に武勇の神と云ひ子供大のしやちに抗すべくもないと云ふ事は以ての外である。一體何處が其んなに違ふのか？唯一の絶大なる背鰭である。海賊達の旗指物に戀したか？強力なる背鰭と大なる胸鰭とは、時には機敏に天空に身を翻へして、握り飯屋達が呼吸せんとするとき頭上に落下して呼吸を止める事もあらう。彼等の屈伸自在は前に現はれ、後に現はれ、變現出沒自在で、肥滿した體格で後方が見えないのろま達とか、又は鰯油の五十石も出る樣な大頭をして居て、目が小さくて前方が見えない樣な油嚢の怪物は、到底其敵ではない。鯨の大きい強力なる腭骨は假令ひげで齒がなくとも、一度喰へられたら、細身のしやちなどは背骨でも頭腦でも粉碎するであらうが、單にごみ箱の口に過ぎず、海を掻へす樣な力も用ふるに所がない。貴重なる貨物を積んだ商船が輕快なる驅逐艦に襲はれた樣に、果敢ない最後を遂げて居る。海賊共は一頭分で三千ポンドもある絶好の鯨の舌を仲間で分けて喰べて何萬圓の胴體などは捨てゝ省みない。何んと豪勢な事であらうよ！　鮪と云はず、鰹と云はず、又いるかでもかつをでも、前途に横はるものは苟しくも許さない。悉く彼等の習性を利用して隙も洩さぬ攻撃の陣を敷く。時には銚子の砂濱に何千の鯨を追上げる。東京灣奥の隅田川にいるかの噴水を上げさせる。一週間も十日間もの長きに亘つて、沿岸漁場の期節それぞれにいわしや、ぶりや、まぐろ等々の魚の海を造る。漁人は海の幸即ちしやちと云うて居るも故なきでない。然しながら魚仲間達から見ると、狂暴の限りを盡す、惡まれ者である。

平和の動物と格鬪の動物

前者は愛好さるゝ、人間のお氣に入り、後者は惡まれ者で目付け次第に撃たるゝであらう。穀粒や小虫を喰べる小鳥は愛せらるゝ平和の鳥であり、兎や小鳥を襲ふ鷲や鷹は猛禽として惡まれる。玆には砂を吹く魚、露天掘の魚又は海底の握飯屋の王者共等を舉げて來た。而していつぽやたこやあんこう、又はしやち等を刄物を持つた氣違ひとして取扱つて來た。然し平和の魚が食慾を充たす爲めに幾萬の小動物を屠る事であらう事を考へたとき、後者の猛魚の惡まれ者が、僅か一定か數定の魚を屠つて居る丈けだ。殊に最も惡まれ者のしやちなどは鯨の一頭で一群は食糧を充たすに足るのである。然るに抵抗力のない小さい物を多く殺生する事が平和の魚、平和の鳥など云れては、戰鬪努力僅少の大敵を斃すものは、猛魚とか何んとか云はれて惡まれて居る。海底には平和の職業はない。小者いぢめの卑怯物が其名を冠つて居るに過ぎないのだ。

氷河と科學者

藤木九三

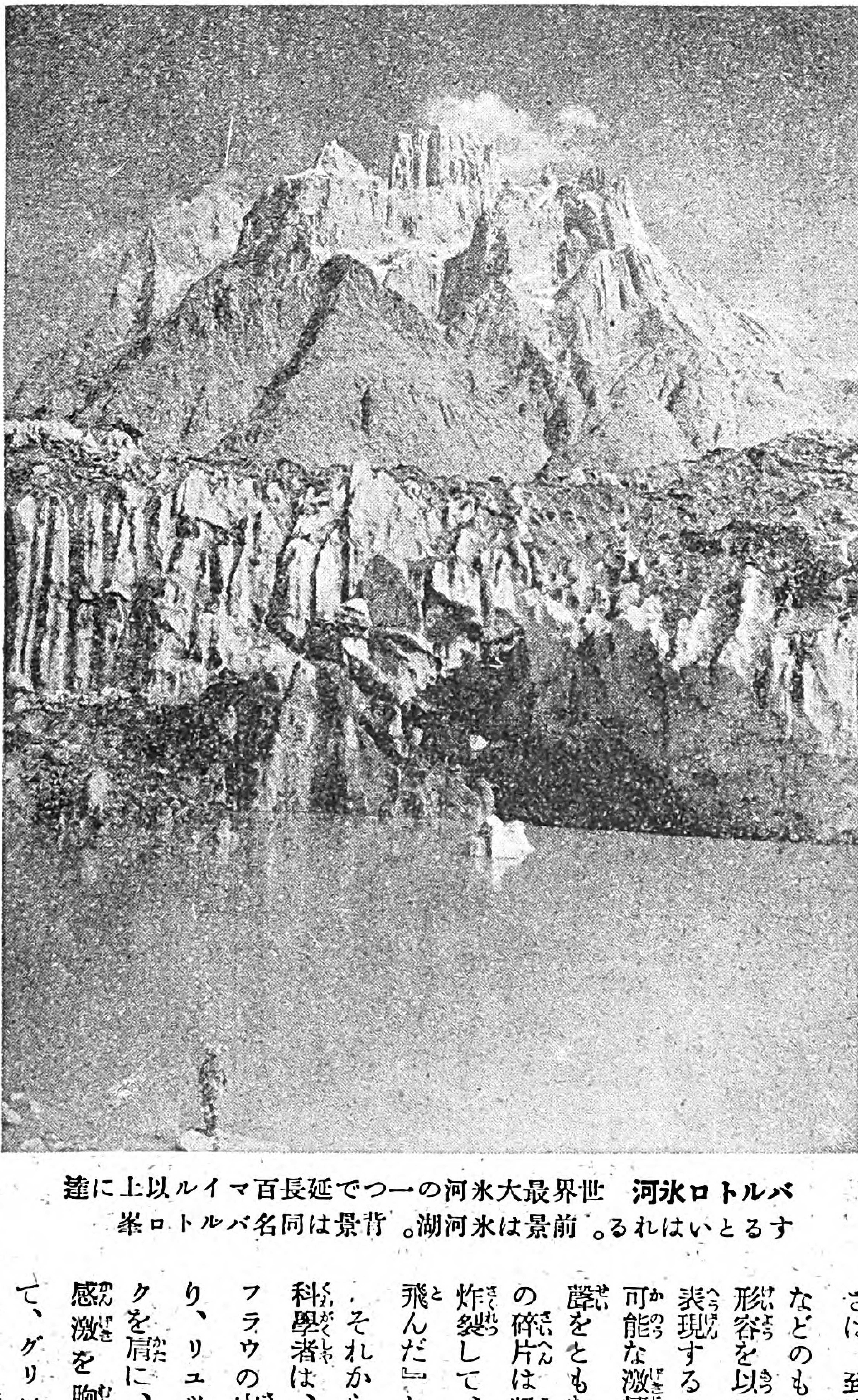
一

一度「山」の魅力にかゝつた者は、生涯その虜になつてしまふといはれる。しかもそれはしばしば、運命的な偶然の機會によつて支配される。かの氷河學者として、またアルパイン・クラブの元勳として、ワイスホーンを初め多くの初登頂にかゞやかしい業績をなしてゐるジヨン・チンダルが氷河研究に沒頭した動機、および氷河からさらに山岳そのものゝ誘惑にかゝり、科學者としてよりは寧ろ登山家としての生涯を送るやうになつたのは、まつたく運命的な動機からであつた。

チンダル教授が初めてアルプスを訪れるやうになつた動機は、千八百五十四年にスコットランド地方の或るスレート（Slate）採取場を訪れたことに原因してゐるから面白い。氏はスレートの剝裂性について非常な興味を感じ、その石片を採取してロンドンに持ち歸つた。そして數箇月に亘り、彼の實驗室において種々研究してゐる內に、ふと氏の頭に問題解決のヒントがひらめいた。それはスレートの剝裂性そのものが、氷河の構成とある種の關聯があるかに思はれたのであつた。そこで研究心の旺盛な科學者氣質から、氷河研究といふ新らし課題に沒頭することになつた。其處で氏は直ちに、有名な學友であるハックスレー教授をそゝのかして、千八百五十六年にアルプスの氷河を訪れることゝなつた。

二人の科學者は、先づスヰスに向つて旅立ち、ユングフラウの麗容を正面に仰ぐインターラーケンの上の旅舍に陣取つた。ハックスレーはさすがに學者らしく、極めて沈着いて何かと仔細に研究してゐた。しかるにチンダルの方は、何うした譯か、甚くものに感激したかのやうに始終そわそわとしてゐた。事實その時の彼は、もはや科學の問題なんかは少しも念頭になかつた。彼は、はじめて接する大自然の驚異的な景觀に、茫然自失の形で瞳を凝らして見詰めた。それ以來、彼はアルプスの美を追及するために、自らの全生涯を献げても悔いなしとの

決意をするに至つた。そして久しく山容を仰いでゐた彼は、遂に觀望するだけでは我慢がしきれず、未だ登山家としては何等の經驗もなかつたに拘らず、彼は氷河で埋められた岐谷をさかのぼり、萬年雪を踏んで登つて行つた。其處には恰度、巨きな岩が重なり合つて避難所として格好な場處を發見し、その岩蔭に身を潜めてあたりの雄大な景觀に見とれてゐた。その時不意に、眼のあたりに大なだれが落下した。それはチンダル教授にとつては初めての經驗であり、この刹那的な出來事に直面した氏は、さすがに科學者としての鋭い、好奇心は、瞬間よみがへつた。そして前後二回にわたつて斷續的に崩落したなだれの實驗を、彼はペンをとつて仔細にノートすることを忘れなかつた……『その崩落した刹那の壯さは、到底、咆哮などのもの優しい形容を以てしては表現することの不可能な激情的な爆聲をともなひ、氷の碎片は粉微塵に炸裂して、四方に飛んだ』と。



バルトロ氷河　世界最大氷河の一つで延長百マイル以上に達するといはれる。前景は氷河湖。背景は同名バルトロ峯

それから二人の科學者は、ユングフラウの山下を去り、リユツクサツクを肩に、敬虔な感激を胸を祕めて、グリンデルワルトから峠を越えてマイリンゲンに出で、更にグリムゼルからローン氷河を溯つて大氷原を彷徨し、其處でローンとラインの兩水源の分岐點を探檢したぞ。

して二人は、朝に夕に接する神秘なアルプスの榮光に接しては、何日の間にか心からなる山岳禮讃者としての感銘を烙印づけられて終つた。

二

『未だ見ぬ世界への憧れ』といつた科學追及と思索の念が、アルプス探檢の流行的氣運を刺戟し、多くの科學者の注意がこれらの高山岳地域にそそがれた最も大きな「謎」は、氷河の研究といふ課題であつた。しかもそれは、見方によつては世界的な驚異として、當時の學界に異常なセンセーションを捲き起した。

アルプスに、ドラゴンや妖精が棲んでゐるなどといふ迷信が行はれたといへば、今では『なんだ馬鹿らしい』と誰も相手にしないが、ウヰムパーがマッターホーンを初めて登つた時代といへば然う古い事ではないが、氏の著書によると、當時においてすらマッターホーンの頂上には前世紀の古城趾があり、そこには澤山の妖怪が棲んでゐて、若し頂上を極めやうとするものがあれば、彼は盛んに「つぶて」を投げつけるといつて、マッターホーン名物の岩なだれを怖れてゐた。そしてウヰムパーに先を越され、しかも頂上から岩塊を投げつけられて散々の態で逃げ歸つたイタリーの獵師連中が『今日こそはマッターホーンの妖怪を眼のあたりに見た。奴等は盛んに石を投げつけた……昔からの傳説はまつたく事實だ!』と告げたといはれてゐる。

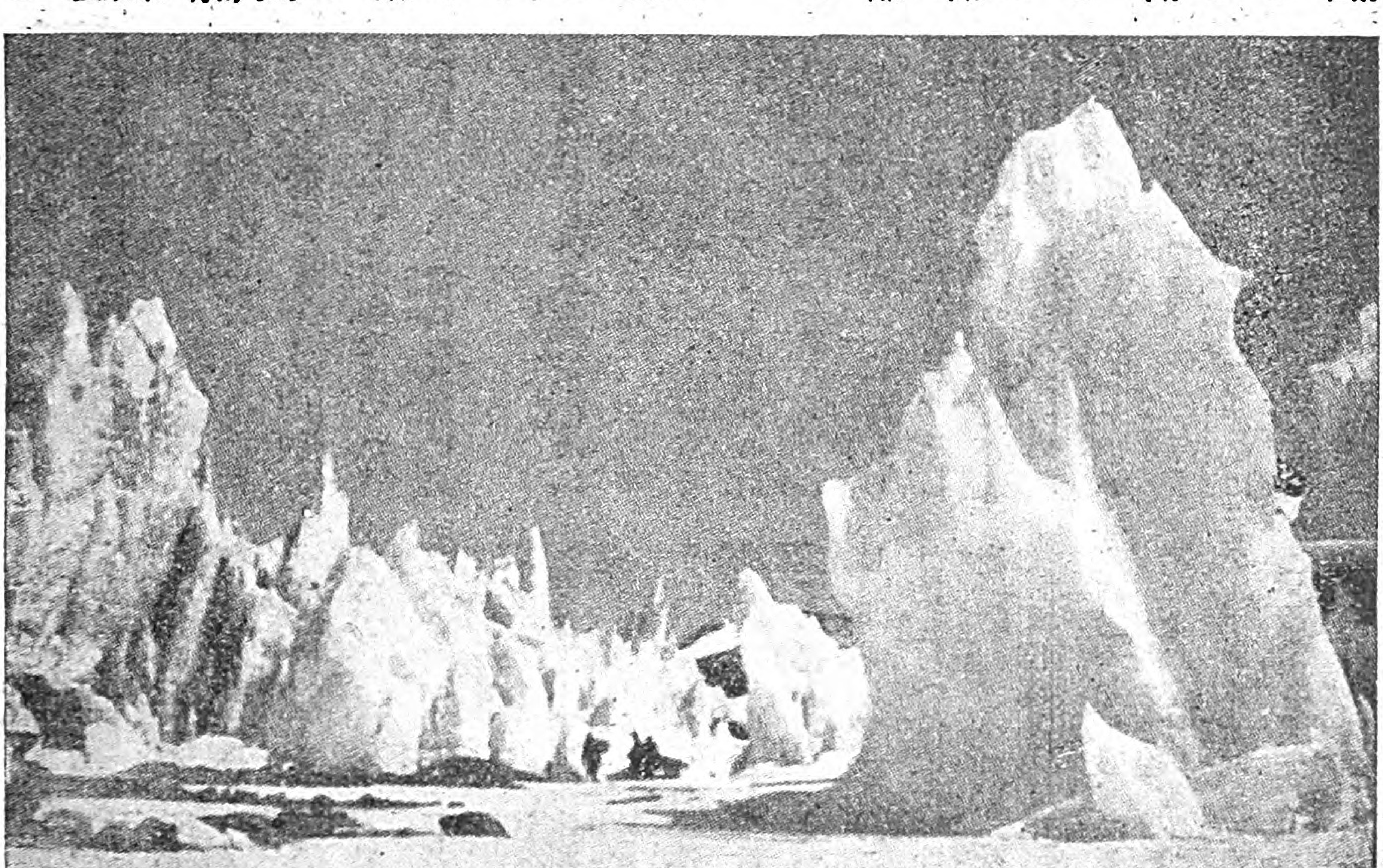
かうした曖昧な時代にあつて、アルプス山間の住民が氷河の流動について、いろ／＼と怪奇な傳説や、怖ろしい迷信に支配されることは當然であつた。それだけ、一方また科學者たちが競うて氷河の研究に沒頭して、『生きた氷河』(living glacier)の正體を極めやうとしたのも興味ある問題に相違なかつた。

氷河研究の初期にあたつて、科學的な實驗を行つた最初の人として有名なのはスヰスのフギ教授(Prof. Hugi)である。氏は千八百二十七年にウンテルアアル氷河を訪れ、そこで記念すべき最初の實驗を行つたが、その方法がまた頗るプリミテイヴで振つたものだつたといはれる。ウンテルアアル氷河は、ベルニース・アルプスの王座と呼ばれるフインスターアアルホルンの山脚に當り、フインスターアアル氷河とラウターアアル氷河の二つが合流してウンテルアアル氷河となつて下るのであるが、恰度二つの氷河が合した中央の部分に、三角洲のやうに、澤山の堆石が浮島を作つてゐる。フギ教授はこの中洲になつた堆石の浮島に目をつけ、氷河が流動する場合は、この浮島も一緒に流動する筈であると考へ、その島の上に小さい小屋を建てることを考案した。そして一方、この小屋を中心として、氷河の兩方の岸に固定した見通しの位置を設けて、その小屋の移動を測定して氷河の流動の速度を觀測するといふ仕掛であつた。

この實驗の方法たるや隨分氣の長い話で、小屋が建てられたのが千八百二十七年で、フギ教授は小屋が出來、そして兩岸の見通し線を定めてその年は山を下つた。そして三年後の千八百三十年に、再びウンテルアアル氷河を訪れて例の小屋の位置が遙かに下流に移動してゐることを知り、先きの見通し線との距離を測量することにより三年間に流動した氷河の運行速度を計算したのである。そしてその結果三百フ

キートといふ數字を得た。更に第二回の測定は、それから更に六年を經過した千八百三十六年に行はれた。そして最初小屋を建てた年から通算して九年間に二千三百四十五フヰートの距離を移動してゐたことを知つた。第三回は最初から二十四年目の千八百四十一年で、この期間中に氷河の流動した距離は實に四千七百十二フヰートに達してゐたことを測定したのであつた。

フギ教授は、またこの外に冬期における氷河の運行狀態について貴重な實驗を行つてゐる。當時、氷河の流動といふ事實は誰も疑ふものはなかつたがそれは雪や氷が溶解する春から秋にかけてのみ行はれるもので、酷寒の冬期にあつては決して流動はしないといふ說が一般に信じられてゐた。しかし教授は勿論この議論には反對であり、氷河の流動作用は多くは氷の容積から來る自重と壓力によるもので速度の弛緩はあるにしても、四季を通じて運行を



氷の迷宮　ヒマラヤ山中のロンブク氷河中の奇觀

續けるといふ理論の下に、幾多の危險を冒して冬期の實驗を高山岳地帶で行つたのであつた。そして教授は、千八百三十二年の一月八日、山麓の牧夫や獵師から成る八人の人夫を伴れ、三週間分ほどの食糧を携へてシュテイールエッグの小屋に上り、そこに十三日間も立籠つて冬期の氷河運行に關する實驗を行つた。この間教授はストラールエッグ・ヨッホ（三千三百五十一メートル）に登攀し、またメンヒ・ヨッホを志してベルグリ岩の下まで到達してゐる。フギ教授のこの時の山行は、實にアルプスの冬期登山における顯著な最初の記錄である。そして後年近代的な冬期登山の先驅者として知られたパウル・モンタンドン氏が、シユレックホーン群峰中の一處女峰の頂を極め、そのピークにフギホーン（Hugihorn三千六百二十二メートル）の名を冠したといふことは、氷河學者として、同時に冬期登山の父としての

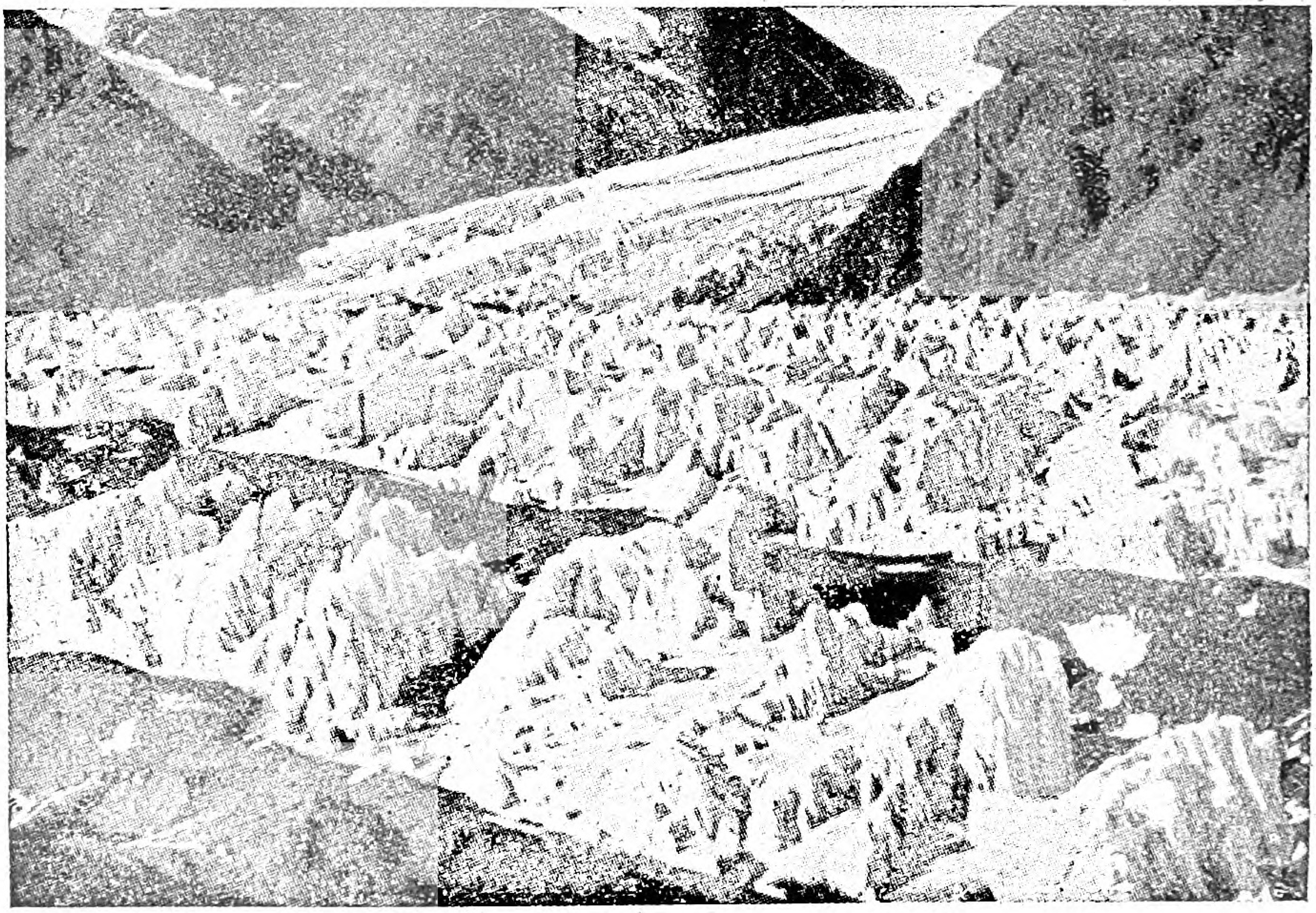
教授の榮譽を記念する最も快適な方策だと云はれてゐる。

この外、なほ教授がフインステルアアルホーンの初登頂を企て、途中脚を痛めて引返した地點にはフギ・サツテル（Hugisattel）の呼稱が現存してゐる。

三

この外、アルプスの氷河問題について、種々の觀測や實驗を行つた科學者にはアガジツ（M. Agassiz）フオーブス（James Forbes）および先きに紹介したチンダル教授などがある。これらの先覺者が行つた業績について一々記することは、この單文の目的ではない。しかしモン・ブランのアクシデントに關する有名な『フオーブスの豫言』を除外することは出來ない。

アルプスの最高峰モン・ブラン（一萬五千七百八十二フヰート）が、ひとたびジユネーヴの科學者



氷山の行進曲　エヴエレスト遠征隊が第二キヤムプを設けた附近の東ロンブク氷河の一部

ド・ソシユールによつて頂が極められて以來、アルプスの登山熱は一時に勃興の氣運を生じ、あらゆる種類の冒險家が競うてモン・ブランの登頂を企てることとなつた。その中に露西亞の科學者で、ヨセフ・ハメルの一行が八人の案內を伴れてモン・ブランの登頂を計畫した。そして一行はグラン・ミユーレの岩場で露營したが、その夜は劇しい雷鳴に襲はれ、翌日は天候險惡のため遂に二晩を其處で過ごす事となつた。第三日が來た。しかし依然として天候は不安で、一行中には引返さうといふ說も出た。しかしハメルと二人の英國人は、八人の案內人の案內を促して登頂を決行することとなり、幾多の危險を冒してやうやくグラン・プラトーに辿り着いた。頂上は直ぐ眼の前に仰がれた。で、一行は更に勇を鼓して舊道（ancien

passage）傳ひに急な壁狀の雪の斜面を一歩一歩と登つて行つた。突然ハメルは、足の下の雪が動き出したやうな氣がした。と、次の瞬間には斜面全體がずる〳〵と辷つて行つた。最初は速度も緩かつたが、『しまつた、雪崩だ！』と氣が付いた時には、もう何うともする事が出來ず、一行十一名は忽ち大雪崩に浚はれて急な斜面を辷つて行つた。幸ひハメルおよび同行の二英人は危難を免れたが、八人の案内中の三人は、斜面の脚部に魔の口を明けたクレグアスの中に投げ込まれて、救助はもとより、その遺骸すらも探し出すことが出來なかつた。……

この椿事があつてから二十幾年かゞ經過した。そして犧牲者の遺族の悲しみも、何日とはなしに薄らぎかけやうとした。その頃、恰度フオーブス教授は、自分の研究題目である氷河問題についての實驗を試みるためにシヤモニーを訪れた。何かの機會に、村の有力者の一人がフオーブス教授に尋ねた。

『貴方は、氷河の動くことについて研究されてゐる相ですが、あの今から二十何年か前に山で亡くなつたガイドの死體は、いつたい何うなるのでせう？』

するとフオーヴス教授は、些つと首を傾げて考へてゐたが

『崩雪に襲はれたといふ場處は何の邊だつたかね。』と訊きかへした。

『あのグラン・プラトーの上の舊道でさア。』

『さうだつたかね。』

再び、教授は些つと考へてから、次のやうに答へた。

『それだつたら、四十年目ぐらゐにこの先きのボッソン氷河の裾に多分出て來る筈だ。その頃氣をつけて探して見給へ。』と答へた。

フオーブスがこの豫言をしてから、更に十幾年かを經過した。その頃には、もう先年のアクシデントに危く一命を全うしたハメルも、二人の英國人も、犧牲者の後を追つて他界の鬼となつてゐた。ただ一人、あの時の危難に命拾ひしたガイドのヨセフ・コーテといふのが、今は七十を越した老年で生き殘つてゐた。しかしフオーブスの豫言なんかも、既に忘れられて誰も氣に留めてゐるものはなかつた。しかし、事件があつてから恰度四十一年目になる千八百六十一年のシーズンが訪れた。そしてある日、シヤモニーのガイドの一人が何心なくボツホン氷河の末端を歩いてゐた。と、偶ま彼は氷河の片隅で着物の切れ端のやうなものを發見した。不思議に思つて更に附近を調べて見ると、今度は人の片腕が現はれた。これは大變だといふので忽ち大騒ぎとなり、村の人々が澤山立會つて大搜査が開始された。すると頭蓋骨が出る、ランターンの破れだの、ボロ〳〵の手帳、靴、ロープ、手袋などに混つてアルペンストフトの折れたのを握つた儘の腕が出て來る。そしてこれ等の發見された遺品によつて、それは明らかに四十一年前にモン・ブランの頂上の直下で遭難した三人の案内の遺品であることが立證された。もちろん、唯一の生存者であるヨセフ・コーテも杖に縋つて現場にやつて來た。そして發見された遺品の數々を一々檢證しながら、三人の昔の友の苦くて勇敢だつた姿や、また怖ろしかつたあの時の崩雪の光景を想出し老いの眼に涙をたたへたことだつた。

——かくして、フオーブス教授の豫言は的中し、人々は今更のやうに感激にうたれた。

女の廢る藪

岡田禎子

三人寄つた文珠の知慧を以てして見れば、成程これは少々無策であつた。めい／＼に卅五圓、合せて苟しくも百五圓の生活なんだ。い丶年をして、學校も濟んで、仕事も持つてゐるのである。下宿屋の女房や、その女房の夫や、その夫妻の子供なぞを相手に、斯くも我慢を重ねて渡り合つてゐなければならぬとは馬鹿らしい。素人下宿と云ふのが惡いのかも知れない。とまれ、自分も借家人のくせして、一杯に使つても廣過ぎもしまい部屋々々を無理に片づけて、難儀々々拵へた空間で、小遣ひの少々も捻り出さうと云ふ類の一家は、親切なら親切が、冷淡なら冷淡が、喰へたものではないのである。せめてうち丈は自分のものを！　と事の拍子には慨かれる。二人ではそれも無理かも知れぬが、お誂へと三人揃つてゐるのだ。何を別々に歎いてゐる事があらう。寄らう、寄らう、持ち寄つて一軒持たう、心利いた婢を求めて。

斯うして貸家探しが始つたのである。家賃はまあ五十圓迄。飛びつく樣な家になら、も少しなら拂つてもい丶が、その廣狹に對しては成る我慢はしよう。只、お互ひ同志、決して邪魔し合はない三ツの部屋が必要である。それへ茶の間と女中部屋。玄關の必要は無いが、玄關なしの家を見附ける方が困難なら、これは負けとかう。して見ると都合六間の家に成る、六間。六間。それ以上は困る。掃除の時間と戸締の神經とに、誰も家賃を支拂はうとは思はぬのである。――さう云ふ家を搜す。

搜索の第一日。

さても空家の多いこと。家も失業すると見える。而も求めるサイズ、ごなんの先頭と見えて、失業者の樣に多い。

二階六疊、二疊。階下八疊、四疊半、三疊、二疊、臺所、風呂場、物置……家と云ふものはこんなにも可愛らしいものか！　各室がび

つたりと寄添つて、譲り合つて、頼り合つて、まとまつて……何れを何う離しても化けて出られさうである。

なんて素敵な二階なんだらう。六疊には一間の押入に一間の床、南日を迎へて、兩室ぶつ通した縁、東と西に窓。その太陽との仲の善さ、若しこの北側へ窓を抜いたら、太陽にひかれて軌道の變革を志すかも知れないのである。感心な見所は便所の位置にある。玄關の傍とは巧くも考へたものだ。台所とはあべこべの、通路に何の室も犠牲にしない。玄關に續く八疊。家主余程苦勞人と見える。此處にも、床傍にちやんと一間の押入を忘れない。縁が有る。庭が有る。庭に相違ない。跣足で下りれば土が踏める。夜店道樂にも事缺くまい。眞中の四疊半は云はずと知れた茶の間。次の三疊は女中部屋、このれんぢから朝日が來る、女中にして家の初陽を享受し得るのである。そして五十圓！　而も、「さう云ふお方でしたら」と、巧くも仕手の直踏みをやつてのけた、隣家に住む家主の、未亡人らしい婦人は、五圓位負けさうな口吻なんである。宜しい。凡て宜しい。

文學士。「だけど、これぢや二人きや入れない。まさか、二階を二間に使ふ心算ぢやないでせう！」

繪師。「アハア、成程。又だ。」

文學士。「又よ。推ふんだけど、これ程聰明にして、主人、何故あすこを、せめて四疊半、一室として役立つ廣さにしなかつたらう、あの二階の二疊さ。」

先生。「今朝からこれで幾つに成つて、若しこの二疊が、或は三疊が一室として使へるなら、と云ひ合つたの？——もういゝ加減で判る時よ。無いのよ。そんな家は有りません。隨分澤山家を見た。それでやつと判るなんて……ね、それは然うなのよ。これらは、この諸々のハウスなるものは、つまりホームの象徴なのよ。家族制度のね。一人の主人が有る。そしてひとつの生活が有る。その主人に傅き、ぶる下り、つまり相關聯する女房以下のメムバアを引率する。一人の男のひとつの生活なのよ。そのひとつの生活に、あの二疊が何故四疊半でなければならない？　多分二階は主人の部屋でせう。あすこで靜かに讀み書き、必要なら考へもする。何の不自由が有つて？　間違つてゐるのは私達なのよ。ひとつの生活のために設計された家へ、三つの生活を持ち込まうなんて、ね。」

文學士。「すると何うなるの、この八疊？　奥さんの部屋！」

繪師。「乃至は客間。一帳羅の簞笥、カリンの卓子……よりは長火鉢の方がいゝ。さう云ふ客間さ。」

文學士。「この縁に陽が訪れるなら、座布團ごとゐざり出て、脊の君を送り出し、朝の片附も濟んだ閑散な日を……」

先生。「婦女界を讀む。」

繪師。「又風が通ふなら、籐椅子たと置いて、異性の友とビールを酌む。」

先生。「この庭にはコスモスが咲いて、簞笥の小抽斗には、小きざみ

な數字の丹念に並んだ郵便貯金の通帳……」

繪師。「可哀や妬けるか？」

先生。「何のことは無い。足を棒にして家を探し、行く先き〳〵で、實はのろけられてゐたんだなんて……」

公衆道德もさる事乍ら、これでは耐らないのである。ぺつと前庭に唾する。その前庭には、コスモスなどに見識りも無ささうなかたい土が、無愛想な瘤面を展べて、前住者の落行く先を暗示してゐる。

さう、何も妬く事はなかつたのかも知れない。これは時代の拔け殼かも知れないのだ。それは、結構な世の中も有るには有つた。次三男が、長男でなかつた自由を謳歌した時代。娘が緣談に憂れた時代。男と云へば皆お嫁さんを貰つた時代。お嫁さんと云へば安心立命の境涯で有つた時代。その若い二人を中心に、親だの、子だの、幾つもの細胞が相寄つて、ひとつの生體、家族と成つて、すつぽり斯うした家に納つてゐた時代。凡てに廢る藪の無かつた時代。――止め度の無い勢と云ふものが有る。そのなつかしい生體の、各細胞を結んでゐた、さしも丈夫らしい間質も、今と成つては枯れる許りなのだ。ひとつ〳〵の細胞は、見棄てられて、追ひ出されて、仕方が無い、ひとりで泳ぎ出す。或は泳ぎ出さうとする。家族は解體し、家は拔け殼に成る。何れは彼等も單細胞動物として、適當の殼を持つ迄に完成するかも知れない。する事だらう。遮莫、今日只今に於ては、つひ放心して拔け殼にも妬かれるのだ。

先生。「私辭職するから、私の俸給をそつくりそつと彼に增俸して呉れないものかしら。すりや結構暮せるんだに。」

繪師。「え？　見つかつた？」

先生。「直ぐ見つける、然うと決れば。」

繪師。「そして生涯馘首にしないで、子供の數と共に段々出世をさせて呉れて、え？」

文學士。「これ〳〵、少しはおつゝしみ。さう吾身許りを歎いては見ともない。目を開いて御時世をごらんなさい。生れ度い者の出生難、學校へ行き度い者の入學難、仕事の欲しい者の就職難、威張り度い者の君臨難……え、何處が手鍋提げ度いあんたの結婚難と違ふ？」

繪師。「止めませう、斷然！　もう家なんか探さない。そして待ちませう。斯う廢り者が增えたんだから、早晩藪も出來るに相違ない。」

文學士。「さう云へば、あすこはもう詰つたかしら。あの、大塚の方へ出來るとか出來たとかの、あの……女の廢る藪？」

先生。「アパート？――でもね、やつぱり家が欲しかつたりするの、病氣かしら？」

繪師。「あゝ。乳と一緒に吞み込んだ黴菌。――制腐の法が無いなら、負けちまいなさい。へのへのもへで『彼』を決めるの。いつそ、あの飜譯先生でも何う、あんたよりちつとばか下手だと云ふ？」

文學士。「それ〳〵。斯う女つぽいんぢや全く並居る者がやり切れない。」

先生「重々申譯ないんですけれど、察しても下さいな。共稼ぎなんてんぢや、コスモスも茂るさいし、長火鉢のほこりも拂へさい。」

繪師「我慢おし。何時迄も稼がせはせん。わしも男一匹ぢや。」

先生「駄目。この頃の青年て、みえにもそんな事云はないのね。と云つて、獨りで終る心算でもゐないんだし……男一匹に成る迄の保障を、その、やがて迎へるお嫁さんに期待するのよ。」

繪師「要するに、手鍋提げても、とは思はないのさ、あんたも『彼』も、誰も彼も。い、ごなんの胚胎する所。……」

さう、それは然うに違ひないのだ。誰も手鍋提げやうなぞとは思つても見なかつた。何と云つてもまだ數の少い女文學士、私立とは云へ、ドルの國の息のかゝる母校に、修業に出した後取の樣にして迎へて吳れた壇があるのだ。つまり、めりけんお喋りを大儀がらず、頸に十字架の紐を忘れさへしなかつたら、ゆく／＼は教頭に迄高まり得る壇なんだ。結構ではなからうか、手鍋のために、わざ／＼手を擧けて降りて來る要が有らうか。

繪師に至つては、その原因と結果があべこべなんだ。繪の畫けると云ふ事は、眞に幸ひな偶然であつた。看板としては持つて來いの物だつたらしい。何にしても彼女は、彼女の生活に「彼」を入れない、手鍋を忌避する事の申譯を、ひとつ見つけて來なければならなかつた。學校へは澤山行つたのだが、學者に成らう、なぞと云つたんでは誰も承知しやしない。餘技の繪の方がまだましだ。其處で採用して看板とした。と云ふのも、彼女は曾てお祖母さんを持つてゐた。お祖母さんは山を持つてゐた。山には樹が有つた。亭々と天を犯す杉が千二百本許り。その樹は月々彼女に豐な下宿代を送り乍ら、永久に千二百本でゐるらしかつた。然うと決れば、何も身を屈して陪臣に成る必要はないのだ。彼女は天下の直參たらん事を欲した。世の荒波を說くなかれ。二重の主人故に、だぶつて來る波は更に烈しからうではないか。更に、家庭と云ふ小さな世界で、あつちこつち、數多い壁にぶつかり返へして來るその波に至つては！ この看板に依る韜晦は成功した。三年續けて、帝展會場の壁面を占めて來たお蔭で、今は大方の後生屋共に眼つぶしを吳れる事が出來た。而もこの壁面、女性への變節をさへやらなければ、最早彼女を振り落すことも無ささうだ。然らば、折角掲げた看板の蔭で、彼女の眞に欲したものは、――數の猛者、多分。

先生が、潔く手鍋と妥協出來ないのも、こんな左右に挾まれてゐるので有つて見れば是非もないのだ。「娘の子が一人で東京なぞへ」出て來た罰だらう。それと云ふのも、學校で必要以上の成績を擧げたのが惡いのだ。世の中へ出ると云へば、卒業生のピカ一として、奔走に疲勞する間もなく、堂々と母校へ殘される事に成つたりしたのが惡いのだ。今では何うやら、生れた家へは納り切らない嵩に成つて了つた。斯う成つた子を、親としても何うしてやれやう。昔から「學校の先生」に任してある子なのだ。今更頼られたんでは、親としては少なから

ぬ重荷である。早く身を定めなければなるまいと云つた所で、親の捕へ得る様な縁談は、親の眼に見ても、威張つて推薦出來たものではない。無理にも強ひ度い様な縁談は、見つけてやりやうも無い親なのだ。然うとすれば、何を親の方でぢたばた手出しをする事が有らう。細い脛をかぢるとか、弱い面に泥を塗るとか、親を困らせる様な行狀の、別に有る譯でもないのだ。何れ考へも有るのだらう。悧巧な子は自儘にさせて置いた方がいゝのである。――彼女にして見れば、これは愚かな勝負をやつたのかも知れないのだ。今にしてこんな思ひをする程なら、父母の家で、おとなしく店の味噌でも手傳つて、水の流れる様に「彼」を待つてる方がましだつたかも知れないのだ。仲間の味噌屋にも、年加減のいゝ若旦那なら不自由はなかつた筈だ。斯う成ると、親と親とで云ひ交して置いても果れなかつた、親と親の開化な無鐵砲が怨めしい。田舍の女學校を終つた時、直ぐ縛りつけて果れゝばよかつたのだ。尤も、とつちめて、縛りつけて果れる分には、今でもまだ必ずしもおそくはない。押しつけられる物には、眼をつぶつて受けると云ふ法がある。眼を開いて自ら撰ばうと云ふのでは、つひ大儀で、手鍋へは手が出まいではないか。茫漠と當の無い待人をするよりは、高等教師の檢定でも取つて置かうかと、つひ思つたりもするのだ。

文學士。「いつそ左傾するといゝ。お次さんをごらん。何う見たつて吾がコスモス先生よりは出鱈目だ。頭腦は云はずもがな、顏も性格も……肝心のマルキシズム理解にしたつてさ。そいで何う、捕へた相手と云へば……私あの人好きさ。大山閣下の若手ぢや一番本物だ。篤學の士で、さ。」

先生。「それ！三〇年型七不思議ね。ナツプの驍將を射とめて同窓會を睥睨してゐるお琴ちやんにしたつて、あの心理的鮫肌で！　だつて坂田さんて云へば、ナツプ切つての藝術家ぢやありませんか。」

文學士。「だけど、連中何うして食べてるのだらう。あつちの非潜行運動者なんて、やつぱりロシアから支拂はれてゐるのかしら。」

繪師。「疎いな、流石仙台上りは。名だたる資産家ぢやないか、彼も彼女も。」

先生。「それなのよ。なればこそ後顧の憂ひなく左傾出來るのよ。私なんぞ、だから、左傾しようにも金が無くて出來ないんだわ。」

繪師。「金に怨みは數々ござる……」

文學士。「何う、いつそあんた達二人で結婚なさいよ。出雲へは、新婚旅行に一寸廻つて會釋しとけばいゝでせう。お仲人、私でよければ。」

繪師。「ウイル・ユー？」

先生。「何れそんな事になるんぢやないかな。」

繪師。「おう、おう！　ならば發奮して、今年の繪、二人の祝福を畫きませう。題して、『吾等のリンゴ』。百號、千圓と出てやる。第二の原罪てんで、この秋の人氣一手にさらつちまふから。そして屹度賣れる

から。ヒヤ〱、本當に何か儲けさうだ。」

先生。「あすこへ買はすといゝ。その大塚の藪のホールへ。……」

繪師。「その藪の話しだけど、昔は、村だの、少し大家になると、一軒の家の中に必要な藪が有つたのね。文學士は都育ちだから、かてゝ加へて、物の書で見んことは判らんと云ふぼんくらだから知るまいが、あんた、コスモス先生、おくになどでは何う、そんなの見た事あるでせう。」

あれこそは藪者に相違ないのだ。吾々の物心ついた頃、廿年も前には、村はそんな人間で何となく豐かな感じがしたものだ。彼等は、新吉のぢいだの、おすみばあだの、上の藤さんだの、權現の太郎だのと呼ばれた。彼等は木の股から湧いて出た樣であつた。蟻の樣に、おこぼれからおこぼれへと渡り歩いた。と云つて村を遠くへは出ない。又決して乞食ではない。何かごとには、猫の手並に提供する、併しとにかく自分の勞働で、食つてゐたには相違ないのだ。過去へと同樣、現在にも未來へも、係累と云ふものを持たなかつた。多くは、何處かの家の婚禮とか葬式とか、そんな日の振舞酒を過して、翌朝起きて見たら、畑の中とか、社の床下とかに死んでゐるのだ。村葬で送られる。

――家の中がまた同じ事であつた。納屋とか納戸とか、何處かそこらに暗い隅が有つて、「うちの子でない」家族がゐたものだ。彼は子供を肩車に乘せて、村興業の芝居や相撲を見せに連れてつて呉れたり、立前の餅を拾つて來て呉れたり、盆彼岸の墓掃除をしたり、山へ牛馬を送迎したり、傭人を指揮したり、米を賣りに行つたり、横着な乞食を、三度に一度は說法したり、してゐたものだ。彼女は彼女で、お蠶の手傳ひをしたり、解き物をしたり、洗濯をしたり、豆を熬つて砂糖にまぶして瓶に詰めて、少しづゝ紙包みにして呉れたり、蓬を摘んで來て餅を作つて呉れたり、古綿を整理したり、燒米を食べて水を呑むと宜しく有りませんなぞと教へて呉れたり、藏の蛇が出たら拜んで通しなさい、なぞと云つたりしてゐたものだ。陽の光が強くなつたのか、窓が大きくなつたのか、衞生思想の發達か、村にも家にも、今はもうそんな大きなゴミを蓄へてゐる隅はない。清掃屆いて味もそつけも有りはしない!

文學士。「それを『味』だなんて觀ずる所、何うもお里のかくせないあんたの山持根性さ。それこそ、彼等ゴミにとつては呼吸もはづむ樣な出世なんでせう。人の軒を出て、とまれ一口戸別割を負擔し得る樣に成つたんでせう。富が行き渡つたんだ。」

先生。「行き渡らせては足りない物を分捕つたのよ。皆ずんばいに成つたんだわ。その證據に、その戸別割を巧く持ちこたへかねて、農村疲弊なんて愁歎してるぢやない。何が疲弊なもんか。昔は草鞋がけで、今生の榮耀に見物した城下へ、今は汽車に乘つて、月に一度は活動見に行く………」

文學士。「何だ先生、自分の說を自分でこわしてゐる。」

繪師。「それでいゝのさ。私の云ふのは、皆がずんばいになつて、[illegible]

入者が増えたんだつてことなの。村だの、家だの、そんな小規模では納まり切らない程ね。なんてつたつて現代の藪、私達を包滅しなきやならないんだから。」

文學士。「家から藪へ。――これは昔のものの分解作用で、多分新しいものの結集作用なのね。」

先生。「諦めませう。只、ひそかに取つとき度い希望と云ふのは、四十の緣談。――ぢいさんは七十以上がいゝわね。子供の始末なぞすつかり濟んでゐる。そして十九の女の子丈け殘つてるの。人形ごつこ以來の腕をふるつて、せい〴〵飾り立てゝお嫁にやるの。するとぢいさん死んで呉れて、その夫婦が、私と私の分の遺産を引取つて呉れるのよ。」

繪師。「やくざだなあ、こいつ！」

文學士。「そんな心掛なればこそ！」

先生。「たらちねのにはのをしへよ、お前子が無いこの世はらくな。野邊の送りが寂しかろ……忘れられない。」

繪師。「こいつ、うつかり藪へ連れてつたら、高砂社なんか始めるから。」

文學士。「煩いな、そいつあ。何處か埋めなきやならん穴が有つたら、放り込んで來るんだに。」

先生。「お腹のくちいに任せて威張る人には、何の權威も有りさせんつてよ。日の暮れたのも知らないで、本當に、一體そして家は何うなるのよ。又もとのもくあみ？　厭ねえ、あんなに勇んでゐたのに、又あのうちへ歸へるなんて！」

繪師。「同感、少し寂しい。」

文學士。「私は厭だ。汚れて、脫いだ肌着をも一度ひつかけるなんて、考へてもうつたうしい！」

繪師。「浮いてる腰の序に、いつそ藪入しちまはない？　その大塚へ行つて見ませうよ。」

文學士。「身の程を辨へて、ね。」

先生。「お盆なら嬉しいんだらうけど。」

それにしても、今日の日は正に暮れてゐるのだ。この上何か遣らうと云ふなら、それはお夕飯をとる事だらう。お夕飯をとるにしても、かゝる一日のお夕飯であつて見れば、一寸食前に、吾輩の藪のために、乾杯したりするのも亦一興では有るまいか。歩き歩いて此處は神樂坂なんだ。そして、それ、そこが、か・は・て・つ。………

一九三〇・四――

ゾラの「社會小說」について

武林無想庵

一千九百二十七年の八月はじめ、わたし達親子三人はニース停車場のプラットフォームで、瑞西方面へ行く列車の到着を待つてゐた。ふと氣がつくと、財布の中に小錢が全く欠乏してゐたので、さしあたりポルタアに拂ふ金をこしらへなければならぬと思ひながら、周圍を見まはすと、すぐ目の前の本屋が目についた。フランスのプラットフォームには、たとへ飲食の賣店がない場合でも、本屋ならきつとある。フランス人は時を嫌はずデタラメに物はたべないけれど、ヒマさへあれば必ず何か讀む習慣をもつてゐるからだ。

わたしはズラリと新刊書を見やつた。が、買ひたいと思ふ本はあいにく一册もなかつた。併しどうしても百フラン札を一枚崩さなければならぬ必要に迫られてゐた際なので、是非とも何か買はうと思つて、尙熱心に飾棚中を見まはした時、たま〳〵目の中へはいつて來たのが、その最上段を全部占めてゐたゾラの全集の中の、特に「大地」二卷であつた。

わたしがなぜ到るところで、大智度論中の諸法因緣生をふりまはすかといふ理由は、かうした「たま〳〵目の中へはいつて來た」といふやうな生命の Spontanéité が、どうしても人間生活の或方向を決する甚だ有力な動機を構成しがちな人生の事實に充ち〳〵てゐるからだ。

わたしはハッと「大地」を買ふ氣になつて了つた。

一高時代英譯の「ルーゴン・マッカール」に讀耽つてゐたころ、この「大地」も一度讀みかけた覺えはあるが、それが百姓の事ばかり書いてあつたので、しきりに都會人がつてゐた二十越したか越さないわたしの興味は一向にそゝらなかつたと見えて、「ナナ」や「獸人」ほどわたしの頭を支配しなかつた。從つてその內容のかすかな一部すら全く思ひだすことができない程度までスッカリ忘れはてゝ了つてゐたものだ。

そいつを偶然停車場で小錢をこしらへる必要上、三十年ちかい後になつてから、突然買ふ氣になつたんだから、考へて見るとよほど不思議な現象だ。

汽車の中で、わたしは讀むともなく、つれ〴〵にページを切りはじめた。

この列車はあんまり込んでゐたので、その晩はマルセイユへ一泊し、翌朝マルセイユから出る、途中リヨンで乘りかへなければ、われ〴〵の目的とするエヴイアン・レ・バンへは行けない、巴里行の急行へのることになつた。で、その列車へ乘つたが、そこにわれ〴〵と差向ひに、立派な顏したカトリツクの坊さんが一人腰かけてゐた。

この坊さんと差向ひになつたといふことが、例の又因緣生だが、一層わたしと「大地」との關係を深くして了つた。

坊さんはわたしの妻や子供とさま〴〵な話をしはじめたが、きいて見ると、それがたゞの坊さんではなく、エツクス・プロヷンス大學の哲學教授でもあることもわかつた。

坊さんはニコ〳〵と子供をからかつたりしながら、嚴格な目つきで、「大地」を讀んでゐるわたしの方を、チヨイ〳〵ぬすみ見てゐたが、やがてわたしへ言葉をかけて、

「あなたは何を讀んでゐるんですか？」ときいた。

わたしは默つて、持つてる本を出して見せた。

すると、坊さんは忽ち眉を顰めて云つた。

「エミール・ゾラのラ・テール！……困るねえ、こんなものを讀んでは……外國人はどう思つてゐるか知れないけれど、ゾラなンてフランスでは決して結構な作家ではありませんよ。むしろ最惡の作家と云つていゝんです……中にもこのラ・テールは一番醜惡な作です。これほどまでに人間を強ひて醜く描出さなくてもよからうにと思ひます。アナトール・フランスなどもこの作を評して、こんなことを書く人はむしろこの世へ生まれなかつた方が幸福だつたらうなどゝ云つてゐる位です……」

わたしは坊さんの心持がわかりきつてゐるので、素直に、たゞ、

「ハ、ア、さうですかなア。」とだけ答へて、坊さんと共にリヨンで下車して、停車場前で袂を分つきり、再び文學の話はしなかつた。

わたし達親子はエヴイアン・レ・バンから、その夏、モンブランの向山エイギエツトの中腹サモトウで暮らしたが、わたしは人寰を離れたこのオツトサヴオアの白雲裡で、坊さんの所謂「最惡の作家の一番醜惡な作」たるこの「大地」を熟讀玩味して見た。

エツクスアン・プロヷンスのカトリツク哲學教授とは正反對に、わたしは始めてこの一見醜惡を極めた「大地」の中で、その時まで全く心づかなかつたエミール・ゾラの偉大さを發見した。

エミール・ゾラの偉大さは百丈淸規の峻烈なる徹底的正義觀をもつて臨んだ人間生活に對して、溢るゝばかり無盡藏の大慈大悲觀を浴びせかけた、即ち Justice と Lonté との極地に湧いた詩そのものゝ偉大さだ。從つてゾラこそは、之を熟讀玩味すればするほど、いよ〳〵古今まれなる一大叙情詩人として、われ〳〵の眼前に髣髴せざるを得なくなる思無邪の天才であつたものだ。

目のくらんだ現代人にはその淤泥ばかり見えてその蓮華が見えない。さうして蓮華の必ず淤泥でなければ咲き出でないといふ宇宙の原則に觸れやうとしない。

ブデイズムが若しブラフマニズムに對する叛逆であり革命であるとすれば、マルキシズムがキヤピタリズムに對する叛逆であり革命であるとすれば、エミール・ゾラの一大敍情詩もまた人生そのもの社會そのものに對する般若波羅密的唯物史觀的叛逆であり革命であると云つて差支ないと思ふ。

エミール・ゾラの小說こそ、本當の意味に於いてのプロレタリア文學だ。

モンブランと相對して「大地」を熟讀玩味しながら、わたしはしみじみとさう直感した。

日本人はまだ本當の意味の佛說を過去に於いて全く理解しなかつたと同樣に、本當の意味に於いての自然主義をも理解しなかつた。さうして現在のマルキシズムに於いても亦然りではないか？

オツトサヴオアに於いてわたしの直感したところによると、エミール・ゾラの小說中には歷々として摩訶般若があつた。歷々として唯物史觀があつた。さうしてその間の消息については、全世界の人々は未だ全く氣がつかずにゐるのだ。何事にも歐羅巴の糟粕を甞むることをもつて尖端を行くものと誤解してゐる現代の日本人が、そこに心づかずにゐるのも當然のことゝ云はなければならぬ。

わたしはまづそれがために「大地」の完譯を思ひ立つた。

日本の自然主義なるものは、もはや明治大正の文學史的共同墓地へ送り込まれて日久しく、たゞ遠き昔に於いてのみエミール・ゾラの名が喧傳されたゞけに止まり、そのまゝ過去のものとして葬られ忘却され、さうしてその僧に至つては、今もつて片鱗さへ正傳されずじまひとなつてゐる始末ではないか。

併し考へて見ると、それも無理はない。

二千何百年といふ民族としての歷史はもちながら、地理的の位地と交通機關の不備とから、この民族が本當に民衆として目ざめかけて來たのは、わづかに最近十數年來のことに屬するからだ。さうしてそれまではたゞ爲政者の云ひなり方題に、御無理御道理で通して來たからだ。云ひかへれば日本の民衆は全く最近まで民衆自身としての要求をもたなかつたものだからだ。

エミール・ゾラの文藝は民衆から民衆へ呼びかけた民衆の言葉なのだ。民衆が民衆として內省し、民衆自ら自己の要求を突きとめやうと努力した聲なのだ。さうしてフランス人が半世紀前に發しつゝあつた聲は、日本人が半世紀後の今日發せんとしつゝある民衆の聲ではないか？

さう感じてわたしはゾラの完譯を思ひ立つたのだ。たゞに「大地」の完譯ばかりでなく、それがためにわたし自身の余命を獻げつくして、五十卷の全ゾラと心中しても、決して何の遺憾も殘らぬとまで思

ひ込んで了つたのだ。

きくところによると、數年前から日本にはプロレタリア文藝といふものが榮えてゐるさうである。結構なことだと思ふ。わたしはまだ日本へ歸つて日が淺いからその眞相を詳にしない。が、それが若しマルクス理論の宣傳にとゞまるものであつたら、それは決して未だ民衆から民衆へ呼びかけた民衆の聲であるとは云へぬ。日本のプロレタリア文藝が若し未ださういふところに留まつてゐるものとすれば、いよいよもつてゾラの完譯はこの際日本には切實だと思ふ。

エミール・ゾラの所謂社會小說は決してイズムの宣傳でない。空疎な理論に裏づけられたインテリゲンチヤの遊戲ではない。かれの小說は血みどろだ。卽ち民衆が血みどろなのだ。生まれて血みどろであらざるを得ざる絕望的の民衆の聲だ。釋迦のはじめて體驗した絕對絕命の苦集觀だ。かれの小說を聞けば、そこに民衆の七轉八倒がのたうちまはつてゐる。さうしてその民衆が卽ちわれ〳〵なのだ。お互に手をさしのべて俺達は苦しいと絕叫しつゞけてゐる。

が、エミール・ゾラの社會小說が若しそれだけのものにすぎなかつたら、かれはたゞ虛無主義へ行くより外に道はなかつたらう。さうしてこの人間の世の中へ對してたゞ絕望を宣傳したゞけで終つて了つたらう。が、ゾラは絕望者ではなかつた。かれは民衆の血みどろの中に百丈淸規を見た。かれには自覺せる民衆の秋霜烈日なる正義觀があつた。哲學的理論的の正義ではない。事實そのものゝ中に內在せる血肉的正義だ。

この點に於いて過去の日本自然主義者は全くゾラを誤解してゐた。彼等は常識的フイリスチン的道德を破棄して、それと對立せる本能の勝利を唱つたが、いづくんぞ知らん、その本能の基調こそ、實は峻烈なる正義そのものであつたことを。

ルーゴン・マツカール二十卷の次に、ゾラは何を書いた？ 民衆の中から人間の本能を剔抉し出したゾラは、その本能の核心を求めはじめてみたではないか？ 三都市はその求道の過程ではなかつたか？ さうしてその三都市につゞいた作は何か？ 科學的眞の上に築きあげやうとした新しい四福音書ではなかつたか？

當學般若波羅密多——日本の民衆はまさにエミール・ゾラを學ぶべきである。が、大般若六百卷を暗誦することが決して般若波羅密多でないやうに、エミール・ゾラを今更模倣することが決してゾラを學ぶ所以でない。たとへゾラ全集の飜譯が成つたとしても、皮相にそれを文藝に應用することが、勿論これからの日本民衆の能事でない。一民族の民衆がその血みどろに自覺して行く過程に於いては、必ずやエミール・ゾラの正義と仁恕とをもつて臨んだ社會相に遭遇する。わが日本の民族の民衆もそれゆゑにこの他山の石をもつて自ら硏磨すべきである。理論としてのマルキシズムと楯の兩面の如く兩々對比しつゝ硏磨すべきである。

經濟學上マルキシズムはもう過去のものかも知れぬ。併しマルキシ

ズムは今日ではたゞ單に經濟學上の問題でない。人類社會の存するかぎり、資本主義の存するかぎり、永遠にわたる嚴乎たる一存在である。同樣にエミール・ゾラの純文藝的使命は過去のものかも知れぬ。が、エミール・ゾラをもつて單なる文藝上の沙汰と認めてゐたわれわれの過去の考へは全然誤つてゐたのだ。エミール・ゾラの作物は民衆自覺の血みどろな社會斷層だ。さうして現在の日本の民衆は恰もその斷層にさしかゝりつゝある矢先ではないか。

日本は今二千六百年來の古着をかなぐりすてやうと藻搔いてゐる最中だ。さうしてその新衣はまだ調製されてゐない。日本人はそれゆゑに今赤裸々だ。いかに歐米の借着を纏つて見ても、背丈の合はぬ衣服はそのまゝではどうにも使用に適しない。さうして人類は不幸にして他の動物の如く赤裸々では生きられない。

なぜジヤン・ジヤク・ルツソオは「自然に還れ」と絶叫したか？　一民族はその民族の舊衣をかなぐりすてるべく、まづ赤裸々にならざるを得なかつたからではないか？　さうしてそこに革命は繰返された。そこに撼天動地のロマンチツク運動が行はれた。そこに科學の勃興があつた。鐵の時代が來た。電氣の時代が來た。ガソリンの時代が來た。ヘルツエンの時代が來た。アルミニユームの時代が來た。

が、それは歐羅巴だ。いかにその外貌を模倣し得ても、要するにそれは飽までも歐羅巴文明といふ一文明の推移であつて、決して起源を異にする日本文明のそれではない。斷然ない。

日本の民衆は未だ曾て心からその要求として、一度も赤裸々になつたことはないではないか？　一人のジヤン・ジヤク・ルツソオも絶叫したこともないではないか？　一人のヴイクトル・ユーゴーも獅子吼しなかつたではないか？　一人のエミール・ゾラも彈劾しなかつたではないか？

が、赤裸々日本はこれからだ。

エミール・ゾラは五十年前のフランス人を赤裸々にして具さにそれを觀察した。さうして「ルーゴン・マツカール」二十卷はまさにその報告書だ。われ〳〵もまた一民族の一民衆であるかぎり、自分達自身の姿を赤裸々にして、具さにそれを觀察すべき必要に迫られてゐる。さうしてその報告書を作成すべき機會に逢着してゐる。

自己批評なき文明は文明でない。自己批評なき民衆は自覺せる民衆でない。さうして自覺せる民衆でなければ文明の過程に踏込むことはできない。わたしは半世紀以前のフランス民衆の自己批評として、エミール・ゾラの全創作集をば、わが將來の日本民衆の自己批評の參考に供したいと思つて、同志と共にその一言一句をも閑却することなしに、決定的の飜譯を試みたいと企てゝゐる。

今や世界の資本主義は合理化した。さうしてその結果として、日本に於いても失業問題は刻下に於いての最大問題だといふ。

わたしの友人に、所謂勞働爭議には何等の興味をも感ぜざる、さうして長年資本主義組織の或一角に寄生して、巧妙にその生を維持して

來た男がある。その男は云ふ。

「僕は勞働者や百姓には全く同情をもつてゐない人間だが、かう不景氣では結局飯がくはれなくなる。この狀態があと二年もつゞいたら、全く手も足も出なくなる。さうしたら僕はどうするか？ 僕は食ふことについて下らぬ手數を省くために、さしあたり×××へはいつて食ふことにしようときめてゐる。どんなに世の中が不景氣でも、×××にはいり込みさへすれば、食ふだけはたしかなものだと思ふからだ。が、その　へはいるについては、僕は××しができない。××ができない。××ができない。それゆゑ勢ひ××××を促進しようとしつゝある所謂主義者達と自然手を握り合ふ方向へ踏み出すより外に仕方がなくなるだらう。」

これが資本主義の合理化に伴ふ民衆惡化の一徴候だ。惡化とは左傾の意味だ。民衆の心が最左翼に傾く意味だ。面倒くさいから×××へはいつて食つてやらうといふ捨鉢だ。さうして民心が左傾すればするに従つて、合理化は自然と彈壓化する。さうして彈壓化すればするに從つて民心はいよ／＼左傾する……左傾！ それは民衆自身の生存權主張だ。卽ち無產者としての××××だ。

結論として資本主義の合理化は××の××を××させることになる。

エミール・ゾラの社會小說は徹頭徹尾この民衆の正義觀の上に立つてゐる。

ゾラの描いた社會は資本主義勃興時代に屬する。いかにして今日の資本主義社會が成立して來たか、ゾラの小說を讀むと、それが掌をさすやうにわかる。三井三菱の王國は偶然にしては生まれて來ない。民衆の血みどろは偶然にして血みどろになつたのではない。そこに唯物史觀の理法は始めから作用してゐたのだ。それゆゑにマルクスのむづかしい辨證法に頭を惱ます前に、一ト通りゾラの小說を讀んで置くと、この近代社會の民衆は將來していかなる方向へ動いて行くものかといふことが暗默のうちに頷かれる。さうしてそれが的確に般若波羅密多と合致する。斷つて置くが般若波羅密多は宗敎的術語ではない。ヘーゲルにはじまつたマルクスのデイアレクチツクそのものに外ならぬ。さうしてそれよりもつと廣いもつと深い意義を藏する。

「ギヤテエ、ギヤテエ、パアラギヤテエ、パアラサンギヤテエ、ボオドイ、スワアハ」

これこそ民衆の指導標語ではないか？

澤庵和尙は「ヅンと飛べ、ヅンと飛べ。」と云つた。彼はしきりと民衆に飛躍を促してゐたものだ。

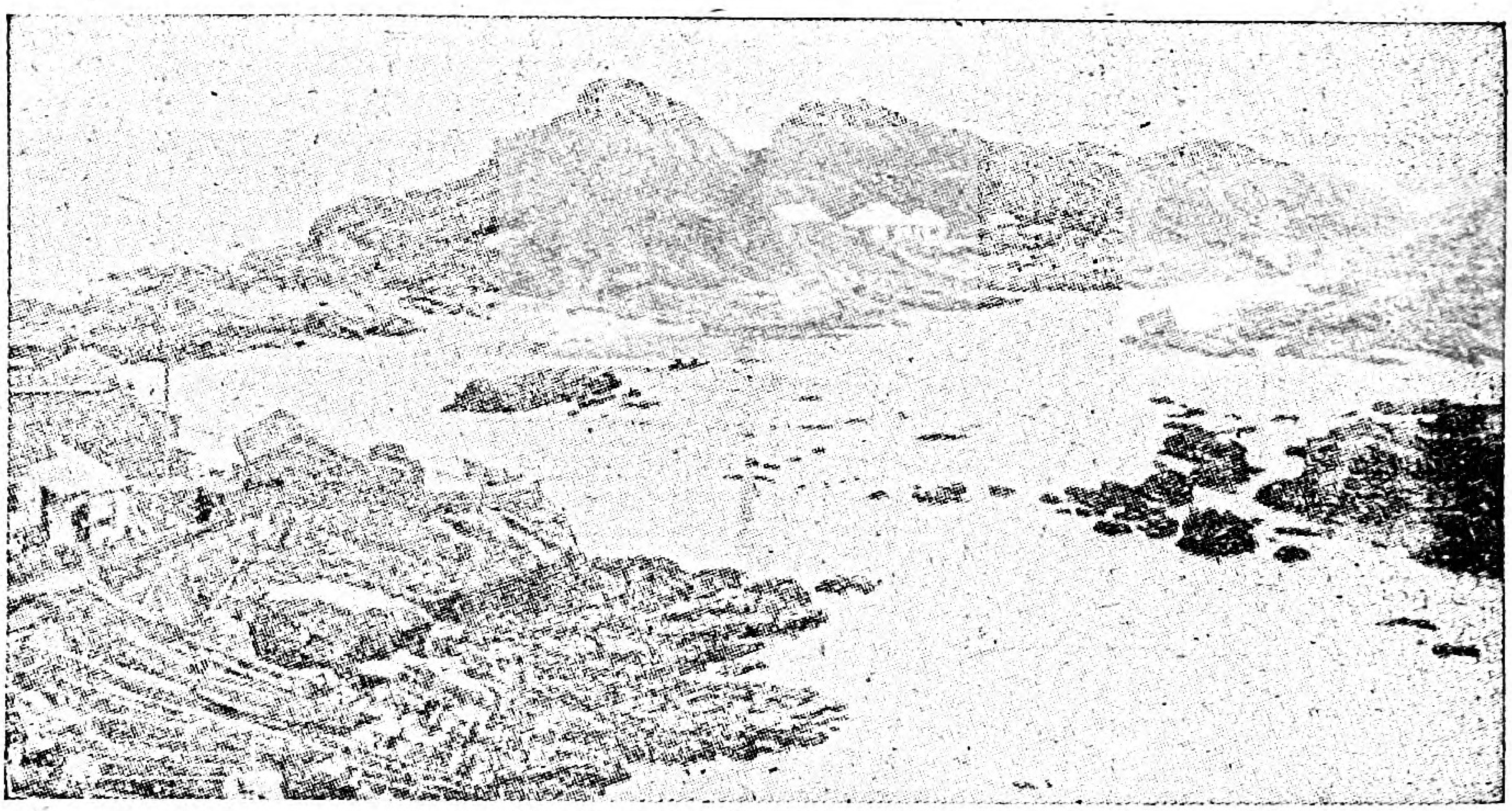
エミール・ゾラの描いた血みどろな人間社會のどん底で、われ／＼民衆はいよ／＼のたうちまはつてゐるのぢやあないか？ 澤庵和尙はその民衆に飛躍をすゝめる。マルクスの勸めた飛躍も或は澤庵和尙と同じ意味の飛躍ではなかつたか？ 卽ち「ギヤテエ、ギヤテエ」ではなかつたか？

エミール・ゾラの社會小説を一册讀むと、少くともわたしはこれだけのことを思ふ。さうして現代の日本民衆に是非この本を讀ましたくてたまらなくなる。日本の民衆はあまりに自己批評の習慣に乏しいからだ。

再び東京へ歸つて來て、わたしは銀座にカフエなるもの丶數があまりに急激に殖えたことを驚いた。昨年も云つたとほり、名は同じキヤフエであつても、銀座のそれと巴里のそれとは民衆にとつては根本的に存在の意義を異にしてゐるものだ。巴里にあつてはキヤフエは民衆の公開談話室のやうな生活の本格的存在であるに引換へて、銀座にあつては民衆の絶望のもつて行きどころの感がある。巴里のキヤフエへはいると民衆がいかに健康であるかといふことを感ずるが、銀座のキヤフエへはいると、民衆がいかに醉つぱらつて我を忘れたがつてゐたかといふ陰慘な妖氣に襲はれる。今の日本の民衆はもう絶望の極に陷つてゐるのぢやないかとハラ／＼する。かうして若々しい貴重な生命をムザ／＼と消耗していいものかと心元なくなる。キヤフエの存在は現代日本民衆の健康にとつて、どう考へても本格的の生活でないことを占はせる。

エミール・ゾラの民衆に對する留意もまたそこにあつた。ゾラ全集の發足點はいつでも民衆の不健康に止どまつてゐる。さうしてその不健康の遠因近因をば飽までも解剖分析することに終つてゐる。さうしてその解剖のメスが即ちかれの民衆正義として輝いてゐるわけだ。

三井三菱の資本主義的基礎はます／＼強固となつて行く。ます／＼合理化されて行く。さうして合理化された民衆の行きどころは、果して銀座のキヤフエより外にはないといふか？……とにかくゾラを讀んで貰ひたい。



仁右衛門島全景

仁右衛門島の話

田中貢太郎

○

今から十年も昔のことであらう。婦人公論に仁右衛門島のことを書いたことがあつたが、事實をあやまつてゐたことから、仁右衛門島の前島主平野順天翁が尋ねて來てくれて、それからずつと知りあひになり、時どき仁右衛門島の遊行を慫慂せられてゐるが、さしさはりがあつて往けなかつた。ところで、此の一月二十二日、帝國議會解散の翌日、寸暇を得たのでかねての約束をはたすべく、午前九時二十分發の北條廻りの汽車で兩國を出發した。其の日は靄雲の深い日で、東京灣に浮んだ漁船は、さながら墨繪の中の漁船であつた。畑には芽麥。稻毛を通る時は、海氣館にをさまつてゐる靈隱竹村左人君のことを思ひだして、此の功名に恬澹な奇人をたうとく思つた。

木更津から梅の花。椿の花。菜の花。蒲公英の花。枯草の間からは綠草が簇々と萠えてゐて、暖な江南の春を展開する。

引きのこす鋸山の霞かな

鋸山はうちがすみして梅の花

汽車は鋸山つづきの岩山の間に穿つたトンネルを出たり入つたりする。トンネルを出た處には、掌大の平地に椿の花に圍まれた人家が五軒十軒と點在して、靄雲に

ぼかされた海には、翠緑の漁船。那古船形の沖には四五艘の軍艦がかかつてゐた。

北條の停車場に着くと、改札口に立つて胡麻鹽の長髯を微風になぶらしてゐた老人が急いで入つて來た。北條の讃岐館で安州史の執筆に餘念のない平野順天翁であつた。順天翁は其處で私を待ち受けて、仁右衛門島へ案内してくれることになつてゐた。順天翁の右の手には杖、左の手には土佐の銘酒の司牡丹の壜があつた。

並んで腰をかけると、順天翁は昨夜出來たと云つて、手帳の破つたのへ走り書きして見せてくれた。

吾友白雲常人詩。　山雲最妙去來時。
青雲不羨浮雲亦。　政海風雲莫我知。

議會の解散などは此の方外の翁の眼中になかつた。汽車が出ると雨が來た。雨は梅の花に煙り、菜の花に煙り、蒲公英の花に煙り、咲き殘りの女郎花の花に煙り、切り花にして東京へ輸出すると云ふ雛芥子に似た西洋花に煙つた。

江見から海岸の岩に趣が見えて來た。仁右衛門島は天面の前に縮のやうな岩山の姿を見せたかと思ふ間もなく、汽車は太海驛へ着いた。時に午后二時四十六分。

しなが鳥安房の波太の蓬島に吾れ訪ひよれば春の雨降る

其處は安房郡太海村の波太であつた。仁右衛門島にはいろいろの名があつた。昔は單に安房の島と呼ばれてゐた。蓬島、くさ島、地圖には波太島としてあるが、島の所有者の戸主が代代仁右衛門を襲名するので、今では仁右衛門島と云ふ方がとほりがいい。

雨は未だ降つてゐた。驛の前の仁右衛門島の遊覽切符を賣る處で雨傘を借りて渡頭へ往つたが、往きつかないうちに雨がやんで荒い風の中に微陽が射した。海岸には岩を刳づて作つた生簀があつて、中に鰒を入れてあつた。東京方面に魚のすくなくなる時期を見はからつて、輸出する鰒であると順天翁が教へてくれた。

島は陸と二丁位しか離れてゐなかつた。東西に長い岩山で周圍は三十町ばかりであつた。渡船の中から覗くと、女の髮のやうにゆらゆらと搖れてゐる海藻の間を鯛のすいすいと泳ぐのが見えた。船は島の北側に著く。其處は小さな入江になつてゐて、波にさらはれる恐れがないので、子女の海水浴場に適してゐた。私は此の夏には、家をあげて往くことにしてゐる。

渡頭には二三の建物があつた。遊覽客や海水浴客の休憩所や晝食所に當ててあるが、季節が季節であるから皆鎖してあつた。私は順天翁に案内せられて、其の建物の傍から石磴を登り、頂上の平野邸へ往つた。

○

平野邸は三方に石垣をめぐらして砦のやうなかまへであつた。母屋は間口九間、奥行六間の瓦葺の平屋で、古い古い欅の天井、栂の柱、南天の床柱。欅の鏡戸は、鉋のなかつた當時の手斧細工として古

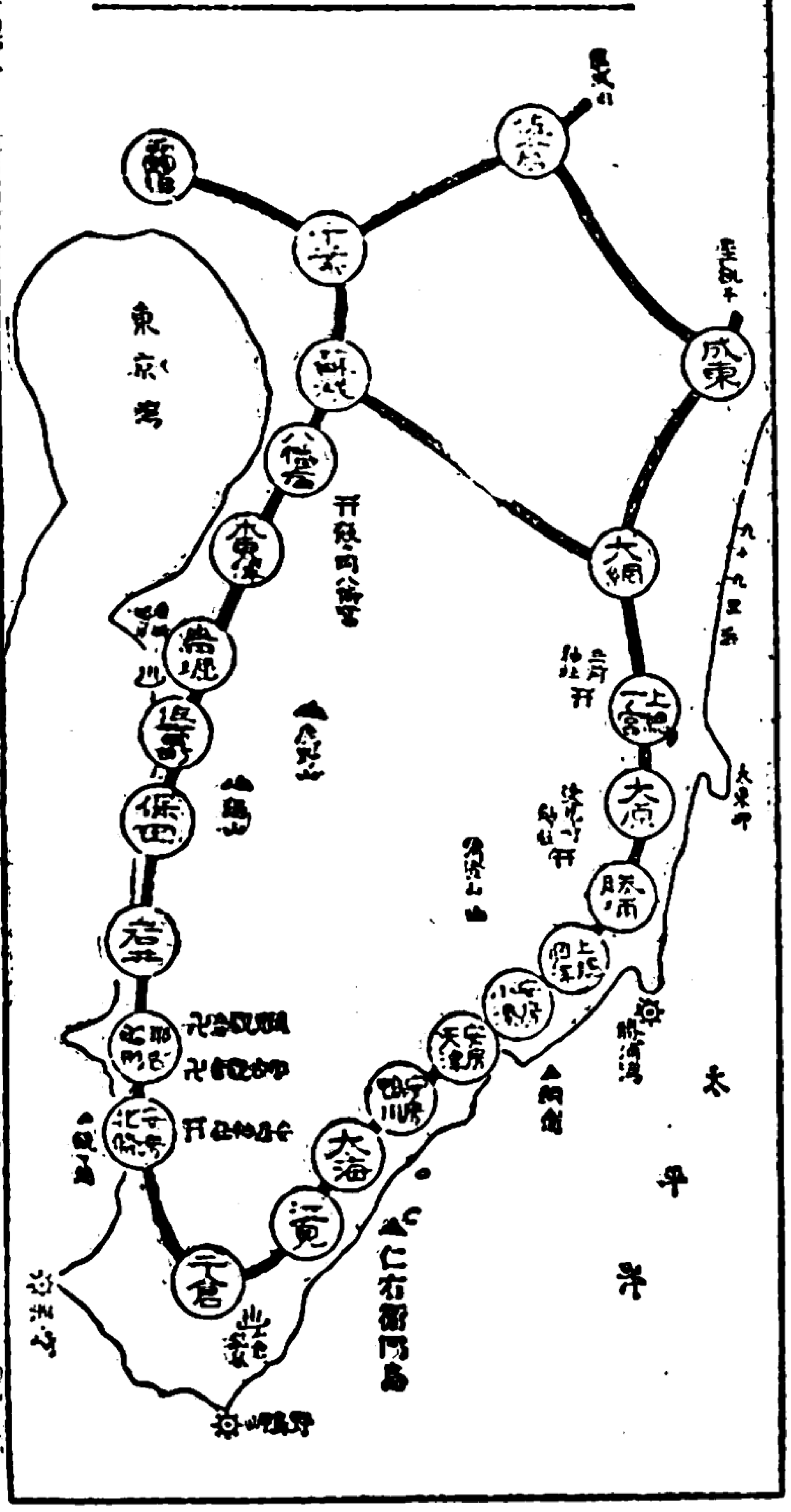
奇を誇つてゐた。此の平野邸はもと海際にあつたが、元祿十六年十一月、關東大海嘯の時に破壞したので、殘留の木材を用ゐて再築したもので、閑雅にして幽邃な其の庭には、清水の池があつて、其處には老蘇鐵があり、老松があり、蘚苔に封じられた石燈籠があつた。藪鶯の笹啼が何處かでしてゐた。

　島山の椿の花に笹鳴す

私は順天翁の令息で、現在の戸主である仁右衛門氏に逢つた。平野家は安房が總の國と云はれてゐた頃から此の島に居住してゐたもので、始祖はたづぬるによしもないが、源賴朝が石橋山に破れて、安房へ渡航した時、當時の島主であつた仁右衛門が禮迴したので、創業の後、海面限界の及ぶ限りの漁業權を附與せられたと云ふに徴しても、平野家が如何に其の島に長い間居住してゐるかと云ふことが伺はれると共に、安房有數の舊家であることも知られるのである。

其の平野家には賴朝下賜の伽羅の枕と云ふものを傳へてゐる。島の南側、裏門を出て東にくだつた處に、賴朝の隱れてゐたと云はれてゐる洞窟があつて、福女稻荷と云ふ稻荷を祭つた祠があつた。其の近くには日蓮が朝陽を拜したと云ふ處があつて、南無妙法蓮華經の碑が建つてゐる。其の碑に對して一つの傳説がある。日蓮が清澄寺の徒弟として善日丸と云はれてゐた比、住職は時どき其の善日丸を伴れて、大檀越であつた仁右衛門島へ往來したが、其の仁右衛門にお蓮と云ふ娘があつて、善日丸と相思の仲となつた。住職はそれを知つて、善日丸の才氣があるところから、還俗さして商人にし、お蓮を女あはさうとしたが、仁右衛門がきかなかつた。それがために日蓮は發憤して一宗を創めたが、布教のはじめに仁右衛門島へ來て檀越になつてくれと云つた。仁右衛門は昔のことがあるので、末子を前原へ別家さして平野仁右衛門を名乘らすとともに、家教の天台教をつがして、自個は率先して日蓮信者となつたのであつた。眼をあげると勝浦岬に連つた一帶の峰巒の中に、清澄山の欝蒼たる姿が仰がれる。眼を落すと仁右衛門島に近い海中に岩島があつて、其の陸に人家の簇つてゐるのが見える。岩山は海驢島で、人家は鴨川の町であつた。島の東端に岩

房總一周略圖



礁が散布してゐて、海驢島に海驢の來てゐた比には、負傷した海驢が群を離れて養生に來て二三日も岩の中に寢てゐることがあつた。島の西方、馬の背のやうになつた處には、樹木があり畑があつたが、潮風が强いので樹木は盆栽の樹木のやうに曲り、畑には野菜がいぢけてゐた。樹木の中には水仙が繁茂して花をつけてゐた。其處には芭蕉塚、蓬島辨財天があり、西端の陸と向きあつた斷崖の下には、龜石の奇勝があつた。

渡頭の方になつた海岸は、岩石が平になつてゐて、其處には波太の渡頭にあつたやうな岩を刳つて作つた生簀が數個あつたが、其の中には鰧が泳ぎ、鰍が跳ね、鮑、蠑螺が附著してゐる。北方は遙に白濱に續いてゐるが、靄雲のために直ぐ近くの蛇骨山と云ふ岩山の岬に眼界が盡きてゐた。西に落ちかけた夕陽は其の蛇骨山の後方に微かな輪格を見せてゐた。

夜になつて樅の天井の下で夕飯の饗應を受けたが、島の名物の鮑の鹽辛は旨かつた。食卓の傍には洋燈が靜かに燃えてゐた。室は太古のやうで、島根を嚙む波の音はすこしも聞えなかつた。順天翁はこれは石垣を設けて、濤聲を空に散じてあるがためだと云つた。

○

此の仙鄕のやうな處にも、曾て憂鬱な影のさしたことがあつた。それは其の島山の周圍の鮑漁場、即ち採鮑磯根に關して、元濱波太村民と平野家が紛擾を釀したことであつた。此の比、時たま仁右衞門島のことを書くものがあると、きつと此の事件を搾取者に對する被搾取者の反抗としてゐるが、それは甚しき皮相の見である。

仁右衞門島の島主が頼朝から、眼界の及ぶ限りの漁業權を附與せられたと云ふ傳說のあると云ふことは、既に初めにも云つたが、仁右衞門島では昔からの此の傳說の下に附近の漁業權を專有してゐるうちに德川時代となつた。そして、寛永十年、植村土佐守の領分となつた時には、島一圓の柴役と稱して、一箇年永一貫文宛を貢納したので、此の緣故によつて地租改正の際、島一圓が平野家の所有地となつた。其の當時は東は海驢島から、西は天面村の前方の三つ根と稱する處までの、八手網、鰯漁、磯根鮑の採取を獨占してゐたが、磯根鮑の運上には永四貫九百五十八文、八手鰯役には、永五貫文を領主へ直納して、平野仁右衞門名宛の受取證を下付せられることとなり、爾後領主はしばしば交迭したが、海面專行の漁業權には、變更がなかつた。

・ところで、慶應の初年になつて、村方一同と平野家との間に紛議が生じた。

此の時の平野家の戶主は、幼名を安之進と云ふ順天翁の祖父に當る人であつた。それは元治年間のことであつた。北條在の山本村と云ふ村に、鎌田六郎兵衞と云ふ豪農があつて、年ごろの女があつたが、鎌田は其の女を領主か奉行か、さうした權勢家に緣づけたいと思つてゐた。それを今の鴨川町、其の當時の前原村の大名主高梨助之丞と醫者の阿部玄節の二人が、仁右衞門の長男金之丞の嫁にするべく交渉し

た。平野家は有名な舊家のうへに、武鑑帳に鴻の池の次へ、房州島仁右衛門として乗つてゐる位の豪家であつたから、鎌田の方でも直ぐ承諾し、波太の名主飯高善左衛門を媒酌人に選定して、文久元年十月十一日、結婚式をあげることになつて、嫁御寮は八里の道を馬でねつて來た。其の時嫁の家から贈つて來た海の物山の物の中に、百兩の金の包みがあつて、嫁入支度ができなかつたから目錄にして持つて來たと云つた。

やがて結婚式もしゆびよく終つて、翌年の春になつたところで、名主で媒酌人であつた飯高から呼びに來た。何事だらうと思つて金之丞が往つてみると、飯高は村方が困窮してゐるから、金を貸してもらひたいと云つた。金之丞は歸つて父の安之丞に其のことを話すと、家に金があるやうに思はれるは、無いと思はれるよりもいいことであるから、貸してやりたいが無いから詮方がないと云つて其のままにしてあつた。すると今度は飯高が來て、此の間のことはどうかと云つて返辭を促した。金之丞は父に相談したが金がないからと云つてことはつた。飯高は嫁の里から持つて來た金があるではないか、あれを貸せと云つた。金之丞は嫁の里から持つて來たものは、不縁の時には返さなくてはならないから、其のままに手をつけずにおいてあると云つて、金の包みは見せたが貸さなかつた。飯高は怒つて歸つて往つた。

村方の暴力が忽ち加はつて來た。飯高は表面だつて仁右衛門を呼びつけて、島は村方の有であるが平野家が困つてをつたから、貸して住まはし、漁業もさしてあつたが、村方の困窮を顧みないやうなら、島も權利も取りあげると云つた。仁右衛門は、平野家は總の國の昔から住居してゐたもので、村方から借りたものでないと云つて抗爭した。其の結果、勝浦の役所へ事件を持つて往つた。其の時房州は大岡越前守の所領であつた。飯高は村方の總代として元和水名帳なるものを證據として提出した。其の元和水名帳には、平野家は攝州から移住して來たものであると云ふ文字が挿入してあつたが、平野家には元龜天正の記錄があつたので村方の風むきがわるくなつた。小原村の大地主の宮崎文治などが勝敗を決しさしては、だいいち飯高に氣の毒であると云つて、前原村へ双方の關係者を集めて調停をした。其の結果同年四月になつて、磯根鮑役運上は、往古から仁右衛門が直納してゐるから、以後も前々通り、村方に於て故障を云はないと云ふ議定書を作製するとともに、平野家から村方の救恤金として四十兩の金を渡すことになつた。其の時飯高は前原村の吉田屋と云ふ宿屋にゐたが、宿賃を拂はなくてはならないので、飛脚で村の五人組十人組のものを呼んだ。呼ばれたものが往つてみると、宿賃のことであるから、爭ひに負けたのを不平に思つてゐる際であつたから、飯高を罵倒して引きあげた。ところで其の翌日になつて、飯高が死體となつて東條の濱へ漂着した。飯高の變死のことは直ぐ飯高の家へ聞えた。飯高には四人の男の子があつて、長男の直七と云ふのが二十才、次男の竹次郎と云ふのが十七才、三男の秀三郎と云ふのが十五才、四男の周太郎と云ふのが

七才であつた。それと聞いて飯高の上の三人の子供は東條の濱へ駈けつけたが、父親の死體を見ると直七は狂人のやうになつて足蹴にし、なぜ平野に負けてくれたと云つて叫んだ。其の前年、即ち明治元年、へぐりの神職が神風黨と云ふ義徒を募つて、七十名の同志を得た時、飯高直七も其の一人として加盟してゐたが、それから押して直七は氣を負うた青年のやうに思はれる。其の時飯高の溺死體に傷があつたので、直七達は平野に暗殺せられて、投棄せられたものだと云つたが、檢視の醫者の證言によつて、其の傷は入水後の裂傷だと云ふことが明になり、平野の方には何のこともなかつた。

一方、村方と平野家の間には妥協が成立して、勝浦の役所へ示談行屆の書面を出して事件は落着したが、飯高の兄弟三人は平野家を仇敵視して虎視眈々たるものがあつた。兄弟は時とすると劍を舞はすことがあつた。人が聞くと鬼が島へ鬼退治に往くと云ツて笑つた。平野家では飯高兄弟の擧動を人づてに聞かないこともないが、當主金之丞仁右衛門には、腕力の強い二人の弟があつたので氣にかけなかつた。其の一人は勇藏と云つて二十三歳で、其の一人は健藏と云つて二十才であつたが、わけて健藏は劍に妙を得てゐた。

其の年の十月二十二日の夜のことであつた。門も雨戸も鎖してない平野家へ白刄をかざした二三人の狂漢が闖入した。皆、顔を墨か何かで眞黑に塗つてゐるものであつた。狂漢は圓かな夢に入つてゐる家人をめつたぎりに斬つてしまつた。それがために健藏は即死、安之進は重傷を負うて其の翌々日に死亡した。年は六十九才であつた。安之進の妻女のとせもかなりの傷であつたが、それは三年の後に六十九才で死亡した。當主の金之丞仁右衛門は首筋に負傷し、勇藏も負傷したが、勇藏はとせの死亡するすこし前に死亡した。金之丞仁右衛門の子として生れ、其の時七才であつた順天翁は、狂漢が混鬪の中へさし込んだ兇刄のために肱に負傷したが、それはさしたることもなかつた。其の夜狂漢のために傷つけられたものは九人であつた。

狂漢は飯高の三人兄弟であつた。家の中へ闖入したものは直七竹次郎の二人で、秀三郎は戸外を固めてゐたと云はれた。三人は平野家へ闖入した夜、逃亡して所在を晦ましてゐたが、明治五年、木更津縣が置かれて柴原和が知事となつた時、横濱で縛に就き、其の翌年千葉縣となつて處刑せられた。即ち直七は斬罪、竹次郎は無期、秀三郎は七年の懲役になつてゐたが、いろいろの恩典に浴して、無期が七年、七年が三年になつて出獄したものの、村へは歸れないので、南洋方面へ往來してゐるうちに死亡し、周次郎は今に生存してゐて、其の後むしかへした平野家と村方の紛擾に策動してゐた。

○

明治五年になつて平野家へまた災厄が來た。それは其の年の五月、木更津縣から吏員が來て、今般諸株式が廢止になつたに就ては、磯根鮑漁の專行も株式同樣のものであるから、今後は廢止にすると云つて傳達したが、平野家では從はなかつた。かねて此の ことのあるのを手

ぐすねひいて待つてゐた村方では、仁右衛門の專行株が廢止となつた以上は、村方一同に磯根鮑の一切の營業權があると云つて、平野家から其の權利を奪はうとした。派出せられた吏員は、仁右衛門方で二艘もしくは三艘の鮑採取船を出してゐることを聞いて、向後は鮑採取船數を四艘にして、內二艘を平野家に出し、後の二艘を村方で出すことにして、相互に營業すべしと命じた。平野家では不服であつたが明治二年の狂人に懲りてゐる時であつたから、やむなく縣の裁斷に從つて、以後互に睦み合ひ渡世すべしと云ふ書面を村方や前總代と平野家との連署で千葉縣廳へ提出して、其の紛擾を收めた。これが平野家に加へられた第二回目の暴力であつた。そして、明治十二年になつて、村方では折半した權利の半額を十箇年の年季で他へ賣却すると云ふ決議をして、翌十二年五月、四百圓で當時の同村戶長松下榮藏へ賣渡したが、榮藏はまた平野家へ買ひ取らせやうとした。平野家では明治二十四年四月まで、十一ヶ年間を原價に買ひ取り、他に十五圓の手數料を出した。

　ところで明治二十三年四月になつて、村方は飯高周太郎及び橫濱在住の小幡熊次郎の兩人へ、濱波太一圓の磯根鮑一切の權利を向う五箇年限り千百圓で委託するの契約をした。それがために平野家の所有する折半の漁業權も併合せられたやうな形になつた。それが平野家に加へられた第三回目の暴力であつた。其のうへ平野家で潛水器を使用せんとして村方へ交涉した際には、村方で拒絕したにもかかはらず、飯高小幡兩名へは、潛水器を使用して隨意に營業することを許してあつた。

　かうしてさんざん踏みつけられ踏みにぢられた平野家では、秀太郎仁右衛門、卽ち順天翁が村方一同を被告として、明治二十三年十二月六日を以て漁業權冒認契約取消請求の訴訟を起し、千葉裁判所木更津支部から、東京控訴院、大審院まで往つて、明治二十五年五月十九日勝訴となつて今に及んでゐるが、私は平野家が暴力のために拂つた犧牲の大きかつたことを知るとともに、浩歎するものである

○

私は翌日、順天翁に鴨川まで見送られて歸つた。小湊では會社組織になつてゐる鯛見物の船が出やうとしてゐた。

　　小湊や梅に鯛船出でんとす

日本資本主義產業地理學

鈴木茂三郎

一

太平洋の彼方から投げられた資本主義文化は、國土の半身に光を浴びて、東京、神奈川、大阪、兵庫を中心とする太平洋岸に資本主義產業を成熟させたが、背後の半身は北陸の自然が陰慘で、空氣が鈍重なやうに、光に脊を向けて暗らい影の如く黒く塗り潰されたのである。

松尾小三郎と言つて、松尾後援會の些やかな力を背景に、十年一日の如く、背面の暗らい裏日本に立つて、日本海中心論を叫びつゞけてゐるものがある。

若しも明治維新期の日本に投げられた光が、日本海の彼方からやつて來て、太平洋に脊を向けた、日本海の沿岸が、半身いつぱいに先進國の資本主義文化の光を浴びたとしたら怎うか。

横濱、名古屋、神戸の太平洋岸諸港の繁榮を新潟、伏木、敦賀が奪つたであらうか。從斷的に發達した鐵道は、兩洋の表日本と裏日本をつなぐ横斷線から先づ發達したであらうか。松尾小三郎氏の叫びつゞけるやうに、ポシエット灣か清津港中心の、大陸貿易の繁榮が裏日本を明るくしたであらうか。

斷じて否（ノウ）である。

裏日本は資本主義發達の物質的基礎條件を缺いてゐるのである。第一は德川末期の封建制度の下に於ける經濟的基礎は東海道沿線にあつたのである。第二は日本資本主義をはぐくめる外資は裏日本の對岸にはなかつたのである。第三は裏日本一帶に原料と動力——石炭——に於て赤貧である。第四は原料の供給地と製品の市場としては、支那よりも米國こそが重要さを持つたのである。

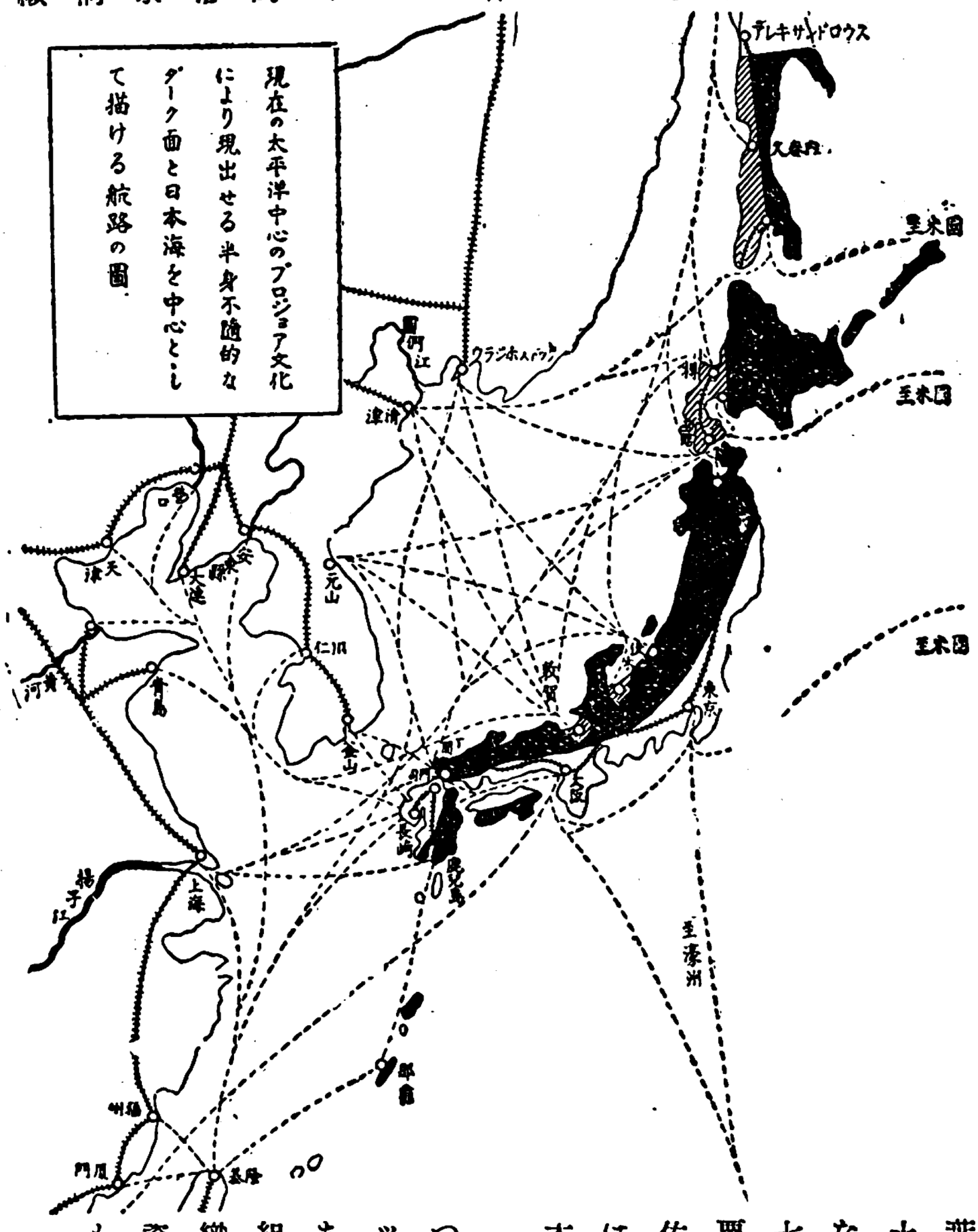
さればこそ資本主義文化の華は、太平洋岸に沿ふて、必然に咲く可くして咲き出で、現在の爛熟期を現出するに到つたのである。

爛熟せる資本主義產業は東京、神奈川、大阪、兵庫の工場都市に集中されたが、しかし同時に、太平洋岸は言ふまでもなく、日本海沿岸にひろがる全土に資本主義產業がまきおこつたのである。裏日本の漁港にすぎなかつた伏木港でさへ王子製紙、樺太木材の分工場、北國製

紙、伏木板紙の本工場や北海曹達、電氣化學、北陸電氣工業などの資本主義産業を背景として榮えたが、新潟、秋田の石油、秋田の木材などは裏日本のために萬丈の氣を吐くものがある。

また、地方色に色彩られた「土産」の如きも、資本の移入と交通の發達によつて、半資本主義的産業の基礎を築きあげたのである。

裏日本に於て新潟の麻眞田、富山の疊表、綑、莚、長野の生糸、石川の黒江の漆器と洋傘、福井、石川の羽二重は斷然壓倒的である。表日本の一帶では、千葉に結城紬、京都、峯山に丹後縮緬、桐生、足利、伊勢崎の絹織物、京都の西陣織、友禪染、福岡に博多織、鹿兒島に大島紬、福岡に久留米絣、德島に阿波縮、愛知に有松絞近江の蚊帳、等の「土産」の



現在の太平洋中心のブロジョア文化により現出せる半身不隨的なダーク面と日本海を中心として描ける航路の圖

ほか、靜岡の茶と鼻緒、濱松の中折帽、香川、廣島の下駄、草履、香川の雨傘、三重の綱、岐阜の提燈、愛知の提燈と扇子、土管と瓦、千葉の味淋と醬油、高知の土佐紙、それから燒物になると、愛知の瀬戸燒、七寶燒、京都の淸水燒、粟田燒、岡山の備前燒、佐賀の有田燒、裏日本には石川の九谷燒、會津の本郷燒などある。

これらは「土産」といつても、瀬戸にさへドイツ式電氣爐の輸入計畫があり從業員も勞働組合に組織されてゐる。醬油、織物、陶器などは近代の資本主義工場組織によるものが多い。

伊勢崎には伊勢崎織物、桐生には東洋織布、共立機業、日本絹織、帝國絹布、米澤織には日本絹撚の分工場、瀬戸燒には日本陶器、有田燒には森製陶、深川製

磁があり、京都絹織物の粹を生產する京都織物株式會社などは、福井、石川の機業地に分工場をさへ置いてゐる。

京都織物

	勞働者數		勞働者數
京都本工場	一、一〇四人	同紫野分工場	三九三人
石川根上工場	四二五	福井大野工場	一四三

備考、工場勞働者數は便宜上、昭和元年末による、以下同じ

「仙臺平」でさへ仙臺染織、仙臺平機等の、近代の工場生產によつて產出され、足袋の如き、大阪と埼玉、福岡が特產だがかうした封建的遺制の服裝たる足袋生產、即ち我々の爪先きにまで資本主義生產が及んでゐるのである。

大阪（數字は勞働者數）

西尾別診二工場	二〇五	福助足袋二工場	二、九八八	大阪自慢	九七
日本足袋	二五〇	辻辰工場	五四		

埼玉

行田工業三工場	三三三	奥貫工場	一一九	橋本足袋	八九
本山工場	九九	鈴木足袋	一四三	栗原工場	九九
今泉工場	八三	勸王足袋	一一三	島村商店	六八

福岡

つちや二工場	一、二〇八	日本足袋分工場	一、七九三

二

福岡のナフタリン、山口の苛性曹達、千葉の沃土、濱松の樂器、名古屋のヴァイオリンなどは、新潟、秋田の石油と共に獨占的な地方的產物だが、かゝる資本主義工場制による生產で、特異的な存在を地方に誇るものとしては、なほ、愛知に時計、醫療材料、神奈川、兵庫と共に福岡、群馬、愛知の小麥粉、東京、大阪等と共に福岡の砂糖、千葉の肥料、北海道、靜岡の製紙、そして又、全土的な規模にまで擴大された紡績、紡織と製糸產業がある。

かくの如く資本主義產業の全土的な擴大、分布、言ひ換へると金融資本の尖端が全土的に蔓るに到つたのは、その諸條件として縱橫に連絡された鐵道、電車の交通網の發達や、農村の消費力を背景とした小都市市場の擴大等が指摘されねばならぬ。尤も「土地」に一定條件の下に制約された產業がある。原料を山から掘り出す鐵、石炭、銅、セメントの重工業はさうしたものの代表的なもので、土地に縛りつけられてゐる。紡績などは消費市場を中心に分工場がつくられてゐるが、絹糸、友禪染その他特殊な製品は水質に制約されるものが多いのである。

横濱に輸出向きの友禪染をつくる計劃で、京都から優秀な職工を移入したが、京都のやうにすつきりした友禪が染め出せない。三井の東洋レイヨンは愛知に敷地を探ねてつひに滋賀に設定したなどは、まつたく水質に制約されたためで、旭絹織、昭和レイヨンも滋賀、日本レイヨンは京都宇治にある。また北海道の亞麻、大麥パルプ用材の植物性原料に制約される製紙、麥酒、製麻產業などもある。

だが、かうした土地に制約された産業にしてもさうだが、一般的な資本主義産業が全土的に擴大、分布された諸條件の重要なものの一つとして、黒い石炭から白い石炭、即ち水力電氣による動力供給事業の異常なる發達をあげねばならない。

これはまつたく異常的な發達であつて、十二萬五千ボルトの高壓送電線は、全土を縱横に疾驅しつゝ、いかなる僻村にも動力による工場生産を設備し得るのである。

それについて我々は、裏日本のために、太平洋中心の日本資本主義に貢献せる二たつのかくされたる事績をここに記錄して置かう。それは、新潟、富山、長野、山梨その他の裏日本の諸國から、勞働力と動力の源泉たる水力を供給しつゝあることである。

三

然らば資本主義産業はいかに全土的に擴大、分布されてゐるか。先づ輕工業から見よう。紡績産業は大阪を中心として、東京、兵庫、愛知、和歌山、岡山に集中的發展を遂げてゐる。（次表中の數字は錘數、單位千錘）

紡績産業の全土的分布

大阪府　大日本紡績攝津工場（五五）　平野工場（三四）　津守工場（七三）　福島工場（七四）　東洋紡績西成工場（一六）　三軒家工場（四五）　四貫島工場（四五）　大阪合同紡績今宮工場（一五）　天滿工場（六二）　住吉工場（二五）　天滿織物三國工場（三一）　山本紡績大阪工場（三）　大阪莫大小紡績佃工場（二九）　内外綿第一工場（八）　小津武林起業西淀川工場（二〇）　大和田紡績今福工場（四）　本社工場（一六）　錦華紡績浪速工場（三八）　北泉紡績大阪工場（一一）　和泉紡績尾生工場（——）　山直工場（——）　澤工場（一三）　岸和田紡績春木工場（七九）　泉州織物高石工場（——）　寺田紡績大阪工場（一三）　貝塚紡績大阪工場（一〇）　佐野紡績本社工場（二〇）　吉見紡績本社工場（二〇）　支店工場（一〇）　大阪紡績本社工場（四三）　内外紡績尾崎工場（二三）　出雲製織帆布工場（一二）　鐘淵紡績住道工場（一〇）　中島工場（一八）　大坂工場（三九）　富士瓦斯紡績大阪工場（二二）　倉敷紡績枚方工場（二三）

東京府　大日本紡績東京工場（七三）　東洋紡績王子工場（三三）　鐘淵紡績東京工場（一〇九）　日清紡績東京工場（九五）　西新井工場（三八）　東洋モスリン第二工場（一七）　第三工場（二〇）　練馬工場（二〇）　洲本工場（八二）　高砂工場（三七）

兵庫縣　大日本紡績尼崎工場（八三）　明石工場（三八）　大阪合同紡績神崎工場（一五六）　赤穗工場（二五）　福島紡績飾磨工場（五七）　内外綿株第二工場（二四）　鐘淵紡績兵庫工場（一〇四）

奈良縣　大日本紡績高田工場（四六）　郡山工場（二二）

岐阜縣　大日本紡績大垣工場（四四）　關ヶ原工場（三〇）　富士瓦斯紡績岐阜工場（三二）

愛知縣　大日本紡績一ノ宮工場（七九）　東洋紡績愛知工場（二五）　尾張工場（二五）　名古屋工場（二八）　津島工場（一四）　知多工場（八一）　服部商店熱田工場（五〇）　櫻田工場（——）　小牧工場

(―) 古知野工場(―) 近藤紡績本社工場(四二) 豐田紡績刈谷工場(四三) 名古屋工場(三六) 菊井紡績本社工場(六二) 名古屋紡績本社工場(三五) 愛知織物代官町工場(一三) 千種工場(三四) 內外紡績本社工場(一六) 富士瓦斯紡績名古屋工場(六二) 日洋紡績名古屋工場(八二) 岡崎工場(八六)

三重縣 東洋紡績桑名工場(二九) 富田工場(九〇) 宮川工場(二一) 津工場(五七) 四日市工場(七〇) 岸和田紡績津工場(三〇) 平田製綱本社工場(一三) 鐘淵紡績松坂工場(一五)

埼玉縣 東洋紡績栗橋工場(六) 內外紡績川越工場(二一)

靜岡縣 東洋紡績濱松工場(四二) 富士瓦斯紡績小山工場(一七二) 東洋モスリン靜岡工場(五二)

京都府 東洋紡績伏見工場(一七) 山田工場(六五) 辻紡績第一工場(二六) 第二工場(―) 第三工場(一一)

愛媛縣 東洋紡績川之石工場(三二) 大阪莫大小紡績三島工場(三五) 近江帆布八幡濱工場(一一)

廣島縣 大阪合同紡績能美工場(一六) 廣島工場(一七) 山積紡績本社工場(五) 鐘淵紡績熊本工場(一二)

德島縣 大阪合同紡績小松島工場(四二) 福島紡績德島工場(六六)

岡山縣 福島紡績笠岡工場(二二) 正織株式本社工場(四) 倉敷紡績倉敷工場(三七) 玉島工場(二九) 萬壽工場(六三) 早島工場(二〇) 北方工場(二三) 半田綿行玉島工場(一四) 福山撚糸紡績倉敷工場(一) 福山工場(二) 近江帆布琴浦工場(一一) 味野工場(二三) 鐘淵紡績岡山工場(一四) 備前工場(四九) 西大寺工場(一〇)

和歌山縣 和歌山紡績和歌山工場(三〇) 手平工場(一七) 中之島工場(二四) 紀之川工場(二三) 箕島工場(三〇) 和歌山染工和歌山工場(六) 松太綿布宇須工場(一一) 西工場(―) 紀陽綿布本社工場(六五) 內外紡績本社工場(一六) 廣工場(三一) 日出紡績日高工場(三二) 日高紡績本社工場(一一) 鐘淵紡績和歌山工場(一一)

神奈川縣 相模紡績平塚工場(六三) 富士瓦斯紡績川崎工場(一〇三)

大分縣 富士瓦斯紡績大分工場(八一) 鐘淵紡績中津工場(一〇)

香川縣 倉敷紡績坂出工場(一六) 三豐紡績本社工場(三一)

新潟縣 名古屋紡績新潟工場(二九)

福島縣 名古屋紡績郡山工場(二〇)

鹿兒島縣 大日本紡績鹿兒島工場(四二)

福岡縣 明治紡績第一工場(五一) 鐘淵紡績博多工場(一二)

宮城縣 旭紡績仙臺工場(三二)

福井縣 福井紡績本社工場(三〇)

滋賀縣 近江帆布草津工場(―) 彥根工場(一〇) 日出紡績大津工場(二二)

山口縣 宇部紡績宇部工場(二二)

島根縣 出雲製織今市工場(五五)

岸和田市 岸和田紡績岸和田工場(三九) 野村工場(三四) 泉洲織物岸和田工場(二二)

堺市 岸和田紡績堺工場(一九) 大阪織物堺工場(四〇) 長崎紡績堺工場(一八)

長崎市 長崎紡績本社工場(八〇)

福井市 服部商店福井工場(一三)

金澤市 錦華紡績金澤工場(六〇)

佐賀市 錦華紡績佐賀工場（四四）
大牟田市 鐘淵紡績三池工場（三一）
宮崎市 鐘淵紡績大淀製糸所（——）
久留米市 鐘淵紡績久留米工場（一六）
高岡市 日清紡績高岡工場（二四）
今治市 大阪合同紡績今治工場（五〇）
福山市 福島紡績福山工場（四〇）
姫路市 日出紡績姫路工場（三一）
高松市 倉敷紡績高松工場（四七）

輕工業の第二位に坐はるものは製糸産業であつて、これほど全土的に發展を遂げたものはない。そのうち同一資本の下にあつて、全土的にひろがつてゐる片倉、山十、群是、岡谷等の分布の概觀を表示すると次ぎのやうである。

▲片倉製絲

		勞働者數
長野縣	田中工場	七六一
同	松本工場	一、四九八
同	武井工場	一、三二二
同	尾澤工場	一、一九四
同	熊谷尾澤	一、〇二七
同	下諏訪工場	六三五
同	田中分工場	六七
同	飯田工場	五四七
同	平野工場	八八六
同	川岸村工場	一、九二一
同	諏訪分工場	六五
岐阜縣	瑞穗工場	二二四
同	岐阜工場	一、〇九七
埼玉縣	大宮工場	八七五
同	石原製糸	六九八
高知縣	高知工場	七七四
同	高岡工場	二一八
同	長岡工場	三四〇
佐賀縣	鳥栖工場	一、四五四
同	小城工場	三〇三
大分縣	大分工場	一、二四一
同	宇佐工場	四三二
愛知縣	一宮工場	八四九
福島縣	郡山工場	一、〇五八
山形縣	兩羽工場	四四七
德島縣	鴨島工場	三九九
兵庫縣	——	——
岩手縣	——	——
宮城縣	——	——
鳥取縣	——	——

▲郡是製絲

京都府	綾部工場	一、一一六
同	中上林工場	二六五
同	園部工場	五六七
同	舞鶴工場	四六五
同	福知山工場	五八五
同	玉糸工場	四八三
同	口上林工場	八二
同	上和知工場	二九九
同	宮津工場	三六二
山形縣	長井戸工場	五四一
岡山縣	津山工場	七七一
宮崎縣	宮崎工場	五五七
埼玉縣	青梅工場	一二八
岐阜縣	美濃工場	六四六
島根縣	三成工場	一七四
同	今市工場	六三七
福岡縣	宇島工場	三二〇

▲小口組製絲

長野縣	平野七工場	三、六二一
同	下諏訪分工場	八四二
同	下諏訪工場	二三二
群馬縣	高崎工場	七八三
滋賀縣	彦根工場	七三〇
兵庫縣	和田山工場	一、一一六
宮城縣	撰繭所	一六二
德島縣	德島工場	六五一
茨城縣	石岡工場	七二六
福島縣	郡山工場	五七二
宮崎縣	都城工場	九一〇

▲山十製絲

群馬縣	前橋工場	三六五
同	荒多工場	一一六
同	新町工場	八九二
長野縣	田中工場	一、二〇五
同	下諏訪工場	九四三
同	平野五工場	三、八七四
福島縣	福島工場	一、一七六

埼玉縣	本庄工場	一、七三二
岩手縣	一先工場	一、二二四
同	山目工場	五四七
鳥取縣	米子工場	九六〇
福岡縣	二日市工場	一、〇三二
宮崎縣	宮崎工場	一、三三四
廣島縣	福山工場	二七五
大分縣	大分工場	九七一
愛知縣	木曾川工場	八九七
栃木縣	小山工場	一、六六三
靜岡縣	沼津工場	八五九
滋賀縣	木之本工場	一、〇九二

▲岡谷製絲

茨城縣	朝日工場	八八九
茨城縣	眞鍋工場	四七五
三重縣	加佐登工場	二五四
埼玉縣	大宮工場	一、一二〇
長野縣	平野村三工場	二、一八八

▲石川組製絲

埼玉縣	川越工場	六四四
同	入間川工場	一一九
同	本店豐岡	一、一二四
同	扇町屋工場	二〇五
同	玉糸工場	二一〇
同	長谷部工場	九八
同	新家工場	六五八

▲矢島製絲

山梨縣	甲府第一	二一〇
同	甲府第二	一六三
同	甲府第三	六三〇
同	揚返工場	一三三
同	八日町工場	一九二

▲笠原製絲

長野縣	上田工場	一、一一六
福島縣	須賀川工場	七四三

輕工業の第三位は製紙産業だが、鳥の子紙は日本抄紙の靜岡工場、美濃紙は美濃ではなくて廣島、土佐半紙は日本紙業で出來る。地方的なものとしては靜岡に東海紙料、廣島に中國製紙、廣島製紙、大阪に西成製紙、乾製紙、愛媛、富山にも小工場は無數にある。全國的なものとしては一道二府三縣に跨る王子製紙と富士製紙が壓倒的である。

▲富士製紙

東京府	南千住工場	四一〇人
同	南淵江工場	一五三
同	行德工場	四一三
靜岡縣	第一工場	五四六
同	第二工場	四六一
同	第三工場	五七五
同	芝川工場	四二七
北海道	江別工場	八八八
同	金山工場	九七
同	池田工場	二七七
同	釧路工場	四七六
京都市	京都工場	一三六
兵庫縣	神崎工場	五一九
和歌山縣	熊野工場	二九九

▲王子製紙

東京府	王子工場	二九〇
同	十條工場	三六八
大阪府	都島工場	五四八
同	淀川工場	四一二
靜岡縣	岩淵工場	一〇三
福岡縣	小倉工場	四五〇
富山縣	伏木工場	四〇五
北海道	苫小牧工場	一、三二七

▲三菱製紙

東京市	中川工場	五三五
兵庫縣	高砂工場	一、〇〇二

▲北越製紙

新潟縣	新潟工場	二〇五
同	長岡工場	一〇三
千葉縣	市川工場	一四〇

▲樺太工業

熊本縣	坂本工場	八九二
同	八代工場	一四四
岐阜縣	中津工場	三七七
同	木曾工場	三五四
京都市	京都工場	八二

▲日本紙業

高知縣	久保田工場	一七〇
同	久保田伊野	二九五
同	同分工場	一二四
同	旭工場	四〇一
同	旭分工場	八三
同	第二分工場	八〇
山口縣	藝防工場	四七六

次ぎに食料品産業は罐詰を除けば、植物性原料に依存するが故に原料産地の土地に制約されてゐる。臺灣に基礎を置く製糖産業は其の著

例である。しかし北海道、九州の製糖、北海道の麥酒、地方的な製粉工場等を除けば原料を輸移入に仰いでゐるところから、生産工場の分布は主としては市場關係から設定されてゐる。

　東京には目黒と本所に大日本麥酒、神奈川には保土ヶ谷に大日本麥酒、横濱にキリンビール、愛知には名古屋と半田にビール鑛泉、京都には吹田に大日本麥酒、兵庫には平野と尼ヶ崎にビール鑛泉、大日本麥酒は尼ヶ崎に製壜工場、福岡には博多に大日本麥酒、門司に帝國ビール、北海道には札幌に大日本麥酒、宮城にはキリンビール分工場がある。

　製糖は本土にあるものは分工場で、大日本製糖は大阪と東京、福岡、大正製糖は東京と名古屋、明治製糖は北海道、東京、神戸、福岡、新高製糖は大阪、臺灣製糖は神戸、福岡に跨り、製粉は日清、日本の二社で製粉市場を兩斷する勢力を占め、日清製粉は東京の鶴見、千葉の水戸、愛知の名古屋、栃木の佐野、岡山の岡山、群馬の高崎、日本製粉は東京の大島、神奈川の横濱、福岡の大里と久留米に生産工場を置いてゐる。

　日清製粉の鶴見工場は、横付けされた汽船から、原料小麥袋が、工場内へ吸ひあげられて、暫らくすると麥粉の袋となつて、別の口から輸出するために貨物船へはこび込まれる迄、一行程に單純化された新らしい設備をそなへてゐる。

四

　重工業の大宗たる金屬製煉は、鑛石を山で吹き分けねばならず石炭も山で振り分けねばならぬので、生産設備の根據地は當然地方の山又山にある。

　そこでダークサイドに置かれた北海道は言ふまでもない。釜石鐵山の岩手、阿仁、尾去澤、小坂銅山の秋田、「佐渡の金山」の佐渡、日立銅山の茨城、足尾銅山の栃木、愛媛、高知などが資本主義文化に對して存在を主張し得るのである。そして全土の重要な鑛山と炭田は一握ほどの財閥資本團の手に掌握されてゐるのである。」

金屬製煉産業の全體系

備考、鑛山名と所在府縣を示す

三井鑛山　▲神岡―岐阜、▲串木野―鹿兒島、

田中鑛業　▲轟、明治、國富―北海道　▲西又、青森、土畑、鷲之巣―岩手、▲土倉―滋賀、

住友合資　▲鴻ノ舞―北海道、▲大萱生―岩手、▲縄地―靜岡、▲江與味―岡山、▲別子―愛媛、

釜石鑛山　▲釜石鐵山―岩手、▲白瀧―高知、▲玉江―山口、▲馬上、佐賀關銅山―大分、

久原鑛業　▲大江―北海道、▲吉野高玉―山形、▲日立銅山、▲諏訪―茨城、▲河津―靜岡、▲鍋戸―石川、▲沖之浦、竹野―兵庫▲岩美―鳥取、▲東山―徳島、▲三繩―徳島、▲東之川、[illegible]田、總津、大瀬―愛媛、

藤田鑛業 △雄別威—北海道、△卯根倉銅山—岩手、△小坂銅山、花岡、—秋田、△柵原—岡山、

三菱鑛山 △綱取、鷲合森、△翁澤—岩手、△尾去澤、猿間、荒川—秋田、△高取—茨城、△佐渡金山、高千—新潟、△寶—山梨、△大洌—岐阜、△南銀、生野—兵庫、△三原、吉岡、△幸盛—岡山、△金山—愛媛、△槇峰銅山—宮崎、

古河鑛業 △水澤—岩手、△不老倉、△阿仁銅山—秋田、△永松—山形△足尾銅山—栃木、△久根—静岡、△飯森—和歌山、△川井山—山口、△松原、下久志—鹿兒島、

石炭産業の全體系

北海道炭田

北海道炭汽—三井系—美春別、幌内、空知、萬字、眞谷地、夕張、登川、若菜邊、新夕張、

住友合資 唐松

三菱鑛業 上歌志内、芦別、美流渡芦別、美唄、大夕張、

三井鑛山 砂川

大倉鑛業 茂尻

常磐炭田

磐城炭礦—淺野系—小野田、内郷、重内、

三井鑛山 湯本

大日本炭鑛 勿來、高萩、磯原

入山採炭—大倉系—入山

筑豐、三池炭田

三井鑛山 三池、三井山野、三井田川、三井山野

明治鑛業—安川系—高田、久原、明治、豊國、第二横島、赤池

海軍省 新原

三菱鑛業 新入、鯰田、上山田、方城、相知、芳谷、高島、

帝國炭業 御徳、木屋瀬、中山田、神之浦、

貝島合名 大之浦、

商工省製鐵所 稲築、二瀬、鹿町、

住友合資 住友忠隈、嚴木、

麻生商店 芳雄、豆田、吉隈、綱分、

古河鑛業 目尾、

中島鑛業—三菱系—飯塚、

藏内鑛業 大峰、峰地、

大辻炭鑛—安川系—岩屋、大辻、

九州炭礦—三菱系—崎戸、

佐賀炭礦 杵島第三坑、

松島炭礦—三井系—松島、

セメントも亦、「土地」の制扼を免れ難い。今やセメント市場に、角逐しつゝある三井財閥の小野田セメントは山口の地に、淺野財閥の淺野セメントは全土的地域に據つて抗爭、對立してゐる。

		勞働者數
淺野セメント		
北海道	北海道工場	九五五
東京	東京工場	三二一
同	同スレート	一四〇
大阪	大阪工場	九七
神奈川	川崎工場	九三三
福岡	門司工場	八八四
同	同スレート	七二
秩父セメント		
埼玉	埼玉工場	一一一
日本窯業		
大阪	大阪工場	三三三
大分	佐伯工場	三四九
熊本	八代工場	四三三

土佐セメント		
高知	高知工場	五五五
愛知セメント		
愛知	名古屋	一七七
櫻セメント		
大分	大分工場	一四八
小野田セメント		
山口	小野田	一、三六四
宇部セメント		
山口	宇部工場	一一一
大分セメント		
大分	津久見	五四二
和歌山	由良工場	五〇四
磐城セメント		
東京	東京工場	六六
福島	福島工場	三八〇
青森	湊工場	一九二
中央セメント		
福岡	黑崎工場	一六二
豐國セメント		
愛知	名古屋	一〇四
福岡	福岡工場	四八七
日立セメント		
茨城	助川工場	一〇四
三河セメント		
愛知	名古屋	一二八

五

重工業のうちでも製鋼、造船、機械、器具の金屬產業は京濱と阪神に集中され、これを俯瞰するは壯觀でさへある。

だが、北海道には日本製鋼所、名古屋には三菱內燃機、愛知時計、日本車輛、豐田式織機、福岡には八幡製鐵所、長崎には三菱造船所、茨城には日立製作所、山口、廣島、三重には分工場等の特異的な地方的存在がある。

これらの主要なるものについて、その地域的分布を表示すると次ぎのやうである。

▲造船、船渠(括弧內は勞働者數)

三菱造船	長崎	長崎工場(六九三五)
	同	水雷工場(三三九)
	同	兵器工場(一八三四)
	山口	彥島造船(七三四)
	兵庫	神戶工場(四二〇二)
大阪鐵工所	山口	因の島(七〇九)
	同	築港工場(四四六)
	同	大阪工場(一四五一)
	山口	笠戶島(二六九)
	同	彥根工場(二〇四)
藤永田造船	大阪	住吉工場(一四九二)
川崎造船	同	湊工場(四三九)
	兵庫	兵庫工場(三一五八)
	同	葺合工場(四三〇二)
淺野造船	東京	鶴見工場(六〇八)
	同	ドック(三一六)
浦賀船渠	神奈川	浦賀工場(一四八七)
	同	橫濱工場(五七)
石川嶋造船	東京	造船所(一八六七)
	同	自動車(三〇六)
橫濱ドック	神奈川	橫濱工場(三七六五)
三井物產	岡山	玉工場(一三九二)

機械產業は東京の東京瓦斯電氣、日本光學、服部時計、愛知の愛知時計、豐田織機、大阪の大阪機械、田中車輛、栗本鐵工所は、資本を分割しないが、その他のあらゆるものは二府縣以上に跨つて生產設備がある。

廣島、山口、三重は造船材料の供給のために、福岡は八幡製鐵所との依存關係のために、かうした地域に機械產業の特異的な存在を必要とされたのである。

主要機械產業の地域的分布表

東京　▲東京建鐵、三二九、▲東京計器、四二一、▲池貝鐵工本工場、二七二、同分工場、二六五、▲汽車會社東京工場、五二六、同木材工場、一二四、▲服部時計店、一、二二六、▲新潟鐵工所

蒲田工場、四九三、▲中島飛行機、一六三、▲東京瓦斯電氣、六九九、▲日本車輛分工場、五一七、▲大日本自轉車本工場、一二七、同ゴム工場、一五七、▲金門商會、二二七、横河橋梁、二一二、▲日本光學大井、三一五、同三田工場、一一〇、

大阪 ▲東京建鐵、大阪工場、一七〇、▲住友製鋼所本工場、一、四四八、▲豊田織機大阪工場、三四七、▲金門商會分工場、七八、▲久保田鐵工本工場、三一六、▲大日本自轉車分工場、一三九、▲横河橋梁分工場、二六一、▲大阪製鐵、三六七、▲栗本鐵工所、四一二、▲大阪鐵板、一〇六、▲田中車輛、三六四、▲大阪機械、六六七、▲汽車製造、一、二一二、

神奈川 ▲日本樂器分工場、一六〇、▲日本鋼管、二、〇〇五、▲東京製鋼川崎工場、七一九、

兵庫 ▲住友製鋼神戸工場、二、一一三、▲久保田鐵工所分工場、一、〇四〇、▲三菱內燃機分工場、一、二六八、▲神戸製鋼所、二、一〇三、同播磨造船、一、〇九六、

愛知 ▲岡本自轉車、五一八、▲愛知時計名古屋工場、一、八四九、同瑞穂工場、一一六、▲豊田織機名古屋工場、六六九、同熱田工場、五〇、▲三菱內燃機飛行機工場、一、二五〇

福岡 ▲安田製釘、三五六、▲東京製鋼小倉分工場、五八一、▲淺野製鋼所小倉、五一九、▲戸畑鑄物戸畑工場、五八〇、同若松工場、二七四、▲渡邊鐵工、三四〇、▲三井鑛山附屬六工場、二、四二七、▲神戸製鋼門司分工場、四〇五、

静岡 ▲日本樂器濱松工場、一、四〇二、

群馬 ▲中島飛行機桐生工場、五五四、

新潟 ▲新潟鐵工所本工場、三六一、同長岡分工場、五四、同柏崎分工場、九一、同新潟分工場、一九一、

三重 ▲住友製鋼所鳥羽工場、六七三、▲神尾製鋼所鳥羽造船、六七三、

廣島 ▲日本製鋼所分工場、四七九、▲向島船渠、三九五、

山口 ▲大阪鐵板德山分工場、二九四、

機械產業から電力の機械、器具產業に關する一切を切り離したものが別表である。

東京電氣、東電大崎工場、大同電氣、京都電球、メトロ電球等の電球產業から、發電機、電線、扇風機類を製作する芝浦、住友、富士電機、古河電機、日立製作所、川北、奥村（奥村は川北に合併された）、また、電信、電話器の弱電流器具を製作する沖電氣、共立電機等の一切をここにぶち込んである。

九州の地方的產業資本財閥安川によつて經營される安川電機と、古河、日立（久原）三菱を除くその他の一切は、東京と京阪に集中されてゐる。

電力機器產業の都市集中

			勞働者數
芝浦製作所	東京	東京工場	一、六七三
同		鶴見工場	一、四四三
日本電氣	東京	芝浦分工場	一五九
同		三田本工場	八二二
帝國電機	東京	東京工場	一三三
岡部電氣	東京	東京工場	一〇八
明電舍	東京	東京工場	五一九
電業社	東京	東京工場	三一九
横河電機	東京	東京工場	一六〇
東亞電機	東京	東京工場	一一五
日立製作所	東京	東京工場	八一四

	山口	笠戸工場	五七六
	茨城	日立工場	二、七五五
	同	日立電線	一八八
共立電機	東京	東京工場	二一六
沖電氣	東京	東京工場	六七二
	同	大崎工場	三五〇
	大阪	大阪工場	九四
大同電氣	東京	東京工場	一四一
	同	巣鴨工場	八六
東京電氣	東京	川崎工場	一、三六五
	同	大井工場	三三三
東京電燈	東京	大崎工場	一九二
	同	機械修繕工場	四九
帝國電氣	東京	東京工場	五二
古河電氣	東京	東京工場	八七六
	栃木	晃精銅	九九七
	福岡	九州電線	一七六
三菱電機	長崎	長崎工場	四八五
	愛知	名古屋製作所	三三二
	兵庫	神戸製作所	一、二六六
日本電池	京都	京都工場	二〇六
井上電機	京都	京都工場	一四八
川北電氣	大阪	第一工場	六〇三
	同	第二工場	四九〇
三平株式	京都	京都工場	三四八
朝日電球	東京	東京工場	六〇三
京都電球	京都	京都工場	四九
北斗電球	東京	東京工場	一一五
メトロ電球	東京	東京工場	五五
大日本電球	東京	東京工場	一〇三
神戸電氣	兵庫	神戸工場	一八二
倉電線	東京	東京工場	八九五
湯淺蓄電池	大阪	大阪工場	三五五
日本電線	東京	東京工場	三八〇
住友電線	大阪	大阪工場	一、三四〇
奧村電機	京都	京都工場	七七二
富士電機	神奈川	神奈川工場	七〇五
明治電氣	東京	東京工場	一六三
安川電機	福岡	福岡工場	四九七
住友伸銅	大阪	大阪工場	一、五四一

六

こゝに、これまで見來つた限りでは、重要な化學工業が遺失されてゐる。染料、人肥、薬品、顔料、塗料等、化學工業は由來わが資本主義產業のなかでは最も振はない產業で、之れが遺失されてゐる。だがだからこそ、ここに遺失したのではなくて、わざと一般產業から取り殘して置いたのである。と、言ふのは、世界資本主義は、今や×××××の××に直面して、それ〴〵の帝國主義强國は××にそなへるべく慌たゞしく準備を急がせてゐる。帝國主義國日本はいかに準備しつゝあるか。といふ觀點から、化學工業を眺めようと考へたからである。

元來が火藥原料としての化學製品は、陸軍火藥製造所の岩鼻、宇治、王子や海軍火藥製造所の平塚に於ては、完備した設備と研究があるが、いはゆる民間に發達を遂げたのはヨーロッパ大戰後である。それも大正七年頃、三井鑛山や大日本人肥が硫酸に手をつけたり、セルロイド工場や日本火藥が硝酸の製造を始めた當時を回想すれば、その後の發展は隔世の觀がある。

これらは電氣化學、人肥生產、セルロイド工業の顯著なる發達に負ふところが多い。

從つて、生產設備の規模は著るしく增大され、生產設備の分布は全國的に擴大されてゐるのである。

次表が示すところの如く、一般的資本主義產業の分布と對比するならば、我々は、火藥原料の生產設備があらゆる形態に於ける××にそなへるかのやうに、公正に全土に分布されてゐる狀態に驚嘆せざるを得ないのである。

「火藥原料」の化學工業一般狀勢

會社名	所在地	主要製品
土佐硫曹	高知	工業藥品
日本窒素	熊本鏡	硫酸アムモニア
三井鑛山硫酸工場	福岡	硫酸
日東火工	福岡小倉	發火物
富田製藥	德島瀨戸	發火物
同	高松工場	同
日本染料	大阪工場	工業藥品
大阪アルカリ	同	同
再製樟腦	兵庫工場	樟腦
日本曹達	新潟工場	工業藥品
新潟硫酸	新潟工場	硫酸
日本硫曹	同	同
大日本セルロイド	東京工場	セルロイド生地
同	大阪工場	同
大阪セルロイド	大阪工場	同
國際セルロイド	同	同
日本セルロイド	大阪三國	同

會社名	所在地	主要製品
電氣化學	新潟青梅	
同	富山伏木	カーバイト硫酸
帝國火藥	愛知武豐	火藥
東海曹達	名古屋	苛性曹達
東洋曹達	福島郡山	硫酸
北海曹達	富士伏木	同
日本導火線	東京工場	導火線
同	小倉工場	同
日本化學工業	同	硫酸
大日本人肥	東京工場	硫酸
	大阪大和田	硫酸
	岡山工場	同
神島人肥	岡山神島	硫酸肥料
帝國染料	廣島福山	硫化染料
南海晒粉	和歌山	鹽酸、硝酸
北陸電氣	富山滑川	カーバイト硫酸

×　×　×　×

かくて、全産業の地理的分布の大觀をここに見た。

鑛紡王國に爭議がまき起つて、始めて、鑛紡王國の資本が全土に分布されてゐることを如實に知つたやうに、あらゆる産業は全土的に分布、擴大されてゐるのである。

そして、町村、府縣、國家と、政治機構が中央に集中されてゐるやうに、これらの全土的な全産業は、カルテルによる縱斷的組織と、金融資本支配による横斷的組織によつて、數個の巨大なる財閥資本の下に集中されてゐるのである。

即ち資本主義機構は全産業をピラミット型に組立ててゐるのである。今やダークサイドは裏日本でも、表日本でもない。表日本の勞働者も、裏日本の農民も、ピラミットの基底の暗黒のうちに在る。

我々は、資本主義文化の黄金色の光を、ピラミットの尖端、に光り輝くを仰ぎ見るのである。

歐米各國の失業對策

英國勞働黨政府の失業對策

蠟山政道

一

昨年五月、總選擧當時、英國は歐洲戰後の大規模にして永續的な失業の發生以來第九年目であつた。その間失業者狀況は、時に消長があつたけれども、常に百萬を下ることなく、寧ろその數は、最近に至り漸增の傾向で、五ヶ年に亙る保守黨政府の治績は、この點に關し、全く失敗だつた。

總選擧の行はれた昨年の初頭に於ける失業狀況は、(1)一、四三四、〇〇〇人であつて、この數は勞働紹介所登錄者約千二百萬人の一二%に上るのである。この外に、(2)救貧法に依る扶助を受けつゝある失業者と、(3)勞働紹介所に登錄せざる者即ち失業保險の救濟に浴し得ざる者及び救貧法に依る扶助を受けざる者にして失業者と見るべき者を合すれば、その數は二百萬を越えてゐると推測されたのである。失業問題が總選擧に於ける最大の題目となつたことは見易き事理である。

總選擧に於いて、この失業問題が最も花々しい論爭となつた一原因は、多年逆境に沈淪しつゝあつた自由黨が、『吾人は失業を征服し得る』(We can conquer Unemployment)といふスローガンを掲げて、前年發表した大部の政策調査の結論を、この失業問題の一點に集約したパンフレットを發表して、他の二大政黨に挑戰した爲めでもある。勞働黨も亦、『勞働と國民』なる政策綱領に於いて失業對策を發表したが、更らに特に自由黨案に對抗する爲め、『如何にして失業を征服すべきか』(How to conquer Unemployment)なるパンフレットを以て具體的項目を約束した。その中、自由黨案を批判せる部分には自由黨案はその方針に於いて必ずしも否とすべきではないが、その政府に在りし過去に於ける業蹟から見て信用すべからざるものであり、又案策そのものも既に一九一七年勞働黨側に於いて發表せる『戰後に於ける失業の豫防』なる調査から剽竊せるものであると評した。

さうして、勞働黨自身は、案策そのものも大事であるが、それを誰れが征服するかの方がより肝盡であると云ふ點を力說した。その一節に曰く『我黨の政策とロイド・ジョーヂ君の夫れとを比較せよ――ボールドウイン君の夫れとは比較にならない。なぜなら、彼は何等眞實の政策を持たずに總選擧に向ふ覺悟をしてゐるもの丶如くであるからである。ロイド・ジョージ君は一個の政策を持てる如く裝つてゐる。しかし、一度それを點檢せんか、彼の政策は絲屑と綴布とに化してしまふ、その正鵠なるものは勞働黨側に出所があり、又それは自由黨委員會の素人的方便により或はロイド・ジョーヂ君自身に依つて急造されたものである。彼は――いづれの場合も遲すぎて間に會はないのであるが――一つの正當なる觀念に思ひ付いた。即ち失業者に仕事を見つける事が能きる又見つけねばならぬといふことである……云々』と。

然らば、勞働黨自身は、如何なる方策に依つて、この正當なる觀念たる所の、失業者に仕事を見つけることが出來る、と爲したのであらうか。これは、後日の問題となるものであるから、そこに引用して置かう。勞働黨の失業對策として、選擧當時約束したものは、次の二十項目である。

(1)學校終了年限を即時十五歲に引上げること。
(2)老勞働者は適當なる年金を與ふること
(3)合理的な家賃を以て貸すべき新住宅を建設し貧民窟を撤去すること。
(4)電力供給の開發を促進すること。
(5)新道路を建設し現存道路を修理すること。
(6)耕地の排水灌漑及び造林を爲すこと。
(7)大產業たる農業を開發すること。
(8)炭坑業を國有及び國家統制の下に、頭から底まで改造すること。
(9)紡績業及び製鐵鋼業の繁榮を恢復する爲めの抱括的な計畫を樹立する權能を有する勅命委員會を設置すること。
(10)英蘭銀行を社會の直接統制の下に齎らすこと。
(11)就業者を增加し繁榮を來す見込ある企業に新資本を導入すること。
(12)國民就業及び開發局と國民經濟評議會を設置すること。
(13)失業者維持の負擔を全然地方團體の肩上から除くこと。
(14)續いて失業狀態に在る總ての者に適當な維持を與ふること。
(15)即時大規模なる產業補導の計畫を樹立すること。
(16)他人を失業せしむること無くして速かに移轉と移動とが實行され得る案策を工夫すること。
(17)華府會議の就業時間規定を批准し、總ての產業的企業に四拾八時間の最高勞働時間を强制すること。
(18)一九二七年の國際經濟會議に發したる歐洲の關稅障壁低下の運動に背後から推進力を加へること。
(19)對露通商を全き相互の承認の下に再開す

ること

(20) 國際聯盟をして軍縮及び國際平和の眞實にして有效な手段たらしむること。

かやうな約束手形を發行するに當り、その最後に勞働黨が附加した言葉は注意に値する。それは失業の救濟方法として失業者に緊急手段による職業口の給與も大事であるが、産業の恢復の爲めに廣汎なる建設的方策を實行することが一層重要なることであると言つた點が一つ。その改造の事業を實行することは、十二年前に於いて爲されたならば極めて容易であつたらうに、今日では甚だ困難になつてゐると云ふことを自ら認めた點が一つ。これらの二點は、自由黨の失業對策と自黨の夫れとの異なる點を諷諫したものであるが、同時に總選擧に於ける勝利を確信して、自重的な從つて控目な態度を現はしたものである。

二

總選擧の結果は勞働黨に絶對多數を與へず僅かに第一黨として組閣せしめた。爾來今日まで一年間に於いて、勞働黨は奈邊まで右の約束を實行したか。さうして、その結果はどうであつたか。

その組閣以來今日まで約十一ヶ月の間に、勞働黨政府の通過せしめた法律改正又は新らしい法案を列擧すると凡そ次の如きものである。寡婦年金法、失業保險法、精神病取扱法案、運輸法案、炭坑法案、教育法案及び植民地開發及び國內開發法案等である。又その間爲し遂げた事業は、地方團體と協力して爲せる貧民窟の撤去及び住宅の建造、ハーグ取極め及びラインランドの撤兵、對露國交恢復、エジプトとの條約、國際聯盟規約に於ける選擇條項の調印、海軍費の節減及びロンドン海軍條約の調印等である。即ち選擧當時の約手の大半は支拂濟みとなつたのである。しかし、ここに問題とすべきは、その實行內容である。殊に失業對策としての效果如何である。

勞働黨政府は、その六月の組閣匆々、一九二九年の暑中休暇以前に於いて、大體三つの方向に於いて豫備的な失業對策を實施し始めた。その一は、失業保險法の改正である。その二は、帝國領內の開發を目的とする資金の保障及び貸與である。その三は、失業相と目されたトーマスを中心とする諸策であつて、國內開發の爲めの施設である。この後の二つは、結局に於いて時の遲速はあれ、又その直接間接の差はあれ、事業を起して勞働者に仕事を與へる方策のカテゴリーに屬する。

第一の失業保險法の改正は、現に失業してゐる者の救濟方法であつて、同じ失業對策と言つても別のカテゴリーに屬する。從つて、これは區別して論ずる必要がある。勞働黨政府は、その組閣以來、今日まで凡そ三回の失業保險法の改正を行つた。第一回は、政府の負擔する失業基金が前內閣の節約政策の結果として、非常に減少し到底秋までの失業者に支拂ふべき金額に足らざることを發見し、その政府負擔金を保守黨の改正以前の額まで要求した改正案である。第二回は、失業保險法に於ける失業手當請求者の資格條項たる「僞り無く求職しつゝあること」の解釋適用が嚴

格に失し、失業者に苛酷な取扱ひをしてゐるのに對して、之れを緩和せんとする改正案である。第三回は今年に入つてから行はれたもので、それは前段述べたる政府負擔の失業基金四千萬磅の最高額を五千萬磅まで增額せんとするものである。かやうに、失業基金の增加が行はれねばならなかつた原因は、勞働黨自ら行つた手當支給資格條項の緩和に依る所も多少あるが、その大部分が今年に入つてから米國の恐慌による不景氣の深刻、政府の行へる失業對策の效果擧らざることに依る原因に歸すべきは明かである。組閣當時卽ち一九二六年六月二十四日現在の登錄失業者の數一、一二七、八九五人であつたものが、一九三〇年三月十日現在では一、五六三、八〇〇人となり、四三五、九四一人の增加となつたのである。最近の外國電報では登錄失業者の數が百七拾七萬を越え、新記錄を作つたと傳へてゐる。

翻つて、失業者に仕事を與へる爲めの施設の方面を見よ。トーマス、ランズベリー及びモズレーの三人組を以て組織せる失業對策組織の爲せる事業は如何。その企畫の中心は、前記の開發信用保障法（The Development Loan Guarantees and Grants-Act）であるが、該法に依つて本年三月末日までに許可された地方團體及び公益事業會社の事業計畫の總額は、三九、三二六、〇〇〇磅であつて、それが一年間に費されたと假定して、その吸收し得べき失業者は、僅かに一六四、〇〇〇人なのである。卽ち百五拾萬人の約一割に過ぎぬのである。この外、植民地の開發によつて延人員八千人、道路基金の運用に依る事業に依つて延人員十萬人、合計約二拾八萬人に足らぬのである。しかも、これらの事業は種々なる事情によつて、必らずしも卽時に事業を開始し得ぬものもあり、又一年間でなく數年に亘るものであるから、その對策價値は一層減ずる譯である。反對黨の批評ではせいぜい六萬人乃至七萬人であらうと見られてゐる。

失業對策の中心人物たるトーマスの根本方針は對外貿易の促進、國產品の利用に依る輸入の防止にある。彼のカナダ行もこの目的に出でたのである。卽ち彼の根本主義は、自由黨の主張する緊急施設に走らず、又勞働黨內の左翼派たるI・L・Pの國內市場の開發に重きを置かない。又資本家及び金融業者との提携に依る合理化の促進に依つて、產業の恢復に努めて、失業者の吸收を遠い將來に期してゐるのである。從つて、かやうな政策の結果として前記の成績が現れたのであるが、假令最近に於ける失業者の激增が所謂世界的不景氣の結果であらうとも、その不成績は反對黨の攻擊は勿論のこと、自黨內部に於ける不平不評を招かずには置かない。

現にI・L・Pに屬するモズレーは最初よりトーマスの方針に不滿であつた。今年に入つてからの失業者の激增は遂に彼をして別の對案を揭出せしめ、その容れられざるに至つて彼れはランカスター公領尙書の職を辭した。これに依つて內閣に一波瀾を惹起したことは新聞紙の報道の通りである。彼れの對策は、」

國民計畫局を樹立し、それを中心として失業者群を雇傭すべき一連の事業を起す爲めに資金の供給を爲さしむべしと云ふにある。これに依つて國內市場の開發を行ふと共に、農業の保護も行はんが爲め國民輸入局を設置して食糧品の輸入を統制せんとするにある。要するに、彼れに言はすれば、勞働黨の選擧當時の約束を實行せんとする計畫である。が、しかし、そこには未だ勞働黨全部の承認を得て居らないI・L・Pの傳統政策たる「今日の社會主義」に於ける政策が加味されてゐることは疑を容れない。

　果然彼れはその說の容れられざる爲め辭職した。が、トーマスの不許も敵ふべくもなく、彼れは自治領相に轉じてハートショーンが代つた。今後は、マクドナルド自身陣頭に立つてこの問題の處理に當るであらうが、前途の見込は先づ立たないと見るのが至當であらう。何故に勞働黨は、自由黨が明白に主張し、黨內に於いてもコールのやうな理論家の提唱せるが如き緊急的救濟事業を大規模に起す態度に出でないのであらうか。ここに、勞働黨の當面してゐる現在の英國政界の疑問がある。又そこに勞働黨の前途を卜すべき謎が橫つてゐる。その疑問と謎とはやがて明るみに暴露される秋が來よう。（一九三〇・六・八）

ドイツにおける失業對策

橘　和　雄

『總べてのドイツ人には、經濟活動によつてその生計の資を得べき機會が與へられねばならぬ。若し適當な勞働の機會が與へられない場合には、その必要な生計費が支給せられる。』（一九一九年八月十一日、ドイツ共和國憲法第百六十三條。）

　戰後ドイツの直接××的危機はドイツ資本家階級をしてワイマール憲法において大衆の勞働權を確認し、失業に對する失業手當ての保障を約束せしめた。それは共和制の採用、上院の廢止、一部分の剩餘價値の占有に對する彼等の斷念、等々の無產階級傳來の諸要求の確立と共に帝國主義時代における輝ける「名譽革命」の遂行であつた。だがカイゼルの退位は「ブルジョーアジーの退位」を意味したらうか？　エーベルト、ハーゼ、ノスケの就任は「社會民主主義者の背後へのブルジョーアジーの逃避」ではなかつたらうか？

　これに對する回答をば我々は無產階級に對する社會民主主義的指導者、否、資本家階級の對策の變化の中に見ることが出來る。

　一九一九・二〇年にドイツ資本家階級が經驗した破局的な危機は大衆失業の浪に對する社會負擔をば「必要なる失費」として認めざ

るを得ざらしめた。敗戰より逃れ歸つた兵士達、武裝せる勞働者達、これらに對して資本家階級は、その破壞せる權力機構をもつてしては如何ともこれを壓服することを得なかつた。こゝに名譽革命の遂行は資本家階級にとつて必要な根據をもつた。だが改良主義者の歷史的活動をインフレーション政策とによる大衆の力の收奪と前衞黨の破壞、ドウズ案によるアメリカ資本をもつてするドイツの資本主義的復興はドイツブルジョーアジーのプロレタリアートに對する地位を相對的に甚しく高めた。資本主義は政治的にも經濟的にも相對的安定期に入つたのである。かくして一九二四年に、

イ、疾病者保險	七五〇(百万マルク)
ロ、老朽者保險	三六〇〃
ハ、雇傭者保險	一二六〃
ニ、災害保險	一三六〃
ホ、帝國補助坑夫組合恩給保險	一〇〇〃
ヘ、失業者救濟手當	二二〇〃

を含む十六億九千二百萬マルクの社會負擔一九二五年には二十七億マルクに上る社會負擔は、ドイツ資本家階級の「弱まつた、苦痛に惱む經濟にとつては我慢の出來ないもの」となり、その『生產價値とまさに相容れない』程のものとなつた。(ドイツ工業帝國聯盟の覺書、一九二五年十二月より。)「必要な失費」は最早や必要でなくなつた。

同時にこの時期は合理化への轉向の時期であつた。强大な獨占機構に結成し、回復した國家機構を持つたドイツ工業は、インフレーションによつて貧窮化した國內市場に當面して、一路、弱まつた勞働者を犧牲とする合理化へと驅り立てられた。かくて「民主主義者」の政府は勞働者階級に對する攻勢に移つた。大衆には「忍耐」が說かれた。合理化は結局に安いパン、高い賃銀、並びに多くの勞働の機會を齎すであらうと約束せられた。企業家と組合指導者達とは不思議の合理化の國アメリカへ、五日の勞働日と最高の賃銀を支拂ふフォードへと旅たつた。そして前者がドイツに齎したものはフリースバンドと新しいテイラーシステムであり、後者が齎したものはアメリカ勞働者の自動車を持つ幸福なる生活の噂であつた。だが彼等はフォード工場の勞働者が數年ならずして癈人となることや、纖維工業勞働者、鑛山勞働者、鐵工業勞働者の合理化せられた地獄の勞働については何事をも語らなかつた。產業合理化はかくて改良主義者の歡呼の中に社會救濟の手段として、道德的善として遂行せられた。

しかし合理化が極めて急速に、そして大規模に相對的過剩人口をそして最後には絕對的過剩人口をも排出するものであることは、勞働强度の甚しい增大と有機的組成の高度化との齎す當然の結果でなくてはならぬ。ルール炭田における一九一三年より一九二八年に至る間の全出炭量中機械掘り出炭量の二・二%より九〇・四%に及ぶ急激な機械化の過程はこの過剩人口排出が不可避的なることを示して居る。かくて資本家階級は必然的に增大してゆく失業者に對する社會的負擔をば更らにヨリ多く勞働者階級の負擔たらしむる口實を

案出した。そしてこの口實は、一九二六年の合理化景氣による失業者の一時的激退（一九二七年夏は五十萬人の失業手當て支給者が存在した）の好機においてその實行力を獲得した。彼等は言つた、

『今や失業者は元來勞働を嫌惡する分子達である、これらに對しては彼等をして再び勞働の快味を味はしめるために、國家の扶助を拒絶すべきである』と。かくて失業保險制度は資本家階級と改良主義者との情けある創意によつて、全失業者に對する扶助たる性質を失つて、勞働者の直接負擔による一部失業者の救濟制度として一九二七年七月十六日に公布せられた。（十月一日より効力發生。）

この失業保險法によれば、筋肉勞働者は全部、そしてその以外の勞働者は年收六千ライヒスマルクを過ぎざる限りこの保險に加入する義務を負ひ、負擔額は、基本賃銀の三%までを雇主と切半して疾病保險基金へ支出するのである。全國準備基金は六十萬人を三ヶ月間維持するに足るまで全國より三%の負擔金を徴收する權利を持ち、負擔金と準備基金よりの支出をもつてしてもなほ需要に應じ得ぬ場合には、帝國勞働大臣は必要資金を聯邦の基金より借り入るる權利を持つ。失業の際の給付額はその基本賃銀の額に從つて異り、週賃銀八マルクより六十三マルク迄を十一の段階に分ち、本人支給額の夫々七五%――三五%に至る。家族手當はこの率の五%である。そして此兩者を合したものは夫々の場合につき八〇%より六〇%を越えることを得ない。而してこの支給を受くるがためには被保險者が勞働能力と勞働意志とを持ち、自己の過失によらずして失業したることを必要とし、更に失業に先行する十二月間にその就業勞働について二十六週間繼續的に保險負擔金を給付したる事を條件とする。保險による扶助金支出の期間日最大限二十六週間（特別の場合は三十九週間）であり、これ以上に亙る者は聯邦勞働大臣の許可により恐慌扶助金を支出せられる可能性を持つ。（なほ短操勞働扶助金についての法令が同時に布告せられて居る。）

しかし戰後資本主義第三期の情勢は一九二九年に入つてドイツ資本家階級に對して、勞働者階級に對する攻勢の一段の飛躍を要求した。合理化による景氣は一九二八年に至つて終熄した。生産は重工業においてさへも一九二九年に入つて下降し始めた。就業人員は全工業に亙つて一九二八年には絶對的にも減少を示し、合理化による過剩人員の排出は、景氣下向による失業者の增大と相俟つて夥しい人員を街上に放出した。一九二九年には二萬五千の企業が清算せられ、その中一萬は破産した。ドイツエ・バンクとデイスコントゲゼルシヤフトとの合併のみで四千人の失業者を、I・G・染料の生産の組織替はそれだけで二萬人の失業者を生出した。かくの如き底知れず增大する失業者の浪に當面して（一九二九年二月は異常な寒氣と合して二百四十六萬人の失業保險扶助金支給者を生んだ。）聯邦職業紹介所と失業保險局とは遂に一九二九年八月二億六千五百マルクの借入金をもつて漸く事業を繼續するを得る狀態となり、この窮境

を脱するために一九二九年十月十二日の失業保險法改正令が發せらるることとなつた。その主要なる點は資格期間を制限することにより、半失業狀態又は疾病狀態にある勞働者の資格期間をば保險範圍より除外し、獨立生產者の副業よりの失業を除外する等專ら範圍の縮少に務めた。しかし第三期における世界經濟の切迫せる情勢、そして特にヤング案によるドイツ資本家階級の世界市場における闘爭への強き熱望は彼等を驅つて更らに一段の合理化へ、勞働者階級を犧牲とする合理化へと管打つて居る。

『ドイツの貨幣市場及び資本市場の現狀は資本を供給する最も確實にして安價な道を生產行程に求めしめる。この道は先づ第一に工場自身の內部における資本構成によつて遂行せられる。』(一九二九年十二月、ドイツ工業帝國聯盟の覺書より。)

かくて新しい合理化が、卽ち資本構成の直接の手段としての資本の新しい攻勢が開始せられた。それは更らに流通過程において關稅を引きあげ官營住宅經營及び住宅賃貸令を廢止して自由なる高利に委ね、直接稅を大量的に輕減して大衆消費稅たるビール、煙草のそれを著しく高めることを決議した。そして遂にドイツ勞働組合總同盟の一九二九年初めの案たる失業保險負擔額の制限をば三％より四％に高め、收入を三億マルク增大することを承認し、政府が速かに失業保險收支の均衡を謀る施設を實行すべきことを要求した。(十二月二十二日)帝國聯盟會議における幹事長シルヴエルベルグの改革案こそはドイツ資本家階級の斷乎たる決心を示すものでなければならぬ。彼は曰ふ、

『國家が集散的經濟特に社會主義的租稅、財政經濟を遂行するならば、私經濟、個人主義的資本家的經濟は效果を擧げ得る筈がない。斯くの如き內的矛盾の存する限り、就中帝國の對外支拂義務をば受取超過によつて決濟することは不可能である。……』と。かくて彼れは國家の財政政策による干涉の結果特に減退した資本蓄積の根源をば過度の消費の出發點となつて居る多額にすぐる賃銀と俸給との支拂ひに歸せしめた。(ベルリナータゲブラット一九二九年十二月十二日。)今やドイツ資本家階級にとつては最早や忠實な社會民衆主義者と雖も剩餘價値の占有に障碍となることが宣言せられたこととなる。ドイツ資本家階級は今や一九一九年の憲法の規定する最後の民主的殘滓を淸算しようとして居る。

フランクフルト新聞は恒常的失業の根因をば賃銀の餘りに高すぎることに基因するとし、少くとも賃銀の五％を切り下げることが失業排除の條件であると論じ、重工業機關紙ドイツ鑛山新聞は餘りに短縮せられた勞働時間が失業の根因なりとし、現在の勞働時間の規定と契約とを改めることなしにはその失業を除くことを得ぬと結論した。斯樣にして失業は全く勞働者の肩に轉嫁せられ、ドイツ資本家階級は資本の攻勢を行ふべき立派な口實を得、尨大な失業者群が恒常的に街頭に投げ出された。

年月	恐慌扶助 費支給者	失業保險本人 扶助金支給者	失業者
1927年(月平均)	——	837,313	——
1928年(月平均)	——	889,125	——
1929年 1月	——	2,246,000	——
〃 2月	——	2,460,760	——
〃 3月	192,314	1,899,121	2,483,937
〃 4月	198,780	1,125,968	1,711,665
〃 5月	203,031	807,750	1,349,833
〃 6月	206,631	722,948	1,260,044
〃 7月	153,095	710,499	1,251,452
〃 8月	157,245	725,757	1,271,990
〃 9月	161,635	748,610	1,323,603
〃 10月	171,612	889'492	1,557,146
〃 11月	186,683	1,200,396	2,035,667
〃 12月	210,240	1,774,571	2,850,849
1930年 1月	250,029	2,232,619	3,217,608
〃 2月	277,202	2,378,521	3,365,811
〃 3月	293,722	2,053,380	3,040,797

(ライヒスアルバイトブラット、一九三〇年第十三號)

そしてこの全結果こそはドイツ勞働者階級をして重要な轉向點に立たしめた。彼等は今こそ知らねばならない、彼等を救ふ者はヒルファーディングでもシャハトでもあり得ない、彼等を救ふ者は彼等以外にはあり得ないと云ふことを。

(一九三〇年、六月八日)

労働者國家ロシアの失業問題

田中九一

一

利潤を追及する資本主義社會に失業群はつきものであり、資本主義が一定の段階以上に進めばこの失業群は増加する一方である、といふ事は經濟學を一寸でものぞいた人なら知つてゐる。しかし、勞働者が權力を握り、勞働者が大部分の工場を持つてゐるサヴェート聯邦にも、次のやうに百何十萬といふ失業群が絶えないのはどうした事か?

失業登錄者數

一九二四——二五	八四八、〇〇〇
一九二六——二七	一、三五三、〇〇〇
一九二八年十月一日	一、三七四、〇〇〇
一九二九年一月末日	一、六六五、三〇〇
〃 五月一日	一、七〇〇、〇〇〇
〃 八月一日	一、二九八、〇〇〇
〃 十二月一日	一、二四一、〇〇〇

之等の失業者は失業保險制のない國の者とは違つて少くとも一定期間は最少限度の生活の保證は與へられてはゐる。しかしそれは就職者の收入よりは遙かに低い。而もこの百何

十萬の失業者は、現に就職してゐる千何百萬（後に詳述）の者と等しく、國有産業の共有者ではないか。同じ共有者であり、同じく働く意志を持ちながら、勞働者の九割は勞働と比較的高い收入とを與へられ、他の一割は之より排斥せられてゐる！　假に十人の勞働者に對して十時間の勞働と九斤半のパンとをしか與へ得ないならば、等しく各人に一時間の勞働と十分ノ九・五斤のパンを與へるのが公平ではないか。しかるにロシアの現狀は、九人は一時間の勞働と一斤のパンを得てゐるのに、一人だけは遊ぶ代りに半斤のパンしか與へられぬ。どうしてこんな不平等が許されてゐるのか？

二

この質問に對してサヴェート聯邦の當局者はかう答へる、――この不平等は勿論サヴェート聯邦の不完全を示すものである。しかしそれはサヴェート聯邦の社會主義的生産力を發達せしめるための必要惡なのだ。如何なる社會も生産力の不斷の發達なくしては存續し得ぬ。ロシアの戰時共産主義は未だ之をなし得ぬが故に夭折した。世界資本主義はもはや之をなし得ぬが故に、壽命を終らうとしてゐる。而してサヴェート聯邦の社會主義的生産力が夭折しないためには、單にそれが絶對的に發達するのみならず、國内の私資本の生産力は勿論、資本主義諸國の生産力をも乘りこえて躍進しなければならぬ。しかるに今日のサヴェート聯邦の社會主義的生産力は、凡ての者に正規の勞働と分配とを與へつつ發展し得るまでに進歩してゐない。即ち、

第一に生産手段が不足してゐる。今日の資本主義諸國の失業は、その生産方法にとつては生産手段が發達しすぎ、生産が購買力よりも多すぎるために生ずるのであるが、サヴェート聯邦にはかゝる市場の制限はない。生産さへ増せば直に消費力は増す仕組になつてゐる。しかるに凡ての勞働者に仕事を與へ得る生産手段がないのだ。（經濟學全集第十八卷六三九頁以下のヴァルガよりの引用文參照。）

それではその限りある生産手段だけでも、凡ての勞働者に平等に使用させれば失業者がなくなるではないか、といふに、そこには不熟練勞働者といふ障碍がある。社會主義的生産力の發達に必要なる生産手段の擴張をなすためには、勞賃總額に限度がある。この一定の勞賃總額を凡ての勞働者に均分すると共に彼等に等しく勞働を與へても、生産額が低下しなければよい。しかし（１）一定の能率を上げるためには少くとも或程度以上の勞賃が必要であるのみならず、（２）現在のサヴェート聯邦の如く公私の兩企業が競爭してゐて、多くもない熟練勞働者を爭奪しつゝある時は、國家企業は少くとも私企業だけの勞働を支拂はねばならぬ。こゝに前述の如き平等の分配に對する障碍があり、熟練の程度に應ずる勞賃段階の必要があり、最下位の不熟練勞働者は最低勞賃よりもつと低い失業手當で滿足しなければならぬ、といふ必要が生ずるのである、云々と。

三

前述の如く、サヴェート聯邦の失業は資本

主義諸國の如く生産過剰に基く解雇によるのでなく、生産は不足して居り、從つてそれをたえず擴張しつゝあるにも拘らず生ずるものである。從つて前述の如く失業者が増しつゝあつた一九二八年頃でも雇傭勞働者は次の如く増加して行つた。*

	雇傭勞働者總數	內、農業勞働者以外の者(増加率)
一九二四——二五	八、二五六、〇〇〇	六、七三五、三〇〇
一九二五——二六	九、八〇八、〇〇〇	八、一六五、九〇〇(二一・二%)
一九二六——二七	一〇、三一二、〇〇〇	八、八六六、一〇〇(八・六%)
一九二七——二八	一一、八〇一、〇〇〇	九、三六九、九〇〇(五・七%)
一九二八——二九	一二、〇〇〇、〇〇〇(一九二九年末)	一〇、〇〇九、〇〇〇(六・八%)
一九三〇末(豫定)	一三、〇〇〇、〇〇〇	

*かく一九二九年五月までは、雇傭勞働者の増加と共に増加したる新なる勞働力はどこから來たか。その大部分は農村出身であつた。年々約二百五十萬の農村人口が都市に職を求め、その中の約五十萬は都市に定住する。失業登錄者の六割はかゝる農村出の不熟練勞働者であり、之については婦人勞働者、頭腦勞働者にして、熟練勞働者は失業者の一%しかないといふ。(この農民の賃勞働者化の問題は、小規模農業の窮迫を示すものにして、或はサヴェート聯邦の工業化(社會主義化)の過程として、又或は農村問題の一困難として、十分研究に値する問題であるが、今は之に觸れぬ。)

四

以上の原因によつて生ずる失業の對策については、賢明なる讀者は既に大體の見當をつけて居るであらう。先づ之を二大別すれば(A) 失業防止策と (B) 失業救濟策となる。(A)防止策を先に述べれば、之も(イ)新なる賃勞働者の續出と制限と(ロ)新なる賃勞働の提供との二つとなる。而して(イ)については、その最大の供給所たる小農及び貧農の救濟、就中彼等の團體經濟への組織が勵行せられてゐる。この團體經濟は昨年は豫想外の急テンポで發達し、穀物耕作面積の六割を掩ふに至つたとまでいはれたが、その後脫退者が出て多少減じたが、それでも五ケ年計畫の最初の案よりは遙かに多いといふ。しかし何れにしてもこの團體經濟を徹底せしめたものは國營のサヴェート農場であり、そこでは凡ての者が差當りは賃勞働者である。從つてサヴェート經濟政策の窮極目的に最も適合する失業防止政策は前述(ロ)の新なる賃勞働の提供である。この方法としては、未熟練勞働者を訓練して、之をも生産手段の利用に參加せしめ、以て失業防止と生産力發達との一擧兩得の效果をあげるために主として次の二つが實施せられ初めてゐる。

(1) 七時間勞働日。以前は八時間が標準であつたが、一九二八——二九年度より實現可能なる産業から、徐々に七時間とする事となり、一九三〇年一月一日には六十五萬人の工

業勞働者がこの制度の下にあり、更に一九三○年十月には之は百十萬乃至百五十萬、一九三一年十月には二百萬（大工業勞働者の七九──八％）となり、一九三三年十月に全部に及ぶ豫定である。この時間短縮が新なる勞働力を收容する事に役立つのは說明を要しないであらう。

（2）無休日運轉。之は昨年あたりから我國の新聞を賑はした問題にして、一年の中革命記念日その他の大祭日たる五日を除く外、工場（廣義）は無休運轉をなし、只勞働者は交替で五日目に一日（即ち四日働いて一日休む──但し建築勞働、季節勞働は六日目に一日）休む方法である。之は原料や熟練勞働者の不足しない產業から漸次に實施せられる事となつてゐて、既にその實施を受けた者は、一九二九年十月一日に工業勞働者のみで二十七萬五千であつたが、一九二九──三○年には百三十三萬二千人（國有重工業勞働者の六○％）に及ぶ豫定である、と。尙ほこの制度は生產の著しい增加、日曜休息の廢止による宗敎の打破の效果をも期待せられてゐるが、今は之に立入らぬ。

以上の諸方策によつて既に昨年八月には五月よりも四十萬の失業者が減少したことは前述の如くであるが、更に本年度（一九二九──三○）中には、約八十萬人の新勞働者を雇傭し得る見込であり、五ケ年計畫の終り（一九三三年九月末）には人口の自然增加を考慮に入れても失業者を五十萬以下とする見込である、と。而して之等諸方策は生產規模を擴張し生產を著しく增加するが故に、雇傭勞働者の增加をなしても一人當りの勞働は減少しないのみならず、却つて大いに增加する筈である。（一九二八──二九年度の農業以外の勞働者の平均勞賃は一年に八二三チエルヲネッツ留にして、前年度より六○チエルヲネッツ留の增加である）。

（B）失業救濟策──以上の防止方法が豫定通り實現せられても尙ほ一九三三年に五十萬の失業者が殘り、今は百二十萬ある。しかし之等の者は餓死の不安からは免れてゐる。失業救濟方法の主なるものは、

1）失業保險。この保險の大きな特徵に、勞働者は保險料を一文も出さずして、全部が傭主の負擔である點である。失業登錄後一定の時が經過しても職のない者が、この手當をうける事となつてゐるが、その範圍は保險基金の充實と共に擴大せられて、手當受領者は一九二四──二五年度の三十萬人より一九二八─二九年度には八十五萬三千人に增加せられた。この間の手當支給額は、三千萬ルーブルより一億四千二百萬に增してゐる。

（2）この外に勞働組合員（勞働者の大部分はそれにして、一九二八年七月には千百余萬の成員あり）は、組合より失業手當をうける。その額は平均一ケ月三乃至十八ルーブル。

（3）失業救濟事業。主に公共の土木事業。之に雇はれる者は一日平均一ルーブル半を得。一九二四─二五年度には一日平均四萬人がこの仕事を與へられてゐた。

* * *

前述の如く失業問題の根本的解決は、五ケ

年計畫の成績にかゝつてゐる。實にこの五ヶ年計畫の成績こそは、單に失業問題に止らずサヴェート聯邦の社會主義が永久的基礎を確立し得るか否かを、從つて或程度までは世界經濟の動向をも決定する重大なる問題である。而してこの五ヶ年の最初の年（一九二八—二九）の成績は何人も意外とする程良好にして、最初の豫定を遙かに突破した。そのために悲觀論をとなへたブハーリン、ルイコフ、トムスキー等もその主張を改めたし、又第二年（本年）の豫定を最初の豫定よりも著しく擴張し（詳しい數字については Bank for Russian Trade Review, Dec. 1929 參照）この調子で進めば五ヶ年計畫は四ヶ年間に實現し得るといふ彼等の揚言を單なる宣傳とばかり見る事は出來ぬやうである。本年初め頃の農業の團體經濟の多少の逆轉はあつても五ヶ年計畫の實現に大したヒヾを與へぬらしい。何れにもせよ、この案は全世界の人々の注意の的となる價値は十分持つてゐるのである。

アメリカ現在の失業

石濱知行

資本主義の存立を擁護するものにとつて、アメリカは、最近に於いて、唯一の依り處であつた。アメリカ資本主義の盛衰は、すなはち、資本主義そのものの運命を指示するものと思はれてゐた。

事實、アメリカは、ヨーロッパ大戰以來、外觀上、繁榮の種々相が現れてゐるかに見えた。ヨーロッパの大戰は、アメリカに大手を振つてヨーロッパ市場に進出するの機會をあたへた。多くの金がアメリカに流入した。金融資本のもとにヨーロッパを桎梏した。千九百二十年、かくしてアメリカには空前の好景氣が見舞つた。その後多少の變動はあつたが、アメリカの資本主義は表面上、些のゆるぎをも見せないかに見えた。千九百二十八年には、その年の初期に起つた生産恐慌を克復して、生産は、ふたたび異常なる進展の相をしめし、さらに千九百二十九年に入つて、諸種の主要産業部門には非常なる活氣がみなぎつた。

かゝる好景氣の連續は、アメリカのみならず、矛盾になやみつつあるヨーロッパ資本主義の擔當者・擁護者たちをして、資本主義の將來についての危惧を一掃せしめた。ことに、アメリカでは、所謂『繁榮の理論』、『永久の繁榮』、『アメリカ資本主義の特殊性』等が、さかんに、となへられた。これらは、單に資本主義擁護者によつてとなへられたのみならず、無産政黨のうちのあるものたちによつても支持された。アメリカ總同盟會長たるウヰリアム・グリーンは次のごとく言つてゐ

る。

『千九百二十九年は、工業の發達および市場の狀態から言へば、甚だ良き年であるであらう。購買力は高く、この狀態は生產物すなはち國民が必要とするすべての商品に對する需要を條件づける。……この國では當然、千九百二十九年に於いて石炭鑛業や纖維工業や製靴工業に於ける狀態が非常に良好となるであらう。今はじまりつつあるこの年中に於いては、たとへ失業が一般に來るとも大したことはないであらう』

また、アメリカ共產黨の前書記長ラヴストーンは、アメリカ工業に於ける技術的發達をもつて、『第二產業』と言ひ、アメリカ資本主義の『ヴイクトリア王朝時代』だと言つてゐる。

右は大資本家から左は除名されたるラヴストーン、ペッパー等の舊共產黨員にいたるまでが、アメリカ資本主義萬歲をとなへつつある反面に、冷酷なる歷史の進行は、おごれるアメリカ資本主義に蠶食して多くの矛盾を發生せしめつつあつた。

現に、好景氣の二十年から二十九年の間に、小規模であつたがすでに三回のコンユンクトウーの變動があり、社會の消費力の基礎たる勞働者の賃銀および農民の所得と生產の價値の間に不釣合が生じ、それが漸次擴大して、鋏形恐慌の危機にせまりつつあつた。そして、ヨーロッパ戰後アメリカ空前の好景氣時代たる千九百二十年に於いてすら、すでに失業者は、百四十萬人に達し、その後漸增の傾向にある。

かゝる矛盾の擴大は、千九百二十九年の十月に至つて、つひに暴力的表現をとつて、『アメリカ合衆國の歷史のうちで疑ひもなく最惡のものであつた』取引所恐慌となり、それに續いて一般經濟界の大恐慌に迄進展せんとするに至つた。

かゝる恐慌の深刻化は、バラームによれば、(一)アメリカ經濟界沈靜の慢性的不景氣への移動、(二)慢性的大衆失業、(三)全勞働階級の賃銀および生活條件の低下、(四)合理化の强行、(五)國家の漸次的ファッシズム化、(六)社會黨、社會改良主義諸團體、アメリカ勞働總同盟のファッシスト化、(七)過剩商品の世界市場への賣込努力、帝國主義競爭國への攻勢、植民地の掠奪、(八)ザヴエート聯邦への武裝的攻擊、(九)すべてのプロレタリア的組織、ことに共產黨および革命的團體へのファッシストの攻勢、等等をもたらせた。

ここでは、主として失業についてのべる。

(一)大恐慌以前。アメリカ資本主義が『最も繁榮』し、大恐慌がいまだ生じない時でも失業者は二百二十萬乃至三百萬に達してゐた。その原因は、產業合理化、工業のおどろくべき集中、農業の機械化、流動帶の使用と商品の大量生產、新動力機および新運輸方法の採用、勞働設備の簡單化、勞働强度のおどろくべき增加、技術の巨大なる發達等が擧げられてゐる。

千九百十九年の總生產を一〇〇とするときは、千九百二十九年の總生產の指數は、一五

〇・六の上昇を示してゐるにかゝはらず、勞働者の指數は、千九百十九年を一〇〇とするとき、九四・二に下降してゐる。生産が增加せるにかゝはらず從業勞働數の減少せるは、失業の原因が以上のべた諸原因のうちにあることを示してゐる。

完成工業、石炭鑛業、農業および運輸業に於いては、千九百二十年から二十七年の間に、勞働者が約二百萬人減少してゐる。一年たつて千九百二十八年には完成工業に於いて、勞働者は二十萬人すなはち二・七パーセントが失業した。鐵道では、一年間に八萬人の勞働者が失業した。

アメリカに於ける失業統計については正確なるものがない。失業保險等がなくして調査に困難なるがためである。官廳および準備銀行の發表があるが、それは、例へば所謂短縮勞働者、すなはち、半失業者を全然考慮に入れてゐないから、すこぶる不完全なるものである。

各勞働組合にも、その所屬員のみの粗末なる失業者統計があるだけである。いま、アメリカ總同盟の機關紙『アメリカン・フエデラチオニスト』の報ずるところによれば、千九百二十九年の一月から七月までに、同盟所屬員の失業者だけで、總同盟全員の十四パーセントで、約三十九萬二千人に達してゐる。

（二）大恐慌後。大恐慌の結果として失業者は、その直前の三百萬に、すくなくとも百五十萬人が加はつて、最小限度四百五十萬人と推定されてゐる。これは、學者はじめ一般の推定で、中には最高七、八百萬人に達してゐるといふ人もある。イギリスの先般辭職した失業救濟事務大臣たりしトーマス氏は、本年三月十一日の議會の演説で、アメリカの失業者は、三百萬人乃至六百萬人であると言つてゐる。ともあれ、アメリカにとつては、空前の失業者輩出時代でなければならぬ。

六月一、二日の讀賣新聞によれば、イリノイの職業紹介所長は、『失業の結果生じた窮迫狀態は、最近十年間の最も酷しいものである』と言ひ、ニユー・ヨークの上院議員ワグナー氏は、『これ以上深刻な失業狀態はかつてなかつた』と語つてゐるのを見ても、現在アメリカの失業が如何に深酷を極めてゐるものであるかは明かであらう。

大恐慌後の失業激增の原因については、大恐慌に伴ふ各生産部門の生産制限が第一に考へられる。

例へば、鋼鐵工業に於いては、千九百二十九年の十月には全生産能力の八〇パーセントを行つてゐたが、十二月には四〇パーセントに下降した。自動車工業に於いても、或はフオード、或はゼネラル・モータース、ともに、工場閉鎖または生産の大制限を行つた。建築工業は、前年後に比較して、十二・五パーセントの制限を行つてゐる。

これらの大規模の大制限が、失業者の大量生産の重大なる原因である。

かくして、『永久の繁榮』『資本主義特殊國アメリカ』の名を誇つたアメリカも、『アメリカ歷史のうちの最惡』の大恐慌をうけて、その結果、『かつてなかつた深刻なる失業狀

態』を招來し來つたのである。

これらの深刻なる失業者の大量的生産を前にして、『莫大な資源と巨大な富』とを有するアメリカの社會は、如何なる對策を講じてゐるか。

現在のアメリカには、勞働者のための社會保險のごときは一つもない。アメリカでは四十歲になれば勞働市場から追ひ出される。從つて、失業者および老勞働者は、一度び職を失つた瞬間から街頭に食を乞はなければならなくなる。三月十八日ピッツバークでは、二千五百人の失業者が、『ブレッド・ライン』をつくつて、一片のパンと一杯のスープを爭ひ、三月十七日にはニユー・ヨークで、一枚十五セントの食券一萬二千枚の凄慘なる掠奪戰が行はれたことが、當時の新聞に出てゐる。『老衰者および失業者は、貧乏人屋敷とも言ふべき汚いバラックに投げ込まれ、癲癇病者、阿呆、狂人、酒精中毒者等と同居を强制せられ、動物と同じ食物を供せられ、人間的相貌は漸次うしなはれつつある』(バラームの論文、失業者運動の組織についてによる。)

大統領フーヴァーは、かつて千九百二十八年に、失業救濟のため三十億ダラーをレザーブすることを提議したが、各州知事の反對に會つた。

大恐慌勃發後、フーヴァーは、ヤング、スローン、テイーグル、デユ・ポン、フオード等の資本家を集めて、恐慌に對せんとし、更にグリーン、ウール、ジヨーンストーン、ルウイス等の勞働組合關係者を集めて、對策を議した。資本家は賃銀を下げず、生産を續行せしむるとて六十億ダラーの投資を約して、失業者の防止、救濟に資せんとした。勞働組合側は賃銀値上運動をせずして、勞資協調して恐慌防止、失業救濟をすべきを約した。

しかし、資本家側は、その誓約を履行しなかつた。失業者は續出した。×××騷擾が各地に勃發した。失業者にとつてのすこしの光明すら、いまだに見出し得ない。

社會黨は、失業保險の設置、公共事業を起すこと、失業者に對する賃銀を支拂ふこと、地方自治體による救濟を主張してゐる。

去年九月×××諸團體によつて成立を見た『勞働組合統一聯盟』は、失業者と勞働者との結合をすゝめて、失業の救濟は一に資本主義×××××、ザヴエート聯邦と×××にありと主張してゐる。三月の各地の×××騷動は、この團體の鬪爭のあらはれであつた。(本稿は主としてパームの前掲論文、およびイン・プレー・コールのフオスターの報告によつた)

文士の生活を嗤ふ

(これは自作に對する批評への文學的抗議文ではない。そんなものなら別段書く氣はない。)

廣津和郎

私は本誌に『昭和初年のインテリ作家』といふ小説を書いた。その中に、昭和初年まで小資本家でしかなかつたところの或出版社が、或出版界の變動機にぶつかつて、大資本家と成上るであらう事、そして出版界にさうした大資本主義が横行するやうになれば、文士乃至執筆家の生活が、今後そのためにどのやうに支配されるやうになるだらうといふ事を考へ始めた一人の小説家が、それに對する對抗策を講ずる場面を書いた。そしてそれを他の作家達――作家達の集まりである一つの組合の委員達に提議したが、その委員達に否決されてしまふ場面を書いた。

これは總て事實を書いたのであるが、私はこの小説が所謂文壇を形造つてゐる文士諸君から、どんな反響を受けるだらうといふ事を、興味をもつて待つてゐた。何故かといふと、近頃經濟的に壓迫されて來てゐる文士の生活に取つて、切實な問題であつた筈のものだからである。實際問題として、その當時にはそれは實現不可能な提議ではなかつた。そして現在では最早その實現も可能性が甚だ乏しくなりつゝある。――つまりその當時にそれを實行して置けば、文人の生活の上に、弱くとも或一つの『力』をもたらしたものであるのに、終にその時期を失してしまつたといふ事が、現在はつきり解つて來てゐる。それ故に今更悔んでも後の祭である。――さういふ事柄だからである。

かうした、文士達の生活に直接關係のある事柄であるから、文壇がこの作を何と評するであらうかといふ事に、私は興味と期待とを持つたのである。勿論私が期待したのは作の出來榮についての批評ではない。作は藝術的完成を待たずに、報告的であり過ぎたと誰かが非難してゐた事を、私は十分認めるし、又私も報告的な書き方を意識してしたのである。(私が單に報告的作品としか思はれないやうなものをよく發表するのには、私自身としては、一つの意見を持つてゐるが、その

事についてはいつか又述べる時があるだらう。)そんな事ではなくて、私は書かれた事實に對して、文壇が何といふだらうといふ事に、期待を持つたのである。

その期待に對して、多くの批評が現れた。私はその幾つかの批評を貪り讀んだが、それ等から受けたものは、私の期待とは何の關係もないものだつた。——批評の多くは、主人公の無力を攻擊し、或は憐み、或は時代遅れ視するだけで、その書かれた事實に對して、何の意見も述べたものはなかつた

私はそれ等の批評を前にしながら、長い間苦笑してゐた。そして今更のやうに、文壇人は口先ばかり小理窟を云ふが、生活については、所謂文士氣質——武士は食はねど高楊子式の高踏的な氣持しか持つてゐないといふ事がはつきり解つた氣がした。——この人々はどんなに食へなくなつたつて、『生活』の事は口にしない人種かも知れないといふ氣がした。觀念的には社會經濟問題についていろいろな事を云ふが、實際に自分達の具體的問題になつて來ると、何の意見をも持つてゐない人種かも知れないといふ氣がした。

それ等の批評の多くが、得々として(實際得々としてだ!)指摘してゐるのは、主人公の無力であるといふ點だ。これは作者自身が態々さう書いたのであるから、彼等からさうした指摘を受けるのは當然な事である。指摘されなくつたつて、解り切つた事である。作者は主人公の無力を特に示す事によつて、文士諸君に、あの際あの主人公の提議を主人公が實行まで持來さなかつたといふ事が、文壇の損失であつたといふ事を感じさせるのが目的だつたからである。だから作者は批評家諸君が批評してゐるやうな事を、主人公自ら自分に對して云はせてゐるのである。『何故俺はあんなに短氣に直ぐ腹を立てゝしまつたらう? もつとおちついて、何處までも說くのがほんたうではないか。若しみんなが解らなければ、解るまで說くのがほんたうではないか。それが實行にうつすのでなければ、氣がついたといふ事と、氣がつかないといふ事との間に、何の差もないではないか。結局みんなと俺とは同じ事ではないか。——いや、俺自身が少しも文壇人氣質から拔たれてはゐないのだ。直ぐ短氣に怒つてしまふ。一言云つて解らなければ、勝手にしやがれと思ふ。何の忍耐もなければ、根氣もない。こんな事で、何の實行も出來るものか。——結局口先ばかりで、何も出來ないインテリゲンチヤの無力の暴露ぢやないか。——實現しなければ、考へたも考へないも同じ事だ!』と。

ところが、批評家達は、この主人公と共に、この主人公を書いた作者をも、さうしたインテリの無能力者であると非難するだけで、この主人公の提議を否定した組合の委員諸君——これは文壇の諸君だ。この中には文戰派の人もゐれば戰旗派の人もゐれば、ブルジョワ派の人もゐたのだ。つまりこれ等の人々と『昭和初年のインテリ作家』を批評した批評家諸君とは、同じつながりの文壇人なのだ。その事をよく考へて見給へ。——が無力であるといふ事には少しも觸れようとしな

い。いや、委員諸君ばかりではない。實際かういふ事に對して、文人全體が何の實行力も示すものでないといふ事には少しも觸れようとしない。……それで唯主人公の無力（作者が意圖した通りのことだ！）それから推測して、作者である廣津和郎のインテリ的無力を、えらさうに指摘するだけで得意になつてゐる。

私は誰か一人位は『さうだ、あの時はさういふ事になつてゐたのか。それでは文士全體が結束して、戰ふべきだつたのだ！』といふ批評家があるだらうと考へてゐたのだが、それ故にこそあの作に對する批評を期待してゐたのだが、さう云ふ口吻さへ洩らした人は一人もゐない。で、唯主人公の無力と、それ故に、作者廣津和郎の無力を、まるで他人事のやうに指摘して、彼等自身は何か實行力があるかのやうな顏をしてゐたゞけだ。

いや、そればかりではない。あの主人公が提議した問題を、あの際のN出版社の出版大資本主義的完成に對する、そして又N出版社の大資本主義的搾取に對する對策として、當を得たものであつたかどうかを批評しようとした人さへ一人もない。つまりN出版社の不合理な利益獨占の不法を責めようといふ氣があるのかないのか、それをはつきり文章で示した人さへ一人もないのである。唯一人の哲學的經濟學者がなした文藝批評の中に、あの主人公の考へてゐる事が、原始的組合主義に過ぎないといふ言葉があつた。併し原始的組合主義であつたところがどうだらうが、あの際それを實現すれば、實現しただけ有効だつたのである。何故かといふと、あの際の出版大資本主義は、まだ完成されてはゐなかつたからだ。今若しやればそれに對する戰術は、もつと違つたものになつて來なければならない。併しあの際は、あれで十分の効果を擧げることが出來たのである。——大體觀念論の上だけで、どんなえらさうな事を考へ、えらさうな事を云つたところで、それが實際問題に對して、何等かの働きをしなければ役に立たない。現在刻々に變化しつつある現實に對しては、それに當てはまる刻々の戰術があるわけだ。——それを捉へない抽象論などは、どんなに高遠であつたところで、何の役にも立つものではない。

自分は此處で一寸惡口を云つて置くが、二つの出版資本家の同じ傾向の出版競爭のために、經濟學者達が思想の上からではなく、唯出版社を支持するといふ上から、へんてつもなく爭つたあの醜態は、あれは一體何事だつた、と云ひたい。

扨て餘談に亘つたが、作者によつてその無力を暴露され、批評家諸君によつて同じくその無力を指摘された『昭和初年のインテリ作家』の主人公が、それならどの位の程度に無力で、どの位の程度に實行力がないかといふ事を調べて見ると、不思議な事に、彼は全然の無力者、全然の非實行者でもなかつたといふ事が解つて來る。といふのは、あの小說の中にも書いてある通り、N出版社（それはあの小說の中で、世界文藝の全集の豫約出版をやつて、一氣に數百萬圓の利益を擧げ、一躍出版大資本主義の筆頭に立つたところの書店である。小說

の中でN出版社としたから、以下その通りに呼んで置くことにする。）が最初、飜譯を印税にしないで、古い飜譯は包金、新しい飜譯は僅な原稿料で買取らうとした時、その資本家的魂膽を見拔いて、それに斷然（斷然だ！）抗議を申し込んだのはあの主人公だからである。彼は印刷費を計算し、紙の値段を計算し、本の出來上りを計算し、そして全體の飜譯者が印税を取るのが當然だと考へたのである。だから彼は自身のものを印税にして貰ふばかりでなく、飜譯者全體の報酬を印税にさせる事を、單身N出版社に交渉して、終に承認させたのである。

あの小説の中には、その點は詳しく書いてゐない。何故かといふと、主人公がその次に第二段として考へた事を實現しなかつたその無力を書くのが作者の目的で、それによつて文人達に『こんなに弱くてはいけない』と反省させようとしたからである。――主人公は第一段の場合、N出版社に向つて、かなり痛烈な手紙を送つてゐる。併しその手紙によつて、N出版社の社長は、原稿買ひ取りの方針を潔く撤回して、主人公の主張した通り、印税制を採用した。――原稿買ひ取りでなく、印税になつたために、約五十人の飜譯者に向つて、約三十萬圓位、報酬が餘計出たわけである。

つまり組合の委員會に向つて主人公が第二段の提議をする前に、彼は單獨で、第一段の提議を出版社にし、約三十萬圓を飜譯者全體のために、N出版社から出させる事を承諾させてゐたのである。――この事實を見ると、どうやら、この主人公は文人仲間に於いて、さう無力な部類ではないやうである。寧ろ實行力を持つてゐる方の部類に屬する人間であるかも知れないと、公平に見て私はさう思ふ。何故かといふと、その際、その澤山の飜譯者達は、さういふ事に氣がついてゐなかつたし、又氣がついた人があつたかも知れないが、せいぜい自分一人の分を印税にして貰ふことを交渉してゐた位のものだからである。

私は或飜譯者達がその際現した憐れな有様を知つてゐる。それは彼等が出版社に向つて強い事を云ふと『あの飜譯は、他にもやらせてくれと仰有る方が二三ありますので……』と答へる。さう答へられると、彼等はしどろもどろになつてしまふのである。何故かといふと、仕事が他人の手に移つてしまふからである。――それ等の事實が、あの主人公をして、全體的印税の主張を、單獨でN出版社に交渉させた原因の一つでもあるのである。

あの主人公は、或著名な作家で、やはり飜譯者の一人であつた男に、若しN出版社が彼の單獨の交渉を受納れなかつた場合は、その作家にも應援してくれるやうにと、前以て依頼した。その時その作家は答へた。

『君や僕は今までの文壇的の功績によつて、飜譯で一萬圓だの二萬圓だのといふ印税が這入つたとて、不思議はないが、併し例へばRのやうな人間に、一萬圓や二萬圓這入つたら、それは不思議ぢやないか』と。

又或大學の教授で、やはり飜譯者の一人である男と、同じ大學の教授

授で、やはり飜譯者の一人であるもう一人の男と、文壇的名聲の差違のために、一方が印税になり、一方が原稿料になつてゐた。(それはN出版社の最初の方針の場合) あの主人公はその印税になつてゐた教授に向つて、人傳にではあるが、もう一人の教授のも印税にすべきである事を、彼からN出版社に交渉させようとした。ところがその印税になつてゐる教授は、印税になつてゐない教授が受けてゐる差別待遇——一口に云へば、彼ともう一人の教授とに對するN出版社の差別待遇を、得意に感じてか、

『ははあ、T君は印税ぢやないんですか。——それは當然でせうな。僕には最初から印税にしてくれてゐますよ』と云ふだけで、もう一人の教授のために交渉するやうな事は、思ひも寄らない事であるやうな顔をしてゐたさうである。

それ等の事も、益々あの主人公をして、N出版社に對して、單獨に、全體的印税を交渉させるに至つた原因なのである。

そこで私はかう思ふ。若し『昭和初年のインテリ作家』の中で、あの主人公がN出版社の原稿買取りの資本家的魂膽を見拔き、それに向つて單身抗議を申込み、痛烈な手紙を送つて、N出版社にその方針を撤回させた事だけを、勢込んで書き、出版社對執筆家の爭鬪じみた匂ひでもつけて、英雄的興奮でも漏らしたら、或は主人公(及び作者たる廣津和郎)は、あのえらさうな批評家諸君から、『無力者』の代表者にされる事なく、或は寧ろ、勇氣ある人間であるかの如く賞讃されさへしたのかも知れない。と。

ところが、主人公を英雄じみて、それだけの事を實行者であるかの如く書くのは、作者たる廣津和郎の好みではない。いや、好みでないばかりではなく、あの作の目的でもないのである。——强がつた事を云ふものが强いと思はれ、自分の弱さについて語るものが弱いとされるのは、近頃の人間のせつかちのためかも知れない。

あの作の目的は主人公の第二段の考案を、(その第二段では、金額は第一段の半分位の要求だ) 實現させなかつたといふ點から、主人公及び文壇人の無氣力を、指摘する點にあつたのである。——そして主人公の無氣力である事を感じさせる點に於いてはあの作は確に作者の豫期通り成功した。けれども、文壇人一般が無氣力である事を感じさせるには、尠くとも批評家達の意見によると、不成功に終つたわけである。——何故かといふと、文壇人は、あの問題は主人公だけの問題であるといふ風に見る事を、便利と考へてゐるらしく、文壇人一般の問題に觸れてゐるのだといふ風には、考へたくないやうに思つてゐるやうに思はれるからである。——私はひとりで苦笑してゐるより仕方がない莫迦々々しさを感ずる。

私は『昭和初年のインテリ作家』を書く二三年前から、度々評論に、感想に、文人及び一般執筆家が出版資本主義に對して暢氣である事を指摘し、實際に彼等の生活の問題そのものであるのだから、協力して、出版資本主義の進む方向を、看視すべきであるといふ事を主張

して來た。ところが、誰かひとりでもそれに贊成した人があつたか。私の知る限りでは、それについて贊否いづれにしても、意見を述べた人は一人もなかつた。唯僅に死んだ高畠素之君が贊成しただけだつた。蔭では私に贊成だと云つた人が幾人かあつた。けれども、文章に書いて、署名して、それに贊成した人は一人もなかつた。——私は他の階級闘爭について、始終熱狂した言説を述べる執筆業者が數多くあるのを、餘りにも數多くあり過ぎるのを知つてゐる。ところが、自分等の糧の問題である出版資本主義對執筆業者の關係については、何の意見を吐く人もないのを不思議に思ふ。ブルジョワ作家の大部分はそれに對して知らない顔をし通した。プロレタリア作家の或者は、越後の農民を應援に行き、野田の同盟罷業の應援に行き、その他いろいろな同盟罷業の應援に行つたが、併し彼等がさうしてゐる間に、刻々に違つて行つた出版資本主義の情勢に對しては、これも同じく沈默を守り通した。——それ等は執筆業者がみんな觀念論者で、實際の事になると何も解らないためなのであるのか、それとも武士は食はねど高楊子式の文人氣質にいつまでも滿足してゐるためなのであるか——つまり文人的な生活冷淡さのためなのであるか、それとも或は卑怯なためなのであるか。

私はそのいづれでもあるのではないかと思ふ。殊に最後の點——卑怯といふ點が、殘念ながら、かなりあるといふ事を否定出來ないと思ふ。出版社の機嫌を損じたくない點が、長いものには卷かれろ式な日和見主義が、隨分ある事を否定出來ないと思ふ。世界が狹いだけに、失業を恐ろしがるための妥協と沈默とが、彼等を支配してゐる事を、否定出來ないと思ふ。

中には俺は出版社に支配されてゐない、俺は我儘な事をどんどん云ふといふ人があるかも知れない。それは實際にさういふ人も確にある事を、私も認める。併しそれは自己の優越感からの我儘であつて、執筆業者全體の事を考へての職業意識の上に立つてのものではない。もつと時代錯誤的の名士氣質からの優越的快感を味ふ個人主義的『威張り方』に過ぎない。

要するに文壇人諸君がその職業に直接關係のある出版資本主義に對して示してゐる態度は、以上のやうなものである。それでゐて私が『昭和初年のインテリ作家』を書き、主人公にああした『文人の無力』についての自己反省をさせると、何と騷然として『自分達はああした無力な文人ではないぞ。あれは廣津和郎のインテリ的無氣力を暴露したものだ！』といふ事を恥も知らずに絶叫することよ。——自分達が執筆業者として、連帶責任を感じなければならない事を忘れて。

私は彼等の絶叫の一つ一つに、苦笑を感じた。口先ばかりの强がりで、自分達を强いと思へる彼等の頭の簡單な組織に、淋しさを感じた。

自分はさうして苦笑し、さうして淋しさを感じてゐるうちに、ふと二葉亭四迷を思ひ出した。二葉亭は文藝創作を一生の仕事とする事に

あきたらずして、彼一流の實行生活に突入した人だつた。彼は無論あの頃であるから、その思想は軍國主義のそれであつたが、最も早く露西亞と戰ふべき事を主張した一人で、單身シベリヤに行き、シベリヤ駐屯の露西亞軍の兵力や士氣などを調べて見たり、(それが軍事上から見ても、頗る專門的であつたとのことだ)さうした上で、主戰論を唱へて見たり、そして日露戰爭が濟むと、今度は世界の大勢上、日露は互に結びつくものだと考へ、みづから露西亞に行つたりしたが、(そして肺患を得て、歸國の途上、印度洋で死んだが)彼は所謂文人氣質に終始せずに、實行的方面に志し、又實際にも實行的方面に彼流の突込み方をしてゐた。

それだのに、その小説『浮雲』や『其面影』を見ると、意志が弱くて實行力のない人間ばかりを書いてゐる。これは實行家を志してゐた二葉亭の自己反省でなくて何であらう。

そこで私は考へる。二葉亭は實行的な事を考へてばかりゐたから、從つて實行家としての反省が來、實行力の不足を痛感したのではないかと。自分の心にある弱さを、彼が實行家であつたから、最もよく氣がついたのではないかと。それだから彼は主人公をいつでも無氣力にしないではゐられなかつたのではないかと。——それに反して、實行的な事をほんたうには考へないで、觀念の上ばかりで、氣の強い事を云つてゐる連中が、一番強い事を云つてゐるのではないかと。

それだから逆に云へば、『昭和初年のインテリ作家』にああ云ふ主人公をああ云ふやうに書いたといふ事は、作者たる廣津和郎が多少とも實行的な事を、他の文人よりも考へるから、ああ云ふやうに書くので、實行的な事を何も考へない連中の方が、却つて強い事を云つてゐられるのではないかと。

文士の生活を、今のやうに成行きにまかせて置いて——實際文士位、自分の生活してゐる世界を、自然發生にまかせてゐるものは尠いだらう——それを經濟的に何とかしようといふ何の努力も見せもしないで、それでゐて他の同盟罷業の應援などに行き、その罷業中、實際に生活の苦しさに裏切る勞働者達を、人間の風上に置けないものでもあるかのやうに非難して氣がすんでゐれば、實際階級鬪爭に於ける文士の役目位樂なものはないだらう。それでゐて、自分等が直接關係のある出版界に對しては何ともいはれぬ弱腰、何とも云はれぬ卑屈さを暴露する。——それが直接米の問題だからだと云ふならば、それは同盟罷業の裏切者だと同じことではないか。

自分の携る職業上ではつきりした態度も取得ないで、他の職業者の階級鬪爭の應援をする——そんな應援が何で信じられよう。

プロレタリア派もブルジョア派も、この數年の間に、何の抗爭もせずに、易々と、出版資本主義を完成させてしまつて、それで他事のやうな顏をしてゐるところは、實際好い氣なものである。そして多少ともそれに抗爭しようとして、實行力の不足を反省し、文士の協同力の不足を歎くものがあれば、それは『自分達と關係のない無力者だ』と

云つて、てんとして恥ぢないでゐれば、まことに此位暢氣な、とぼけた職業者はないだらう。

△

私は昨年來度々書いてゐるが、私が今文壇を見ながら關心を持つのは、誰々が好い作を書いたとか悪い作を書いたとか云ふ事ではない。さういふ事に全然無關心でゐるわけでは勿論ない。けれども、それよりも執筆家——殊に私と同業者である純文藝作家達の生活が、今後どうなつて行くかといふ事の方が、より強く私の胸に來るのである。

私の『昭和初年のインテリ作家』に書いたインテリの無力さを非難した中で、阿部知二氏がなした非難は、他の人々の非難と多少違つてゐた。それはインテリの無力と云つても、作家達のそれはサラリーマンのそれと多少違ふ筈だ。それはえらい科學者などと同じ嚴肅さで、藝術を究めようとしてゐる作家もある筈だ。——さういふのである。

私はこの阿部知二氏といふ新進の作家兼批評家に、或厚意を感じてゐる。それはこの人の書くものには、或閃きが随所に見えるからである。私は氏の意見に一々賛成するものではないが、そして氏はまだはつきりした意見の纏まつたものを持つてゐるわけではないが、併しこの人の感じの鋭さ、又この人の何事も自分で感じ直して見ようといふ懐疑的追窮性は今に好きものを生むであらうと思つてゐる。今藝術派のために辯ずるやうな口調で物を云つてゐるが、併しこの人の『自分で感じ直して見よう』といふ追窮性が、益々冴えて來たならば、案外今の立場と全然反對の立場に立つやうな事がありはしないかと思つてゐる。

——けれども、さういふ事とは別問題に、私に對して云つた氏の言葉は私の作とは無關係である。私は個人々々の作家が、その專門的な藝術上で、どんな追窮をし、どんな成績を擧げてゐるかといふ事は、あの作の問題にしたところではない。私は作家の現實生活に對する間の抜けさを、屡々書いて見たのである。中でも、あの作の中に出て來る詩人などは、詩壇で相當な仕事をした人である。それだのに、實際生活では、何と子供じみた、間の抜けた事をやつてゐるかといふ事が、あの作を書いて見たいと思つた動機の一つなのである。それから作家は尠くともサラリーマンなどとは違ふといふ氏の力味方も好い。さう思つてゐる方が無論よい。併しこれもどうだか解らないと私は思つてゐる。そして現在、生活といふものに對して、力を持つてゐない點では、やつぱり同じ範疇に一括されるべき人種であると思つてゐる。

實際、純文學をやつてゐる人々の生活が、だんだん窮迫して行くのは、簡單な加減算をやつて見るだけでも、直ぐ解る程明瞭な事實である。現在文藝創作を載せてゐる雜誌で、その創作に原稿料を拂ふ雜誌がいくつあるか。僅に五つか六つではないか。而も創作で原稿料を貰はなければならない作家の數はいくらあるか。恐らく五十人から百人位あるだらう。そしてそれら五つ六つの雜誌が、月々創作を載せる數がどの位かと云へば、二十乃至三十位のものだらう。——これで作家

達が飯を食へる暇がない事は、小學生が暗算したつて、解り切つてゐる。その位作家達の生活は迫つてゐるのである。

　私は近頃金の必要に迫られてゐるので、此處暫くどんどん物を書かなければならないが、併し澤山物を書くといふ事は、この小さな市場に對して、一種の市場占領になりはしないかといふ不安を覺える。――その位に純文學に對する報酬の出どころは、尠くなつて來てゐるのである。

　それで今や作家達は次第に團體的になつて來たが、それは彼等の主觀的には、意見の一致からであるかも解らないが、併し客觀的に見れば、團體の力によつて、互に市場を占領しなければならなくなつたためである。かういふ觀察は、藝術至上主義者或は眞理至上主義者達には氣に入らないかも知れないが、併しこれと同じ現れは、人間の歴史上には度々繰返されてゐる。又論戰といふやうなものもこれと同じで、本人同志は眞理のために論戰してゐるつもりでも、無論それが半面ほんたうであるが、併し他の一面――客觀的に見れば、それも大體市場の取りつこである。――そしてこの市場の取りつこが、今のやうに必要になつて來れば、論戰はがむしやらになり、口汚くなり、車夫の喧嘩のやうになるのである。

　かういふ事について、文人の暢氣さは昔も今も變りはない。いつでも與へられた事實によつて支配されてゐる。――今に又何か經濟界に餘力でも生ずるやうになつて、野心家の既成政治家でも、氣紛れ半分、政策半分から幾つも雜誌を出すやうになり、雜誌が出來れば、營業上と賣行上とから、文藝欄がなければならないといふやうな事になつて文藝作品に對する需用がふえでもして來たら、文壇は又飯が食へるやうになつて來て、文士は得意になることだらう。數年前のやうに。――そして又不況が押しよせて來たら、又食へなくなつたと云つて心細がる事だらう。

　與へられたものによつて悲觀し、與へられたものによつて樂觀する――文士といふものは、昔から自分の生活を人まかせである。

　小説家を父に持つた私は、硯友社時代からの文壇を見、その中で呼吸して來た。つまり尾崎紅葉時代から代々の文壇を見、その中で呼吸して來たわけである。私は時代々々によつて、新作家達が擡頭し、それが又凋落して來たのを見てゐる。が文士達のさういふ有様は昔も今も變りはない。擡頭して名聲とそれから少しばかりの物質的自由とを得て、非常に得意になつてゐるかと思ふと、直ぐ次の時代から追ひまくられる。追ひまくられた時分になつて、彼等は丁度社會的には責任の重くなる年頃に達するのだ。そして生活的に一方ならぬ難澁に陷るのだ。代々が同じ繰返しである。もつとも中には夏目漱石だとか菊池寛だとか岡本綺堂だとか、一代の中に子孫が食べて行ける程度の物質的成功を贏ち得たものも幾人かあるが、そんなのは百人に一人、二百人に一人である。――大抵は書き出してから數年間が（從つて年の若くて負擔の輕い頃が）樂で、後は生活苦に惱まされてゐる。――そし

てさういふ事實に對して、いつでも消極的で、積極的に文壇そのものの生活的根據について、何かはつきりした事を考へたものはない。運も不運もアテガヒブチである。食へるも食へぬもアテガヒブチである。つまり自分等の生活を人まかせである。

それでも尾崎紅葉は明治時代に、多少さういふ事に關心を持つてゐたやうだつた。けれどもそれがはつきりした形として現れない前に、彼は死んでしまつた。大正時代に菊池寛が一時その事を本氣で考へてゐたらしかつた。文藝家協會を彼が發起したのもそのためだつた。けれども、彼は自分が功成り、名遂げた後に至つて、その仕事に冷淡になつた。それは彼が自分の生活不安が取りのぞかれたためであると共に、今一つは文壇人のやゝこしい氣質を考へ、それを統一したり、協力させたりして行く仕事が、面倒になつたために過ぎない。——實際理窟が多くて實行熱意のないところ、文壇といふところは、日本の首府東京市に似てゐる。

兎に角、いろいろ考へて來ると、數年前に、まだ出版大資本主義の完成されない前に、文士達が協力して、出版界に一つの勢力を持つやうに努力しなかつたといふ事は、かへすがへすも惜しかつたと私は思ふ。殊にその機會があつただけ惜しかつたと思ふ。出版資本主義は實際僅な間に成長した。そして成長すると共に、不景氣風にあふられて、成長しただけそれだけ今や苦境に陷つてゐる。好い時には利益を獨專され、惡い時には、その影響を強く受ける執筆業者のみじめさよ。——みんなはチヤンスを逸した事を惜しくないやうな顏をしてゐるが、それは無智か卑屈かのさせる業だ。そんな根性は、主義主張の如何にかかわらず、實際そろそろなくなつてしまはなければ、今後益々出版資本主義に壓倒されてしまつて、手も足も出なくなるだらう。

△

昨年一月の『改造』の文藝時評の中で、私は出版資本主義の目的意識が、作家の創作の自由に制限を加へて來つゝある傾向を指摘した。——この事は、私は震災直後の時事新報紙上に、既にその豫想を書いたことがあつた。

五月の『文藝戰線』で、この問題が今更のやうに取扱はれてゐた。（もつとも、『今更のやうに』といふ言葉は惡い。今更であつても、それが問題にされて來た事は好いことだ。）そしてさういふ傾向がもつと進めば、作家が文藝戰線に立籠らなければならない時があるかも知れないといふ覺悟の程を示してゐた。

併しその英雄じみた宣言、文藝戰線に立籠らなければならないぞ、といふ宣言は、勇ましさうに見えて、實は佗しい泣言見たやう消極的響にしか私には聞えない。何故かといふと、出版大資本主義を今までそれの振舞ふままに振舞はせて置いて、つまりそれが完成へまでの途上、それに對する何等の對抗策をも立てなければ、鬪爭もしないで置いて、それが本來の面目を見せ始めたとなると、急に緊張して、『文藝

戰線に立籠る覺悟』を說くなどは、餘りにウカツ過ぎ、又子供じみてゐるからである。餘りに目先が利かなく、餘りに成行きにまかせ過ぎてゐるからである。――一口に云へば、そんなのはみんな自然發生にまかせて置いた成行きではないか。(出版資本主義の方から云へば目的意識、執筆業者の方から見れば自然發生的だ。)――それだから非常に元氣に叫んでゐるやうに見えるが、實は氣の小さい、泣言のやうな響にしか聞えぬ。

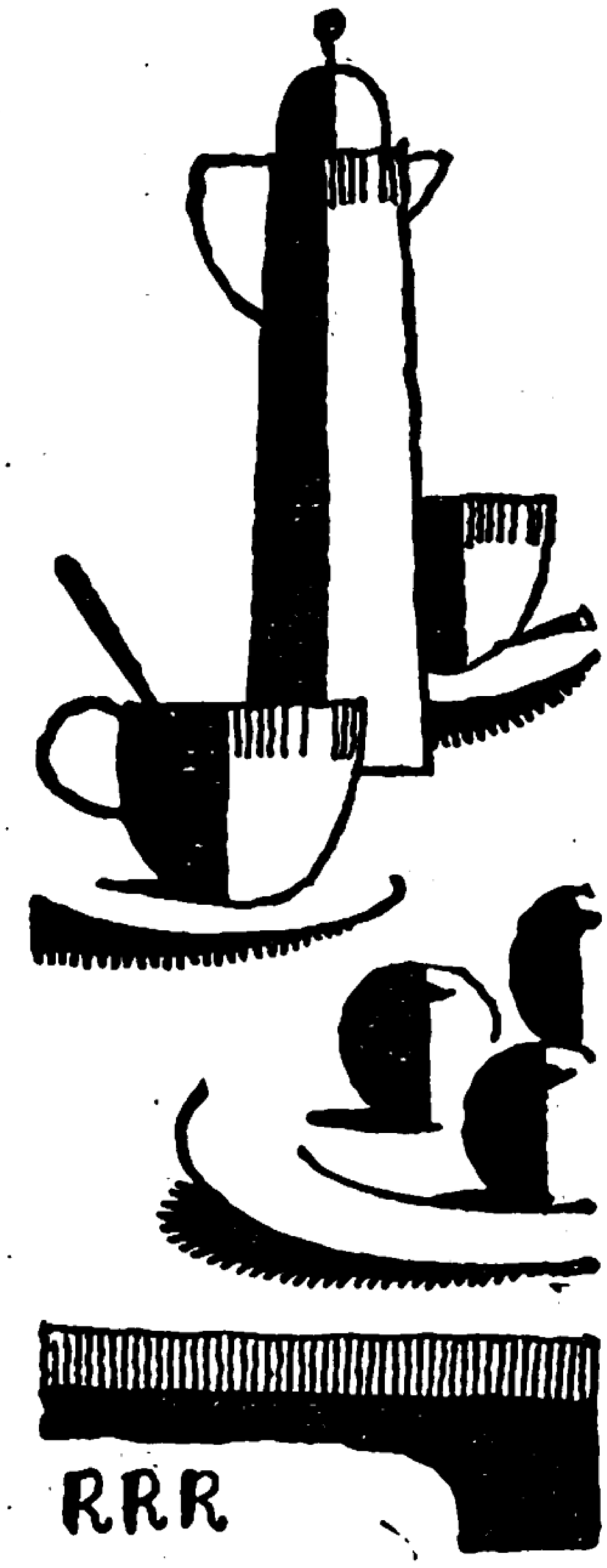
これでも『昭和初年のインテリ作家』の主人公が無氣力で、彼等が氣力があると思つてゐるなら、世話はない。

それとも彼等は資本主義と戰ふために、先づ相手の資本主義の成長を待つてゐてやらうといふ程寬仁大度だつたのだらうか。

△

扨て私は度々云ふが、文人諸君も好い加減に自分の手近なところに、本氣に眼を配つてもいいと思ふ。今からだつて決して遲過ぎはしない。文人の生活といふ事について、もつとはつきり考へてもいいと思ふ。諸君のためばかりでなく、次の時代のために。

(終)



眞夏の言葉

小出楢重

夏服で神戸を散歩する頃、私はいつも渡歐の途中、上海や香港へのヘルメット姿に於ける上陸を思ひ浮べる。私自身が船を突堤にすてゝゐる旅行者の心となる處に、甚だ輕快な味を感じる。同時にそのあらゆる國の様々の船の美しい煙突が煙を吐いて重なり合つてゐる風景をギラギラする陽光の中に見ると全く斯うしてぢつと植物の如く地上に動かず立つてゐる事が大變口惜しく思はれてならぬ。

兎に角エンヂンの動く甲板へ立ちさへすれば吾々が幾枚かの繪を塗りつぶしてゐる間に歐洲航路の船長は甲板と云ふ地上の斷片に乘つて印度洋を何回か往復するのである。と云つて用もないのに船長の如く地球を走つて見てもつまらないけれども、私は夏に於ける汽船進行の形を見ると誘惑される事甚だしいものがある。せめて別府行きの紅丸でもいゝから、それに乘つてあのペンキの匂ひを嗅ぎ廻つて見度いと思ふ。鼻から彼南、印度洋、マルセイユが蘇がへつてくるのだ。

私が印度洋を知らなかつた時、私の心配は印度洋と紅海のその暑さの度合だつた。どれ位の暑さかと云ふ事を經驗ある人達に訊ねて見たが、各々人によつて答が異つてゐた。とても君のからだではあの暑氣に堪へられるかどうかと云ふ致命的な心配を與へて私をおどかす者が多かつた。ではこれ位ですかと云つて私は火鉢の火の上に手をかざして見たりもした。

でも、私が日本を出る時、私のスートケースの一個は全く浴衣のねまきと一打の猿股とシヤツによつて埋められてゐた。

それは私が暑さを厭ふからではなく、汗を特別に嫌がる爲だつた。衣服と皮膚との間に一つの汗と云ふ汚水の層を持つ事は全く不愉快な事だ。浴衣の汗は直ちに拭ひ去る事が出來るが、洋服の汗はカラーによつて封じ込められてゐる爲め、手を入れるべき隙間がない。止むなく體溫が汗を乾燥させるまでぢつと忍堪しなければならない。この間の皮膚の觸感位情ないものはない。窮屈な場所で紳士は羅紗のモーニングを着用し或は女は素晴らしき帶を幾重にも胴體へ巻きつけてゐると、胸も臍も夕立を浴びてゐるにちがひない。誰れも彼も悉く汚水の層を夏の馬の如く着用してゐるのかと思ふと私は甚だ氣の毒に思へてならない。汗を直ちに氣體とする下襦袢はないかと思ふ。

扨て私の印度洋は濕氣と雨と風とで日本の梅雨を思はせ、私はその風に當つて輕い風邪を引いて了つた。印度洋で風邪を引くと云ふ事は全く私のプログラムにはない事だつた。さすがに紅海は太陽の光と熱砂の霞と共に暑かつた。汗と砂漠の黄塵によつて私の肉體も顔も口の中までも包まれて了つた。そして地中海に入つて漸く初秋を感じた時顧みて何處が最も暑かつたかを考へた時、私は日本の八月の神戸港頭に立つた時と、殊に門司の街を午後三時に散歩した時のやるせなき蒸暑さが直ちに思ひ出された。上海や香港も暑かつたが汗が直ちに空氣と化す如く思へて、やるせなき暑さではなく心は常に晴々としてゐた。要するに日本の夏位汗を絞り出す空氣はない樣だ。殊に九月の初め頃の殘暑の汗は、油汗と云つて皮膚の表面は重油を塗られた如くべつとりとして、終日乾燥しない傾向がある。惡性の汗だ。その重油の皮膚へ當る初秋の風の冷たい觸感は情なくも憂鬱だ。その惡性の汗を夕方の一風呂によつて洗ひ淸める幸福はいゝ加減な戀愛よりは高雅な價値がある。

然し汗も所謂輕く汗ばむと云ふ言葉の如く汗ばむ事は人間の心を妙にときめかす力がある。そして男女の肉體の香氣を秋よりも冬よりもむしろ春よりも實際的な力を以て立ちのぼらせる傾向がある。

* * * *

仲秋の月は鋭く冴えて淸潔だが、少々氣候が寒過ぎはしないか。月見に誘はれて舟の中で寒氣の爲に固くなつて歸つた經驗は屢々ある。私は殊に貧血性だから、

本當に私に適當な月は、八月の盆の頃の月である。物干しへ出て寢ころび乍ら、月面の穴に見惚れ、そのうち自分がその穴へ這入つて見たり出て見たり、最も高く銀色に輝く頂點へ立つて見たりしてゐても決してその莫迦らしき想像を冷却すべき寒氣がない。或は彼女と共に海邊を、森を、午前三時まで散歩しても、決して風邪を引かない。もしそれ抱擁せんか、多少の汗ばみたるは、夏の夜を更に香ばしく調子づけはしないだらうか。

兎角、秋の天候は變化に富み、折角の一年の月が曇らされて了ふ今宵ともなり勝ちだ。左樣に稀な寒い月を求めずとも、私は盆の頃の少々まだ土用の熱氣の爲めに逆上してはゐるけれども、八月の月を遠慮なく眺める事をすゝめたい。

とは云へ私も考へて見るに、あまりに寒からず曇らず、あまりに平凡に電燈の如く輝いてゐるが故に、おやいゝ月だと云つて了ふと同時に、吾々はすぐ退屈を感じて月の事はもう天へ預けておいて、勝手な事をして遊んで了ふ。

かの、四五人に月落ちかゝる何んとか云ふ言葉は全く盆踊の爲に忘却されたる月が天に一つころがつてゐる感じがよく現れてゐると私は思ふ。

完全に忘れられたる月を私は巴里で見た。モンマルトルやサンゼルマンの夜の空に、三笠山で眺めたと同じその明月が憐れにも電光に色

を失つて氣の毒にも誰れ一人見るものなく、四角な家と家との間に引懸つてゐるのだ。私はあれは天の金ボタンかとさへ思つて見た。だが日本の仲秋の月でさへも、今に天の定紋となつてころがる時が來るだらう。

＊　＊　＊　＊

甘酒とあめ湯は舊日本の珈琲でありコヽアでもあつたが、今は奈良公園の夏の夜の散歩に於て、猿澤池の附近ではまだ飲む事が出來る位のもので、大體都會ではコールコーヒーとアイスクリームだ。

扨てあめ湯とコーヒーと、どちらがうまいかを考へて見るに、どうもコーヒーの方がうまいとは云へない。だがあめ湯が飲み度いと云へば女學生でさへ笑つて理由も何も聞いてはくれないであらう。

先づ横町のカフエーの珈琲と云ふものは大體に於て何かの煎じ汁へ砂糖を入れただけのものゝ如く、でもそれを飲む事が人間の運命となりつつある樣である。田舍の宿屋へ到着した時、多少ハイカラな構への家では先づ第一に珈琲糖をうやうやしく捧げてくる。褐色の粉末が湯の底に沈んでゐる。

私は止むを得ず近頃は、日本のお茶と云ふ言葉を使つて遠慮なく註文する事にしてゐる。

私は暑中でも氷やアイスクリームを食べ冷たいコーヒーを飲む事を好まない。私は汗を忍堪し乍らも熱い珈琲を、熱い茶を飲む。斯くして汗を以て汗を洗ふ。唐突に氷を以て冷水のタオルを以て汗を引込める策略は、汗を變じて重油と化するおそれがある。

暑い日の海水浴は水の美しき誘惑には敵し難いけれど、そのあとの皮膚の感觸位嫌なものはない。私は眞夏でも熱い茶と熱い珈琲と温浴を愛する。汗のあとの湯上りの浴衣の觸覺にこそ夏の幸福は潜んでゐる。

私は從つて高山や高原への避暑を好まない。折角の夏の味を寒い處にゐて袷でも朝夕は寒い位ですよと云つた自慢はして見度くない。

時に雨つゞきの、もう一段と夏になり切れずにすむ夏があるものだが私は何か天變的な恐怖をさへ感じる。

雜誌社の往復はがきは屢々貴下の新案避暑法はと云つた事を註文してくる。

私は家族の者を海へ泳ぎに出しておき、一人畫室のソファでのうのうと寢ころび乍ら、萎びた朝顏を眺めて見たり、仕事に夢中になつてゐたりさせてもらふ方が私にとつては幸福な避暑法だと云つておく。

藝術と金と云へば大變仲の悪いものゝ如く聞へるが、その愛すると云ふ心の動き方については殆んど同じ三昧境を得てゐるある老人があつた。その老人は金と女の道樂と云つてもむしろ性慾の道樂と云ふ方が近いかも知れなかつた。金と性慾、何んと下卑たものではあるが然し、彼は常に暗い舊家らしい奧座敷の籐むしろの上に机を据ゑて、毎日朝のうちは金の勘定をする事にきめてゐた。黑光りする用簞笥から幾束かの紙幣を取り出して、一枚一枚丁寧に焼鏝をあてゝ皺を延ばし

て行くのであつた。そして私にも金を斯く愛しなはれと教訓してくれた。當時まだ小供あがりの私も、成程これは費用のかゝらぬいゝ道樂だと思つた事があつたが、扨てその教訓の通り家へ歸つて延ばして見度くとも、その原料が無い事は甚だ遺憾な事であつた。一時間の後には人手に渡るべき一枚の五圓紙幣に電氣アイロンをあてゝ見る氣にはなれない。

然しその老人は、全くの無慾の狀態に於て專念、紙幣に燒鏝をあてゝゐたが、彼はそれによつて世を忘れ、時を忘れ、今日は九十何度と云ふ事も忘却する事が出來、あらゆる他の慾望を持たなかつた。たゞ夕刻になると皺の延びたる一枚によつて、も一つの三昧境の陶醉を買ひに行くのであつた。藝術家の至上主義が昂じると生活が亂れ易いが老人のこの主義は眞とに安全だから結構だと思つて見たりした。甚だ合理化された避暑法だ。

とに角、私は夏を愛する。そして冷たい秋風と殘暑による重油の汗の季節になると私の胃腸はよくない變化を起していけない。(終)

新刊紹介

◇**出版年鑑**　東京堂編、昭和四年の出版目錄を初め出版に關するあらゆる問題を一覽的に輯錄して極めて便利な年鑑である。(東京神田錦町三ノ一八東京堂・定價八十錢)

◇**フオルマリズム藝術論**　中河與一著・形式主義藝術論を主張し解明した文集。(東京神田表神保町一〇天人社・價五十錢)

◇**借家人のための法律と戰術**　武藤運十郎著・無產借家人の一讀しおくべき書。(東京牛込區鶴卷町四七一希望閣　價八十錢)

◇**虐待される街**　藤村端著詩集・一讀純眞な詩境を味感させらるた。(東京神田通神保町一上田屋書店・價一圓二十錢)

◇**經濟學新論**　武田鼎著・(東京牛込早稻田大學前敬文堂・定價二圓三十錢)

◇**貨幣錯覺**　フイツシヤー著・山本米治譯・貨幣問題に於ける權威者たる原著者のげエネバの國際學術硏究會にての講演を基礎とし總ゆる貨幣單位がその購買力に於て如何に不安定であるか其秘密原因の探究を目的として書かれた貨幣硏究者の必讀書。(東京丸ノ內昭和ビル日本評論社・一圓半)

◇**裁判夜話**　大森洪太著・歐米の裁判に關する實話插話の興味津々たるもの四十數篇を物語を讀むやうな筆で描いてユーモアと涙とを誘ひながら裁く者裁かるゝものの境を忘れしめ卒讀を强ひさせる魅力がある。(發行所同前日本評論社價二圓五十錢)

◇**ニイチエ傳**　ダニエル・アレヰイ著・生田長江野上巖共譯・炎の如き惱める魂を生きたニイチエの一生は永遠に人類を惹きつけるあるものがあるであらう。本書は權威的なニイチエ傳として推す。(東京牛込矢來町新潮社・二圓八十錢)

近く實現すべき
東京市の細民銀行

前田繁一

一

東京市の社會局に於ては、最も惠まれざる最下層階級を救濟する一個の方策として、之れ等の階級の爲の金融機關を新に設置すべく、過般來着々その計畫を進めつゝある。

今其の計畫の內容に就いて當局者たる社會局長の談を聞くに、市のセツツルメントを通じての細民約五萬戸を對照として、之れに對して貯蓄心の養成と金融上の利便を計らんが爲に、市內十一ヶ所の市民館內に之れ等の階級を以つて信用組合を組織し、組合員に對しては必ず一口以上の出資を爲さしめる。然も其の出資に就いては、收入の如何と出資能力の如何に依つて、適宜日掛け月掛けの便法を講ずる。而して一方には日掛け月掛けの方法に依る貯蓄を奬勵し、組合員にして資金の必要が生じた場合には、原則として其の出資額と貯金の現在高とを合した額に相當する金額を限度として、極めて低利（月一分二厘五毛見當か）で貸付ける。若し其の組合員が多年同一の場所、同一の業務に勤務又は從事して居り、其の勤勞振り、收入の狀況及び退職手當其の他より考察して、償還能力十分なりと見る事の出來るものであるなれば、右の限度以上にも貸付け得るやうにすると云ふのである。

元來其の貸付が出資金と貯金高を限度とするのであるから、回收不能になる部分は極めて少額に止まる筈であるが、何分にも苦るしい其の日暮しの細民を相手の金融であるから、出資に支障を來たしたり、償還不能になつたりするものが或は案外多いかも知れない。殊に組合設立の當初數年間は組合員の無理解その他の事情よりして、相當缺損の生ずべき事を覺悟してかゝらねばならない。之れが爲に市は大體十萬圓位の資金を醵出し、之れを基金とし、萬一回收不能其の他に依つて缺損を生ずる時には、此の十萬圓の基金に依つて順次其の缺損を補つて行く。當初三四年間に此の十萬圓を缺損補塡の爲に使用し盡すものと覺悟して開業する。斯くして三四年も經過すれば、組合員の組合に對する理解も漸次增して來、組合の基礎も固まつて來るだろうと云ふのである。

然うして此の細民金融機關の設置は、堀切前市長に計畫され、基金十萬圓の支出も既に堀切市長は之れを承認し、八月から開業すべく諸般の準備を急ぎつゝあつたのであるが、市長の更迭に依つて一時停頓、然しながら永田新市長も社會事業に對する理解相當に深

く、殊に前市長の方針を踏襲する事を言明して居るのであるから、其の實施期が多少遲れるとしても、必ずや近き將來に實現するものとして期待されつゝあるのである。

二

政府は中小商工農業者の訴ふる金融難の聲益々喧しきに鑑み、之れが應急的の救濟策として、曩に大藏省預金部の資金二千萬圓を、全國の信用組合を通じて中小商工農業者に融通する事にし、他方に於て公益質屋の貸出限度を擴張して金融に便ならしめ、民間銀行に於ても又陸續として中小金融を開始するに至つたのである。

前内閣時代に矢張り預金部の資金五千萬圓を中小商工農業者に融通せんとした際、銀行と中小商工農家との關係に無知、無理解なりし政府當局者が、銀行を通じて之れを融通せんとした事がそも〳〵失敗の最大原因であつた事は勿論であるが、全く失敗に終つて引込みのつかない醜態を演じたのに對して、今回の預金部資金の貸付けが、發表後間もなく融資要望額の超過を來たし、其の割當てに苦心する状況である事は、經由機關として信用組合を利用した事が當を得たにも因るが、如何に中小商工農業者が資金難に苦しみ拔いて居るかを察するに足るであらう。

然しながら此の預金部資金の融通は、一人に對して市街地は五千圓以内、其の他は三千圓以内と云ふ事になつて居り、民間銀行の中小金融に於ても、晝夜銀行は二千圓乃至一千圓が最高と云ふ事になつて居て、勿論此の限度以下なれば如何に少額でも當然借り得る筈ではあるが、手數其の他の關係に依つて餘り少額の貸出は事實に於て歡ばれない狀態に在るのである。然も現在金融難に困り拔いて居るものは、中小商工農業者以外にそれ以下の階級、卽ち露店商人や各種の行商人、下駄の齒入れ屋靴直し、街頭の帽子洗濯屋を始めとする街頭及び家内に於ける各種の手工業に從事するものがあるのである。更に又失職して手に一文の餘裕なく、此處に五十圓なり百圓を得ば何等かの行商、又は手内職的の仕事に從事して細々ながらも一家の生計を樹て得ると云ふ樣な連中が、其の僅少な資金をすら得る事が出來ないで困り拔いて居ると云ふのも非常に多いのである。よし又現在は兎に角或る種の行商をしたり、最下層の工業に從事したり、又は薄給ながら其の日〳〵の職を得て居ると云ふ勞働者などであつても、之れ等の最下層階級は漸く其の日〳〵の生計を營むが關の山であつて、一朝失職したり仕事にあぶれたり、又は家族に病人が出たり災害疾病にでも出食はそうものなら、忽ち其の日から生計に困るのである。斯うした連中が我國には非常に多いのである。殊に不景氣が益々深刻化するに伴れて、最も打擊を受くるのは此の階級なのである。然も此の階級に對する金融機關は、之れ等の階級をして益々窮地に導く高利貸、又は質屋よりないのである、利子の比較的安い公益質屋は、其の數の少い事と理事者の態度に不快の念を抱かしむる事等に依つて、之れ等の階級をして十分に利用せしむる事が出來ない狀態に在る。況んや質物す

ら有せざる階級は、全然之れを利用する事が出來ないのである。故に中小商工農家に對する金融の改善を圖ると同時に、此の最下層階級に對する金融の方法を講ずる事が、今日の如く財界不況時に於て益々急務なのである。若し最下層階級に對する特殊な、そして適切な金融策を講ぜずして放任せんか、遂には憂ふべき各種の社會問題の惹起を防ぐ事は出來ないであらう。

此の時に當つて東京市が、之れ等の階級を目標とした特殊金融機關を設置せんとするのは、最も適切なる處置として其の實現を切望して止まない。

三

所謂中小商工農業者の列にすら加はり得ない之れ等の最下層階級は、質屋の利用にすら事を缺く階級なのである。質物も最早殆んどないと云ふ階級である。從つて現存する金融機關から資金の融通を受けやうなどと考へる事が夢に等しいと同時に、現存の信用組合に加入して相互救濟の恩典に浴する事も甚だ困難なのである。故に現在の金融機關、現在の相互救濟機關に相容れられない之れ等の階級は之れ等の階級が相集つて新に相互救濟機關を作るの外ないのである。

然し之れ等の階級が相集つて一個の相互救濟機關、一個の信用組合を作るべく、餘りに之れ等の階級には之れに關した知識の乏しいものが多いのである。其の設立を世話すべく餘りに其の日の生計に汲々として時間の餘裕がないのである。故に之れが實現を期するのには、或は市町村の理事者が斡旋し、援助し又は財團法人其の他の教化團體が斡旋し援助せねばならぬ。然うして設立後も組合員が組合を理解し、組合の基礎の固まるまでは、資金の援助や事業の處理其他に就いて指導せねばならぬ。

從來社會事業、社會政策的施設を急務なりとする説が非常に喧しく、又其の計畫さるゝもの決して少しとしないに拘らず、其の實現するもの甚だ少く、又は遲々として進まないのは世人の大いに反省せねばならぬ所であらう。例へば東京市が復興計畫の一部として其の實現を期したものゝ内に、市設浴場十個の建設を始め、市設質屋、市設病院、市設食堂市設職業紹介所其他の社會政策的施設が多數に在つたが、或は民業を壓迫するものだとか勞働者街となつて町がきたなくなり、地價や借地權が下るとか、常に市會議員を通じて猛烈な我利的の反對運動が起り、爲に市理事者は敷地の決定難に陷り、遂に市設浴場その他の如きは之れを暗から暗に葬り去るの外なきに至つたのである。然うして比較的早く實現せる市設質屋の如きも、他の復興事業が全部完成して復興祭もとくに擧行し終つた今日、尚未開業のものが現在四個もある狀態なのである。

元來社會事業は他の事業と異つて非常に地味であつて、當局者の大なる苦心と努力を要するものであり、利害關係から民間業者が當然反對すべき性質のものであるから、今回計畫中の細民金融機關にしても、當局者として大なる努力を要すべきは想像に難からざる所

であるが、現下の經濟界の深刻なる不景氣と失業者の續出、細民階級の苦境、延いては各種の社會問題の惹起等に想到し、市理事者及び各種の教化團體は協力して其の實現を期し民間に於ても單に自己の利害のみに依つて其の實現を阻止するが如き事を嚴に相警めねばならぬ。

斯くして一日も早く其の實現を期すると共に、之れが實現した曉に於ては、市當局者たるもの、勿論組合員に對して組合の性質を理解せしめて、其の出資の完了と貯蓄を奬勵し、以つて組合員の後日に備ふべく善導する必要あるは云ふまでもないが、飽くまで組合たる事を理解し、所謂官僚的態度に出て組合員をして組合は不愉快なものなりとの觀念を與へないやうに注意せねばならぬ。而して又常に組合員に接して其の日常の勤勞狀況、生活狀態其他を熟知する事に努力し、組合員の人格、勤勞狀態、生活狀態に應じて、最も完全に此の信用組合を運用するやうにせねばなるまい。

新刊紹介

◇**アメリカ資本主義發達史**　石濱知行著・アメリカ文化の基礎をなす經濟制度變革の歷史の鳥瞰的觀察で、片々たるアメリカ物の中に光る眞摯な研究。(東京京橋第一相互館千倉書房・價一圓七十錢)

◇**キリスト教社會發史**　ステッド著・賀川豐彦、竹中勝男譯・クリスト愛を中心にしての社會史。(東京牛込矢來町新潮社・一圓八十錢)

◇**新しき先驅者の群**　眞田勇著長篇小說・(東京神田錦町一ノ一六・二松堂・價二圓五十錢)

◇**マルキシズムと宗教**　長谷川如是閑三木淸外十三氏の中外日報に發表されたものゝ集錄(東京下谷上野櫻木町五〇大鳳閣・九十錢)

◇**明治維新史唯物史觀的研究**　服部之總著・(發行所同前大鳳閣書房・價一圓二十錢)

◇**俳文學大系**　第七卷紀行編には鹿島紀行更科紀行芳野紀行其他十八篇を收め殊に奥の細道は木版繪入本の縮寫で古雅である。(發行所同前大鳳閣・豫約圓本)

◇**ほえろ支那**　大隈俊雄著・吼えろ支那、タレルキンの死、バルスキイの三戯曲を收む。(東京京橋築地三築地ビル世界の動き社・一圓)

◇**シユベイクの冒險**　ハシエーク著・辻恒彦譯・眞面目で滑稽な一介の從卒スユベイクを縱横に活躍せしめて墺太利側から見た歐洲大戰の全姿容を傳ふ。戰爭讀物として歐洲讀書界に大歡迎された。譯もよく挿繪も痛快だ。(東京四谷傳馬町新一ノ六衆人社・定價一圓五十錢)

◇**財界巡禮記**　神長倉眞民著・(東京京橋第一相互館千倉書房・一圓五十錢)

◇**二三片**　高濱虛子著・著者近年の寫生文集で本誌に載つた「時雨をたづねて」を始め「大連よりハルビンを經て京城まで」他二篇を收む。(東京丸之内丸ビルほとゝぎす社・價貳圓五十錢)

◇**續財界太平記**　白柳秀湖著・本書は前卷(財界太平記)の後を承けて日露戰爭の勃發から大正六年の社會行政維新に及ぶ日本の金權的政權爭奪史で、既成政黨を資本主義財閥の背景の上に博引旁證クッキリと映し出した手際鮮かである。(東京丸ノ内昭和ビル日本評論社・價二圓)

◇**能率秘話**　上野陽一著・產業能率研究所長なる著者の能率に關する應用研究十六篇を收む。(東京京橋第一相互館千倉書房・一圓半)

◇**ナンセンス・ジヤパン**　報知新聞調査部編・報知新聞の毎日の輕い讀物欄として評判の「一日一題」を集緝したのが本書である。(東京京橋第一相互館千倉書房・價一圓五十錢)

◇**波止場での殺意**　越智弾政著詩集。(東京神田神保町上田屋書店・價一圓二十錢)

◇**輕氣球**　一柳信二詩集。(神戶市西須磨中池下八海港詩人倶樂部・定價一圓)

◇**プロレタリヤ戀愛觀**　今野賢三著・「プロ戀愛の紹介と現在日本の戀愛生活種々相を社會的に觀察し健全な戀愛の指標を示し」た書。(東京牛込市谷田町世界社・定價八十錢)

佛領印度支那と革命運動

坂崎謙介

(一) 南方諸民族の奮起

白人の智識と精鋭の武器とに由つて慴伏された亞細亞南方の諸國は、時と共に成長し種々の形に於て實を結びつゝある。

植民地は果實の如し熟すれば母樹より離れ去る、とチュルゴーは言つた。今や漸く熟せんとして居る亞細亞南方の諸民族が其の個々の立場から自由を望んで不當な權力の羈絆から脱せんとする運動は赤道烈日の下にあつて次第に白熱化せんとして居る。

佛領印度支那は印度の獨立運動の如く未だ嘗て世界的視聽を集めた事はない。其の運動は歴史的に内容的に印度と比較すべくもない、久しく世界の視野の外に在つた。

東洋に於ける國家或は民族の革命的運動の注意は支那と印度に注がれ他を顧みる者は稀れである。而し地球は廻つて居る、自然は惠の光を印度支那にも投げて來た。萌芽はいつとはなしに枝葉を延ばし自由の光に浴せんとする先住民族の運動が開始され、向後印度支那民族が世界の批評を希望する機會は屢々繰返されるであらうと思はれる。

(二) 印度支那の概念

印度支那の存在が一般から輕視されて居たと言ふ筆者の意識から印度支那の概念を前置し本文の記述に及ぶのが便宜だと思ふ。

佛領印度支那は、西はシャム及びビルマと境し北は支那の雲南、廣西、廣東の諸省と接壤し、東及南は東京灣、支那海及シャム灣を圍らし、東京、安南、老撾、東埔寨及交趾支那の五ヶ國より成り、東京、安南、老撾、東埔寨の各王國が佛蘭西の保護國となりて五拾年、交趾支那は安南王朝の支配下より佛國に奪はれて既に六十餘年、純然たる佛國の植民地である。

印度支那は所謂「印度支那」であつて南部地方の東埔寨及交趾支那は概して印度の影響濃厚なるに反して東部地方の安南、東京、老撾は著しく支那の影響を受けて居り文字の如き共通であり服裝また頗る近似し居り習慣其他の點に於ても支那の延長と見る事が出來る。

總面積は七拾壹萬八百四拾二平方粁(新領土を含む日本の全面積より稍大なり)にして人口は千九百二十四萬八千九百七拾參人、となつて居る。而し此の印度支那總督府の人口統計は人頭税徴收に依つて計上せるものであつて人頭税は十六歳未滿及六十歳以上の者は免除しあれば人口實數は統計面より遙かに多く普通に呼稱されて居る三千萬人と言ふは實數と見て大差ない。

印度支那は多種の人種を包含して居る。安

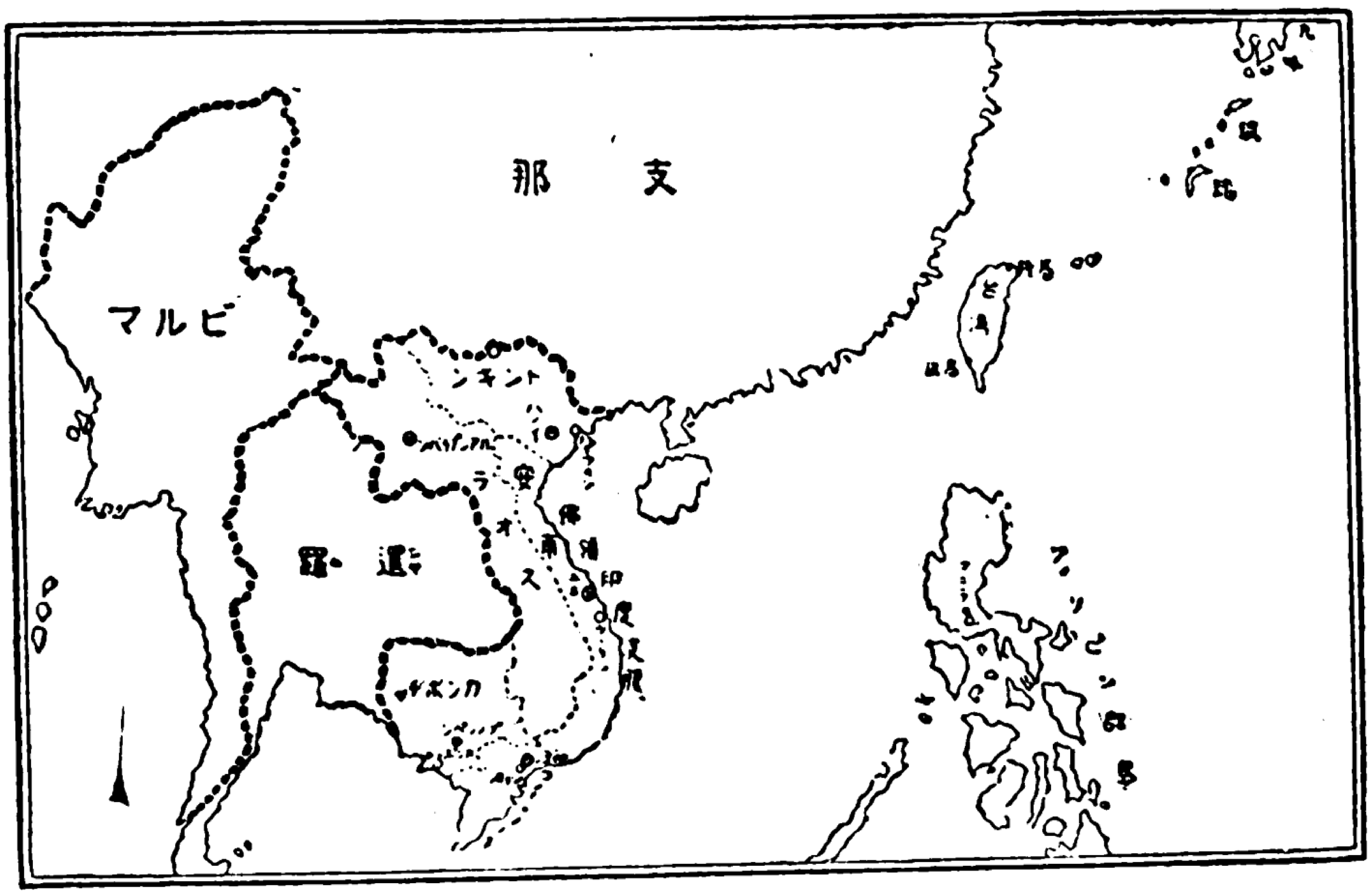
南人其の第一位で、全人口の八割を占めて居り以下柬埔寨人、老撾人、タイ人、インドネジャン人マン族メオ族等である。二千四百萬人の安南人三百餘萬人の柬埔寨人を除けば殘るは僅少なる存在である、タイ人以下の諸族は主として山部高原地方に散住して居る。

即ち安南人は印度支那の代表民族である。近代印度支那史は安南人の活躍史であつて現在もまた安南人の活動如何が興亡の最後を決定する。

（三）　印度支那對佛國の沿革

歴史的には、佛蘭西人として印度支那の地に眞先に足を踏み入れたのはサン・ドミニツク派の宣教師ゼオルジユ・ド・ラモツト教父である。彼は一五八五年ポルトガルの宣教師と共に布教の爲め入國した。其後も佛人にして入國した者は、二三にして止まらない。而し彼等は未だ政治的には何等の事蹟も殘さなかつた。宣教師として佛國今日の基礎を開いたのはピニヨー・ド・ベーヌ僧正（後のアドラン僧正）をもつて第一人者とする。

一七六六年、ルイ十六世の命を含んで交趾支那に上陸した僧正は忽にしてゲンアン王（後の嘉隆帝）と相結び其の信任を得た。一七八七年僧正は皇子カンを伴つて、巴里に歸つた、安南と佛國との政治關係は此頃ろから緊密になつて來た、一七八八年佛安攻守同盟條約を成立させて僧正は柴棍に歸つて來た。



フランシス・ガルニユーは宛も羊が狼と手を握りたるが如しと評して居る。

其當時、印度支那は群雄割據の時代であつて、國内大に亂れて王位の爭奪が行はれた。僧正の飛躍は此の時代最も花々しく僧正は佛國軍隊を率いてゲンアン王を援け四方に轉戰し之を征服し遂に全國の統一に成功しゲンアン王は嘉隆皇帝と稱するに至つた。

而し内亂は引續いて起つた。佛國は盛んに軍船を派し武器を供給して安南王の安定を謀つた、それと同時に一方に於て着々として利權を收める事を忘れなかつた。プーロ・コンドル島の讓渡を要求して成功し、ツーラン灣の租借を强要して其手に收めた。

アドラン僧正は一七九九年の十月幾多の歴史的業蹟を殘して印度支那に於て客死した。僧正が印度支那に上陸して以來三十四年の間に營々辛苦佛國の勢力扶植に盡した功績は莫

大なもので、印度支那に佛國權力の今日あるは僧正の健闘に由るものと言つて好い。柴棍に殘る壯大なる彼の墓碑は佛人渇仰の的たると共に彼の銅像は安南人の呪咀を一身に集めて居る。

嘉隆帝の歿後は二代明命帝、(二一年間在位)三代紹治帝(七年間在位)と相繼承即位した。兩帝共に先帝と異り白人に對して極度の敵意を有し、耶蘇教徒の迫害を開始し佛國との紛爭斷ゆるときがなかつた。佛國また相次いで起る自國内の動搖に妨げられ極東との折衝に圓滑を缺くに至つた、四代嗣德帝時代(一八五二年即位)に入りては兩國の葛藤は頂上に達した。

アドラン僧正の衣鉢を受けた佛國宣教師は自國の勢力を背景に、常に宮中に出入して新帝に干渉し遂に激怒を買ひ耶蘇教徒に對する反感を益々激成し政治に容喙しては時の官吏に忌憚され先帝以來の反佛感情を彌が上にも釀成するに至つた。

一八五一年嗣德帝は主なる宣教師の首を刎ねた。次いで翌年再び二人の宣教師も斬首され斷然敵意を明示するに至つた。此報に接した佛國は激怒した。ナポレオン三世は直に軍船、軍隊を增派し安南攻略の擧に出でた。佛安の此戰は五年間に亘つて繼續された。

精鋭の武器と智力に對しては安南軍は佛軍の敵でなかつた。佛軍の攻略は安南を危殆に陷入れた。一八六二年嗣德帝は本意なくも和を請ふの餘儀なきに至つた。

一八六二年六月五日講和は成立した。條約中の主なるものは、印度支那全土の耶蘇教信仰の自由を認める事、交趾支那を佛國に讓渡する事、安南皇帝が柬埔寨に有する總ての權利を佛國に委ねる事、償金四百萬弗、其他經濟上の優先權を附與する等屈辱的致命的打擊を受けた。

爾來佛國の印度支那に對する征服意識は益々積極的に旺盛となつた。一八六三年佛國は完全に柬埔寨を安南より奪ひ保護國の名に於て自國勢力下に置いた。

佛國は其精鋭の軍隊を動かして反佛勢力の驅逐に努めると共に好題目を捉へては嗣德帝に迫り其勢力を削る事に腐心し利權の獲得には武力抗爭に訴へ强壓其手に收めて行つた。

東京の征服は一八六九年紅河の自由航行問題に端を發し一八七三年佛國は遂に兵火に訴へて强請するに至つた。

嗣德帝は佛國の高壓に對して欵を支那に通じ國境より支那の黑旗軍を迎へて對抗した。東京の爭奪(實は安南の興廢)は黑旗軍の進入によつて進捗遲々持久戰に入り、佛國對安南、支那三國間の面倒なる國際紛議を起すに至り外交的折衝と武力鬪爭が交互に斷續し遂に一八八三年嗣德帝の死に會すに至つて漸く解決の曙光を見るに至つた。

支那對佛國の關係は支那の讓步となり、支那は漸々東京より撤兵を承諾し、(事實は容易に撤兵しなかつた、其後數年間佛國の東京平定を阻害した)一八八四年五月佛支間の天津條約により解決した。

佛國安南間の紛爭は一八八四年六月六日佛安間保護設定に關する條約の成立によつて―

ー之れまた安南側の擧國的不滿反對があつたが實力の前に屈伏する弱者の悲哀を滿喫して最後的解決に到達した、此處に佛國は印度支那に對する積年の希望を達し全土を統一支配するに至つた。

（四）總督政治と先住民族

印度支那總督政治は、現代列國此種の總督政治中封建的最惡なるものであらう。

現總督パスキエー氏は新任の辭の一節に「此國民は佛國の主權を尊重する條件の下に於てのみ平和と進歩とを得べきものなることを忘るべからず」と言つて居る。

佛國當局は隣接諸國に比し印度支那の文化的施設を誇示して、先住民族が安んじて近代文化の恩惠に浴し生活を享樂して居ると稱する。成る程印度支那は佛國の領有以來從前に比し文明的外觀に於て急速の進歩を遂げた。秩序は保たれ住民は內亂より救はれた。而し彼等は佛國の奴隷たる位置に立たされた。

近代文化の粋を集めた設備を有する監獄は如何に美觀を誇つて見ても囚人に對する拘束を解き、人間的自由を與へざる限り安住を喜ぶ者は無い、反佛の禍根は此處にもある。安南人の文明的成長は彼等を促し自然の要求に向かつて進むに不思議はないのである。印度支那當局が如何に國內的に幾千の文化的施設に鋭意しても先住民族に對する自由束縛を解除せざる限り先住民族は斷じて總督政治を謳歌せぬであらう。

例年、總督府諮詢會に於て印度支那總督は安南人議員を前に其施設方針を演說する。土人官吏登用、其改正俸給案、土人議會開設の準備、土人辯護士任用案等先住民族の歡心を買ふに充分なる題目を捉へ來つて大に力說する、宛然總選擧に臨む候補者の態度である、而し之は諸詢會內だけの恒例演說であつて佛當局は土人の焦慮を無視し實現の可能を疑はしむるに至り總督の公約的演說の價値を下落させ、人心離反を誘致しつゝある。

土人（佛人は一般に斯く稱する）は下級官吏に採用されて居る。王室關係の貴族中政策的に登用されて居る上級官吏（州長、巡撫、和縣）は實權なき空名の名譽職に過ぎない。俸給は質素なる彼等の生活を支持するを、限度とされて居る。佛人巡査の俸給三百弗以上なるに對し土人巡査は二十弗前後最高三十弗止り、總てが此比例である。

富有なる土人の子弟にして年々佛國に留學する者は甚だ多い。佛國に於て教育を受けたる土人は初期以來壹萬餘人に上ると言はれて居る。彼等は佛人子弟と何等の差別なき學業を修めて新智識の誇りをもつて自國に歸つて來て居る。而し乍ら彼等は僅に下級官吏登用資格を與へられるのみである。辯護士、醫士としての學位ある有資格者に對しても開業を許るされない。彼等は佛國に於ては學徒相當の待遇を受くるに不拘自國に於ては反對に進路を阻まれて居る。土人は海外への旅行の自由を與へられて居ない。佛國に赴く以外國境の外に出る事は脫出の外至難である。嚴しき言論の壓迫、集會に對する禁止的干涉、佛國特有の探偵政治に對する反感……等土人の總督に求めんとして居る事は甚だ多い。與へざ

れば土人の不平を買ひ、與ふれば統治政策のガンとなる恐れがある。歷代總督公約の實現困難も由來する處此點にある。

印度支那は農業國として天惠の氣候風土に加ふるに廣漠たる未墾地と有望なる將來を持つて居る。また原料供給國として天然資源の豐富なる國である。佛國は印度支那の平定と共に資源開發に着手した、之が便益に資する爲に敷設された鐵道は全長二千八百餘粁（一九二八年現在）自動車を通ずる舗裝、非舗裝道路の全長三萬粁に達して居る。

農業の發達に對しては支那移民を招き、未墾地を開き灌漑工事を起した。鐵道、舗裝道路の延長は商工業の發達を促し國富を增進した。一九二七年の輸出入貿易は四億四千三百萬ピヤストドルに達した。雛鷄は成長と共に佛國の思惑通り夥しき産卵を始めた。卵が人間の營養供給たる如く佛人を利する處逐年莫大なるに比し土人の潤ふところ甚だ少ないのである。

鑛山の發掘權は土人も有して居る。而し土人出願の許可されたる事を聞かない。未墾地出願の如きも佛人の如く容易の許可は得られない。只彼等は驅使される爲にのみ存在し印度支那の富に對して參加を許されない。彼等の生活水準は十年の昔と異る處なく、粗衣と粗食と勤勞を續け徐々たる死の生活を營んで居るだけである。

佛國は土人の教育に對して種々の施設をなした。小學、中學、高等學校及實業學校の設立、河内大學設立の聲明も既に久しき以前からある。好學の土人は近代科學の研究修得に熱心に精進し教育の普及は土人の理智を啓發し、今日の土人は昔日の土人ではない。佛國當局が「我が植民政策の自由主義なるに乘じて土人の反對勢力が集合組織さるる事は善良なる土人の爲に遺憾とする。捕捉すべからざる宣傳の絕えざる潛入に迷ふ事なく……」云々と反抗思想の結社的擡頭を論難して居るが不自由過ぎる總督政治が自ら醞釀するものであつて、土人の自覺は極めて自然の經路を辿つて發育して居る。

印度支那に於ける佛人は總數二萬六千餘人である。僅々三萬人足らずの佛人が豐庫印度支那の番人として三千萬の先住民を驅使して富の搾取に當つて居る。而し嘗ては神に次ぐものとして土人を恐れしめた佛人精銳の武器も、其科學的智識も、土人の覺醒と共に次第に威力を失なつて來た。從順羊の如くなりし先住民族も不合理なる佛人の統治下に盲從する不快を持ち初めた。萠へ出づるものの力は強い、佛國にして其統治政策に人道的安全瓣を掲げざる限り權力の動搖を來す日が遠くない事を覺悟せねばなるまい。

（五）反佛運動の烽火

頑強なる排佛の元首嗣德帝は、排佛抗爭の業成らず遂に國を傾くるの端をなして悶々佛國を呪ひつつ順化城中に憤死した。翌一八八四年六月六日佛安保護條約成立し安南人は佛國主權の下に奴隸的生活の第一步に入つた。

嗣德帝歿後の安南王位の立廢は一つに佛國の意圖に出でた。嗣德帝の後を繼ぎたる育德帝は即位後幾何もなく排佛策動の故を以て獄

に投ぜられ遂に斷食獄死した。次いで六世協和帝、七世建福帝は佛國に迎合せざるの故をもつて毒殺された。八世咸宜帝はクルシー將軍に捕へられアルゼリヤに流謫監禁された。九世同慶帝、僅に其の位置を保ち、十世成泰帝、十一世維新帝は共に反佛思想を使嗾したとの理由でレユニオンの孤島へ流された。十二世啓定帝無難の十年を在位し一九二五年歿する及んで現在の保大帝（本年十七歳巴里に在り）に至つた。

嗣德帝歿後現保大帝に至る近々四拾餘年間に帝位の替る事八代、其内投獄、毒殺、監禁流謫等に處せられたるもの六帝、同慶、啓定兩帝僅に帝位を保つたに過ぎない。帝室に對して斯の如き暴状を逞うした佛國は人民に對しても安南人の所謂絞殺政策を行ひ極端なる彈壓政治を布いた。安南人の感情が佛人に親しまざるは當然の事である。

斯くして安南に於て先づ第一に集結したのは安南王室を中心に奉ずる勤王黨の結社であつた。

一九〇〇年安南人志士潘佩珠、阮誠等の策動は多數の青年志士の參加を得て一九〇三年王族彊抵侯を首領に推戴して安南國民黨と稱し排佛の密計を着々進めた。而し此の國民黨の企劃は一九〇五年未だ發せざるに破れ、由井正雪程度の騷動で終つた。首領彊抵、參謀潘佩珠等の領袖は身をもつてシャムに走り次いで日本に逃れた。兩氏は久しく日本に雌伏して時の到るを待つて居たが、佛國の引渡し强要厳しく遂に身邊の危急を告ぐるに至つて再び支那に逃れた。支那に於ても佛國の手が延び彊抵侯は難を避けたが潘氏は捕へられて安南に護送された。

潘氏の裁判に際しては多數青年の救命運動が行はれ、數千の學生及民衆によつて裁判所を包圍する等の事態を惹起した。潘氏は人民の救命運動効を奏し現在順化府に在つて靜に世態の變遷を眺めて居るが、氏の邸宅は嚴重なる警官の監視を受けて居る。

潘氏は本年六十有餘歳、氏の愛國的精神は安南人に對する活教訓として同胞の信頼厚く一九二八年順化府人民代表會議の議長に選ばれた。潘氏は人民會議の劈頭排佛的强硬意見を吐いて列席者を驚かした。安南總理事官以下佛人の激怒を買つた事勿論である。當時の印度支那代理總督ロバン氏は此事に就て東京諮詢會に臨んだ折り「諸君は地方長官の報告を讀まるるであらう、其處には總ての人民が同情と信頼とを以て佛國の事業に協同するの實證を發見せらるるであらう、我々も亦最近に安南、東京、柬埔寨、の人民代表會議が決議せる「忠實の上申」に於て其の證明を受けた。

安南の地は交趾支那國民黨の勸誘に耳を傾けぬ。此國の運命に就て責任を有する保護政府は國内の安寧と自由なる發達を保證した。然れども此の兩國に於ても亦濟度し難き者の存在する事は驚くにも怒るにも足らない。彼等は疾くに處分し得られたであらうが、我々は之を寛假し、却て殉國者の名譽を屢々彼等に與へた。最近には政治犯の流刑者で我政府に特赦を受けたるものが其市民權を回復し順化に於ける人民代表會議議長に選出せられた

然るに彼れは（潘氏を指す）此の貴き會議の前に於て數年前彼れが或る名聲を博したりと自信せる排佛的意見の發表を試みた。彼は會議內の言論は處罰を受けざるが故に傲慢不遜の態度、惡意と淺見とを以て保護國政府を攻擊した。安南總理事官は之に對して痛快なる反駁を加へた‥‥」云々と演說して居る。潘氏の此の擧は佛人の激怒を買つたが安南人を刺戟し殊に靑年學徒の血を湧かした。

（六）最近の國民運動

印度支那總督府當局の周到なる出版物に對する注意は、安南人の自由思想を刺戟するが如き文字の掲載を許さない。河內圖書館は立派なる規模を有して居るが、思想、革命等に關する書籍を備へない。世界の動きに對し安南人は目隱しされて居る。而し自然は一粒の種子より大森林をも生み出して呉れる。共通の惱みにあえぐ國民は口から耳に隱密の間に集結を急ぎつつある。

現在印度支那の獨立思想を刺戟し培養しつつある原因と由來、思想的黨派別は大體次の如くである。

第一は佛國への留學生及其歸朝者によつて國內に宣傳、指導されつゝある立憲共和國を目標する一黨、これは中年以下殊に學生間に迅速に浸潤し全國を通して頗る活潑なる步調で擴つて居る。此の思想に（他の團體へも）更に油を注ぐものに隣國中華民國の國民革命の影響がある。支那の情報は頻繁なる交通が媒介してドシ〳〵國境を傳つて直接口から耳に安南人を刺戟する。殊に蔣介石の業績が自由主義の靑年學徒の血を躍動させる。一方印度の獨立運動の進展もまた安南革命兒の焦燥を煽るに充分である。印度獨立の火の手と、中華民國革命の猛火の中間に介在して、近火國安南はブス〳〵燻りつつある。

第二は彊抵、潘氏等によつて端を發した安南國民黨は首腦部の壞滅に會つて同志分散第一線の鬪士を多く失ひ久しく振はなかつた。而し此の黨派に屬し或は好意を寄する安南人は中產階級以上の壯年及古老に甚だ多く思想ある團結として佛國當局の最も恐れ警戒怠らない結社である。昨年二月過激なる十八歲の靑年が總督府所在地の河內市に於て有力なる佛人をピストルで射殺した。當時、保安部は絕好の機會として平常此の黨派とニラんで居る紳士富豪を多數檢擧し家宅搜索を行なつた。而し當局が期待した程の獲物はなかつた。河內警察署の黑表に記載されて居る安南人は二千四五百人に達して居り、河內高等學校などは何れかの反佛團體に所屬せざる限り通學は難かしく、學校當局なぞ處分するとすれば全學生の放校を行はざる限り拒絕は至難なりと嘆いて居る。

第三は共產主義の影響であるが、之は今日のところ組織的集結は國內の何處にも認められない。一時隣國支那に於て盛んなりし時代、國境に近き廣東より多少赤手の延びたる形跡はあつたが安南人の反應は皆無に近かつた。從つて此主義者の消息は傳へるべきものはない。而し廣東、上海、南京、等の支那各地には國境を脫出した多數反佛の血に燃ゆる安南人が散在して居り、廣東、上海の在住安南人

には共産主義に意を用ひ居るものがあるから將來の事は豫想出來ない。

此の外に交趾支那に交趾支那國民黨がある之は安南國民黨の影響を多分に受け阮誠氏の如き其主唱者であつた、而も今日に於ては多分に共和派に傾いて居る。言論を通し現在最も表面的活動をして居る。西貢の華僑等にも支持があると言へば追々金力にも惠まれるであらうし、組織的に延びるであらう事を期待されて居る。

以上、現在の反佛思想は共和派、王黨派の兩勢力が共同の目標に連絡なく突進して居る。それが印度支那の反佛運動である。共和派の個々の分子は多年在佛して近代歐洲に觸れて歸つて來た者が多いだけに優れた素質を持つて居るが、統一的組織的に訓練を缺き犧牲的に尖端を切らんとする勇氣に乏しい。此點は國民黨の忠臣的良心の旺盛なるに比し愛國的、英雄的實行力が無さ過る。勇氣さへあれば彼等の中には立派に愛國者としての聰明なる智識の所有者は多數に居る。組織と統一の勇者、兩派とも此點に目覺がついたとき、それに金力でも加はれば印度其他に先んじて目的を遂げる事は困難でないであらう。

最近印度支那に起つた反佛國民暴動は連絡なき鬱憤晴的で實行方法の豫習試練的である一九二七年海防の暴動は安南人對支那人の小さな爭が昂じて暴動化し遂に反佛示威となり戒嚴令下の海防は七日に亘つて流血の慘事を繰り返した。東京守備兵の大部分が海防に急行しヤット鎭壓した。兩者の死傷者三百餘人を算した。日本人在留民の如き皆一ヶ所に集つて日章旗の下に籠城した。昨年は河内に於て安南青年の佛人射殺があつた。當時河内市に於て嫌疑者の家宅搜索中數十個の爆彈が發見された。神に仕へる如く佛人に從順であつた安南人勞働者も嘗て佛人に向つて吐かなかつた、最惡の罵言を平然言ひ放つやうになつた。兩者の小さな抗爭は次第に街頭に於てさへ演ぜられるやうになつた。佛人に對する輕侮の念は日を追うて增長の風がある。

本年に入つてはエンバイに於て安南兵士の不服從の小亂が起つた。東京の一地方では佛人地方官の橫暴を憎んで農民の一揆的騷擾が起り家族と共に殺した事件がある。之等の背後には獨立運動の何れかの手が動いた。其の後も引續き地方的小波亂を卷き起した。順化に於ては國民黨の安南人が捕縛された。中に潘氏の令息も加つて居つた。死刑或は重刑を受けた。

如斯、引續く反佛思想の瀰漫勃興、直接的行動の頻發は佛人を恐怖させる効果は充分である。思想方面に對する防止、運動者の監視は一層の嚴重を加へて來た。外國人の入國者に對してまで神經過敏となつて入國法の手續き改正とまで響いて來た。今迄でも隨分外國人在留者の不快を買ふ態度に出た當局の態度は今後更に甚だしくなるであらう。

而し一方總督府の統治策にも幾分安南人に對し好影響し安全瓣的施設が講ぜられんとして居るとの報が最近にあつた。だが、多數の安南人は限定された糊塗的好餌に滿足せず近火の火勢に煽られて發火點に急ぐであらう。

プラーグの覇權を目指して

人見絹枝

一册の新らしい日記帳が用意された。

この一册の日記帳も今でこそまつ白な紙の綴られたものにすぎないが、之の白い紙の上に今日から六人の選手によつてつゞられて行くうちに血もにじみ、涙もにじみ、遠征を終つて此の日記帳が大事な役を終へてくれるときには、この日記帳は喜ろこびに溢れたものになるのか、かなしい思出となるのか私はなんとも云はれない心のときめきを覺えて第一頁に妹等にかわつて私はこう認めた。

◇……五月十、十一兩日美吉野の女子オリムピツク大會の結果選び出された六名、

中西みち　本城ハツ　濱崎千代
村岡美枝　渡邊すみ　人見絹枝

思ひ起して見れば長い間の努力であつた、プラーグの夢を見るやうになつてから今日このよろこびを得るまでの苦闘、ほんとうの苦闘であつた。

然し今思ひ出してもその苦るしみは決して無意味な苦るしみではなかつた。何事も忘れて喜ばう、選ばれてから十日の間皆んな毎日の生活が、自分の心の中が、自分自身のものでない位よろこびの絶頂にゐた。それはあたり前だ、こんなうれしいことが一生のうち二度とあり得やうか。

だが私等は思ひを今少し平靜にして考へをめぐらして見れば、不幸にして選ばれなかつた多くの親しい友の心中を察して見れば……。

然し私等はいたづらに今歡喜によつて宇頂天になり、或は不運な友の爲にいろ〳〵と雜念を抱くの身ではない。

重大な任務をになつて立つた六名の者だ。もう凡てを忘れやう、いつまでも〳〵よろこんでばかりはゐられない。

幾度か夢に見たプラーグに出かける日は目の前まで迫つてゐる。

無念！　無想！

たゞ日章旗の爲に、日本三千萬女性の爲に六名は今大きな仕事を持つてゐる。

一度起たんか、今迄の苦るしみに幾倍する苦るしみが到る處に私等をまちかまえてゐる。

私等は之に掛けやうか……決してそうではない。ユニフォームの胸間に縫ひつけた日章旗に對しても。

今日から此の日記帳につゞられて行く六名のペンの跡も涙と血でつゞられること、信じる。

そうして五ヶ月の後にペンのあとが絶えるとき！　美しい花が咲いて、日本女子萬歳を高らかにさけびながら、又今日のよろこびと同じ歡喜に六つの身をつゝんで終ひたいものである。

六人の者が一日〳〵かわり〳〵に日記をつけて行く、「どんなに書くの」「又今日は日記當番、こんないやなことない」「もう日記は人見さん一人で書いて欲しいわ」

誰もあまり日記をつけて行くのをこのまなかつたが、合宿が初まつて今日で十五日にもなると、いやとも云はずにペンをとつては毎夜その日の出來ごとを大小もらさずに書いてゐる。

◇……五月廿日　火曜日　晴

待ちに待つた合宿練習の日が來た。名古屋からの村岡、渡邊さん二人は大阪から私と一緒に、京都の中西、本城、濱崎さんの三人は京都から、大軌電車の橿原神宮前で落合つた。

十日前オリムピック大會で競走した六人の者が今日は一心一體となつて思出の深い上市の町に到着した。

上市の町！　なんといふ私等に縁の深いところでせう、一夏前こゝで十五人ばかし「來年はプラーグ大會だ」といふので合宿練習をした當時の思出をたぐつて見れば、今プラーグへの代表として運ばれた六名で上市の町に足をふみ入れるときほんとうに感慨深いものがる。

夜は福榮旅館、吉野川の流れを窓の下に見て目前に開ける妹背、大師の山山はみどりのしたゝるやうな美しさ、宿のオバさんは廿一貫は十分あると鑑定したが到つて氣の優しい人、之から四十日の長い間私等の毎日を守つてくれる人だ。

午後四時から練習、今日は體の調子をつけるだけに止めた、まだまだ本當の練習に入るのは先の先のことだ……。

◇…………

五月廿六日月曜日晴スタートの練習を始めて今日で二日目になる、私はもう昨日から少し體が倦るくてならない。

「年が寄つたのかナア……」

と一人で誰にも云はずに心配する、他の人を見ても別に苦るしいも、大儀だとも云はない。

こつそり谷コーチに相談した。

「體がだるくてならないのですが」

「もうまいつたか、いつもお前がまつ先にまいるのだから不思議もないが」

「年のせいかしら」

苦るしいまぎれにとう／＼弱音を吐いた。

「そうかも知れんはゝゝ。皆の者にくらべてスピードがちがふからだよ……心配しなくても。」

さん／＼からかつた末が此の言葉だ。然し私はこれで大安心……年のせいでなかつたので……。

渡邊さんが今日はさん／＼コーチから油を絞られてゐる。スタートなんかでも私等の二倍位餘分にしなければならない。

位置について、用意、ドン。二、三歩走る。

「駄目ダツ！　歸れ」

又やりなをす。

「駄目、歸れ」

それでも泣き出しもせず笑ひながら次第に要領を覺えて行くところは感心せずにはゐられない。まだ十五になつたばかしの子供がこの大仕事にかゝつてゐるのだもの苦るしいのもこの上ない。私は渡邊さんのことを子供、子供と呼んでゐる。

六人の者が廿日前の女子オリムピック當時に比べて一段の進歩を見せたやうに思はれる。今日谷さんの「ランニング十五年」が出版された。皆んな一册づゝ戴く。

◇……五月卅日　金曜　晴、

今日は木下博士（日本女子スポーツ聯盟會長）が旅立の日なので床から出るなり郵便局にかけつけた。

「オスコヤカニオタビダチヲイノル・ミナゲンキデアトカラマイリマス」

慈父のやうな博士を大阪驛頭に送れないのがなんだか氣殘りだつた。

晝頃博士から次のやうなお手紙がとゞいた。

「種々の仕事に取まぎれて不本意にも親しく皆様と面接の機會を得ず心惜しくも皆様を後に大毎歐洲旅行團と行を共にして先發致さねばならなかつたことを非常に殘念に思ひます。こゝに面接に代えて書狀をもつて一言御挨拶申上げる次第であります。

皆様が過日の第七回日本女子オリムピック大會並に其他各種の大會の成績により今日の代表選手の名譽を荷はれたことは誠に目出度き次第でお喜び申上ます。

然し若き女性の羨望の的としての地位を得られた皆様は其の名譽が高いだけ其の責任はそれに比例して重いわけであります。

今迄の皆様はたかだか一校、一市の代表として活躍されておられましたが只今では三千五百萬の日本女性の代表者であり我大日本帝國女子の代表選手として立つべく推されたのですから其の責任たるや誠に重且つ大と云はねばなりますまい。

恐らく此の責任こそは今迄の皆様御自身の身體を國の爲にお借りす

ることゝなるので言ひ換えればこれからは皆様の身體は皆様のもので皆様のものではなくなるわけであります、然し決して競技場に臨んで固くなるやうなことを責任といふのでないことは勿論で自我を殺して精進することが責任を重ずることになると信じます……（中略）

現在つゞけてゐる合同練習は皆様の技術に於て見違える程の進歩を示されることゝ存じますが日本に於ていくら強くても世界の檜舞臺でその實力を發揮することが出來ないとすればその力は所詮は寶の持腐れに過ぎなくなります。

實力發揮の最要諦は即ち風俗習慣の激變にたえ得る精神と身體とを現在日本にゐるうちに作り上げることが必要であります……（中略）

嘗ては敵なりしお互も今は同體なることを思ひ打解けた思ひやりの深い一團となつてまみえられんことを望んでおきます。

『身體の健康・技術の練磨・他意なき融合』これだけを皆様にねがつて御挨拶に代えます。

木下東作

選手皆様へ

ではワルソーで皆様のお出をお待しします、お元氣でお越し下さい。

いつもキヤツ〳〵さわぎまわる皆んなもこの手紙を讀み終つたときだけはしんみりと聞いてゐた。

「あの白髪のおじいさん見たやうなのいゝ人やナア」

「木下先生てスパルタといふ藥作つた人やらう」

「早くゆきたいナア」

すぐ口の悪いところを見せて木下先生のことで一時花を咲かせる。

◇……六月一日　日曜　晴

今日は一日休みを貰つて大阪まで日比印度三國對抗競技會を見に行く。

昨日までの練習でやつと基礎練習を終つたので皆一通り疲勞を起してゐるので今日の休息は此の上なく私等にありがたかつた。

朝早く起きて八時十分の電車に乘る。

宿のオジさんから貰つたカジカを八匹ばかし私は大阪に持つて歸つた。

電車の中で山の人が河鹿を見つけては、

「大阪にお持ですカイ」

「ハイ」

「毎日生きた蠅を二匹づゝ位おやりなサア、あまりやるとアキませんぜ、糞蠅やると鳴きませんぜ」

「河鹿はこんな大きなのより小さいので年をとつた奴がよう鳴きますぜ」

「えゝ河鹿になると一匹百圓もしますぜ」

いろ〳〵のことを五、六人で話し合つてゐた。

大阪につくと皆で大丸に行く。

カバン、靴、帽子とおそろひのものを注文してゐるうちにもうお晝になつた。

晝食をそこでとつてすぐ阪神電車で甲子園に向つた。

樂しみにしてゐた名選手のサインを受けるのだと皆は用意の扇子をもつてはしやぐ。

偉大なゴンザガ、トリビオ、カタロン、と皆の扇子に次々と書かれて行くサインを見つめながら大選手への憧憬と尊敬と、啓發の念に胸を一杯にした。

二百米のゴンザガの力走、八百米矢柴選手の見事なストライド、走巾跳大島選手の偉大な彈力、四百リレーのスムースなバトンタッチ、西田選手の棒高跳四米一五の鮮かな飛躍凡て私等は魅せられてしまつた。

男女の別とは云へ私等もあんな立派な技術を持ちたいものだ、技も人を無言のうちに引つけて行くところに眞の價が生れて來るのではあるまいか。

明日行はれる競技會に思ひを殘しながら引あげる。

甲子園を引あげやうとするとカタロン氏がとび出して來て

「プラーグでしつかりやつて下さいよ」と皆に握手をして下さつた。

私等は偉大なるカタロン氏に握手されたゞけでも光榮だ。

夜十時の電車で又上市に歸る。

車中皆んなで貰つたサインのことから、

「〇〇さんは中島さんがすきになつたのやと」

「まあひどいこと、たゞ走り振りがよかつたとほめたのに」

「え……そうでしよ顔が赤くなつたからにはね………」

「あんたかてゴンザガがすき云うたが」

「うそ！　あんな黒い人かなわんわ」

「黒くてもいゝわ、世界的なんだから」

「人見さん今日〇〇さんに會つてうれしかつたでしよ………」

大さわぎが始まつてなか／＼おさまらなかつた。

上市に到着したのは夜中の十二時。

今日から吉野川の初鮎がとれる。

川の石岸につりざをたれる人がつゞいてゐる。

今日はお菖蒲、カシワ餅を戴く。

日記帳に書くことも皆少しづゝなれて來た、私の日記文の最後に村岡さんのを付加へておきます。

◇………六月五日　木曜　雨

朝目をさますと外はかなりひどい雨であつた。合宿に來てから始めて見る雨であつた、吉野連山が初夏の雨にけぶつてゐる。

靜かなシツトリした雨がお部屋の中へ流れこんで來る。

都會の雨、山の雨、之等の二つを對稱してゐるうちにアスファルトの雨にぬれた上にちら／＼うつる故郷の町を思ひ出した。

今日は朝降りで一日休みだと皆樂しんでゐたが小雨を見計つて練習に出かけ、早く切り上げて歸つた。

皆もう兩親の膝下をはなれて二週間にもなるので故郷戀しさが幾分湧いてゐるらしい。八橋、五色豆、バナナ、ミカン、チョコレート、オカキ、とほとんど毎日のやうに家から送られるおやつを「ようこうまでさばかれるものだ」と思ふ位「間食嚴禁」のおきてを破つて片付けて行く。

私は昨日皆にひどくすゝめられ、とう／＼皆に賣收されて戴いたアイスクリームが悪かつたのか少々お腹が悪い、谷コーチには云はれぬところ、賣藥のオバさんに一服貰つて無事ことずみになつた。

合宿の中に

「これは私等修學旅行のお小使を節約して出來たものです皆樣へ」として貰い爲替が來たり、激勵の手紙にそえて「選手を送る歌」として

行けよ健氣に　わがともよ
みどり繁れる　チエッコに
榮冠さして　うちすゝみ
大和乙女の　意氣示せ
　われらが與望　君にあり
さらば行け／＼　恙なく
勝てよ凛々しく　わがともよ

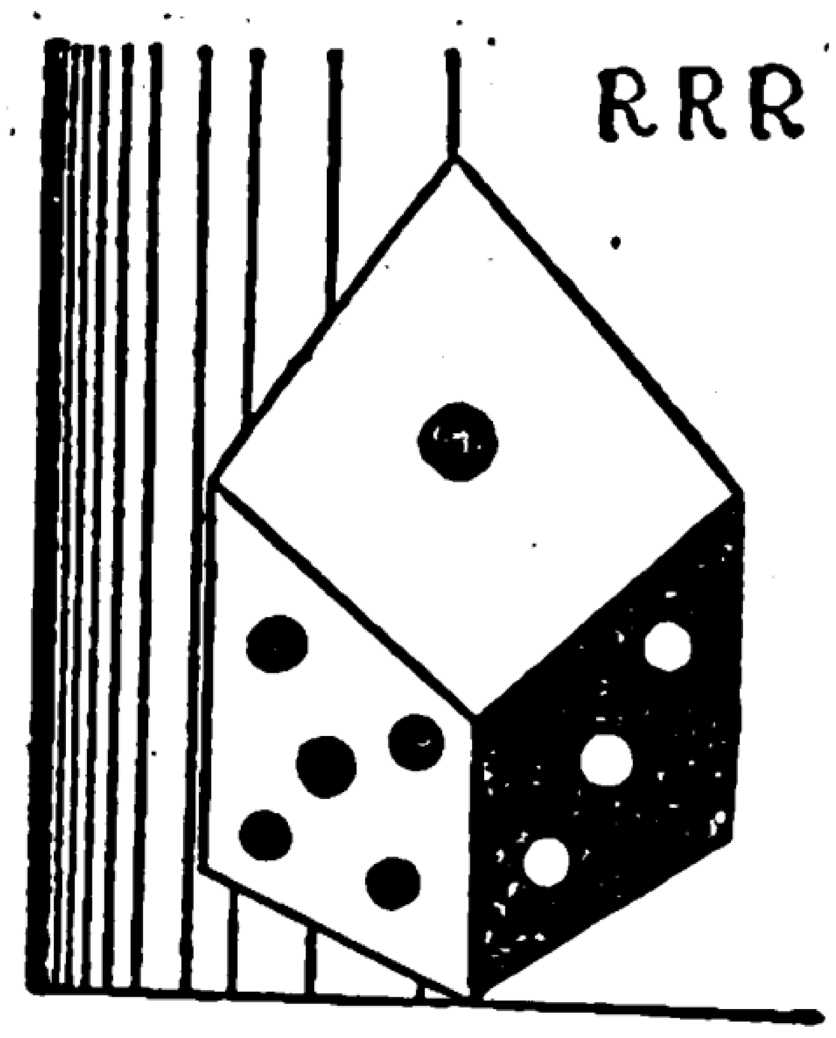
プラーグの碧き　空高く
大日章旗　翻へし
母國の光　輝かせ
　われ等がほこり　君に俟つ
　行きて勝て／＼　勇ましく

選手等はこのやうなものが來る度に、六人で集まつては感謝しながらくりかへし／＼手紙を讀むのでした。

合宿練習はまだ／＼廿日もつゞきます。私等のきたえ上られるのはこれからです。

水虫の手當て

水を使つたり始終水浸りになつてゐる職業の人には水虫に惱まされ勝ちであるが、近年では洋服を着る人が靴に蒸されるため仲々これに侵されるやうである、毎年初夏の候から秋口にかけて特にひどく、その手當もいろ／＼あるが、慢性になつてコヂれた水虫にも獨逸から輸入されてゐるデシチンほど氣持ちよく効くものは餘り類がないと云はれてゐる、先づ患部を石鹸で洗つてからデシチンを薄く塗つてをく、朝と夕とにこれを繰返すときは始めは却つて分泌を增加するが二三日經てば良く乾いて健全な新しい表皮が出來てくる。そして又再發の徴があれば早めにこの手當てを繰返す、斯くする内にはもう再發しなくなる、デシチンは皮膚そのものゝ組織を强壯にする杕育で、ただ表面を防腐するといふだけの荷藥療法でないだけに慢性の水虫には良く効く。



脚の哀史

岩田豊雄

舞踊靴を履いた雛妓

ホフマン・ガールスだとか、チラア・ガールスだとか……

眞珠の頸飾りのやうに、粒を揃へた美しき者の一聯だ。しかし、どこまでも、美しい一聯であつて、美しい一粒の名で呼ばれたことはない。

「ガールス」は、不思議な勢力である。ミスタンゲットやシユヷリエの大花形に次いで、その晩の人氣を攫つてゆくものは、この團體的な、ガールスである。彼女等は十二人をもち、十六人をもつて、一箇の花形をつくるのだ。

そこに新時代の藝人たる面影がある。さうして彼女等のインタナシナル趣味、スポーツ氣分、少女的健康──等々が、舞臺から一切の十九世紀的媚態を追拂つて、今日のミユジツク・ホールあらしめた。彼女等の位置は甚だ重要である。昔日のコーラス・ガールの瀬ぼけた存在と比較することはできない。

團體として生きる彼女等は、鐵の如く訓練される。極めて準備的に、組織的に訓練される。肉體ばかりでなく、精神も訓練される。「一絲紊れざる」訓練が、面麗しく脚美しき十四歳の少女を渡つてゐる。不道德は彼女等の瞼を黒くするだらう。不衞生は彼女等の聲を割るだらう。不規律は彼女等の脚を鈍くするだらう──といふ事を誰よりも良く知つてるのは、勿論、彼女等の親方である。「何々ガールス」の團長である。されば彼等は鐵の如き訓練を以て、「子飼ひ」から、「叩き込む」のだ。それは、よつぽど、日本國の雛妓制度と似てゐる。

リリイの家は、蘇格蘭の片田舍、ドンカスタアにあつた。親父は紡績工場に出てゐた。貧しい、正直な一家だつた。

或日、モオニングの紳士が訪ねてきた。

トランピイ氏。ルーフア氏衆舞踊學校。マンチエスター。

さう名刺に書いてあつた。

——お宅にお嬢さんが二人おありださうで？

——ゐます。リリイにモオド、十四に十三、しかし……

しかし、父親の口に出かかつた反問は、忽ち紳士の長廣舌に押潰されてしまつた。

まづ第一に、わがルーフア舞踊學校に於ては、單に舞踊教育のみならず、良家の子女に必要なる一切の教育を與へ、それが無料である。いや、無料以上である。なぜなら、修業年限中と雖も、學校は些少ながら金一封を、兩親に進呈する。もし御令孃が卒業の上、舞臺に出られた曉には、毎月二十ポンドの給料を支拂ふ。そのうち三分の一は、ルーフア舞踊團が責任を以て、毎月親元へ送金する。しかも團規の嚴肅たる、女團長の同伴なしに外出は許されず、巡業中も、歐羅巴各都市の良家に宿泊せしむる。婦徳はかく堅實に擁護され、收入はこれほど結構な職業に對して、道徳的にしてまた經濟的なるわが大英國民が、いかなる理由の下に躊躇し能ふのであらうか——

その通りである、と親父は考へた。母親は、しかし、娘がさういふ踊子になる一つの資格に缺けてるのに氣附いた。

——うちの娘は金髪ではございません。

紳士は一向平氣な顔で云つた。

——いや、ブロンドにします。

そこで、もう文句はない。

印刷した契約書に署名される。一週間經つて、リリイは（彼女だけが兩親の許を離れることを許された）母親に伴はれてマンチエスター行きの汽車に乘つた。

——グツバイ、モオド！ グツバイ、パパ！

汽笛が鳴る。モオドが泣く。パパのパイプの火が消える。

マンチエスターの二年間は、クリスマス休暇の四日間を除いて、毎日休ない、辛らい稽古に暮れた。體操から、律動から、古典舞踊から、トオ・ダンス——その度に、固い指揮棒が、曲つた腕をめがけて飛んでくる。革の鞭が、伸びない脚へぴしりと鳴る。十四歳の少女の軟かい骨が、飴のやうに細工人の自由に仕上げられた時に、彼女は巴里へ連れられて舞臺へ立つた。兩脚を一文字に擴げる輕業は朝飯前になつたと同時に、酸素劑のおかげで、ブリユネツトが綺麗なブロンドに化けたからである。

一日八十五フラン、彼女は稼ぐのだ。しかし彼女の懷口へ入るのは、たつた五フランである。四十フランが食料其他に差引かれる。後の四十フランが兩親の許へ送られる。

どうしても借金ができる。あの劇しい舞踊を一晩十數回もやるので喉が乾く。レモネードも五杯を越すと、女樂（日本の芝居の男衆に

對するもの）も現金でなければ飲物を持つて來ない。國を出た時の服を何邊もクリイニングにやつて着てゐるが、いくら丈夫な蘇格蘭でも、さうさうは耐らないから、着物も拵へなくてはならない……。

何よりの樂しみは、女團長に連れられて、一週一度、映畫のマチネーへ行くことだ。それきりだ。午前中はいつも稽古、午後にも屢々ある。宿はデュペレ町の「ゼアター・ガールス・ホステル」だ。劇場から歸るのがいつも午前一時半――談話は禁じられ、彼女等は一人一人、修道院のやうな冷たい獨房に寢かされる。

英國人は決して嘘をつかない。規律はリリイの兩親に話された以上に嚴格である。ホステルの屋根裏には、餘りに小さ過ぎるとは云へ、一箇の禮拜堂があつて、牧師がゐて、日曜の朝になると、彼女等が――「裸のレヴュウ」に出演する「ガールス」が、讃美歌を唄ふのである。……エス・ラヴン・オブ・マイ・ソオル……。稽古場のピアノが、莊嚴なるパイプオルガンの代りになる。

しかし、これは滑稽たらうか？

彼女等の生活を淸教徒的に束縛する經營者の目的が何處にあるか、それは前に述べた。鐘紡の溫情主義とかいふものより、これはよつぽど、巧緻で冷酷なトリックである。かくして少女は、十年近く少女であり得る。無用な脂肪は、舞臺の運動を妨げ、それから觀客の好色を妨げる。

しかしそれは英國の「ガールス」のことである。

亞米利加の「ガールス」は――例へばホフマン・ガールスの如きは、甚だ自由に、勇敢に生活してゐる。給料も二百ドル、英國ガールスの倍額である。さうして、全部が自分の收入となり、その上、キャバレでも、贔負客の家へでも、出入自由だから、彼女等の蟇口をさらに膨脹せしむることができる。年齡も乙女子の夢なぞは、とつくの昔に見忘れたのが多い。

さてリリイの話だが、簡單に端折ると、その後何年經つても、彼女は英國に歸る機會がなかつた。ことに一團が大西洋の對岸に渡つてから、手紙すら間が遠くなつた。

或晩、ドンカスターの貧しい一家が、夕飯を濟ましたところへ、赤い五セントの切手を貼つた封書が屆いた。

「……あたしはミセス・ジェームス・レーノルドと名乘ることになりました。懷しきママよ、パパよ、モオドよ……もう一度皆さまのお顏を見る日を、あたしは祈つてはゐますけれど……」

手紙のなかから、見知らぬ男の寫眞が一枚轉りだした。大道具方か、電氣係りか、とにかくそんな風采をした男だつた。

脫衣のマネキン

Femme Nue と云ふ字を、畫家は「裸婦」と讀み、普通一般はハダカの女と讀むが、ミュジック・ホールの中では、女優の種類の一つとして、職業的な名稱となる。

それは、「ガールス」だつて、歌手だつて、裸體に近い扮裝をするに相違ない。けれども、同時に彼女は踊り、もしくは歌ふのだ。が踊りもしなければ、歌ひもしないで、ただ無衣にして舞臺を徘徊する商賈が、"Femme Nue" である。必ずしも衣裳を着けずに登場するとは限らず、部分的に羽毛や、寶石を鏤めた衣で飾る場合があるにしても、結局、彼女等の職業は、肉體をエキスポオズすることで終る。いやに悠揚と歩いたり、意味不明瞭な微笑を湛へたりすることを、藝の一つとするならば、それが彼女等の藝の全部である。つまるところ、脱衣のマネキンである。

女なら誰にでもできる商賈——尤も、美しい胸と、美しい腹と、美しい脚と、それから少しばかりの勇氣を必要とするが、そんなものなら、多くの「素人」が持合せてゐる。

だから、現代のミユジツク・ホールで、「ガールス」に匹敵して重要な地位を占める Femme Nue は、まづ女であり、さうして少しばかりの條件を持つてゐれば、誰にでも出來る商賣である、といふことを繰返して云ふ。

或日、フオリ・ベエルジエエル座の舞臺監督、フレジヨオル氏のところへ、若い女が訪ねてきた。樂屋などへ出入する性の女ではなかつた。安物の地味な外套の襟に、剝げた毛皮が縫ひつけてあつた。

女優志願者の數は餘りに多い。大抵、樂屋番の手で追拂はれる。しかしその女は厚い書狀の封書を携へ、風體も女優志願者らしい處が少しもなかつたから、首尾よくフレジヨオル氏の前へ通されたのである。

——どこの使ひだね？　封筒に名が書いてないが。

——使ひではございません。自分の用で上りました。

フレジヨオル氏は、こいつ一杯喰つたと思つたがもう遲かつた。

——あたくし、ミユジツク・ホールへ入りたいと思ひます。

——經驗は？

——まるでありません。

——案内女でもやりたいのですか？

——いいえ、"Femme Nue" をです！

さうして彼女は身の上を語り始めた。

彼女はオオトヴイル街の或るブローカーの店で、タイピストを勤めてゐるのだ。毎月七百五十フラン貰つてる。自分だけでも不足勝なところへ、彼女は母親と、それから祖母まで養はなければならなかつた。一フラン貨を三つに斷つて使つても、七百五十法で足りる道理がなかつた。で、健康で均整のいい肢體に產みつけられたのを幸ひ……。

氣の毒さうに、フレジヨオル氏は、彼女の言葉を遮つた。

——しかし、この劇場で働いても、それよりいい事はないんです。寧ろ悪い……最初は六百五十フランときまつてますから。

——いいえ、あたくしは兩方で働きたいと思ふんです。今の店は此

處から遠くありませんし、毎日六時には退けますし、土曜日のマチネエには、店の方もウイイク・エンドで、半休ですし……。

彼女は拔け目なくすべてを調査してゐた。舞臺監督は身體試驗を承諾する外なかつた。歸りかけに、例のトリックの封書を返されやうとした時、拔目のない女は云つた。

――どうぞそれはお納め下さい。白い紙ばかり澤山入つてをりますけれど、多分、葉卷が二三本紛れ込んでゐるかもしれませんから。

やがて、彼女は望み通り、Femme Nueになつた。晝間はキイを叩き、夜は薔薇色の白粉を全身に塗つた膚を、舞臺に曝した。彼女は屢々、ダリラだとかヘレンだとか、「永遠の女性」に扮した。小說家でない彼女は、それに皮肉を見出さうとしなかつた。彼女はたゞ疲れた。

――エリーズ（彼女の名だつた）！　君は今日何時に起きた？

或時、樂屋でフレヂョオル氏が訊いた。

半年に一度、番組が全部變る。

尨大な演目だから、稽古は終演後に始つて朝の七時頃まで續く。人人はそれから家へ歸つてゆつくり寢に就く。しかしエリイズは――彼女の店は九時に始るのだ。劇場を出て角の小キヤフエで、三日月麵麭に珈琲一杯を立飮みして、オオトヴイル街へ急がねばならない。

――あたくしまだ起きませんの。

彼女は微笑して舞臺監督に答へた。これは甚だ論理的である。起きるためには、まづ寢なければならない。

タイピストばかりではない。

お針子がゐた。

家政婦がゐた。

いづれも、日中の數時間を、ブルヂョアの家で働いてゐた。

ナヂアと云ふ藝名の女は、醫科大學の聽講生だつた。貧しい田舍の兩親から送つてくる學費では、到底研究が續けられないので、斷然着物を脫ぐことにしたのである。しかし晝間は、白いブルースを着て、顯微鏡を覗いてる。

ピルウと云ふ女は職工だつた。彼女もナヂアに負けない向上心があつたので、安い圖案の下請けをやる段に、舞臺衣裳のデッサンを研究した。ミスタンゲットが、二三枚、それを買つてくれた。衣裳考案家として認められる日がくれば、彼女は人に衣を着せると同時に、自身も着物を脫がずに濟むやうになるだらう。

"Femme Nue" を兼業する女で、一番多いのは、なんと云つてもモデルである。晝間は畫室、夜は舞臺といふだけで、別に體の使分けをするに當らないからだ。

なぜ "Femme Nue" は兼業の女が多いか？

どんな階級の女でもできる仕事だといふのも、理由の一つだが、そもそも、"Femme Nue" の收入が少な過ぎるに依るのだ。

幸ひに兼業を持つてゐる女はいいが、さうでない女達──専門の"Femme Nue"の運命は惨めである。

楽屋で、一塊のパンと一個の蜜柑──それが彼女等の晩食である。それで彼女等は、七時頃から夜半まで、十四五回も舞臺へ現れ、階段を降りたり登つたりしなければならない。

或る土曜の夜、大入りで沸き返へるやうな觀客席の景氣が、舞臺裏まで流れてきた。番組はちやうど、「最後の呼物」にかかる處まで進んでゐた。全員總出動、大道具大仕掛──開幕直ちに觀客の眼を奪ふべく、すべての"Femme Nue"が薔薇色の肌で、高い銀のテラスを埋めてゐた。

──いいか？

舞臺監督は、鋭く舞臺を睨め廻した。舞臺主任が、手を揚げてそれに答へた。

──始めた！

忽ち急調なオオケストラの渦が巻いて、猩々緋の天鵞絨幕が、兩側に絞り上げられた。目の覺めるやうな舞臺に湧き立つた觀客の動揺が、次第に鎭まると、後は約束通りの演伎が進行してゆくばかりである。一人の道具方は安心して、溜りの方へ行くために、背を屈めながら、道具の裏を通り抜けやうとした。

その時、彼の頭の上へ、重たい物が降つてきた。それは一人の"Femme Nue"だつた。

──おめえ、滑つたな。早く、早く、舞臺へ登つた。！

道具方は彼女を援け起さうとした。彼女は長く體を延したまま、返事をしなかつた。裸の胸が高い浪を打つてゐた。全身に塗つた白粉に、冷たい汗の玉が結んでゐた。

直ちに、道具方は彼女を樂屋へ抱へて行つた。女衆が濡タオルを持つてきた。彼女は頭を低くして寢かされた。二三分經つと、彼女は眼を開いた。

──濟みません。もういいんです。

彼女は羞しさうに、強いて微笑んで、起上らうとした。

──お待ちよ。

親切な女衆は、もう一度彼女を寢かしてから訊ねた。

──お前さん、今日は樂屋で御飯を喰べなかつたね？

──ええ。シャルチエ（例へば本郷バーと云ふやうに、巴里の各區にある安飯屋）で濟ませてきました。

──ほんとかい？

彼女は答へなかつた。女衆は默つて十フランの紙幣を、彼女の手に握らせた。

見る見る、彼女の顔が歪んだ。涙が堤を切つた。嗚咽に崩れた聲で、彼女は云つた。

──これで、二日間、何にも喰べずにゐるんです！

しかし、以上は、健氣なる彼女等の話である。もつと上層へ浮び出やうと、努力を失はない者や、既に良人を持つてゐる者に限つた話である。絶望した彼女等、或は蓮葉な彼女等が辿る路は、ただ一つしか殘されてゐない。

ミユジツク・ホールの團つてゐる場所は、同時に、キヤフエ、スウペ、キヤバレ、ランデヴウ・ホテルの充滿したモンマルトルだ。劇場がハネてから、彼女等の一番手短かな副業を始るに便利である。それはタイプライターを叩くよりも、多い收入かもしれない。けれども、"Femme Nue" の唯一の資本たる美しき肉體は、程なく、黒く萎んでしまふであらう。

ヴランシアの話

齢の頃は二十五六か、それとも三十に手が届くか——ともかく厚化粧で、ごく小柄で、遠目には「乙女子の夢こそいかに」と、ミユツセに靈感を考へさうな女。

藝名をヴランシアと云ふ。彼女が中部佛蘭西のヴランスから巴里へ來たのが、ちやうどミスタンゲツトが例の「ヴランシア」で大當りをとつてゐた頃で、そこで、さう名付けた。

彼女はラウルと云ふ貧弱なレヴユウ團に出てゐた。場末から旅廻りばかりしてゐる一團だが、それでも、ポスターには麗々しく "Raioll's girls." と英語で勿體をつけてゐた。憫むべきガールス達は、踊る以外に、唄も歌ひ、芝居もさせられ、終演まで「出ずつぱり」だと云ふ……それに似たレヴユウが、淺草の何處かにある筈だ。

ヴランシアは五人のガールスの一人で、巴里なら日給十二フラン、地方巡業には二十四フラン貰つてゐる。とにかく喰つてゆけるのが不思議なくらいな收入である。しかもこの種のレヴユウ團は無數に存在してゐるから、ヴランシアの境遇は、大ミユジツク・ホールの女優達よりも、遙かに一般的である。

舞臺の落伍者の群が集るキヤフエ・バチフオルの一隅で、彼女は産れ落ちてから運命づけられた、生活の軌道に就て語る。

——父親、砲彈工場の勞働者、變死。母親、貸間を始める。彼女、葡萄園と桑園の勞働から、町のキヤフエに移される。田舍町のキヤフエでは、客に盃を勸め、自分の盃を強請り、然る後客の隣に腰かけて散語の義務ある事、恰も東京の如し。そもそもこれが、他人の歡樂のために奉仕する生涯の第一步。

巴里へ出る。モンマルトルのナイト・ボツクスの接待女。午後四時から七時、夜十時から午前三時、客に酒を飲ませ、客と共に踊る。日給二十フラン、其他チツプ。しかし毎週、新しい衣服に替へねばならない。プラデイ横丁へ行くと一着百五十フランのロオブがあるにしても、絶へず出錢に脅かされる。客の酒の飲方が足りないと、主人が文句を云ふし、澤山飲ませれば、客はチツプを倹約する。結局、永居

のできる所だつたかつた。

——そこで、あたしは始めて、舞臺へ足を踏入れましたの。

さう云つて、ヴランシアはちよいと顔を赤くした。舞臺と云ふ言葉が、少し大袈裟だつたからだらう。

——「グリプト」と云ふ、地下室の寄席でした。道具も衣裳も、申訳のやうに簡單なレヴュウでしたけれど、歌詞だけは途法もなく卑猥なのを歌はされました。それもいいとして、我慢のできないのは「幕間」です。普通なら、その間に樂屋でレモネードでも飲んで一息入れるところを、其處の女優さんは、舞臺衣裳のまま場内キャフェへ現れて、見物の酒やダンスのお對手をしなければならないんです。それでお給金はと云ふと、一日十三フラン！……。しかも、お客に愛嬌が足りないと云つて、ぢきにそこを追出されました。

——あたしの手提のなかに五フランも殘らなくなりました。たうたう思切つて、俳優桂庵の手で、四五人の仲間と一緒に、巴里から三時間ばかり汽車に乘つて、コムピエニュの寄席へ買はれて行きました。

着いたのは夕方の六時でした。なんといふ寄席でせう——野天なんです。野天に小さな舞臺を組んで、照明はアリセチン瓦斯なんです。

「さあさあ、姐さん達、兵隊さんがお待兼ねだよ。」青いエプロンのお内儀さんが、あたし達の顔をみると、すぐさう云ひました。なんの事はない、田舍のキャフェの裏庭へ舞臺を拵へて、それでキャバレの積りなんです。キャフェのなかには、ぐでぐでに醉拂つた輕騎兵や龍騎兵たちが、到底巴里では見られない狂態を見せてゐました。あたし達は舞臺へ登る前に、酒場へ通されました。

それから後の事は、とてもお話にはなりません。あたしが命からがら停車場まで落延びた時には、一張羅のロオヴはびりびりに引裂かれ、裸の腕には方々に火傷してゐました。——兵隊さんの咬へてゐる卷烟草からなんです。

——いつそ堅氣の職業に變らうかと、何度思つたか知れません。けれども、いざその機會が來てみると、あたしは自分の決心の遲過ぎたのを悔むばかりでした。小娘の時からキャフェで働かされたあたしは、神のお思召しでせうか、他の社會へ出てゆく路を知りませんでした。結局、あたしはいつも俳優桂庵の軒を潛りました。

——日給二十四フランの旅興行へ出ると、あたし達下廻り女優は三人で一つの寢臺に寢かされます。或年の巡業に、あたしはシュジイといふ十七になる踊子と、窓が一つもないひどい部屋を宛がはれました。シュジイは其晩、芝居の後で曉の三時まで、町のカジノで踊つて歸つてきました。

あたしは彼女の鋭い叫聲で、目を覺しました。彼女は下腹を押へて、寢臺の上で藻搔いてゐました。傍に寢てゐたあたしを、仇敵のやうに蹴飛しました。

みんなが起きて、自動車で、十キロも離れた施療病院に、彼女を擔びました。十七歳のシュジイの急病は——流産なのでした。

──あたしも旅で患ひました。いゝえ、流産ではありません。腹膜炎でした。遠いアルゼリアの旅興行の時でした。始めから、評判のよくない興行師なのを、承知で出たのですが、あたしを施療病院へ捨てたまゝ、劇團は本國へ歸つてしまひました。熱帯の病院で、あたしは三月の間、生死の境を彷徨ひました。漸く癒つて病院の門を出た時、あたしは二十フランの金と、どんな寛容な興行主でも雇つてくれはしない容貌としか、持つてゐませんでした。尼さんがあたしを救つてくれました。あたしは修道院で、雜巾の緣縫ひをして、本國へ歸る旅費を少し宛溜めました。

──困つてるのは、あたし達ばかりではありません。

以前、オラムピア座に、露西亜の合唱團が來ました。一座は、舊モスコオ市長だとか、B伯爵夫人とか、M大佐とか、帝政時代に榮へた人達ばかりでしたが、乘込みの日に、オラムピア座の支配人のフランクさんの顏を見ると、眞先きに彼等の口から出たのは、「何か喰はしてくれ」といふ言葉でした。さうして、一座のなかに、ミシエル・トルストイといふ人がゐたので、フランクさんが、「あなたは大トルストイと何か關係があるのか」と訊くと、「僕のパパです」と返事をなさいました──その襤褸服を着た、髮の長い人が。

──現に、あたしが「ラウル」一座から貰つてる給料は日給十二フラン、一月にして三百六十フランです。今の巴里で、どんな汚ない屋根裏の部屋でも、月百五十フラン以下ではありません。食費も、われわれの仲間はみんな寢坊で、一日二食にしますが、それでも日に七フラン、月二百十フランかかつて、それだけで、三百六十フランは消へる勘定です。衣服は安い巾を買つてきて自分で縫ひますが、靴下は、地下鐵は、遲刻罰金はどうします？……。ですから、あたし達は自分で部屋を借りない工夫をします。自分で晩飯の金を拂はない手段を考へます。つまり、少くとも、一人のアミを持つことです……。

──ミスタンゲットが一晩一萬フラン貰つてることも知つてゐます。けれども、あたし達には、まるで支那革命のニユースのやうに、遠い世界の出來事にしか響きません。あんな大花形はさておき、同じ下廻り女優の仲間でも、フオリ・ベルヂエエル座や、パラア ス座へ行けば、一日二十五フランは稼ぎます。仕事はあたし達より、ずつと樂です。しかし、あたしの胸と、あたしの脚は、さういふ舞臺で、通用しないのだから仕方がありません……。

──なぜ、こんなミゼラアブルな生活を、廢めないのかと仰有るんですか？ でも、あなたは幕開きを待つて、道具の蔭で、舞踊靴の尖がむづむづする氣持を、御存じありません。一晩に八度も衣裳を變へて（自分の衣服は一着しかなくても）脚光の前へ立つ氣持を御存じありません。最終演目の幕が降りる刹那に、雷のやうな喝采を聞く氣持を、御存じありません。

──なんと云つても、悪い職業ではございませんわ！（終）

以上主として、ルイ・ルボオ著「ミユジック・ホール」に依る。

資本閥の勞働組合法壓殺運動に就いて

赤松克麿

一

政府が勞働組合法案を愈々議會に提出しやうとする態度を示すとき、工業クラブが音頭を取り、各資本家團體が躍起となつて妨害運動を試みることは、今まに始まつたことではないが、最近起つたのは從來より積極的であり必死的であるやうに感ずる。現在の資本主義は暗憺たる不景氣の深淵に陷り、これから脫出しやうとして死物狂ひに藻掻いて居るが、その脫出方法として案出されたのが產業合理化である。ところで產業合理化は利潤の維持若くは增加を目標とする資本家的合理化であつて、資本の集中化により資本閥の獨占的統制力を强化するものである。故に資本家階級の立場からいへば產業合理化の進行過程に於いて、產業民主主義的要素である勞働組合が法律的に確立することは、資本家の獨裁的統制力を鈍化するものであるから、資本主義の行き詰り的窮境を脫却しやうとする彼等の決死的努力が、產業合理化强行の必要條件として、勞働組合法案を一蹴せんとする態度に出てきたことは一個の必然的現象と見ることが出來る。

資本主義が重大な行き詰りに直面して居るだけそれだけ資本閥の攻勢は强烈であり必死的である。そしてまた彼等の內務省案に反對する論據も非常識であり血迷つて居る。我々は勞働階級の立場から內務省案に對してすら多くの不滿を見出し、これに對する修正意見を持つて居るものであるが、資本閥がこの案を以つて「歐米にもその類を見ざる急激な階級的法案であつて、あのまゝでは日本の產業を危殆に導くばかりでなく、勞働者にも決して利益をもたらすものでない」と反對して居るのは、誇張と偏見と利己主義とを遺憾なく露出して居る。

二

わたくしは資本閥の意見が誇張と偏見と利己主義に滿ちて居ることを明かにするために、彼等が內務省案に對して反動的修正を要求して居る二三の中心論點に就いて批評を加へる。

（一）、法案第一條に於いて勞働組合の定義が「勞働條件の維持改善を目的とする勞働者の團體又は聯合體をいふ」となつて居るのに對し、彼等は勞働組合の組織構成が職業別にも產業別にもなつて居ないから不可であると

いふ。彼等としては勞働組合の組織構成を「同一又は類似の職業又は産業の勞働者の團體」としたいのである。この意見は若槻内閣時代の政府案と同一であつて、今日の勞働組合の自然的發達過程を無視するものである。小規模産業の夥しく存在する我國の産業界に於いて、異種の勞働者群から成る單一組合、即ち合同勞働組合と稱するものが發生し、それが可成りの勢力をなしつゝあることは當然であつて、我國の勞働組合法がこの合同勞働組合を法認することは妥當であり必要である。資本閥が現に發達しつゝあるこの種の組合を公認させまいとするのは、故意に勞働運動の勢力分散を企つるものに外ならぬ。

（二）、法案第十條に於いて、たとひ勞働者にあらざるものといへども一組合の役員又は役員たりしもの、勞働者たりしもの、總會の決議により加入を許されたるもの」は組合員となることが出來る旨を規定して居るのに對して、彼等の反對意見は、それでは職業的勞働ブローカーが混入する恐れがあり、また未成年者や婦人が加入するからいけないといふのである。若し彼等の要求通りの勞働組合法が制定されるとすれば、どんなことになるかといへば、今日の各勞働組合の有給幹部は勞働者出身たると知識階級出身たるを問はず殆んど組合から除外されることになる。資本閥の眼から見れば、現在勞働運動に專心しつゝある有給幹部は即ち職業的勞働ブローカーなのである。そこでこれらのブローカーを排除して、現業勞働者だけの組合をつくらうといふのが彼等の魂膽である。多くの優秀なるリーダーを職業的ブローカーの名の下に放逐してしまつて、一體あとにどんな組合が殘るのか。羊群の如き御用組合をつくらんとする彼等の腹が見え透いて居るではないか。また未成年者や婦人の加入を許さないといふ偏見に至つては、眞面目になつて相手が出來ない。

三

（三）、法案第十二條に於いて、「雇傭者は勞働者が勞働組合の組合員たるの故を以てこれを解雇することを得ず、雇傭者は勞働者が勞働組合に加入せざること、または組合より脱退することを雇傭條件となすことを得ず」としてあるのは、組合員の地位を法律的に保障する規定であるが、彼等はこれを以つて個人の契約を無視し、組合員たる一部勞働者の保護のため事業統制を困難ならしめるものとして反對して居る。

抑々この規定は勞働者團結權を保護するものであるが、團結權保護には消極積極の二方面がある。消極方面は即ちこの第十二條の規定であつて、雇主の勞働組合破壞を防衞するものである。積極的方面は團體協約權の法認を意味する。團體協約權は勞働組合の基本權利の一つであつて、勞働組合は雇主との完全なる團體協約によつてのみ、不利益なる強制的雇傭條件を防止し得るのである。大正十四年發表の社會局案にはこれを規定したが、大正十五年議會に提出されて若槻内閣案にはこれを削除した。今回の内務省案はまたこれを削除して、たゞ消極的方面だけを規定したの

である。我々はこの點について內務省案に多大の不滿を持つものである。

しかるに資本閥の意見によれば、勞働組合の基本的權利たる團結權を消極的にも積極的にも一切否認しやうといふ譯である、實に驚き入つたる勇敢振りである。彼等は契約の自由を無視するといふが、勞働組合の存在が、資本家のための契約の自由即ち强者たる資本家と弱者たる勞働者との强制的契約の自由を制肘し、以て公平なる勞働契約の締結を促進するものであることは當然であり、こゝに勞働組合法制定の意義も存するのだ。故にこの規定を否認することは、勞働組合法そのものを否認することであつて、組合法制定に關して何等の發言權なきものである。彼等が歐米にもその類を見ざる急激な法案と云つて居るのは事實に對する無智かしからずんば欺瞞である。

歐米に於いて斯くの如き規定が殆んどないといふが、それは外國と我國との社會事情を混同した短見である。例へば勞働組合の母國なるイギリスに於ては、組合員の雇傭解雇に關して何等雇主及び勞働者の自由を制限する法律は殊更にはないけれども、彼の國にあつては自由主義の發達を經過したことによつて、勞働組合は事實として順潮な發達を遂げ、それが慣行として承認されて居るから、殊更に勞働組合員の地位を法律的に保護するやうな必要がないのだ。しかるに我國にあつては、自由主義の發達が不完全であるために、事實として勞働組合の發達が著しく妨げられて居る。現に勞働組合員たるの故を以て頻々として解雇者を出しつゝあるではないか。それだから我國現下の社會狀勢に於いて、勞働組合を公認するからには、勞働者團結權保護の規定は絕對に必要である。若しこれを削除するならば、それは正しい勞働組合法にあらずして御用組合法である。

四

（四）、同案第十三條は勞働爭議による勞働組合の損害賠償責任を免除する規定である。これは英國勞働運動史上に有名なタフベール事件以來、各國の立法例に於て認めた所であつて、若し勞働組合が勞働爭議によつて生ぜしめた損害を賠償することになれば、組合の罷業權が否認され、その結果組合の鬪爭機能を奪ふことになるが故である。これに對して彼等は爭議及び手段に關し嚴重なる制限を附せんとするものであつて、事實に於いて罷業權を骨拔きにしやうとする意見である。換言すれば勞働組合をして牙を拔かれた黃色組合化しやうとする意見である。實に勝手なことを云ひ出すものである。

（五）、同法案の第十七條は、勞働組合の行爲が安寧秩序を亂るときは、主務大臣は勞働組合の解散を命ずることが出來るといふ取締規定であるが、我々はこの規定を不當なりとし、「勞働組合は司法裁判所の判決を經るにあらざれば解散さるゝことなし」といふ修正意見を持つて居る。しかるに資本閥はこの取締規定を以て甚だ微溫的なりとし、更に苛酷なる取締規定を要求して居る。

以上批評し來つた所によつて明かなる如く、今回の資本閥の示威運動は、勞働階級に對する挑戰である。これに對する我々の態度は次に示す社會民衆黨及び日本大衆黨の共同聲明書によつて宣明されて居る。

共同聲明書

金解禁、産業合理化等によつて過酷なる負擔を勞働階級に強要しつゝある我國資本家階級は今又その中堅勢力たる工業クラブ、經濟聯盟、商工會議所等を動員して、無産大衆が熱望する勞働組合法の生誕を壓殺せんとしつゝある。かくの如きは勞働階級に對する露骨なる資本主義的挑戰であつて我等の斷じて許すべからざる暴擧なりと認む。勞働組合の制度は時代の大勢であり、勞働階級の基本的生存權にして、これを妨止せんとするが如きは勞働階級の生存權を根底より覆さんとするものである。こゝに於て我國資本家階級の中樞たる工業クラブその他の資本家團體に對し、一切の無産階級的勢力を動員して決死的戰ひを敢行せんとするものである。而して我等は一方において政府が資本家團體の盲動に動かさるゝ事なき樣嚴重監視し、もつてあくまで先に我等が議會に提出したる勞働組合法案の獲得に向つて邁進せんとするものである。

政局閑談

阿部眞之助

土佐にたゝきといふ、特有の料理法があつて、これを無上の珍味としてある。生鰹をおよそ二寸角に切つて、藁火に投げこみ、半焼け半なまの儘を、にら若しくはにんにくを添へて食べる。日に青葉、いきのいゝやつを、刺身にする、江戸前のに比べて、頗る野蠻で、頗る胸くその悪い代物だが、土佐人にいはせると、ビフテキのビフテキたる所以は、半焼け半なまたるにあり、この味を解せざるものは、以て天下の珍味を語るに足らないさうだから、物凄いわけのものである。このたゝきでたゝき上げた濱口さんを、首班に戴くせいかも知れないが、現内閣のやり口、とかく半熟主義に傾き易い。官吏の減俸とり止めなぞもその著しい一例だつた。去年の秋、濱口さんが、東京の各新聞最高幹部を、星ケ岡茶寮に招待した。その席上減俸の一件をほのめかすと、その中の一人が、それは誠に結構な方針で御座る、われわれも大に聲援して、この國家の大事を決行せしめねばならぬと、お追從口をきいたを眞に受けて、輿論の後援われにありと感違ひした。一體最高幹部なんてものは、新聞社に限らず、お追從もの ゝ多いことは、先刻御存知の筈だつたが、魔がさしたものか、その點ついうつかりしてゐたものらしい。のみならず最高幹部は、月給を出す方で、貰ふ方の側ではなかつた。出す側なら、一錢でも少ない方に賛成する。さて卒然減俸決行に決定して、いよ〳〵發表の段になると、官廳詰の記者連が口を揃へて反對したら、鈴木書記官長の曰くには、君等ペイペイがいくら反對しても、幹部はみな賛成だ、あすの新聞は、筆を揃へて、政府を禮讃するだらうと。ところがあすの新聞は、申し合せたやうに政府を罵倒する有様なので、十日もたゝぬうち取止めとなつた。これは君子の蝕だなぞと稱められたが、政府に斷行力のないこと、半焼け半なまなることの信證を、國民に與へたことは爭はれない。そしてその後政府の爲すところ、概ね半焼けなることの事實が證められた。

◇

臨時議會が終つたら、濱口首相は、亡兄の墓參を兼ね、久し振りに故郷へ錦を飾る豫定だつた。お國自慢、例のたゝきやヨサコイ節は別として、新らしいところで大關玉錦、水泳のレコードを造つた何とやら選手、わけてもライオン宰相に至つては殆んど神樣扱ひである。こ

の間もお國の一關が、首相官邸に押しかけてきて、早慶野球戰の切符の世話を申し込み、苟もわが濱口さんのお聲がゝりであれば……なぞと、玄關子を手古摺らして居たとやら、思ふに濱口さんのお國入りは、一世一代のはれの場面に相違ないが、五月も半ばをすぎ、末になり、そして六月に入り、交番の巡査が、白黒の制服をつけるやうになり、土佐では鰹か、ピン〱はねてゐても、濱口さんのお御輿はなかなか上りさうもない。譯を聞けば、だん〱軍縮の祟りのことが判明して來た。御存知の通り、臨時議會の論議の大半は、軍縮條約そのものよりも、軍令部を無視したといふ、統帥權の問題に費やされた。濱口首相は、假りにも海軍大臣事務管掌である、その立場からは、最も軍令部と切實な交渉をなし得る地位にあるにも拘らず、例の生理的の弱さから來る無性さも手傳つたらうが、最後のどんづまりになるまで、軍令部長と一回の會見すらしなかつたとは、憲法第十二條の解決が何うあらうと、甚だしい手落ちであつたことは疑はれない。と云へば政府は、財部全權がロンドンから、外務省へ寄せて來た密電なるものを、秘かに、精神に於ては公然と、見せびらかして、これは何うだと、お出でなさるだらう。この密電は、ある新聞が素つ破拔いたといふよりは、政府が進んで素つ破拔かした通り、請訓案の內容は、軍令部に見せないでくれ、見せれば必ず反對が起つて、事が紛糾するといふ意味の電文であつた。既に海軍大臣たる財部氏にして、この意見なら、政府は進んで軍令部と、面倒臭い交渉を重ねる必要はないはずである。然るに財部海相の歸朝後、雲行は妙にこぢれて來た。非公式ながら開かれた、海軍側の軍事參議官の會合では、條約上常備兵額を定める場合には、軍令部の同意を必要とする旨を決定した。これを具體的に云ひ換へれば、政府はロンドン條約に於て、日本の保有すべき、軍艦の總額及びその內容の個々の場合に於ける、保有量を決定したが、これは軍令部の承諾なく行つたものである、違法である。違法でないものでも從來の慣例を無視した、越權の沙汰であるといふのだ。財部海相は、この決定に贊意を表し、かつ大將財部と、海相財部と二重人格の使ひわけをしないと、御叮嚀にも斷りまで云つてゐる。果してその通りならば、外務省へよせて來た、あの密電なるものは、僞電ではないかとの疑も起る。僞電でなければ財部海相の態度が、その場限りで猫の目のやうに變るものとしか思はれない。筆者が財部海相の歸朝前、ある席で濱口首相と逢つた時、首相は、歸つて來られたら、財部君の立場は苦しいだらうと語つてゐたが、立場の苦しいは財部君ばかりではない、濱口總理がいゝふる鄉へ飾るべき、錦の衣にほころびの見ゆるを如何せんやだ。

◇

人に頭のいゝ悪いはあるが、財部海相に至つては、常識を超越して、神韻ひやうびようたるものがある。凡そものごとの矛盾とか、撞着とかは、彼の理性に於ては見出されないやうである。この意味に於て彼は神に近い。どうした物の間違ひか、軍縮會議の招待が來たとき、彼

は全權として、ロンドンで一花咲かすべく思ひ立つた。彼を知る限りのものは、彼の爲めに、而して國のために苦々しく考へたが、とにも角にも、全權ときまつた時、彼は得意の絶頂にあるかの如く思はれた。そして出發前、各派政黨の代表者を、海相官邸に招待して、その抱負を述べ立てたものである。對英米總額七割、大巡七割、潜艦現有勢力、これは我海軍の確乎不動の三大原則であると、熱心に且つ昂奮してさへ主張した。その時ある政友會員から質問が起つた。すべて國際會議は、相互の妥協交讓によつて成果が收めらるゝのであるが、頭から一文の割引なき切札を出さるゝは如何なことで御座るか。海相これに答へていふやう、掛け引きのなきは、我國の國際信義に厚い證左であつて、我國の信義が認められない場合は、その時の覺悟がある。苟も招待を受けて、その席に參列しないのは、交際上失禮に當りますからなと、この瞬間、政友會の一領袖が、間者に眼くばせをして、次の質問を打ち切らした。反對黨にしては、貴重の言質を財部全權の口から聽取し得たのを滿足したのである。財部全權の口吻によれば、三大原則が認められなかつた場合、旗を捲いて引き揚げる、即ち會議決裂を賭するものに外ならない。かくして此招待會は、極めて不穩裡に散會したのであるが、後彼は幕僚の一人に、反對黨も我誠意を認めて、一言半句の詰問的質問すらも出なかつたと、得意然として物語つたさうである、何ぞ知らん反對黨は、その言質を楯に、時こそ來れ、目にもの見せんとたくらんで居たのではないか。こんな調子だから、ロンドンの全權會議の席上、マクドナルドの私案として英米十八對日十二の提案を聞くや、その隻數であるか、噸數であるかを確め、ず、卒然立ち上つて賛成の陳述をし、これが後に大なる祟りをしたとさへ傳へられるのである。かやうないざこざは別として、彼が愛妻をロンドンまで帶同したこと、これが妙に日本武士の傳統に反することから、海軍部內の反感を挑發したことは爭はれない。筆者の如きは、妻君を携帶しやうがしまいが問題にはならぬと考へるのであるが、武人は左樣ではない。芝居に出る熊谷直實の如く、敷居をまたげば家を忘れ、境を出れば國を忘るでなくてはならないものださうである。とに角、軍縮に對する不滿と、かうした惡感情が手傳つて、海軍部內の若き士官達の頭を刺激したことは夥しい。先達汽車中で切腹した、全權隨員の草刈少佐の如きも、政府側では、神經衰弱の結果と、こともなげに發表してゐるが、大阪驛に於ける全權の歡迎振りを見て、生きて東京驛を見るに堪えず、死を以て國民に警告したものとも傳へられ、何れにせよ、軍人連の憤慨振りは一通りではない。これは極祕に附せられてゐる話ださうであるが、海軍の某隊の若き士官連が、數名本省にやつて來て、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。本省でも捨て置けず、某隊長に宛てゝ、あゝいふ亂暴者をよこすとは怪しからぬと、詰責的の通牒を發したところ、その返事に、左樣なものを特に本省に派遣した覺えはないが、左樣なものゝ出るやうな教育は平素當方に於てやつてゐる、小官の部

下には一人の腰抜けなしと、劍もほろゝの挨拶に本省側でも、こゝ許泣き寢入りの姿となつてゐるといふ風說さへある位で、加藤軍令部長の辭職說は、當然あり得ることゝして、海軍部內だけの空氣から云へば、財部海相の辭職がそれより前にあつて然るべき狀態だ。海相としても、恐らく地位に戀々たるものではなからうが、對政府の關係において、何ういふ行き掛りがあるか、傍からは危なつかしくて、見て居られぬが、御當人は得な生れつきだから、存外平氣で居られるのかも知れない。

◇

財部海相のとばしりを受けて、損な立場に置かれたのが山梨次官等、海軍省の首腦部で軍令部側の鼻息の荒いに似合はず、あつちを向いては御尤も、こつちを向いては御尤もと御尤もの百萬遍を唱へながら、一體何が御尤もだと反問されゝば、その邊のところは、萬事小生等の胸中御察しが願ひたいと、泣き笑ひに誤魔化してゐる有樣、海軍中將山梨勝之進と名だけきけば、何うやら古武士の面影あり威風堂々たる偉丈夫と思はれやうが、、、。いつかの日曜にも、飄然として熱海に遊んだはいゝが、どこの宿屋でも門前拂ひを食ひ、町役場へ泣き込んで、やつと身分を證明して貰つた程の人、それで居て、いやに腰がひくゝ、必ず相手のした手に組む。そこが彼の仲々食へない一筋繩では行かぬ人間なることを思はせる。彼なればこそこの苦境に處して、隱忍し居たのであらうが、問題は自然の推移に放任すれば、思ひもよらぬ暗礁に乘り上ぐる處がある。話は少し逆戻りをして、さて海相は、この難局を如何に處理しやうとするのであるか。今となつては、會議の結果による、國防の缺陷を、他の方法に於て充實することによつて、軍令部側の反感を緩和する以外には、適當の決策は見出せないやうに思はれる。缺陷補充策としては、飛行隊の增設、各種新銳代艦の急造、根據地の設備改善等、數へれば限りはないが、就中飛行機の增設は、問題の中心となつてゐるやうである。政府がこの要求を直ちに承認するならば、恐らくは、曲りなりにも問題は解決する可能性は充分にある。しかし眼界を海軍の一局部からはなして、廣く國內の大勢を見渡せば、そこには底知れぬ不景氣が襲來してゐる。緊縮の時代である。整理の時代である。しかも現內閣は、緊縮整理を以て一枚看板としてゐるのであるから、さやうに易々と海軍の云ひ分のみを通して、自らの大方針を、自ら裏切るを許さない事情がある。政府のいふところによれば、軍縮會議の結果、將來消費さるゝであらうと、想像される六億乃至七億圓の節約を爲し得たのであるが、缺陷補充要求額は現實に三億圓を下るまいと見られてゐるのである。だから政府が軍部の要求を容れゝば、軍縮會議による成果は、悉く海軍に還元する結果となるので、與黨の民政黨あたりが、早くも軍縮剩餘金は、全部減稅に使用せよとの運動を開始したのは、政府に對する掩護射擊と見れば見られる。

◇政府對軍部の關係が、何う進展しやうとも、政府は一方條約の御諮詢奏請を急いでゐる。いや寧ろその時機を窺つてゐる。只今のところでは、條約正文の飜譯整理に、相當の期間を要するだらうから、御諮詢は勿論若槻首席全權歸朝後となるだらうが、先例によれば、この前後に軍事參議官會議が開かれる筈である。この會議の大勢は、さきの海軍側のみの參議官の會合に鑑み殆んど決定してゐると考へられる。統帥權の憲法上の解釋については、陸軍は海軍以上に、より徹底した解釋を取つてゐるからである。陸軍側の主張によれば憲法第十二條は、當然第十一條の統帥權の範圍の及ぶところであつて、政府の專斷を許さないといふにあり、この解釋は軍部の傳統的の解釋であるのみならず、これを外にしても、目の前に陸軍整理の問題が横つてゐる以上、特にこの點を强調しておく必要を認めることであらう。さてかかる過程を辿りつゝ、條約案がいよ〱樞府へ廻附された場合、樞府はこれを好感を以て迎へるか何うか。一口に云へば、樞府對政府の關係は、これまで餘り圓滑であるとは云ひにくかつた。若槻内閣の末年民政黨から叫ばれた樞密院改革の運動は、樞府顧問官の感情を甚だしく害して居たが、濱口内閣が組織されるや、非公式ではあるが、將來樞密院の内情は、斷じて外界に漏曳しないことを誓つて幾分その空氣を緩和したのであつた。しかし機會があれば、政府に對する鬱憤が漏らされる有樣で、さしも二百七十の絶對多數を擁する政府も、樞府ばかりは、手も足も出ぬ鬼門である。近い例が彼の日支關稅條約審議の場合がそれであつた。樞府の老人連にとつては、幣原外相のハイカラ外交が、先天的に虫が好かぬものらしく、「日本の國家を代表する領事の〇〇が〇〇されても、ヘイコラ支那の御機嫌を取り結ぶ腰拔けがあるか」寄るとさわるとこんな話をする空氣の中に、關稅案が諮詢になつたのである。ある朝樞府の某精査委員邸へ某實業家がやつて來て、關稅案の内容はしかく〱ださうだが、如何なものですと質問したが、その時は未だ政府から書類の回附がなかつた。そこで某顧問官まつ赤になつて憤り出し、最後の本會議の席上、政府の不信を責めて、當局大臣を面罵した。幣原外相百方辯疏し、漏曳者は取調べることでお茶を濁したが、結局警告的希望條件つきといふ不面目で、條約案丈けはどうやら通過したのである。後で調べると、漏曳者は斷じてない筈の、某大臣が、實業家を招待した席上、いさゝか得意になり過ぎて、うつかり喋つたことが解つた。いまさら犯人はうちの大臣でとも云ひ兼ねて、表面はまだ取調中になつてゐる。かうした雰圍氣の中に、問題附の軍縮條約案が投げこまれたら、老人連の冠がどつちへ傾くか想像に餘りがある。さればこそ政府でも事態重大と見て、それぞれ緣故を辿り、手わけをして、諒解運動に餘念のない有樣で、上部はいかにも樂觀したやうな太平樂を並べてゐるが、内心はビク〱ものである。樞府側多數の意嚮は、新聞にも時々出てゐる通り、條約を締結する權能は政府にあるだらうが、條約の内容を爲すところの軍備の

問題は、吾々素人では判斷の仕樣もない。結局軍部當局の意見を尊重する外はない。しかるに軍部は、この條約案を以てしては、國防の重責に當ることが出來ぬと言明してゐる以上、吾々は輕々しく、無條件でこの案に賛成することは出來ない。この結果或は内閣が倒れるかも知れない。しかし内閣の起伏の如きは一時のことだが、國防の事は國家永遠の利害休戚に關する大問題だ。更に政府が軍部の意嚮を無視して、かゝる條約を調印するに至つた手續きについて、憲法の解釋を明確にする必要がある。政府は果して、過去の歴史を無視し、現在の制度を蹂躙するに足る、充分なる根據があるか何うか。大體こんな議論で政府を責めつけることであらうが、政府にとつて厄介千萬のことは、議會と違つて、條約締結に至るまでの、一切の書類を提出し、その手續きについて説明する義務があるから、濱口首相の議會に於ける答辯のやうに、答辯の必要を認めない一點張りでは押し通されないことである。世間でも民政系と目されてゐる八代顧問官の如きは、いま病氣で床中に親しんでゐるさうだが、ある大臣の來訪を受けた時、自分は海軍々人として、かゝる案には對絶に賛成出來ぬ、若しこれが通るやうなら この皺腹をかつ割いて、死んで了ふと激語したので、その大臣──多分江木鐵相だつたと記憶する──は手持無沙汰で引き下つた。もつとも八代さんの皺腹は、この前滿洲某重大事件の際も、かつ割く豫定だつたさうだから、よほど澤山の皺腹のストックがないと、供給が需用に追つかない勘定にはなるが……。以上のやうな關係から、萬一樞府が政府を、若しくは軍部が樞府と通じて政府を、倒潰するに至らしめた政治上の問題については、重大なる議論があるであらうが、こゝでは明かにその場合ではないやうだ。

◇

法螺大將が底無し沼にはまつた。だん〱泥の中に埋まつて行く。そこで大將、我腕をもつて、我襟首を摑み、やつと聲をかけるとともに、人馬もろとも沼の外へ引き揚げたといふ話がある。誠に昨今の不景氣といふものは、底無しの沼であつて、深味へ一日一日とはまる許りだ。井上藏相に從へば、七月から景氣が恢復に向つて、輸出は增す、金の流失はとまり、事業界が勃興の機運に到達すると、法螺大將の物語じみた樂觀説を吹聽してゐたが、その口の下から、前の議會で、見積り過大ならずと、屢々言明してゐる實行豫算を、議會閉會後一月足らずで、一割天引をしなければ、收支の辻褄が合はないのを自白せねばならぬ羽目になつた。恥や外聞や負け惜しみを云つてゐられる場合でなくなつたのである。負け惜しみを云へる中は、まだ上の部だつたのである。如何なる内閣も、不景氣が直接の原因では倒れない。短刀で咽喉を突いて死ねば、それは自殺といふが、不養生で肺病になり、ぶら〱病んで死ねば、同じ道理でも自殺とは云はない。自殺であらうがなからうが、この儘で行けば、先づ壽命はそんなに長くないと見るが當然である。誰がこんなに惡くしたか、内閣からすれば、それは政友會の放漫政策であるといひたいところだらうが、假り

にも天下の輿望を負ふて、難局處理の任に當つた以上、それ丈けの確信がなければならぬ筈だ。何でもかでも責任を前内閣におつつけるなら、責任内閣といふものが存在する根據がなくなる。またそんなひよろ腰をもつて國家の大事に任ぜらるべきわけはない。二三日前政府は主なる實業家を招待したから、さては何か起死回生の策でも授けると思つたら、開き直つて御名案は御座らぬかには、實業家も驚いたが、世間も驚いた。一體不景氣で儲けるものは、賣りに向つた株屋位のもの、國民一樣に樂はないが、同じ苦しむにも程度は差ふ。金のあるのは、非常に儲かつたものが少しく儲かり、少しく儲かつたものが儲からなくなり、儲からぬものが損をするやうになれば、事業を縮少するなり、整理をすれば何うにかやつて行けやうが、最後の馬鹿を背負込むもの、それは勞働者か下層階級だ。彼等にとつては、儲けの有無よりは生き死にの境涯であるからだ。とにかく資本家が儲からなくなれば、失業者は必然的に増加する。失業者の増加は、食ふや食はず人種の増加だ。渇しても盜泉を飮まずは士の道德だが、士の心を以て、大衆の心は律しられない。もろ〳〵の社會惡は、この處から釀成されるのだ。日日の社會面を賑はしてゐる、親子心中、貰ひ兒殺しの續出は抑々何を物語つてゐるか。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、の何のと、血眼になつてさわぎ出すが、人間の五人や十人、束になつて死んでも政府の神經はさ程刺激されないものと見える。、、、、、、一時的の現象だが、目に見えぬ社會層の衰弱は、永遠に國家の活動力を弱める。安達内相が正直のところ、失業對策については、自分に定見がない、潔く甲を脫ぐと、公式の場合ではないが語つてゐるのはむしろ男らしいと稱めてやつてもいゝ。しかしその後から名策があるなら云つて見ろ、世界各國未だこれに成功した例しがないではないかと云ふに至つては何とも呆れ返る外はない。歐洲諸國の失業對策はあらゆる手段を盡して尚且つ甲を脫いだ場合であるが、安達内相の場合は懷手をして甲を脫いだ場合である。何處の國でも監獄政策に成功した例がないからといつて、犯罪者を放任しておいて善かるべき道理はない。つまり安達さんの如きは、自ら過去の政治家なることを、得意になつて自ら物語つてゐるに過ぎないのである。

◇

如上の如く、政府は今やあらゆる方面に於て難關に當面してゐるのであつて、その何れの一つを過つても、致命傷となる可能性を多分に持つてゐる。筆者の私情からすれば、現内閣のやうな、大して頼み甲斐もない代り、大した惡事も爲し得ない、平凡なる内閣が、當今の如きしめつぽい時代には却つていゝのではないかとも思はれるが、翻つて思ふに、かゝる時節こそ國家百年の運命の岐れ路となる、重大時機たのであるから、政府が眞に無策であり、無能力を悟つたなら、潔く勇退して後賢を待つの策に出でるのも一方策であるかも知れない。議論はとにかく、人氣の點に於て、政府は既にその頂點を去つて、既に下り坂の運命に向ひつゝあるやうに觀測される。それかあらぬか反

對黨の政友會方面では、昨今俄かに景氣づいて、政權を取らぬ先から、黨内で獵官運動が猛烈に行はれてゐるといふから、悲慘なる滑稽だ。臨時議會後の黨役員指名に於て、清黨の精神に燃えてゐる犬養總裁も、流石に盲者達の猛運動に制せられて、その志を遂ぐることが出來なかつた。始め犬養さんのつもりでは、總務の數は四五名に止め、事實上有爲有能の士を擧げて、黨務を行はせる方針だつたが、次の内閣の割り込み氣構へから、現職にあるものは、飽くまでその椅子に噛りつき、然らざるものはその椅子の占領に突進して、何うにも始末がつかなくなつた。幹事長も松野内田山崎君なぞ、自薦他薦色々の呼び聲はあつたが、つまりは森君の重任といふことで平凡に鳧をつけた。かくて地方別親分別で並べられた十數名の總務顏觸れを見て、犬養さんのお眼鏡に叶つて、遠い或は近い將來に犬養内閣の一員として割り込み得るものが何人あるか。(六月八日夜)

戰爭小說の世界的流行

岡澤秀虎

昨年以來ヨーロッパでは戰爭小說が頻りに讀まれ、又それのドラマ化映畫化がかなりに行はれてゐる。英米はさほどでもないが、獨佛では「流行」に達した。伊太利もこの「流行」を獨自の立場から自國に有利に取り入れやうとしてゐる。五月十日の東京朝日新聞オペリスク欄の報ずる所によると、ロンドンの遊就館の書庫に保存されてゐる所謂「戰爭もの」の讀物だけが五萬册以上に達するさうである。

ヨーロッパばかりではなくわが日本に於ても、今年が日本海々戰二十五周年に當るのを好機として、××××××な戰爭小說（と云ふには餘りに非藝術的な讀物）が出版され、一般大衆の間に愛國心を鼓吹してゐる。例へば水野廣德大佐の「海と空」の如きである。

かゝる戰爭小說の流行に就いて、多少の紹介と殊にその社會的意義を批判することが、筆者に與へられた課題である。

最近の戰爭小說を代表するものは、何と云つてもルマルクの「西部戰線異常なし」であらう。この書は昨年の春出版され、ドイツで八十萬、フランスで三十萬、イギリスで二十萬、アメリカで三十萬、その他の十一ヶ國で四十萬と云ふ樣に、瞬く間に恐ろしい勢で世界を風靡した。この書の外にドイツには、ルードヰヒ・レーンの「戰爭」、エルンスト・グレーザーの「一九〇二年組」及びアダム・シヤールの「祖國のない仲間」があり、その他通俗の愛國的戰爭物がある。尙大體に於てドイツに屬すべきものとして、オーストラリヤに、アンドリヤ・ラツコの「戰の人々」その他があり、チエッコにヤロスラフ・ハーシエクの「勇敢なる兵卒シュベイクの冒險」がある。

アンドレー・ビリイの「現代佛蘭西文學史」によると、フランスにも戰爭文學の流行がある。ルマルクの「西部戰線異常なし」が佛語に飜譯されて讀書界を騷がせると、佛人は自國が生んだ代表的大戰小說であるローラン・ドルジュレスの「木の十字架」を思ひ出し、これと比較せずには居られなかつた。その結果「木の十字架」の新版が最近大々的に賣り出された。かくて「西部戰線異常なし」と「木の十字

架」は、歐洲大戰の中心であつた獨佛二國の戰爭文學を代表するものとして、最も興味深く比較される。その他戰爭直後には、ジョルジュ・デュアメルの「殉難者の生活」、アンリ・バルビュスの「砲火」「クラルテ」等の名作があるが、今日流行してゐるのは大衆的な戰爭物である。イギリスには、オケイシーの「銀盃」、シエリフの「旅路の終り」があり、その他、ヤン・ヘイの「最初の十萬人」の樣な愛國的戰爭物が讀まれてゐる。

アメリカを代表するものは、アーネスト・ヘミングウエイの「武器よさらば」である。これは作者が歐洲大戰に參加した記錄であるが、その他、南北戰爭を扱つた愛國的戰爭物で、日本でも映畫化されたボイドの「進軍」等がある。

これらの最近の戰爭小說は、先づ第一に文學そのものの自然の約束から生れる一つの特色を持つてゐる。それはこれが寫實的であると云ふことである。大戰を取り扱つた小說は戰爭中にも戰爭直後にも生れた。然し戰後十年を經た今日現れる小說は、十年の歲月を隔てることによつて、戰爭を充分客觀的に全面的に批評する可能性を與へられてゐる。從つて最近の戰爭小說は、從來の小說が主觀的であり、抽象的であつたのに比べて、客觀的であり、寫實的である。この變化は、當然戰敗國であるドイツの作品に最もよく現れてゐる。即ち戰爭直後のドイツ文學である表現派は、戰爭殊に苦戰敗戰の混亂と苦惱のために、不安、興奮、激情の主觀的文學であつたが、十年の歲月によつて漸く精神生活的に安定した最近の文學は、冷靜に過去を振り返り、極めて寫實的に戰爭を描いてゐる。櫻井忠溫大佐は、「西部戰線異常なし」が餘りに寫實的であるために、これは戰後直ちに書かれたものを今日まで隱してゐたのであらうと推測してゐるが、この作に現れてゐるやうな、人間の生活を根本的に搖り動かす強烈な經驗の印象は、十年位で消える筈がない。反對にかゝる強烈な經驗は、その當時戰敗の不安混亂の中では、決して十分具體的に表現されるものではなく、十年後の今日に至つて始めて寫實的に描かれたと云ふことは、文學そのものの約束から見て極めて自然である。

戰爭を描寫する文學は、戰後數年を經て戰爭が藝術の客觀的土壤となつた時に、最も多く生れると云ふこの約束の中に、今日客觀的な戰爭文學が流行することの原因がある。然しこれは廣く最近の「戰爭文學の流行」にとつては、一原因に過ぎない。何故なら今日流行してゐる「戰爭小說」には、他の重大な特色があるからである。

その第二の特色とは、これらの小說がその一は非常に愛國的で戰爭に肯定的な關心を持つてゐることであり、その二は、個人的には強烈に反戰的ではあるが、決して祖國の觀念を破棄してゐないと云ふことである。そしてこの特色は、現代の帝國主義國家の社會狀態、その世界的反動の形勢から生れてゐる。現代の世界的反動こそが、現代の戰爭文學流行の最も重大なる原因である。

それを說明しやう。

最近の資本主義國家の最大特色は、金融寡頭政治によつて中央集權的支配の强化であり、それに伴ふ階級鬪爭の尖鋭化である。この尖鋭化に當面して帝國主義ブルジョアジイは、自己の支配を維持するために、從來の議會主義的民主々義では不安になり、一層强力、露骨な支配方法を生み出した。それがファシズムであり、或は社會ファシズムである。それは廣く一般無産階級運動に對する極端な彈壓に他ならない。今日世界資本主義の共通の形態である、この國際的反動を證明する例は幾らでもある。

例へばフランスのロマン・ローランは、嘗つてバルビュスと自由と暴力に就いてあれ程論爭したが、今日この反動に面すると、『問題は理論の爭ひではない。私達の中には初めからコンミュニストではなかつたもの、又飽くまでそれにならないものがゐる。私は自由に生きて來た樣に、自由な個人主義者として死ぬ積りである。現に又ヨーロッパのコンミュニストの中にも、モスクワの政策には贊成しない人達もかなりゐる。だが我々の共通の敵、反動を前にしては、自由主義者も共産主義者も、サンヂカリストも、今は口先きでなしに一緒に立たねばならない時だ』と叫んでゐる。(小牧近江氏に依る。)

又ドイツでは、戲曲「感化院の暴動」及び「伯林を蔽ふ毒瓦斯」を書いて一躍左翼文壇の代表者となつたランベルが、突然捕縛された。そして彼の戲曲は上演を禁止されてゐる。かゝる反動は意識的プロレタリアートに對しては、益々その左翼精神を激化せしめる。所が現在の社會狀態では、何處の國に於ても目覺めたプロレタリアートの他に、必ず小市民の大群がゐる。この大群の最大特色は浮動性である。彼等は機會によつてどちらへでも動く。例へば米が高い時には米騷動に加はるが、大震災に遭へば社會主義者を襲撃するが如きである。從つて彼等には社會的支配力はないが、階級鬪爭の兩陣營にとつては、彼等の向背が重大なる形勢の變化を起す。現代支配階級の反動彈壓によつて急激に尖鋭化した左翼運動は、根が小ブルジョアである彼等に本能的恐怖を與へて、忽ち帝國主義の味方たらしめた。かゝる傾向が數年前資本主義の未發達な伊太利に起つた時には、封建的反動勢力が暴威をほしいまゝにしてファシズム國家を作つた。資本主義がより高度に發達せる今日の獨佛に於ては、中間大衆の右翼化は結局社會民主々義のファシズム化(社會ファシズム)として現れてゐる。

この中間大衆の右傾を强大ならしめる思想的方法としては、彼等に祖國の觀念、愛國心を鼓吹するに越すものはない。現代に於ける愛國心、祖國主義は結局帝國主義を擁護し社會主義を否定するからである。そして祖國の精神を吹きこみ愛國心を喚起するには、戰爭を思ひ出させ、戰爭の觀念を利用するに如くはない。一般大衆はエロテイシズムとチャンバラに容易に原始的興味をそそられる。その上戰爭を藝術的に利用する爲めには、誠に好都合な大戰の經驗がある。從つて現在中間大衆を目がけて、愛國心を呼び起すための通俗小說が書かれて

ゐるのは當然であらう。これがロンドンの遊就館の五萬冊中可成の量を占める所謂「戰爭もの」である。これらの「戰爭もの」は、明白な反動的目的をもつて書かれるだけに、藝術的價値を殆んど持たない。(丁度我國の「海と空」のやうに)從つてその國の中間大衆に通俗的に讀まれるだけで、決して外國の文壇に紹介されるやうなことにはならない。そこで我々は獨佛のこれらの「戰爭もの」を讀む機會が殆んどないのである。

然し「西部戰線異狀なし」の樣な作品は、これらの「戰爭もの」とは全く異つてゐる。前者が通俗的讀ものであるに對し、後者はすべての文藝作品である。そして前者が戰爭を必然視し或はそれに肯定的關心を與へてゐるに對し、後者は明白に反戰的である。何故反戰的か？理由は簡單である。凡そ今日の戰爭の實狀を、生きた人間（一個人）の體驗（事實）として描く場合、つまり藝術的に描く場合、戰爭に疑惡を感じない作者個人はあり得ないからである。そして作者個人の感情のしみ出てゐない「藝術」はあり得ないからである。(これは「藝術」の鐵則である)

人間が人間を慘酷に殺戮する戰爭、しかも個人的には何の恨みもない人間を殺戮する時、人間である以上（それは別に人間性を理想化しての話ではなく、人間が社會的集團的生活を營む動物である以上）戰爭に反對する或は少くとも戰爭といふものではないと思ふ「個人的感情」はない筈がない。

然るに我が櫻井肉彈大佐は、「西部戰線異狀なし」を評して、「作者に戰爭を呪ふやうな氣持が見えるなら、それは戰爭後に考へついたことで、砲火の下でそんな贅澤な考へは起きやうもない。もつとのんき坊であるべき筈なんだから」と云つてゐる。これは所謂「軍人精神」の名によつて個人の個人的感情を無視してゐるだけの話である。そして強いて無視しやうとする所に軍國主義者の隱された醜い意圖がよく判るではないか。ルマルクの筆は、私の樣な感激家にとつては、悲慘だ！ たまらないなどと云ふ個人的感情をぶちまけずにはゐられない樣な場面を、實に寫實的に冷靜に描き、殆んど自己の主觀を文字に現してゐない。しかも、かかる忠實な寫實から我々讀者が戰爭嫌惡の感銘を受けるとすれば、これらの事實の生々しい體驗者である兵士が、同じ感情を當時感じない筈がないではないか！ 私は、これらの世界大戰の記錄ほど、戰爭否定の個人的感情を強烈にたたきつける文藝作品に嘗つて出會つたことがない。例へば「西部戰線異狀なし」に描かれた、恐怖の餘り我知らず脫糞してゐる樣な慘狀を、人間として好むものが一人でもあるだらうか？ この餘りにも事實でありその故に餘りにも痛切な戰爭否定の調子に驚いて、肉彈大佐に見られるやうな軍人精神が社會的イデオロギイとなつてゐる國家伊太利では、ムッソリーニがこの作の飜譯を禁じたのである。

然しこの反戰的感情が如何に強からうと、それは個人的否定である。反戰の個人的感情を、個人的に個々人に投げつけるに過ぎない。

そこでそれは現實的に戰爭に反對する社會的勢力を形成する力はないのである。然らば何故彼等は個人的反戰に留まるのであらう？　それは彼等が個人主義者（リベラリスト）でありインテリゲンチヤであるからである。今日の資本主義は帝國主義であることによつて、××××による强制主義である。この强制に對しては同じく×××××の力によつて××のでなければ×××××にはならない。然し現在の社會狀勢の中で、インテリゲンチヤの個人主義は、彼が最大のリベラリスト藝術家であつたとしても、政治上に於ては社會民主主義に止まる。所が前に述べた如く、最近の反動に於て社會民主主義は次第にファシズム化してゆく。それは未だ純「ファシズム」ではないにしても、最早ファシズムの一種である。

クーシネンは、純粹のファシズムの感動力は「國粹」のスローガンと「帝國主義的領土擴張への公然の煽動とに表現される」に對し「社會ファシズムの感動力は、國家を維持すると云ふスローガンに表現される」と云つてゐる。

これによつて知られる如く社會ファシズムは祖國主義と矛盾しない。否矛盾しない以上に、この反動期に於ては、一種の「軍國主義」をすら形成する。それは從來の軍國主義の概念を次の樣に訂正する。「我々は、軍國主義なる言葉を、自國の狹小な領土から躍り出て侵略し、國家に奉仕する代りに、國家を支配せんとする軍閥の努力の意味に解する。文明的統治が軍閥の影響から脫却してゐない所、軍閥が特殊な社會的地位を占め且つ特權に惠まれてゐる所、國家の政治が軍閥の司令の壓迫の下に屈從してゐる所、そこには一つの軍國主義が生れ出るのである。」

如くの如きドイツ社會ファシズムの反映を受けたがために、インテリゲンチヤであるルマルクは、あれ程までに戰爭を呪咀し、戰爭の利得者ブルジョアジイを暴露したにも拘らず、獨逸精神を讃美することに於て決して人後に落ちない。「祖國主義者」として終つてゐるのである。そこで社會ファシズムの國ドイツでは、伊太利とは違つて、ヒンデンブルグ大統領が、「各家庭に一册を備へてよろしい書」と認めたのである。

ここにインテリゲンチヤが生む現在歐洲に流行する戰爭小說と、プロレタリア反戰小說との最大相違がある。

××××プロレタリアートは、ルマルクの樣な祖國主義の匂ひがする戰爭小說を書く筈がない。プロレタリアートは、ルマルクに見られるやうに、單に個人的感情に於て戰爭に反對するのでなく、（それも勿論重大だがそれ以上に）全プロレタリヤ大衆の名に於て、帝國主義戰爭に反對するのである。如何に國家のためと云ふ××に隱れやうとも、事實に於てその國の××××××のために起される戰爭に、絕對に反對するのである。

この××××を否定し、全世界の×××××××××戰爭に反對するプロレタリヤ文學は、今日再び帝國主義戰爭の危機をはらむ反

動の中で、次第に成長しつつある。嘗つての貴重な體驗であつた歐洲大戰の本質を暴露して、軍國主義を根柢から搖り動かす文學が生れつつある。古くはバルビュース（佛）の「クラルテ」がそれである。新しくは、シャーレル（獨）の「祖國のない仲間」がそれである。ルマルクは世界の讀書階級を動かした。然しプロレタリア反戰小說はやがて世界全體を動かすであらう。

以上、最近の戰爭小說を三つに區分して、その社會的意義を概論した。次は二三の例に就て少しばかり具體的檢討を試みよう。

第一種の通俗「戰爭もの」は、世界大戰の初期に無數に現れた愛國小說の精神と、大戰を描いて勳章を貰つたヤン・ヘイ（英）の「最初の十萬人」式の（日本で云へば「肉彈」式の）戰爭描寫とをごつちやにしたものである。我國に最近出版された水野此一戰大佐の「海と空」が最もいい例である。かうした小說が世界的に必要とされ從つて流行してゐることは、「西部戰線異狀なし」を禁止したムッソリーニが、かうした「戰爭もの」を國家の名によつて大々的に懸賞募集してゐることによつても判る。これらの戰爭ものの特長は、「藝術」でないことである。從つて觀念上の戰が述べられて、事實の戰爭が描かれてゐない。そこでは戰爭の慘果に觸れて必ず痛む筈である生きた個人の感情が全然沒却されてゐる。只、愛國精神の命令によつて動く機械的人間のみがゐる。

第二の「戰爭小說」の例としては、「西部戰線異狀なし」と「木の十字架」を比較しやう。

この二人の作者は共に、彼等が若々しい興奮を以つて參加した戰爭の正體を、最も正直に寫實的に語つたのである。ドルジュレスは云ふ。

『戰場で何を獲ち得たか？　ちつとも大したことはない。この悲痛な告白こそ、無限に擴がる十字架の墓地を前にして叫ばなければならない眞實の心の聲である。……戰爭には喜び勇んで出掛けたが、その結果は戰爭の呪咀である。』

これはルマルクと全く同じ個人的反戰の感情である。然しドルジュレスにはルマルクに見られる自然主義と共に、佛一流のリリシズムがある。そこでその自然主義もフランス的教養でリファインされ、恐怖の餘り脫糞すると云ふやうな原始的描寫は見られない。

ドルジュレスは「西部戰線」を評して、餘りにドイツ的である。一般的理解が足りないと云つた。然しこれは「木の十字架」が書かれた時の佛の狀態と現在のドイツの狀態とを比較して見ない批評である。戰勝の國で戰後間もなく（今日の反動なく）書かれた「木の十字架」に於ては、一般的理解の立場に立つて、戰爭の野蠻性、その罪業を指摘することが出來た。然し最近の社會ファシズムの獨逸で生れた作品が、祖國精神に立つてドイツ的であるのも自然である。又ドルジュレスは「文學的にはラッコの「戰ひの人々」の方が遙かに傑作」と云つてゐる。成程、ラッコの作は從來の藝術性に於て見れば、非常に藝術的である。然しプロレタリヤ集團主義の藝術を愛好する人々にとつて

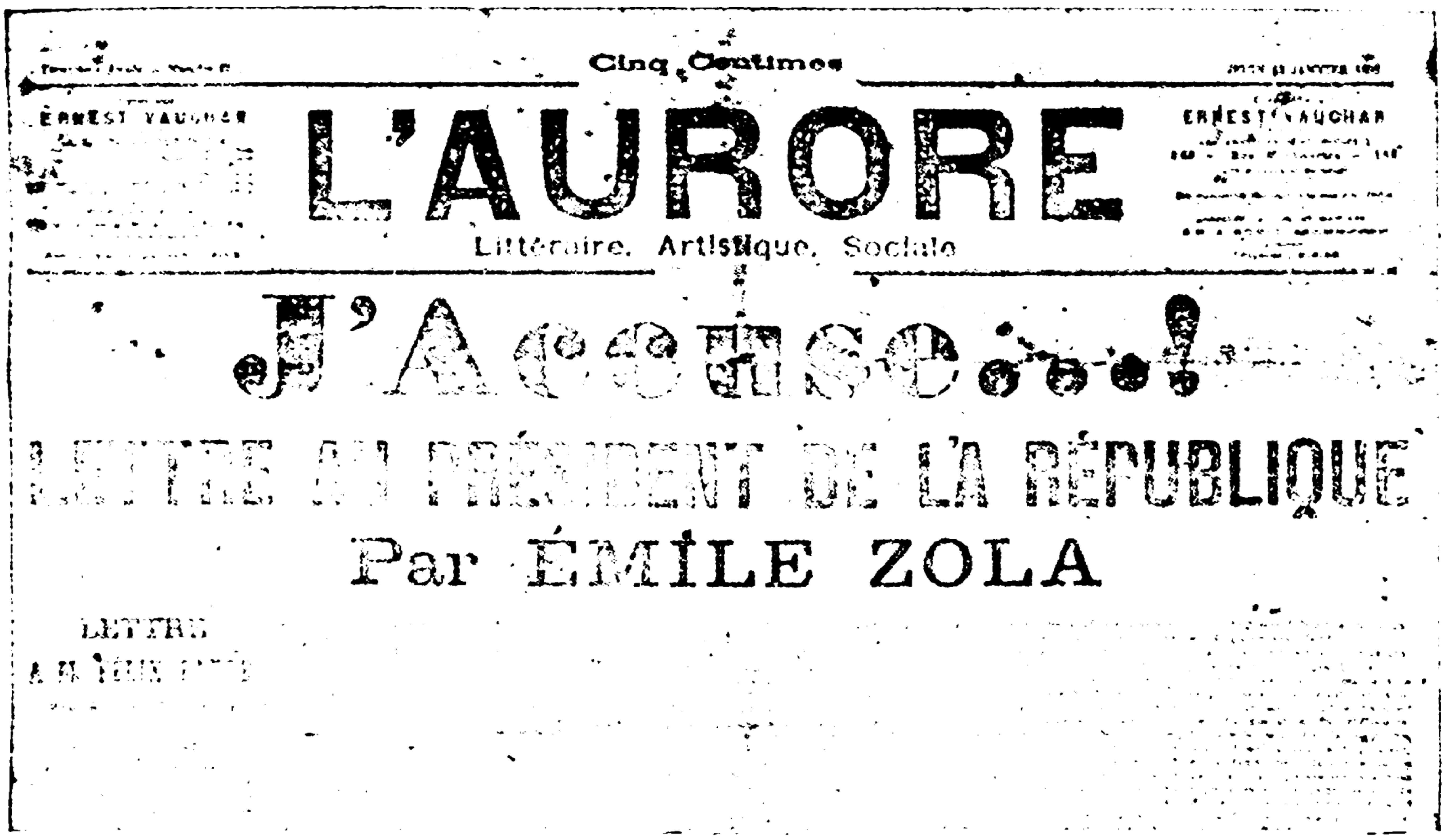
は、ルマルクの大衆的手法（それでゐて通俗小說ではない）映畫的筋の運び方は、新しい藝術性として寧ろラッコを凌いでゐるやうに思はれる。更に「西部戰線」には「木の十字架」にはないジャズ的要素がある。これも最近の資本主義ドイツの反映として頷ける。この書の異常な大衆的賣行きには、このジャズ的要素と原始的エロチシズムの吸引力も一部の原因であらう。作者もそれを意識して書いてゐる樣な所もある。然しこの書の中で、病院に妻が訪ねて來た時のことや、裸で女に合ひにゆくやうな場面にのみ興味を持つ讀者があるならば、彼は呪ふべき「文學」の門外漢である。

猶ラッコの作は「木の十字架」と同じ頃書かれてゐるので、一般的理解の立場に立ち、その反戰的態度は、可成にプロレタリヤ文學的でさへあるが、然し彼も亦インテリゲンチャであり徹底的平和主義者であつて、第二作「平和の審判」に於ては、戰爭を拒否した主人公を自殺させてゐる。

第三のプロレタリヤ反戰小說としては、最近ドイツにアダム・シャーレルの『祖國のない仲間』が現れた。これは勞働者の書いた最初の大戰小說と云はれる。一九一四年の戰爭開始から、ベルリン・ホーヘンツオルレン宮殿にリープクネヒトが赤旗を揭げるまでの一連の事件の展開が、一人の革命的勞働者の眼に如何に映じたかを正直に記してある。やがて必ず日本に紹介されるであらう。

附記

佛の戰爭小說に就ては山内義雄氏に非常に敎へられた。氏の御好意に感謝する。



大統領に對するゾラの公開狀（ローロール紙）

ゾラの審判

――ドレフユス事件――

大佛次郎

J'accuse

この、千八百九十八年一月十三日の「ロオロール」新聞は、第一面の最初に、段抜きの、ポスターの文字のやうに大きい肉の厚い字で、「余は彈劾する」（J'accuse!）と書き、その下に「共和國大統領へ與ふる書」エミール・ゾラと記してあつた。J'accuse と云ふ言葉は、全文の追伸の中に事件の軍事當局者等一人一人について彈劾を並べ一章づつこの言葉で初めてあつたのを、クレマンソオの案でそのまゝ題に用ひたものであつた。

共和國大統領、フエリクス・フオール
氏へ與ふるの書

フエリクス・フオール君

私はこれまでに閣下からいろ〳〵と御厚誼を賜はつたものであります。従つて私の側からも閣下の正當な名譽について御心配申上げたいと思ふのでありま

す。今日まで公明でもあり多幸でもあつた閣下の經歴が、現在、最も恥づべく拭ふべからざる汚點に依つてけがされようとしてゐることについてゞあります。

閣下には、卑怯な中傷も及びませんでした。閣下は一般の敬愛の的となつてゐられます。國を愛する人々の祝福を一身に集めて、その名譽に輝いてゐられるし、我々の、この勞働と眞理と自由との偉大なる世紀を記念する萬國博覽會の崇高なる勝利に臨まうとしてゐられるのであります。然るに、この時にあたつて、閣下の名が泥を塗られようとしてゐる。閣下の治世が汚されようとしてゐるのであります。と云ふのは、この嫌惡すべきドレフユス事件に依つてゞあります。つひ最近に開かれた軍法會議は外部の命令を受けて、エステラージーなる者を放免するやうな亂暴なことをしました。眞理も正義も、この暴擧に依つて、文句なしに叩きつけられたのであります。このことが敢て行はれた。美しい佛蘭西は、この烙印を顏に押された。かくのとほりの社會的犯罪が堂々と行はれたのが、ほかの時ではなく閣下の統治の下に於いてであつたと、後世まで歷史に殘ることになつたのであります。

彼等が敢てこゝまでやつたのでありますから、私も思ひきつてやらなければなりませぬ。本來その權限を與へられてゐる法廷が眞實を語らないのである。私はさう云ふ時は自分でそれを正しく存分に云はうと心に誓つたのであります。從つて、こゝで發言するのは私の義務なのである。私にはこの罪惡に加擔しようなどと云ふ考へは毛頭ない。身に覺えのない罪を着せられ怖るべき責苦を受けてゐる一人の純眞な人間がゐることを考へれば、夜も眠れないことになるからであります。

また自分が嘘の嫌ひな男として、反感の限りをぶちまけて眞實を物語らうとするならば、これは、大統領閣下、閣下に申上げることにします。私は閣下の名譽を信ずるものでありますから、この罪惡の眞相を閣下がまつたく御存じないのだと見てゐるのであります。また閣下はこの國の最高の判官であります。事件の眞相を勝手にごまかせる位置に眞犯人がある場合には、これは閣下に申上げるよりほかはないのであります。

第一に、ドレフユスの裁判と判決に關しての、眞相であります。

——これは、一人の惡心を持つた男があつて、萬事を計畫し準備し、按排したものであります。その人間はデユ・パチ・ドウ・クラン中佐であります。當時はまだ少佐でありました。この男がドレフユス事件の全部と云つてもよいのであります。これは、誠實な搜査を行つて彼の行爲と責任を正當に見る時に初めて理解出來るものであります。正體のつかみにくい肚の知れない人間であるが首謀者であります。ロマンチックな陰謀を肚に持ち、赤本小說を鵜呑みにして、書類の紛失とか匿名の投書とか不思議な會見とか、有力な證據を深夜賣りに來る謎の女とか云ふやうなものに熱を上げてゐる人間であ

――ります四方に鏡を貼つた部屋でドレフユスを尋問すると云ふやうなことを案出したのも、この人間でありました。このデユ・パチ・ドウ・クラン少佐が任命されてドレフユスの吟味に當つたのであります。……私は、たゞ、あの恐怖すべき誤審の第一のまた最も重大な責任がこの男にあつたことを斷言して置きます。

元來問題の「密書」は、今では故人になつてをりますが情報局長であつたサンドエル大佐が一時保管してゐたのであります。その當時からして、今日と同樣に、軍機の秘密が漏れ、書類が紛失することが珍らしくなかつたのであります。しかもこの「密書」の筆者は、參謀本部附の砲兵士官に相違ないものと、頭から勝手に定められた。これは、密書の審査が如何に淺薄な方法で行はれたかと云ふことを曝露するものであつて、正當に吟味すれば歩兵將校の手から出たものとのみ證明される筈のものを、念入りにこゝでも誤謬を繰返したのでありました。

この方針に從つて捜査が進められました。部内だけで、似た筆蹟を捜したのであります、無論これは全部が内部的な事件だつたことには相違なく、賣國奴は自分たちの目の前にゐて、放逐される筈だつたのでありますが――ドレフユスに最初の嫌疑がかけられたところへ、デユ・パチ・ドウ・クラン少佐が出て來たのであります。その後は、この人間が、ドレフユスを創作しました。事件を自分の手盛りのものとしたのであります。賣國奴を叩きつけて、餘すところなく告白させようと意氣込んだものであります。



（當時の戯畫　右端ゾラ　左端クレマンソウ等）

これには陸軍大臣のメルシエ將軍も加勢しました。この人はあまり頭がよくなかつたのであります。また參謀總長のボアデツフル將

軍もゐたのでありますが、このひとは宗旨のことになると一も二もなく溺れるやうな人物でありました。次に、次長のゴンス將軍がゐたのでありますが、この人の良心は、あまり多くのものに適應し易く出來てゐたのであります。そこで、全體として、デュ・パチ・ドゥクラン少佐ほど專心にこの事件の捜査に當つた人はなく、從つて、少佐の意見がこの將軍たちを指導し催眠術にかけたのであります。少佐は心靈術や神秘術にも興味を持ち、精靈とも話の出來る人でありました。不幸なドレフユスが、この少佐にどう云ふ實驗にかけられたか、どんな罠がかけてあつたか、これは殆ど眞實のこととは思はれない氣違ひ染み怪談めいたものであつて、一切が危險極りない子供だましの馬鹿げたことだつたのであります。精密に見た者の目には、第一の事件は夢魔のやうに思はれるものであります。しかも、これで罪が編み上げられました。先づ賣り渡された機密と云ふのが、殆ど無價値のものなのだから馬鹿の仕事だと云ふことも出來る「密書」を書いたと云ふだけのことを、唯一の罪狀としてゐたわけです。秘密と御都合と殘忍な陰謀とで、殆ど十五世紀の頃の話にありさうなことです。私が主張しようとするのはこれです、こゝに問題の種が潛んでゐると云ふことであります。眞の犯罪がこゝから出てゐると云ふことであります。國全體を腐らせた怖るべき正義の否認がこゝから出てゐることであります。どうやつて裁判が錯誤に陷入るようになつたか？　デュ・パチ・ドゥ・クラン少佐のからくりから如何にしてこれが生れたか？　メルシエ、ボアデッフル、ゴンスの三將軍がどう云ふ風にして、漸次この錯誤に引入れられて行き、間もなく、今度はこの錯誤を「神聖な眞理」、一切の論議の上にある眞理として我々國民に押附けるよりほかはないと考へ初めたか？　第一歩に於ては、將軍たちは愚かで不注意だつたと云ふのに過ぎなかつた。精々、彼等の住んでゐる世界に有勝な宗教上の偏見なり、頑迷な黨派的根性に囚はれ易かつたと云ふのに過ぎなかつたのでもります。錯誤が犯されて行くのを捨てゝ置いたものであります。

しかし、ドレフユスが軍法會議に附せられることになりました。極端に嚴重に秘密にです。叛逆者となると、敵に國境をひらいて獨逸の皇帝を眞直ぐにノートルダム寺院のところまで連れ込むものかも知れないのであるが、それでなほ、これ以上嚴重に秘密には出來ないと思はれるほど嚴格な沈默と謎を謎の儘でおく處置を採つたものであります。國を擧げて恐怖に打たれ、未曾有のことゝ思はれるやうな怖るべき賣國行爲が事こまごましく噂にのぼされたのであります。もとより國民は軍法會議に敬意を拂つてをります。この犯罪者にはどんなに刑罰を課さうが苛酷とされません。公開の醜聞には全國民が喝采しませうし、それ以上に罪人が永久に辱しめられ罪の重荷を加へられるように望むのであります。ところで、かうやつて昔のスター・チエンバーの裁判のやうに極端に秘密にして置かねばならなかつたと云ふのは、さうして公言を憚かつてこそ／＼噂だけ

されてゐたことに全歐羅巴を火でくるむやうな眞實が幾分でもあつたと云ふのでせうか？　否、そんなことはない、たゞロマンチックで、正氣の沙汰でない考が、一デュ・パチ・ドウ・クラン少佐の妄想が、匿されてゐただけのものなのです。最も愚劣な赤本小說が種になつてゐると曝露されるのが恐ろしくて、こんなにも必死に隱さうと努めてゐただけのものであります。これは、軍法會議の席上朗讀された告發の文章を注意して讀めば容易に解ることであります。

この告發文こそ、何たる空虛な內容のものでありませう。凡そ人間が、この程度の罪狀で罪を宣告せらるゝと云ふのは不正も甚しいものでありきす、私は誠實な人々にこれを讀んでくれと叫ぶ、これを讀んで、腹の底から憤りを感じないかどうかだ？　その人間が惡魔島で人間業とは考へられない贖罪に伏してゐると知つて呼び返せと叫ばずにゐられるかどうかであります。

ドレフユスは數箇國語に通じてゐる。かう書いてあります。これが罪の根據になるのであります。

ドレフユスはよく働く。これが罪になつてゐる。彼の家には有罪の證據となるべき書類が發見されなかつた、これも罪とされてゐる。ドレフユスは鄕里へ時々歸る。これもだ。ドレフユスは何でも知らうとしてゐる。これも罪だ！　ドレフユスは剛情だ。これもです。ドレフユスは當惑した。これもです。告發には十四ヶ條この種の罪を揭げてあります。結局、「密書」のことだけが殘るのであります。ところが、これでさへも、鑑定家の證言が一致してゐなかつたのであります。その一人、ゴベール君は註文どほりの結論を與へなかつたと云ふので、苛酷な待遇を受けたことまで、我々は知つてゐるのであります。

裁判は部內に限られたものでありました。どの人間も仲間だつたのである。結局、參謀本部が審問を開き判決を下し、更にこの判決を是認したと云ふのに止まるものである。このことを、よく覺えて置かなければなりません。

そこで異論は大にありながらドレフユスの罪に歸せられた「密書」のみが問題となつて殘つたのであります。傳へるところに依れば法廷に於て判士諸君も無罪放免と云ふのに傾いてゐたさうであります。もつとも千萬なことなのである。これで罪の宣告を是認しようと云ふのだから、彼等が有力な祕密書類なるものがあることを、如何に躍起となつて主張したことか、頷かれるのであります。書類は外國の官省から出たものださうでありますが、發見されやうわけがないものであります。宣告を正當とする筈のもの、云はゞ神樣の前に出たやうに我々が叩頭せざるを得ないもの、これなのでありますが、なるほど神樣のやうに萬能であつて人間の知ることの出來ないものだつたのであります。

こんなものはなかつたのだ。私は、この書類を否定する。斷乎として否定します。有つたことは有つた。しかし、愚にもつかぬもの

たつたのであります。取るに足らぬ女のことゝ、Ｄの頭字に初まる何者かゞ非道を働いてゐると云ふことゝが內容になつてゐたのであります。今の報酬では、女房の入用に滿足を與へられないとか云ふ鼻の下の長い御亭主の泣きごとに過ぎないものであります。これが、國防に關し、公表すれば明日にも宣戰が布告されなければならぬと云ふやうな書類でありませうか？　以てのほかだ！……嘘だ。欺瞞です。況んや自分たちの行爲が議論されることがない、外部からは手のとゞかない安全地帶にあると知つてゐてかゝる嘘をつくと云ふのは、最早沙汰の限りの陋劣なことだと云はなければならぬ。彼等は佛蘭西の國全體を振起たせました。國民が怒つたのはもつとも千萬でありますが、實はこれを利用して自分たちの隱れ場を作つたものであります。民衆の感情を攪亂し、理性を誤らせて、文句の出ないやうに計つたのである。私はこれ以上に重大な社會的犯罪はないと思ふのであります。

　大統領閣下。この裁判上の過誤は如何にして行はれたものでありませうか？　ドレフュスは富裕でありました。犯罪の動機となるやうなことはなかつたのであります。御承知のとほり彼は倦まず無罪を叫び續けて來たのであります。これらの無形の證據は、どれを見ても彼がデュ・パチイ・ドウ・クラン少佐の常軌を逸した空想と、少佐が所屬する宗教界、即ち今の時代を濟すものと云ふべき「穢らはしい猶太人」の迫害の全部との、生贄になつたものだと立派に證明してゐるわけであります。

　次いでエステラージーの事件であります。私は曖昧なことについては云はないつもりである。次にシュウレ・ケストネエ君の的確だつたことについては今更云ふ必要がないと思ふ。シュウレ・ケストネエ君が親しく搜査を進めてゐられる間に家元である參謀本部の部內に重大な事件が起つてゐたのであります。サンデエル大佐が死に、ピカール中佐がその後を繼ぎ情報部長となつたのであります。中佐は部長の職務を行つてゐる間に、さる外國人からエステラージーに宛てた信書を發見したのであります。この審査を行ふのは中佐の職責だつたのであります。中佐は嘗て上官の命令に反抗したことがなかつた人物であります。彼はその發見を先づゴンス將軍に、次にビヨオ將軍へ、續いて陸軍大臣に報告したのであります。調査は千八百九十六年五月に初まり九月まで繼續せられました。ここに聲を大きくして叫ばねばならぬのは、ゴンス將軍がエステラージーを有罪と認めたことであります。更に、ビヨオ將軍とボアデッフル將軍が、問題の「密書」がエステラージーの仕事だと信じて疑はなかつたことであります。またピカール中佐が調査した結果もこの結論を動かし難いものとしたのであります。然しながら、これは如何にも大問題であつた、何となれば、エステラージーを有罪とすれば、勢ひはドレフュスに與へた判決を修正しなければならなかつたからである。このことが、參謀本部が萬難を排

して回避しようとしてゐたことだからであります。

この時は、將軍たちは實際に苦悶したに違ひない。然るに新しく陸相となつてゐたビヨオ將軍は、前の事件には關係のなかつたひとで、この不安がなかつたのを注意してください。ビヨオ將軍はこの事件ではまつたく白紙だつたのだ。こゝで彼が眞實を樹てることも出來たのであります。ところが、將軍もこれをやらなかつた。疑ひもなく、これは輿論の力を恐れたからであります。それと全參謀本部、ボアデツフル、ゴンスその他關係の幕僚を見殺しにするのが恐しかつたからであります。そこで將軍の良心が、軍隊の利益と云ふことゝ鬪つたのは一瞬間のものだつたのでせう。それが過ぎて終つた時はもう手遲れだつたのであります。將軍自身が渦中に卷込まれて、不安を感じることになりました。責任が加はるだけのことに成りました。他人の罪を自分が引受けたのであります。將軍自身が正義を立てる筈の地位にあつて、何等の措置に出なかつたと云ふのは、誰れよりも罪が重いと云つてよいのであります。

閣下、これがおわかりですか?

ビヨオ、ボアデツフル、ゴンスの將軍連はドレフユスが無罪だと知りながらこの怖るべきことを自分たちの胸につゝんで、こゝに一年の月日が經つたのであります。その間彼等は夜も睡ることが出來たのであります。妻もあり子もあり、これを愛してゐる彼等が、であります。

ピカール大佐は誠實な人間として自分の義務を盡したのであります。正義に依つて主張もするし訴へもした。ひとたび眞相が暴露されゝば必らず恐ろしい勢で破裂せずにはゐないし、さうしてゐる間も段々力を鬱積して來る嵐を前に置いて、將軍たちがなほ逡巡してゐるのを、政策としても拙劣な點を充分指摘したのであります。しかしながら罪惡はもう行はれてゐたのでありまして、參謀本部がこれを自白すると云ふわけには行かなくなつてゐたのです。そこで、ピカール大佐は「特別任務」で追ひやられることになつた。亞弗利加の奥地へ段々と深く追ひやられることになりました——いづれはこのひとに、必ず命をおとすやうな任務を與へて、大佐の勇氣を賞めそやすのでありませう。大佐は別段の瑕瑾があつたひとではありませぬ。ゴンス將軍も昔のとほり大佐と親密な友人として文通を續けてゐられるのでありますが、さて、これにはいろ〲秘密があつて端から覗いたりするのは確かに失禮のやうであります。

が、巴里では眞理が、疲れることも凹むこともなく歩み續けてゐたのでありました。期待されてゐた嵐がどう云ふ風にして卷起されたかは人も知るとほりであります。シユウレ・ケストネエ君がドレフエスの再審判の要求を掌璽官に致さうとしてゐる際に、マチウ・ドレフエス君が「密書」の眞犯人としてエステラージー少佐を告訴したのであります。こゝに至つて漸くに、エステラージー少佐が登

場せられました。目撃者の談話では少佐は最初の内殆ど氣が狂つたやうになつて、自殺するか逃亡するかどつちとも知れぬやうな有様だつたと云ひます。その人間が俄然土壇場へ來て大した度胸を見せました。華々しく大見得を切つて巴里全體を驚ろかせたのであります。これは救ひの手が出て來たからでありました。無名の手紙が舞ひ込んで來て、敵の奸計を知らせてくれる。面紗をかけた不思議な婦人があらはれて、わざ〳〵夜中に彼を訪れ、參謀本部が盜まれた或る書類を返してくれるやうな手厚い親切を盡して彼が助かるようにしてくれる。――この薄つぺらなまやかしが、デュ・パチイ・ドウ・クラン大佐一流の豐かな空想を正直に實演したものだと云ふことは明白すぎると思ふ。大佐の傑作として、極めのついたドレフェスの罪が怪しくなつたので、自分の手柄を守らうと望むのは無理もないことだつたのであります。

裁判の仕直し――これでは、「惡魔島」を恐怖すべき大詰の舞臺にとつたもの〳〵しい連續大悲劇が、まつたく形なしに毀れて終ふわけでありました。――そこでピカール大佐とデュ・パチイ大佐との決鬪が行はれることになりました。一方は素面、一方は面を付けて。――間もなく雙方が法廷に出て來るようになることだらうと我我は期待してゐるわけです。しかし、これも根本は參謀本部が罪を告白しまいとしてゐるからです。その結果が刻々と積み上げられて行つてゐるわけです。

世間は驚きながら、誰れがエステラージー少佐の肩を持つかと思つてゐました。筆頭はデュ・パチイ・ドウ・クラン大佐であります。續いて、ボアデッフル、ゴンス、ビヨオの將星たちであります。陸軍省が國民全體の怒りを買つて土臺が危くなることでありますから、ドレフュスの無罪を認めない。つまりエステラージー少佐をどうしても放免しなければならなかつたのであります。この矛盾から生れた立派な結論が世にも稀れな正直な心を持ち職務には忠實だつた人間を犧牲にして、嘲罵と刑罰の的とすると云ふことだつたのであります。

正義――考へるだけで怖るべき絶望を感じるだけだ。ドレフュスは公文書僞造まで働いたと云ふのだ。エステラージーを陷すために文書を僞造したのだと放言してゐる始末だ――なぜ？ 何の爲に？ これも猶太人に買收されたためだと云ふのか？ 不相應な負債と罪惡を背負つてゐる不名譽な男どもが、清廉で潔白な人間と云ふことになり、遂に、非難の隙もない高潔な人間が泥の中へ突込まれる。國も、文明も、こゝまで來ると、崩壞するよりほかはないものであります。

閣下、これがエステラージー事件でありました。國の高等政策で犯罪人を庇つてやつたわけであります。この二ケ月間我々はこの大層な見世物を刻々見てをらねばならなかつたのであります。ペリウ將軍、ラヴアリ少佐が次々に、この恥づべき査問を指揮して、惡漢

の罪を塗り隱し、正直な人間に泥を塗つたのも見たのであります。軍法會議を開いたのはそれからでありました。

× × × ×

軍法會議が前會議の宣告を徹回する——こんなことを誰れが期待しませうか？

判士諸君の判決については何も申しませぬ。この軍人諸君は血に通つてゐるくらゐ規律の觀念に強く支配されてゐるのでありまして、判斷力などは立派に薄弱なものとされてゐたのであります。陸軍大臣からして、軍法會議に掛けられようとする事件について既決の動かすべからざることを上下兩院の喝采をあびながら演説したものであります。かう云ふ時に軍法會議が判然と反對に出ることが考へられませうか？　彼等は戰場に出た時と同じやうに考へることなどなしに、たゞ頭をさげて、判決を下しました。法廷には、「ドレフユスは軍法會議で有罪を宣告されたものだ。そこでドレフユスは有罪である。即ち吾人が軍法會議に依つて、この男に無罪を宣告することは出來ない。しかしまた玆に、エステラージーを有罪とすれば、ドレフユスの無罪を宣明することになる」この肚をきめて出席したわけであります。この魔法の輪から踏み出す筈がなかつたのであります。

そこで彼等は不當な判決を下しました。この判決は我が軍法會議に永久にかぶさるわけで、向後我々は軍法會議の判決一切に疑惑を向けざるを得なくなるのであります。第一の軍法會議がたゞ愚劣だつたとしても、この第二の會議は明らかに犯罪の性質を帶びてゐたのであります。繰返して云ふが、この會議が楯に取つたのは、判士長の言葉に明らかであるが、一旦宣告した判決が徹回出來ないと云ふこと、人間よりも理義よりも上にある神聖のもの、下の方から疑議を挾むことの出來ないものだと云ふのであります。彼等は「軍隊の名譽」と云ふことを云ひ、國民がこれを尊敬するように求めてゐるのであります。無論のことだ。當然至極のことなのであります。外敵の威嚇さへあれば、いつ何時なりとも佛蘭西の國土を守るために起つ軍隊こそは、(事實は全國民が軍隊なのであつて)、我々がひたすら敬愛するものでありますが、かゝる軍隊についてはまつたく問題はない、我々は正義を熱望するものであるからかくの如き軍隊の尊嚴は望むところだ。しかし、こゝではそれと違つてサーベルが問題なのである。明日からにも我々に壓制を加へようとしてゐるサーベルが問題なのである。この柄に恭々しく接吻しろと云ふのだ——斷じて。然り、斷じてそんなことは出來ないのであります。

參謀本部全體を告發しない限り、ドレフユスの無罪は闡明出來ないのであります。陸軍省もまた、ドレフユスを今度叩きつけるために、新聞の宣傳、壓迫、強制のあらゆる彌縫策を構じ、エステラージーを庇つたのであります。佛蘭西政府を廓清するには、實際ビヨー將軍が放言したやうに政府をジエズイット教會のやうな組織に改

めたければいけないのかも知れません。徹底的な改革と修復に當る勇氣を持ち眞實で聰明た愛國主義に立つ内閣がこの國には有りますか？ これに反して戰爭の危機を感じ、國防の統帥權が何者の手にあるかを知つて憂ひてゐる國民はどれほどあることかわからないのであります。國民の運命を決する神聖な役所が、何たる卑しむべき陰謀と腐敗と墮落の巣窟と成り下つたことであるか？ 下劣な岡つ引根性、のさばり返る夢魔も同然ならば西班牙の宗教裁判にも似た忌はしい手段が、この愚の骨頂とも云ふべき事件にどれだけ狩り出されて來たことか？ 軍服を着けてゐる小人數の男達の歡心を購ふためにである。國内へ地獄を持ち込み、「國の爲」に籍口して、國民の咽喉をしめて正義と眞理の叫び聲を出さぬやうにした幾人かの人間のためにであります。

況んや、惡徳新聞を利用し、巴里の無賴の徒が自分らの味方につくように仕向けたと云ふこと、そのために今日この聲が正義と名譽が敗退するのを見て無禮な勝鬨を揚げてゐるやうなことにしたと云ふのは、より大なる罪惡と云はなければなりませぬ。佛蘭西の國が自由と正義を愛する國々の先頭に立つように、寛大で自由であるやうに望む人々を目して國家の沒落を企てるものだと稱せしむるに至つては、これも亦別個の罪惡であります。輿論を誤らせ、邪道に陷入れ、これを歪曲せしめたのも亦罪惡である。醇良な人心を茶毒し、偉大にして自由を愛し、人權の國である我が佛蘭西を醜き反猶太嫌に浮かさせ、偏狹な激情と反動の亂心を煽り立て亡國の危機を作つたと云ふのが、また罪惡である。憎惡のために愛國心を喰物にしたのも罪惡、最後に眞理と正義との未來を實現しようとして全人類の科學が勃興して來た今日にあつて、サーベルを現代の神としたのがまた罪惡であると云はなければならないのであります。

我々が熱心に求めてやまなかつた此の正義眞理が、今や滿身に創痍をあび、昔よりもむごたらしく虐げられて打棄てられてゐるやうに見えるのは、何たるいたましいことではありませんか？

シュウレ・ケストネエ君が如何に落寞とした心持でゐられるか私にはわかつてゐるのであります。また同君が上院で質問した際に、あれ以上に直接的で革命的な方法に出られず、事件の全部を暴露せられることもなく劍を捨てられたことは、他日同君が必ず後悔せられることゝ確信するものであります。シュウレ・ケストネエ君は、眞實を明らかにするだけで充分だとせられたのであります。根本から顚覆させるまでのことはないと信じてゐられたのであります。然しながら、この冷靜な信仰を抱かれてゐたために、今日同君がいたましく苦悶してゐられるのであります。このことはピカール大佐についても云へると思ふ。大佐は規律を愛し名譽を重んじてゐられたために、ゴンス將軍の書簡を公開しようとせられなかつた。それに對して大佐の上官たちは、この時に大佐に汚名を被せ、ありやうもない侮蔑的な方法を以て大佐の審問を行はせたのであります。このシ

ユウレ・ケストネエ君もピカール大佐も犧牲になつた人々であります。二人ながら廉潔で公明正大な人々でありますが、惡魔の目の前暴威をふるつてゐるのを見ながら、神樣がお出ましになるまで何もしないで待つてゐられたのであります。

閣下。

　これが簡單な眞相であります。恐るべき眞相であります。事實は閣下の治世の一大汚點として殘るでありませう、私は閣下が憲法と地位に制縛せられてこの件については施す手段を持たれぬものかと疑ふのであります。然しながら閣下は人間としての義務を持つてゐられる。もとより閣下はその點を御考慮になる。この義務を敢然と果されるものに違ひないのであります。私は最後の勝利を信じて已まぬのであります。更に強く確信をこめて申上げるのは、眞理が步みつゝある。これを遮りとめることは如何なる力を以てしても不可能だと云ふことであります。今日からいづれの側に味方するか、旗色を明らかにせねばならぬのでありますから、事件が初まつたのも昨今のものと云つて宜しい。この事件に對して光明を求めぬ犯罪人どもが一方に集る。他方には正義のためには身命を賭して悔いぬ者が集るのであります。私が嘗て他の場合に云つたことであるが、こゝで繰返して斷言したいことがある。――それは眞理と云ふものは地下に埋められてゐても、育ち、蓄積して、爆發力を持つやうになると云ふことであります。そして、これが爆發した時何もかも吹き飛す凄じい力を持つようになると云ふことであります。我々は、この及ぶところの大きい災禍が、遠からぬ將來に起るようにして火藥を埋めてゐるわけではないが、これもいづれは判明することなのであります。

　大分長くなりましたから。結論を申上げることにします。それはからであります。

　余はデュ・パチイ・ドゥ・クラン大佐を彈劾する。これは、大佐が不知不識（と信じたいものだ）裁判の過誤を起すように惡魔の手先になつて働いたからだ。この恐怖すべき仕事を守るために、この三ケ年にわたつて不條理極まれる陋劣な術策を用ひて來たからである。

　余はメルシエ將軍を彈劾する。これは薄志弱行からと思はれるが、この有史以來の大犯罪に自分から共犯となつてゐたからである。

　余はビヨオ將軍を彈劾する。將軍はドレフュスの無罪の確たる證據を手に入れながらこれを隱蔽したものである。更に、參謀本部の體面をつくらはうとして政治的動機から人道と正義を賣つたからである。

　余はボアデッフル將軍並びにゴンス將軍を彈劾する。これはボアデッフルは宗教的偏見からゴンスは軍人的精神から、右の罪惡の共

犯となつて働いたからである。

予はペリウ將軍とラヴアリ少佐を彈劾する。これは陰險なる查問を行つたからである。即ち最醜陋なる偏見を以て查問に當つたからである。二人が作成した報告書の全體が、厚顏無恥の不滅の記念塔と見てよいからである。

予は、三名の筆蹟鑑定人、ベローム、ヴアリナール、及びクウアルの三氏を彈劾する。彼等が視力と反斷力に缺陷あることを醫學の實驗に依つて立證出來ない限り虛僞の報告を作成したと云ふことが出來るからである。

予は陸軍省を彈劾する。これは輿論の方向を謬らしめる目的の下に新聞特に「レクレエル」及び「レコオ・ドウ・パリ」を使つて陋劣な宣傳をさせたからである。

最後に予は最初の軍法會議を彈劾する。これは被告に隱した證據に依つて罪を斷じ一切の人權を蹂躙したからである。更に予は第二回軍法會議を彈劾する。これは命令を受けて、第一軍法會議の不法を隱匿し情を知りつゝ犯罪者を放免したからである。

以上の彈劾を提起するについては、私自身が千八百八十一年七月二十九日付を以て名譽毀損に關する處罰を規定した誹毀法に觸れることを承認するものであります。私は進んで處罰せらるる覺悟であります。

自分が彈劾した人々については、孰れも未知の人々であり一面の識もないのであります。從つて彼等に對しては怨恨も、憎惡も抱いてをらぬのでありますが、私の見るところでは彼等は社會的の邪法行爲の表徵であり實體なのである。私の行動は、單に眞理と正義の爆發を促進させようとする革命的な第一步に過ぎないものであります。

人類の隱忍は久しいものでありますし、幸福への權利を有つものと云はねばならぬ。私は全人類に代つて、光明を熱望するばかりであります。この烈しい抗議は自分の魂の叫びなのであります。彼等が私を法廷に立たせようとするなら、さうさせてやつて頂きたい。審理を白晝の光の中で行はうではありませんか？

閣下、私は、禮拜して、それを待つものであります。敬具。

騷ぎは恐ろしいものとなつた。敵も味方も顏色を變へた。まつたく、これは晴れた空から落ちて來た雷であつた。

參謀本部は狼狽した。

ゾラ？

小說の本が一册もないのを家庭の神聖を守つてゐる所以だと、日頃の心掛けとしてゐる立派な將軍であつたら？　將軍はゾラが何者か知らなかつた。

「ゾラとは何ですか？」

「小說を書く男です。なに、つまらん小說家です。」

モオパッサンの小說に出て來さうな腰の悍しい髯に香水の匂つてゐる青年將校が、女優のナナの淫蕩な姿を、嚴格な上官の怪しむやうな顔付にかぶせて浮き上らせて見ながら、將軍たちの好むてきぱきした口調でかう答へたであらう。

「小說家！」

將軍はこれを意外とし心外としたらう。小說家などゝ云ふ動物が、佛蘭西の軍隊を云々する！――この將軍が二人になると沈黙する。肩をあげる。腕をひろげる。三人になると激昂する。會議室へ入つて戸を閉める。

オーロール新聞社――こゝは祝辭の山だ。シャンペンだ。徹夜の働きに疲れた職工たちも卓の上から起き上つて來てゐる。握手だ。電報だ。電話のベルだ。

やりましたなあ。

さつたく、思ひ切つて。

萬歳だ。

ぐうの音も出まい。

ゾラ先生は？――ゾラは家にゐて自分の部屋に籠つてゐる。目の前の宙に見詰めなければいけないものがあるやうに感じて時々眉を寄せる。鼻目鏡の玉が光る。立ち止る。窓の外は冬空で、よごれた巴里の町がいつもの、ひくい唸り聲のやうな響を送つて來てゐる。――

オーロール新聞社の前は人だかりだ。若い學生が多い。人の出入りを見送つて何か囁く。昂奮して喋つてゐる一群、――その中に、後のマルセル・プルーストもゐた筈である。

それから反猶太主義のリーブル・パロル新聞社では、アンリ・ドリュモンが客に圍まれて怒號してゐる。記者は血眼でペンを走らせてゐる。輪轉機が唸りながら廻つてゐる。壯士たちがいつでも出動すると云つたやうな凄い顔付を並べてゐる。軍服の客が入つて來る。猶太人と云ふ言葉が頻りに聞こえる。

「決鬪がいゝ。なアに、へなちよこ文士だ。」

かう云つたのは代議士の男だ。それでなくても何となく空氣に殺氣が動いてゐる。こゝでも社の前のペーヴメントを埋めて愛國的群衆が刻々と集つて來てゐる。客は皆志士的な悲愴な顔付で入口まで苦勞して人波を分けて來る。――

佛蘭西が事件を挾んで左右の陣營に分れる時が來た。ゾラの家、オーロール新聞社がその夕方からモッブの中から飛んで來る石の雨で硝子窓を破られることになつた。

ゾラを出せ。

セーヌ川へ叩き込め！

これであつた。

機敏な本屋は、この軍國の敵が書いた小說を飾り棚から除くことにした。果して數日後にゾラの小說は賣行がとまつたのがわかつた。

ゾラ！　ゾラ――ドレフュスの名を蔽つて、急にこの名が憎惡の的

となつた。モオパッサンが「このくらゐ目に飛びつくやうで忘れられない名前はないだらう。まるでラッパの音符を二つ並べたやうな名だ。この人に呼びかける力の強さはどうだ？ から云ふ名の家に生れたと云ふのは大した倖せだ。」から云つたそのゾラと云ふ效果絶大の名が――小說を知らない佛蘭西人の耳にも、いやでも飛び込むことになつた。一方の憎惡の的となつて、消えないことになつた。

ゾラを仆せ！

ほかの人間、ほかの名前だつたら、あるひはこれだけの憎惡も呪咀も呼ばなかつたかも知れない。アランの言葉を借りれば事件が「裁判の誤審に對する反抗」から「頷くことを欲しない倨傲な權力に對する反抗」となり、「奴隷戰爭の一つの場合」となるまでに戰線を擴げた（Alain: Mars ou la Guerre jugée）のは、まつたくゾラの功績である。ゾラと云ふ鋭どい名は横暴な支配者の心臓を狙つて奴隷が突き刺した槍の穗尖になつたわけである。――一九三〇年の紐育の化粧品王でも、彼が賣り出さうとしてゐる新しい白粉に、これだけ効果のある名前を考へられないであらうくらゐに。

役者

時代は、日本で云へば日清戰爭が濟んで露西亞との雲行が險惡になつて新しい戰爭の準備をしてゐた時代のやうに軍國的であつた。殊に佛蘭西人は戰爭に破れて敵の軍馬に首府を蹂躙せられた記憶をなまなましく心に刻みつけてゐた際である。リーブル・パロル新聞以下の國粹新聞が砲門をひらいて無茶苦茶の爆撃を加へるやうになつてから、ゾラの身邊はまつたく危險なものになつた。

投げた石の反動は意外に大きかつた。恐らくゾラ自身もこれを豫期してゐなかつたらう。性格としてあて氣がなかつたとは云へないゾラは、彼の傳記を書いたエドモン・レペルチエが云つてゐたとほり、事件に對する純粹な公憤だけからこの文章を書いたのだとも思はれない節がある。

これは後に自分でレイナックに告白してゐる。

『私は立役の女優のやうに誰れかほかの者が同じことをやりはしないかと心配してゐた。クレマンソーあたりが、この役を取るのぢやないかと。』

すくなくともゾラは勝利を期待してゐたのである。征服慾と大望のあるゾラは勝利の瞬間を夢見てゐた。文學の著作だけで得るものと違つて別の人氣を得るだらうと幾分か期待を持つてゐた。（Edmond Lepelletier: Emile Zola）

世間は、そんな、なま優しいものではなかつたのである。自分がつけた火から思ひがけない大火事となつた。當人があきれた。家にはゐられなくなつた。外を歩くのも危險になつた。しかしこれは、この自然主義文學の創始者の胸に奇怪にも住んでゐたロマンチシズムが突崩されただけであつた。喜劇役者が舞臺へ出てから氣がついて見たら、

その幕は極端に眞面目な悲劇だつたのである。(いや、立派に沙翁劇の一幕だつた。)ゾラは、喜劇をなくした。彼を指して齒ぐきを剝き出して喚いてゐるモッブを見まもつた。眞理が進みつゝあると云ふことも、幻影だつたやうである。この民衆はどうだ？　僞國粹主義者の吹く笛で踊つてゐる大衆はどうだ？

　ゾラを殺せ！

　獨探をやつつけろ！

　驚きはしない――と、ゾラは思つた。

『憎惡。』と、彼はその昔書いた。『これは健全でよいことだ。強者の怒りだからである。凡庸と暗愚に迫害された者が抱く鬪爭的な輕蔑だからである。』

　ゾラは思ふのだつた。――恐らくは、多少の感傷を混へて、――ずつと不遇に育つて來た青年期の自分がいつも多勢の敵を向ふに廻した「人外」を以て自負して來たことを思ふのだつた。そこでは憤怒と恍惚とが二枚の濡れ紙のやうに、ぴたりと合さつてゐたのだ。――その後の文壇的な成功が彼を世間師に變形させたのならば、それが間違つてゐたのだ。

『その頃のゾラは、義務を果した人間にふさはしい良心の落着きを見せてゐた。單純そのもの、冷靜そのものであつた。』

　セヴエリスがかう書いてゐる。

　ゾラは、自宅にゐるのが危險になつたので友人の家を廻つて泊めて貰つてゐた。新しい友人の數が殖えてゐたことは事實だつた。學生たちが(マルセル・プルーストもその中にゐる)ゾラのために請願を出さうとして三千人の署名を集めて來た。デュクロオ、アナトール・フランス、オクタヴ・ミルボオ、セアイユなどが公然とゾラに味方して來た。ジョオレスやトラリユウのやうなコレクチヴストの政治家がドレフユスに味方する態度を鮮明にして來たのもこの頃からである。戰線は國を二分して伸びた。權力者とこれに反抗しようとする奴隷と。國粹主義の陣營と彼等の所謂「猶太人の陣營」とか。

告發

　不審に思はれるのは、過激な新聞の論調と國民の憤激の中に、政府がゾラを拋棄してゐることであつた。佛蘭西軍隊の名譽を瀆し國家を侮辱した男を、告發さへしないでゐることであつた。

なぜだ？

なぜ、檢事局は動かないのか？

裁判にかけろ――國粹主義の新聞は無論のこと、中立の立場でゐたものもかう叫んでゐる。奇怪なのは、猶太人の陣營からもこれを要求してゐたことであつた。

裁判、裁判――次第に昂まつて來るこの叫びに反對したのは、賣國奴エステラージーと參謀本部だけであつた。

　エステラージーは云つた。裁判なんか無用だ。眞に傳統のある國で

は、ゾラのやうな惡黨は、とつくに牢へ投げ込まれてゐるだらう。參謀本部の將星たちは、一致して默殺を最善の戰術と見たやうであつた。たかゞ三文文士を相手に取つたところで、不名譽になるだけだと云ふのであらう。あんな出鱈目を取上げることはないと云ふのであらう。あるひはビヨオ將軍が別の場合に演說したとほり、手傷は軍人の名譽で、氣にすることはないものと信じてゐたのかも知れない。いや、さうではない、愼重にやらぬと猶太人の罠にかゝると危まれたからだ。何よりもドレフユスのことが問題になるのが怖ろしかつたからだ。

　ところで輿論は默つてゐなかつた。將星たちを激勵して來るのである。軍隊を侮辱されて平氣でゐるのか？　たうとう軍部は動き出した。無論作戰に遺漏なく研究を積んでからのことだつた。一月二十日になつてゾラは告發を受けた。

　然しながら、告發はオーロール新聞に掲載された記事の全部についてではなかつた、その極く一部分、軍法會議に關係したくだり、「命令を受けてエステラージーを放免した」と公言したのが讒謗にあたると云ふのが理由であつた。そのほかの部分は默つてゐるのである。それは必要だつたからだ。パンドラの函のやうに、手をつけたらどんな化物が飛出すかわからないのが怖ろしかつたからだ

　この、いつものことながら卑怯な相手方の作戰がわかると、ゾラの味方は憤慨した。敵の得意の手なのだ。こちらは裁判を機會にして、軍部のからくりを暴露しようと思つてゐるのである。ドレフユス事件をもう一度明るみへ持ち出さうと計畫してゐるのである。

　公判は二月七日と定められてゐた。

　ゾラには、若いが敏腕なフエルナン・ラボリと、クレマンソオの兄弟のアルベールが辯護に立つ。同時に告訴されたオーロール新聞のためには、虎のクレマンソオが辯護に出る。ラボリ辯護士の作戰は、證人喚問の方法で內閣大臣の參謀本部の將星たちを法廷へ引出さうと云ふのである。その人數を調べて行く內に二百人に達した。

裁判

　敵味方の熱狂の裡に二月七日は來た。町には聖バルトロメオの晩の虐殺でもありさうに殺氣が漂ひ、裁判所の外にあるドオフイン廣場は群衆で埋つてゐた。安芝居の舞臺にありさうな騷々しい愛國者の群や猶太人排斥の先鋒たちが、警衞の巡査が特に寛大にしてくれるのをいゝことに、我物顏にまた威嚇的にあたりを睥睨して立つてゐる。軍人が通ると群衆は歡呼の聲を揚げ喝采をあびせるのだつた。殊にその熱狂が極點に達したのはエステラージーが姿をあらはした時であつた。ゾラの味方は昂奮にふるへながら、無言でこれを見まもつてゐるのだつた。軍隊の萬歲が怒濤のやうに起つて、法廷の內部にまで聞こへて來てゐた。

　法廷の傍聽席も、かう云ふ場合に當然のことで、平服の軍人に占領

されてゐた。こゝでも示威的な言動が繰返されてゐて、守衞も愛嬌を見せて微笑を向けて僅かに制するだけであつた。軍法會議でない一般裁判所でも、立派に軍國化されるものなのだ。

『ゾラは友人に護られて静粛に出廷した。』エコウ・ドウ・パリの當時の記事にはかう書いてある。これは、反ドレフユス的色彩の濃厚な新聞である。『昂奮を見せてゐたが快濶に見えた。時々ぎこちなく手を動かして口髭をなほしたり、釣上つて來るクリーム色の胴着を引張つてさげるだけである。ゾラはずつと杖に顎をのせて前屈みの姿勢を採つてゐた。護衞に來た友人と云ふのは、クレマンソウ兄弟、ラボリ辯護士、デムーラン。ゾラの本の出版者のフアスケル、音樂家のブリユノオ。印象派の畫家のクロオド・モネエが體格が大きいので人目を惹いてゐた。ドレフユスの兄マチウ。憐れな妻のリユシイも來てゐた。裁判長のドラゴルグ氏は肥つた軀を起して立ち上つて、辯論が告訴の範圍に限らるべきことを注意して、先づ被告側に暗い影を感じさせた。

申請してあつた證人は却下されるか、陸軍大臣が許可を與へないと云ふ理由で出廷しなかつた。それのみか、裁判長は裁判に不必要として要所々々で發言を停止させた。リユシイ・ドレフユスが立つた時などは、頭からこれを喰らつて斥けられた。ラボリ辯護士が如何に說いても裁判長は頑として肯じないのだつた。

ゾラは憤然として立ち上つた。

『證人を呼ぶ權利は人殺しや泥棒にも認められてゐるのであります。私はそれと同じ權利を主張してゐるのであります。』

裁判長は、これを被告の發言する時でないと云つて法律の規定を擧げた。

ゾラは叫んだ。

『私はあなた方の法律を知つてゐません。また知らうとも思ひません。』

この時に傍聽席は沸騰したやうに見えた。温厚な紳士までが拳を振つてゾラを惡罵した。(エコウ・ドウ・パリ)

それからは絕えない罵聲の中に、ゾラは叫んでゐた。

『私は發言しなければならぬ。辯解を聞いて貰はねばならぬ。何も私は法律を無視すると云つてゐるのではない。私が書いたことの一部分だけを截りはなして、そこから一歩も出てはならぬと云ふ。私の口を塞がうとしてゐるのだ。かゝる偽善的な裁判手續は私を無視すると云ふのである。』

第一日は、無駄に七時間の長い討論をしただけで閉廷した。第二日は、證人に呼ばれたシユウレ・ケネストネーがゴンス將軍がピカール大佐に宛てた手紙を提出した。これも法廷で朗讀を許されなかつた。それとピカール大佐の友人ルブロア辯護士が證言を與へた。この日は朝から前日よりも不穩の空氣が群衆を動かしてゐた。朝の新聞の論調が前日に群集が「國賊」を前に見て平静すぎたやうだと煽動をしてゐ

たのも原因であらう。モツプは裁判所の内にまで侵入して來てゐて、ひしめき合つてゐた。ゾラが友人たちに圍まれて階段を降りかけると、群衆は雪崩れ打つて突進して來た。警察などはもうないのだ。

この口々に喚きながら自分に襲ひかゝつて來る人波をゾラは見た。無論殺されるのだと感じた。友人たちはすぐゾラを外套部屋へ押込んで逃げさせた。

階段の下では

『ゾラ萬歳！』

と叫んだ若い男が押倒され袋叩きになつて昏倒した。やつと警官と守衞が出て來て鎭撫に當つた。その時分になつて、ゾラたちは別の出口から階段を降りた。

ラボリ辯護士と、デムランと、ブリユノオと、クレマンソオの三兄弟と、ゾラをつゝみ死を覺悟の一塊りになつて、下に泥の浪のやうに詰めかけてゐるモツプを目ざして段を降りて行つた。人で眞黑になつた地面が目の前で動いてゐるやうに感じられるのだ。

ゾラは蒼白になつてゐたが、顏を持上げてゐた。(エコウ・ドウ・パリ)七人は、海のやうなモツプの中に降りた。馬車のあるところまで左右から詰めかける群衆を分け、壯士たちがモツプを煽動してゐる聲を首筋に聞きながら歩き續けた。あたりは薄暗くなりかけてゐた。夜になると、どんなことになるかわからないのであつた。

七人は馬車に辿り着いた。

轍が鳴つた。モツプは恐ろしい鯨波を揚げた。馬車の窓を外から叩くのだ。頸の骨が折れさうな勢で馬車は進み出た。ゾラはクツシヨンに仆れたまゝだ。やつれて別人のやうに見える顏に目だけがぎらぎら光つてゐるのだ。

モツプはどこまでも馬車を追つて走つてゐた。

二月九日。ラボリ辯護士は雄辯をふるつて闘つた。どんな挑戰にも敢然として應じた。生れつきよく響く聲が法廷を征服した。すこしの疲勞も見せずに、長時間の辯論であつた。これだけは奪はれずに居る法律の規定が唯一の武器なのである。

次いで將軍連が證人として喚問された。ホアデツフル將軍がドレフユスが適法に妥當に裁判せられたことを、「軍人の名譽にかけて」宣誓した。しかし、その他の點については、「職務上の祕密」の一點張りで、答辯を與へなかつた。

ドレフユスの裁判の判士の一人が出廷したが、良心の苛責を感じたと見えて卒倒しかけた。裁判長はすぐ退廷を命じた。

デ・ユ・パチイ・ドウ・クラン大佐が出廷した時は流石に傍聽席が動搖した。これはゾラが事件の張本人と目指してゐたからだ。無論大佐の證言は役にも立たぬものばかりであつた。

次いで情報局長アンリ大佐が出廷した。大佐は地方出身の軍人らし

い無骨な風采と言動で一番軍人らしく單純で正直に見えた。しかし一面に地方人にある、狡猾さと頑固な氣性があることをつつめなかつた。大佐はピカル大佐のことになると露骨に惡口を云つた。

翌々十一日には、ペリウ將軍がゾラを侮辱したので、ゾラは怒つて立ち上つて云つた。

『サーベルをとるか、ペンをとるか、國に盡す途は、人に依つてさまざまであります。ペリウ將軍は戰場で勝たれるかも知れませんが私もまた自分の勝利を得てゐる。私の著作を通じて佛蘭西の思想は世界の隅々まで擴がつた。ペリウを取るかエミール・ゾラを取るか、これは後の時代がきめることであります。』

この後で、ピカール大佐が證人に立つたので、被告側では、熱心な期待をこめてその言葉に耳を傾けた。しかし、結果は絶望的であつた。この軍人としては上品で憂鬱の影さへ見える大佐は、なほ將軍たちの陰謀を暴露するまでの決心がつかなかつたのだ。言葉數も少なく極めてつつましい陳述をしただけであつた。

しかし、これだけでも軍部では、大佐を裏切り者と見たのだ。翌十二日にアンリ大佐が『ピカール大佐の云つたことは眞赤な嘘だ。』と云つた時、ピカール大佐はかつとしたらしくアンリ大佐を毆らうとして腕をあげた。

それを怺えて、踏み止まると

『君がそれを云へるか！』

と叫んだ。

それまでの強い自制の堰が一度に決れたのだ。大佐は紙のやうな顏色になつて陪審席の方へ向きなほつた。

『陪審の諸君に申上げる。皆さんは、アンリ大佐、グリブラン、ロオト等が何の證據もなく如何に汚らはしい非難を私に向けたか、御覽になつた。何のために私がこのやうに侮辱されねばならぬのか？……』

驚愕したのは、列席の軍部の人々であつた。遮らうにも、ここは軍法會議とは違ふのである。裁判長はまだこの發言をとめないのだ。水道の栓がこわれたやうにピカール大佐の、陳述は流れ出して行くのだ。

『これは前の事件ドレフユス事件を作つた人々が八方その判決を覆すまいとしてゐるからだ、私は情報部長を勤務してをりました時、いつまでも錯誤にかじり附いてゐるよりも、ほかに何か方法があらうと考へたものであります。そのために、私は、今日まで、幾年幾月となく、金に買收された新聞で叩かれて來たのであります。あらゆる侮辱を受けたのであります。忠實な軍人として私は怖るべき立場にゐる。名譽を毀損されながら防ぐ方法もないのであります。私を苦しめ辱しめるのに、どんなに計畫的にやつてゐることか……』

ゴンス將軍が席から立上つて頻りと裁判長に呼びかけてゐた。傍聽席は墓場になつたやうに沈默してゐる。被告側の席では、ゾラ、ラボリ、クレマンソオの面々が、植木が雨にあつて蘇つたやうに輝いた顏を擧げてゐる。初めて光明が感じられたのだ。

しかし、原告側はいつまでもこれを許して置かないのだ。裁判長はゴンス將軍のあはたゞしい申出を容れた。世間慣れた將軍はピカールを沈默させるのに先づ成功してから、圓轉滑脱な話振りで、ピカール大佐が自分の古くからの親友で、有爲な人物であること、途中からいろいろ同僚間に誤解もあつて、大分ひねくれたやうに見える節もないではなかつたが、とにかく將來のある人物で軍部では今でも期待をつないでゐるくらゐだし、誤解は誤解として、さう云ふ時が來るのを友人として私などは最も切望してゐるわけである。——好い爺さんだし、如何にも話がうまいのだつた。ところで、これが口惜しいにも何にも、單純なピカール大佐には一番利くのだ。ゴンスは長く交際して來たし部下を見る眼は天才的だから、そのこつをよく心得てゐて、ラボリやゾラが切齒してゐる前で、うまく揉みほごして行くのである。

しかし、惡いことは出來ないものだ。こゝにアンリ大佐と云ふ愚直な人間がゐて、ピカール大佐とは犬猿の仲だし、ゴンスのやうな將軍がピカールにこんなに優しく話すのを、自分の立場を無視するものと見たのである。(何だ、ピカールが、裏切り者ではないか、國賊ではないか?)惡いことは、アンリ大佐のやうな硬い頭には珍らしくないことで、いつの間にか、自分たちの仕事と現實とを混同して來てゐる。誠實で謹嚴なだけに、ゴンス將軍のやうに進退の妙を知らないのである。

この男が、逆上したとしか考へられない方法で、雄辯に喋り出したのだ。もつともこれは、ドレフュスの有罪の「絶對的證據」として擧げたわけだつたが、「密書」以外に斷罪の基礎となつた書類のことを口走つて終つたのだ。

天祐だつた。

ラボリ辯護士は立ち上つた。豹のやうにこれに喰ひ下つて、放さなかつた。

『その書類です。ドレフュスはそれを知つてゐましたか? 被告のものだと云ふ證據は充分だつたのですか?』

煌星のやうに並んだ將軍連が一度に蒼ざめた。

ペリウ將軍が

『無論だ。』

と、傲然と云ひ切つた。

が、追究されて存外もろく泥を吐いた。——私は當時のことはよく知らない。ボアデッフル將軍から聞いてくれ。

猶太人の陣營では、ゾラもラボリもクレマンソオも、たうとう漕ぎつけたぞと思つた。久し振りで、太陽を仰いだ心持だつた。隱さう隱さうとしてゐる敵を相手に廻して巧みにこゝまで引出して來たのだ。被告は被告席にゐないで原告席に座つてゐることに成つたのだ。若いラボリはいつの間にか舞臺を百八十度だけ廻轉させて終つてゐたのだ。

然しながら、それを見て、これはと思ふのは、やはり限られた味方だけであつた。輿論は、それを見まいとしてゐるのだ。反つて軍部の

敗退を見れば、そこに猶太人の陣營の、ドレフュスの味方の、奸計の恐しさを感じるだけなのだ。それに右黨の諸新聞は傷付けば傷付くだけいよく\／喧騒に獸のやうに咆哮して、國難を絶叫してゐるだ。

軍部はそれを知つてゐる。仆れるまで絶望することのない人々だ。もとの參謀總長ボアデッフル將軍は、次の日の法廷に姿を現した。將校が相手に取つたのは、陪審席にゐる祖國を愛するであらう紳士諸君である。理屈ではない、諸君がこゝにゐる被告並びにドレフュス主義と、佛蘭西の軍隊と孰れを取るかである。それからラボリの追究に對しては「自分が軍人の名譽にかけてドレフュスの有罪なることを誓ふ」この槍一本の軍人的な應對だけである。

流石のラボリが棒立ちになつた。

エステラージーが登場した。

この男はゾラを指さして云つた。

『この連中には、自分は斷じて口をきくまい!』

ゾラは、杖の上に頸を乘せて屈んで默然としてゐる。

ペリウ將軍が立つて發言した。

『あはれな兵卒のことを考へて貰ひたい。佛蘭西の軍隊は、こんなにも名譽を毀損せられた指揮者に率いられて戰場へ向ふことだ。……陪審員諸君、誰れでもないあなた方の子息がですぞ。どこへ行くのだ? 屠られに、殺戮されに。さうなつたらムッシュウ・ゾラはまた新しい勝利を得られると云ふものでせう。そこで、もう一册、小説「敗軍」を書かれることだ。ムッシュウ・ゾラは歐羅巴中に佛蘭西語を擴げるかも知れん。しかしその時には、佛蘭西と云ふ國は歐羅巴からなくなつてゐるだらう。』

ゾラは、顏を起して目をあげた。もう憎む力もなかつた。この素張らしい演説をした好漢ペリウを見まもつて、微笑しただけである。

二月二十一日には檢事の論告があつた。

『澤山の小説を書いて知名になつた人物である。……この者が全佛蘭西の顏に恐るべき侮辱を加へた。……動機は單にこれで有名にならうとしたものである。軍法會議が軍部の命令を受けてエステラージーを放免したと云ふのであるが、證據とすべきものは皆無である。』

ゾラが立つて陪審席に向つて發言した。

『私がこゝに被告となつて立つたのは、自分一個の自由な意思から、恐怖すべき疑獄の一切を諸君の審理に掛けたいと思つたからである。我々は、闇黑を望む執拗な意思とは歩一歩闘つて行かねばならぬ。――私が軍隊を侮辱したと云ふが、そんなことはない。自分の行動の是非については歴史に任せておく。軍隊を侮辱したのはエステラージーを庇護した賊どもなのである。

それからまた、自分が猶太人に買收されたのだと云ふ風説については、かう云つた。

『私は打たれゝば打たれるだけ偉大になるのだ。正義と眞理のために惱んでゐるものは段々壯嚴になつて來ます。私の顏を御覽なさい。節

操を賣るやうな人間、嘘つき、裏切者に見えますか？』

人は確かに氣を呑まれてゐた。法廷は高い丸天井にまで水を打つたやうに森としてゐた。ゾラの言葉は壯嚴に響いてゐた。

最後にかう云つた。

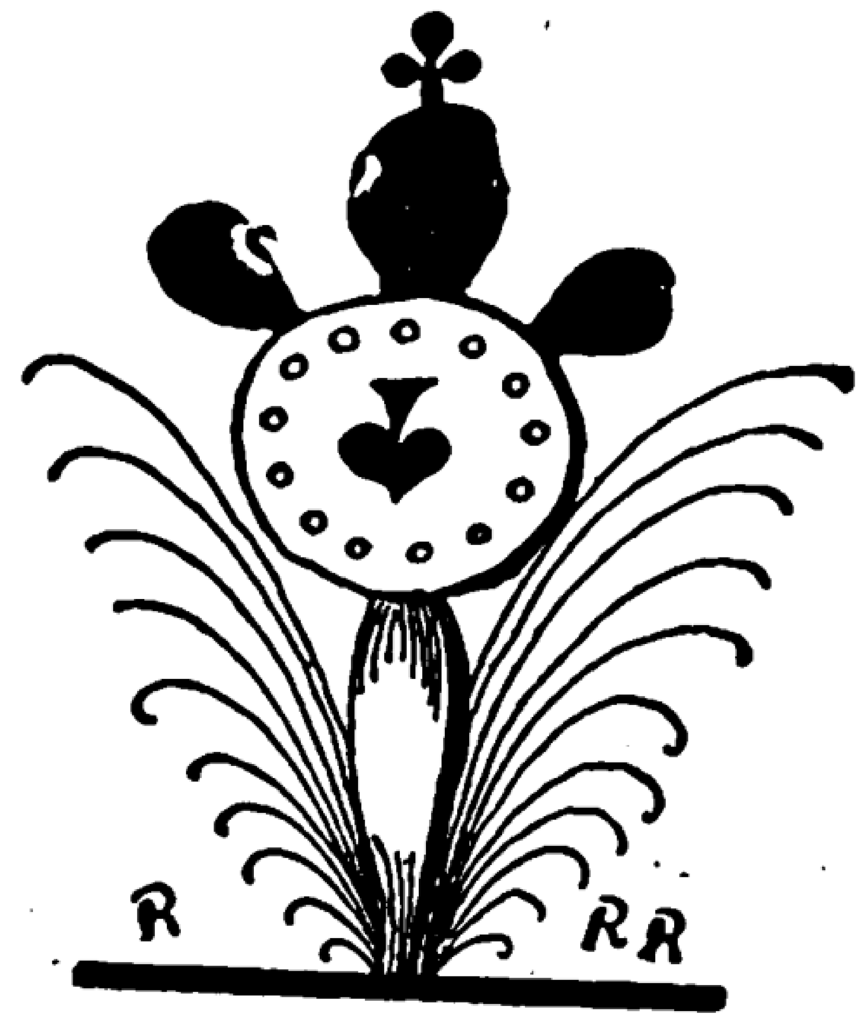
『ドレフユスは無罪であります。自分はそれを誓ふ。命も名譽も賭けます。この嚴肅なる時に於て、人間の正義を代表するこの法廷に立ち、國民の表象たる陪審諸君の前に立ち、全佛蘭西全世界の前に立ち、私は誓ひます。ドレフユスは無罪であります。

自分の四十年間の勞作、その勞苦が私に與へ得た權能に賭けて、私は誓ふ。ドレフユスは無罪であります。

更に私が贏ち得たる總てに賭け、自分の得たる名聲に賭け、我が國文藝の發展を助けたる我が述作に賭けて私は誓ひます。ドレフユスは無罪だと。――萬一、ドレフユスが無罪でないならば、總てそれらが失はれ自分の著作の全部が廢滅しようともかまはない。ドレフユスは無罪なのであります。

總てが私に反對してゐるやうであります。上下兩院も、文武兩側も大新聞も、更にこれら大新聞に毒された輿論も。私の味方は思想だけであります。眞理と正義との理想だけであります。しかしながら、私は驚ろかない、やがて私が勝つだらう。私は我が國が虛僞と不正を除くように願つたばかりでした。その私は今こゝで有罪を宣告されるだらう。然しながら後日佛蘭西はその名譽を救ふように私が微力を盡したことで、私に感謝するに違ひない。』

こゝで靜かにゾラは席に戻つた。（續）



歐洲の裸體文化

伊集院齊

ヨオロッパを一人で旅行してゐると、時々妙な婦人に出遇ふ事がある。

私が二、三箇月巴里に滯在してゐる時の事だつたが、或る日、リユクサンブールの公園を散歩して、ベンチに腰掛けて休んでゐると、其處へ一人の婦人がやつて來て、私に英語で話しかけた。それによると、彼女は英國人で、一昨日ロンドンから巴里へ旅行して來たのだが、巴里には一人も友達がないし、それに佛蘭西語が出來ないので困つてゐる。ホテルでも何だか馬鹿にされるし――高慢ちきな佛蘭西人！――美粧院へ行つても亞米利加人並みに特別扱ひされて、高い金をぼられる。こんな調子では、うつかり買物も出來ない。レストランへも行けない、と云ふのである。そして最後に「私、手袋を買ひたいのですけれど、濟みませんが、買ひに連れて行つて下さらないでせうか？」

始めて此處で遇つたばかりの私に對して、これは餘り馴々し過ぎる。婦人と一緒に買物に行つたら、代は先づ私が拂はなければなるまい。こいつ、俺をなめてるのかな！と考へてゐると、彼女はそれと察したのだらう。ハンド・バックの口を開けて、百フランの札を取り出した。「若し好かつたら、これで拂つて下さいな」

私は彼女と連れ立つて公園を出た。そして少し行つて、一軒の手袋屋に這入つたのだが、其處で一寸まごついた。と云ふのは、彼女は七インチの大きさだと云ふのだが、佛蘭西はメートル制でインチが通用しないし、私はインチをメートルに直す計算を知らないと來てゐる。仕方なしに、彼女の手に合はして見て、兎に角一つ買つた譯だが、その際、私はそれが彼女の手にぴつちり合つてゐるか如何かを見るために、手袋に包まれた彼女の手や指を撫でゝ見なければならなかつた。彼女の方でも、私に對して、小さな聲で――云ひ換へれば、如何にも親しさうに――色合や値段の相談をした。彼女にして見れば、若い女賣子達に、見ず知らずの男と一緒に來てゐると思はれたくない、と云ふ所もあつたのだらう。いづれにしても、其處で手袋を買つて、さて、以前よりは少し親しくなつて、又は親しさうに裝ひながら、其處

を出たのだが、すると彼女は今度は、珈琲を飲みたいと云ひ出した。宜しい！ 國際的にうまい佛蘭西の珈琲。私は彼女を一軒のカフエへ案内した。そして香の高い黒い液體を飲みながら、やつと彼女が私に何を求めてゐるのかを知つた。彼女は社交的にいろんな話をした揚句、私の顔を覗くやうにしながら、云ふのだつた。

「巴里は享樂的な都だつて云ひますわね。あなたはもう巴里はお長いのですの？ もうガールがおありになつて？ え？ え？ あゝ、私、何處か靜かな部屋で休みたくなつたわ。あなた、そんな部屋を御存じなのでせう？ え？ 決して人に見られないと云つた風な……」

彼女が私に然う云ひながら、媚びの眼を送つたり、それとなく私の膝に障つたり、ハンケチを出して、女の體臭と香水の混じり合つた、むッとするやうな匂ひを漂はしたりしたのは勿論である。彼女は何度も「靜かな部屋」の事を云つて、私と一緒に其處へ行きたがつた。だが、彼女に對しては遺憾である。相手が少し惡かつたのだ。私は紳士ではない。婦人の申出に對して何時も敏感に應じようと待ち構えてゐなければならない、あの騎士道精神の體得者ではなかつたのである。

後で友人達にこの話をしたら、彼等は大變に殘念がつた。そいつは惜しい事をしたゞの、千載一遇ぢやないか、などゝ云つた。

千載一遇？ だが、私は然うは思はないのだ。職業上いつも一人で旅行しなければならなかつた私は、その後も何度かこの種の婦人に出遇つてゐる。

ニウルンベルグで遇つた婦人も、矢張りこの類ひだと考へて好いだらう。ライン地方の人で、獨逸語と佛蘭西語を流暢に喋舌つたが、この婦人とはデューラーの家で一緒になつて、そして二人で町も見物して歩いたし、晝飯は歌劇で名高いハンス・ザクスの家で食べたし、晩飯は彼女のホテルで食べた。私にとつては、彼女は教養のある良い案内役だつたし、彼女は又、異邦人たる私の感想や批評に好奇心を持つたらしいのである。少くとも私は然う思つてゐた。ところが、食後の葡萄酒を飲みながら、彼女は「あなたは多分、二十三か四でせうね」と云ふのだつた。實際よりは十も若く見てゐる。元來、日本人はヨオロッパでは若く見られる。第一に體が小さい。流暢に喋舌れない。ヨオロッパ風の禮儀に馴れない。おまけに概して髪が黒い。ヨオロッパでは、氣候の關係だか、食物の加減だか知らないが、三十にして頭の禿げない男は稀である。で、これらは總てヨオロッパの子供の特徴だから、だから若く見られるのだらうと思ふが、このライン地方の婦人は私を二十三の若者と見て、多分特殊な興味からだらう。私にヨオロッパの戀愛の技術を教へた。大變な案内役！ そして「私の部屋で少し遊んで被居しやいませんか？」と招待したつけ。

瑞西のライン瀧で遇つた、勞働黨員と自稱する英國婦人、ミラノのホテルで知合ひになつた西班牙の婦人、等々については、此處には述べない。總てこれらの婦人がヨオロッパの紙屑とも云ふべき街上婦人

の類ひでない事は、又、全ヨオロツパの賭博地や療養地を渡り歩いて、弗やポンドを掻き集めるのを仕事にしてゐる、例の婦人達でない事は確かである。私にもそれ位の見分けは付く。彼女達は明らかにシロートである。少しは金のある、そして少しは教養もあるシロートなのである。

この際注意しなければならないのは、彼女達が殆んど總て三十代の婦人だといふ事である。この事は容易に、生理學的な説明を引出すものであらう。彼女達は爛熟期にある！　だが、私はもつと社會史的に考へる方が、當面の事實の核心に觸れるものだと思つてゐる。

今三十代の彼女達は、十年前には未だ婚約時代の娘であつたか、又は結婚して間もない夫人達であつたのだ。私は然うした彼女達を、幸福なものとして眼の前に描くことが出來るかも知れない。だが、戰爭は彼女達の相手を奪つた。佛蘭西では百萬の男が死んだし、英國人も二、三十萬は死んだらう。十八箇國を相手にして、六年間も戰ひとほした獨逸では、實に二百萬の男が斃れてゐる。戰後の統計に著しく現れたものは何か。女の過剩！　これである。

結婚とは何ぞや？　これは今日ヨオロツパの指導的な地位にある人々の間で、眞面目に論議されてゐる題目である。佛蘭西の新聞には、時々それについての論説や投書が出る。結婚の相手を見付ける可能性のない若い未亡人や老孃達は、結婚に對して懷疑的になり、否定的になつてゐる。結婚なんて戰前の夢さ。あんな事は長いスカアトと一緒にすたれてしまつた。私に戀愛の技術を教へたあのライン地方の婦人も、嘗ては結婚して、又は結婚しようとして、それを學んだのであらうが、今ではもう結婚なんか諦めてしまつて、たゞ不自然に、病的になつた心身の治療を必要としてゐる。然うだ。彼女が私に教へたのも、實はその治療法だつたのかも知れない。治療法の第一箇條は多分かうだ。少し金でもあつたら、一人で氣輕な旅に出ること。そして一人旅の男に話しかけること。そして……

私はヨオロツパの婦人達の戰爭防止の叫びには、切實な響きがあるやうに思ふ。

直接には戰爭の影響を受けてゐない二十代の娘さん達にとつても、結婚は然う望みの多い代物ではないだらう。成る程、彼女達には丁度年頃の相手はある。少年兵として戰場へ連れて行かれた男達は、大抵は死なずに、今では三十前後の働らき盛りになつてゐる。良いお聟さん達ではないか。だが、男達は結婚に飛び付きはしない。結婚を夢みてはゐない。彼等は生活難の重壓の下にあるのだ。獨逸だけにでも三百萬の失業者がある。英國でもほゞ同數であらう。資本主義の完成は就職難と生活難に反映して來る。ムツソリーニは伊太利に失業者がゐないと云つて威張つてゐるが、それは日本と同じやうに、失業したら親兄弟の厄介になると云ふ風習が殘つてゐるために、統計面に現れないだけの話である。

若し或る娘が結婚したいと思ふならば、彼女は良い伯母さんを持つてゐなければならない。その伯母さんが金持ちで、彼女にも少し位は財産を分けてくれる。そしたら彼女は臺所道具や、椅子、テーブル、衣裝棚、寢臺など、つまり花嫁として持つて行くことになつてゐる一切の家具を買入れることが出來るし、次第によつては、猶ほその外に預金帳の一册もハンド・バックに入れて、持つて歩けるかも知れない。そんな娘だつたら、男もまア結婚してみても好い、と云ふ氣になるかも知れないが、彼女に伯母さんがなかつたら？　へ、女は多いのだ。慌てゝ結婚するには及ばない。

家具付きの部屋を借りることも出來る。それは勿論である。だが、そんな部屋は高いのだ。家具なしの部屋の二倍か三倍は取られるだらう。而も部屋代は、食費、電燈代、水道料などゝ共に、亭主の負擔と云ふ事に決まつてゐる。花嫁は良人への奉仕の外は、自分の衣裳代と小使錢だけを工面すれば好い。考へる迄もない。生活難に襲はれてゐる男にとつては、一生涯、見す〳〵高い部屋代を負擔すると云ふ事は、全くノンセンスに過ぎないのである。

良い伯母さんを持たない、その癖結婚はしたいと思ふ娘は――そんな娘も無いことはあるまい――自分で、少くとも家具代だけは稼がなければならない。何をして稼ぐ？　女が事務所や商店で働らくといふ事は、今ではもう世界的な現象であらうが、同時に又、滅多に仕事にありつけないと云ふ事も世界的な現象である。一例を擧げよう。伯林の百貨店ウエアタイムだけでも、クリスマス前後の繁忙期が濟むと、一時に三百人からの女賣子を解雇してしまつた。

假りに彼女が僅かな給料の中から、何百圓かの家具代を貯蓄することが出來たとする。彼女は男を摑まえることが出來るかも知れない。だが、然うまでして結婚しても、彼女は必らずしも幸福になれるとは云ひ切れない。何故と云ふに、女の餘つてゐる目では、又は結婚しない女の多い目では、男は一人の妻を守る必要がない。都會にも、郊外にも、その時々の相手になつてくれる女は幾らでもある。彼が例へば土曜日の午后、百貨店で女店員に話しかけるとしても好い。彼は紳士的に挨拶してさて「如何です、一緒に晩飯を食べてくれませんか？」と云ふかも知れない。そしたら彼女は、喜こんでその招待に應じるだらう。彼は又、事務所の入口で、ドアを開けて出て來た女タイピストに「今夜一緒にダンス場へ被居しやいませんか？」と云ふかも知れない。勿論、彼女もそれに應じる。斯くて！　妻は空閨に泣く事になる。而も彼女は法律によつて、良人に縛り付けられてゐるのだ。子供でもあつたら、彼女はいつそう慘めである。彼女の容色が衰へるだらうから。私は良人に虐待されて、體に生傷の絶えない若い妻君を三人ばかり知つてゐる。

結婚とは何ぞや？　ヨオロッパにはもう、結婚にあこがれてゐるやうな娘は殆んど一人もゐないと思ふ。勿論彼女達にも戀はあらう。然し戀と結婚とは別物である。戀とは性的生理作用の上部構造であり、

結婚とは一つの——唯一の、ではない——生活手段に過ぎない。私は日本のムスメ達が今でもひそかに家庭の幸福を夢みたり、理想の良人を心に描いたり、青年達の前で顏を赤らめたりするのを見て、何か珍らしい物を見たやうな氣がして仕樣がなかつた。

から云つて來ると、ヨオロッパは如何にも男の天國のやうに聞こえるが、必らずしも然うではない。その時々の相手の欲しい女は澤山ゐても、それには矢張り金が要る。

「あゝ、金が欲しい。そしたら素敵な事が出來るのだがなア……」私の知つてゐる獨逸の一不良少年は、何度も私の前で嘆息した。彼は若し金があつたら、自動車かオートバイを買ふさうである。自動車なら日本貨にして七百圓、オートバイなら二百圓で新らしいのが買へる。ガソリンは四キロにつき二錢。小使は、要領よく使ふとして、月三百圓もあれば好い。そしたら若いのや、老けたのや、痩せたのや、肥つたのや、女が澤山出來て面白いのだがなア、畜生！ と彼は云つてゐた。

自動車旅行の話は今は止さう。五月に始まつて十月に終る所謂旅行季節になると、英國なら先づウエールスの海岸、あの有名な湖水地方、スコットランドの山地、大陸だつたらオステンドの海岸、バイエルの山地、それから瑞西と云つた地方には、女を後に乘せたオートバイの旅行者が實に多い。一時間も大道路に立つてゐるようものなら、無慮四、五十組は通るだらう。革の外套に革の帽子。女はオートバイの後に馬乘りに跨がつて、男の肩に掴まりながら、爆音と共に疾驅して行くのだが、例の不良少年に云はせると、オートバイの機械的な震動のために、、、、、、、、、、、、させられるさうだし、女にして見れば、それは何よりも現代的な遊びであり、何よりもブルジョア的な見榮なのであらう。

活動の一俳優に過ぎないこの不良少年は、今日では未だオートバイを買ふことは出來ないのだから、それは先づ諦めるとしても、彼は猶ほ幾らかの金は持つてゐなければならない。彼は百貨店の女賣子を、土曜日の晩飯に招待しなければならないかも知れない。女タイピストをダンス場に誘はなければならないかも知れない。

元來ヨオロッパでは、女は一人でレストランやダンス場へ行くものではない。若し一人でそんな所へ這入つたら、彼女は街上婦人だと見られても仕方ないのだ。この傾向は巴里では特に著しいやうに見える。少し格式のあるレストランでは、女一人のお客樣はお斷りする。然うでないレストランやカフエでは、彼女は男のお客達にどんな風に話しかけられても腹を立てないだけの覺悟をしてゐなければならない。日本の女の人達が、よく文學の研究や、手藝の研究に巴里なんかへ一人旅をされるが、食事の度毎にお困りだらうと思ふ。だから、レストランへ一緒に行つてくれる男の知人を作つたり、東洋風に一人で行ける支那料理へばかり行つたりされるのだと思ふ。彼女達には思ふ

やうに見物も出來まい。況んや研究をや！　若し彼女が一人でオペラや芝居を見に行つても、多分切符を賣つてくれまい。賣つてくれても、眼障りだと云はぬばかりに、極く隅つ子の方か、柱の蔭になつた座席しか取つてくれない。若し又、美術館なり何なりの歸りが少し遲くなつて、暮れ易い冬の夕方など、一人で街を歩いて歸りでもしようものなら、好色な碧眼の男達は北叟笑むだらう。しめた！　彼處にゲイシヤの國の街上婦人がゐるぢやないか。

　ヨオロッパの女達は率直だし、悧巧だから、レストランやダンス場への招待には直ぐに應じる。勘定は勿論男持ちだ。若し彼女が彼の女友達にでもなるとしたら、彼女は誕生日やクリスマスには贈物を期待するだらうし、次第によつては、彼女の輝やかしい財産となるところの毛皮の外套をも期待するかも知れない。だが、私の不良少年にそれだけの働らきがあるだらうか？　若し彼がそんな女でなしに、金持の未亡人か何かに興味を持たうと考へたら、彼は葡萄酒一本二十圓もするやうなカバレに出這入りしたければなるまい。別誂への黑い服裝、自動車、氣前の好いチップ！　三十二倍の賭博にでも當らない限り、彼には先づそれだけの勇氣はあるまい。

　少しでも金のある男を摑まへた女は、旅行に出たいと望んでゐる。旅行とまでいかなくても、何處か靜かな郊外へ行つて、山の中か、湖の岸にある木造の瀟洒なホテルで、より樂しい夜を持ちたいものだ。週末になると、極く小型の旅行鞄を提げて、地下鐵の入口の邊で男を待合せてゐる婦人達をよく見受ける。又、そんな眞似の出來ない人達は、公園や森を利用する。巴里のブウローニュの森、ヴアンサンヌの森、伯林のグリューネワルトの森、ロンドンのハイド・パアク邊りへ行つたら、人々は眞晝間から、現代の着物をきた牧羊神の戲れを見ることが出來るだらう。靑い草の上で、又は薄暗い老樹の蔭で、互に手を撫で合つたり、相手の肩に手を廻したり、接吻し合つたり、時には又それ以上の事をしたりして、遊び戲れてゐる幾十組もの男女。彼等は石造の四角な部屋の中よりも、野天の下を好むらしい。彼等は自然詩人なのである。

　部屋の中でも、彼等はまた自然詩人であるらしい。彼等はしば〱素ッ裸になる。夏の夜なんか往來を歩いてゐて、兩側の家を見上げると、鎧戶の隙間から、裸體が見える事がある。私の知つてゐる獨逸の一藥劑師は、素ッ裸になると氣持が好いと云つてゐた。これは我々にも一寸肯けないではない。年百年中、朝から晩まで窮屈な洋服ばかり着てゐると、時には肌を空氣にさらして、身輕な運動でもしたくなるのだ。伯林の新聞だつたか、去年の夏、男もあんな窮屈な暑苦しい服を捨てゝ、女みたいに樂な着物にしようではないか、と云つた意味の漫畫漫文が出てゐた。成る程、女の着物なら樂で好からう。だが、女も一人で部屋にゐる時には、矢張り素ッ裸になるらしいのだ。巴里の蓮ッ葉な女達は、夏はしば〱猿股なしで外を歩くが、スカアトはあ

んなに短くても、風が吹かないから、先づ好いやうなものゝ、雛段式になつた劇場の見物席なんかで、不圖後を振り向いて、こつちが赤面してしまふやうな事も時々ある。

情人と一緒に部屋にゐる時にも、矢張り裸かなのであらう。だから、裸體畫はヨオロッパでは決して不自然な主題ではない。裸體の女が熊の毛皮の上に臥てゐるのも、男の肩に凭れてゐるのも、それは現實の一場面に過ぎない。部屋は神聖(?)にして犯すべからず。特に寢臺の置いてある部屋は然うである。我々にとつては、展覽會の工藝美術部が、殆んど七分通りまでダブル・ベッドの寢室の設計で占められてゐるのも、奇異な事の一つである。

我々には何だか淫らなやうに思はれる、かうしたヨオロッパ人の生活も、彼等にとつては當り前の生活なのであらう。人間自然の事かも知れない。だから爲政者達も、別にそれを取締らうとはしない。取締る必要がないのだ。男達は女と夜更かしはしても、明日の出勤時間に遲れたり、仕事の能率を下げたりするやうな事はない。悅樂のために夜を明かすのは、東洋人のすることである。仕事は仕事、悅樂は悅樂。この點でも彼等は恐ろしく几帳面であり、嚴格であり、合理的である。

爲政者はたゞ病毒だけを取締まれば宜しい。こいつは人々の活動力を阻礙し、仕事の能率を下げ、ひいて生產に重大な影響を及ぼすのだ。こいつだけはいけない。そこで萬事衞生的であるやうに!

病毒に對する衞生的な施設は、流石に獨逸が行屆いてゐる。伯林の藥局、小間物屋、ゴム製品店は勿論として、カフエ、レストラン、ダンス場、菓子屋の手洗室でも、大抵、豫防器具を賣つてゐる。一マルクの銀貨を入れると、チョコレートやボンボンのように、自働的に出て來る機械もある。ミユンヘンでは、往來で賣り歩いてゐる爺さんを見た。活動寫眞館では性病豫防の宣傳映畫をかける事もある。電車の中なんかには、麗々しく、病毒の恐るべき事を圖解した、三度刷りの宣傳ビラが張り出してある。最も振るつてゐるのは、あの共同便所の揭示であらう。曰く「汝の正當なる妻、又は良人にあらざる異性と關係した場合には、二時間以內に、國立、又は市立の性病院へ行け!」其處では無料で、住所姓名も全く聞かずに、善後の處置を取つてくれるのださうだ。

諸君! 或る社會心理學者が云つた。一つの社會形態が高度に發達すると云ふ事は、それの有する文化が著しく低級感覺的になる事であり、文化のあらゆる領域にわたつて、性的關心が支配的地位を占めると云ふ事である……

ヨオロッパ人の裸體については前にも少し話したが、あれは遠慮がちな、室內での裸體生活であつた。ところが、其處にはもつとおほッぴらな裸體生活がある。

自然詩人である彼等は、裸體を自然的であり、健康的であるとして

ゐる。事が健康に關係する以上、獨逸が除外される筈はないが、獨逸では全く、裸體が積極的に讃美されてゐると云つて好からう。小學校では男の子は勿論、女の子も黑い猿股一枚でラグビイをやる。女學校の生徒は白い肌と乳房とを出して、太陽の下でランニングをやる。伯林の多くの體操學校、舞踊學校には、その入口の掲示板に、學校の教科目や入學規則などを書いた印刷物と一緒に、生徒達の裸體々操、裸體舞踊の寫眞が何枚も張り出してある。入學したらこんな眞似が出來るのだ、と云はぬばかりである。又、伯林の市民達は、夏になると、日曜なんかよく郊外へ出掛けて行つて、少し大袈裟に云ふと、伯林の町が殆んどガラン堂になる位であるが、彼等は郊外で何をするか？親子打ち揃つて裸かである。猿股一枚になつて、又は透いて見えるやうな薄い肌着一枚になつて、球投げ、駈けッこ、繩飛び、それから日光浴をしながらの雜談。裸婦林間に坐するの圖、そんな構圖は決して繪そら事ではない。現實に見ることの出來る構圖である。

もつと徹底的な裸體生活のグルウプもある。巴里のセイヌ川の上流にも、裸體生活者達が定期的に集まる小さな島がある筈だが、それについては私は知らない。獨逸の裸體生活者達はそれ〴〵のグルウプから「裸體生活」「裸體美」「裸體文化」と云つた風な雜誌を出してゐるが、それには澤山の精巧な裸體寫眞——林の中の舞踏、水邊のリズム、等々——と共に、醫學的に裸體を推賞した論説や、例へばバッカスと彼等の裸體生活を結付けた感想などが載つてゐる。バッカスと裸體生活。成る程、彼等の信條には幾分か神秘教的な所があるらしい。然うでなければ、あんな狂信的な事は出來はしまい。

彼等はどんな生活をしてゐるのか？ 私はワンゼー湖の近くに住んでゐた時、偶然それを窺知するの光榮を有した。私の隣人が裸體生活者だつたのである。五十幾つの未亡人と、二十代のその娘、息子。彼等は室内ではいつも素ッ裸だつたらしい。玄關のベルが鳴つても、彼等は素ッ裸でドアを開けるらしい。或る日、若い郵便配達夫が私に云つた。「あゝ、驚いちまつた。何かの用を作つて、いつかあの家へ行つて御覧なさい。娘さんが裸でドアを開けてくれますぜ」

彼は異邦人の私を喜こばさうとして然う云つたのだらうが、後で家のおかみさんにその話をしたら、「然うですよ。だが、獨逸人がみんなあゝだと思つては困ります」と云つて、愛國的な彼女はひどく機嫌が悪くなつた。

どうかした光線の工合で、時々、彼等の裸體生活が窓越しに見える事もあつたらしい。未亡人が爪立ちをして、棚の裝飾をしてゐたり何かすると云ふ。だが、私は彼等が身に一糸も纏はずに、或る暑い日に、湖に下つて行つた時には驚いてしまつた。つんと澄まして、胸を張つて、一丁ほどのアカチアの並樹道を歩いて行く彼等の姿を想像せよ。

湖の岸に彼等の場所があるらしいのだ。彼等のグルウプは其處に集まつて、水浴をやる。水浴の外に何か、例へば會議とか、儀式とか

云ふやうなものがあるのか如何か、私は知らない。場所もわかつてゐたから、一度行つて見ると好かつたのだが、薄氣味が惡くて行かなかつた。たゞ一度、娘がボートを漕いでゐるのを見た事がある。彼女は勿論素ッ裸で、兩舷のオールを繰りながら、沖の方へ漕ぎ出して行つた。草疲れると、オールを流して、その儘仰向けに引つ繰り返つた。

　彼等の家に、時々グルウプの人達が集まる、と云ふやうな事もあつたらしい。勿論人々は着物を着てゐる。立派な自動車に乘つて來る人もある。だが、家に這入ると、みんな裸かになるのだと云ふ話だつた。裸かで一緒に食卓について、飲み食ひをやる。多分、脂のぎらぎらした獨逸スウプに、豚の脚のぶつ切り（アイスバイン）、精力的なチイズ、血を燃やす葡萄酒。それからお定まりのダンスを始めるんださうだ。蓄音機か何かでやるのだらう。輝きわたつた電燈の下で、裸かの男女が入り亂れて踊り廻る。禮儀正しく、靜かなポルカやワルツを踊つても變なものだらう。激しい踊りに變つても可笑しからう。だが、彼等は眞面目なのだ。そら、又、音樂の調子が變つた。チエスト！裸かの社交ダンス萬歲！

伯林・メーデー前奏曲

勝本清一郎



一九三〇年三月六日（赤い木曜日）

勞働者たちは叫びつゞけた。

——パンと仕事を與へろ！

三月六日——それは遂に、次のやうな叫びにまで高まつた。

——パンと××を與へろ！

（ドイツ語でブロット・ウント・、、、といふと、また、ばかに語呂がいいのだ）全ベルリンに、いな、全ドイツに、いな、全世界に、この叫び聲がすざまじくコダマした。三月六日、全世界の勞働階級は、一齊に相呼應して、失業問題を揭げて起ちあがつたのだ。

二月末、ベルリン・ブランデンブルグ縣勞働局は、その管轄地域の中だけでも、失業者の數が殆ど五十萬に達したことを發表した。また、全ドイツの失業者數は、約四百萬とされてゐる。いづれにしても大變な數だ。

ベルリンの三月六日は、警視廳の大型トラックが氣味惡い喇叭の音をならしながら、あらゆる街々を走り廻ることによつて、朝から脅され始めた。それは總動員した警官隊を滿載しつつ配備に狂奔してゐる奴なのだつた。馬鈴薯の籠をぶらさげて、ショールをかぶつた市場歸りの石炭屋、靴屋の婆さん達さへ、「パンと××を與へろ」と口の中に呟いて、その意味をいろ〳〵に考へつづけて步かざるを得なかつた。

晝頃になると、私の住ひの中庭の石疊の上では、一人の手風琴彈きが、勞働者の讃歌「兄弟よ、太陽へ、自由へ」を演奏し始めた。廢兵らしい盲目だ。やがてインターナショナルも奏した。武骨な體格にも似合はず、今日と云ふ今日をねらつて、なか〳〵商賣のコツを心得てゐる。二階、三階、地下室の窓々から、勞働者の子供や娘やお神さんたちの顏が賑かに現れて、口々に中庭越しのおしやべりを始める。そして手風琴彈きの貰ひが、いつもよりも少し多くなつた譯だ。

失業者と工場勞働者との聯合によつてデモの決行される時間は、午後二時と決つてゐた。その時間になつて、私が街へ出ようとすると、

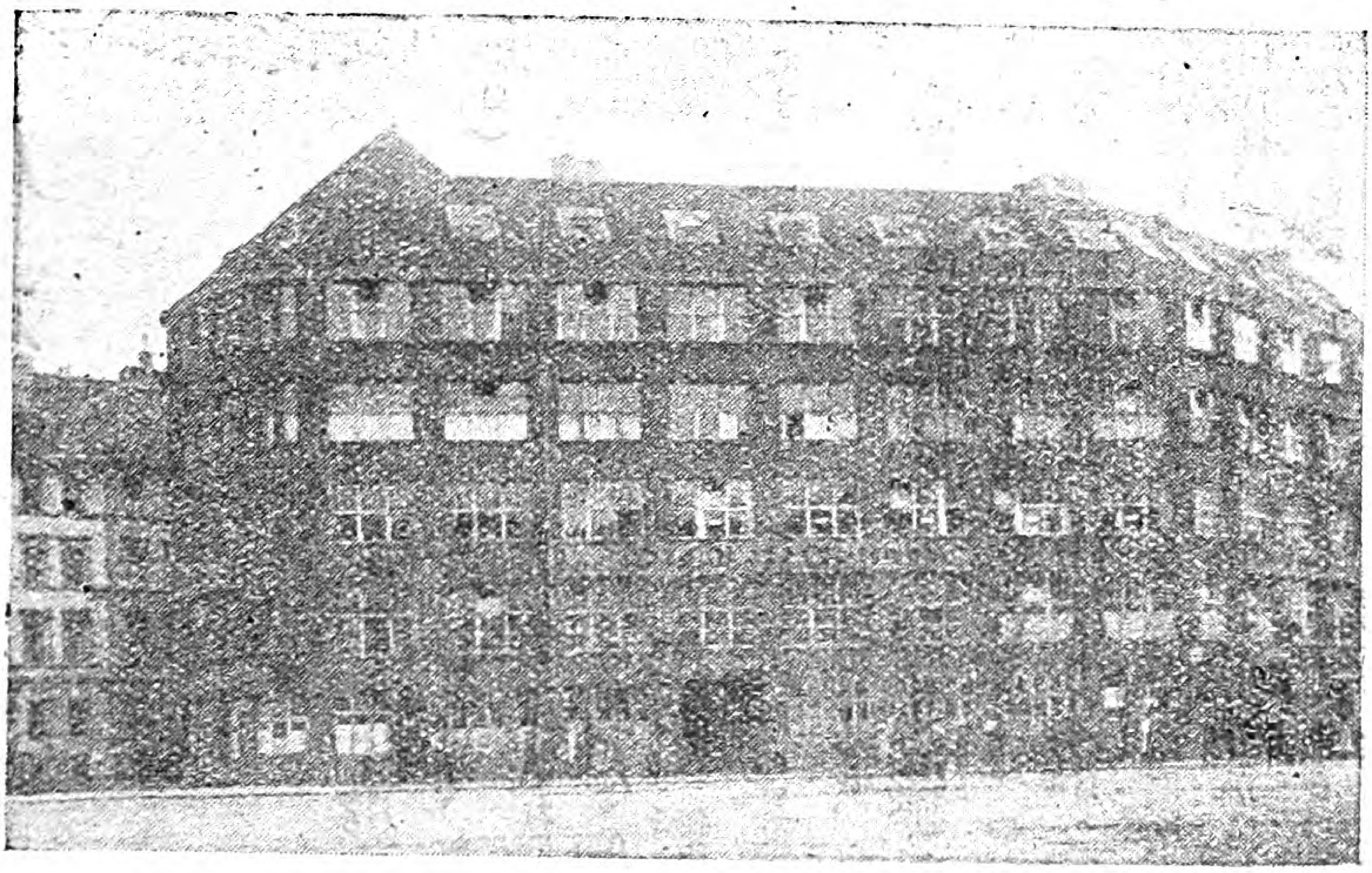
下宿の婆さんは驚いて私の腕を捕へてしまつた。

「……飛んでもない。あなたは今日がどう云ふ日だか御存じないんですか？　今日はベルリン中が恐ろしい×××暴風雨（郊外に小さな果樹園を持つて、畑仕事をしてゐる田舍者の婆さんでも、西洋人だから云ふことはなか〳〵大げさだ）に襲はれてゐる日なんです。外國人である貴方は、非常に危險です。今日だけはどうか、一日中、外へ出ないで下さい。」

　また實際、私の住ひは勞働者街の中だから一歩外へ出れば、いつ、どこから警官のピストルの彈丸が飛んで來やうかも分らないのだ。（逆に、こつちでは家屋の構造上、家の中にさへゐれば、外にどんな×××が持ちあがつてゐやうと、まるで別世界にゐるやうなものらしい）

　しかし結局、私を新聞記者だと思ひ込んでゐる婆さんは、長嘆息をして、とても悲しげに云ふ。

「仕事のためなら……あゝ！……」



カール・リープクネヒトの家

「カール・リープクネヒトの家」附近

「カール・リープクネヒトの家」のそばの地下鐵の出口は、すでにそこへ避難して來てゐるらしい勞働者の群で、一杯に詰まつて、ガヤガヤうごめいてゐた。口々に警視總監ツエルギーベルの惡口だ。警官の發砲についての非難だ。それらを押し分けるやうにして、地面の上へ出て見ると、成程、やつてる〳〵！

　ビユウロウ廣場のまはりの步道は、大變な勞働者だ。「民衆舞臺」の正面玄關の石段の上にも、一杯つまつてゐる。そして廣場の中央は警官隊が占領してゐる。二台づつ、三台づつ、警官輸送用大トラックが、探照燈をつけた姿で、車道のあつちこつちに乘り捨ててある。兩者はいつまでもにらみ合ひらしい。

　私は地下鐵の出口から「民衆舞臺」の側に移つた。それからそのはづれまで行くと、廣い空地をへだてて、「カール・リープクネヒトの家」の五層建の

全容が、眞正面だ。屋上には、すでに大きな赤旗が、力強く翻つてゐる。二階、三階、五階……硝子窓が澤山あいてゐて、赤いスローガンの布を張りめぐらした鼠色の建物全體が、全速力で運轉しつつある巨大な機械のやうな活力を示してゐる。

スローガンを讀むと……、

──飢餓の政治に抗爭せよ!

──××××××を守れ!

──××××××獨逸へ!

その眞下の空地でも、無論、突きつめた睨み合ひだ!

警官は例によつて右腰にピストル、左腰に短劍と黒ゴムの棍棒をつるし、裾のややひらいた、少し長目な紺色の外套に、黒の長靴、そして頭には、前面に銀色の記章をつけたピカ〳〵光る黒塗のお椀のやうなカブト……歐洲大戰時代の下士級の精兵が、警官に鞍替へさせられた奴らだ……。軍隊式に整列したり、散兵線を敷いたりしてゐる。

と、「リーブクネヒトの家」の横手の二つ目の街角で、そこへ密集した一群の勞働者たちが、いきなり、元氣のいいシユプレッヒ・コール(異口同音にリズムをつけてどなる。これは年中、練習してある)を始めた。

──勞働者を餓死させる政治に絶對反對だ!

勞働者はバラ〳〵に散らばつてゐるやうでも、共同動作をなすべき一隊づつは、絶えず緊密に聯絡をとつて、いつの間にか一箇所にかたまり、警官隊のスキをうかがつては、かうした奇襲を試みるのだ。

ビユウロウ廣場の中央の花壇のそばに整列してゐた警官の一隊が、それッとばかり右手にゴム棒をおッ取り、そこへ突撃する。左手で腰のうしろの短劍をおさへた前かがみの姿勢が、きはめて特徴的だが、まあ、暴力團のなぐり込みそつくりの光景だ。外套の折襟に緑色の羅紗のついた奴が、殺氣立つたイラ〳〵した聲で、あはただしく指揮する。しかも警官どもの手にしてゐるゴム棒は、名はゴムでも、頗る強靭な硬ゴムで、なぐられるとめつぽう痛い上に、幾らなぐられても證據となるべき外傷が殘らないと云ふ文明の利器なのだ。頭や顔をやられたら、大概の頑健な勞働者でも卒倒する。現にこの日、ドレスデンでは一人のブルヂヨワ側の新聞記者が、このゴム棒による打撲傷のために、遂に死にさへしたのだ。

所で勞働者たちの一隊は、それと見ると忽ち、大波のやうな搖れかたを見せて、さッと横町にひつこんだり、兩側の步道の別の勞働者たちの間へ散つてしまふ。逃げ遲れて、つまづいて轉んだ所を、うしろから警官に二ツ三ツなぐられた青年もある。

が、このスキだ。又忽ち、「民衆舞臺」の裏手の一角で、別の一隊が一齊に叫び出した。

──ロート・フロント! ロート・フロント!

警官隊の方では、「リーブクネヒトの家」に向つて散兵線を敷いてゐた連中が、またそれッとばかり、そつちへ向けて突撃する。すると

又、そこにも大きな人波が起つて、勞働者たちは忽ち姿をくらましてしまふ。警官隊は腹立ちまぎれに、その邊にゐる大人しい五六人をなぐりつけて、プリ〳〵顔を眞赤に、怒りながら引き上げるより外はない。

しかしすでに廣場の四方から一齊に口笛のハヤテだ。警官隊への嘲弄的挑戰だ。と、遂に東側の街角で、一人の警官がピストルをぶッぱなした。同時に廣場をめぐつて一齊にどよもす勞働者の喚聲！

分散戰術

夕方になると私は、ウエッディング區の方へ出掛けて行つた。北端のウエッディング區と南端のノイケルン區とは、ともに昨年のメーデーの激戰地であつて、勞働者の攻勢的威力の盛んなところから、いづれも「赤きウエッディング」「赤きノイケルン」と稱されてゐる地域だ。

私がウエッディングへ出掛けたのは、ロシア映畫「アジアの暴風」を見るためもあつた。この映畫は全ドイツを席捲した革命的映畫だが、私がドイツについた時は、恰度この映畫上映の大波の引いたあとだつたので、しばらく見物の機會が得られなかつたのだ。それが再び北方の勞働者街で上映され始めたので、私は二日つづけて通ふ譯だ。

私が地下鐵のウエッディング驛についた時、その邊は昨年のメーデーの××××××の跡に近いので、警官隊の警戒も殊に嚴重をきはめてゐた。がまた、步道に群つてゐる勞働者たちの數も大したものだつた。しかもすでに、ベルリン各地で警官隊のピストルのためにやられた犧牲者の噂さが走つて、凄慘な氣分に滿ちてゐた。

で、映畫館の中は、今夜はさすがに見物が尠かつた。それに、いざと云へば飛び出す覺悟らしい身ごしらへの若い勞働者の男女ばかりだつた。——それでも映畫の上映は靜かに進行した（この映畫の內容については、いづれ又他に書く）。

九時頃外へ出て見ると、街上の形勢は、やはり相變らずだつた。至るところに勞働者の群があふれてゐる。私は幅のひろいライニックンドルフ街を北へ向つて步いて行つた。車道を騎馬巡査の一隊が、黑光りしながら驅けッて行く。勞働者側の傳令が、オートバイを飛ばしてくる。男が運轉して、女がうしろに乘つてゐるのもある。この勇ましい女は警官隊のそばを過ぎる時、一際高らかに挑戰の口笛を殘して行く。又若い女がたつた一人、無帽で金髮を風になびかしてオートバイを飛ばして行くのもある。しかも街を行くに從つて、勞働者たちは盛んに、警官隊のスキをうかがつては、「パンと××を與へろ」のシュプレッヒ・コールをやつてゐる。若い娘や小學生たちまでが一緒だ。警官隊はそのたび每に、そこへ驅けつける爲に狂奔する。奴らも血眼だ！

さうかと思ふと闇の横町を、タン架をもつた勞働者の救援隊が走つてゆく。街角に警官輸送用トラックの停つてゐる所では、大きな籠を

腕にしたパン賣りが、その邊にブラ〳〵してゐる勞働者たちの群を相手に商賣をしてゐる。ちよつと、何かの小說にあるフランスの七月革命の光景を憶ひ出す……。勞働者の男女は道を步きながら、パンを頰張つたり、オレンヂをかじつたりして腹をこしらへて行く。煙草一つ吸へぬ警官隊の方は、それを佛頂面してにらんでゐる。

私の步いてゐる步道へ、いきなり一臺の警官隊のトラックが、急カーヴして乘りつけた。見るとすぐそばで、一人の若い娘に警官がおどり掛かつたのだ。彼女は禁止された反ファシスト青年前衞隊（アンチファシスチッシエ・ユンゲガーデ）のあざやかな紺色の上衣と赤ネクタイの制服をつけてゐたのだ。彼女は思ひ切りよく觀念したものか、いきなり警官の體をふり拂ふと共に、怒つたやうな動作で、自分から進んでトラックへ驅け上つて檢束された。あたりでは一齊に猛烈な拍手だ。六十歲ぐらゐの肥つたお婆さんまで、ニコ〳〵しながらしきりに手を敲いてゐる。明日はこの娘に緣談が雨のやうに降り掛かるだらう……。誰かがロート・フロントとさけぶ。警官がそれを又捉へようと、夢中でキヨロ〳〵する。一人の警官のカブトが不意に背後からつき落された。警官の丸頭の滑稽さに、トラックの上に檢束されたばかりの娘までが、笑ひの爆發だ！

かくしてかうした形勢は、ベルリン中の主な所で、午前二時頃までも續いたのだ。この日のかうしたデモの特別な×××、×××・××××××××といふ。ベルリンのやうに警官隊の武裝が完備して、いざと云へば機關銃でも、裝甲自動車でも譯なく持ち出してくる所では、非合法の場合、普通の集中的デモでは、少數の警官隊にさへ直ちに蹴散らされる恐れがあるのだ。それをこの××によつて、午後二時から始めて約十二時間といふもの、全ベルリン市を、否、全ドイツをほゞ完全に掻き廻し得た譯なのだから、非常な成功である。

殊にベルリンでも、赤きウエッデイング區や赤きノイケルン區では、住民の大半が×××勞働者であるから、彼等が時間をきめて一齊に自分の住居の前へ押し出してしまひさへすれば、それだけで、もう立派に、大デモが成立して、警官隊は手の附けやうがなかつたのだ。

私が夜更けて歸つてくると、私の住居のあたりは、もう暗くひつそりしてゐた。それでもあらゆる街角に、三人づつの警官が角燈をさげて、徹夜の非常警戒を續けてゐた。……

赤い葬式

翌日の新聞は、大變なさはぎだつた。ベルリン市內での重輕傷者十六名――その內、半數はピストルのダム〳〵彈にやられた重傷だ。ダム〳〵彈の寫眞まで出る。その他、ハレ市郊外のアムメンドルフでは、二人の勞働者が擊たれて、一人は即死し、一人は病院で死亡した。ケルンでは子供が殺された。

或ひはまた、ニユーヨークでは、八萬の失業者がユニオン廣場に集合して、示威運動をした。それに對して機關銃をそなへた裝甲自動車

が繰り出された。ロスアンヂエルスでは、デモを追ひ拂ふために、催涙ガス彈が使用された。ロンドンでは……パリーでは……ウイーンでは……コペンハーゲンでは……プラーグでは——スペインでは……

越えて八日は、國際無產婦人デーだ。各所に開かれた盛大な會合の席上へ、六日の重傷者の一人が遂に死亡した悲報がもたらされた。勞働者のスポーツ團員であつたエリッヒ・フリッシユマン君が死んだのだ。婦人たちは痛憤して、社民黨の警視總監ツエルギーベルを、社民黨のドイツ共和國聯邦內務大臣ゼエリングを、同じく社民黨のプロシア國內務大臣グルツエジンスキイを——プロレタリアートに對する一切の裏切り者どもの醜怪なる塊りを、メチヤクチヤにこきおろした。

更に十日の午後になると、悲報がまた一つ加はつた。共產青年同盟員で、リヒテンベルグ區の赤色青年戰線（ローテ・ユングフロント——禁止された赤色戰線鬪士同盟の青年部）の指導者に選ばれてゐたゲオルグ・カルコウスキイ君が死亡したのだ。この十九歲の青年勞働者は、少年スパルタクス團からの生え拔きの、未來有望の鬪士で、ベルリンでも目拔きのフリードリッヒ街とモーレン街との角で、同志との立ち話しの最中を、背後から、血迷つた警官のために、不意に射擊されたのだつた。

この二人の葬儀が、十七日の午後行はれた。前日の「ローテ・フアーネ」は、KPDベルリン・ブランデンブルグ支部が、その地域に於ける六十萬の勞働者に呼びかけた檄文を揭げてゐる。

——×××××××××××。沿道の兩側に人垣をつくつて犧牲者を見送れ！

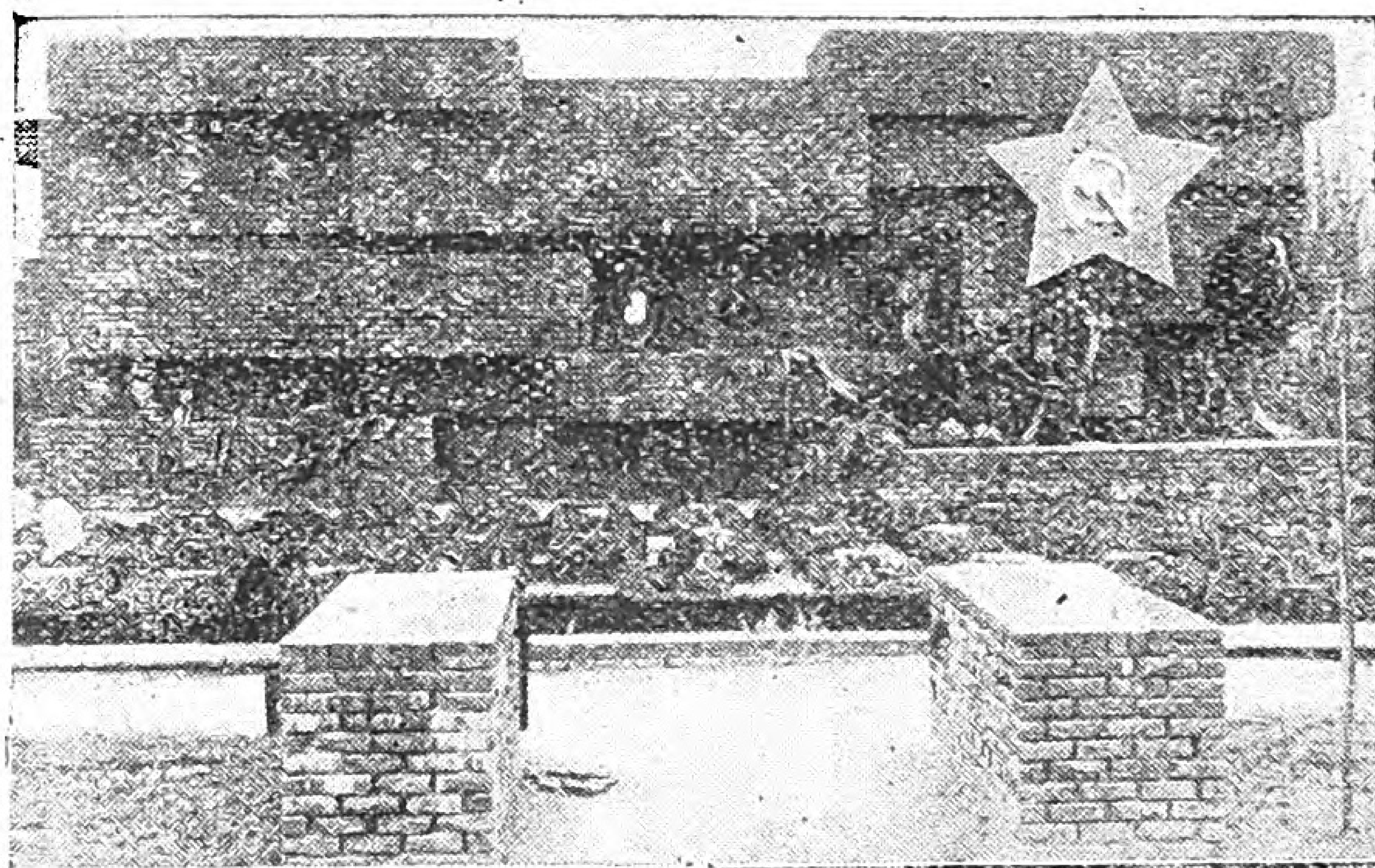
當日、葬列の出發地であるベルリン東部のシユレージッシア驛に近いキユンストリナア廣場から、東部郊外のフリードリッヒスフエルド墓地の道は、至るところ警官隊の配備が、あきれ返るほど、大げさなものだつた。社民黨の警視總監ツエルギーベルに指揮されたこれらの警官隊は、いやでも、勞働者の葬列デモの一片をさへ、押しつぶす決意であるらしく見えた。私の友達は、シユレージッシア驛でさへ、見張りの警官に誰何された。

しかしそれでも、墓地の手前二丁ばかりの所へくると、さすがの警戒網もばつたりと終つた。そしてそこから先きは、禮拜堂ならびに廣大な共同墓地の敷地全部にかけて、警官の片影さへ見せなかつた。——私は忽ち、よみかへつてくる痛憤とともに、××に於けるこれと對照的な一場面を思ひ起した。

ドイツの社民黨內務大臣及び社民黨警視總監は、いくらか——ほんの一〇パーセントばかり、文明人的な禮儀の習慣に捉はれたらしい。

我々が墓地についたのは四時少し過ぎ頃だつた。東京で云へば、目白とか東中野とか云つたやうな郊外風景で、右手にリガ方面へゆく鐵道線路を見下してゐた。

曇天のベルリン市の共同墓地は、まだ冬枯のまゝの菩提樹の並木道に、雨あがりのやうな濕つた色を見せて、奥深かつた。その並木道



(上)ドイツ革命記念碑。前に在るのが革命戰士の墓。最前列中央の向つて右がローザ・ルクセンブルグ、左がカール・リープクネヒトの墓だ。



(下)　三月十七日、葬列。先頭に立つ頭の禿げた人がドイツ共產黨中央執行委員長エルンスト・テールマン

を、ひそやかに、しかも足早に、一流れの勞働者の男女が、間斷なく、ひたすら奧へ向つて進んでゆく。みんな工場がへりに驅けつけて來たらしく、鞄をかゝへたりしてゐる。我々とゝもにいくらか遲れて到着した連中だ。途中の要所には、赤い布を腕にまいた勞働者の警備委員が立つてゐる。

遂に埋葬地に達した。墓地の一番奧のはづれだ。菩提樹の並木が終つて、雜木の多い、入り組んだ丘や野原の地形が裏側にひらけてゐる。黄色い砂のやうなベルリン特有の土を、大きく掘り返した墓穴のまはりには、幾重にも幾重にも、すでに數千の勞働者の男女が、おごそかな沈默の列を形づくつてゐた。

更に奧の一方には、冬枯の弱々しい雜木林を透いて、大きな煉瓦造りのドイツ革命紀念碑の上に、烽火のたかれてゐるのが見えた。沈痛な赤い火の色だ。しかもその黑い煙は、曇天の空に深く吸はれて、紀念碑にとりつけられた高いマストの上の、大きな赤旗のおもてに、云ひやうのない悽慘な色を掩ひかけてゐるのだつた。

この革命紀念碑の前にも、數千の勞働者たちが、靜かな密集を形づくつてゐた。そしてその前列から「ロシア革命の葬送曲」の沈んだ樂音が、ゆつくり〱、あらゆる人の心を刺すやうに響いてゐた。數百の各勞働者團體の重々しい赤旗が、革命紀念碑に向つてうなだれてゐる。

我々日本人は、そのすぐそばまで行く事を許された。あたりの勞働

者が、ここまでの葬列の先頭に、ドイツ共産黨中央執行委員長のエルンスト・テールマンと、「ローテ・フアーネ」の主筆ハインツ・ノイマンとが立つたことを話してくれた。足もとに水たまりがあつて、人々がそれをさけるために他の墓地の芝生を踏み荒さないやうに、小柄な、顔色の惡いセムシの整理委員が、心をつかつてゐた。

ドイツ革命の紀念碑！　それは大型の、硬質の煉瓦をもつてガツシリと組み上げた、積木細工の城壁のやうな巨大な構成物だつた。火のたかれてゐるのは、頂上の左手の一段低いところだ。右手の前面に、大きな銀の星の中央に鎌とハンマーをつけた飾り物がとりつけてある。そして尚右端に、高い鐵のマストだ！　大きな長方形の無地の赤旗が、曇天におごそかに風をはらんでゐる。薄れては濃く、薄れては濃く、掩ひかかる烽火の煙よ！

この革命紀念碑の頂上に、或は前面の中段、下段の足場がかりに、一面に押しなんでゐるのは、みんな、××××赤色戰線鬪士同盟（ローテル・フロントケムパーブンド）の制服に身をかためた鬪士たちだ。彼等はこの制服をきただけの罪によつて、いざ官權につかまれば、二、三箇月の監獄行だ。薄よごれた茶ツぽい、襟のひらいた獨特の上衣、あごひも、皮帶、長靴――見よ、ドイツ勞働階級の果敢な前衞！　如何なる××××××、遂に絶對的に健在だつた青年鬪士の鐵の組織！

彼等はすべて、あるものは兩手に團旗を捧げ、ある者は、左手に革帶を握り、右手のこぶしを肩の高さまで掲げてゐる――則ち、彼等戰鬪的プロレタリアートの最も嚴肅な階級的誓ひの姿勢を保つてゐるのだ。なほ中段の一人が、胸の高さに、兩手でカルコフスキー君の遺骨をささげてゐる。カルコフスキイ君は、十五日に火葬にされたのだ。フリツシユマン君の棺は下段に安置されてある。

そしてあたりは一面の花輪だ。赤色救援會（ローテ・ヒルフエ――日本の解放運動犧牲者救援會にあたる）や、國際勞働者救援會（インテルナチオナーレ・アルバイターヒルフエ――これにあたるものは日本にない）やの頭字を、赤布であらはしたものが眼につく。

「ロシア革命の葬送曲」が三度くりかへされて終ると、數百の赤旗が一齊に頭をあげた。ロシア字をつらねた旗も來てゐる。――瞬間的なひらめくやうな一瞬間だ。

見ると、紀念碑の中段の前端に起ち現れたのが、エルンスト・テールマンだつた。彼のしつかりした。意志的な、しかし前額の禿げた風貌は、恰度レーニンの風貌をドイツ化したやうな印象だ。彼こそはドイツのあらゆる革命的勞働者たちから、絶大の信頼をささげられてゐる、最も大きな、高い指導者なのだ。しかも彼の今日の演説は、文字通りの大獅子吼だつた。前に幾度か聞いた選擧の時の演説の比ではない。ドイツ人的な、理性的な、巨大な意志の力が、一言、一言、赤熱した鐵のやうなものゝ中にこもり響く。

――ヤング賠償法によつて、プロレタリヤ階級は一層きびしい、人

間一代の長年月に渡る搾取に服從しなければならぬのです。しかもこの搾取が保護されるために、國會は、明日いよ〱、共和國擁護法案を採用しようとしてゐる……××の兵士たち、あらゆる妨害を乘り越えて、遂に××××××××に至るまで、×××××××××に至るまで、前進せよ！……

革命紀念碑のそば近く、或は見渡すかぎり、生垣のかげに、木立のかげに、墓地のあらゆる細道をうづめて、靜かに密集してゐる參列者——あゝ、なんと刻々に人數のふへた事か！——は、誰もみんな深い感動に打たれた。大勢の男女が泣いた。

テールマンの獅子吼が終ると、尙三四人、各勞働者團體の代表者の演説があつた。それも終ると、今度は全參集者によつて、莊大なインターナショナルの齊唱が行はれた。そして更に「ロシア革命の葬送曲」が奏せられて、いよ〱、葬列が埋葬の場所へ向ひ始めた。

勞働者の音樂隊を先頭に、赤色戰線鬪士同盟（ローテル・フロントケンパーブンド）の代表者たちの一團が行く。更にこれも同じく××××反ファシスト青年前衞隊（アンチファシスチッシュ・ユンゲ・ガーデ）の男女が、腕に鎌とハンマーと劔のマークをつけた紺色のシャツのやうな上衣、赤いネクタイの制服で、四列縱隊だ。カルコフスキイ君の遺骨がゆく。フリッシュマン君の遺骸をかついで行くのは、黑いスポーツ服をきた勞働者スポーツ團員だ。如何にも勞働階級らしい舊式な喪服をつけた遺族たちがゆく。花輪——花輪——花輪——造花でない、緑の葉ッぱの部分の多いすが〱しい生花だ——赤旗——赤旗——赤旗——重々しい金文字——。白い上衣に赤いネクタイの制服をつけた可憐なピオニールの一隊！ ロシア人のグループ。赤色婦人及び處女同盟（ローテル・フラウエン・ウント・メエッチエンブンド）の白髮のお婆さんから年若い少女たちに至るまでの男裝風の一隊！赤色救援會の代表者たち。國際勞働者救援會の代表者たち。靑年同盟員……年配の黨員たち……大衆……。

墓穴のかたはらでも、再び痛烈な演説が行はれた。大衆は、少し崖になつた下の、枯れた蔦の這つた泥深い濕地の上にまでも、かまはずに寄り合つて、默禱した。力强いインターナショナルがくりかへされた。

更に半數の赤旗の行列は、墓地の細道を、もう一つの埋葬地の方へも進んでゆく。すでに夕暮の色が、早春の枯木立の梢を、一層淡くぼかしてゐる。「ロシア革命の葬送曲」の哀音が、とても悲しく響く…………。

私はそれらの光景を遠方に見透かしながら、革命紀念碑のそば近くに居殘つた。五六十人の男女が、丁寧に、ローザ・ルクセンブルグ、カール・リープクネヒト、その他の×××たちの墓に、お詣りしてゐるのだ。——

紀念碑の前の平地に、十二づつ三段に四十六の墓がならんでゐる。その最前列の中央二つが、向つて右ローザ・ルクセンブルグ、左カー

ル・リープクネヒトの墓だ。みんな一九一八年の末から一九一九年の始めへかけての、ドイツ革命に於ける社民黨政府のプロレタリアートに對する最大の裏切りに際しての、スパルタクスブンドの犠牲者たちだ。彼等はみんなお揃ひの單純な長方形の白い石を地面に伏せて、その下に眠つてゐる。(ノスケ奴、まだのめ〳〵とどこかに隱退して生きてゐる！　但しローザ、カールに對する直接の下手人は、翌年三月廿七日、××××××××××）花輪が澤山そなへられてある。花輪の眞ッ赤なリボンには、×××××××××スローガンだ。

革命紀念碑の上の烽火も、やうやく焔をさめ始めた。曇つてはゐるが、ほのかに明るい、さう寒くない春さきの夕ぐれだ。郊外の風景の中の静かな、廣い墓地内に、赤い烽火……赤い旗の行列……沈痛な×××……印象深い光景だ。

遂に埋葬も終つた。人垣が少しゆるんだ折を見はからつて、私も、黄色い土肌のあらはな、二つの土墓にお詣りした。澤山の質素な花輪の青い木の葉が、水氣をふくんだなま〳〵しい香氣で、參詣者の心臓を刺し貫く。

密集した行列が歸途につき始めた。赤旗はどれももはや、卷いて黒い袋につつまれ、お婆さんや青年や娘たちの肩にかつがれてゐる。頂上の鎗型の金物だけが、銀色や金色にピカ〳〵光つてゐる。しかし一齊に、おのづから、「兄弟よ、太陽へ、自由へ」の歌が高まつてゆく。

墓地の門の近くにくると、赤色前線鬪士同盟や反ファシスト青年前衛隊の制服をつけた男女たちは、道ばたの並木の下で、みんな友達同志助け合つて、上衣をぬいだり、或はその上から外套をきて見えないやうにしたりして、身ごしらへした。墓場から一歩外へ出れば、××××××××合法的デモに移る筈だからだ。

また墓地の門の所では、一隊の人々が、カルコフスキイ君の寫眞入りの繪葉書や、革命紀念碑の色刷エハガキなどを賣つてゐた。

そのうちにも一萬に近い行列は、どし〳〵と街上へ押し出してゆく。フランクフルト並木道へつゞく郊外らしい幅のひろいコンクリート道路だ。みんなの足音が合致して、心ゆくばかりのインターナショナルだ。

――「民衆よ、聞け、××××××××！」

六日以來、再度のすばらしい×××××デモだ。二三丁行つて、警官隊の最初の陣營の前を過ぎるときには、若い連中は一齊にピー〳〵口笛をふいたり、ツェルギーベルの惡口をとばした。警官隊は大トラックを二三台ひかへた儘、無氣味な整列をつゞけて、動かなかつた。

次の街かどへゆくと、又もやおびたゞしい警官の整列だ。デモは、かまはずに、ます〳〵とゞろくやうに進行した。

と、やがて、デモを全部やり過した第一の警官隊が、背後から警笛をならしてトラックで、追撃してきた。トラックがとまると彼等は、軍隊式にバラ〳〵と街上に飛び下りて、散兵線を敷いたものだ。デモを一ぺん遣り過してから、それを背後から次第に押しやるやうにしつ

つゝ市内の勞働者街の中へ散らしてしまひたい戰術なのらしい。

しかしそれにしても、なんと云ふ×××打ちかかり方だ。ゴム棒で片ッぱしから勞働者を敲き伏せて、ガムシヤラに、一氣にデモを押しつぶさうとする。勞働者群は、さつと兩側の步道に避ける。しかし散らばらない。みんな密集して、忽ち勢ひを盛り返すと、一齊に口笛だ！ 惡口だ。シュプレッヒ・コールだ！ 片側の角のビール屋では、軒先きに赤い小旗を出して、デモの勞働者たちを歡迎してゐる。

この日、夕暮のあはたゞしい、賑かなフランクフルト並木道の諸所で、暗くなるまで、勞働者の奇襲的デモと警官隊との小競合がつゞいた。

共和國擁護法案（ドイツの治安維持法）

翌日は三月十八日——。

昨日のテールマンの演說にあつたやうに、この日の午後三時、ドイツ聯邦國會は、共和黨擁護法（Republikschutzgesetz）なるものの最後的採決のために參集した。

二六五票對一五〇票。

——可決！

無產階級の大衆的抗爭にもかかはらず、政府は豫め聯合を用意深くして、遂にこの法案を通過させたのだ。然らば、共和國擁護法とはなんだ？ 云ふまでもなく、日本の治安維持法とそつくり同じやうな性質の法律なのだ。日本のよりも條項が多くて、帝政復活運動の方面をも押へてゐる點が、違ふくらゐのものだ。

このドイツに於ける治安維持法は、どんな政黨が、どんな政府が呈出したか？ 日本の場合のやうに、ブルヂョア・地主ブロックの番頭たることを眞正面から看板にしてゐる政友會のやうな政黨や、その政府だつたか？ 否、否、驚くなかれ（ほんとは驚くには當らず、これが當然なんだが）社會民主黨のドイツ共和國聯邦內務大臣ゼーヴエリングが、昨年の十二月四日、持ち出したのだ。で、これを一名「ゼーヴエリングのコンムニスト法」とも云ふ。コンムニスト法といふのは、この法律が、××××××××××××××××、コンムニストだけをねらひ打ちに彈壓し、その黨及び傍系のあらゆる團體組織を解散させんがためのものだからだ。最右翼の國粹社會黨（ナチオナルゾチアリステン）などが引ッかかるのは、そば杖にすぎない。副產物だ。

一九二二年六月廿四日の朝、時の外務大臣ラーテナウがファシストのために暗殺された。中央黨（ツエントルーム）の首相ウイルトは、有名な言葉——

「この敵は右にあり！」

を叫んで、その翌日、直ちに左右兩翼を彈壓すべき第一次の共和國擁護法を制定した。これが代々の內閣に大變愛用されて、殊に社民黨內閣によつては、コンムニスト彈壓專用に珍重されて、施行期も何度か

延長され、遂に昨年の六月、再び滿期に達したのだ。この時、社民黨の內務大臣ゼーヴエリングは再度の延長策を又もや呈出したのであつたが、しかし六月廿七日、議會はその提案を否決した。この時にゼーヴエリングが激怒して、ブルヂョア專政を要望する演說をした事は、面白い見ものだつたらしい。

そこで、それ以來ゼーヴエリングは、一層進んだ、一層きびしい法案を練つて、しかも一層用心深い議會のカケヒキ、右翼のドイツ國粹黨(ドイツチエ・ナチオナーレ)との妥協をさへ用意して――何故なら彼等の帝政復活運動を彈壓する必要は、もはや餘り重大ではなくなつたから――今度の第二次の共和國擁護法案通過とまで、こぎつけた譯なのだ。

しかし三月十八日と云へば、プロレタリアートにとつてどう云ふ日であるか? 云ふまでもなく、一八七一年パリー・コンミユーンの國際紀念日だ。××××××××××、××××××××××、××××××××××××××××××。しかも特にドイツのプロレタリアートにとつては、一八四八年ベルリンその他の都市に於ける、黎明期の輝かしい×××××××××紀念日でさへある。

ベルリンでの、その時の一八七人の犧牲者の墓は、今でも「フリードリツヒの森」公園の中の、市立病院のそばの木立の中に存する。ベルリンの勞働者は、この日、これらの先驅者たちの墓地に參詣して、階級的鬪士として恥ない明日の行動をちかふのである。

私も、この日、私の住所のすぐそばの事でもあり、やはり參詣者の一人となつた。蔦が一面に地に這ひ、まだ春の色を見せぬ濃い常綠灌木のしげみの中に、靴屋なにがし、勞働者なにがし……廿三歲……一八四八年三月一八日、×××において致命傷をうけ、廿日死亡……と云つたやうな文句をきざんだ墓石――又は八十年も前のことであるから十字架の墓柱――の建つてゐたりするのを見ることは、感慨無量であつた。ドイツの勞働運動の長い歷史! しかも現在に於ける醜怪きはまる社會民主黨の裏切り! だが又一方、新時代の×××情熱は、ここに年每に新しくそなへられる、花輪のリボンの上にも、新鮮な血のちかひを見せてゐる。勞働者が二三人づつ連れ立つては、しつきりなしに這つてくる。

しかし滑稽なことには、この日、社民黨やドイツ民主黨でも、この日を「自由思想の勝利」の日としてお祭りをした事だ。しかも他方、國會では彼等は一致して、共和國擁護法案の通過にこれ務めたのである。なんと滑稽な矛盾であつたか! 勞働者たちの間には期せずして嘲笑が湧いた。一方では××の先祖たちを弔ひ、他方では現在の××××を阻止しようとする一連のダラ幹ども! 彼等のやりかたは、滑稽と云ふか、圖太いといふか、さすがに××の親方たちの兄貴分だけの事がある。

この夜、左翼の勞働者たちは、赤色救援會の主催で、ポッツダマー街のスポーツ・パラストに共和國擁護法に抗議する大衆的示威の會合

をひらいた。場内をうづめた勞働者三萬——非常な緊張ぶりだ。赤色戰線鬪士同盟や、反ファシスト青年前衛隊や、赤色婦人及び處女同盟や、のおの〱制服による入場式が行はれた。また、列の中央には囚人服に假裝した一隊もつらなつて、大いにアヂ的効果をあげた。殊にこの日、第一次の共和國擁護法に引ッかかつて、一年間の禁固に處せられてゐた勞働者ルドルフ・プロイス君が釋放されて、午後六時九分、ベルリン・ステッチナア驛に到着、直ちにこの會場に迎へられた出來事などもあつた。

彼はドイツに於ける赤色救援會の最高指導者ウイルヘルム・ピークに連れられ、花束を持たされて演壇の上にあらはれた。ピークも演說のうまい、赭顏白髮の、古い老鬪士だ。プロイス君の方は純な青年で、ピークの百戰練磨の演說のあと、三萬の猛烈な拍手に迎へられたとまどひを見せて、挨拶を朗讀した。彼は言葉は通らないし、又その讀んでゐることも型通りのことにすぎないのだつたが、それでも私は深い感動に打たれた。

輕い刑だつたとは云へ、とにかく階級的鬪士として立派にそれに堪え了せ、かく三萬の同志に迎へられてゐるプロイス君を中心としたこの場の×××××、×××××光景！（それにしても同じ第一次の共和國擁護法の犧牲者で、まだ獄中にゐる人々はなか〱多い。）

この夜、散會しても會衆は散らずに、一齊にポッツダマー街を、ポツツダマー廣場へめがけて、北上し始めた。なにしろ×××大衆が兩側の人道を眞黑にうづめて、ひた押しに、×××××××××××××濶步し始めたのだから、多數用意されてあつた警官隊も、×××××××××。徒らに電車軌道の上で、警官輸送用トラックの警笛をふき鳴らすばかりである。

——今夜は×××、莫迦に大人しいぞ。俺たちの方が××××××、××××、すぐかうなんだ……ハッハハ……

勞働者たちは、みんな元氣に呼び掛け合ひながら、哄笑して突き進む。警官隊にして見れば、あたりは繁華なブルジョワ商店街の一部であり、さう〱×××××××譯にも行かず、それかと云つて野蠻な×××××も、紳士たちの眼の前ではあまりやつて見せたくないらしい。とにかくまるで腫物にでもさはるやうにデモをいたはりつつ（交通整理をしてくれたりして）、遂に運河にかかつてゐるポッツダマー橋にまで達した。全く今までにない××××態度だつた。

しかしここからさきは、いよ〱ポッツダマー廣場であり、つづいてライプチガー街、フリードリッヒ街——即ちブルヂョワ商店街の心臟部といつた地點だ。ここまでくると、さすがの警官隊も背水の陣の形で、驚くべき多數の密集隊で、橋上を一分のスキもなく死守してしまつてゐた。しかも尙やはり、おだやかな宥めかたで、デモを河岸通りに沿つて東へと外らせる算段をとつた。××××××××、×××××××××××××××××××。そして僅かに、行く行くあらゆる橋にあらかじめの嚴重な柵を用意して、一切の通行人の

北上を禁止し、かくして漸く事なく、勞働者たちをベルリン東部の勞働者街の中へと歸らせ得たのである。

ヤング賠償案批准

ところで尚、三月十八日、共和國擁護法案が國會で採決されたについては、これを必要とした社會的背景として、ヤング賠償案ならびにそれに伴ふ一切の財政改革法案のことを念頭に浮べなければならぬ。「赤い葬儀」に於けるテールマンの演説の中でも、共和國擁護法とヤング賠償案批准とは、結びつけられてあつた。

歐洲大戰のあと始末として、米・英・佛・獨・伊・白・日のブル共が、ドーズ案だ、ロカルノ協定だと、いろ〱、分け前やら投資的繩張りやらに關する難問題を持ちまはつたあげく、昨年二月から六月へかけて、パリーで賠償專門委員會をやり、ついで八月、第一次ヘーグ賠償本會議を催し、更に本年一月、第二次ヘーグ賠償本會議をひらいたことは、日本の新聞をも賑はした筈だ。

この第一ヘーグ賠償本會議で採用された米國委員ヤングの提出した賠償案なるものを、ドイツ側で承認して批准すべきか否かの問題――これはドイツで、昨年の後半期からやかましい問題だつた。世界的大ブルたちにさう〱勝手に料理されてしまつては、ドイツ內の各種產業資本家、ならびに大中地主、或ひは中層商業階級がたまらぬとあつて、それらの立場から反對し出したのが、ドイツ國粹黨(ドイッチェ・ナチオナーレ)や國粹社會黨(ナチオナルゾチアリステン)をつられた右翼側のヤング案反對案だつた。この運動も、多少はあばれて、遂に昨年の十二月廿二日、一般人民投票にまで漕ぎつけたりした。

しかしドイツの國內での產業資本家や大、中地主や中層市民を背景にしたこの運動が、米・英の大資本閥をうしろに安閑してゐる現在のドイツ政府側に、一蹴されない筈はない。また實際、それは喜劇的採決をもつて、忽ち終つてしまつたのである。

所がここに、米・英の大資本閥、ならびに今やそれに完全に屈服してその傀儡となつてゐるドイツの金融資本閥、及び彼等が握つてゐる政權の力をもつてしても、容易には屈服し得ない反對勢力があつた。それは云ふまでもなく、プロレタリアートの反對だ。昨年末からますます火の手をあげたプロレタリアートの大衆的叫喚だ!

何しろヤング賠償案を承認することは、六十年間も借金をしよはされて、しかも差當り最初の三十七年間は、平均十九億八千八百八十萬マルクの年金にあたる金額を、いろ〱な割合で拂ふといつたやうな、資本家同志のふところ勘定だけから割り出した賠償案を承認することになるのだ。この賠償案の基礎案を練つたパリー賠償專門委員會に、米國側からはヤングばかりでなく、モルガンまでが出席してゐたことは、注意せよ! しかして最初にドイツ側から修正案を切り出して、ドイツ側に三十七年間、平均年額十六億五千萬マルク支拂ふ能力

のある事を、わざ〳〵發表したのは、ドイツ銀行總裁にして實は米國モルガン銀行の番頭にすぎないシャハトだつたのだ。「ドイツ銀行すなはちモルガン銀行」の稱ある所以だ！ シャハトは今年の第二次ヘーグ賠償本會議に際しては、いろ〳〵に拗ねて、遂にドイツ銀行總裁を辭職してしまつた。が、これはこの會議の上に暴露した米國金融資本團と英・佛金融資本團との對立――特にドイツといふ一つの大きな餌を爭ひあふ形に於いての――にからまつた悲喜劇にすぎない。しかして結局、ドイツ共和國大統領ヒンデンブルグは、彼を大いに丁重に慰問し、且つ彼の後任には、やはり彼の完全なる相續人にすぎないハンス・ルーターが選ばれたのだ。

所でパリー賠償專門委員會では、右のシャハトの修正案さへ英・佛の強腰に破れ、どうやら成立したものは、ヤングの原案に近いものだつた。しかしドイツ人民黨の死んだストレーゼマンを外務大臣ならびに賠償會議全權にしてゐた社民黨聯立政府は、それをそのまゝ思ひ切りよく承認して、第一次ヘーグ賠償本會議に臨んだ上、一方、國內に於いては、その承認によつて生ずるあらゆる重荷を、財政改革法案の提出によつて、そつくり勞働者と農民の上にだけ轉化して知らん顏をしようと、計畫したのだ。從つて全ドイツのプロレタリアートが、ヤング案ならびに財政改革法案に對して、昨年後半期からガウ〳〵として反對の叫びを擧げたのも無理ではない。

おまけに政府は、さうした資本家會議に絕對的な忠誠をいちはやく誓ふために、第二次ヘーグ賠償本會議が開催された本年一月三日に先きだつこと一日の、一月二日からすでに、電車賃やガス代や電燈代や水道代の値上げ――すべて無產階級の上にのみ掛かるもので、殊にガス代の如きは、五〇パーセントからの値上げだ――の實行をして見せた。

つづいて更に、もろ〳〵の財政改革案によれば、同じく五〇パーセントからのビール稅引上げ案だ。或は煙草稅引上げ案だ。鑛泉水稅の引上げ案だ。勞働者の失業保險掛け金の引上げならびに手當金の引下げ案だ！ 市町村立の住宅建築を削減する案だ！ 勞働者の健康保險の劣惡化だ。あらゆる福利增進的豫算の低下だ。すべての社會政策的事業の撤回命令だ。また麥類や肉類や靴類に對する關稅の引上げだ。これによつては、パンを始め一般食料品、日用品の重大な全線的値上げが殺到するろ！

しかも、これらはすべて、重稅に重稅の重ねられてゐる上での事である。賠償の保證に差押へられてゐるドイツ國有鐵道の運賃が、なんと高い事か！ 如何に各種の工業が、やはり賠償保證のために外國金融資本團に差し押へられてゐて、その生產品の消費者たる一般ドイツ民衆を、如何に困らしてゐることか！ それに更に來年度に於いては、一層の財源が求められなくてはならぬ事も勿論なのだ。

以上の如き財政改革のやりかたは、明かに勞働階級の上にばかり、米・英・佛の資本家にしぼられる年二十億マルクの獻上金その他の負擔

の大部分を、轉化しようといふ提案に外ならない。ところが最もあきれる事には、社民黨の經濟學者たちは、前藏相のヒルフアーデイングを始めとして、以上の如き消費税が必ずしも無産者税でないと云つたやうな、珍妙きはまる理論をあらかじめデッチ上げようと工夫する悲喜劇をさへ演じたのだ。

しかもさうした忠勤ぶりにも拘らず、ヒルフアーデイングは、モルガンの番頭たるシヤハトの御機嫌を損じたことによつて、すでに昨年の十二月廿一日、内閣からおつぽり出され、三箇月のちに今度は社民黨出の閣僚全部がおつぽり出されるに至る先鞭をつけさせられてしまつた。ます／＼悲喜劇だつた。

かくしてドイツの資本家は、米國の資本家の寛大なる(!?)おめぐみによつて、その番頭をつとめることに依つて生ずる幾らかのおこぼれを得る地位を保せて貰ふために、實に、ドイツの全民衆を賣つたのだ。今や全ドイツの國民は、米國投資綱の獨裁下に、甚だ條件の劣惡な賃銀奴隷として、わづかに最低度の生活を許して貰つてゐるものに過ぎない。それさへ產業合理化の過程の進むに從つて、おびたゞしい失業群の簇出により、ます／＼深刻に脅かされつつある。ドーズ案決定以後のドイツの經濟的復興と云つても、それは要するにアメリカの資本投下によつて、その殖民地としての經濟的再建が行はれたに過ぎなかつたのだ。僞瞞の復興にすぎなかつたのだ。

かくして、以上の如き譯合から、ヤング賠償案ならびにそれに附隨する各種財政改革案に反對するドイツプロレタリアートの大衆的叫喚は、非常なものたらざるを得なかつた。實にプロレタリアートの死活問題に關するからだ。そしてこの大衆的叫喚を組織して、階級的立場を一歩もゆづらず、强力極まる絶大の活動を演じつつあつたのが、×××××なのだ。

殊にこの××××××によつて指導された反對運動の力强さは、右黨側のそれとは違つて、ヤング賠償案に反對する一方、斷乎として、プロレタリアートの階級的立場からした、もう一つ別の具體的解決案——すなはち、すでに××××××がなしとげたやうに、あらゆる賠償及び戰債の一切の棒引き案(カイゼルの借金はカイゼルをして拂はせろ！だ)の主張を掲げてゐた事にある。この提案くらゐ、米、英、佛、獨その他あらゆる資本主義國のブルジョワどもにとつて氣に入らぬものはない！

そこでブルジョワジイは、彼等側に都合のよいヤング賠償案ならびに財政改革案を成立させ、且つそれの結果を今後六十年間に渡つて(氣の毒にも！)ドイツ民衆の上に强要するためには、どうしても民衆の眞實の代表者×××××××××××、×××つぶしてしまはうと欲せざるを得ない。かくしてこのお望みのお先き棒をつとめて、再度の共和國擁護案なるものを議會に提出する光榮を擔つたのが、社民黨のゼーヴェリング内相その他の×××だつた譯なのだ。これはさきにも書いたやうに昨年の十二月四日のことだ。

十二月より三月まで

しかし何しろヤング案は、ドイツの工業家、大地主、商業階級等にも影響する所は甚だ大きいのであるから、右翼側を始めとして各方面からの反對の大きかつたことは、前にも書いた。彼等がブルヂョワ經濟の埒内に立場をもつてゐる限り、大局の上からして結局は、世界最高のブルジョワどもに依つて組織された賠償會議が定めた世界的ブルヂョワ經濟の再建計畫に服從するより外はないのであるが、しかしとにかく、彼等はごねられるだけはごねて、選擧民の前に僞瞞劇を打つて見せようとした。それが昨年度に於いて、そして後には全く腰抜けとなつてしまつたところの右翼側のヤング案批准反對運動だ。

それがもと〱國粹派一流の空虚な運動だつた事は、彼等がヤング案採用のかはりに掲げるべき何等の見るべき成案をも持つてゐなかつた事によつても分る。つまり彼等は單に、ヤング案を承認すれば續いてそれに必要な增税案を承認しなければならなくなる――しかしこれは俺の責任ではないぞ、と見せたいだけの茶番をやつたに過ぎない。根本に於いては、彼等もすべて一致して、ブルヂョワ經濟再建の主眼に大賛成だつたのである。

たゞ、財政改革法案に關しては、彼等同志、彼等がそれ〲に代表するブル的背景や地盤が異るに從つて、足並が亂れざるを得なかつた。ビール製造業者を背景にする奴は、煙草の增税には賛成だが、ビールの增税には反對だ。煙草屋側では、またその反對だ。都會の中層市民の御氣嫌をとらなければならぬ奴らは、穀物や肉類の關税を上げて貰つては困るといふ。するとプロシアの大地主の代表者どもは、いや、國産農産品を保護して將來の戰時に於いて食料品の自給が出來る政策を今から確立しなければ不可ぬ、と仰せられる。家屋所有者階級の連中は、市町村立の住宅建築の削減には賛成だが、關税の點については、中間階級黨に味方したい、などと論ずる。更に製造工業家は曰く……鑛山業者は曰く……勞働組合は曰く……その他とにかくいろいろ、そしてみんな算盤片手に增税の押しつけ合ひで、選擧民目あての御尤もさうな八百長、或は多少は本氣の喧嘩をつゞけた。

與黨の中心の社民黨の中でさへ、少し氣の弱い奴は、失業保險料金の引上げだけは、どうも勞働組合の手前、少し遠慮した方が得策ではないか、さうでないと次の選擧のときに、またもや共産黨に喰はれてしまふことになる……などと選擧第一主義及び組合第一主義の立場から、眞ッ先きに心配する。

かくして共和國擁護法案が提出されてから一週間後の昨年十二月十三日、この財政改革法案の國會上程に際しては、政府の危機さへかもされた。それは辛じて、政府の全般的政策に對する概括的信任投票によつて、逃れはしたが……。しかしそんな間にも、共産黨の代議士が五十四人も揃つて登院停止を喰つたりした事件までもち上つたのだ。

如何に正しいプロレタリアートの代表者たちのみが、ブルヂョワ經濟



一月十八日　ケムニッツにて

策に對して、根本的な抗爭をなしたか！　所でこの儘の形勢が今年にも持ち越した。

そして左翼側にとつては、先づ一月七日、すでに本年最初の「赤い葬式」がいとなまれなければならなかつた。同志、勞働者ノイマン君がファシスト（國粹社會黨員）のために殺されたのと、やはり同志コビッチ・メーヤー君が獄内で死亡させられた事件だ。左翼勞働者の憤激は、昨年末から特に深刻さを加へつつあつたデモの波にのつて、ます／＼高まつた。しかも一月十五日――カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルグとの殺された紀念日には、又もや、一層湧き立たざるを得ない事件が、ベルリンからあまり遠くないザクセンの工業都市ケムニッツに勃發しさへしたのだ。

この日はベルリンでも、各種の革命的紀念の催しが強力に展開されてゐた。所がケムニッツからは、ストライキのデモが武裝警官隊の發砲襲擊をうけ、ために五名の勞働者が既死し、重輕傷者無數といつた飛報だつたのだ。

しかるに又して奇怪な事には、十六日朝の社民黨の機關紙「フォルヴエルツ」は、逆ネヂ的圖々しさをもつて、

――コンムニストは××を見たがつてゐる！

といつたデマゴーグをさへ大書した。しかもその日の夕方、社民黨のプロシア國內務大臣グルッエジンスキイは、ベルリン市をふくめての全プロシアに於いて、屋外集會ならびにあらゆる示威運動を禁止す

るといふ一般告示を出したものだ。この夕方の左翼側の大衆新聞「ウエルト・アム・アーベンド」は、

――勞働者は餓死せねばならのか!?

と疾呼して「フォルヴェルツ」に報ゐてゐる。

更に翌朝の「ローテ・ファーネ」は、

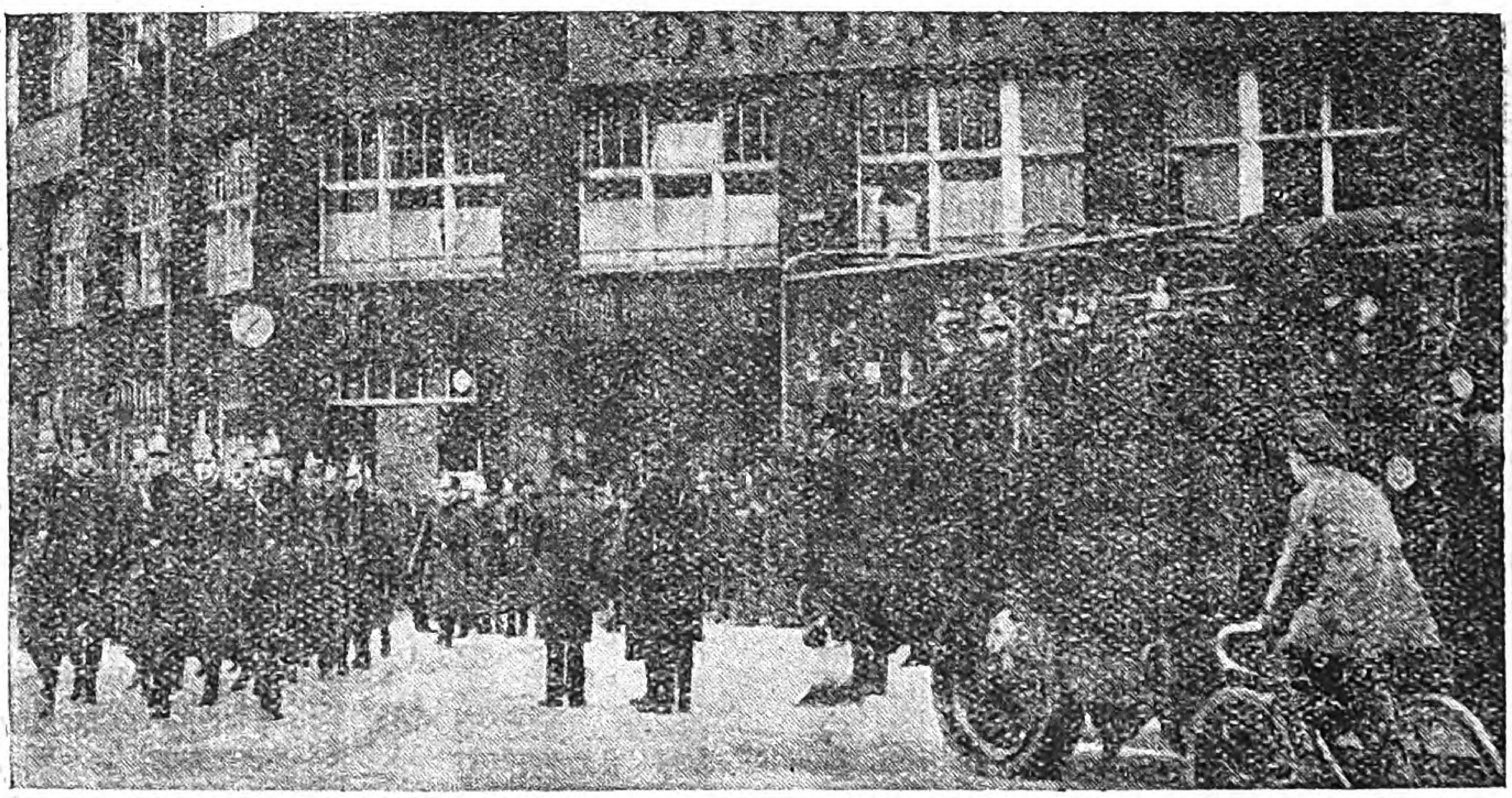
――我々の返答は、全線的鬪爭だ!

とやつてゐる。この「ローテ・ファーネ」は發賣を禁止され、警官隊は早朝、「カール・リープクネヒトの家」を襲撃した。しかし、この晩にも引きつゞき催されてゐた各所のL・L・L週間の會合(リープクネヒトとルクセンブルグと、廿一日が忌日であるレニンとを一緒に紀念する週間の會合)の席上では、平氣でこの禁止版の「ローテ・ファーネ」が賣られてゐた。

更に三十日には、ハンブルグでは遂に勞働者と警官隊との間に、×××××××持上つた。勞働者の叫びは「勞働者を餓死させる政治に絶對反對だ」だつた。遂に死者二名、負傷者無數!――

二月一日、二日、ベルリンでも同樣のデモがつゞいた。

更に二月十八日になると、三百人の警官隊が「カール・リープクネヒトの家」を襲つて、ドイツ共產黨本部ならびに「ローテ・ファーネ」編輯局、印刷局の家宅搜索を强行した。これは議會提案中の「共和國擁護法」に關して、共產黨の結社を禁止したい目的の材料を得るためだつたのだ。しかし何者をも得ずに引き上げたのだ。



二月十八日　カール・リープクネヒトの家襲擊さる

この頃になると社民黨聯立內閣の態度は、全く血迷つてしまつた形だつた。ドイツで唯一の自由主義新聞「フランクフルト新聞」さへ、社民の遣り方を嘲笑して、もし社民黨政府が共產黨の結社を禁止すれば、現在どつちかと云へば合法黨としての弱味を有するドイツ共產黨が、

かへつて××××××××××××起ち上るに至り、社民黨こそ一とたまりもなく敗北するに相違あるまいと、警告を發表し出すに至つた。或ひは又一方の噂さでは、ドイツ共産黨はすでに解散令に對する一切の戰鬪準備をととのへて、「カール・リープクネヒトの家」をさへ轉賣して、所有者名儀を書きかへてしまつた、と。かくて、形勢は日に日に險惡の度を深めつゝあつた。

所が更に、反ファシスト靑年前衞隊が、昨年のメーデー後に禁止された赤色戰線鬪士同盟の後身たるの理由をもつて、解散を命ぜられたのだ。しかしやはり、靑年達は×××××××××××連夜のやうに五百人くらゐづつの一隊をもつて、制服制帽のままのデモを、勞働者街の各所につゞける事をやめなかつた。

又一方、この一月間といふもの、ドイツ全國の各工場、各百貨店、各交通機關……等々で引きつゞき行はれた法律上の從業員代表者會議（ベトリーブスレーテ）の代表者選擧に際しては、共産黨に指導されてゐる所の「勞働組合・反對派」の非常な優勢の成績が、つぎ〳〵と報導されつつもあつた。これは××××××××××××を共産黨が握り始めた事として、頗る社民政府をおびやかすに足りるものだつた。

かかる形勢の中にありながら、先づ三月五日、ヤング賠償案批准案は、この國の上院のやうな聯邦參議院（ライヒスラート）を通過させられた。そして翌日が最初に書いた「赤い木曜日」だ。十一日に至ると、ヤング賠償案批准案は、更に國會（ライヒスターグ）でも第二讀會を通過した。三五一票對一七四票だ。反對したのは、共産黨と、ドイツ國粹黨と國粹社會黨と、中間階級黨たる經濟黨（ウイルトシャフト・パルタイ）だけだつた。閣僚を一人出してゐるバイエル人民黨の廿六人の代議士が、投票を棄權したのも面白い。又一方、中央黨（ツエントルーム）の首領ブリューニングは、今までの反對的態度をこの時に一轉して、ちよつとした釋明演說をやつてのけると、忽ち政府に妥協してしまつたのだ。この時からすでに彼の上への政權たらひ廻しの默契が成立つてゐたのかも知れない。

つづいて翌十二日、ヤング賠償案批准案は國會を完全に通過した。二八〇票對一九二票！

十三日の「ローテ・ファーネ」は叫んでゐる。

──ヤング案の鐵鎖の中へ！──奴隷的協約が法律にまで昇級した！──國會と政府はドイツの民衆を賣つた！──しかも次の鐵鎖は、共和國擁護法であり、關稅引上げであり、增稅であり、そして武裝警察だ！

しかし大統領ヒンデンブルグは、この日、大衆的叫喚を背景とする斯かる唯一の勞働者黨の抗議にも拘らず、大いそぎでヤング案批准の手續き──署名裁可──を完了してしまつた。

かくして更に次には、いよ〳〵十八日の「共和國擁護法案」通過にさへ至つた譯なのだ。

しからばドイツのプロレタリアートは、敗北したのだつたらうか？ヤング賠償案と共和國擁護法と各種のブルジョワ的財政改革案との相交叉する縱横の鐵鎖の中にあつて、全く身動きが出來ないやうにしばりつけられてしまつたのだらうか？

否！　否！　ドイツのプロレタリアートは、この全線的政治闘爭の重大な肉迫期を境として、むしろ、××××××××××獲得しさへしたのだ。思へば三月十八日こそが、勞資對陣の最高潮的瞬間であつた譯だ。

この十八日を境として、遂に資本軍の一歩退却、或は陣容立て直しが始まつた。彼等の間に、その陣容を立て直して、一層強力な獨裁的風貌をもつて出直さうとする計畫が、ひそかにめぐらされざるを得なかつた。彼等は議會の表面でこそ各種の取引きによつて、共和國擁護法を通過し得たものの、しかし實際的な裏側では、プロレタリアートの驚くべき實勢力を前にして、その政權運用の一層の狂暴化の計畫――すなはち、同時にすでに敗北への最初の大きな動搖――を經驗しなければならなかつたのだ。

社民黨の無能・無力・醜行・破綻
（内閣を追ひ出されるまで）

勞働者街では、子供たちの間に、恰度獨樂廻しがはやつてゐた所へ、不意に、玩具のピストルを持つて遊ぶことが割込み始めた。警官の使ふやうな黒塗の大型の奴で、盛んにパチン〳〵撃つ。小さな連中が、あどけない鼻にかかるベルリン特有の發音で、口をそろへて叫ぶ……

――ツエルギーベルに絶對反對だ！

無論これは、デモの時の眞似だ。しかし子供たちはピストルをもつて警官に扮してゐるのではなく、親達にかはつて、親達の間に横はる大きな階級的本能を、卒直に表現しつつあるのだ。とにかく全く不意に、至るところで、これが大流行なのだ！　××××××チヤンバラ遊戯に染まつてゐなかつたベルリンの兒童の間に、かうした遊戯がはやり始めたことは、確かに社民黨の警視總監ツエルギーベルの責任である。

所でさて三月十九日――。

政府は大統領ヒンデンブルグをして、ヤング案批准案通過の時のやうに、大いそぎで早速、共和國擁護法の署名裁可、即時効力發生……といつた段取りを進行させただらうか？　そしてそれによつて、ドイツ共産黨が忽ち解散されてしまつただらうか？

が、實はなんにも起らなかつたのである。しかもそれどころか、却つて、社民黨の機關紙「フオルヴエルツ」は、プロシヤ政府が近くデモの禁止令を解除しようとしてゐる事をさへ發表したのだ。無論、その理由は、共和國擁護法が通過した今日、デモの禁止令は必要がなくなつたからだとある。しかし彼等に、ドイツ共産黨を本當に解散させ

得る成算があつたとすれば、××××××××××××××××××××××××××××××××××××××を豫想してゐねばならぬ。この形勢を前にして、デモの禁止令が無用の長物になつた譯がない。彼等は共和國擁護法を議會で通過せしめ得た。しかしそれを實施し得るだけの力も自信も持たなかつたのである。政治は結局力の問題である。政府が法律を實施し得るのも力に依るのであり、又民衆が悪法の實施をさまたげ得るのも力に據るのだ。プロレタリアートの下からの壓力に押されて、政府の内部でも特に社民黨系の閣僚の間には、退却の氣分が動き始めたのだ。

それに社民黨としては、昨年のメーデーでこりてゐる。メーデーのデモを禁止して遂に三十三人の勞働者を殺し、多數の重輕傷者を出してしまつた。勞働者は、それがよし社民黨所屬の勞働者であつてさへ、×××××××××××事實に直面すれば、忽ち彼等自身の階級的×××××××××××——社民黨のダラ幹ども——の正態を見拔いてしまふのだ。で、それは昨年十一月十七日、ベルリン市の市會議員選擧——メーデー以後の最初の選擧——に際して、共産黨に對する投票が二十二萬票も増加した事實となつて現れた。社民黨にして見れば、今年もすぐに目近かのメーデーを前にして、いくらデモを禁止しても、共産黨はデモをやめない。デモをやられて見れば、禁止令の手前、いやでも何人かの勞働者××××××××、彈壓せざるを得ない。しかし勞働者を××××ば、自黨のそも〱の金看板の選擧にさへ影響してくる。さうかと云つてデモを自由にし、共産黨の活動を傍觀してゐても、やはり自黨が喰はれるばかりだ。(社民黨が共産黨に極めて急速に喰はれつつある事實は、昨年後半期から今年へ掛けて非常に顯著だ)なんとかして思案せざるを得ないが、しかしとにかく、損害のみあつて益のないデモ禁止令の如きは、共和國擁護法案の通過をデッチ上げて、とにかくブルヂョワジイへの當面の忠勤をすませたこの場合、とりあへず引込めさして貰ひたい……。

が、社民黨のかうした退却的方向と、せつかく、ヤング案の批准、共和國擁護法の通過によつて戰備を終り、いよ〱これから財政改革法案の强行にとり掛かつて、自己の算盤勘定の實際化を見なければならぬ地點に立つたブルヂョワジイの積極的意欲との間には、どうしても矛盾が認められなければならない。則ち、いよ〱と云ふ財政改革の大手術を前にして、ドイツ社民黨の弱腰及び不徹底さは、米、英、佛、獨のブルヂョワジイの喜ぶ所ではない。

殊に社民黨は、勞働者の失業保險の掛け金引上げ及び手當金引下げ案について、勞働組合の手前を顧慮する弱腰が甚しかつた。社民黨出の勞働大臣ヴイッセルは、勞働組合から眞向の反對をつきつけられ、そこで、下からの壓迫と、上からの——ブルヂョワ側からの——絶對强行政策の强要との間にはさまつて、ベソをかいてしまつた。それでも尚、社民黨は、ブルヂョワへの專念な忠勤と、一方では一般勞働階級への僞瞞的な見せかけとを、あらゆる醜怪きはまる努力によつ

て續けようとしてゐた。

しかしすでに事ここに至つては、ブルヂヨワヂイにとつて社民黨は、今や全くの役立たずの――單に尻尾を振てゐるのがしをらしいといふぐらゐの――間拔け者に過ない。そこでブルヂヨワジイは、いよいよ最後の第三の財政策の問題については、社民黨の手によつてではなく、もつとブルジヨワ獨裁的風貌を容赦なくむき出すことを辭しない所の、他のブルヂヨワ黨の内閣によつて處理させようと決心するに至つたのだ。そこで内閣改造――内閣からの社民黨追ッぽり出し――の策が急速に講ぜられて、遂に三月廿七日の夕、首相を始め三人の社民系の閣僚だけが、お拂ひ箱になつてしまつた。前藏相ヒルフアーデイングが先づ手始めに槍玉にあがつてから、まだ漸く三ケ月しか經つてゐない。なんと哀れむべき、ブルヂョワの、外様大名的な飼犬どもの末路だつたか！

せつかく議會を通過させた共和國擁護法さへ、弱腰から、自分の手で法律上の手續きを完了することが出來ないでゐるうちにだ！

一方、三月廿七日と云へばドイツ共産黨では、第一回全歐農民代表者會議をベルリンに開催し、勞農兩階級提携の上に立つ一層全線的な攻勢の戰略を議しつつあつた時である。

所で一體、社民黨の閣員は、政權にありついてゐる間に、何をしたか？ 少しでもせめて社民黨らしい政策を實現する事が出來たか？

否、なんにもしなかつたのである。彼等は始め、一九二八年五月二十日の總選擧の前に、當時問題だつた裝甲巡洋艦の建造に反對して、その費用を兒童への供食費に廻す政策を公約した。そして百五十二人の代議士を得て内閣の主席につくや、今度は美事に宙返りを演じて、その裝甲巡洋艦の建造に賛成してしまつたのである。極度に閤々しい、最も反プロレタリヤ的な裏切りであつた。

次いで彼等が更に背後のブルジヨワヂイから要求された任務は、なんであつたか？ それは歐洲に於けるブルジヨワ經濟再建のためのドーズ案からヤング案へかけての賠償問題、撤兵問題、戰債問題、等々にからまる一切の國債的政治經濟問題の最後的解決であつた。しかしこれは社民黨にとつて、黨として特に特別な政策をかかげて買つて出なければならぬ問題でもなんでもなかつた。云はゞ全く、ブルジヨワジイへのおつとめであつた。

殊にこれらにからまる一切の實際問題は、すべて、ドイツ人民黨のストレーゼマンが選んだのであつて、社民黨はのちに、それらの決定を背後から保護するための共和國擁護法の確立について、ゼーヴエリングをして活躍させる光榮だけ許るされたぐらゐのものだつた。つまり以上の二つとも要するにブルジヨワジイへのお勤めである。そしてもし社民黨としての、多少の、獨自らしく見せかける仕事があるとすれば、それは、財政改革法案にいくらか社民黨らしい色合をつけさして貰ふ事だけだつた。

所が、彼等が一通りの忠勤を果したつもりで、さてこれからは、少しは社民黨としての看板の手前、色をつけて貰へると思つてゐると、

忽ちブルジョワ側から、馬鹿を云つては不可ない、もうお前たちには用がないから引ツ込め！　と剱もホロロに敲き出されてしまつたのである。

ブルジョワジイの奸智な政略は、あざやかだと云へばあざやかだ。しかしもと〳〵、社民黨の階級的折衷黨たる役割が、さう云ふバカバカしい役を演じさせられるやうに、始めから出來てゐるのである。これを以つてしても、眞にプロレタリアートのための輝かしき、強力な、同時に苦難に滿ちた任務を進めてゆく事の出來る譯が、ます〳〵明かであらう。

ブルジョア獨裁へ

三月廿八日、大統領ヒンデンブルグは、中央黨（ツエントルーム）の首領ブリューニングに、「黨派的束縛なしの内閣」をつくるやうに委任した。

出來上つた顔振れは次の如し。

首　相　ブリューニング（中央黨）
副首相　デイートリツヒ（ドイツ民主黨）
外務大臣　クルチウス（ドイツ人民黨）
内務大臣　ウイルト（中央黨）
大藏大臣　モルデンハウエル（ドイツ人民黨）
經濟大臣　デイートリツヒ（ドイツ民主黨）
司法大臣　ブレツト（經濟黨）
國防大臣　グレーメー（無所屬）
勞働大臣　ステーゲルヴルド（中央黨）
交通大臣　ゲラルド（中央黨）
遞信大臣　シエツツエル（バイエルン人民黨）
食糧大臣　シーレ（土地同盟）
被占領地大臣　トレーヴイラヌス（人民右黨）

十三個の椅子の中で、新顔が占めたのは、四個だけである。ブリューニング、シーレ、ブレツト、トレーヴイラネスだけの新加入だ。明かに、社民黨追ひ出し劇の大團圓だ。一番左をドイツ民主黨（デモクラーテン）に、一番右を土地同盟（ランドブンド）にとり、その中間の諸黨をつらねたやはり聯立内閣組織だ。たゞそれらは、みんな小黨なので、左にドイツ共産黨、ドイツ社民黨、右にドイツ國粹黨と云つた三つの大政黨を敵に廻してしまつては、無論、敗北する。そこで手品の種が、シーレの入閣にしかけられてある譯となる。

シーレはもと〳〵ドイツ國粹黨の所屬である。が、ドイツ國粹黨は、帝政復活を揭げてゐる關係上、共和國としての現ドイツに於ては、常に反對黨に立つてゐなければならぬ。しかしそれでは實際的に不利益なことが多いので、シーレのやうな人間が、その内部に「土地同盟」といつた農業地主を基礎にした別派をつくり、一方のフーゲンベルグの率ゐる重工業關係のブロツクに對立しつつ、政權にありつく

毎に、それだけをひきゐて本隊から離れ、入閣する。今度もシーレは、「土地同盟」の名によつて入閣し、地方の大地主を利するために、特に農業關係の食糧大臣をみづから買つて出て、大いに悪辣な活動をしやうと云ふ所存なのだ。

しかし裏ではやはり、ドイツ國粹黨とも緊密に聯絡して、いろ〳〵な利益分配の取引きの末に、ドイツ國粹黨をして政府を支持させるとすれば、議會の形勢は、朝野五分々々よりも多少政府側に好くなる勘定なのだ。

一方、社民黨は、三月廿五日、聯邦内閣の事務引渡しの最中に、どうやら共和國擁護法の法律上の手續きを完了し、官報公布によつて直ちに効力を發生せしめた。それと同時にまた、まだ政權を握りつゞけてゐるプロシア國に於いて、内務大臣グルツェジンスキイをして、デその禁止令を解かしてしまつた。これはさきに觀察したやうな理由によると共に、今や國會に於いて在野黨となつた爲、自黨としてもまた、デモを行はなければならなくなつた緊急の必要からだ。

しかし一月から三月この日に至るまで、かうした各地のデモ禁止令による犠牲者の總決算は次の如くである。

死者　　一二名！
逮捕　　六〇〇名！
刑期の總計　　一〇〇年！

しかもこれだけの事をして置きながら、社民黨は、プロシヤに於けるデモの禁止令を一旦ひつこめるや、直ちにベルリンで、新内閣反對のちよつとしたデモを始めたものだ。圖々しい、恥知らずなこと此の上なしだが、更に彼等が掲げたスローガンを見ると驚く。曰く「反動内閣に反對だ」と。しかし新内閣のうち九つの椅子までは、ちよつと前まで自分たちと一緒の同僚だつた連中が占めてゐるのだ。これが反對なら、前内閣だつてやはり反動の同類に相違ない！

更にもう一つ、一層滑稽なことは、社民黨が今度の政變について、彼等が勞働者黨としての立場を守り、失業保險の問題についてブルジヨア的閣員と爭ひ、遂に容れられざるため、みづから進んで野に下つたのである——とデマゴーグを飛ばし始めたことだ。無論、わらはせる話に過ぎない。

所で別に一方、ドイツ共産黨も無論、新政府に絶對反對だ。ベルリン市中央區の青年たちは、デモの禁止令が解かれた三月廿九日、さつそく新政府反對のデモを盛大に行つた。これに對して「カール・リーブクネヒトの家」の前で、ハインツ・ノイマンが、激勵演説をやつた。

更に四月二日の晩には、ルスト公園で、全ベルリン市の大々的な新政府不信任のデモが擧行された。この日は警官隊が全く手出しをしなかつた爲、何事もなく、數萬の勞働者隊の優勢裡に終つたが、しかしあとで、警視廳側が蔭にひそかに機關銃を用意してゐた事が曝露されて、翌日はやかましい問題となつた。

尚同日、赤きノイケルン區では、小學兒童のストライキまで勃發し

て、白い制服をつけたピオニールたちが少年少女たちのデモの先頭に立つた。

又この日は、議會でも、共產黨及び社民黨提出の新內閣不信任案の討論が行はれた。そして翌三日、採決——。

——政府支持　二五三票（與黨及びドイツ國粹黨、その他）

——政府不信任案　一八七票（共產黨、社民黨、國粹社會黨、その他）

ドイツ國粹黨はこの日の朝まで「ドイツ新聞」で

——ドイツ國粹黨は、內閣に對する不信任案を支持するであらう。

と發表してゐたのである。それが一般の豫想通りに、黨首フーゲンベルグの一片の辯解演說とともに、忽ち最後のどたん場で、政府支持に一轉してしまつたのだ。

それから更に不可思議な事は、ちよつと見ても分る通り、政府不信任案が共產黨、社民黨、國粹社會黨と大きな政黨をつらねての割に、投票の少いことだ。共產黨が五四人、社民黨一五二人、國粹社會黨一二人——これだけをよせても、二一八票にはなる筈だ。それがさう行つてゐない。

これには大いに譯がある。社民黨の代議士の多數が、計畫的に、ひそかに缺席してしまつたのである。自黨にとつて最も大切な政府不信任案採決の日だと云ふのに……。缺席者の中には前首相ヘルマン・ミユーラーを始めとして、日本でも若干の崇拜者を持つ舊藏相ヒルフアーディング、前經濟相シユミツト、プロシア國首相ブラウン、……等等、社民黨としての錚錚たる連中が少くなかつた。つまり社民黨は、決して本氣で新內閣不信任案を提出したのではなかつたのである。勞働者階級の手前、表面上の見せかけだけの不信任案の芝居を打つたに過ぎない。裏面ではすでにちやんと新內閣と手を握り、多數議員缺席といふ消極的方法によつて、美事に政府を支持してのけたのだ。

社民黨のダラ幹どもが、如何に醜類であるかはこれによつてもいよいよます／＼明白であらう。彼等は前內閣に於てさん／＼ブルヂヨワジイに奉仕したあげく、ブザマなおツぽり出しを受けながらも、しかも尙、ブルジヨワへの忠犬根性がぬけずに、ます／＼ブルヂヨワジイに向つて、シツポを振りつづけてゐる始末なのである。眼を掩ひたい醜行ではないか！

かくして新內閣は、表面上はともかくも、裏面では明かに、左は社民黨から右はドイツ國粹黨に至るまでの治汎な支持をうけて、當面の難問題たる財政改革案を處理するのに最も都合のよいコンデイシヨンを築き上げた。これがまた背後のブルヂヨロジイの最初からの巧妙なもくろみでもあつたのだ。

ヒンデンブルグはすでに最初に、「黨派的束縛なしの內閣」をと要求した。彼等のブルヂヨワ獨裁への要望は、漸く露骨である。ブルヂヨワ議會の表面に於ける政黨ごつこの如きは、もはや兒戲化されてしまつた。敵も味方も、一層強力な獨裁的政權の樹立によつてでなしに

は、現在の政局を處理し得ない地點まで押し詰められて來てゐる。そこで殘された問題に、その獨裁的政權をブルジョワジイがます〳〵進んで握りつづけるか、プロレタリアートが斷然起つて、奪取するか――だけである。

ところで、用意の出來た新内閣は、まがりなりにも片ッぱしから、財政改革案の處置をつけ始めた。そこにはまた、甚だ奇怪なことばかりが伴つた。そして幾度か議會解散説が傳はりつつも、不思議と、四票だ十票だのの差でさへ、政府案が通つて行くのだ。ヨチ〳〵の足どりのやうに見せながら、妙に何處かに腰の据つてゐる新内閣だつたのだ。

しかも彼等の片手には、勞働階級の大きな反抗を彈壓すべき共和國擁護法が、常に握りしめられてゐる。彼等はオールマイテイーの切り札を握つたつもりで、無氣味に、表面的にはおだやかに笑つてゐる。彼等はともかく、この法律が効力を生じたにも拘はらず、いそいで切り出さうとはしない。しかしそれを握つてゐることによつて、いつなんどきでもキツカケさへあれば、獨裁的な牙をむき出して起ち上ることを離しない決意を示してゐるのである。

プロレタリアートの攻勢

ブルヂョワ獨裁への彼等の用意は、着々として進んだ。しかし同時に又、それに對立するプロレタリアートの攻勢的陣形も、ます〳〵整へられつゝあるのだ。三月十八日を境として、社民黨はすでに逃げ腰となり、更に三月廿九日、實際的にもデモの禁止令を解いてしまつた。勞働階級の上に高まつた再度の××××をさへぎる何ものも無力だつた。

そしてこの情勢が忽ち具體的な、端的な形をとつて現れたのが、四月廿日、廿一日、オースタン（耶蘇復活祭）の休日に際して、全ドイツからライプチヒ市に結集されたドイツ共産主義青年同盟の第五回大會に勃發した事件であつた。

その今年度の大會は、最近のドイツプロレタリアートの全線的攻勢に伴ふため、從來いくらか薄弱のきらひのあつた青年運動の戰線を、いよ〳〵強化・擴大すべき、當面の活動方針を決定しようと云ふ重大な意義をもつものだつた。そこで青年たちの間には、今年の大會には特別な意氣込みがあつたと見てもよい。

先づ四月十八日、すでに、ベルリンの共産主義青年同盟員は、陸續としてライプチヒへ向けて出發し始めた。耶蘇復活祭の前の金曜日で、その日も休日だつたのだ。彼等はみんな一團四十人ぐらゐづつ、トラックに乘つて押し出したものだ。赤旗を車上に林立させ、×××を高唱しつゝ、約五六時間もかゝる道のりを、ひた押しにデモッた譯だ。彼等の元氣のいいトラック隊に、警官もまた自動車隊で、兩側にお供をした形は、なか〳〵愉快なものであつた。

警官隊は、ベルリン市の出發地點や途中の警察署などで、彼等を扼

して、武器携帶の有無に關する嚴重な身體檢査を行つた。しかしこんな事ぐらゐで、何ものをも摑ませるやうな青年たちではない。×××などの隱匿については、婦人鬪士たちが、女性たる身體を利用して、身をもつて當つたのだ。

かくして廿日、ライプチヒ市のアウグスタス廣場に約十二萬の同盟員及びその外廓が結集した時には、彼等の大部分は、いつの間にか、何等かの武裝をしてゐたのである。この大會へは、ベルリン市シエーネベルグ區（從來最も反動的氣分だつた山の手風の地域だ！）に於ける社民黨の勞働者青年同盟の一隊や、ルール地方に於けるキリスト教勞働者青年團の代表者たちまでが、それ〳〵集團的にはせ參じて──その他個人的にはベルリンから、ケムニツから、ドレスデンから、カッセルから、バイエルンから……等々からも馳せ參じて──壇上で、共產主義青年同盟の議長クルト・ミユーラーと手を握り、戰線合一を叫んだ。これは日本に於いても、昨年、關東地方の日本大衆黨の青年部が、無產者新聞、解放運動犧牲者救援會、××青年同盟等の支持を決議した事件のあつたのと同樣の情勢に依る。

所でアウグスタス廣場には、頂上に鷲の紋章のついたライプチヒ市の三本の大マストがあつた。これに大きな赤旗が揭げられた。この事にライプチヒ市側の武裝警官隊（ピストルではなしに軍隊式の銃を構へてゐた）が文句をつけた。そして遂に彼等は、大衆に向つて發砲したのだつた。恰度、テールマンの演說最中の出來ごとだつた。ライプチヒ市の田舍警察の目算では、この發砲によつて二三人も倒せば、忽ち大衆を押へてしまふ事が出來るものと考へたらしい。

所が幸か不幸か、彼等が鐵砲を擊ち込んだ相手が、ベルリン市から來た連中の中でも誇り高い「赤きノイケルン區」の青年達の鐵壁の陣營だつたのである。ノイケルン青年等は直ちに電光石火の素早さをもつて、警官隊の發砲をも物ともせず、（削除）ために警官がかへつて同僚の警官を射殺してしまつたりさへもした。これで警官側の即死者二名。他方勞働者側でも犧牲者一名、その他、多數の重輕傷者を出した。

ノイケルン青年たちが、かくの如く一氣に攻勢に出て、（削除）かへつて慘事を擴大させずに濟んだのである。青年たちが、かく、咄嗟にさうした適宜な行動が出來たといふのも、昨年のメーデー以來、特に最近の急迫した情勢の中で、彼等が如何に（削除）鍛へられてゐたかを示すものに外ならない。

かくして彼等は、この廣場での屋外集會を完全に護り了せた。ついでその攻勢的餘波をもつて、ライプチヒ全市の至るところを、猛烈なデモで押し廻つた際の如きは、警官隊は遂にどこにも片影さへ見せなかつたのである。たま〳〵警官がゐれば、交通巡査だけで、それらはかへつてデモのために交通整理をしてくれた位だつた。

（削除）

ライプチヒから青年たちが歸つてきてから以後のベルリン市の勞働者街は、更にます〳〵活氣づいてしまつた。到るところ、（削除）ツエ

ルギーベルざまあ見ろ——のデモが縦横に行はれた。そしてこの威力の流れは、當然、一つの目近い目標——一九三〇年のメーデー！——三十三人の犠牲者を出させられた昨年のメーデーの×××！——へと目がけて、一路まつしぐらに集注され、組織され始めた。

メーデーめがけて！

今年のメーデーに對する「ローテファアーネ」の宣傳は、すでに四月八日から大々的に始められた。そしてライプチヒでの青年たちの大攻勢のあと、その潮をつかんだ呼吸で、四月廿四日、ドイツ共産黨中央委員會は、全ドイツの勞働者に對する總動員令を發した。

ここで注意すべきは、ドイツ共産黨が今年は遂に、社民黨とは別箇のデモを、獨立して行ふ計畫を發表した事だ。昨年のメーデーに際しては、社民黨はみづからのデモ禁止令にしばられて、デモを中止し、勞働者黨らしく見せかけてゐた看板にさへ泥を塗つた。この事はさすがの第二インターナショナルからさへおしかりを受けた。殊に勞働者たちから見れば、社民黨の警視總監の命令下に、三十三人の犠牲者までこしらへさせられたに於いておや！ 故にその××××今年のメーデーに、共産黨が斷然、別行動を宣言した事は當然の戰術でなければならぬ。

又共産黨としては、社民黨と別行動をとつて、斷然優勢を示し得るだけの成算があつたのである。それは昨年十一月の市會議員選擧以來、ます〳〵壓倒的に、その各地域班や工場細胞が擴大しつつあつた事實から、何人にも確實に豫想し得ることであつた。共産黨は今年のメーデーにこそ、社民黨を突ッ離して、如何に勞働階級が激しい熱意をもつて、大衆的にドイツ共産黨を支持し、社民を見捨てつつあるかを、白日のもとに如實に指し示すべき時期に達したのだつた。

しかしメーデーの豫想については、まだいろ〳〵問題がある。三月末の政變のため、今度の聯邦内閣は中央黨中心の聯立内閣となり、内務大臣ウイルトも中央黨である。そしてこの男は、一九二二年六月、第一次の共和國擁護法を制定した時の首相である。所が一方、ベルリン市をふくめてのプロシア國では、首相ブラウンも、内務大臣グルツエジンスキイも、警視總監ツエルギーベルも、みんな社民黨だ。この場合、社民黨としては、昨年とちがひ、中央政界に於いて在野黨となつたのであるから、勞働者階級への僞瞞のためにも、メーデーぐらゐは是非とも擧行しなければならぬ。プロシア國政府の支配下にある警視總監ツエルギーベルは、いやでもデモを許す方針に出なければならぬ。

そこでブルジョワ獨裁への道をたどりつつある中央政府に、勞働階級の攻勢的デモを喜ばない意があるとすると、どうしてもプロシア國政府及びベルリン警視廳の方針との間に、矛盾が生ぜざるを得ない。ことにライプチヒの事件があつた直後なので、中央政府としてはメーデーのデモを禁止してしまふ理由はいくらでも立つ。メーデー彈壓の

絶好の機會などである。事實、左翼側でも「ライプチヒ事件によつて、政府は口實を得た、或ひはメーデーのデモを禁止してくるのではないか」とさへ豫想した。

しかし何と云つても中央政府の下には、警視廳も警官隊も屬してゐない。もし中央政府がデモの禁止令を發したとしても、ベルリンでは警視總監がまつさきに、社民黨の立場から、その實行をサボツてしまへば、それまでである。

しかし又、その警視總監といへども、やはり自黨の立場からして、共産黨側のデモだけは、何とかして踏み躙つてしまひたい。則ち左翼彈壓の方針に關してだけは、中央政府もプロシア政府も見解の一致を見られる譯だ。そこで社民黨に屬するプロシア國の首相ブラウンと內相グルツエヂンスキイと警視總監ツエルギーベルと、中央黨に屬する中央政府の首相ブリューニングと內相ウイルト――この五人がどう云ふ取引きをして、如何なる方策を案出するか？は全く面白い、或ひは全く滑稽な、問題でなければならぬ。名案がなくて、さぞ、弱つてゐる事と察するより外はない。

しかし左翼の勞働者たちにとつては、今年はもはや、政府がメーデのデモを禁止するか、しないかは問題ではないのである。最近の攻勢的巨歩をそのまま進めて、如何なる禁止令をもケトバシテしまふだけの話だ。たゞ禁止された場合は、再び三月六日のやうに、集中的デモのかはりに××××××デモの戰術をとり、一層政府及び警視廳をなやますであらう、と云つたぐらゐの相違があるだけだ。いづれにしてもプロレタリアートの決心には變りはない。三月十八日以來まつしぐらの全線的攻勢が、今や五月一日のデモに向つて、組織的に集注され、そこに、來るべき勞働者階級の勝利への一歩前進を、いやでも確保しないではおかない形勢になつて來てゐるのだ。たとへ警官隊が×××××、全くおとなしく出やうと、勞働者は、終始、攻勢的態度でこれを押しつぶしてしまふ必要がある。勞働者は必ず、そこに、××××を示さなくてはならぬ。

しかし又、政府が獨裁的用意を確立してゐる事もすでに事實だ。そして政府にとつても、この五月一日に於けるプロレタリアートとの全線的對陣は、甚だ重大な意義があるのだ。ただ現在の情勢をもつてしては、政府は、特に積極的にプロレタリアートに挑戰することを、得策とはしないらしいだけの話だ。殊に今度の政府は、今のところ、どつちかと云ふと、前內閣よりも陰險な實利主義で、勞働者にはいくらでも欲するだけデモをやらせるかはりに、そのスキに、財政問題などについては、拔け目なくブル的利益をふまつて確保してゆく、と云つた遣り方らしい。又さう云ふ仕事が、背後のブルどもからねらはれた現內閣の使命でもある。ブルどもとしては、今やせつかくドイツのブル的生産組織を再建して、これから利潤をあげようと云ふ矢先きに、ドイツの社會情勢を極度の不安に導いてしまふことは避けたいのだ。

そこでライプチヒに於けるやうな事件によつて、プロレタリアートか

ら挑戦され、且つ政府の面目が全つぶれにされやうとも、そんな事は笑つて黙殺すると云つた態度で、たくみに、出來るだけ、勞働者階級との實際的衝突を避けて行かうとする。つまり、今度の五月一日は、表面的にはどこまでも穏便にすませつつ、しかもその無言の立ち合ひのどこかに、いくらかの勝ち味、あるひは脅かしを示すことが出來るとすれば、上々吉なのであるらしい。

しかし我々は、それだけ、今度の五月一日が、よし表面的には、或は甚だ穏便に終らうとも、その底に重大な勞資兩階級の全線的××××の陣形のあることを、理解して掛からなければならぬ。ドイツのプロレタリアートよ、××××××!

今や世界の情勢は、さきにコミンテルンの第六回大會が規定した歐洲大戰後の資本主義沒落の第三期に屬し、しかも現に漸く何びとの眼の前にも、資本主義内部の諸矛盾の尖鋭化が、全く掩ひ得ない事實となつて、片端から暴露し始めた最中だ。この時に、ドイツのプロレタリアートの上には、北歐の空一面、再度の攻勢的情勢のあけぼのがおとづれたのだ。今年のメーデーの大きな意義を銘記せよ! 殊に社民黨と別行動になされるデモは、我々のあらゆる興味を集中させる。

所で、四月廿六日の「ローテ・フアーネ」は、インドに於ける革命的情勢の爆發をくはしく大書すると共に、日本にもまた、大きなストライキの波の盛り揚がつたことを特記してゐる。綿紡、市電、電氣、水道……神戸……大阪……同情罷業……全國的波及……。

これらの日本のストライキは、無論また、資本家政府の金解禁、産業合理化の政策によつて××××××で、勞働者は受身にすぎない。

(削除)

私がこの文章を書き終る今夜は、すでにメーデーの前夜だ。政府は遂に明日のデモを禁止しない。また共和國擁護法をふりかざして、共産黨そのものに肉迫しようとする樣な形勢も見せぬ。單に二三日前から、「赤きノイケルン區」と「赤きウエッデイング區」とを、警官隊のトラックの示威によつて、しきりにおどかしてゐるだけである。

今、私の窓の下——夜更けたベルリン市東部のエルビンガー街——を、赤い旗やビラを持つた勞働者の男女が、幾隊も幾隊も通つてゆく。すでに列をくづしてゐるから、それらはみんな、明日の準備のためだつた會合のかへりなのであらう。禁止された赤色戰線鬪士同盟や反フアシスト青年前衛隊の制服の男女がまじつてゐるのが、夜目にもあざやかだ。誰もかれもが、とても元氣に、朗かに、愉快さうに談笑してゆく。明日こそは、彼等は彼等自身の階級の(削除)第一歩を明瞭に印するであらう。ドイツ社會主義(削除)……××だ! では、明日の戰ひまで……おやすみ!

(一九三〇、四、三〇)

——五月一日附記。

政府は總退却した。社民黨のデモは、共産黨のそれの半數にも達しなかつた。左翼勞働者の斷然たる優勢が、見事に確保された。

此頃の感想

菊池寛

此の頃の新聞を讀んで、一番心を打たれるものは、印度の反英運動である。私は、反英運動についてはあまり多くを知らない。たゞ、いつか宮崎龍介君のところにゐる印度の志士ソハン・シンと云ふ男と會つて、反英運動の戰略などをきいたゞけである。だが、この頃新聞でガンヂ夫妻や、サロヂニナイヅなどの英雄的行動を讀むと、立ち上らむとする民族の悲壯な姿に心を動かされる。片一方が強力な武器を持ち、片一方が何も持たないものゝ抗爭は、それ自身悲劇的である。非暴力による抗爭などは、それ自身悲しい言葉である。然し戰術としては、これ以上の名案はないと思ふ。たゞ、印度民族が、その獨立のためにかやうな悲壯な抗爭をやつてゐるのに、日本ではちつとも、同情や聲援の聲が起らないのは、不思議である。恐らく左傾思想の人々には單なる民族運動など云ふことはあまりに興味がないことらしく、また右傾派の連中は、日本自身が朝鮮や臺灣を持つてゐる以上、印度の反英運動には、聲援が出來にくいのだらう。

私は、どんな形式でもいゝから、同じ東洋民族として、印度の更生運動に同情聲援の意を表したいと思つてゐる。

共産主義者に對する判決は、どこの裁判所も可なり××主義であるらしい。それほど、具體的な行動をやつたわけではないと思はれるのに、×××××××××と思ふ。しかし、共産主義者もわが日本帝國の裝甲部に正面にぶつつからなくつても、もつと外にやり方があるのではないかと思ふ。正面衝突を試みて、その精鋭分子の多くを、犠牲にするなど云ふことは、××なやり方ではないと考へられる。

共産黨被告の中で、私は個人的に知つてゐる者が、三四あるが、その中では難波英夫君などは、人として信頼すべき人格であると思ふ。この人は、共産黨の中で、どの程度の位置にある人かよく知らないが、私とは時事新報社で同僚であつた。溫厚寡言の君子人であると云ふ氣がした。から云ふ人が×××××××××、×××××××××××××××××、頼もしき人に見えてゐた。

就職難、生活難など因つて來るべき原因はいろ〳〵あるだらうが、結局は人が多すぎるからだと思ふ。十の職業しか存在しないところに二十人の求職者があれば、十人だけ就職出來ないのは當然である。細民階級の生活難なども、その半分位の原因は子供が多すぎるからである。就職難や生活難を緩和する方法は、人を少くするより外名案はないと思ふ。なぜ、産兒制限を勵行しないのか、これほど見易いことが即刻に行はれないのが、實に不思議である。たま〳〵東京市などに、目先の見える助役などがあつて、産兒制限事業を始めようとすると、内務省からヘンな醫學博士が、ノコ〳〵出かけて行つて、妨害をするのである。人多くして國亡ぶと考へられるのに、なぜ産兒制限をしないのか、實に分らない爲政者であると思ふ。

新興藝術派と云ふ言葉が、出來た。むしろ、私は永遠の藝術派と云ひたいのである。文學が、自然科學の影響を受けすぎて、自然主義が横行したときに、これと對抗したものは藝術派であつた。今、文學が社會思想の影響を受けすぎて、思想文學が横行するとき、これに對抗するものは藝術派である。藝術至上主義は如何なる時代にも亡びるものではないと思ふ。

プロレタリヤ文學は暴露文學であると同時に、理想主義の文學であつていゝと思ふ。××主義の理想と夢を追ふ憧憬や情熱があらはれていゝと思ふのである。さうなるのが當然で、さうなれば、もつとプロレタリヤ文學は面白くなると思ふ。プロレタリヤ・リアリズムなど云ふことを云はないで、なぜプロレタリヤ・ロマンチシズムを提唱して、新しい時代を將來せんとする意氣と情熱を迸らせないのだらうか。



小公子

——釋尊傳第一部——

生田長江

第一章

一

三月、四月、五月と、ジリ〳〵に昇りつめた熱帯的暑熱を、濶葉樹の病葉や乾割れた川床の泥埃と共に、總ての生物が喘ぎ〳〵辛らうじて堪へ凌いでゐたところへ、六月にはいると、矢張季節を違へず、亞剌比亞海からの西南季節風が吹き起つて、マラバルの海岸へ吹きつけ、西ガッツの山脈を吹き越えながら、そこここに其濕つぽい重荷を卸ろしはじめたので、これまで夏枯れにかれきつてゐた中部印度一帯の大平野も、かの降雨期間近の折々の大驟雨に見舞はれて、その度毎に少し宛その生氣とみづ〳〵しい緑色とを取返して行くのであつた。

さうした驟雨の一が、求める物を與へられた幼兒のやうにけろりと啼き休んで、涙をおさめて、中庭のチャムパコ樹の白い花の包から、イムリー樹の薄紅い花總から、その

小さな羽狀複葉の裏表から、あたりの物總てがだん／＼とまた明るく朗らかになつて行き、軒端に吊るした黃銅製の香爐と鈴子を合せて、勞れを知らない蟬の器樂さへ、またもや其處此處で演奏しはじめられた時、公子悉達多は金泥を塗りかけてゐた玩具の兵車を、その儘窓際へほり出して置いて、二階の一室から最上階の露臺へ導く階段に、華車な羚羊皮の草履と銀の足釧とで、輕らかな、涼しい響きを立てながら昇つて行つた。

今日も亦、天上界の王者太陽神の大兵車が、あの多彩たる虹の輪が現れてゐるかも知れないと思つたのである。

實際の大理石よりも大理石らしく、狡猾に塗り込められ磨き立てられた露臺の床に、その足をすくはれないやうにとの警戒から、四阿建の細長い圓柱の溝飾につかまりながら、彼は御幣かつぎの父が吉兆嘉瑞を求める時のやうな期待と、祭式僧のサバミッタが他人の落度を嗅ぎつけるときのやうな熱心さとで以て、雨上りの蒼天を、ふり仰ぎ、殘らず搜して見た。

けれども、つひ此間、カピラの森の背後から、遠くヒマラヤ連山の前高地へかけて張り渡されたやうな、あんな素敵らしい弓狀の魔法はつひに何處にも見出されないで、それの單なる名殘らしいものをさへも、彼は捕へることが出來なかつた。

そしてたゞ、餘りにも親しみのあり過ぎる一風景として、あのカピラの森を頂いた丘陵と此市城の西側の石垣との間にはさまれたチャンタールの貯水池には、樹立の隙間を洩れて來る殆んど水平な陽光の征箭を浴びながら、色さまざまな牛共が、根上りの切株かなんぞのやうに踏ん張つて、一心に水を吸ひ上げてゐる。或は水面に沈み切らない雜草の若芽を貪り食つてゐる。

夥しい蒼蠅が巨きな四足の間を、あちらへこちらへくぐりぬけたり、横腹の毛に金色の滴を潑ねとばしたりしてゐる。

丘陵の直ぐ下の打ちそよぐ葦叢の間には、尻尾と頸との恐しく長いカロコロ鳥が、その一脚を他の一脚の上に持ちあげて、考へ深さうに立つてゐる。と思ふと、再び脚を水に落して、真白な頸をひねつて中天をふり仰ぐ。その伴侶を呼んでゐるのでもあらうか。蟬の聲の切れき切れまに、かいゝ、からころ、かいゝ、からころと鳴き立てるのが聞えるやうに思ふのは、さう思ふ者の空耳であらうか。

市場の喧噪が遠い潮騷か群蜂の唸りかなんぞのやうに聞える位、市城の西南隅へずつと片寄つた、悉達多の家の此露臺に立つてゐると、斯うした日の暮れの風物が、一層閑寂に感覺されるのである。

其閑寂さを見るともなく聞くともなしに受け容れながら、偖且つ先程の大きな張合ぬけを、十分に埋合はされないでゐた十二歳の少年

は、やがて少年らしく舌打ちをして、自分から氣分を換へる爲めの口笛を吹きはじめると共に、欄杆にもたれてゐた上半身をもたれたままに、くるりと背後へ捩ぢ向けた。

『おや、月かしら！』と彼は忽ち叫んだ、『もう、月が出てゐる！　日が暮れないのに月が出てゐる！』

そして、狹霧の海に浮いてゐる白い帆布かなんぞのやうな、あるかなきかの淡々しい新月の影を、たしかにそれであるとたしかめてから、今一度落日の方へふりかへつて見たとき、彼の瞳は邪念のない悦びに生々と輝いた。それは、あまり度々は見ることの出來ない此現象を報告して、彼の好きな御者のチァンナを非常に悦ばせることが出來、そのあとではチァンナからの不思議に面白い話を色々と聞くことも出來るからである。

そもそもリグ・ヱーダの古詩人達の歌つたところに依れば、司馬双神は夜と晝との兩相にまたがれる明け方の薄光であり、或は夕方の涼しく安らかな黄昏であつた。又、祭壇の如く麗しく裝はれたる女神曉紅として太陽神にも愛慕せられたり、太陽神の女なる曉の明星宵の明星として、酔ひ且つ酔はしめる威力月神の、賢善なる配偶者にもなつたりした。

けれども、御者のチァンナは遠來の隊商からでも敎へ込まれたものか、この迦毗羅衛城へ來る前から、『其馬をして鷹の如く飛ばしむる者』、『他の危難に赴き助くること目臨の如く、思念の如く迅速なる者』司馬双神を、落日と相並んで照臨するところの、あの夢のやうな新月であると信じてゐた。

そしてこの、盲と病と不具とを癒し、老いたる者を若くし、孤獨なる者に伴侶を與へ、水に溺れる者を水から救ひ、火に燒かれる者を火から濟ひ出す、彼の第一の守護神たる司馬双神が、ただ極めて希な場合にしか禮拜し得られないといふことは、彼をして其禮拜と祈願とを、一層有意義なもの、一層有難いものに思はしめてゐた。

悉達多の父なる執政淨飯は、彼自身どうしても政廳へ臨まねばならぬほどの重大事の際は別として、迦毗羅衛城を盟主といただいてゐる釋迦族諸市からの頻繁な使節に應對するとか、直轄領土内からの種々なる報告陳情を聽くとか、行政上司法上の指令や裁斷を下すとかいふやうな大抵の政務をば、執事長執事以下の官僚を相手に、この執政館の内で取扱ふことになつてゐた。從つて、かん〳〵と照りつける日盛りには、回字形に中庭を圍んで建てられた執政館の、この第三階の露臺と四阿建幾棟とが、彼なり家族なりの休息所であるのみならず、執政としての彼の執務室でもあり應接室でもあつた。

けれども、あのイムリー樹の梢か、翔びつかれて塒に歸つた鳥々か

なんぞのやうに、羽状の小複葉をたたみ收めて、次第に睡たげな頭を垂れてゆき、後園の蓮池には涼しい微風が大きな水鏡の上をさら〱と撫でて通る此時刻になれば、廣い露臺の全部をチャンナに與へて、彼ひとりの禮拜堂にさしてしまつたところで、誰からも苦情の出る心配はない。

悉達多はその事を知つてゐるのである。又、その禮拜堂に於てチャンナが特に愛すべきチャンナであるといふこと、更に、あの眞心その物にすぎないやうな簡單な祭式を終つたあとでは、チャンナが性來の吃癖にも似合はない大變な話上手になり、どうして人間か、最初ただ光明を食物にするだけで生きられたのに、やがて闍浮や檬果のやうな果實を食ひ、遂には野生の稻の實なぞを食はねばならぬやうになつて來たか、神々がいかにヷルナの如く正しく、ミトラの如く友情にあつく、辨天河女神の如く物惜みせず、否、取り分け司馬双神の如く應時即現の慈悲深き神々であるか、いかに風神や荒神の如く恐るべき神々であるか、どうして王子ラーマが、ジャナカ王宮の神弓を引きしぼつて王女シーターを妃にしたか、いかに善き戰をたたかつて、その奪はれたる妃を取り返したか——これらの限りもなく面白い話を、幾度聞いてもはじめて聞くやうに、不思議に面白くしてきかせるといふこと、この事を悉達多は十分に知つてゐるのである。

そろそろ薄闇の集まりかかつてゐる家の北側面の階段を、三四段ばかり悉達多の草履は駈け降つて行つたが、そこで忽ち銀環の響が鳴りやむと共に、上から下へと下から上へと、次ぎのやうな言葉が取り交はされた。

『チャンナか？　お前に知らしてやらうと思つて。お前の司馬双神が出てゐるぜ。』

『有難うございます。私も、何だかさうらしく思ひましたので、只今それをたしかめに上つてゆくところでございます。』

チャンナは先程の速雨から奇麗に乾いた、けれども一番小さな、一番粗末な竹細工のベンチを、東側の欄杆近く片寄せ、厚い木の葉を綴り合せて作つた、一の淺い鉢をその上に載せた。それには濃褐色の石蜜の塊がいくつか盛られてゐる。

右の片膝を露臺の上に着け、左の膝を立てて跪き、指の節々の高い大きな掌を合せて、アーシャーダのほの白い新月の方へ、高く高く差し上げながら、チャンナのささげる祈願の言葉は、ただ斷々にしか聞き取れない。

だが、今日は『司馬双神よ、倆は』や、『其馬をして鷹の如く飛ばしめる者』や、『他の厄難に赴き助けること目瞬の如く思念の如く迅速なる者』なぞの反復句が、つねよりもずつと多く、句切り〱にそのぬ

け上つた額を床へ擦りつけることが、特別念入であるやうに思はれた。

祭式のあとで、供物のおさがりを自分の口にも入れ、その幼い主人にもすすめるのは、一の慣例になつてゐるのだが、此時悉達多は、何かしら妙に重苦しげなものをチャンナの上に感じたので、彼の折角の期待が裏切られるのではないかといふ少年らしい不安を抱きながら、それでも默つて彼の分前を握つたまま、おとなしくベンチの端にかけてゐた。

チャンナの石蜜はもうとつくに彼の口の中で融け、そして呑み込まれてしまつたに違ひない。それにもかかはらず、『さあ、これで私もペードゥ王の馬をさづかりました。私の舌も馬のやうに走つて參ります！』といふ愉快な前口上はなか／＼出て來ないのである。

『王よ、陛下よ！』

チャンナの直ぐ背後の四阿建から、突如に聞えて來た此聲は、そこいらに人間のゐるだらうことを夢想だもしなかつた御者チャンナを、殆んど彈き飛ばした位に驚かした。

『王よ、陛下よ！』

聞き覺えのあるやうで無い此聲を、二度目にはつきりと聞いた時、チャンナは彼の前に何事もなげにしてかけてゐる、小公子の微笑を更に一層驚いた。

『これは、一體、どうしたといふのでございます？』と、せき込んで、吃りどもり、しかも囁くやうにして問ひたづねた。

『鸚鵡だよ。サバミッタが持つて來て呉れたんだ。』

『鸚鵡でございましたか！　左樣でございますか。』

四阿建はいづれも皆、露臺の表面と同樣、古代印度人特有の驚歎すべき巧妙さで以て、大理石よりも大理石らしく、つややかに塗り込められ磨き立てられた、細長い六個の圓柱が、青銅葺きの圓屋根を輕く支へてゐた。その圓屋根の頂點から吊り下げた巨きな鳥籠は、西隣のいゝより低い四阿に、暮れ方の薄光を遮られて、とり分け上半部は、珊瑚色に塗つた網の目さへも、はつきりと見えない位であつた。それ故短い脚のさきを爪立てながら、象牙の枠組を通してのぞき込んだチャンナの目には、ただ、鸚鵡らしい輪廓を有つてゐるといふだけの、黑ずんだ藍青と濃い葡萄色とが映つてたにすぎない。

『明るい處で見ると奇麗だぜ。頸が緑で、腹が黄色で、それから、あの、長い尻尾が朱色でね。』

『左樣でございますか』と、半ば無意識に答へたチャンナは、全然別な事を考へながら、圓柱に脊をもたせて蹲踞つた。額のぬけ上つた頭がかしげられ、兩手でかき抱いた膝の上に、肺臟の一番下の方から湧

き上つたやうな氣息が吐きかけられた。

『公子悉達多』と、稍や悶苦しくなつた調子でチャンナは呼びかけた。『執政はこんなつまらない――さうです、こんなつまらない言葉の口眞似をする鸚鵡を、餘り御嫌ひにはなりませんですか？』

『この鸚鵡を嫌ふ？　誰も嫌ひはしないよ。父上も御好きだよ。』

悉達多は此時、鸚鵡が例の『王よ、陛下よ』を挨拶する度毎に、マンゴーや西瓜や甘蔗糖なぞで、直接父の手から報酬されることを想起した。けれどもそれを話して聞かせることは、チャンナの二度目のより深い太息と、それにつづく、妙に改まつた彼の言葉とに妨げられてしまつた。

『公子よ、執事長が愈々役をやめるといふのは、本當の事でございませうか？』

『執事長が、役をやめる！』と、悉達多はその目を大きく見開いた。

『少し、御聲が』と聲をひそめ乍ら、チャンナは節くれ立つた兩手で露臺の上へ、何物かを押へつけるやうな手振をした。『御聲が高すぎます……では、公子は何も御存じないのでございますか？』

『執事長がやめるつて、なぜだらう？』

『みんなの噂では、耳の具合が惡いので、お勤めが出來ないと言つてゐるさうでございます。』

『耳の遠いのは、ずつと以前からぢやないか。』

『それが、近頃になつて一層ひどくなつたのでございませう』と、善良なチャンナに不似合な、誰かからの受賣らしい皮肉を口にした。

『だつて？　昨日も母上の處へ呼ばれて行つて、隨分長い事お話をしてゐたし、私にも冗談を言つたりなんかしてゐたが、そんなに聞えない事はなかつたぜ。』

『聞えないのは執政の御話やサバミッタの――いや、あの御二人の會話なぞが、一番耳にはいらないのでございませう。何しろ、あの祭式僧は　執事長なんぞゐてもゐなくても構はない位、執事長の仕事を、お手傳ひしてゐるさうでございますからな。』

矢張チャンナの獨創らしくもない婉曲な、しかもかなりに辛辣な說明は、彼の年若い主人をもむきにならせないでは置かなかつた。

『だが、チャンナ、父上だつて執事長を嫌つてはゐらつしやらないんだらう。』

『それは、公子の仰しやる通りでございます。たゞ、この鸚鵡にこんな大それた挨拶を覺えさせて、そして厚かましくも持參するやうな、あんな小悧巧なお上手者を、正直すぎる位の執事長よりも、ずつと御好きになつてゐらつしやると――遠慮のない處を申上げるとまあ、さうなのでございます。』

『さうか』と悉達多は獨白のやうに呟いた。そしてチャンナの頭を越えて、薄暗い圓屋根の天へ視線を走らせながら、いつにない大人びた調子で附け足した。『成程……さうか…』

『淡白で、寛大で、何よりも物分りのよい、あの執事長のやうな人が、ここへ出仕してゐるのだと思ふ、たゞそれだけででも、みんな心强く思つて居りますのに、噂がもし本當だと致しますと、全く、その、殘念でございますからな。』

途端に籠の中から、現在まだ執政以上の何でもあり得ない——今尚ほ、貴族的共和制を保存してゐる釋迦族の間では——悉達多の父を、大に悦ばしてゐるらしい『王よ、陛下よ』が、三度目に、しかも最もいゝゝはつきりと叫ばれた。

チャンナは默つて起ちあがつて、悉達多のかけてゐるベンチの端しから、木の葉の供物鉢を取上げた。そして愈々此露臺をさる前に、切めて其目で今一度、彼の第一の守護神へ哀訴しようとでも思つたかの如く、地平線に近い東の天へふり向いた。けれども、其處には何時の間にかもう、幅廣い夕雲の帳が下ろされて、彼の求めるものを奇麗に包みかくしてゐた。

二

丁度翌日か、翌々日かの事である。

午前中、學問師バッダラニからやらされるヱーダの暗誦と、武藝師クシァーンティデーヴから聽かされる弓術の講義と、この二つの課業から解放されるや否や、悉達多は馬小舍の方へ一直線に馳け出した。彼のくゞりぬけた石楠の藪からは、紅い花が蕾と共にちぎれて飛んだ。

馬小舍は西側の通用門に近い、瓦葺きの細長い建物の片側で、チャンナ等の部屋と、同じ一棟の下ながら脊中合せになつてゐた。

來て見ると、チャンナはつねの如く馬小舍の前に蒲蓆を敷いて、その上に蹲踞りながら、銅の鐙を磨いてゐる。

それから遠くない木蔭には、七頭の駿馬の中の、特に犍陟が曳き出されて、その眞白い毛を、近頃傭入れられた一人の若者が、梳つてゐる。

『チャンナ！チャンナ！』と呼びかけ乍ら悉達多は近寄つた。チャンナはふり返つて見て、一寸坐作を直して、『公子悉達多！』と挨拶した。

微笑と共に、目尻一杯に集まる深い皺が、斯う云ふ場合、口數の少なさすぎる彼の挨拶をも、十分に補ひ得るのである。

悉達多は、あの露臺の夜に示されたチャンナの重つくるしい氣分と

言葉とを、まだ鮮やかな記憶の中にとどめてゐた。そこで、あれの繼續らしい何物かを、どれだけか復見出すだらうことを豫期してゐた。けれども、その豫期は仕合せとはづれてくれたやうである

『捕蠅草を塗つといてやれよ』と、格別屈托の無げな聲で見習の若者へ注意した。『明るい處へ引き出すと、直ぐにあれだからな。』

馬は、産卵の爲めにたかつた馬蠅の刺戟を利らげる本能から、銀のやうな鬣と尻尾とをふり動かしながら自分の舌で、頸の兩側を、胸を、前脚の膝のあたりを頻りに舐めてゐる。

『藥は矢張り、あの――？』と曖昧な事を問ひたづね乍ら、見習の若者は馬小舍の横を指さした。

『藥の置いてある場所か？　一寸解りにくいかな。うむ、俺が持つて來て、塗り方も一つ敎へてやらう。』

チャンナは犍陟の側にゐさへすればいつでも上機嫌だといふ、誰かの言葉が悉達多にも、今日は一層本當であるやうに考へられた。

やがて、棕梠索を網目にかけた、口の大きな一の壺が運ばれた。その中から淡黄色のどろ〳〵の液を、刷毛で以て塗り込みながら、チャンナは幾度となく、『斯う云ふ具合にやるんだよ。いいかね』を繰返した。彼の敎授法は武藝師クシャーンティデーヴの正反對で、何等の講釋らしいことをきかせるのでなく、單だ實際に自分でやつて見せるだけたのである。

捕蠅草の塗り方が敎へられた序に、櫛の入れ方が敎へられ、鬣や尻尾の編み方まで敎へられはじめると、流石に馬好きな悉達多も、彼にとつて格別めづらしい事でもないし、少しばかり退屈に感じて來た。

眼前の視る物に倦怠した少年の感覺は、既の丁度背後から途切れとぎれに聞えて來る、微かな呻聲を初めて捕へた。それは、聞いてゐる内にだん〳〵と苦しげなものに思はれて來た。

『チャンナ』と言ひ乍ら悉達多は、今迄跨つてゐた蒲席の上の鞍から起ち上り、つと、チャンナの直ぐ側にまで寄つて行つた、『何だか、苦しさうぢやないか？――あの聲は！』

『ああ、女房の奴でございますか。有り難うございます。どうも、此季節風の吹きはじめには、いつもきまつたやうにやられるんですが、もう暫くの處でございます。愈々降雨期にはいつてしまへば、あの持病なんぞも、ずつと樂になりますさうで。まあ、大抵の苦しい事とか辛らい事とかいふものは、その内いつかしら、復樂になつて來るやうでございますな。』

チャンナは苦笑ひしながら、折々吃癖を出しながら、けれども例の平和らしい目尻の皺を深くしながら斯う言つた。その割合に呑氣らし

い調子は、露臺に鴉鵲を聞いた時なぞとは、殆んど別人のやうにさへ思はれる。

馬の理髪が一通り濟んで、チャンナが磨きかけの儘の鐙に歸つて來た時、悉達多は小脇に抱へてゐた玩具の兵車を席の上に置いて、がらがらと前方へ滑らせた。まだ金泥がやつと乾いたばかりであるけれど、少しでも早くそれを見せたかつたのである。

『や、こいつは、すばらしく立派な出來榮でございますな。車輪位は誰かがお手傳ひしたのでございますか？』

『みんな職人が拵へてくれたんだよ。私はただ其圖引をしたのと、出來上つてから、金粉を膠でといて塗つたばかりさ。』

『左樣でございますか。だが、それにしても公子の思ひ付きがいい。金泥もなか〳〵善く塗れてゐる。ふうむ』と感嘆しながら、チャンナ自身も少年らしく、大小二對の車輪をつけたきら〳〵と輝く兵車を、あちらへ押しやり此方へ押しやりして興がつた。『本物の斯う云ふ奴に乘つて、釋迦族の勇敢な貴族らしく、號令したり進軍したりなさるところを、一日も早く見たいものでございますな。』

『公子悉達多は、あそこへ、チャンナの處に來てゐらつしやいます！』

悉達多とチャンナとがふり返つて、此聲の聞えた方へ目をやると、そこには執事長の息子――優陀夷が立つてゐる。優陀夷は、彼から十歩ばかりおくれて、蓮池の横を歩き乍ら、全く別な方向を物色してゐる彼の父へ、斥候らしく報告したのであつた。

『私も今日限り、執事長としての御奉公をやめることになりましたので』と優陀夷の父は、その主人筋に對して用ひるやうな言葉を用ひた。『一通り、ずつと、その御挨拶をして來たところでございます。』

悉達多は席から取り上げた玩具を左の腋に抱へた儘、鵰のやうに灰白で、消痩な、優陀夷の父から眼を移して、チャンナの口許をじつと見守つた。その口許は痙攣的にかなり激しく震へてゐたが、その内多少の落着を取り返したところで、彼等二人分を表白するやうな言葉をぎこちなく發して來た。

『いや、さうでしたか。矢張さう云ふ事になりましたか。これに就いては、公子悉達多も、御氣にかけてゐられましたので、さうなつては、非常に殘念に御思ひでございませう。』

『でも、折々は來て呉れるんだらう？――これからも！』と公子がたづねた。

『それは伺ひますとも。ただ公職を辭したと云ふばかりで、特に夫人波闍波提からは、從前通り相談相手になつてくれるやうにとのお言葉もございますし、又執政からも御呼び出しがありさへすれば、何時で

も上りまして、何かと御用をつとめることになつて居ります。』

『さうだらうと思つた』と悉達多はもう安神して、その安神をチャンナにも分たうとした。『だから、チャンナ、いいぢやないか。前通り來て吳れるんだから。』

『それに、これからは此奴が』と言つて、父は彼の背後を指ざした、『此奴が、公子悉達多の御相手として出仕することになりました。どうか宜しく御願ひ申します。』

この時優陀夷は、それまで貴子の如く兩掌の上に弄んでゐた石楠花の蕾――さき程悉達多がちぎり落したのであるかも知れない――を、巧みに指の間へ忍ばせ乍ら、父の横へ二三歩踏み出し、恭しく公子へ頭を下げ、序にチャンナへも輕く會釋をした。

彼は公子より三ケ月ばかり晩生れの、同じ十二歲の少年である。彼の容貌や態度の一々にも、全體にも、恐ろしい早熟と過度の子供らしさとの結合した、殆んど神話的とも云ひたいほどの、お祭のやうに愉快な、すばらしい魅力が充ち溢れてゐる。

悉達多は、これまでほんの數へるほどしか此少年を見たことはないけれど、しかし何だか、非常に好きな伴侶になつてくれさうに思へて、愈々元氣づいて來た。

『貴下の優陀夷が、公子の御相手として！　だが、新任の執事長が、さういふ結構なお話に、よく邪魔をしなかつたものですな』と、チァンナは心持その聲をひそめた。

『邪魔をする處か、あれが提議した話なんだよ。』

『それは又、どうした譯でせう？』

『サバミッタは元來さう云ふ風な漢なんだ。つまり、必要のない恨を買ふまいとするだけでなく、其目的を實現する爲めに餘儀なく招いた恨をでも、成るべく和らげようと心掛けるのさ。自分で復讐好きな人間は、相手の人間をも復讐好きのやうに思ひたがるものだからな。』

どんな場合にも、忌憚のない心理解剖を試みる位で、たやすく相手を怒らしてしまふことが出來さうに見える性格は、斯う言つて蟠りのなげな笑を笑つた。しかも、彼の言葉を半ば理解し、半ば懸念の中に殘してゐるらしいチャンナの表情に氣がつくと、此率撲な、善良た好意に酬いる心から、更により具體的な、詳細に亙つての說明を附け足した――

元來、野心家のサバミッタは、殆んど同樣の野心家である執政淨飯を、單に鸚鵡からばかりでなく、總ての人々からも『王よ、陛下よ』と呼びかけられるやうな權勢にまで押し上げ、それに連れて、現在一介の祭式僧である自分自身も、『王師よ、大臣よ』と云はれるやうな地位にまで登つて見たいのである。

そして、その爲めには、何よりも先づ執事長の職を獲得して、彼の政略的手腕を縱横に發揮することが、絶對に必要であると感じられた。そこで一方では、あらゆる手段を盡して執政にとり入つた。他方では、優陀夷の父や、彼の味方らしい連中のあら搜しをすることに、如何なる機會をも逸しなかつた。

だが、今や、久しい間の努力は遂に酬いられた。元老院の有力者を、乃至二十一名の議員全部を巧みに操縱して、執政權を君主權にまで伸長して行かうとするやうな難事業に於ては、サバミッタ以上に適當な助力者のないことが、淨飯から十分に承認された。優陀夷の父は、命令された事以外には何もしなくなり、相談されない限り何一つ提言しなくなり、最近には、聞えてゐても聞えないほどに彼の耳を惡くするやうになつて來た。從つて、一介の祭式僧は、殆んどいや／＼乍らのやうな顏付きをして、執事長の榮職をも兼ねることが出來た。この上、優陀夷の父を追窮する必要がどこにあるだらう！

昨日までの敵を、今日からの味方にすることが出來ないまでも、切めて其敵からの攻擊力を、出來るだけ減殺する爲めに、新しく執事長を兼ねたサバミッタは、執事長の俸給が、別に祭式僧としての報酬を受けてゆくべき自分自身によりも、優陀夷の父に引き續き支拂はれるやうにと献策した——なぜと云つて、彼は長い間の功勞者でもあり、きた家柄のいいのに不似合な、かなりの貧乏人でもあつたのだから。執政はこの悧巧な献策を、半ば採用しようと考へた。即ち、執事長としてのサバミッタの俸給を讓らせることの代りに、別にそれだけの物を優陀夷の父に支拂はうと云ふことになつた。

痩我慢の強い——これは實際にも痩せてゐる優陀夷の父が、彼自身について地口まじりに言つた言葉であるが——貧乏人は、働かないでゐて支拂はれることの不合理を言ひ張つた。それをサバミッタへの、婉曲な敵意表示であると取つたらしい彼は、それでは少年優陀夷を公子悉達多の勉强友達、遊び友達として出仕させるやうにと云ふ、今一の献策で以て出直した。斯うして兎も角も從前通りの經濟情態を、『尊敬すべき』優陀夷の家に持續させてやれと云ふのである。

かうまで手を換へ品をかへての妥協提案を、その上斥け通すことは面倒臭くなつて來た。それにさうすることが、矢張何物かに拘泥してゐて、餘りに良い趣味ではなささうにも思はれて來た。

『そこで先刻も、事務の引繼ぎをやつたあとで、サバミッタの特別の配慮に御禮を言ひ、優陀夷の將來をも宜しく御願ひして來たやうな次第だよ。』

斯う言つて、再び聲高に笑つてゐた優陀夷の父は、不圖全く別な、差當つての一の用事を思ひ浮べたのである。『うむ、さうだ。チァンナ

に一寸きいて見たい事がある！』

『どんな事ですか？』

『お前は近頃、ピンカーロの方へ行つて見たことはないかい？』

農村に於ける太古からの共産的自治的な社會形態は、まだ〳〵根柢から崩壞してしまつたと云ふのではないけれど、しかし、かなりの程度にまで捻ぢ歪められてゐたのは勿論の事である。その上だいぶ以前から、人口の如何なる激增にもかかはらず、新しく土地を開墾するといふことは、一般人民に許されないやうになつてゐる。それは金剛の臂を有する天帝インドウラが強烈なる蘇摩酒を供養される如く、人民の保護者と稱する刹帝利の貴族等が、そのきらびやかなる都城生活の手段として、巨大なる富源をささげられねばならないからである。

即ち、種々なる政治上經濟上の權利の獨占と共に、この開墾の利益をも壟斷してしまつた少數有力者等は、先住異人種その他の日傭的な、乃至農奴的な勞働力を搾取して、各處にすばらしく有利な私有農場を經營してゐた。しかも、所有者の數と逆比例して其數を增加する私有農場は、機會ある每に、在來農村の共同耕作地をさへ併呑し同化して、愈々その地域を擴大して行くのであつた。

さて今、このピンカーロと云ふのも、さうした私有農場の中の、最も羨望されてゐるものの一なのである。

『ピンカーロへは、七日ばかり前に、一寸行つて參りました。その時この』と言つて、チァンナは馬櫛を拭つてゐる、ひよろ長い馭者見習の脊筋を指ざした、『この若いのも連れて來たのです。』

『さう〳〵、あの農場で働いてゐたんださうだね。』

それから二人の間には、先頃耕作者等の代表が其待遇の改善を哀願する爲め、缺乏その物のやうな姿を執政館へ運んで來たこと、それを執政やサバミッタが單なる威嚇で以て逐ひ返してしまつたこと、けれども夫人波闍波提の慈善家的温情が、窮民達の實狀を內密にたしかめたがつてゐること、これらの事に就いて、かなり長い談話が交はされた。

さうした談話にまだ、大きな興味をも理解をも有ち得なかつた悉達多は、何時の間にか彼の新しい友人を相手に、またもや四輪車を玩びはじめてゐた。

『こんな立派な四輪車には、馬がついてると、一層面白いんですがねえ』と優陀夷が言つた。

『それやさうだけど』と悉達多は、その希望の實現を一寸むつかしさうに考へた。

『でも、公子悉達多、その効なきは、恰かも良き兵車に馬なきが如しつて、さう云ふぢやありませんか！』

『うむ。』

『公子に代つて、私から强請つて上げませうか？　うまい具合にやりますぜ。』

『ねだるつて――誰に？』と悉達多も試みにきいて見た。

『素的な鸚鵡を獻上したとかいふ、あの偉い人にですよ。』

『そして、サバミッタが自分で註文してくれると云ふわけなの？　それとも、父上か母上かに賴んでくれて――』

『そんな事はどうだつていゝぢやありませんか。うまく行きさへすれば。そして、それは大丈夫ですよ。それよりも、馬にはどんな色を塗つたらいいか知ら？　やつぱり金かな？　それとも銀かな？』

『それは銀色でなくちや。』

『さうだ。丁度この馬の眞白い毛が光つてる處は、本當に銀色だ！』と、優陀夷は我知らず調子を張り上げた。

　そこへ、チャンナとの談話に切をつけた父がやつて來て、微笑をふくみ乍ら敎呵めた。『優陀夷、ちと早すぎるぜ――今からもう、その無遠慮を御目にかけるのは！』

　やがてチャンナは何等かの用事をかねて、前執事を彼の家まで送つて行くことになつた。二人の少年も彼等と共に、主屋の大きな回字形を串刺しに貫いて、往來に面した正門の外まで出て行つた。

　そこで『優陀夷、それぢや、ようく氣をつけて御勸めをするんだよ』といふ父の言葉を、脊中に聽き流しながら、優陀夷は公子と肩を並べて、上の尖つた大弓門を內へ引き返して來た。

　この頃の大抵の貴族や富豪の家に見られる如く、この大弓門をさしはさんで、左側は直に、貴金屬や、寶石寶玉類や、それらの物で造つた高價な裝身具什器などの、唸るほどに充ち溢れたる倉庫であり、右側は種々なる飮料の壺が棚一杯に陳べられ、食糧の嚢が天井を突き上げるほどに積み重ねられたる貯藏所である。

　折柄、一人の年寄つた庖丁が、其處から引き出した二の穀物袋を、庖厨の方へ運んで行くところであつた。けれども彼の手首に結んだ大きな鍵束に妨げられて、一寸途方に吳れてゐた。

　優陀夷は直ぐに、二の中の一の嚢を、奪ひ取るやうにして引受けた。そして『濟みません』を頻りに繰返す老人のあとに、舞踏するやうな步調で從つた。

　この三人が、庖厨の特別に幅廣い敷瓦を踏みながら、殆んど其向うの隅まで行つたとき、其室に寄り集まつてゐた七八人の男女等は、はじめてそれと氣がついた。乾した果物と、酪油と、糖蜜とをふんだんに入れて燒いた、出來たての小麥菓子を頰張り乍ら、新しい執事長の事を散々にこき下ろしてゐたのである。

『公子が何處にゐらつしやるか分らなかつたものでございますから』と、その中の一人の女は、自分達がお先に頂戴してゐたことの非禮をわびた。『こんな處でも召上りますでございませうか？』

悉達多は彼女に背いて見せてから、中庭への戸に近く、細長い卓の上に飛び上り、優陀夷にも相並んでかけさせた。そして持ち運ばれた銀の大皿から一緒に食べてゐた。

そこへ、一匹の茶がかつた、毛の深い狗がやつて來て、宙に搖れ動いてゐる、悉達多の履物と足釧との間をなめ出した。悉達多は殆んど彼の拳ほどもある大きな甘い塊の一を、その愛すべき畜類にも惠まうとした。

けれども彼の親友は、『一寸、一寸！』と言つて遮ぎつた。『此奴に一つ、面白い藝當をさせますから、一寸待つてゐて下さい！』

急いで出て行つたと思ふと、間もなく引き返して來た彼は、何處で見出したのか、一本の凉傘を提げてゐた。

その普通より長い柄の端は、精巧な鼈甲細工で飾られてゐる。綾織に金絲で刺繡をした其布地は、ベナレス製の飛切上等な何かででもあらう。

『優陀夷、それは執事長サバミッタのぢやありませんか？』と、見物の一人が彼の目的を怪しんだ。『あのおめかし家が、それや大事にしてゐるんですよ』と、今一人が深切に注意した。『あの化粧品入れの水に濡れない提罐なんかの、十倍もいゝ、もつとも、御自慢の御持物なんですからね。』

『それで、詰り面白いのさ』と言ひ乍ら、悉達多の手から取り上げた大きな御菓子を、半開の凉傘の中へ落し込み、再び傘をつぼめて、戸口の外へ押し出した。

その鼻孔をひろげ、唾液と目とを光かせながら、もう全然獵犬になりきつてゐたかの生物が、その高價な叢へ逃げ込んだ彼の獲物を追跡する爲めに、又、その細粉の一をも餘さず、食ひ盡し、なめ盡してしまふまでに、どんなに『面白い藝當』をして見せたか！ その事によつて見物一同から、如何に痛快がられたか、喝采されたか！

最後に、尙ほその酪油の匂を思ひ切りかねたらしい茶色の獸が、ばら〱になつた竹片と、ずた〱に破けたベナレス綢とを口に啣はへて、遠くイムリー樹の根元の方まで走つて行つた時、わが優陀夷は、恰かも初めて驚愕すべき事件を發見したかの如く、故らに聲高く呼ばはつた――

『大變だ！ 大變だ！ 狗の奴めが、執事長の凉傘をだいなしにしてゐる！ 早く行つて、御知らせしてあげなくちや！』

第二章

一

悉達多は目が覺めた。蚊帳を透して見ると、燈は室の一隅に燃えてゐる。窓の外は、單だ滑つこい樹木の幹や葉なぞが、ほの白く月光を反映してゐるに過ぎない。

『夜だ。まだ夜は明けない。』

斯う思つて、再び目蓋を閉ぢて見たけれど、彼の耳には、燈心の撚絲がじい〳〵と菜種油を吸ひ上げ、大小さまざまな蛾が薄絹に距てられながら、ばた〳〵と灯の周圍を飛び狂ふことを休めない。そして中仕切の垂幕のむかうからは、二人の老侍女の寢息が一になつたり、また別々になつたりしながら流れて來る。

加之、大窓の下あたりでは、昆蟲の直翅類が翅と翅とを摺り合せて、鋭い鈍い音を奏でてゐる。更に遠く高い處では、椰樹か多羅樹の頂に集つてゐる小鳥でもあらう、折々、婦人の忍笑のやうな小夜曲を唄つてゐる。

あの鈍い音は、彼にだけ理解されない言葉で、しかも彼にとつて非常に大切な事を告げ知らさうとしてゐるのではなからうか？又、あの小鳥共の内曲な、幸福な笑をなくしてしまつたのは、世の中に、たゞ彼一人だけではないだらうか？

不圖悉達多は、森林の奧深く謫されてゐる十車王の子を想ひ浮べた。あの王子の枕邊は、丁度このやうにも心許なくわびしかつたであらう。彼の寢覺の床は、丁度このやうにも長い〳〵夜を持てあましたことであらう。

かの王子の繼しき母は、彼女の實の兒をして父王の跡を繼がしめる爲めに……だが、しかし、わが悉達多の波闍波提は、全然そんな種類の繼母ではない！

悉達多の次ぎに描いた幻はグプタであつた。彼女の膝に置かれた纖細い指には、指環珠の金剛石がきら〳〵と輝いてゐる。しかも見てゐる内に、その指環珠は二になり、三になり、果てしなく數を增し輝きを加へてゆく。

と思ふと、底事ぞ！その寶石の雨は、睫毛の長い、暗い、彼女の目から落ちてゐたのである。

このグプタがほんの嬰兒でもあつたかの如く、彼女の母からして抱愛されてゐるのを悉達多は曾つて目擊したではないか？これはあの家のシャボテンの生垣に咲く薄紫の花と共に、抑も何を意味してゐるだらう？」

優陀夷の物語つた繼しき母達の夥しき實例――例へば、品玉の器

を壞した贅の子の過を、罪もない繼子の上になすりつけ、愚かな父親に折檻を促す者や、狼や、豺や、羅刹の道を横ぎつて、眞夜中の水汲みにゆくことを強いる者や、麨に砂をまぜて食はせる者や、猿轡をはめられた子供の體に、處嫌はず縫針を突き刺す者なぞは、いくら考へて見ても悉達多にとつて、恐ろしいより以上に不可解であつた。

ともあれ、さうした大抵の繼母の間にあつて、本當に唯一の例外らしく見える波闍波提の愛は、あまりにも彼女自身を犧牲にしすぎたものではなかつたらうか？否、さうした犧牲の拂はれてゐる愛に、悉達多自らがあまりにも狎れすぎてはゐなかつたらうか？

なぜと云つて、彼が少しばかり加減の惡い時なんぞ、あの母を相手に、言へるだけの無理を言ひ、こねられるだけの駄々をこねて、それを何よりの悦びにするといふのは、それほど遠い以前の事ばかりではなかつたから。

だが、最後にはチァンナの言葉の、『この事について公子の御心配なさる必要はないのです』や、『深い仔細のあることで』やが、彼の處へやつて來た。

そして、まだ地平線のむかうに隱れてゐる其『深い仔細』の太陽を、まだか〳〵と待ちあぐみながら、テライの叢林の長い草の穗や、ラブチのゆるやかな川波と共に、あちらへ搖られ、こちらへ動いてゐる内に、悉達多は復び睡に落ちた。

彼が二度目の睡からさめた時には、一人の老侍女が蚊帳越しに彼を見守つてゐた。彼は殆んど無意識の衝動から、まだ睡りつづけてゐるやうに裝つた。

侍女は一たび退いて二たび現れた。二たび退いて三たび現れた。

悉達多も遂に寢返りを打つて、深く詰めてゐた息を、彼女の方へ吐き出した。

『御目覺めになりましたか？』

斯う言ひながら、藍青に染めた裾濃の蚊帳を、長い吊紐を曳くことによつて吊り上げようとした。

『あ、蚊帳を撤らないで……もう少し臥てゐるから。』

『どこかお加減でも惡いのではございませんか？』

『うむ』と悉達多は、全然虚僞でもないところの事實を、かなりの心疚しさで以て言ひ立てた。『何だか、少し、頭痛がするんだ。』

けれども、侍女の報告をきいて、母波闍波提の馳けつける前に、彼はもう蚊帳を片寄せて、寢床の上に起き直つてゐた。

それから嗽をして手水を使つて、精一杯平生の快活さを衒ひながら、彼ひとりの食卓へ着いたとき、彼は彼の快活さを疑つてゐるらし

い母の前で、實際以上の食慾をさへ證據立てねばならぬことになつて來た。

此仕事を漸く持てあまし始めてゐた悉達多は、折しも、一室距てた難陀達の處から、稍や苦しげな咳の響いて來るのを氣附くと、柄の長い銀の匙を、どろ〳〵の乳糜の中へ直立させながら、『母上、難陀の處へ行つて、見てやつて下さい！』と言ひ出した。

『あれは、ほんの少し感冐をひいてゐるのです。それよりも、悉達多、貴方の御樣子が心配ですね。お熱もありさうだし、御目が大相紅いぢやありませんか？』

斯う言ひながら波闍波提は、それとはなしの敏感な視線を、乳糜の中の匙の動きへ走らせた。

『難陀の處へ行つて、見てやつて下さい！』と悉達多は重ねて言ひ張つた。

難陀への愛着からばかりでもないらしい、變に執拗な悉達多の歎願は、つひに彼女をして難陀達の處へ退かしめた。

難陀はやがて、一層激しく咳きこみながら、その合間〳〵に實に哀げな聲を立てて泣き出した。

嗚呼あの、哀げな啼聲が如何に、特別にあはれげな訴へとして、彼女の胸をかきむしつてゐることか？ そして彼女の最も母性的な慈愛の腕が、いかに强く〳〵抱き緊めてやることだらう？

悉達多にとつて、これまで本當には知られないでゐたやうな何物かを、今こそ始めて知り得ることの爲め、彼は彼自身をも同じ場所へ運んで行かうとした。

しかし、彼の脚は入口の手前で、忽ち釘附になつた。そしてやつと再び持ち上げられた重たい其足は、第三階の彼自身の學問所の方へ曳きずられて行つた。折よく彼は、學問師バッダラニが優陀夷と共に、そこにもう、彼を待ち受けてゐるだらうことを思ひ浮んだからである。

二

悉達多の馬のお稽古は、此頃、一月―滿月から次の滿月へかけての――に四回といふことに定められてゐた。そして今日は、『此次ぎ、馬のお稽古に出掛けた時にでも』とチャンナの約束した、あの日からもう七日目になつてゐるのであつた。

市城の南門を南へ、五百歩ばかり行つてから西に折れ、チャンドタールの下の淺い放水路を渉ると、そこの湖尻の廣い砂地が、彼等の爲めの馬場であつた。

母の波闍波提は、遊戲にせよ、教養にせよ、少しでも危險らしい事

を悉達多にやらせたくないのであつた。その爲めに從順な彼女が、顔を赤らめて良人と言ひ爭つたのも、二度や三度の事ではない。それ故悉達多のお稽古は、まだ〳〵馬術といふにも足りないほどの、本當に子供らしいもので、チャンナ位を相手に『ただ馬に親しむ習慣をつけるだけ』の意味しか有つてゐなかつた。

偖て今、悉達多はチャンナと、今一人の若い馬丁と、氣に入りの犍陟とを連れて馬場へ來た。そしていつもの如く、チャンナの手によつて鞍局へ押し上げられ、前輪の峰につかまりながら、人形のやうにだらりと垂れた足で鐙頭を探つた。

犍陟には、悉達多の爲めの小さな鐙のほかに、今一の大きな鐙も取りつけられてゐる。鞍局を特別に長く造つたのが置かれてゐる。その大きな鐙を踏んで、後輪にまたがつた師匠のチャンナは、その弟子をかき抱くやうにして保存しながら、そろ〳〵と馬を歩かせはじめた。

年若い馬丁は灌木の蔭に西日を避けて、水を容れた革嚢を枕にごろりと臥た。そして騎乘者達が折々跑を踏ませたり、またもとの歩調にかへして見たりして、大きな圓や、楕圓や、長方形なぞを畫き乍ら、三度目位に近づいて來たときは、既に高い鼾をかいてゐた。

悉達多はそれに氣附かないではゐなかつた。そして復び此馬丁から一番遠い處まで乘り進んだとき、突如にチャンナへ呼びかけた。

『チャンナ！　私達も休まうよ、ここいらで。』

『もう、お疲れでございますか？』

『今日は暑くていけない。汗が目の中へはいるんだ。』

『ぢや、今日はこれ位でお仕舞ひに致しますから、序に、あすこまで御辛棒を願ひます。』

チャンナは、例の年若い馬丁の臥てゐる方を指さした。

『あすこまで待てないよ、目が痛くて』と悉達多は苛立たしげに言ひ立てた、『さあ、下りるんだ！　下ろしてくれ！』

詮方なく、チャンナは先づ自分で跳び下りて、次ぎに其主人を抱き下ろした。悉達多は內懐から引き出した手巾で、目から額の邊を拭きながら、芭蕉の大きな一株が、そろ〳〵長い影を引き出してゐる方へ走つて行つた。

「あいつを一つ叩き起して參ります。そしてあすこへ置いて來た物を、みんな此方へ運ばせませう」とチャンナが言つた。

「それよりもチャンナ、私はお前に話があるんだ。話したい事が…………」

チャンナは忽ち立ちすくんだ。けれども、出來るだけ平靜を保たうと努力しながら、芭蕉の枯葉を敷いて坐つてゐる、悉達多のそば近くへ

寄つて來た。

『チャンナは、私に、約束したぢやないか？　あの約束を忘れたのかい？』と言つて悉達多は伏目になつた。

『いいえ、決して、忘れては居りません』と、チャンナも遂に吃つて來た。『ただ、公子悉達多貴方が御忘れになつてゐるかも知れないとは思ひました。そして若し、すつかり御忘れになつて下さるならば、その方が、却つて宜しからうかとも思ひましてございます。』

『どうして、そんな、そんな事を言ふんだ？』

『どうしてと申しまして、先達て一時の出來心から、つひ申上げてしまはうと御約束致しました事も、あとでよう〳〵考へ直して見ると、まだ〳〵公子の御耳に入れるのが、早すぎるやうでございます。それに、誠につまらない事でもございますから。』

『お前は』と叫んで、公子は彼の前に跪坐してゐる、チャンナの肩端へ跳びかかつて行つた。『お前は私を、欺すんだね！　チャンナは私を欺したんだね！』

殆ど搖り倒されさうになりながら、天を仰いで、暫くの間瞑目してゐたチャンナは、再び其目を見開くと共に、悉達多の兩手をぐつと握りしめた。そして、飲み過ごした穢物をでも吐くやうに、決然とした調子で言ひ放つた——

『仕方ございません。御約束通り、御話してしまひます！　何もかも、みんな殘らず！』

三

市城北門内の大道路をはさんで、其左右に擴がつてゐる公園を、折折、『會議林』と云ふ古風な名前で呼ぶところの老人達がある。加之、彼等の中の或る者は、其公園に散在してゐる六七個の四阿を、『議事堂』として談ることさへもあるのである。

年の行かない悉達多等には、それが一の不思議であつた。

なぜと云つて、釋迦族の盟主である、迦毘羅衛城の會議といふのは、今日、二十一名の議員から成つてゐる元老院のほかになく、しかも其元老院の議員達はただ、一族の興廢にも關するやうな大事件に臨んだ場合、大道路の左に聳えてゐる政廳内の一室に集まつて、討議を行つてゐたといふに過ぎないからである。

しかしチャンナが、優陀夷の父ブンナマーサをはじめ、色々の博識な人達から聞き知つてゐる處によれば、釋迦族の祖先等が甘庶族の一分派として、炬面やチャーリのやうな人々の指導に從ひ、彼等の家畜と穀物の種子とを運び乍ら、遠く迦尸の方からやつて來て、このヒマラヤの前高地とラプチの中流との間を、東へ〳〵と開拓し進んでゐる

た時分には、各村落の住民達は、近くの叢林に悉く皆寄り集まつて、一切の事を議したものである。

そして迦毘羅衛城の人々も、あの向うのシードの流をはさんで、カピラの林丘の北麓に、稍や町がかつたものを作りはじめた頃は勿論の事、それから此新市城へ移り住むやうになつた當初位迄は、矢張まだ住民悉くが『會議林』に集まり、『議事堂』で事を議するといふ風習を、全然なくしてはゐなかつた。

この風習が、人口の增加や、市政の複雜化や、アリアン種ならざる劣弱先住民及び間生兒との混住などにつれて、漸く不便なもの、改正を必要とするものになつて來たといふのは、想像するに難くない事だらう。

斯くて、先づ波羅門と刹帝利とだけが、市の政治に參與することになつた。次ぎには血統の正しい刹帝利だけが、その權利を托されることになつて來た。最後には、刹帝利を代表する最も有力な二十一家の家主達だけが、元老院議員として、その參政權を世襲することになつて來た。そして此二十一人の中から撰ばれた任期五箇年の執政が、必要と認めた場合、あの政廳の一室に議員達を召集し、その會議を指導し監督すると共に、平時に於ける內外政務の一切を遂行するといふことになつてしまつた。

そこで、夙くから君主國の首都になつてゐたところのベナレスや、舍衞城や、王舍城などに於ける、會議林並びに議事堂と同一の運命をたどつて、より小さな此迦毘羅衛城の『會議林』並びに『議事堂』も亦、單に旅行者が日盛りの暑さを避けたり、求道者が宗教論をたたかはしたり、浮浪の徒が雨露を凌いだりするだけの場所にまで成り了つてゐるといふのは、極めて自然な事なのである。

處で、わが悉達多の生れたゴータマ家が、右の二十一家に仲間入をするに至つたのは、それほど古い事ではない。

今の執政淨飯の父であり、悉達多等の祖父である獅子頰は、壯年期まで、元老院の一書記として聊かの報酬を受けてゐるに過ぎなかつた。けれども、彼の卓拔なる才幹と堅實なる人格とは、久しく埋もれてゐなかつた。

二十五歲の時はやくも、補缺として元老院議員に撰擧され、更に間もなく執政に任ぜられた。

拘利を始め、同じ釋迦族に屬する諸市諸部落との面倒な交渉や、强大な隣邦コーサラとの間に屢々持ち上つた外交上の危機なぞは、特に敏腕な外交家である獅子頰が、二度目、三度目、四度目と引續いて、執政に選ばれることの機會を作つた。しかも此四度目の再選の時、元老院迦毘羅衛城は全市民を代表して憲法の一部を改正し、執政の任期五ヶ

年を終身にまで延長すべきことを宣したのである。

だから、全市民、全釋迦族から涙をもつて惜まれながら、五十歳にして獅子頬が世を去つたあとに、まだ格別の力量を證據立ててもゐない長子淨飯が、全く當然の事ででもあるかの如く選ばれて、終身の執政に任じた時は、近隣の各地では、迦毗羅衛城も亦、時代の大勢に順つて、世襲の君主を戴くやうになつたらしいと噂し合つた位である。

淨飯は勿論、あまり不肖の子ではなかつた。その上に、拘利第一の名門『アニュヂァーナの家系』からマーヤーを娶つたことがまた、一層有利な背景を加へてゐた。

少數の有力な刹帝利等はその共同の貴族的特權を伸長してくれることに望を嘱した。多數の愚かなる市民等は、彼等の實際の境遇をより苦しいものにされながら、外交上の度々の『成功』を、其儘彼等自身の利益ででもあるかの如く錯覺して、ゴータマ家の萬々歳をのみ唱へてゐた。

斯く好運の女神の笑顏をばかり見つづけてゐる淨飯にとつて、待てども／＼相續人の生れて來ないと云ふことは、實にたとへやうもないほどの歎きであつた。

死後に子孫がゐて、團食の供養をしてくれなかつたならば、茅草や、花や、水を團食に添へ、沙磨吠陀を詠ひ、呪文を唱へてくれなかつたならば、そして亡靈が暗黑から暗黑への道を沈んでゆき、遂に天上界へ再生することの望が絶えてしまつたならば、淨飯に十倍するほどの生前の榮華を極めて見たところで、それに抑もどれだけの意味があり得るだらう？

その上、凡そ獅子頬誕生の頃、夫人マーヤーの祖父なるアニュヂァーナに献策して、曆算上誤謬の訂正を提議させ、遂に有名なアニュヂァーナ紀元を創したほどの、偉大な占星學者デヹーラが、マーヤーの結婚式に於てひそかになしたる豫言は、淨飯の念頭を離れたことがない。デヹーラは言つたのである――獅子頬の子孫から、他日轉輪聖王になるか、でなければ、昔のカピラ仙にもまさるほどの聖者になるものが現れて來ると。

子女を授かる爲めに有効なものとして、耶魔神に白獸をささげる祭や、トワシトリ神に彫刻の馬をささげる祭をはじめ、ダークシァーヤナ祭、サールヴセナ祭、ヴシスタ祭などの行はれたのは幾度であるか、殆んど其數を知らない。

淨飯三十七歳の秋には、コーサラから強制されてゐる、不名譽な攻守同盟から脱退し得ることの爲め といふ觸出しで、迦毗羅衛城では前代未聞の大馬祠が行はれた。一私人の財力で以て其費用を支辨するこ

となぞは、勿論思ひもよらないほどのものなのである。

しかも、その公の祭式に於ける內實の目的が、ゴータマ家の嗣子を獲ようとする祈願にあつたことは、その際祭官の主座をつとめたサバミッタと、彼を手傳つた祭式僧共との間に起つた、收得物分配の醜い爭ひから、少くとも優陀夷の父などには明白に知られてゐた。

そして此の如き大馬祠にもかかはらず、或は——一部の敬虔な人々の言葉をかりれば、多分此の如き冒瀆的な大馬祠の故に、夫人マーヤーは矢張石女の儘で、つひに四十四といふ齡を重ねねばならなかつた。

だが最後には、サバミッタの提言にもとづいて、內密に年若き第二の夫人を納れて見るといふことになつた。

『丁度、この時分の事でございます。私が迦毘羅衞城へやつて來て、間もなく執政館へ御奉公に上るやうになりましたのは。』

斯う言つて、一寸句切をつけたチャンナは、徐かに立ち上つて、眉庇を作つて、遠い灌木の蔭にゐるかの若者の方を見やり乍ら、暫くの間默つてゐた。かの若者がまだ眠りつづけてゐるや否やを、たしかめる爲めでもあつたらうか？　それとも彼の枕になつてゐる水の容器を、こちらへ取寄せることの可否を、思案してでもゐたのであらうか？

ともあれ、やがて彼は、せう事なげに脚下の硬い蔓草なぞを嚙んでゐた犍陟へ近づき、繫いでゐた麻索を解き乍ら、何等かの相圖ででもあるかの如く、喉元のあたりを二三度、輕くパタ〳〵と叩いてやつた。

『私の馬好きも親讓りのやうでございますよ』と言ひ出しながら、チャンナは再び、その全身を耳にして待つてゐる、熱心な聽者の處へ歸つて來た。『なにしろ私の親爺と云ふのも、商賣に失敗して、竈の下の燃えさしや、使ひ殘しの飮水まで賣つたのですが、それでも不義理な負債の始末がつかず、愈々最後に泣きの淚で賣り飛ばしたのは、この私と、親爺の馬と、二品でございましたからな。』

それから彼は、馬が角銅貨三百枚で買はれ、十七歲の少年であつた彼が角銅貨二百枚で買はれたといふこと、彼の父も父自らの老軀を賣らうとしたけれど、遂に買手がつかなかつたといふこと、それ切り會はないでしまつた父が、勿論もう此世の人でないだらうと云ふことなぞを語つた。

偖て此、二百枚の角銅貨で買はれた少年は——當時彼の故鄕である王舍城邊でも、角銅貨一枚は、凡そ人間一人の二日分の穀物を買ひ得る位の金額であつた——ひとりの主人から他の主人の手に渡つて、隨次色々の新しい勞働を習得したり、一層それに熟達するにつれ、又年

齡と悲しい諦らめの心とから、一層素直で從順な奉仕者となつて行くにつれ、彼の賣買價格を愈々高くされ、自分で自分を贖ひもどすことを愈々むづかしくされて來た。

だから、かれこれ十年も經つて執政館へ來た時分には、最初の身代金の少くとも四五倍位にはなつてゐたのであらうが、夫人マーヤーは良人を勸めて、この評判の良い奴隷を買ひ取らせると共に、即座に自由の證にしてくれた。

それは彼女自身の腹身の味方を作る氣だつたと、他人の動機をいつも惡くのみ取りたがるサバミッタが、問ひたづねもしないチァンナへ、わざ〳〵説明してくれたことがある。

ともあれ、チァンナは間もなくロヒーニの川岸に近い沙羅林の中の靜かな別莊へ送られた。そして優陀夷の父のプンナマーサと、今は世に亡き彼の妻と、チァンナより少し年上位の姉――それが現在のチァンナの妻なのだ――と、みんな人の良ささうな三人に仲間入りをして、十幾年ぶりの心易らかな生活を味ふことが出來た。

その內、秘密に選び出された、取分け夫人マーヤーの生家である拘利の方へ、秘密の上にも秘密にして娶られた第二夫人が來た。

『チァンナ、それはあのルムビニ園へ來た人だね。そしてそこへ來たのは……』

悉多多はそれが彼の繼母のパヂァーパティーであつたことを、判然たしかめて見たかつたのである。しかしチァンナの頭は、次第に込み入つて行きさうな彼自身の叙述を、出來るだけ順序立てようとのみあせつてゐた。

『ルムビニ園へ來られた時、最初にその御後姿を見た私は、あの方を――左樣でございます、パヂァーパティーの事でございます――あの方をもう少しで、夫人マーヤーと取り違へるところでございました。御顏の方はそんなでもございませんが、御體格から御態度なんぞ、どうしてあんなにも善く似た御二方があつたものでございませう!』

『そんなに、似てゐたのかい?』と悉達多は喘ぐやうに言つた。その目の中は紅く燃えてゐる。

『左樣でございます。他人の空似と申しましても、あんなのは先づ、よつぽど希しいと思ひます』と、チァンナは今一度繰返しただけで、その上を述べることを差し控えた。それほどにも似た人が勿論、十分に釣合つた門地の中に見當らなかつたといふこと、そして家運のすつかり衰微しきつてゐるサッカラの一波羅門の末女に於て、僅かに見出し得られたのだといふこと、これらの事をも聞き知つてはゐたのだけれど。

『それにお年こそ四十四歳に二十歳で、大分その、何でござりますけ

れど、まるで御肉親と申してもよいほどに善く似てゐられたからでもございませうか、夫人マーヤーは、折々執政と御一緒に見えて、夫人パヂァーパティーへ、誠にやさしく、よく御氣をつけて御上げになりました。そしてパヂァーパティーも、その御好意を、實に素直に御受けになつてゐらつしやいました。』

　二人の關係を斯う云ふ風に美しく描いたあとで、彼は更に、降雨期の前頃に來た第二夫人が、その年の暮れるよりずつと前に、夙く既に身重になつてゐたといふこと、しかも別莊番四人と、執政と、第一夫人マーヤーと、それから例のサバミッタと、この七人のほかなる何人にも知られないやうにして身二つになつたといふこと、否其事實が、永久に秘密として封じられてゐるといふことなぞを物語つた。

『チァンナ、お前の話はひまがいりすぎる！　さうして生れたのは誰だ？　お前はそれが私だと言ふんだね？』

『全く御察しの通りでございます』と、チァンナは言ひ免れられない犯罪者の如くにも頭を垂れた。

　悉達多は、突如、地を蹴つて起ち上り、握り合せた兩手を、話手の頭の上に突き出したが、流石にその無意味なことに自から氣付くと共に、再び力なく枯葉の上に腰を落してしまつた。そして他人からの借物のやうな聲で辛うじて問ひたづねた――

『だが、どうして、パヂァーパティーの生んだ子供が、どうしてマーヤーの子供になつた？』

『それは斯う云ふ譯でございます』と、愈々犯罪者のやうに萎縮しながら折々しどろもどろになりながら、チァンナは説明をつゞけて行くのである。

　第二夫人が身重になるや否や、それを隱蔽するに骨折つた人達は、第一夫人が身重になつたといふ風に吹聽し、それを總ての人々に信じさせた。

　そしてルムビニ園で、愈々内密の第二夫人から内密に男子が生れた時、第一夫人は待ち構へてゐたやうに、拘利へ向けて出發した。この地方の當時の風習に從つて、その生家でお產をしようといふのである。

　迦毘羅衛城の東門から拘利の西門までは、高々二由旬――餘程のろい牛車でも、晝間の内に往復出來る位のものだつた。その道程の三分の二ばかりを來たルムビニ園で、第一夫人マーヤーの一行が日盛りの暑さを休息してゐた間に、夫人マーヤーが俄かに產氣づかれたといふ騷ぎは持ち上つた。

　斯くて、夜の明方に一旦パヂァーパティーの生んでゐたところのゴータマ家嗣子を、日の暮近くマーヤーが再び生んだ。アニ・チァーナ

紀元六十八年カチャン月の滿月より六日目の事である。

『淨飯の御悦びは申すまでもございません。御誕生後五日の命名式を擧げる爲め、執政館の方へ御歸りになりました節なぞは、市中の人々悉く、まるで大將軍の凱旋をでも迎へるやうな逆上かたをして、夫人マーヤーをお迎へしたものでございます。』

『そのマーヤーが七日目に亡くなつたといふのは？』と悉達多は尋ねた。『本當に私を産んだんでなかつたら、産後の肥立とかいふやうなことも、ないぢやないか？』

單に悉達多のみならず、一般に、マーヤーが餘りに早く産褥から引きはなされた爲めに、その突然の死を招いたのだと傳へられてゐたのである。

チャンナは一寸の間思案の兩眼を閉ぢてゐたけれど、やがて決然たる表情で、眼と口とを同時に開いた——

『公子悉達多が、疑ひといふ疑ひを、みんな晴らしてお仕舞ひになる爲めには、あの事に就いても、包まずお話し申しませう！』

それから彼は、執政館に於て、三日三夜に亘る大饗宴の終りに近く、如何なる悲劇的事件の突發を、彼自身の目で見たかを打ち明けた。

飲んだり、歌つたり、踊り狂つたりすることに、疲れといふものを知らないやうな人々の間から、そつと一人ぬけ出し、中庭への出口の處に、涼しい外氣を吸はうとして立つたチャンナは、不圖、その石段の上に人の倒れてゐるのを見出した。

近くの篝燈籠を浴びてゐる青味がゝつた綾と、その刺繍の金銀絲や、帶の瓔珞の、華鬘の寶玉寶石は！否、それよりも新しく焚き染められたばかりらしい、南國産の香木の高價な匂は！

『あ、これはマーヤー！夫人マーヤーだ！』

この絕叫を辛うじて嚙み殺したチャンナは、殆んど轉りながら奧へ馳け込んだ。

やがてチャンナと共に現れた執政は、彼の妻が平生の微笑を脣邊に殘した儘、手首の金環よりも、石段の石よりも冷たくなつてゐることを、否定しがたく知りたしかめた時、投槍を突き刺された獸の呻吟をあげながらそこへ崩折れた。けれども、第一の、より致命的な狙擊から脱れようとでもしたかの如く、直に跳び起きて、先づ彼の肩にかけてゐた上衣を裏返しに、マーヤーの死體の上に投げひろげた。そしてチャンナの耳に、『お前も一緒に、露臺へ！』と囁いた後、足音を忍ばせながら走つて行つた。

二人つきりで露臺へ來た淨飯とチャンナとは、先づマーヤーが跳び越えたらしい欄杆の所へ一臺の寢椅子を運んで置き、その前に一の

小卓を、それをはさんで差向ひに、淨飯のかけるにふさはしい肘掛椅子を持つて來た。

次ぎに淨飯は其小卓の上あたりに、透彫の青銅の一の燈籠をつるさせた。

『マーヤーが此寢椅子に坐つて』と彼は、聲をひそめて言ひ出した、『悉達多の行末を、私と談り合つてゐたとする！そして燈をかき立てる爲めに、寢椅子の上に起ち上つたとき、忽ち眩暈がついて、そこの欄杆の上に倒れ、その儘外へ轉がり落ちたのだとしたら？それをチァンナ、お前はありさうな事だと思はないか？ありさうにもない事だと思ふか？』

『いゝえ、決して、そのやうな事は勿論』と、チァンナは吃り〳〵僅かに言ひ得た。

『それにマーヤーには、折々癲癇の發作があつたと云へば、產後の肥立ちが惡くなかつたとしても、これ位の過失は十分に起り得たと考へられるであらう。そしてチァンナと私と、私達二人のほかには、誰もこの事件の秘密を知らないでしまふんだらう！』

今、チァンナに取り次がれた、この淨飯の囁きで以て、チァンナの長い物語も遂に結末へ來た。

とつくにもう言葉をなくし、呼吸をさへ殆んどなくしてゐた悉達多は、兩手で上半身を支へながら、大きく見開いた目を仰向けてゐた。彼は餘りに多くを考へてゐたのであらうか？ 否、彼の意識には全く何物も殘つてゐなかつたのである。

だからチァンナの、前後に附け足した次ぎの一語は、彼の耳にまで、單に無意味の音響としてのみはいつたことだらう——

『兎に角さう云うわけで、マーヤーのあとに、公然の夫人となられたパヂァーパティーは、たゞ公子を御育てになつた方といふのではございません。そして其夫人パヂァーパティーから如何ほど深い御慈愛を御受けになりませうとも、公子悉達多、それを御心苦しく御思ひになることはないのでございます。ちつともないのでございます。』

四

チァンナが司馬双神として禮拜した新月が、まん丸くなつて、缺け出して、やがて下向きの利鎌にまで尖り出して來た頃の事である。執政淨飯は新任の執事長をつれて、三日ばかり迦毘羅衛城の直轄領内を巡視した。

其最終の日の午後、彼等の馬車が、市の南北に通ずる廣小路から、執政館の方への曲角に、ぱつと一沫の埃を立てるや否や、前から露臺の上に見張つてゐた優陀夷と悉達多とは、直ぐにそれと看て取つ

た。そして車上の人々から氣附かれない內に、餘程の可笑しさをでも抑へるやうに、各自の口に手を當てながら、一の高い寢椅子の蔭に身を屈めてしまつた。

二人が寢椅子や肘掛椅子なぞの隙間を銃眼にして、熱心な觀察の征矢を番へてゐるところへ、歸つた人々も程なく上つて來た。そして彼等の疲勞と汗とを一番よく拭つて〻れるのは、あの珊瑚色の鳥籠の下を吹いてゐる風であつた。

その涼しい風にもかかはらず、一人の侍女は圓葉棕櫚の形を眞似た、柄の長い絹團扇を搖り動かした。今一人はヤク牛の白い尻尾で、近くにゐるさうにも見えない蠅を逐ひのけた。

螺鈿の方卓の上には、いつもの通り幾種類もの、季節むきな生果や果醬や、花果酒、穀酒なぞが、それぞれの容器に盛られてゐた。それは勿論、地下室から取り出した氷によつて、十分に冷たくされてゐるのである。

『執事長は疲れたであらう』ねぎらひ乍ら、淨飯は淨玻璃の盃を取り上げた。『私のはまあ、遊山同樣であつたが、お前は本當の視察や檢分に忙しかつたからな。』

『いや、それからそれへと新しい計畫を立てながら動いてゐると、ただもう愉快なばかりでございました。それに、あまり雨られないのが何よりでございました。』

『うむ、先程なぞは大分怪しげな天模樣になつてゐたんだがね。』

『ほんの一足おくれたら――』と言ひ乍ら、サバミッタは遠く北方を指ざした。『あれでございます！』

見ると、ダワラキリ、トルボセーの山麓にまで延びてゐるテライの大林には、大地から湧き上つた雲の怒濤と、天空からずり落ちて來た大天幕とが、そこ此處に繋り合つて、眞黑く渦を卷いてゐる。

その渦卷を貫いて、鋸齒狀の閃電があちらへ走り、また此方へ走る。地の底を傳はつて來る遠雷の響きも感じられるやうである。

『よく、あいつにやられなかつたものだ！』

『左樣でございます』と、尋常の相槌を打つてゐる內に、サバミッタは又もや、彼らしい口上を述べたてることの機會を摑んだ。『この頃は萬事がこれで、好運の女神も笑顏の見せ通しといふわけでございますな。』

『だが、調子に乘るのは禁物だぞ』と、淨飯は上機嫌な場合の口癖を出しながら、拂子を動かしてゐた侍女へ、大皿の上の果物を指ざし、更にふり仰いで、籠の中の、朱色の長い尻尾をゆびざした。

その相圖の意味を、彼女よりも前に、鸚鵡自身が理解した。紫紺の嘴で留木の上を、二三度こつ〱と叩いたあとで、尻尾のさきを心

持撚げたり、またつぼめたりしながら、その場にふさはしい『王よ、陛下よ』の祝辭で、彼の分前を催促した。

淨飯の淨玻璃の盃は、再び鳩足酒で以て薄紅く染められた。酒精分に弱いサバミッタは、酒盃を擧げるときの手附で甘蔗醬を飲んだ。

だが、侍女から與へられたマンゴーの黄金肉を嚥下し終つた鸚鵡の喉は、丁度その感謝の表白でもあつたかの如く、今一度『王よ、陛下よ』を繰返した。しかも、一呼吸を容れるだけの隙間もなしに、直に次ぎの如き、新しい文句をまで附け足したのである――

『おべっか使ひのサバミッタ！』

流石に執事長は大きく見開いた目を、その儘膝へ落してしまつた。果汁の容器は、彼の頂髻より高い處で、ぴちや〳〵と音を立ててゐる。

執政は、無意識に浮かせた其腰を再び下ろして、突如、侍女の團扇をもぎ取つた。そして鳥籠の近くへ運ばれてゐた二度目の御馳走を、其團扇で以て叩き飛ばした。

『斯う云ふ卑劣な事をやる奴等は――サバミッタ、心當りはないか？』

『さあ、心當りと云つて、別に……さうですな、それは全く無いこともありませんが』と、しどろもどろな答へである。

『とにかく』と、淨飯はおど〳〵してゐる二人の女達に言ひつけた、『此奴を、直ぐに何處かへ片附けてくれ！』

女の手にあまる仕事について、一人の若者が呼び上げられた。鳥は今この露臺の榮華から、永久に斥けられてしまふ前に、今一度『王よ、陛下よ！』と叫び『おべっか使ひのサバミッタ！』を附け足した。

この小喜劇を結末まで享樂し盡した二人の少年達は、無言の儘に肘と肘とで、また目と目とで、互に相圖をし合ひ乍ら、彼等の隱處から階段の方へ、栗鼠よりも輕く走つて行つた。

二人と別な階段を、第一層まで下りて來た若者は、そこの大廊下で、その手にさげた大きな鳥籠と共に、忽ち十數人の男女から取り圍まれた。

喜劇の内容は、精一杯聲をひそめた口眞似と、思ひ切り大袈裟な身振りとで再演された。

『おべっか使ひの、サバミッターかね！』と聽衆の一人が制へ切れないやうに歡呼の聲を擧げた『いや、痛快々々。實にすてきな思ひ附きだ！』

すると今一人が直につゞいた『こいつも、矢張優陀夷だね。あいつより他に、こんな素張らしい狂言を仕組む奴はまづないよ！』

『だが、犯人の詮議がはじまつたら、俺は、此俺がやつたことにして貰はう』と、優陀夷びいきの第一者が、その胸を叩いて周圍を見廻はした。

『いいえ、お前さん一人に脊負はせるものですか』と、今ではもう、庭の雜草を拔き廻ること位しか出來ないやうな老女までが、この快活な興奮の中へ跳び込んだ、『優陀夷を庇ひたいのは、誰だつて皆同じ事ですからね。みんなが犯人になりますよ！　私達みんなが！』

この廊下から壁一重を距てた、隣の一室にまで來てゐた優陀夷は、『馬小舍へ、チャンナの處へでも行つて見ませうか？』と悉達多を誘つた。悉達多は『さうだ〱』と言ひ乍ら、先きに立つて駈け出した。

一人は自分の冒險に對する評判が、あまりにも豫想以上に賑ひ出したのを、一寸きまり惡く感じたからである。今一人にとつては、この愉快な事件が何人によりも、チャンナに報告さるべきであつたからである。

處が、厩の前にはチャンナも誰もゐなかつた。背後へ廻つて見ると、チャンナの妻が唯だ一人、壁によりかかつて蹲踞り乍ら、石の竈の上の藥鍋で、いつもの訶梨勒を煎じてゐる。

『優陀夷、お前の家へ行かう』と、今度は悉達多から言ひ出した。『執事長にも知らしてやらなくちや。』

優陀夷は彼の父――前執事長――が、斯う云ふ種類の惡戯を、餘り嚴しく咎め立てしないまでも、恐らくはそれほど面白がつて呉れないだらうことを想像して、一寸氣乘りのしない樣子であつた。

けれども、今日では、ただ優陀夷の家にだけ保存されてゐる古風な石の將棋盤なるものを、序に見て來たいのだといふ悉達多の希望には、やす〱と讓歩してしまつた。

市城の北門を愈々出ようとする處が迦毘羅衞城の政廳で、それから大通りを南へ五百歩ばかり引返した東側が優陀夷の家である。

通りに面した、家運と共にだんだん傾いて來た、古ぼけただだつ廣い母家が、終に修繕の餘地をも必要をもなくして、奇麗に取拂はれてしまつたのは、凡そ悉達多の家が執政館たるにふさはしい大規模の物に改まつた時代の事で、それからもう三四十年以上にもなるだらう。今は、その跡を政廳附屬の倉庫五棟と、家畜小舍二棟とが占められてゐる。

妙に威嚇的なこの二種類の建物の間を、くぐり拔けるやうにしてはいつて行くと、もとの屋敷の三分一ばかりに狹められた地面が、三方をあるかなきかの煉瓦塀の殘礎で、前方を申譯ばかりのやうなサボテンの生垣で劃られてゐる。その刺々しい生垣に咲いた、趣きのある薄紫

の花を、悉達多はいつ來て見たか印象に留めてゐた。

元來夏向きの子亭に過ぎなかつた、僅か四間か五間位の一棟は、それと共に取毀された長方形の蓮池との釣合から、一層小さいものに見える。

その池に向つた一室の、窓際近く幅の廣い寢椅子の上にあぐらをかき乍ら、鶴のやうに灰色で淸瘦な前執事長は、釣道具の繕ひをやつてゐた。

降雨期にかかつてからは、魚もなか〳〵餌を喰はないのだが、そんな事にお構ひなく、雨つてさへゐなければ彼は、毎日のやうに釣竿を肩にして出かけて行く。そして出掛けないでゐる日は、鉤の鏽をとつたり、絲をよつたり、竿や籠を染め直したりなぞして、この頃の閑な隙を一層閑らしくしてゐるのである。

『や、これは！　公子悉達多、貴方も御一諸でしたか！』と言ひ乍ら彼は、鶴の脚を寢椅子から下ろした。『初めてゞせうね——ここへ來て頂いたのは？』

『ずつと前に、一二度ゐらして頂いたことがあるさうですが、今日は家の、あの、石の將棋盤を御目にかけるんです。』

『石の、將棋盤を。さうか』と、口を閉ぢてから目で微笑した。

『それも見たいんだが、それより先きに、執事長に——ブンナマーサに知らして上げたい事があるんだよ！』

それから悉達多は、窓掛のモスリンに包まれた大きな鳥籠が、誰からも氣附かれないやうに露臺から吊り下ろされたこと、後園の一隅の芭蕉の蔭で、多悉達自身の見張りの下に、彼の友人の熱心な努力が、その思ひ附きの文句を鸚鵡にまで、終に首尾よく敎へ込んだこと、そして最後に、その努力が丁度今、實に華々しい効果を示したこと、それらの事を一息に物語つた。

ただ折々、微笑と苦笑とを漏らす位で、默つて首肯いてゐた優陀夷の父は、悉達多の言葉の終るや否や、將棋盤の重たい石を引きずり寄せてゐる優陀夷の方へ、わざ〳〵作つた鹿爪らしい顏をふり向け乍ら、その言葉だけを悉達多に與へた——

『執政館で御不用になつた兆鳥を、私がこちらへ頂戴して來て、もう一度役立たして見ますかな。』

『役立たすと云つて、どんな事に？』

『その雄辯な鸚鵡が、毎朝優陀夷を呼び起すんですよ。「優陀夷起きろ！」とか、「今日は、どんな惡戯をやる氣だい？」とか、「全くお前は惡優陀夷だよ」とか言つてね。』

斯う言つたあとで、初めて朗らかに哄笑した。

優陀夷は一寸頭を縮めて、唇と唇との間に舌をのぞけて、この

哄笑の寛大さに甘つたれ乍ら、將棋盤にかぶせた革の袋を取り除き、その深い溝から埃を拂つた。

盤は普通のよりずつと大きい、暗褐色の石盤石で、縱横七七の四十九目しか有つてゐないことが、先づ公子悉達多に珍らしかつた。

次ぎには、同じく革の袋を着せてあつた石櫃から、優陀夷の取り出した棋子を見ると、新來のアリアンを意味する白の七個と、先住民を意味する黒の七個と、合せて僅かに十四個にすぎない。

白側に於ても黒側に於ても、陣地の中央は象軍が占めてゐて、左右どちらからも馬軍、車軍、歩軍が護つてゐる。

そしてそれらの棋子の進むか止まるかを決する骰子も、六個の六面體の代りに、只だいぼ〳〵の出た、輕くして硬いギビーダカの實を、白の半球面と黒の半球面とに塗り分けたものに過ぎない。

悉達多のこれまで見慣れてゐるのは、二頭の象を歩兵列の前に置く横八縱十の、八十目の盤である普通の將棋にしても、これらの象をなくしたより新しい將棋にしても、王だとか、王妃だとか王師だとかいふやうな棋子を分つてゐるのだが、共産的共和制の釋迦族自身なぞを反映してゐるらしい此古風な將棋は、さうした君主制的な何物をもまだ有つてゐないのである。

その硬い木の實が、白側によつて投げられた場合、白い半面を出せば、どの棋子をでも一手宛進めたり、退いたりなし得るといふこと、反對に黒い半面を出せば、どんな具合にも棋子を動かし得ないといふこと、黒側によつてかの金剛子の投げられた場合も、丁度それに準ずるのだといふこと、これらの事を先づ悉達多は敎はつた。

次ぎに、それ〳〵の棋子が一手として、どんな方向へどれだけ進んだり退いたりし得るかを敎はつた。それから尚ほ、結局の勝敗だとか勝負なしだとかいふやうなことに就いて、必要な規則の一通りを敎はつた。

そこで早速優陀夷を相手に對局を試みることになつたのだが、石櫃の内蓋に投げる金剛子だけは彼自身の手で投げても、盤上の形勢が不利に向ふ度毎に、見物のプンナマーサが横合から加勢した。そして直ぐに五角の勢ひまで挽ぢもどした。

斯くして、多悉達の力を越え理解をさへ離れて、果てしなく引き延ばされて行く戰爭は、やがて彼の注意を暗褐色な石盤石の上によりも、寧ろ廣い周圍のさまざまな物の方へ向はせた。

窓枠に竹の節々を表現した二の馬蹄窓と、竹の葉の透彫とからはいつて來る光線は、曇日のこととて十分に強くはなかつたけれど、漸くそれにも慣れて來た悉達多の目は、釣道具の取り散らされてゐる、恐ろしく幅廣い寢椅子なんぞも、單に幅廣いといふだけの物でないこ

とを發見した。巨きな朱檀材を丸木舟のやうにくりぬいて、その上にこまかく籐を編み渡して、頭部と脚部との雙方に、革のクッションをつけて、同じ木材の車輪に運ばせてゐる其動榻の構造は、何故ともなく昔噺の『臥ながら星を見守る椅子』を想ひ起させ、その擦り切れた革や、殆んど剝げ盡した塗などにも、ひとしほ古雅な趣きを感じさせる。

悉達多が上半身を扭ぢて横の方を見ると、その直ぐ側に懸けた八花形の金屬鏡は、水銀を塗られた平滑面に、互に向ひ合つた一對の獅子を映してゐる。

室の一隅に片寄せられた其木彫の獸王像は、單に室内を嚴飾する爲めの置物ではなく、それぞれの高い臺座の前面を半月形に抉り込まれてゐて、肘掛椅子の役をもつとめるやうである。

この文字通りの獅子座に、時代ばなれのした絨氈を無造作に裁り裂いたやうな、細長い敷物の投げかけてあるのも、却つて落ちつきを添へてゐる。

だが此室を、或は此家全體を最も特色づけてゐるのは、何と云つても、獅子座の背後の壁であつた。

悉達多の胸位までの處は、幾重にも塗り込んだ石膏粉の皮膚が龜裂われたり、擦りむけたり、擦りむけたあとに煉瓦が赤く露出したり、又その煉瓦と煉瓦との間に、蜥蜴が出入する——悉達多は實際にそれを見たと思つた——ほどの、大きな孔があいたりしてゐるのだけれど、上部には、處々の無殘なる汚損や磨滅にもかかはらず、尚ほ且つ濃厚な顏料の効果が、華麗な孔雀の羽根として、二三種類の熱帶植物の、蓊鬱たる葉茂りや、燃え上るやうな花盛りとして殘つてゐるのである。

汚損し磨滅した箇所を幻想の刷毛で補ひながら、非常に懸けはなれた世界を手繰りよせ、自分自身の裏に潑溂と生かして見たり、或は再び、前よりも一層遠い處へそれを押しやつて、甘い頼りなさ、心元なさを味つたりしてゐた悉達多の耳に、恰かも彼自身の幻覺のその儘の延長ででもあつたかの如く、不圖、一の七絃の音が聞えて來た。

隣室のその次ぎの室あたりで、あの二十二分の小音階を、まだ精くは扱ひ切れない稚拙さが、『地のはてに』の一曲を、繰返し〱彈いてゐる。恐らくは優陀夷の妹のグプタであらう。

それに合せて優陀夷は、象牙の棍子で膝の上を、輕く拍ちながら唄ひ出した——

　地のはてに燃ゆるは、
　落日かや、叢林の枝々より

風神の熾り出したる祭火かや、
血の色の牝牛と天蓋を焦がして、
燃ゆるよ、燃え狂ふよ、蘇摩酒の如く。

この切目に棋子を置いて、悉達多を促し立てた、『さあ、投げた、投げた。公子よ、投げて下さい！』

公子は投げた。そして投げただけで、その金剛子のどちらの半球面が出たかも見極めないで、優陀夷の刻む拍節と共に、直ぐにまた七金絃の音へ歸つて行つた。

九歳の少女のかき鳴らす七金絃は、その明白な未熟にかゝはらず、素馨のやうに纖細く可憐しい彈奏者の一切を、表出し盡して遺憾がなかつた。

そして、これまで執政館の宴樂なぞに聽いたのでは、硬い金屬音と瓢胴の共鳴とに運ばれるあの曲も、『血の色の牝牛と天蓋を焦がして、燃ゆるよ、燃え狂ふよ、蘇摩酒の如く』のやうな詞を盛るに、一番ふさはしいと思ふほどの、隨分荒々しいものであつたのだが、今この何もかも、神々しく古びてゐる雰圍氣の中できくと、むしろ、『蒼白き月と銀漢を過ぎりて、消ゆるよ、消え失するよ、白鳥の如く』のやうな詞に一層適切なほどの、うれはしくも沈みきつたものなのである。

斯く、善き悪しき明日への約束を、永劫の滅盡と空無とに變じ、不敵の挑戰を、いさぎよき放棄にまで化してしまふ不可思議力は、そも何處から出て來るものであらうか？

成上りの、勃興者的な淨飯の陣營に具はつてゐて、沒落者的な、このブンナマーサの隱遁所に缺けてゐる多くの者が、少年悉達多を淋しがらせるよりも、寧ろ落ち着かせたことはたしかである。だが、彼處になくて此處にある色々の、否結局に於ける一の重要なものが、彼にとつて大きな魅力であると共に、また幾分の飽き足りなさ、歯がゆさであることも否定し得られない。

悉達多が、斯うした渦卷にまき込まれてゐる内に、いつかしら七金絃の音は、『白鳥の如く消え』去つた。そして其後に、尖つた調子で誰かの物を言ふのが、途切れ／＼に聞えて來たやうに思はれた。

優陀夷は、耳にあてゝゐた掌を口端に合せて、其喇叭を父の方へ吹き鳴らした。『グプタがまた、泣いてゐる！グプタが！』

『グプタが、どうした？』とブンナマーサは、精一杯表情をなくした聲で問ひ返した。

優陀夷は指頭で石櫃の蓋に大きく字を書いた。そして書き終るや否や、これまで悉達多達に見せたことのないやうな大人びた顔附きで、

扉口のむかうへ入つて行つた。
　自分の家でも折々、耳の聞えなくなるらしいプンナマーサは、鸛のやうな灰色の痩身を徐かに立てて、無言の儘に太息をついた。その太息の細長い尾は、彼のあとに窓際まで從つた。
『うむ、外は室の内ほど暗くもない。一つ、出掛けて來るかな。』
　斯う言つて、寢椅子の横から釣竿を取り上げた彼は、初めていつもの和やかな微笑をふり向けた――
『公子悉達多、貴方はまあ優陀夷達と、ごゆつくりなすつて下さい。』
　プンナマーサと殆んど入違ひに、優陀夷とグプタとが入口に現れた。兄から手を曳かれてゐると思つたのは、最初の一瞥に於ける悉達多の錯覺で、實際の彼女はその、餘りにもほつそりした二の手で、重さうな果物の盆をささげてゐた。
　新鮮なその巴旦杏や棗の如く、また乾き切らない彼女の目は、最上の眼膏を塗るより以上にさへ、その長い睫毛を暗くした。
　哀みと涙とに依つて、醜くなるよりも美しくなるところの、薄倖な女性の一典型――嗚呼それが、九才の少女に於て既に見られるのである。
　悉達多を面白がらせると共に、グプタの泣吃逆の名殘をなくする爲めに、さまざまな遊戲が試みられた。例へば將棋の棋子を積み重ねたり、積み重ねた奴を、搖り倒さないやうに撮つたりすること、自分の脊中に描かれた圓や、三角形や、四角形を中て合ふこと、白堊でひいた條の上を、踏みはづさないやうに、歩くことなぞが。
　けれども、誰にも一番興味の有てたのは、庭へ出て、玩具の帆舟の速力を競爭することだつた。
　白樺の樹皮で作つた各自の帆を、大きな棕梠の團扇で以てあふぎ立てると、水量のゆたかな池の面に、目蓋の閉ぢた睡蓮や蓮なぞを驚かしながら、後になり前になり滑べつて行く。
　對岸への第一着は、大抵の場合悉達多とグプタとによつて爭はれ、その度毎に、取り殘された優陀夷は、愈々元氣のいい聲を張り上げて憤慨する。
　その内に、自分の持舟をはすかいに進めて、グプタの進路を遮ぎらうと企てた惡優陀夷が、餘りに性急な風を送りすぎて、自分で自分の舟を覆して仕舞つたとき、妹の無邪氣な歡びは頂點に達し、棕梠の柄を打ち叩き乍ら凱歌を擧げた。
　けれど、此凱歌のやつと收まつたばかりの時である。グプタは俄かに寒氣立つたやうな顏をして、其兄のそばへ寄つて來た――
『優陀夷、阿母さんの聲ぢやなかつたの？　貴方は聞かなかつた？』
『私は聞かなかつた。だけど、可いぢやないか――直ぐに行かなくた

つて。』

『でも、叱られるわ！』

『もう少し遊んで、それから私達と一緒に行くんだ。其時分には、きつと御機嫌が直つてゐるよ。』

『でも、そんなこと、恐いから！』

優陀夷は五六歩ばかり妹を追うたが、立ち停まつて、舌打ちをして、其儘力のぬけたやうな歩調で引返した。

『グプタは、どうしてあんなに恐れるんだ？』

と公子は尋ねた。これまで折々見たことのある、かなりに譏良らしい此家の主婦を思ひ浮べながら。

妹思ひの兄は、水際の石にしやがんで、妹の投げて行つた團扇を地に刺しながら、彼自身を連子にして、此家の後妻に來た母が、生さぬ仲のグプタに對しても、平生はやさしい方の母であるけれど、時時の發作から大變に辛くあたり始めるといふこと、けれども廣い世界には、まだ／＼無慈悲な意地悪な繼母の、いくらでもあるのだと云ふやうなことを、色々な詳しい實例と共に説明した。

早熟な口から談られたそれらの實例は、生さぬ仲とか繼母とか云ふやうな言葉を、單なる言葉としてのみ覺えてゐたほどの公子悉達多にとつて、餘りにも新しすぎる電撃であつた。

『でも、お前の御父さんは、隨分お前を、可愛がつてゐるぢやないか？』と悉達多は、丁度チャンナのやうに、吃り／＼問ひたづねた。この場合、悉達多自身の母パヂァーパティーも亦、生みの母ではなかつたといふことを、本當に初めての如く、明白な意識にのぼせてゐたのは勿論である。

『自分のは特別にいゝんですが、父親といふものには餘り悪いのは無いさうです』と、優陀夷の口吻はもう一廉の人間通である。『そして、酷いのはどうしても繼母の方ですよ。』

『母も、本當の、生みの親でなければ……さうかなあ』と、悉達多の片々な言葉は、全くたゞ彼自身へであつた。

『だが、公子悉達多！　公子の母君、夫人パヂァーパティーのやうなのは、あんなのは全く別ですよ！』

このめざましい例外に、やつと氣附いたらしい優陀夷は、すつかり狼狽しながら、それでも彼の有りつたけの世間智を傾倒して、あんな賢明な婦人は、生みの母同様の愛情を十分に有ち得るといふこと、少くとも、自分の生んだ子供と他人の生んだ子供との間に、何等の別け距てをするものでないと云ふことなぞを、反復強調しはじめてゐた。

そこへ、執政館からチャンナが迎へに來た。

優陀夷を殘して、チャンナと共に歸途についた悉達多は、あの廣小

路を右に折れて、彼の家の高い三階建を正面に見るまでは、頑に會話を避けてゐた。

だが今、突如として路の中央に立ちとゞまり、『チャンナ！』と力強く呼びかけた、『チャンナ、お前は私に教へてくれる？』

『何でございます？』

『母親には、自分の生んだ本當の子供を、ただ育てたといふだけの子供と、同じやうに可愛いいものだらうか？』

チャンナは殆んど、彼自身の聽覺を疑つた。悉達多は少し異つた言葉で、けれども同じ意味の問ひを繰返した。

滅多に犯さない不作法を無意識に犯して、道端の壁によりかかり、その腕をこまぬいてゐた氣の毒なチャンナは、だいぶ經つてから、例の吃り癖を出し乍ら、辛うじて問ひに問ひ返した。

『お小さい公子難陀と貴方との間に、夫人パヂャーパティーが何か別け距てをでもなさるやうに、もしかしたら、さう云ふ風にでも御考へでございませうか？』

『いや。いや、そんな事はない。』

單にこれだけしか口にしなかつたが、實際は、近頃やうやく片言交りの可愛らしさを見せ出した異母弟と、彼自身とを比べて見た場合、今尚ほ彼自身が、いかにより多く愛せられてゐるかといふこと、又それを如何に堅く信じ切つてゐるかといふことを、明白な言葉で以て否認したかつたのである。

『そんな事はない——でございませう！　あつて堪るものですか！　そしてそれなら、別に仰しやる事もないではございませんか？』

斯う言ひ乍ら再び路の中程へ出て、彼の幼い主人をも前方へ促した。

促される儘にぽつ／＼歩き出し乍ら、悉達多は先程優陀夷の家で見た事、並びに聞いた事に就いて物語つた。

その物語を一通り聽き終つた後、チャンナは、悉皆安堵したやうな調子で論結した——

『だから、優陀夷も言ふ通り、夫人パヂャーパティーのやうな賢い方は、全く別なのでございますよ。』

『だけどチャンナ。私でも、腹が立つて、打つてやりたいと思ふ時、矢張打たないで我慢することがある。』

『それはまた、どう云ふ事でございます？』

『賢い人は、可愛いくない子供と、本當に可愛いい子供と、どちらも同じやうに、可愛がつてくれるかも知れない！』

『それで——』

『それでチャンナ、私はお前に訊くんだよ。同じやうに可愛がつて貰

へるからと云つて、私達は、同じやうに我儘を言つてゐて、それでいいだらうか？　いいものだらうか？』

今度は、押し默つて歩くのがチァンナの順番であつた。悉達多からの問ひは、幾度となく單だ無益に繰返された。

しかし、遂にあの大弓門の前まで歸つて來たとき、チャンナは悉達多の手頸の金環を一寸揃へて、四邊にその目を配り乍ら、稍や早口に、悉達多の耳にささやいた──

『この事について、公子の御心配なさる必要はないのです。その必要がないと申すのにも、深い仔細のあることで、それは何時か──さうです、此次ぎ、馬のお稽古に出掛けた時にでも、詳しくお話し致しませう。とにかく、公子よ、ちつとも御心配なさることは無いのです！』

第三章

一

師に就いて正式に物を學ぶといふことは、波羅門ならば七八歳から始められるのだが、刹帝利である悉達多の場合は、十一歳に至つてやつと始められた。

武勇を何よりの誇にしてゐる釋迦族の、そして武士階級であるところの刹帝利の、特に覇氣滿々たる執政淨飯に嗣子として生れた少年の教養が、結局軍事を中心にしたものであるべきは、改めて言ふまでもない事であらう。

しかし、前にも述べた通り、遊戯にせよ、教養にせよ、苟しくも危險らしい一切の事を出來るだけ避けさせたがつた夫人波闍波提の希望に依り、職務に武人的な教養は二三年乃至四五年のさきへ延ばされることになつてゐた。

そこで差當つては、クシャーンティデーヴ以上に申分のない武藝師はあり得ないことになる。

彼自らの吹聽によれば、彼は素張しい技術の名手で、度々の猛獸狩に勇名を轟かしたとのことであるが、その技術は教授課目にはいつてゐないので、從つて彼の吹聽のいかに眞實であるかを證據立てる必要はないのである。

馬や弓に關しても、彼ほど博學に講義をなし得る者は、一寸なささうに思はれた。それでゐて、彼が實際馬に跨つたり、弓を引いたりしてゐるところを目撃した者は、ただの一人もない。

彼は劍の拔き方ひとつさへ、ただその持前の雄辯で以て說き聞かすだけである。

斯く自分自身をも其弟子をも、何等の危險にさらす氣遣ひのないク

シァンティデーヴを武藝師として推薦したサバミッタは、學問師として彼自らを推薦した。

學問師は先づ書くことを教授した。この頃の文字は左へ左へと書き進む驢唇字と、右へ右へと書き進む梵字との二種類で、簡單な備忘錄や、通信や、布告や、證書や、手形なぞを自然語で記す上に使用されてゐる。

そして貝多羅の葉や白樺の皮を切り揃へて、尖つた竹筆や鐵筆なぞで、それらの文字を刻み込んだり、そのあとにインキを入れたりすること、斯くして書かれた薄板に孔をあけたり、絲で綴ぢ合せたりすること、これらの技術を一通り習得してしまふのは、半年あまり一年足らずのお稽古で十分であつた。

このお稽古の終りに近く、第二の、より高級な學習がはじまつた。それは三吠陀、とくに梨倶吠陀の暗誦及び、それを中軸として、それに因んで數へられるところの各種の學藝で、大袈裟に云ふと、吠陀の中の吠陀である文法や、韻律學や、史傳や、祭式や、祈禱や、占學や、星學や、數學や、曆學や、辯證法や、政治學倫理學や、仙學や、醫學や、妖怪學や、蛇學にまで亘るのである。

ところでサバミッタはバシタ家なぞと相並んで昔から、偉大なる學者を幾人も出した名門の血筋を引いてゐる故、それを學問師にしてゐるといふことが、淨飯の虛榮心を滿足させる上に滿更役立たないでもなかつたけれど、しかし、學問師としての實質から云ふと、あまりにも學殖のなさ過ぎる漢であつた。

この時代は、吠陀の高級神に祈願したり感謝したりする祭式が、惡神、魔神、物精なぞを利用して、自己の幸福を圖つたり他人に害惡を加へたりする、咒術禁厭にまで墮落してしまつてゐたので、祭式僧とは云ひ條、サバミッタの實際に知つてゐるのは、婦人の愛を得る爲めの、夫婦和合する爲めの、賭博に勝つ爲めの咒文だとか、菩提樹を用ひて、魔神アプヴーを遣はし敵を苦める咒文だとか、熱病の物精タクマンを多淫なる首陀女へ、摩迦陀や健陀羅へ逐ひやる法だとか、貧乏神アラーティに御引取を哀願する法だとか、アパーマールガ草や、サダム花草や、シラーチー草や、ヂァンヂダ樹なぞから厄難拂ひの、咒咀除けの護符を作る法だとか、前兆の吉凶を判じたり、凶兆を無効にしたりする法だとかいふやうな、民間の低劣な迷信的要求に應ずるだけのものに過ぎない。しかも狡猾にして世才に長けたる彼は、例へば悉達多の誕生前に行はれた大馬祠の如き場合にさへ、吠陀の精通者等を巧みに利用して、自ら祭官主座たるの榮譽と利益とを收めるのに、決して事を缺かなかつたのである。

ともあれ、アタルヴ・アンギラスの招福攘災を少しばかり知つてゐ

るといふに過ぎないサバミッタから、吠陀の暗誦を習ふのは一の災厄であつた。

先生は度々、そして直ぐに行き詰つた。行きつまれば註釋だといふ名義の下に、本文と何の關係もない雜談を長々とやり出した。第一回、第二回、第三回と數へる度毎に、同一であるべき文句が隨分と異つてゐた。それが餘りに甚だしい時には、自然弟子からの指摘を受けた。すると、色々流派のちがつた婆羅門師についたので、さうした傳承の不一致を免れないのだと辯解した。

悉達多にとつては、元來俗惡その物のやうな此祭式僧と、毎日かなりの時間を向ひ合つてゐるといふこと、單にそれだけでも愉快な事ではなかつた。そして明白に間違ひだらけだと思はれる文句を暗誦することの馬鹿らしさに加へて、無學を蔽ひかくさう爲めのあらゆる瞞着を、その儘通過させることの腹立たしさは、追々に我慢のしきれないものにまでなつて來た。

一日學習の模様を見に來た淨飯の前で、悉達多はつひに決然として其鬱塊を爆發せしめた。

流石のサバミッタも、其刹那は色を變へて、彼の厚い唇を噛んでゐたが、直ぐに平靜を取かへした。そして彼自身のたしかに間違つてゐたといふことを、公子と其父との前へ承認した上、これ位の間違ひ——勿論淨飯にはそれが、ほんの一寸した物であるやうに思はれた——を、斯くもあざやかに指摘し得る少年の頭腦が、實に驚嘆すべき明晰さを有つてゐることを保證した。又、かくの如き少年の學習に對しては、彼自身の如き尋常普通の學問師では間に合はないといふこと、就いては、丁度折よく彼の處に食客となつてゐる天才的な一波羅門師を、此機會に於て彼の後任に推したいといふことを陳べ立てた。

此場合　執政淨飯が、其家庭教師に謙讓の美徳を嘉したかどうかは暫く措き、我が子の天分を激賞されて、どれだけか機嫌をよくしたであらうことは、想像するに難くない。

偖て此事あつて後、悉達多は新しい波羅門師バッダラニから教へられることになつたのであるが、バッダラニ其人も、彼のやらせる暗誦も、最初の内は悉達多にとつて、ただ嫌ひでないといふ程度のものだつた。それが積極的の大きな魅力となつたのは、優陀夷といふ活潑な勉強相手を與へられてから後の事である。

けだし、好奇的で忌憚のない優陀夷の質問が、どちらかと云へば、口數の少いバッダラニを刺戟し挑發して、字句の解釋や大體の叙説と共に、色々の問題に對する常識的な或は常識以上の、面白い觀察や所見などをのべるべき機會を得させたので、それまで本當の赤坊であつた悉達多にも、一の全く新しい人間智の太陽がのぼつて來るやうに思

はれ出したのである

丁度、此時分の事である。彼自身の生誕にまつはる込み入つた事件を聞き知つたのは。そしてあの事件を知つた後は、よく〳〵の用事のほか、成るべくチャンナと二人つきりでゐることを避けるやうにした。なぜならば、チャンナが自分を憂欝にしよう爲め、あんな話をしたのでないことを思ふと、チャンナに自分自身のあからさまな表情を見られることが、妙に心苦しくなつて來たからである。

優陀夷とも、從前通りの子供らしい遊戯を共にすることは、つまらなくなつて來た。そして彼と一緒に學問所にはいつてゐる時間、又其處を出てから、パッダラニの話を延長して、二人で論じ合つたり、一人で思ひ耽つたりする時間こそ、この頃の少年悉達多にまで、一番願はしいもの、少くとも一番堪へ易いものに思はれるのであつた。

或る時、優陀夷は唐突にパッダラニへ問ひ尋ねた——

『師よ、貴方が何時も低聲に歌つてゐらつしやる——あの、その初め尙……と云ふのは、矢張吠陀ですか?』

『ああ、「無有の歌」ですか。さうです。梨倶吠陀一千餘篇の中にも、あれほどに意味深い讃歌は他にない。あの一を取る爲めには、他の五百を捨てても惜しくない!』とパッダラニは答へて、これまでに示したことのない興奮にその骨立つた頰を紅くした。

それから、まだ敎はるのに早過ぎると云ふあの哲學詩が、二人の少年の執拗な强請によつて遂に敎へられた。

『その初め尙、有もなく無もなかりき。空界も、その上の天上界もなかりき』

『その時死もなく不死もなかりき。晝と夜との文目もなかりき。獨一なる彼は、他の氣息によるところなくして自ら呼吸したりき。』

『唯闇のみありき。此一切は、闇に掩はれたる光なき波動界なりき、虛空に包まれたる原子は、彼ひとり熱の力によつて生れ出でぬ。』

——これらの言葉を、優陀夷は、說明されればされるほど、愈々解りにくく思ふと告白した。これに對して悉達多は、自分自身ともかくも、どれだけかを理解してゐながら、偖て他人に理解させることの全く出來さうにもないほど意味深い言葉と云ふものを、初めて本當に學び知つたやうな、不思議な感動を經驗したのである。

『もう一つ別なのをも、師よ、折々貴方は御歌ひになつてゐることがあります。あれをも敎へて下さい』と優陀夷が求めた。

『もう一つ別なのを、と云ふと?』

『嘗て高き枝の上に搖ぎつつも……と云ふやうな言葉で始まる奴ですよ。』

『あんな歌を！　あいつは困るなあ』と獨白のやうに言つて、バッダラニは再び其顏を紅くした。勿論、前とは性質の異つた興奮なのである。

『あの歌は、解り易くて、そして面白さうぢやありませんか』と、優陀夷は無邪氣な熱心さで以て追窮しつづけて行つた。

バッダラニは、『無有の歌』が完全に暗誦されてしまつたあとでなら教へてもよいと、うつかり約束させられた。そして其約束は、翌日もう直ぐに果されねばならなかつた。なぜと云つて、優陀夷は新しい歌を教はることにそれほど興味を有ち、悉達多は『無有の歌』其物の暗誦を、それほど愉快な仕事に感じてゐたからである。

賭博の恐ろしい惡魔的な誘惑と、其誘惑に負けた者の末路とを扱つた『骰子の歌』も、最初の程は寧ろいや〱乍らのやうに、だが其内に漸く恐い物見たさとでも云ふやうな調子で、そしてお仕舞には『無有の歌』の場合に比べて、十倍以上もの熱情をもつて口授された。

しかも、二人の少年達にさへ、殆んど其儘で大體を理解され得る此歌は、解釋されることの代りに、幾度となく反復された。反復の度毎に、口授者が彼自身の感情を愈々煽り立てて行つたことは、改めて言ふまでもないだらう。

『嘗て高き枝の上に搖ぎつつも、風を凌ぎて熟れたる木の實は、今盤上に跳び轉びて我を誘惑す。

西雪山の蘇摩の味良きが如く、金剛子の實は我を醉はしめ悦ばしむ。』

次第に聲を低く、非常に引き延ばされた調子で此等の言葉を誦み乍ら、バッダラニは遂に、現實にも陶然としてゐるかのやうな顏をしはじめた。そして次ぎの言葉なぞを口にする時には、たつた今其妻を奪はれ、其友人から棄てられて來たばかりのやうな、實に生々しげな苦惱を見せて、大粒の涙をぼろ〱と落すのであつた。

『その妻はひとに奪はれ、その財は羽ある骰子のために掠められたり。父母と兄弟とは彼につきて言ふ、我等は彼を識らず、彼を縛めて連れゆけよかしと。』

『我は復び骰子を弄ばざるべしと、我自らの心附きし時、友ははや逃げ去りて、我ひとり捨てられたりき。』

悉達多はかくの如き奇怪なる情景を驚くと共に、それが極めて尋常普通の事ででもあつたかの如く、餘り驚きもしないでそれに見入り聞き入つてゐる優陀夷をも驚いた。しかし、バッダラニはさうした驚きなぞに頓着してはゐなかつた。

『かの骰子の一群は五十三回に亘りて跳び躍る。恰も實性の衝動神の如し。彼等は烈しき怒にも遂ひ斥げらるることなく、彼等の前には

王者も亦須聽す。』

この言葉と共に、床板の上に跪き、腰掛の上に面を埋めて、仔狗かなんぞでもあつたかの如く學問師が啼き始めた時、悉達多は默つて其學友の肘を引張り乍ら、室の外へ出てしまつた。

優陀夷は勿論直ぐに、嚀以上にさへ賭博好きらしい、かの學問師の狂態を問題にした。

其問題に就いても、二人で談し合ふより、寧ろ唯だ一人で考へて見たくなつた悉達多は、用事を拵へて優陀夷と別れた後、『貝多羅の間』へ入つて行つた。

應接間の豫備とは名ばかりで、平生殆んど使用されてゐない階下の一室が、『貝多羅の間』と呼ばれてゐるのは、一には、其北向きの大窓を蔽ひかくすやうにして、二株の貝多羅葉が伸び擴がつてゐるからである。又一には、不用になつた貝多羅葉の書き物が、幾匣もの大きな容器にしまつて、其一隅に積み上げられてゐるからである。

この室には、今日の執政にとつて、使用するには粗末すぎる、けれども棄てるに惜しいやうな親譲りの家具類が、夥しく置き並べられ、或はほり込まれてゐる。儉約好きな獅子頰が最終の日まで用ひたと云ふ、大きな棕梠索張りの寢椅子なぞも其中の一である。

悉達多は、近頃好んでやるやうに、その野趣の横溢した寢椅子の上にのぼつて、仰向けになつて、目を閉ぢた。

閉ぢられた目に、仔狗の如く啼きつゞけてゐる學問師の姿が浮ぶ。彼は、あの度はづれな陶醉と悲痛とがそもそも何を意味するか、それを判然させて見ようとする。

其努力の中に、あれほど奇怪に見えてゐた情景が、漸く、格別奇怪なものでも何でもないやうに思はれて來る。そしてある學問所に啼きつゞけてゐるのが、バッダラニであると共に、他の誰かでもあるやうに感じられて來る。

あの啼泣者が不意に面を擧げてこちらを見るとき、それはあの、新しい執事長のサバミッタであるかも知れない。否、それが悉達多の父淨飯であり得ないとはどうして云へるか？

幻覺の中なる淨飯は遂に、彼の面をあげて、彼の瞳とも思へないやうな哀しげな聲で話しかける——

『悉達多、お前は私達が本當にどんな人間であるかを知らない！　いや、お前自身をも知らない！　お前はお前の骰子を有つてゐないと云ふのか？　お前の骰子が何であるかを知らないと云ふのか？　しかし、お前もやがて私達のやうに、バッダラニのやうに……』

中途で消え失せた父の言葉を追ひ求めるかの如く、悉達多はばつと目を開いて、寢椅子の上に起き直つた。そして四邊を見廻はしてゐる

る内に、これまで氣に入つてゐた此室の薄暗さを、何だか少し暗すぎるものゝやうに感じ出して來た。

此室がそんなにも暗く感じられるのは、一には、南側の大廊下に光線の入るのを、其扉が遮つてゐるからである。其事に今更の如く氣附いた悉達多は、その、何時から掛けられた儘かも知れない錠前を、外して見ようと試みた。

その試みに失敗して、漠然暗い處に立つてゐた彼の頭に、突如、一の考が電光の如く閃いた──

『むかし、チァンナが見たと云ふあの悲劇は、此の扉口の處で演ぜられたのだ！』

悉達多は吸ひ寄せられるやうに中庭へ出て、扉の外へやつて來た。そして其處の、久しく踏まれない石段の微に注いだ目を、丁度その上に當る露臺の欄杆へ轉じて行くとき、輕い眩暈を感じたことまでは、十分に記憶されてゐる。否それから龍舌蘭や、シァボテンや、刺のある矮竹の透間をやつとくぐりぬけ、半月形の段々に震ひわななく脚で立つたこと、又その脚下に冷く微笑をふくんでゐる一の死體を、殆んど一個の現實として知覺したことさへも、判然した印象に刻み殘されてゐる。

けれども其後、どれだけの時間がいかにして經過したかは知られてゐない。老侍女の一人が父からの使として、彼を呼びに來た時は、全然、石の上の石になりきつてゐた彼の耳近く、イムリー樹の乾反つた莢や病葉なぞが、夕風にわびしげな音を立てはじめてゐた。

父は母の房に來てゐて、そこへ悉達多を呼び入れたのであつた。悉達多は先づ、彼がこれまでもあの石段の上に、物を考へたりなんぞしたことがあるかどうかを、氣遣はしげに問ひ尋ねられた。ありの儘を答へると、父は母と顏を見合せ乍ら、『それなら、まあ、早く氣がついてよかつた』と言ひ、更に悉達多の方へ向き直つて言つた──

『あの扉口は方角が惡いから開けないんだよ。そしてあの石段の上は、耶摩の被使者の路筋になつてゐるんだからね。』

死神耶摩の被使者なる山鳩と梟とは、悉達多等も知つてゐる如く、何人の目にも見えないやうに、けれども一定の進路を飛び往き、とび返るのである。そしてこれに往き合つた不幸な人々へ、山鳩は眠られぬ夜の惡夢を與へ、梟は回復の望みなき病苦を與へるのである。

淨飯は彼の自分にふさはしい幾つもの瓔珞と共に、瓔珞の如く其太い頸の下に懸けてゐたところの象牙の小匣を取外し、それを悉達多の頭上にかざして目をつぶり乍ら、呪文のやうなものを三度ばかり唱へた。

『脚の方は母親がひとりで淨めてやるんだ。これを此處に置くから、

この水でね。』

護身符入れの小匣から、金箔に包んだアパーマールガ草の粉末を取り出し、それを波闍波提の前の卓に載せて置いて、淨飯は扉の外へ出て行つた。

アパーマールカ草の溶液で、死神耶摩の下方からの影響を拭ひ淨めてやり、履を手傳つて再び穿かせ乍ら、『悉達多、貴方はあの石段の上で、何を考へてゐたのです？』と波闍波提は問ひ尋ねた。

悉達多が彼の言葉を見出し得る前に第二の問は來た──

『近頃、何か頻りに考へ込んでゐるやうですね。どんな事をそんなに考へ込んでゐるのです？』

『どんな事と云つて、色々です。』

『夫人摩耶の事も考へますか？』

『ええ、折々は。』

『さうですか、矢張！』と言つて波闍波提は、對手の全體をやさしく吟味しようとするかの如く、彼女の上半身を心持うしろに引いた。『でも、近頃さう云ふ事を考へ込む、何か特別の──それや、貴方の本當の母上摩耶は貴方を産んだ本當の母上で、その貴方の本當の……』

『私の本當の母上は摩耶ではありません！』

悉達多は、斯う言ひ切つた後で、初めて其意味を意識した。

『え？　何ですつて？　悉達多。』

『私の本當の母上は貴女です、夫人波闍波提です…』

『まあ！』と呼んで、彼女は僅かに室の入口へ、不安らしい視線を送つただけで、そんな事をどうして知り得たかを、問ひ尋ねるほどの餘裕をさへ有たなかつた。

『近頃、チャンナから聞きました。でも、チャンナは私の爲めを思つて、私に迫られて、止むを得ず打ち明けたのです。氣毒なチャンナを咎めないで下さい。』

それから事情は詳しく敍べられ、今明らかになつてゐる秘密の殆んど悉くが再び語られた。語り殘されたのは、夫人摩耶の死を單なる過失であつたかの如く見せかけようと仕組んだ父淨飯の狂言だけである。

『チャンナが打ち明けたのに無理もありません』と波闍波提は矢張り口の方を氣にしつゝも、稍や落ちついた調子で言ひ出した。『私自身も、そんな場合に臨んだら、何時でももう本當をお話してしまふつもりでゐました。どの道、お話しないでは置かれない事ですもの。だけど、私の悉達多、私達二人の中のどちらかが病氣なんぞした時分には、隨分心細い事を考へました。本當の子であり、母であるといふことを知らさないでゐて、此儘、もしかして──』

彼女の過ぎ去つた幾年月の哀みは、今幸福な甘い涙となつて、悉達多の腕環の上にも、瓔珞の眞珠の上にもはら〲とこぼれた。此涙の漸く乾きはじめた時、彼女は斯うして二人の談り合つた顚末を、當分の內彼女の良人にも、チャンナにも打ち明けないで置かうと提議した。

それに反對すべき格別の理由を見出さない悉達多は、勿論反對しなかつた。たゞ一の秘密が取除かれた後に、ひとつの新しい秘密が巢をかけたことを思つて、何故ともなき嘆息を禁じ得なかつたゞけである。

やがて、料理番の頭をしてゐる一老女が、女主人の御指圖を仰ぎにやつて來て、彼女を外へ連れ去つたので、悉達多はそこに再び單だ一人になつた。

偖て今、彼の眞向ひに置かれてゐる金屬製の火皿へ、一の大きな蛾が飛んで來て、その羽で燈を消しさうにする。燈は消さるれ前に羽を燒かうとする。その燈であるか蛾であるか、それとも此刹那にも、不吉の石段の上を密かに往來してゐると云ふ山鴆又は梟であるか、何物かゞ一の執拗なる聲となつて、悉達多の胸の奧底まで忍び込んで來るのである――

悉達多よ、お前はお前が一番知りたがつてゐるところのものを、波闍波提に問ひ尋ねて見なかつた。その勇氣を有たないのだ。

お前の母は夫人摩耶の死が單なる過失でなかつたことを知らないでゐるだらうか？知つても彼女の心情は、どうしてそれに堪へ得たであらうか？

愛する者が、愛してゐるにもかかはらず、否、愛してゐる故にこそ、如何に問ふべきを問はず、答ふべきを答へないか、如何に眞實を包み匿して虛僞を語るかを、悉達多よ、お前も追々に學び知るだらう。外見と眞相とが如何に距つてゐるかを想ひ見よ。そしてお前が今眞相と信じてゐるもの悉くが、また單なる外見たるに過ぎなかつたとしたならば！

二

耕田祭は釋迦族の貴族等にとつて、最も愉快な祝祭の一であつた。その時婦人達は勿論、年寄や子供達と家に殘つてゐて、彼等に似つかはしい遊戲や娛樂や御馳走を享樂するといふだけの事であるが、成年の男子等は市城內の遊女や演藝者などを出來るだけ多勢引きつれて、それぞれの莊園へ、私有農場へ出掛けてゆく。そして朝の內に、申譯ばかりの祭式を濟ましたあとは、豫め農奴等に作らせて置いた假小舍の中で、其日が暮れて其夜の明けるまで、あらゆる無禮講の宴

樂をほしいまゝにするのを常とする。

十六歳になつた悉達多は、今年初めて斯うした亂痴氣騷ぎを、ビンカーロの農場に於て見たのである。

幔幕と幔幕との間から、外の薄ら明りがさし込んで、蠋涙の一杯に垂れてゐる樹脂燭の光と混り合ふ頃になると、流石宴樂の勇者等も、その最後の一人に至るまで倒れてしまつた。

斯うなつてからは、一層眠れないだらうことを想像した悉達多は、徐かに起ち上つて假小舍の外へ出た。

そこには、大小五六個の俄造りの石の竈にも火の氣がなくなり、ぬるみかかつた釜なぞから僅かに湯氣が立ちのぼつてゐる。餘りにも長時間に亘る宴飲者達への奉仕から、へとへとになつて、男女十人餘りの農奴等が、手當り次第のさまざまな物を枕に、地面の上へ轉がつてゐる。

新しく取り擴げられた道路に氣の乘らなかつた悉達多は、有明月のちら〱流れてゐる溝川のほとりの草深い徑を、何處へともなくぶらぶらと歩つて行つた。

厚い泥壁の上に、竹と棕梠の葉とで屋根を葺いた小屋が、二十個ばかりも群がつてゐる處を通りぬけ乍ら、悉達多は前の日馬車の中で、父達の口から聞いたところの言葉を想ひ起した。丁度斯う云ふ農奴の住居を指さして、淨飯は面白さうに言つたものである——

『悉達多よ、あの燕共の巣を見るがよい。あゝして巣を出たり入つたりし乍ら、矢張雛を育ててゐるのだ。但だ、あいつ等の羽がちと穢いのと、あれで飛べないのとが物足りないと云ふものかな……』

『でも、執政よ、又公子よ』と、自ら風流人を以て任じてゐる一人の執事が呼びかけた。『あの屋根に南瓜の花が咲いたり、瓢の小さいのがぶら下つたりしてゐるのは、執政館の後園なぞにも、到底見出せないやうな趣きがございますよ。』

今一人の執事も、全く沒趣味だと思はれまい爲めに仲間へはいつた。『趣きがあると云へば、あの燕の巣から朝餉の煙を細々と立ててゐるのも、一寸興のあるものではございませんか？ そして煙のあがつてゐない處では、あゝして子供が泣きしきつたり、親達が罵り合つたりして居ります。畢竟、目で娯ませる代りに、耳で興がらせるといふ奴ですな。』

それらの對話を想ひ起して、悉達多は覺えずその顏を赤らめた。それには、何かしら一種の冒瀆的なものがあるやうに感じられたからである。

稍や歩き疲れた悉達多が、とある閻浮樹の葉蔭に腰を下ろして、爽かな緑の氣息に吹かれてゐた間に、一人の耕作者が、角の折れた犢

借の牛をひきながら何處からかやつて來て、近くの土地を鋤きかへし始めた。

祭田や宴樂場の直ぐ傍の農奴等は、今日も跡片附なり何なりを課せられるであらうから、これは恐らく別部落の農奴か、でなければ日傭の耕作者かであらう。いづれにしても、市城近くの自由農民なぞに比べて、一段とまた貧しく、みじめに生活してゐるもののやうに見える。

昨日、祭式僧としてのサバミッタが、二口三口高らかに咒文を唱へた後、腰鼓や、鐃鈸や、法螺の貝なぞの賑かな奏樂と共に、農場主浄飯は、角や軛を金色に塗られた耕牛で、執事等は角だけを銀色に塗られた耕牛で、祭田の軟かな土をあちらへ、又こちらへと鋤き返しながら、見物もろともに笑ひさざめいたことを、妙に擽ぐつたいやうな心持で思ひ浮べた。悉達多は、今眼前に祝祭の爲めでも娛樂の爲めでもなく、ただのつぴきならぬ生活の爲めにのみなされるところの本當の耕作が、特別の注意と觀察とを値してゐるやうに思はれた。

次第に地平線から離れて來た太陽の光を、折々鋭く照りかへす犂頭は、雜草の根の如く眠りつづけてゐた蟲けらの頭を切り、足を斷ち、全身をさへ潰してしまふ。幸にしてそれを免れた生物等も、掘り起されるや否や、其處に待ち受けてゐる小鳥共の餌食になつてしまふ。しかも此小鳥共の上に落して來る鷲や、鷹や、とり分け禿鷹のやうな猛禽が、次ぎの刹那に、あの蒼空に輪を畫きはじめないとはどうして云へやうか？

更に、犂頭で無慈悲にも蟲けらを傷めてゆく耕牛は、ああして殆んど絶間なく鞭打たれてゐる。しかも、牛より以上にさへ骨立つたかの老農夫にまで、つねに過度の勞役を强ひたり、其勞役の成果を悉く搾り取つてゐるのは、嗚呼そも〳〵何者であるか？

此當面の觀察に關聯して、悉達多は昨夜無禮講の進行中に見たところの一の事を、今一度思ひ浮べないではゐられなかつた。

所謂『テイムバル果の如く圓らかに豐かなる胸もてる』十二人の遊女達は、初めの内宴飲者一同を平等に醉はせてゐた。けれども、偶々催された配偶者撰擇の戯は、有力な十二人の酩酊者等をして、彼女等をそれぞれ完全に占有することの機會を得しめてしまつた。

あとの二十人ばかりの男子等の爲めに、近くの農奴部落から、うら若い處女と人妻とが徵發されて來た。しかし其數の不足が、結局また四五人の男子等に貧乏籤を引かしたので、新しい不滿とごた〳〵とが起らざるを得なかつた。

加之、徵發されて來た女等が、あらゆる誘惑と威嚇とにもかかはらず流石に其凌辱に目をつぶりかねて逃げ去つたとき、混亂はいよい

よ甚しくなつて來た。

先づ逃亡者に對する復讐手段がつぎ〳〵に提議された。或る者は、彼女等の父や良人に下附されるであらう慰勞の酒肴料を、全部横取りしてやらうと言つた。或る者は、彼女等の小屋の敷藁の下に隱匿されてゐる蜀黍の粉と種油とを、片端から沒收してやらねばならぬと絶叫した。更に或る者は、もはや手段の如何な問ふほど寛大になれるものでないと言ひ乍ら、仲間の手溫さを憤つた。

その内に誰からともなく、かの貧乏籤を引いた四五人の男子等が、逃亡者の逃亡を手傳つたのだといふ疑をかけられた。

遊女の占有者等は、この弱者同志の爭を面白がつて、盃を高くさし上げたり、酒瓶を打ち叩いたりしながら嗾けた。しかも爭が餘りに嵩じて、彼等自身の興を殺ぐほどにまで燃え立つて來た時は、忽ち威嚇の冷水をぶつかけて、一氣に火を消してしまつたのである。

『悉達多、お前はここにゐたのか？』と呼びかけられた悉達多がふり返つて見ると、父淨飯が執事の一人と傍に立つてゐる。

『何をしてゐたのだ？ 農夫の耕す處をはじめて見たといふのでもあるまい？』

『本當に見たのは、初めてのやうな氣がします。』

『兎に角、お前が斯う云ふ事に興味を有ち出したのはいい。どうだ、面白い物だらう？』

『面白いと云つていいかどうか分りませんが、見てゐると、あゝして澤山の蟲けらなぞが、犂頭で切られたり潰されたりしてゆきます。そして……』

『そして、どうなんだ？』

『そして他の奴も小鳥の餌食になつてしまひます。』

『それやさうだ。』

『處で、あの小鳥も、鷲や鷹や禿鷹なぞに見付かつたら、それきりではありませんか！』

『それは當然の事さ』と言つて淨飯は笑つた。

『しかも一方では、犂頭で蟲けらを傷つけるのはあの痩牛で、その痩牛を虐げるのは農夫ですが、あのよぼ〳〵の農夫を、無理やりにでも働かせてゐるのは、結局、私達、斯うして遊んでゐる人間ではないでせうか？』

『うむ、さうか』と半ば獨白の如く淨飯は言つた、『つまり、悉達多も弱肉强食といふ世相の實際を會得するやうになつたんだな。』

『斯う云ふのは、どうすることも出來ないものなのでせうか？』

『先づ出來ないものと定つてゐるね。だから此釋迦族にしても、我々が外交上の巧妙な掛引で、强大な隣國から呑み盡されないやうにして

ゐるとは云ひ條、全くは、小國ながらも釋迦族は武勇にして侮り難いとさう思はれてゐるからこそ、立つて行くことが出來るのだ。』

父は此機會に於て、近頃武藝の學習を怠け出してゐる我が子を、存分たしなめてやらうと考へた。けれども悉達多の言葉は、自からにして前を越してしまつたのである――

『でも、いくら武藝を練つて見たところで、他にもつと武勇を練つた、もつと强い奴が出て來れば、なんにもならないではありませんか？』

『それで、それで悉達多、お前は努力して强者にならうとは考へないのだね？』

『勿論私も、出來るだけの强者になりたいとは思ひます。但だ、負けた者も勝つた者を怨まず、征服された者も征服した者と同樣幸福になることは出來ないか知らと、その事を問題にしてゐるのです！』

『釋迦族の刹帝利種として、特に獅子頰の子孫として生れて來た者は、さう云ふ風に考へるべきではない。それは自分で自分の幸福を擲つやうなものだからな。』

斯う言ひながら、八十餘年前、最も偉大なる占星學者デエーラのなしたる豫言――卽ち、獅子頰の子孫から、他日轉輪聖王か大聖者かが現れるであらうと云ふ豫言を、またもや思ひ起してゐたのは勿論である。

『父上は、幸福を唯だ一種類の物だと御考へになりますか』と悉達多が尋ねた。

『唯だ一種類の？』と一寸考へたあとで淨飯が答へた、『いや、天上界に生れる幸福と云ふやうなことも、勿論私は考へてゐる。そしてそれを獲る爲めの手段についても、それほど無頓着ではないつもりだ。』

『天上界の幸福も決して無限に永續しないといふこと、さう云ふことも御考へになりますか？』

『理窟好きな閑人達が近頃ふり廻してゐる、輪廻だとか、業だとかいふやうな話だね。さう云ふ話も、理窟としては聞かされたこともあるやうだな。』

『では、ナチケータスの物語も御存じですか？』

『それは何をした漢だ？』

『ナチケータスは、死神耶摩の處へ降つて行つて、耶摩の支配の屆かない、不死の世界についての秘密を敎はつたのです。永久に盡きることのない幸福、生天以上の、無上の幸福への道を敎はつて來たのです。』

『さう云ふ話なら、聞いたかも知れないし、聞かなかつたかも知れない』と言つて、淨飯は挑戰的にせせら笑つた、『だが、どちらにしても、まあ同じだよ。私には結局興味のない事だからな。そして、いく

ら興味をもつてゐると云ふお前達にした處で、さう云ふ話の本當の意味が解るわけではなからう？ それとも解ると云ふのかね？』

『私なぞにはまだ、殆んど全く意味が解らないのです。』

『さうだらうとも。それを教へるバッダラニだつても怪しいものだ。いくら彼奴が、全然解つたやうな顏をして見せたつて！』

『バッダラニも全然解つたやうな顏をして見せるのではありません。自分でも、十分には解らないと言つてゐるのです。』

『何だと！ 自分でも十分には解らないと言つてゐる！ ぢや、それでゐてどうして、自分にも解らないやうな事を、どうしてそんなにも熱心に教へたがるのだ？ 實際あの賭博狂は、碌でもない事ばかり教へたがる奴だ！ 私の寛大さに附け上るのも程々にするが可い！』

『折角、御話の御中端ではございますが、執政も、公子も、ぼつく御歩行になり乍ら、御話を御續けになつてはいかがでございませう。皆の者も、隨分お待ちしてゐることと思ひますので。』

執事の此言葉をきつかけに、ともかくも父子の對話は別種の題目に移つて行つた。

偖て、其日の内に迦毗羅衛城へ歸つて、翌日の事である。バッダラニも講義を休み、二三日前から加減を惡くしてゐると云ふ優陀夷もやつて來ないので、悉達多は朝の中から單だ一人で、チァンドタールの湖のむかうの、カピラの森へ出かけて行つた。

機會さへあれば、あの森丘へ出かけて行つて、カピラ仙人はカピラ派の人達が、吠陀の教權と婆羅門種の思想家的優越とを否認しながら、自由の思索に耽つたと傳へられる閑淨處に、バッダラニ其他から學び知つたところの物を、反芻し、また反芻し、更に反芻して見ると云ふのは、この頃の悉達多の最も幸福な習慣の一であつたからである。

いつもの如く市城の南門を出て、湖尻の放水路を渉り、舍衞城方面への廣い街道を、少しばかり行つた所で右に折れた悉達多が、森丘の西側のゆるやかな傾斜面を上り始めようとしてゐた時、彼は突然、『公子達悉多！ 公子悉達多！』と呼びかける聲に驚かされた。

『斯う云ふ恰好で御挨拶する、私の失禮を許して下さい』と言ひ乍ら、傍の汚らなしい牛車の幌から、意外にもバッダラニが、その無精者らしい螺頭巾をのぞけてゐるのである。『お暇乞をする爲めに來てゐるのですけれど、もう、ここいらに姿を現すことが出來なくなつてゐるのです。』

『お暇乞をする？ そして、もう姿を現すことが出來ない？』

バッダラニは昨夜おそく、サバミッタを通して學問師罷免を傳へら

れ、公子悉達多との訣別なしに、即刻立ち去るべきことを命じられた。

其命令にもかかはらず、又ぐづ〳〵してゐて債權者達に捕り、一角銅貨の旅費をもあまさず剝ぎ取られるかも知れないと云ふ危險にもかかはらず、彼は矢張公子へのお暇乞なしに出立するといふことを爲し得なかつた。そこで南方吠舍離の市へと志しつつも、今朝早々正反對の、舍衛城方面への街道に牛車を驅り、この森蔭へこつそり隱れて、面倒な追跡者達を巧みにやり過ごし乍ら、十中の八九までやつて來るであらうところの公子を、今迄首を長くして待つてゐたのである。

『さうか！　とうと然う云ふ事になつたのか！』と悉達多は、殆んど自分自身への如く言つた。

『しかし、實を云ふと、もう此上お教へする事も、餘り多くは殘つてゐませんし、どのみち遠からず御別れしなければならなくなつてゐたものです。』

『でも、私の波羅門師よ、貴方を逐つたあとに、貴方以上の師を迎へることが、どうして出來ませう？』

『さうまで思つて下さること、思つて下すつたことの嬉しさは、永久に忘れないでせう。私のやうな、謂はば全然持崩してしまつた人間を、人間の屑を！』と言ひさして、博學な賭博者は、彼に特有な感激からもう涙聲になつて來た。『公子の學問師として過ごした此五年間だけが、私にとつて本當に生甲斐のあるものでした。そして公子御自身の希なる天分を公子の面前に嘆賞するといふ厚がましさをも、斯う云ふ場合甘んじて犯しませう。あの有名なデエーラの豫言といふものを思ひ浮べずにゐられないほどの、聰明其物の如き公子を、我が敎子と呼び得たことの光榮は、嗚呼、このすばらしい光榮は！　だが、公子よ、それにしては此バッダラニは、餘りに僅かな知識しか有つてゐませんでした。いや、それよりも悪いのは、その僅かな知識をさへ實行しようとしなかつたことです。知つてゐて、實行しない――私にとつても何人にとつても、これより醜い、これより恥づべき事があり得るでせうか！　こんな、最も恥づべき私をも、私をも――』

何時の間にか幌の外へ上半身を乘出してゐた彼は、例の如く彼自身の言葉に煽り立てられて、遂にその上を語り續けることが出來ない處まで來てしまつた。平生ならば幾分批評的に、冷靜に聽かざるを得なくなる、仔狗のやうな彼の啜泣きへも、今日は不思議に共鳴してしまつて、悉達多は兩手で轅につかまり乍ら、後からあとから迸り出る涙を、足下の熱砂の上に注いでゐた。

『あッ！　あの馬車は！』と、抑へつけられた涙聲の儘でバッダラ

は叫んだ。『公子よ、貴方の良い目でたしかめて見て下さい。あれが「鳥目の鳥屋」か、それとも他の奴か？』

悉達多は涙を拭つた右手の甲で、その儘眉庇を作り乍ら、五百歩ばかり向うの街道を舍城衞の方へ走らせてゐる二頭立の馬車を吟味した。

『あの親爺のやうではあるが、しかし、あんなに猫背だつたか知ら？』

『たしかに彼奴ですよ。あいつはけちん坊で、鳥目で、猫撫聲で、そして甚い猫背です。だが、とにかく、私にとつて虎よりも恐るべきあの債權者をやり過ごしてしまへば、公子よ、これが愈々の御別れです。』

それから彼は牛車から跳び出して、かたへの小溝に兩脚を冷しながら、正體もなく眠りこけてゐる彼の馭者を搖り起した。

色のどす黒い痩つぽちの馭者が、その目脂をこすり乍ら脚を引き出すと、夥しい條蟲が總狀に吸ひついてゐるのを公子は見た。そして慌しい心持の間にも、こんな人間からさへ矢張血が吸はれねばならないことの免れ難さと、こんな無力な味方に運命を托せねばならない者のみじめさとを考へた。

『さあ、起きた、起きた！　此機をはづさず、一帳場走らせて貰はうぜ。これでバーヴ邊まで無事に落ちのびたら、それから先きは、どうにかまあ、こつちの物になりさうだからね』と言ひながら、バッダラニは自分で自分を憫むやうな、寂しい微笑だけを公子の方へふり向けた。『なにしろ、追手は馬車で、こちらは上等の牛車と來てゐるんだから、一寸ばかり智慧でもしぼらなくちや、立ち打ちが出來ないと云ふわけさ。』

作者附言

はやくからフローベールの『サランボウ』や、メレジュコフスキーの『三部作』なぞに、制へきれない競爭心を徴發されて來た私は、既に十年近い以前に於て、この『釋迦傳』の創作計畫を立て、ぼつぼつとその準備をやり出してゐた。しかし、またしても「文壇から葬られ」ることの一時的不利益を冒險しながら（これまで既に、幾たび「文壇から葬られ」たことだらう！）、ヂャーナリステイツタな剩餘一切の執筆から遠ざかり、文字通り此藝術的宗教的事業に、沒頭しはじめたのは、一昨年二月以來のことである。

こゝに發表した『小公子』は、原稿紙凡そ千枚餘りで、完結する全作品の第一部たるに過ぎないのではあるが、尙ほ且つこれだけ切りはなしても、讀物としての一應の纏りをも持つてゐるし、又全主題に對する、少くとも私の態度を、私の取扱ひ方を一通り示してゐて、深切な批評家諸君の御高教を煩はすに足りるものもあるかと思ふ。

歴史小説の本質意義等に對する私の美學上の見解は、『藝術的歴史と歴史的藝術と』（一九二五年三月號『新潮所載』）に、かなり詳しく、述

べてゐるのだが、あれから少しばかり引用させて頂くのは、この場合に甚だ有用なことであるかも知れない――

「歴史物は歴史に卽くことを便利とする限りに於て、歴史に卽き、歴史から離れることを必要とする限りに於て、歴史から離れるところの藝術であり、必ずしも歴史的現實と共に終始しなければならないやうなものではない。

しかし乍ら、折角歴史に題材をとり乍ら、餘りにも史實を無視した場合は、何の爲にわざわざ歴史物を書いたかが分らないのみならず、なまなかな歴史的固有名詞等が、滑稽な感じを起させ、その作品を歴史物としてゞなく、一般的創作として見る上にも、非常に不利益なる影響を及ぼすのである。

又、事實は小說よりも小說的であると云ふ言葉にも示されてゐる如く、一見使ひ途のなささうな、或は寧ろ邪魔になりさうな歴史的現實も、より念入りに、より深く考へなほして見た場合、以外に有用な、少くとも決して抹殺するを要しない程度のものであることが、屢々明かになつて來る。されば歴史物を書く人たちが、餘りにも性急に史實を離れてしまふのは決して賢いやり方とは云はれない。」

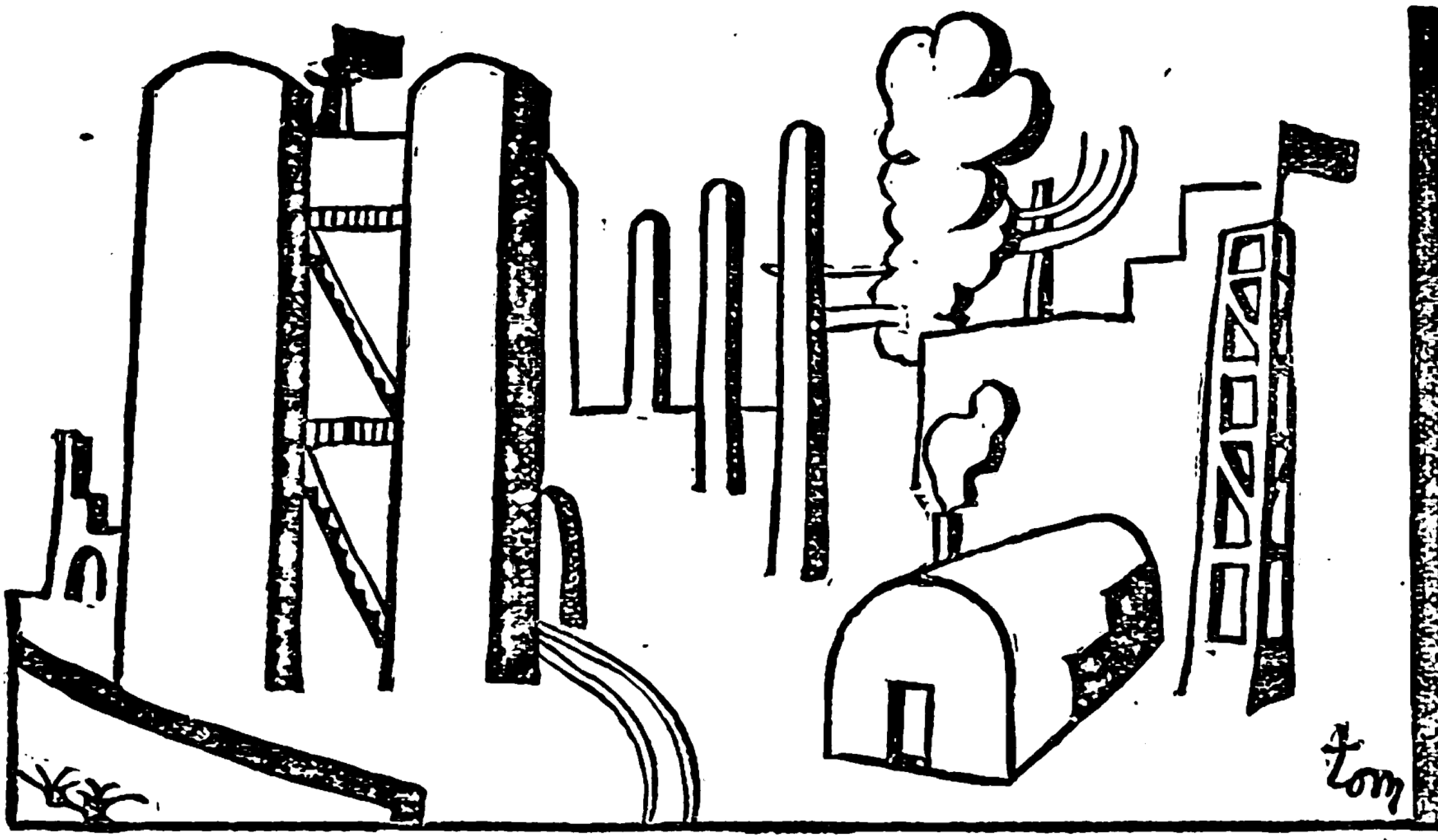
「史實の細目をどの程度まで保存すべきか、或は省略すべきかについて云へば、藝術的歴史家は、飽くまでも歴史的現實を追求することによつてのみ、眞實性を掴まうとする立場にあるが故に、如何なる細目的なる史實と雖も、それが全體現實の渾然性を傷けない限り、なるべくそれを、保存するやうにと心掛けなければなるまい。

これに對して、歴史物の作者は、歴史的現實その物をそれ程重要視すべき立場に居らず、又從つて歴史的現實の追求に主力を傾倒しようとして居らぬ故、當面の作意を展開する上に、必要でない限り、史實の細目は成るべく省略してしまつて差し支へないと思ふ。

最後に史實の外なる藝術的虛構が如何なる程度にまで許されるかに就いて云へば、藝術的歴史の場合は、何よりも先づ現實感を尊重するのであるからして、色々の『有り得べき』想像の中、最も『有りさう』に見える所の物を取つて他を捨てなければならぬ。之に對して歴史物の場合は、現實を通過しないで、直接眞實への道を急ぐことを妨げないのであるからして、最も『有りさうな』想像の中に極限されてゐるに及ばないのは勿論、その虛僞が、聊かも『有りさう』に思はれることをさへ要しないのである。そして苟しくも『有り得べき』事に思はれる限り、換言すれば、史實との關係に於て滑稽に、馬鹿々々しく感じられることのない限り、どんなに自由などんなに奔放なる虛構をなすことをも、充分に許されるのである。」

――偖て釋尊傳の所謂史實的材料等に關して、兎角の御教示を垂れて下さる方々は、どうか少くともオルデンベルグ、リス・デヸッヅ以來今日に至るまでの研究に、大體御目を御通しになつた上の事にして頂きたい。

又、マルクス派の似而非科學横行の昨今故、特に云ふのであるが、古代印度の經濟組織社會制度等に關するマルクス派學者等の宣傳的記述なぞは、殆んど出鱈目なものばかりである。それ等の大小パンフレット的知識を鵜呑にしてゐて、この「小公子」の史實的方面を云々するごときことは前以つて堅く御斷りして置く。



ヘンリ・フォード（六幕十場）

前田河廣一郎

時　現代

處　アメリカ

人（登場順）

鍛冶屋（ケネー）
八百屋（ステーヴ）
隣りの男A（ゼンクス）
隣りの男B（アダムス）
隣りの女（A、B、C）
ヘンリ・フォード
クララ・フォード（夫人）
市民、一から十三まで
審判官
新聞記者（二三人）及び寫眞班
マルカム
會計係長エッド

銀行家ノルトン
法律家ヤコブ
ドッヂ
勞働者(多數)
會計次長アイサック
守衛(五六人)
電報配達小僧
事務員ケーシー
組長
工場スパイ
紳士(一、二、三)
監督ジョオ
失業鬪爭大會の代表
『肩』の男(四五人)
『背』の男(同)
『手』の男(同)
片眼の男
片手の男

その他不具者、群集等。

第一幕

フォードの若かつた時分

ヘンリ・フォードの借家の裏手にあたる、粗末な細工小舍である。

舞臺中央やゝ右寄に、古煉瓦の長方形な小舍が横はる。小舍の前方は露地。小舍の一角へ電線が曳いてある。それは右隅の上空から出てゐる。電線の出發點は、フォードの住宅。そこにはたゞ四段の臺所口への斜な階段だけしか見えない。小舍の黑い扉には、白墨で、車輪が一つ描いてあり、そのわきへ

『この中にキ印あり、御用心!』

などと落書してある。

小舍の角が急に折れ曲がつたところも露地であつて、舞臺奧へ通じてゐる。

その露地を挾んで、斜めに、一聯の木造二階建の借家の裏口が見える。但し、夜、雨のさ中なので、全體がもうろうとしてゐる。それらの家から露地への出口は、低い塀になつてゐる。ところどころに、氣の拔けた電燈を支へた柱が立つてゐる。

四月——雨の音。

小舍から、細々と電燈の光が洩れる。かすかに鋲を打つ音。

舞臺は暫らく空虚である。

突然、けたたましいガソリンの爆音が、小舍の內部から迸發す

と、しんかんとした近隣から小舍の扉をめがけて、古靴やらブリキ罐やらが、一齊に投げつけられる。

聲　やかましいッ！

ガソリンの音消える。赤ん坊の泣き聲。鍛冶屋と八百屋二人、右からよろけ出て、小舍の手前で蹣跟と踏み留まる。醉つてゐる。

ガソリンの爆音つゞく。

八百屋　おい。(對手にむかつて、こめかみの邊で指をくるくる廻はして見せながら)やつてるぜ、キ印先生。——

鍛冶屋（扉を指さし）覗いて見な。

八百屋、小舍の內部を窺ふ。ガソリンの音にはぢかれたやうに飛び退く。鍛冶屋、これに代る。二人、重なり合ふやうにして、扉の隙を覗く。やがて、舞臺前方へ來て、怺えきれぬ樣子で笑ふ。

鍛冶屋（よろめきよろめき、手眞似にて、小型のガソリン內燃自動車の恰好を表現する）おい、これだ。——車、臺、腰掛、梶がねえ、馬がゐねえ、前の方にピカピカッとした棒が二本、板。……あんなマッチ箱が走つて堪るもんかい！（笑ふ）

八百屋　あのけつたいな代物が走るんなら、俺樣へもう一パイントだけウイスキーを飮ませりや、もつと走つて見せるぞ。

鍛冶屋　面白れえ。お前一つあのキ印車になれ。これから、も一度、オブラインの酒場をたゝき起こして、今夜は飮み明かしぢや。

無理矢理對手を地べたへ匍伏させて、それに馬乘りに乘る。

小舍から、前よりも激しいガソリンの爆音。

八百屋　それ、馬なし馬車だ、動くぞ、動くぞッ！　フォード樣の御通りぢや！（自分で自分の尻を引ッぱたく）ぶう、ぶう、ぶか、ぶか、ばん、ばん、ばん——！

近隣から、醉漢達の頭上へ、箒の柄やら、古靴やら、スリッパーの毀はれなどがばらばらとおりつけられる。

隣りの男A、塀から上半身を露はして、二人の方へしきりに拳を揮つておどかす。

隣りの男A　やい、氣狂ひヘンリ、神樣はな、夜を休むために御拵へになつたんだぞ！　明日の仕事をひかへてる俺達を何だと思つてやがる！（醉漢二人をすかし見て）なアーンだ、お前達は、横丁の鍛冶屋に、八百屋のステーヴぢやねえのか？

鍛冶屋　ああ痛い。このブリキ罐をぶつつけのは、お前さんか？

八百屋　俺らは、これから、キ印車で、オブラインのとこまで一伸し伸すところなんだ。

隣りの男A　馬鹿々々しい。醉拂ひはしようねえもんだな。立てよ、

その服を見ろ、泥んこになつてるぜ。ステーヴどん、お前、明日アまた、嬶にどやされて、店の隅で震ひ上がつてるんだろ。——早く歸へつて寢るがいいよ。惡いことは云はねえ、人間は當り前にさへやつてりや怪我はないぜ。

鍛冶屋　やい、ゼンクス爺、いつからお前は說敎師になつたんだい？　この自由なアメリカで、俺らが何をしようと、お前に文句を云はれる筋はねえや。

隣りの男A　鍛冶屋も醉ふと、鞴が荒らいな。さては、何だね、お前、商賣柄そこの小舍ん中を覗き見に來たんだね？　特許とやらを狙つて？

鍛冶屋　馬鹿抜かせ。俺だつて、イーグル鐵工場で外國製のガス內燃機關車つていのは見てゐらア——こんな代物と作りがちがはア。

八百屋　だからよ、あの車が獨りで走るなら、俺の方がよつぽど速からうツて、かうやつてるところなんだ。——爺、引込め！

隣りの男A　いや、どうも、どちらを向いても正氣の沙汰ぢやねえ。お前さん方は、ジヤウジ・ワシントンを知つてゐるかね……？

鍛冶屋　やかましいや！　時に、ステーヴ式ウイスキー內燃機關も大部濡れたな。どれ、又、古靴やブリキ罐の降つて來ねえ內に、仲よく一杯やつて來よう。（二人腕を組んで、鼻唄まじりに、もと來た方へ引返へす）

鷄が啼く。隣りの男Aも、顏を引込める。

時計が四つ鳴る。つゞいて、もう一軒の隣家の時計も。

小舍の扉、突然、外部へ向つて開かれる。ヘンリ・フォード、作業服をつけ、滿身油だらけになつて、小舍から飛び出す。瘦せて、長髮の、眼の大きい、骨つぽい體格。緊張してゐる。

フォード（右手の階段を大股に跨いで、ドアをノックする）クララ　クララ——おう、クララツ！（內部に女の聲）ちよつと出て來ねえか！

フォード夫人（上半身をあらはし）はい、珈琲。——寒いでせう？

フォード（夢中で珈琲を啜りながら）み、見ろ。——出來た、動く、走るぜ、嬉しいな！

フォード夫人　えツ、もう、出來上がつて？（一寸顏を出して）まあ、降つてるのね？　貴方、風邪を引くと大變ですよ。隨分ひどい風邪がはやるんですつて——。

フォード（珈琲のカツプと皿を手渡し）——二年かかつた。どうしても、俺には、モータアに重みをつけずに、あの熱を防ぐ工風がつかなかつたんだ。オツトオ・エンジンなんと來たら、大道へめり込んでしまふんだからな。あんな重いもんなら、誰でも出來るさ。軽ろく

て、道をブチ毀はさずに、速力が出て、原料の安いもんでなけりや、鐵道の機關車を持つて來たつていいわけだ。

フォード夫人、傘を持つて出て來る。二人小舍の中へ這入る。小舍の内部には小さな鍛冶場が出來てゐて、各種の道具が散らばつてゐる。鐵板、自轉車の古物など。

フォード（滿足さうに、一臺の無蓋車の周圍を歩るき廻はる）これで四馬力から出るんだぜ。モータアも熱くなる筈よ。そら、ごらん、ここへ水のタンクを据ゑつけてさ、ジヤケツがここにあつて、熱をさます仕組になるんぢや。この腰掛の下にア、三ガロンからのガソリンが這入つてるんだぜ。そら、擡げて見たつて、こんなに輕るいや！

（作者註。このフォードの最初に拵へたモデル自動車は、現在フオード自動車會社の寶物として博物館に陳列されてあるが、今日から見ると、頗る頓狂な自動車の原型で、操縱輪はなくレバア狀の棒でスタートさせる仕組になつてゐる。ニューマテツク・タイヤーも發明されてゐない時代なので、四の車輪には自轉車のゴム・タイヤーが使つてある）。

フォード夫人　まあ、嬉しいわね。たうとう出來上がりましたのね。いつか、貴方があたしの樂譜の裏へ、やはりこんな圖を描いてお見せになつたでせう、あの時から、あたしきつと仰曰るとほりの物が出來ると思つてゐましたの。――長い、長い間の苦心でしたわね。月給といふ月給は、みなこのために注ぎこみ……

フォード　お前も新しいドレス一つ買はずに良くやつて來たよ。――それで足らずに、親父どんからは金をせびつて來たり。クララ、濟まなかつたのう、ほんとに！

フォード夫人（氣持を變へて）でも、これ動くんでせうか、ほんとに？いくらか、速力が出るの？

フォード　さあ、これからが試運轉だ。お前、乘らねえか、腰掛は二人分になつてるんだ。表へ引張り出さう。

フォード夫人（些か躊躇）でも、こんなに降つてるんですもの。

小間。

フォード　クララ・ブライヤント・フォードよ、お前、この邊の馬鹿者と同じ氣持でゐるんぢやあるめえな？――俺のやることを疑ぐつたりして？

フォード夫人（泣きじやくつて良人へしがみつく）ヘンリ、そんな、そんなことないわ。――あたしは、嬉しいんです。貴方の欣びを分けるものは、世間にはあたし一人ぢやありませんの？……貴方と結婚してから、ちやうど今月で五年になりますわ、あたしは何のた

めに田舍を捨て、父を捨て、このデトロイトの人氣の惡るい町で、近所の人達に馬鹿にされてまで貧乏と闘つて來たんでせう！……つらい、暗らい五年間でした！

フォード（氣を取りなほし）無理もないサ。お前は見てるがいいよ。さあ、これから、この横丁を出て表通りを一廻りして歸へつて來るぜ。（車を臺からおろす）そら、赤ちやん、あんよは上手だ！（乘る。直ちに轟然とした機關の響とガソリンの音）あとからついて來な。

フォード夫人　貴方、雨具は……。

フォード（車を飛ばして）何、そんなところぢやない。（車急に留まる）あツ、又、故障かい？（失望の面持で下車する）なんだ、このナツトが外れただけだ。どうもそんなわけはねえと思つたよ。ちよつとそこのマンキー・レンチを貸してくんな。（夫人差出す）

フォード夫人　でも、こんな雨の中ぢや、その車に幌をつけないとね。

フォード（修繕しながら）なに、こりや、お前雛型だよ。本物は、まだまだ改良しなけりや。モータアだつてこんなに重くては駄目さ。何かから輕金屬でな、せめて、鐵の輕るい奴があるといいんだが。まア、それも追ひ追ひだ。すべて物事ア、急がうと思へばしつくりと考へこんでからでないとな、甘く行かんて！（乘る）どれ、一と走り。（スタートする）

フォード夫人　あれ、危いツ！（フォードと車、忽ち露地へ切れ込んで、姿を消す。爆音はるかに遠くなる）まあ、氣の長い人だわね。（嘆息）いつあんなのが商賣になるんでせう？（續いて、傘をさしながら跡を追ふ）

隣家の二三軒へ、あかりがつく。赤ん坊の泣き聲。窓やドアを開ける音がする。

『何だ、何だ？』『どこか遠くの方ですよ。』などといふ人聲。

隣りの男A（傘をさして塀のところへ出て來る）ああ、わしは、このデトロイト市のバグレイ・アヴェニユーを、明日とは云はず、今日中に引越して見せるぞ！

隣りの男B（蔭から）ゼンクスさん、ありや何ですね？

隣りの男A　氣狂ひフォードですよ。

隣りの女B（蔭から）でも、どこかずうつと向うの方で音がしましたよ。

隣りの女C（蔭から）いいえ、そこの小舍から走つて行つたんですよ。

隣りの女A（防水マントを被つて塀から半身だけ露はす）なんとかな

らたいもんかね、貴方、警察へ訴へるとか——？

隣りの男B（堪らずに出て來る）どうも、かう夜つぴてばんばんやらかされた日にア、どつちが氣狂ひだかわからなくなりますな——。だから、世の中は、自轉車で澤山だと云ふんだ。

隣りの男A　あんたの御商賣にア、仇ですよ、これは！　どうも、かう人間は眠いと、なほのこと腹が立ちますな。

隣りの女B（顔だけ出す）さうですよ。うちぢや、赤ん坊がずうつと泣きどほしなんですもの。

隣りの男B　ひとつ、皆でこれから抗議を申込んでやりませう。フォードが引越すか、こつちとらが出て行くか、今日といふ今日は手ひどく捻ぢ込んでやらうぢやありませんか？

隣りの女A　それがよござんすわ。もう、あたしんとこでも、古靴や空罐のたねがつきてしまひましたよ。（笑ふ）

隣りの女B　ほんとにね、あたしんとこでもさうなんですの。（笑ふ）

隣りの男B　いや、冗談ぢやない。安眠妨害ですよ。立派な違警罪です。

先刻の醉漢二人、今度は鍛冶屋が自動車になりながら、右からよろよろと登場する。ガソリンの口眞似。

鍛冶屋　おや、工場が開いてる。（立ち上がる）

八百屋　車はどうした？

隣りの男A　まだ、あの二人はぶらついてやがる！　よう、鍛冶屋ケネーと、ステーヴどん、お早う！　今朝は、馬鹿に御精が出やすな。

鍛冶屋（哄笑）や、今日は。あんたは、ゼンクス爺さん、待てよ、わしの頭が狂つてゐないとすると、確か、あんたは昨晩からそこに立つて居られやしたつけな？

八百屋　それ、それ。ジョージ・ワシントンの御説教で、わしらは昨晩あんたと御別れした筈だつけ。

隣りの男B　いい氣なもんだね。どうです、八百屋さん、ウイスキーを鱈腹つめて、この雨を喰らつて歩るいたら、腹ん中で、いい加減なハイボールが出來さうなもんぢやないかね？

隣りの男A　いや、この二人も、氣狂ひフォードに騙された組ですよ、鍛冶屋さんの方は、こつそりキ印先生の發明が見たいんでね、先刻から覗き見もしてるんですよ。

鍛冶屋　噓云へ、この狸爺め！　俺は、あんなマッチ箱を見たつて三文の德になるわけはなし、大體、わしはさう申しちや何ですが、腕がちがふ。大體、そのあんなマッチ箱が動く筈はないんです。なア、ステーヴ？

八百屋　あのキ印と、この本鍛冶のケネーをくらべちや、可哀さうだ

ぜ――おやッ！

ガソリンの音。右から、非常な速力で、フォードが車に載つて驀進して來る。一同、飛び退いて吃驚する。フォード小舍の手前でブレーキをかけ、醉漢二人の鼻先へ車を留める。隣家の人達四五人、ぞろぞろと露地へ出て來る。

八百屋　動くぜ。走つて來た！

鍛冶屋　不思議だな。……

フォード　どうです、氣に入りましたか？　仲々別嬪でせう？

鍛冶屋　マッチ箱が走つて來たぜ！

フォード　マッチ箱――はすこし科學的ではないが、あのオットオの車に比較べたら、その位の比重にはなりませうよ。すべて、車に重みを持たせないのが、私の苦るしむで來たところなんでね。

隣りの女B　まあ、奇態な車ね。へんな恰好ですわね。

隣りの女A　馬なし馬車つて、これですか？――よくこの邊の子供がさう云ふんですけど、はじめて見ましたわ。

フォード　馬なし馬車は面白い言葉ですよ。まつたく、私は、デアボーンの百姓の子でしてな、幼い時分から男達が畑で馬を使つて耕作するのを見て育つたんです。どうも、馬といふ奴は、働くにア働きますが、仲々値が張りましてな、それに、年中生き物を飼つて置く段になると大變だ。ですから、私は、馬の代りに、かういふ輕るい自動車を使ひましてね、これに苅込み機械でも、籾拔き機でも接合けてトラクターにするんですよ。さうすりや、ガソリンと、時折の修繕だけで間に合ふし、それでなくても、どこかへ出掛るとすると、この車に乘つて、かういふ仕掛の物をかう動かしさへすりやどこへでも勝手に行かれるんですよ。

　フォード夫人、この時、喘き喘き追ひかけて來る。

フォード夫人　まあ、何てこッてせう。あたし、始めは貴方の後姿を見てゐたんですけど、横丁のところへ來ると、もうどこへ行らつしたか皆目わからないの。あの邊の人達みんな起きてさわいでゐてよ。――あら、皆さん、お早うございます！

隣りの人達一同　お早う！

鍛冶屋　ふむ、すると、フォードさん、なにかな、貴方はこの車を道樂に拵へてるわけぢやないんだね？

フォード　まあ、半分は何と云ひますかな、私はかういふことが好きなんでやつて見たんですがね。今となつちや、はつきりとこれがどんな役目をこれからの世の中に果すかが目に見えて來たんです。

隣りの男B　そりやさうと、フォードさん、わしはすこしきつい話だが、かういふことを御訊ねしたいですな。――貴方がこの近所を立

退くか、それともわしらが明日にも引越すか、どちらにか定めて貰ひたいもんだて！　どうぢや？

フオード　いや、これは、自轉車屋のアダムスさん、大變な御話ですが――一體そりやどういふ理由からですか？（フオード夫人良人の袖を引く）

隣りの男B　理由は私よりも貴方の方がよくおわかりの筈ぢや。（やや急き込む）近所合壁みな大迷惑なんぢや。さうだらう、かうやつて、夜は夜、晝は晝、今夜などは、これこの通り、夜つぴてぢや。があがあ、ごうごう、ばんぐ、ばんぐ……つて、誰が貴方枕元へ鐵砲を仕掛けたやうにされて滿足に眠られますかい？　それに、自動車だなんて――

隣りの男A　さう、さう、わしらは、皆な神經衰弱になつてるんですよ。何て云ふかな――キ印の感染でもあるかな！

隣りの女B　赤ん坊がどうもね……。

隣りの女C　うちだつて朝は早い體なんですからね。

隣りの男A　見なさい、この邊に散らばつてる靴や空罐を。――こりや、みんな、わしらの物だぜ。

フオード　どうも不經濟だね、かう有益な物をどしどし投るなんて。

隣りの男B　それが、貴方への警告として投げられるんだ位は、わからんのですか？

隣りの男A　わしんとこぢや、もう投げつける物がなくなつたよ。

フオード（苦笑）いや、よくわかつてゐます。あとで妻に集めさせて御返へしいたしませう。

隣りの男B　そんなとこぢやないぜ。さア、貴方が立退くか、立退くのがわしらか、どつちだね、御返事を承らう！

隣りの男A　それだ。

鍛冶屋　まあ、まあ、貴方がたもすこし氣が昂つてる。――大體、フオードさんだつて、惡氣があつてこんなことをしてゐるんぢやあるまいし、そこなところは、すこし大目に見て上げないと可哀さうですぜ。

フオード　いや、わかりました。――ぢや、かういふことになりますな。貴方がた皆さんで、一つ私の爲めに工場を拵へて戴くんですな。さうして、離れた場所で、私は思ふ存分皆さんの爲めに、この發明をやりとげてからに、百年の後までの社會奉仕をやりませうよ。どうです？

隣りの男B　何を、わしらは百年の後なんテ云つてやしませんよ。デトロイトのバグレイ・アヴェニューの住民のことですよ。工場だつて、チエツ虫の良いことを仰言るぜ、誰がこつちの商賣をフイにし

てまで、金を出して上げて貴方だけ儲けさせて堪るもんかい！——そんな話ぢやなくて、わしらめいめいに職を持つてる人間が、夜眠れるか眠られないかの破目なんだよ。

フォード　私には一向に氣がつきませんでしたが、そんなにガソリンの音が激しいとなると、又それを消す工風が必要となつて來ますね。ようがす、その工風をやりませう。それは、さほどむづかしいことぢやあるまいて。だがね——この私から、御町内一同で、このガソリン自動車を拵へるのを御取り上げにならうとしたつて、それは無駄なこつてすぜ。それは、この車の（自動車を指さす）ここへ這入つてゐるガソリンへ、ここから出る電氣のスパークで、このスロツトルを通じて發火させてからに、サテ後の車軸へ据ゑてあるエンジンに動力を出すなと云ふのと同じことです。これこそは、生れつきなものでしてな、貴方がたがどんなに世の中の勢に食つてかからうとなすつたつて、いかんとも出來ないことなのさ。だから、このガソリン自動車を、私から取り上げたつて結局無駄でがすよ。音の加減はいたしやせう。それでも、何だかガソリン臭いとか、時時はブルブル云ふとか仰言るのでしたら、先刻も申上げたやうに、共同で工場を拵へて下さい。今自轉車業のアダムスさんは何と仰言つた——私が獨りで儲けます？　冗談にも程がありますよ。さういふ、失禮ですが、普通の商人の眼で見てゐらつしやるから、現にこの自動車の本當の値打がおわかりにならないんぢや。——そりや、貴方は、やはり走る車の御商賣だから、私を商賣仇とごらんになるのも無理はないが、今ここでごらんになつてゐる品物だな、こいつアほんの雛型なのさ。しかし、この小つぽけな、それこそマッチ箱みたいな雛型に、世の中のどえらい變り目が起つてるのに、氣がつきませんかな？　動力時代だ——それですよ。水力であれ、電力であれ、石炭の力だつて、化學の爆發力にしてからが、それから石油よ、ガソリン、なににしろ、人間の身體や畜生の力とは別な天然自然の力を使つてだけ世の中はこれから進歩するのさ。その時代は、もう眼の前に來てるんぢや。恰ど、今東の空が白くなつて來てゐるやうにな、世の中が明けたら、今度は動力を使ふ機械の發達ですばらしいことになるですよ。その時、貴方がたが一番安すくて便宜な、どこの御百姓にも使はれる、このやうな車を拵へる會社に株主となつて居られたら、どれほど懷ろに儲けが這入るかを考へたことがありますかい？　あるまいな？　私だつて、さういふ望みがなけりや、何を苦しむで、一生樂に暮らして行ける四十エーカーの土地を棒に振つたり、ここのエデソン電氣だつて勤め以外のことはせずさ、そして、この發明にだけかかつてるわけがありますかい？　ご

らんよ、私の嬶を！　これが、月給百弗取つてゐる技師の妻の身装ですかね？　普通なら、それ、もつとひらしやらした着物を着て、奥さん方と御茶の御裁縫の會のつて、相當な交際をする筈なんだ。しかし、嬶は私を信じて居やす。いや、私の信ずる新しい、世の中のことを、信じてるんですよ。だからこそ、私達は、いろんな樂しみをやめて、この鐵板だ、このタイヤーだ、このスロツトルだと月給をみんな注ぎ込んでゐるんですぜ。——近所の衆、私は、今までにこんな長いおしやべりをしたことはありませんが、申上げたからにはハツキリして置きたいことがあるよ。この小つぽけなガソリン自動車の雛型だな、こいつは決してヘンリ・フオードの持物ではないのですよ。こいつは、世の中一般の持物だよ。つまり皆さんの物だな。きつと、この車が、アメリカ中の一軒一軒に一臺づつはあるやうな時代が來るです。俺は斷言してもいいよ！　又、さうするやうに自分で工場も經營し、工風もするさ。さア、もう夜は明けた。皆な御歸んなさい。こちらは、二年振りで、今日は一日ぐつすりと眠りたいよ！………

　フオード夫人感傷的にたつて泣く。八百屋も、思はず鼻を啜り上げる。

隣りの男女の間に、深い吐息。

鍛冶屋　偉らい。ヘンリ・フオード偉らい！　工場が出來たら、早速、わしを傭つて下さらんかな？（手を差し出す）

フオード（苦笑して握手する）いや、私は成功は急ぎアせんよ。仕事は成功しようなんどと懸つちや成功するもんでねえ。

隣りの男A　その時は、わしもな。

隣りの男B　どうも、さう云はれると、貴方の御發明にも一理はあると云ふもんだね。

隣りの女A・B・C　誠に濟みませんでした！もう決してどたつたりなんぞしませんわ！（女達古靴その他を形づけはじめる）

フオード　もう雨も霽れた。クララ、車を入れて扉を閉めようぜ。

八百屋と鍛冶屋　こりや、きつとどえらい車になるぜ！

扉閉ぢる。隣りの男A、白墨の落書を見てあわてて袖で消す。

隣りの男A　誰かい、こんな惡戯を書きよる奴は？——

フオード　ゼンクスさん、よく存じてますよ。そいつア、貴方の二番目のせがれだね。——抛つときなさい、やはり、俺だつてキ印の乾分みてえなもんだからた。……（朗かに笑ふ）

一同平伏。鷄の聲。日光。

（幕）

第二幕

動力時代

自動車競爭場、デトロイト市、グロス・ポイント公園の一部、決勝ラインの前。第一幕から七年後。

『デトロイト市自動車競爭協會』第一回全國大會の當日である。舞臺中央一帶に、稍低い白塗りの木柵が巡らしてあつて、その奥は、競技グラウンドになつてゐる。但し、柵内の群集によつて、グラウンドの模樣はあまりはつきりしない。中空へかけて、

『ウイントン・對・フォード・十哩選手權獲得競走』

と横書きした布が釣るされてある。

グラウンドを超えて奥は、遥かに黄ばんだ樹木の縞を見せた公園の遠景。その上に、低い、うす曇りの十月の空がのしかかつてゐる。氣紛れな日光が、時折、數條の光線を、すべての物に投げかける。木柵の最左端に、同じ色の木の圍ひが一段高く築かれてあつて、メガフォーンを持つた審判官がその上に腰掛けてゐる。その櫓の直下が、決勝ラインである。

苛立な昂奮が群集の氣持を支配してゐる。十哩競走は、正に七分時だけ經過した。世界のスピード・レコードを持つたウイントンが勝つか、名も知れぬフォードといふ百姓の子が勝つか、ここ數分間に勝敗は決せんとしてゐる。しかも、今や斯界のスポーツマン、アレキサンダー・ウイントンの『彈丸號』（四十馬力）が、見る影もないフォードの二十五馬力車を、半哩の左でリードしてゐる刹那である！

このシーンの群集の行動は、時間的繼續的であるよりも、むしろ同時的聯續的であることが多い。競技の各一分時の經過ごとに、審判官の足元の鐘が高く鳴る。決勝ラインを自動車が通過するまでの群集の視線はつねに右奥の方面に集中されねばならない。

市民の一　ウイントン！――ウイントン勝てツ！

市民の二　フォード敗けるな！

市民の三、四（市民の五に）さあ、俺達はウイントンへもう十弗賭ける！（市民の五手帳に記して、金を收める）

市民の六　俺はフォードへ五弗、ウイントンへ十弗、兩方へ張つた。

（市民の五、金を受取る）

鍛冶屋　俺は、ヘンリ・フォードだ。二十弗。（市民の五無言で記入する）

市民の一　追ひついたぞ、あの骸骨車が追ひついてる！

　鐘一點を打つ。

　歡聲遠くからむらがり湧く。

市民の一と三　ウイントン、しつかりやれ！

市民の四（熱狂的に走り廻はり）ウイントン、俺達はお前へ賭けたんだぞ！

市民七　ヘンリ・フォード、ミシガン州の名譽のために！

フォード夫人（隣りの女Aへ）追ひついたんですつて？

隣りの女A　さうださうですよ、何だかこの人混みぢや、さつぱりわからないの。ええ、氣が揉める！　だから、あたしは勝負事が嫌ひだと云ふんですよ。

隣りの男A（フォード夫人へ）奥さん、大丈夫です、フォードさんの勝ですよ。あの人は、頭があります。――自分の車を知つてる。

フォード夫人　でも、こんな藝人みたいなことなんか、てんで性に合はないんですからね……。

市民の七（棚へ上つて）ヘンリ・フォードが追ひ着いた。擦れちがつた。一インチ――一フイート、そこだふん張れ！

市民の八（望遠鏡を覗きながら）拔いたぞ、拔いたぞ！（拳を握る）やれ、やれッ！

市民の九（市民の十へ）今度はフォードへ賭ける。五十弗。（市民の十へ、ノートを取り、金を受取る）

市民の十一　俺は斷じてウイントンを捨てない。五十弗、ウイントンへ入れてくれ！（市民の十、同じく金を受取る）

市民の十二　俺は、世界のチャンピオン、アレキサンダー・ウイントンへ百弗賭けた！

市民の十三　よし、お前が張り込むなら、俺は無名の青年チャンピオン、フォードへ百弗行つた。俺だつてスポートだ！（金を市民の十へ渡す）

八百屋（醉つてゐる）やーい、ヘンリ・フォードさんへ賭けない馬鹿野郎は、みんなこの場を出て失せやがれ！

市民の十二　やかましい、醉どれめ！

八百屋　何をッ？　ウイスキーを飲みや、誰だつて醉ふにきまつてらア、マカロニ野郎！

　鐘鳴る。

　群集の白熱化した聲援『ウイントン！』といふ呼び聲の方が高い。

市民の七　フォード勝て！　フォード、そこだッ！

市民の八　よう、よう、出したな、出したな！　大變な馬力だ！

ヤードも抜いてる！　ヘンリ・フォード、その意氣！　その意氣！

フォード夫人（獨白）ヘンリは、一切を賭けてこの競爭へ出た。あの人には、これよりほかに途がなかつたんだ。勝つておくれ、勝つておくれ、勝たなきあ、私達は何も彼も失くしちまふんです！

隣りの女A　奥さん、抜いたんですつて！

鍛冶屋　やれ、やれ、フォード大統領——俺達がついてるぞッ！

市民の八　七ヤード。——よう、骸骨自動車、八ヤード、九ヤード、もう十ヤードも抜いてるぞ！　しつかりやれ！

漸次に、ガソリンの爆發する音が、群集喚呼の上に彈きあがる。

鐘三度び鳴る。

ウイントンの後援者　フレー、フレー、ウイントン！

フォード贔屓の群集　フレー、フレーツ、ヘンリ・フォード！

市民の三　ウイントン、あの手を忘れたか？

八百屋（手當り次第にウイントン贔屓の人間を背後からどやしつけて歩るく）フォードッ、しつかりやれ！

市民の三　この野郎、毆ぐつたな？

八百屋（吃とする）馬鹿ッ、ヘンリ・フォードを知らねえか、チエーズ野郎め！

市民の三　アレキサンダー・ウイントンは世界のレコード・ホールダーだ！（毆ぐる）

二人取組み合ふ。群集の一部仲裁する。

市民の八　もう決勝ラインに、半時だッ！

隣りの男A　奥さん、こちらへ御出で。（フォード夫人を柵の上へ立たせる）

フォード夫人　ヘンリ！　ヘンリッ！（手巾を振る）

隣りの女A　もう勝つたも同然ですわ！

市民の一　やツ、骸骨自動車め引繰返りさうだぞ！——それ、遠慮せずにグラウンドへ沈沒しろ！

市民の十一　ウイントンが恢復しかかつてる。近づいた、近づいたぞ！『彈丸號』が勝つ！

市民の八　骸骨自動車は斷然リードしてる！　もう、一と飛びだ、あと五十ヤード、四十ヤード、三十……！

鐘四度び鳴る。群集の動搖が甚くなる。

市民の一　フォードへ賭ける！

市民の五　駄目、駄目。もう締切だ！

市民の十　賭けは一切締切だぞ！

市民の十一と十二　まだ早い！

市民の五　一哩へ近づいてからは、全然無効だ。

市民の八　フォード偉らいぞ！
フォード夫人　ヘンリ、ヘンリ、ヘンリ！
　鐘五度び鳴る。
　猛烈な勢ひで、何物かが柵の向う側を轟然と飛んで行く。わーッといふ喚聲。
審判官（臺の上からメガフォーンで）世界の最大速力競走勝利者、——世界の最大速力競走勝利者、——デトロイト市のヘンリ・フォード君、——デトロイト市のヘンリ・フォード君。——十哩突破時間、——十哩突破時間、——十三分と二十三秒、五分の四——十三分と二十三秒、五分の四——選手權はヘンリ・フォード君の手に歸しました。選手權はヘンリ・フォード君の手に歸しました！
　群集の大部分は左方へ、左方へと動き、我も我もと、ヘンリ・フォードの名を叫びながら、一時、左端へ退場する。
　アレキサンダー・ウイントン、この時競走用自動車でラインを突破する。白い車臺の片影。
市民の一人　やい、間抜けめ！　お前の故郷のオハヨオ州は反對の方だぞ！
市民の四五人（揶揄的に）先きのチャンピオン、ウイントン萬歳！
　この時、群集によつて、肩上げされたヘンリ・フォード左端から登場する。新聞寫眞班のマグネシユームのフラッシユ。フォードは、自動車用の外套を着、帽子をかぶり、眼鏡を額の上へ撥ねあげて、にこにこしてゐる。滿身塵まみれ。
群集　ヘンリ・フォード萬歳！
　新聞記者、フォードの身邊へ駈け集まる。フォード贔屓の人達さうさせまいとして追ひ退ける。小さな爭奪戰がはじまる。
フォード（自分を擔つてゐる八百屋と鍛冶屋の肩を叩いて）降ろしてくれろ。話したいこともあるぞ。（フォード肩車から降りる）さて——
新聞記者一同　御感想は？——
フォード　ミシガン州デアボーン町出のヘンリ・フォードあ、今度の最大スピード選手權といふもんを握つて、これだけのことが云つて見たいな。——人さまは、今の世の中を機械の世の中だと云ふが、俺から云はせると動力時代と云つて置きたいもんだ。そして、その動力時代の力を出すために、俺ア手づから拵へた自動車でもつて、自分でそれを證明してからに、勝つたんだ！　これからは、一哩一分で走るフォード型自動車を、どしどし世界に賣弘めるつもりでもある。それだけだ。
八百屋と鍛冶屋　動力時代、萬歳！

寫眞班のマグネシユームのフラツシユ。
フォード夫人、狂氣の如く群集を押分けて、ヘンリの首に抱きつく。接吻。
フォード夫人　助かつた！　走つた！　飛んだわね！――これで、私達は救はれた！
寫眞班　奧さん、そこのところを、もう一枚撮りますよ。
フォード夫人（にこりとして）いいわよ。
寫眞のマグネシユームのフラツシユ。
市民の十（メガフォーンにて）賭け金の割戻しを受取る方は、公園出口の事務所ですよ！　賭け金割戻しは、公園出口の事務所ッ！（去る）
八百屋（まだ市民の十二へ食つてかかつてる）やい、フォードの惡口云つたら承知しねえぞ、人蔘野郎！　雪崩を打つて右へ驅け出す。大部分退場）
市民の大部分　金だ！　金だ！　賭――け金だ！
隣りの男Ｂ（ひよつくり顏を出して）やア、フォードさん、素晴らしい廣告だつたね。時に、わしも自轉車屋をやめたよ。何か、貴方の方に使ひ道はありませんかね？
フォード　おお、アダムスさんかい、これから註文がうんと來るよ。御出なさい。いつでも使つて上げるよ！
八百屋（市民の十二を突き飛ばす）ヘンリ・フォード萬歳！
（幕）

第三幕

一九〇六年代

フォード・モータア會社の重役會議室。（デトロイト市、マック・アヴェニュー）會社創立第三年度の株主總會。
明るい、窓を大きく取つた、宏い一室。
正面奧中央のガラス扉には『機　密』と書いてある。その奧は廊下と壁を隔てて、二階の工場である。時折、會議の間に、エンジンの音や、調革の搏きや、大勢の掛聲や、車輪の廻轉などが洩れて來る。室の右は窓、左は別室へ通ずるガラス扉、左右程良いところに優勝カツプを載せた臺や、書類のファイル箱など。
中央奧の壁に、時計、その下にカレンダー。『九月三十日、一九〇六年』がカレンダーの示す期日であり、十時三分過ぎが時計の示す時刻である。
その他、壁の隨所に、自動車の車臺の分解圖、ブリュウ　プリン

ト、競走用自動車『999』號の寫眞、展覽會の褒賞狀などが飾られてある。

室の中央に大テーブル、それを圍んで、株主達が腰掛けてゐる。卓上に電話。十人の株主は、左の人達である。(猶便宜上、當時の持株數をも茲へは書添へて置く)石炭業者マルカム(二五五株)フォード(二五五株)ドッヂ兄弟(一〇〇株)會計係エッド(二五株)銀行家ノルトン(一〇五株)法律家ヤコブ(一〇〇株)鍛冶屋(一〇〇株)隣りの男A(五〇株)庶務係長(五〇株)マルカムの從弟ジョンス(五〇株)の十人であるが、ジョンスは缺席、ドッヂ兄弟は、兄ドッヂによつてこの場は代表され、鍛冶屋と庶務係長とは、工場内にそれぞれ勤務してゐるので出席しない。朝の澄んだ日光が、窓から幅ひろく射し込んでゐる。會議は今や酣である。

法律家ヤコブ　……と仰曰ると、來年度からは、全然高級車を御作りにならん方針なのですね?

フォード　標準化だな。ほかの自動車會社みたいに、自動車といふものを、金持やえらい人の贅澤な持物として威張らせて置くやうな方法は、ヘンリ・フォード絶對反對だわい!

銀行家ノルトン　いつから支配人は社會主義者になられたんですか?

(二三人の失笑)

フォード　社會主義とか、何とかそんなものア研究する暇は、俺にはないんだが、はつきり云ふなら、俺は百姓の子でね、アメリカ自慢のデモクラシーを信ずるものですよ。そのデモクラシーが物を云つてるわけさ。そのデモクラシーといふやつは、自動車のやうな世の中の交通、運搬、耕作用の良い機械を、一家族が乘れるほど大つかく、慣れない人間にも運轉出來るほど小つちやく、持つてゐても金がかからぬ位輕便に、それから、正直な材料で、金で傭へる一番働きのある勞働者の手で、新式な、わかり安いモデルから拵へられた車を、ごく容易すく手に入れることが出來て、家族一同、神さまの造られたひろい野ッ原へ出て樂しめるやうにすることをわしらに命じてるのだね。この氣持から外れて拵へたどんな立派な自動車だつて、そいつアヨーロッパの貴族や王さまの好みで、本物ぢやないわ。

銀行家ノルトン　すると、支配人は、慈善事業のためにフォード・モータア會社を興されたとしか執れませんね?

フォード　慈善、こいつは俺の大嫌ひな奴さ! この會社——貴方がたの會社は、先づ社會奉仕ちうことを根に置くべき營利事業だね。

法律家ヤコブ　よろしい。社會奉仕として安い自動車を普及なさる方

針は結構であり、現在では、その美名はたしかに通りませうが、さて、これを今後十年、二十年の時になつて振り返へつて見たとしませう。始めは、社會奉仕でどしどし自動車を普及化されたにしろ、そのうちに、會社は大きくなる、利潤は積もる、株主は配當やボーナスを受けて肥る、さうすりややはり普通の資本家と同じことぢやないですか？——例へば、シカゴのマーシャルフイールドのやうに、シエーヤース・ローバックのやうに？

フォード　會社が大きくなればなるほど、俺らの社會奉仕の氣持も大きくなることになるですぜ。その時ア、職工の賃銀をウンと高くしてやり、自動車を出來るだけ安すくするために、事業をますます擴張しますさ！

法律家ヤコブ　私の知つてる限りの經濟學では、利潤は猶もそんなどころでなく、どしどし殖えて行くものであり、資本は加速度的に蓄積されるものであると思はれますが。——もう一つの例を取りますと、最近ぼつぼつ大都會に流行し出した『五仙、十仙』店ですね、あれは一種の社會奉仕的な精神から始められた商賣にちがひないが、ごらんなさい、あれが今に大きい新時代の資本主義になりますぞ。もうその徴候がワナメーカーにさへ見える。その時、やはりフオードさんも、何一つ矛盾を感ぜられないでせうか？——

フォード　そりや、ヤコブさん、貴方のこそ社會主義てうんぢやないんですか？——さういふ風な考へ方は？

法律家ヤコブ　私の職業は、一切の事情に通ずることを私に命じます。ですから、今假りに、職工や勞働者の立場から、貴方の傾向に揮り騒してゐらつしやる『社會奉仕』といふデモクラシー思想が、今後どういふ變化を來すかを、ちよつと考へて見ただけです。御心配は御無用。不肖私も當會社の株主の一人でありますから、これから階下へ行つて職工達にこんなことを煽動なんかしやしませんよ。(笑ふ)

フォード　いや、煽てて下すつても、一向に差支はありませんな。私は、これからどしどし社會主義者でも、アニーキストでも、前科者でも、不具者でも傭入れる氣持で居りやすからの。(株主達の間に驚駭の色)——と云ふのは、つまり、かうだ。仕事は、私の工場では、人間の考へが成し遂げるんぢやなくて、機械と動力と材料とが行ふんでね。社會主義やアニーキズムが恐ろしけりや、わしはどんどん良い機械を發明して、作業にいろんな馬鹿げた考への紛れ込む隙をくれてやらない工風をするさ、それが、これからの産業で、そんなことにビクつく位では、これからの事業はやつて行けるもんぢやありませんよ。

マルカム　その政治の話は、まあ、それだけにして置いて、どうだね、

ハンリ、商賣の實情をもうすこし説明してくれたなら？——次第によつちや、わしにも考へがないわけでもない。

フォード　商賣の話を、先刻からしてゐるつもりだがね——今云つたことがわかつて下さりや、わしには、もう一つ突込んだところを皆さんに申上げたいんだがな……

この時、工場監督の一人になつてゐる鍛冶屋がガラス扉をノックする。會計係が座を立つて、鍛冶屋の話を聽き、フォードに報告する。

フォ！ド（エッドへ）うむ、それは、機械が惡るいからだ。すぐ修繕したらよからう。（エッド更らに耳打ちする）えッ三人？——しようがないな。そんなへまをやつちや！　醫者へすぐ連れて行つて。——兎も角、今會議中だから、と云つてくれよ。

エッド鍛冶屋にフォードの言葉を傳へ、再び扉を閉ぢて座席になほる。株主二三の間に低聲な會話。

フォード（一段と聲を高めて）社會奉仕ちう方針から始めたこのフォード・モータア會社は、今までも申上げたやうな會社の精神で車を拵へて來たものだが、昨年の賣上の成績を見ると、實は一昨年の千七百八臺よりも百九臺だけ賣上臺數が減つてゐた。その反對に會社の純益は三十萬弗にもなつてゐた。こいつア、その都度皆さんへも御報告して、それぞれの配當があつた筈だから、とつくに御承知のことと思ふが、一體、この數字はどんなことなのでせうか？　何故こんな具合になつたのか？　外でもない、車の數が減つて、收入が多いといふことは、贅澤な車だけを賣つたといふことになるだけのものだ。現に昨年は、いろんな折を見計らつては、安い方のモデルを三つも天下に廣告してゐるんだが、その方の捌け口は一向に思はしくなかつた。よからう、俺は、もう一年待つて見ようと決心した。勿論、皆さんにとつては、こんなことア、左程のことゝも思はれなかつたらう。したが、わたしとしては、この會社の方針に關係する重大な問題だつたのだ。——ところで、滿一ケ年待つた今日、今年の成績を見るに、こりや、又々、昨年から十六臺も賣上臺數が減つてゐる。尤も、今年の賣上金高もあまり香ばしくはなかつた。これも先刻會計係から報告があつたとほりだが、御わかりだらう。なみの成績がよくなかつたことは別としても、わしには、この臺數の減つて行くことが何より苦るしいのですよ。こいつは、取りも直さず、會社としてのあれほどの努力をしたにも拘らず、高級車だけが賣れることを示すことになる。——非常に不健全な話だ。おまけに、先刻から、わしの標準化の云ひ出しにノルトンさんやヤコブさんまでが反對を云ひなさる。これは何故だらう？——わしの考へ

たところによると、それは、皆さんの一部の方は、貸付資本――金融資本だな、それを代表して居られるからに外ならないのだ。早い話が、定まつた資本を一つの事業に投下して、あとは口笛を吹きながら、その事業が利益を生むのを待つて居られるからであるんぢや。さればこそ、手數が掛くて、金持やえらい人にだけ賣り込めるところの重苦しい、高級車の製造だけを奨勵されるわけなんだ！こいつア、たしかに、フォード・モータア會社の精神とア反對な、現に、わしの喧嘩をはじめてから四年にもなる、二十七工場聯盟とかの『官許自動車製造協會』なんて云ふトラストのやり口と同じことだ。わしは、この會社にも、こんな面白くねえ向きがあつたことを悲しむもので、その面白くねえとこをなほすためには、是非この際皆さんと協力一致して、闘ひたいと思ふんです。

鍛冶屋、再びガラス扉をノツクする。もう一人の勞働者がついて來てゐる。會計係これに應待する。そして、フォードへ耳打ちする。

フォード　死んだ？――そりや機械がいかんからだ。では、それ相當に手當をして。何せ、この會議が濟まないと何も駄目だと云つておけ！

會計係、その旨を傳へる。二人去る。

銀行家ノルトン　（苦が苦がしげに葉卷を咬みながら立ち上がる）ヘンリ・フォード氏、貴方は、立派な技術家であるかも知れない、又、八百人の職工を操縦する良い監督かも知れない。しかし、何の權威を持つて、貴方に、金融資本の攻撃をこの場で敢てする力がお有りですか？　それが聽きたい、承りたいものだ！

マルカム　すこし言葉が強よ過ぎるよ。

隣りの男A　しかし問題が問題ですからな。

フォード　いや、お待ち。――そんなら、同じことが、逆に、貴方がた株主達にむかつても云へるよ。貴方がたは、何の權威で、資本と勞働との一しよの働きであるこの會社に、資本側だけの要求をやるのかね？――

銀行家ノルトン　資本あつての勞働ぢや、資本がなくてどうしてこの工場が立つて行きますか？

フォード　勞働と資本と一しよに働いてこそ工場は立つて行くんぢや。

法律家ヤコブ　何故フォード氏は、勞働あつての資本だと云はれないのですか？　その方がはつきりするぢやありませんか？――どうもそこに煮え切れない矛盾があると思ふがな。

フォード　わしは普通ザラにあるアメリカ人だよ。わしの云ふことは

間ぢやない。常識だな。平らの機械工から叩き上げて來た、わしの經驗がここまで物を考へさせてるんだ。

マルカム　で結局、どういふことになるのかね？　社會奉仕も、資本のことも、標準化もそれでいいとして？——

フオード　（立ち上がつて）それは、かういふことになるのさ。フオード・モータア會社は、金を拵へる機械ぢや絶對にない。慾の深い豚屋みたいに、口笛を吹いて配當のたんまり廻はつて來るのを待つてゐる資本家の捲り上げには、拳を握つて鬪ふ會社が、この會社だよ！——といふことになるね。

一座騷然と紛議する。ノルトンは葉卷を床へ叩きつける。ヤコブは、手帳を出して何かを調べはじめる。

この時、室外に、勞働者多數のザワつく物音がする。鍛冶屋、五六人の職工に腕を扼されてガラス扉の外に姿を見せる。フオードつかつかと立つて行く。扉を開く。

フオード　（勞働者達へ）さて、お前達に、何か急なことでも起つたのかい？——見る通り、わしは今會社の重大なことで相談中なんだが？……

勞働者の一　（激昂してゐる）この監督を追ひ出すか、それとも俺達が追ン出るか——どちらかだ。返事が聽きたい！

フオード　（冷然と）今、わしは、會社の重大なことで、株主達と相談中だと云つたろ——さう云つたからには、この相談が定るまで、お前達のことを考へる暇がないといふことになるんだ。

勞働者の二　株主だか、ヘツタクレだか知らねえが、そんなダイヤなんか光らしてる奴らと話してるより、職工の生命の方が大事だと思はないかね？——三人死んだんだぜ！　今、あの裏のよろよろクレーンがぶつ仆れたので、下敷になつた奴が三人天國へ行つたんだ。魂は天國へ行つたか知らねえが、土の上の死骸は見られたざまぢやねえや。——親方、早く何とかしてくれなきア、下の連中はわいわい云つてるんだから、ストライキがおッ始まらねえとも限らないよ！

會計係エツド　さうお前達がこの席へ來て我鳴り立てる前に、ほかにも現場監督が四五人居る筈ぢやあないか？　監督を通じて陳情して來給へ。

フオード　機械の狂ひは、人間の罪ぢやアないよ。その機械を發明した奴の頭が惡るかつたんだ！

勞働者の三　機械の講談なんか、聽いてるんぢやないぜ。あんなやわつこい土臺を据ゑてからに、四噸も五噸もある物を運ばせるのが惡いんだ。

勞働者の一　大體、この監督が惡いんだ。この野郎、手前はのんべんだらうと油を賣つてやがつて……

フォード(エッドへ)この連中は、云はして置くと何日でもしやべつてるんだから、さつさと出て行くやうに云ひつけてくれ。

會計係エッド　御前達、ここに立つことは出來ん！　ここは人事係ぢやあないんだ。すぐと引取れ！

勞働者一同　そんな無理なことはない！

會計係エッド　引取れと云つたら、引取らんか？

勞働者の二　ぢや、仕方がねえ。――これから、仲間へ云つてさう云はう。だが、次第によつちや、ストライキぐらへは覺悟してゐるがいいぜ！

フォード　よし、ストライキをやるなら、片つ端から馘首する。その心算でやれよ！

勞働者一同　馘首か……はッはッはッは……馘首！(去る)

鍛冶屋　どうも申譯けがありません。實はな、かういふわけなんで………。

フォード　ケネー、あとで話すことがあるから、その時わけを聽かせろ。一應下で、あの連中をなだめるやうにするのが、お前の今の職務ちうもんだ。(鍛冶屋すごすごと退場)

フォード(一座を制して)さて、皆さん、わしは社會主義かどうか自分では知らないが、皆さんも御聽きのとほり、不當な強請をする者にむかつては、そいつが勞働者だらうと資本家だらうと、トラストであつても、決して決して喧嘩をすることを嫌がるもんぢやない。そして、その爲めにアヘンリ・フォード四十三年奮鬪して來たんだ。(一座漸く鎭まる)

銀行家ノルトン　一言私として述べさせてし戴きたい。只今までの支配人の言葉は、いやしくも一株式會社の支配人及び監督技師としては、實に不穩當な、むしろ挑戰的な言葉かと思はれます。從つて、この私としても、もはや當會社の持株には、何等の興味をも感ぜぬこととなりました。――私は、自分の所持株百五株だけを、當會社に相當な値段で御引取りが願ひたい。

マルカム　わしとしても、ノルトンがああ云ひ出したからには、二百五十五株をそつくり讓り渡さう。しかし、このフォード・モータア會社の株だけは、さう安値では手放さんぜ。

法律家ヤコブ　どうも行懸り上、私も現在の地位は、誰かほかの社會奉仕的な法律家にお讓りすると同時に、百だけの持株は、マルカム氏と同値でお引取りを乞ふより外はないと思ひますな。

フォード　(決然と)いゝとも、引取りやせう！　マルカムさんは、幾く

何で賣りますかい？

マルカム　まあ、二百五十五株で――ざつと、十七萬五千弗といふところだな。……

會計係エッド　十七萬五千弗！――どうして、どこからそんな價格が――一株七百弗近くぢやないですか？

フオード　いや、マルカムさんは、仲々先見の明のある人だよ。それだけ、フオード・モーター會社のこれからの發展を見越して居られるんぢや！　よし、ほかに賣る人はありませんかな？

沈默。

隣りの男A　しかしフオードさん、そんな、無謀にも程がある――今年は賣上金高も尠いといふのに？

會計係エッド　それにセルデン特許法との裁判事件などもありますし、どうです、支配人、すこし考へなほしてごらんになつちや？

ドッヂ　何か御考へがお在りですか？――特にこの逆境を切り拔ける妙案と云つたやうなものは――？

フオード　まあ、それは先へ寄つてからの話にしようよ。――そこで、ノルトンさん、ヤコブさん、マルカムさん、この三人の株主だけだね？　賣りたい方は外にありませんか？　よろしい。引取つて上げる！――すこし高過ぎるとは思ふが、三年以上もマルカムさんは會社に竭して下すつたんだ、十七萬五千弗で、その二百五十五株はヘンリ・フオードが引受けやす。金は、今日の總會の結果を考へて、準備してあるから、下の會計で御拂ひします。中途から御這入りになりましたが、ノルトンさん、ヤコブさんにも、刻ざまずに、マルカムさんと同値で戴かう。――では、さういふことにするから、どうぞ、一應會計室へ降りて、三人とも暫らく待つてゐて下さい。

六人立ち上がる。

銀行家ノルトン　頗る巧妙に斷行されましたな、ヘンリ・フオード氏。――だが、あともあることですから、あまり大きいステッキを揮り廻はされん方が御爲めでせうぜ。――

フオード　餘計な御世話だ！　俺ア、一生涯かかつても、貴方がた企業界の寄生虫を撲滅する決心なのだ。今日が挑戰の初日なら來年の今日は、その三百六十五日目に當るだらう。――さよなら！

法律家ヤコブ　フオード氏、それでは、又、いづれどこかでお目にかかるでせう！

三人の株主退場。

フオード　さて、殘られた人達に、一つ面白い話があるんぢや。（立つて、『999』號の寫眞の額裏から、一枚の鐵板を取り出して來る）――これは何だか、皆さん御存じかの？　おわかりになるまい。こ

いつア『ワナデュウム』鐵といふ化合鋼鐵さ。この鋼鐵を發見したについては、かういふ事件があつたんだよ。――昨年の冬、ここの競走用自動車も加はつてゐた關係から、フロリダのパーム・ビーチの自動車競走へ行つて見物してゐたものだ。すると、わしの立つてゐる場所から、つひすこし先に、フランス製の自動車が顚覆して毀はれつちまつたな。早速現場へ駈けつけて見ると、砂の上に、弁莖が落つこちてゐたのぢや――おや、變なもンだぞ、と拾つて手に取つて見ると、どうもなみの鋼鐵よりア輕るいな。ほかの連中に聽いて見ても、誰も何だかわからんと云ふ。そこで、この工場へステムをこつそり送つてからに、化學部のエンセンに分析させたものさ。すると、お前、こりやヴナデュウム鋼鐵といつて華氏三千度の熱で拵へる鋼鐵の一種だといふ話さ。しかし、アメリカ中どこを探がしたつて、二千七百度まで出る鎔鑛爐はあるが、三千度となると皆目見當らない。そこで、私は、その方面のつてで、英國にゐる技手を一人呼び寄せてな、極秘で試驗をやらかして見たわけよ。一二度失敗はしたが、この頃、これがオハヨオ州の一鐵工場の鎔鑛爐でなら、この通り出來ることがわかつたね。――何故、この鐵についてそんなに大騷ぎをするかと云ふに、元來、今までの鋼鐵では、張力ア六萬から七萬封といふところが精一杯、それをこのヴナデュウムになると、十六萬封からの張力が出るのだ。世間のありふれた自動車製造業者が、重みは力だなんテ考へてるのは愚の骨頂で、この鐵の切れッぱし一つで、そんな妄想は忽ち引繰返へつてしまふ。輕るくて三倍もの力が、この化合鐵からは出る。――云ひ換へると、この鋼鐵こそは、フォード・モータア會社に、いや、世界の自動車界にどんでん返へしを喰はせるものである！　來年からの標準化したフォード自動車は、みんなこの鋼鐵を使ふことになります。――さア、良く手に取つて見て下さい。

株主達、鐵板を廻覧する。

ガラス扉のむかうに、鐵冶屋、勞働者の一團に押し揉まれながら、大手をひろげて遮らうとしてゐる。フォード起つて自ら扉を開く。

フォード　會議は終つた。――さア、今度はそちらの問題だな、一體何だね？――その機械がどうかしたのか？

勞働者十人ほど昂奮して這入つて來る。その一人、紙片に書いたものをフォードへ手交しようとする。

勞働者の一　これを讀んで貰へばわかる。

フォード（徐ろに隻手を擧げて）一寸待て！　その歎願書だか決議文だかを受取る前に、わしは、改めて一言お前さん達に云ひたいこと

があるんぢや。それはからだ——今日から、このヘンリ・フォードは、フォード・モータア會社の社長になつたのだ。ぢやによつて、いままで、株主どもの干渉や指圖を受けてたため、日頃信じてゐたお前さん方に良い待遇をして上げる方法については、これからはやつと目鼻がつきかかるところだて。わしのしようとする待遇改善法といふなア、出來るだけ勞働者であるお前さん達にこの會社の儲けを分けてやることが一つ、もう一つは成るべく勞働時間を短くすることぢや。それから、今後は絶對に怪我や過ちのないやうに、安全裝置をした新しい良い機械を据ゑつけることもそれだ。その證據として、俺は、かういふ事を擧げて見せる。——されば、このフォード・モータア會社は、近いうちに、郊外のピクエート・アヴエニユーとボービヤン・アヴエニユーの角に新築しかかつてゐる、アメリカ一の大工場に移轉するんぢや。——いいかの、かういふ事柄を話してからも、まだお前方は、そんな紙片をわしの手によこす氣持があると云ふのかね？——よつく考へて返事してくれ！

一同沈默。勞働者達互に眼顔で合圖する。私語。勞働者の一、紙片を四つに疊んで作業服のポケットへ入れる。フォード手を差し伸ばす。勞働者の一、その手を握る。

フォード　さうぢやろ。それが當り前だ。不幸な目に會つた人達の遺族ア、直ぐに手厚く慰問するよ、又その機械も早速改良するよ！

勞働者の二、窓際へ進み出で、階下へ左右に大きく手を振る——
——。　（幕）

第四幕

フォード繁榮期に入る頃

フォード・モータア會社新設工場の會計係室である。土曜日の支拂ひ時前。秋。天井は高い。正面の壁に大時計。時は十一時二十分過ぎ。時計の下にドア。守衞が一人立つてゐる。舞臺中央に、一聯の眞鍮格子の中仕切りが聳えてゐる。外部からの交渉はすべて、格子の三つの小窓から。但し格子の一角は折れ曲がつて、左方で室内へ通ずる。電燈があかあかと點つてゐる。電話その他卓上用具が中央の四つのテーブルに整然と置かれてある。右壁には脈動するやうな大金庫。左隅は、ガラス扉で別室及び廊下へ通ずる心。格子の左前方に、浩翰なる帳簿棚。すべて、人間はこの弗のための殿堂の下に、小さく壓迫されて動いてゐる。

テーブルは、その後會計係長に昇進したエッドが首席、次長アイサック、帳簿方ステーヴ（八百屋）、會計雜務のアダムス（隣りの男

B)の順である。エッドは、一と束の傳票に捺印を施してゐる。時々時、過度の激勞からの欠伸を禁じ得ない。ステーヴその横で、大型の帳簿と汗を流して取組み合つてゐる。時折時計を偸み見る。疲れきつた憂鬱な表情。しきりに汗を拭ふ。隅の格子際に陣取つた、猶太人アイサック次長は、猫背にせかせかしながら、山のやうに積まれたペイ・ロールの封筒を番號順に整理してゐる。電報配達小僧、黄色い封筒を投げ込んで行く。

アイサック　又電報か？――ロンドンからだ！（守衛へ渡す。守衛左の扉から別室へ持つて行く）

ステーヴ（時計を振りかへり）あーア、眼が、眼が、から霞んでしまつて、何も見えやしない。（煙草へマッチを擦る）

アイサック　無理はないや。その帳簿をあと四十分で片づけるんだからな、――俺の方は二千枚だ、二千人の賃銀表さ、凄ごいもんだぜ！

エッド（ガラリと印形を捨てて）ちと休まう。――どうもから忙しくちや、生命が縮まるぜ！

アイサック　貴方がさう仰曰りや、話はわかるといふものさ。（伸びをし汗を拭ふ）

エッド　今のもきつとロンドンからの大口の註文だぜ。――いやになるた！

アイサック　でも係長なんか、會社の株主の一人だから、さぞ御樂しみでせうな。――そりやさうと、一體全體世界中で、自動車は何臺あるものですかね？（煙草へ火をつける）

エッド　さア、世界のことはわからないが、庶務の方で調らべたところによると、現在、アメリカだけで十六萬臺あるさうだ。ニューヨークだけでも七萬は登録してあるつてね。

アイサック　今年になつてから、この會社ぢや、何臺ぐらゐ賣つてるでせう？

エッド　九月の末になつて見ないと決算がつかんが――ザッと一萬臺は捌いてるだろ。新聞が毎日百臺づつこの工場から出すと云つて、天地が引繰返へるやうな大騷ぎをして囃し立てたんだが、この問社長が新聞記者を呼んで、これから一日一千臺は拵へるんだぞと力んださうだよ。

アイサック　ホーレイ・スモーク！　一日、一千臺！　御冗談でせう！

エッド　やり兼ねないだらう、あの人のこつたもの。何か又新工風を凝らしてるにちがひないよ。

アイサック　大したもんだな！　それで、この儲けは一體どこへ行く

のかな？ わしには來ないやうだが。

エッド　今年だけでも、ザッと三百萬弗の純益があらうといふものだ。どうだい、三百萬弗だぜ――三百萬！ ステーヴ、君なんか、三百弗の金さへポケットにあつた試しはあるまいが。(ステーヴ無言で首を振る)

エッド　おい、君は、今日はどうかしたのか？――病氣でもあるかい？ 氣分が悪るけりや、醫務室へ行つて診て貰つた方がいいぜ。――

アイザック　(手で酒を呑む眞似をして) 何に、これが過ぎたんでせうよ。(力なく笑ふ)

ステーヴ　(嘆息) 俺もな、バグレイ・アヴェニューで八百屋を開いてゐた時ア……あゝア、金が儲けたいよ！

アイザック　お前さんは、飲み過ぎて破産したのだな！ そんなに金が見たけりや、今に、山ほど運び込まれるぜ。その時、飽きるほど樂しむさ。――但し、眼だけでな！ 觸つちやいけないよ！

ステーヴ　考へりや、あの當時、わしらは、フォードさんの發明を、マッチ箱だなんて笑つたもんだつたがな。――金だ！ 金だ！

エッド　マッチ箱？――冗談ぢやないぜ。最新型のフォードTモデルを見ろよ。こんな自動車は、どの會社だつて製造出來ないんだ。第一、その……

アイザック　オッと、皆まで云ひつこなし、あとはちやんと暗誦してまさア。操縦輪が右側へ移された。モータアのトップが取外し自在になつた――。

エッド　それから、氣笛はオン・ブロックで鳴出すのだ。

アイザック　お次は、御得意のヴァナデュウム鐵でせう。

エッド　まだある。附屬品としての磁場だ。――この五ヶ條を覺えてゐりや、どこへ轉がつたつて、三百弗の月給にはなるよ。世界のどの隅ッ子だつてフォードT型の賣れない所はないし、賣れるところにア、きつと代理店があるんだ。――そりやさうと、アダムス君は遅いな。まさか、三萬五千弗と聞いて墮落をしたんぢやあるまいね。心配になつて來た。責任は重いからな！

左扉から事務員ケーシー登場。一同吃驚して各自のテーブルに獅咬みつく。ケーシー笑ひながら、山のやうな傳票をエッドの前へ投げる。

ケーシー　俺だよ、大丈夫。(背伸びをする)――能率増進、能率増進！ おい、煙草を一本くれよ。

(アイザック一本を渡す。ケーシー苦笑)

エッド　まさか、今日中にこの傳票全部をどうするといふんぢやある

まいな。

ケーシー（マッチを擂つて）さア、係長は、唯會計係長へ持つて行けつて云つたがね。（隣室にて『ケーシー』と呼ぶ聲）あツ、あれだ、煙草一本喫ふ暇もくれやしねえ。畜生ツ！（煙草を踏み消して去る）

電話鳴る。再び『ケーシー』の聲。

エツド（答へる）は、社長ですか？――え、もう出來て居ります。新工場？――へえ、ハイランド・パークへね？ はツ、かしこまりました。（受話器を掛ける）おい、今度又新工場へ引移るんだつてよ！

アイサツク えツ、新――助けてくれツ！（卒倒する眞似。自動車の警笛。ステーヴもぢもぢする）

守衛二人とアダムス、めいめいに黒塗エナメル製の函を擔いで、左扉口から這入つて來る。函は三つのテーブルへ載せられる。各自にテーブルへ突貫する。

アダムス やれ、やれ。金を運んでると、どうも人間が皆ホールドアツプに見えていけませんな。金は魔物だ。（腰からピストルを出してテーブルへ置く）

エツド 俺は又君が持逃げでもしやしないかと心配してゐたよ。（立つて行つて、鍵を出して函の錠を開ける。その間守衛二人は、左扉から表へ廻はつて、三人の守衛が、眞鍮の格子を護衛する）

アイサツク そら、これからが、わしの一大事業といふ奴さ。（ぞくぞくと出て來る紙幣束を、テーブルの上に積み重ねる）人間、金さへなけりやな！

アダムス その實、貴方は、毎日でもこの紙幣の山を勘定してゐたいんでせう？ どうです、いい心持さうに、まるで情人の頬ぺたでも撫でてゐるやうな手付ぢやありませんか？

ステーヴ（そろそろと蹂り寄り）ねえ、私にその金をちよつとでいいから、手に觸らして下さい！（アダムスを突退ける）

アイサツク よせよ、つまらない眞似を！ この金へ手をつけたら承知しないぞ！（腕に力を籠めて對手を押し返へす）

ステーヴ ちよつとでいゝから、掌へ載せさせて下さいた！ その金……その金！……

エツド 何だか、すこし可笑しいぞ、この男は。――おいアイサツク、氣をつけろよ！

この時、ステーヴ、アダムスの卓上のピストルを握るや否や、會計次長アイサツクを撃つ。斃れる。他の二人駈けつける。守衛三人、あわてゝ、左側の扉と表へむかつて飛び出す。ステーヴはアイサツクの卓から、紙幣の束を取り出して、封を切ると抱きしめ

る。それからバラバラと天井へむかつて投げつける。無數の紙幣が、ステーヴの頭上に降りかゝる。

ステーヴ　あツはは、あツはは！　金だ！　金だ！――フォードは金だ！　マツチ箱は金だ！　フォードは神様だ！　俺もフォードだ！　ぶう、ぶう、ぶか、ぶか、ばん、ばん、ばん――！（紙幣を一面にかぶりながら、四つん這ひになつてフォード自動車の眞似をしてその邊を駈け廻る）

アダムス　おい、八百屋のステーヴ、（取り押へる）貴樣、破産してから、どうも氣が變だと思つた！　ステーヴ！（じつと對手の眼を見る）ちよつと、押へてゝ下さい。わしは醫務室へ駈けつけて來る。（エッドにステーヴを渡して、眞鍮の格子を飛び越えようとしてまごまごしてゐる）

エッド　こりや、愈々本物だわい。ステーヴ、貴樣は大變なことをしやがつたな！（アダムスへ）おい、何を愚圖々々してるんだ、この扉から行け、大急ぎ！　私の責任が重大だ！

アダムス　おお、すつかりまごついつちまつたよ！（左方でばつたり守衛達と出遇はす）醫務室は、左へ行つたとつつきだつたね？（守衛の一人頷く）大變だ！　人殺しと氣狂ひといつしよに出た！（去る）

庶務室及び表扉から、人達が聚まつて來る。守衛の一人アイサツクを起こす。他はステーヴを摑まへてゐる。自動車の音。

エッド　（その邊を探がし廻はり）可怪しいぞ――どうも、可怪しい。百弗札の大束がづうと足りない！

守衛の一　何です？……

エッド　いや、この室へは、絶對に人を入れんでくれ給へ。紛失物が生じた。

守衛の二　さア、皆な退いた！　退いた！（人々格子のなかへ流れ込む。守衛の一人、エッドとテーブルの上を探がす）

エッド　盜みやがつた！――アダムスだ！

フォード　（つかつかと左方から入り來り）どうした？何事だの？――

エッド　社長、大變です。……殺人、狂人、竊盜、重ね重ねの事件頻發！　私の責任は！……

フォード　さう無闇に騷がないで。――事件といふのは、一體何かね、氣を落ちつけるんだ！

エッド　ええ、そら――昨年は千三百軒からの代理店がT型を賣りましてな――社長は官許自動車製造協會と裁判爭ひ――濟みません、私の責任です、私の責任――今年度總賣上げ高は九百萬弗――ハイランド・パークへ新工場が出來上がる――フォードは世界一番だ！

一そいつがアイザックの猶太人で、それから、アダムスが氣が狂ひ、ステーヴは私の責任だ——さア、フォード様の御通りぢや……ぶう、ぶう、ぶか、ぶか、ばん、ばん、ばん——。（四つん這ひになつて、紙幣の間を這ひ廻はる）私の責任は九百萬弗！　九百萬弗！

守衛の三（指でこめかみの邊に圓を描きながら）社長さま——これですよ！頭に虫が棲んでるんでさア。

フォード（不憫げに首を振りながら）——かういふ必要でない不幸は、つまるところ、暇が有り過ぎるから起るんだ。勞働が百％でないからだ。紙幣たア一體何かい、たゞの物質ぢやないか。一心不亂に事務を執つてゐりや、こんな間違ひは起らぬもんぢや。（格子の向うにぞくぞくと集まる事務員、守衛、勞働者の群へ向つて）さて、さてお前さん方、出來る限り待遇改善法をやつて來たこの會社で、又又今日こんな惡い事が眼の前に突發したちうのは、わしを非常に悲しませるのだが、それと同時に、わしは一つの新しい決心を起こしたな。それは何かといふに、人間は、一心不亂に仕事をやつてゐる時ア、たとへそれが少し位無理な仕事だらうと、その人間に餘計な妄念を抱かせないといふ德があるもんだ。——そこで、俺は、これからすべてのフォード會社の組立に亘つては、單純を第一の目安に置き、事務や勞働の合理化を計らうと思ふのだ。それは、この場合のやうな、要りもしない馬鹿事を起すことを根絶することたんである。みんなフォード・モータア會社に合理化をする！そして、百％の能率を！（双手を擧げる）

勞働者の聲　嘘つけ！　働かせ過ぎるんだぞ！

フォード　誰だ、そいつは？（指さす）

群集の間に動搖が起こる。

守衛の一人、勞働者の一を突出す。

守衛の三　この野郎です。太い野郎だ！

フォード　ふむ、お前か。——よし、俺に言葉を返へすほど膽の据はつた奴ならば、わしは、お前さんを皆の前で特別に拔擢してからに、この會計係の雜務をやらせてやらう。いいか、能率を上げてくれ！　いつも、先づ俺に惡い氣持を持つた人間は、終ひにわしの下で働くことになるんぢや！手を伸ばせ、握手してやる！

群集の間に感激の聲が起こる。

勞働者の聲　嘘つけ！　皆な、その手で騙されるなよ。——云つたのは、俺だ！

群集再び騒ぎ出す。

フォード　それ、今度こそは掴きへろ！（守衛達人波を掻き分けて出る）

守衛の四　お前か？

勞働者の二　お前か？——

勞働者の三　お前か？——

勞働者の四　お前だらう？——

勞働者の五　お前だつたな？——

勞働者の六　お前に違ひない。——

勞働者の七　お前がさうだらう？——

勞働者の八　お前か？——

勞働者の聲　嘘つけ！——俺だ、俺だ！

　守衛三人、呆然として眞鍮の格子の前に出て來る。小間。

守衛の四（頭を振る）——どうも變だな。さてわからんものは、人間の聲だ。社長さん、近頃は、勞働者の聲までが皆似て來てゐるやうですが——つまり、その標準化といふ奴ですかな？

フオード　馬鹿ものッ！　お前は石炭部さ行け。守衛なんかしてる柄でない。——人間の見境えのつかんものがあるかッ！

　勞働者達、一樣な聲でげらげら笑ひ出す。

（幕）

第五幕

（ハイランド・パーク時代）

1　（表門）

フオード・モータア會社表門。

嚴かめしい煉瓦の門柱が二つ聳えてゐる。その間に、嚴丈な鐵の門扉が閉されてある。門柱には

「一日八時間勞働
日給最低六弗
フオード・モータア會社人事課」

とした掲示が際立つて貼られてある。

冬の早朝。まだうす暗い。

就職を求める勞働者の大群が、門扉のところまで詰めきつてゐる。各人みすぼらしい防寒の試みはしてあるが、嚴寒のため冰えきれずに、互に肩と肩とを烈しく衝撃し足踏み鳴らしながらわづかに暖を取つてゐる。人員の增加し行くにつれて、次第に最初の一團は押されて、門扉の前に立往生の形になる。

門側の鐵柵から、守衛四五人が形勢を窺つてゐる。

勞働者の一　早く門を開けろ！

勞働者の二　八時間勞働を始めたらどうだ？

勞働者の三　構はねえから、門をタタキ毀はして這入れ！

勞働者の四　フォードつてい男は、社會主義者かね？

勞働者の五　平和主義とかいふ話だな。

勞働者の四　だつて、お前、世の中にこんな八時間勞働で晝夜三交替、おまけに、雜役でさへ日給六弗なんてことをやらかす資本家は、どこにもゐねえぜ。

勞働者の六　それにしても有難い世の中になつたもんさね。もとは、日給二弗ぐらゐがせいぜいのところだつたが。

勞働者の一　何を、てめえは、物價の方がずんと高くなつてるのを知らねえのか？

勞働者の三　俺達勞働者が仕事をしてからに、かうやつていろんな物を拵へてるのに、大體、傭つてやるなんて考へを持つのがまちがつてるんだ！

勞働者の七　そんなことを云ふと、あの守衞の奴が聽いてゐて、あとから撥ねられるぜ！　ほら、耳打ちしてやがる。

勞働者の八　大體何時まで待たせるんだ！（門扉を靴で蹴る）

守衞の一（内から）おい、亂暴しちや不良んよ。

勞働者多數　早く開けてくれよ！

守衞の二　時が來りや自然と開くんだ。待つとれ！

守衞の一　第一人事係が出勤してゐないぢやないか！

勞働者の九　野郎、今頃はまだ嬶の懷ろでぐうぐう寢てやがるんだろ――ああ、俺らは南京虫しか抱いてくれねえ。（皆笑ふ）

勞働者の十　情ねえことを云ふない。俺の背中の南京虫が笑つてるぜ。（再び哄笑）

勞働者の五　おい、あんまり笑はせるな。腹が減つて來る。やつと珈琲とドウナッツを五仙がとこ詰めて來たんだ。

勞働者の十一　よせ、押すな。辨當が潰れる。

勞働者の二　誰だ、仕事を見つけに辨當を持つて來た奴は？

勞働者の四　感心だな。

勞働者の十一　なに、今日あたりは五六千人も來ると思つてね。――俺は昨日も一昨日も來たんだが、來やうが遲くて、門の扉さへ拜まねえで日が暮れた。

勞働者の三　のんきな野郎だな。フォードが感心するぜ、そんなのは！

勞働者の一　早く門を開けねえと、ブチ破つて這入るぞ！

勞働者の三　押さうか？

勞働者の二　押さうよ。どうせ、どつち向いても押されるんだ。門を

押した方が、六弗に近いからな。

勞働者の一部　押せ、押せ。鐵の門をブチ破れッ！

守衞の一（あわてて飛んで來る）おい、押しちや不良ん！　冗談はよせ！

勞働者の大部分　押せ、押せ、押せ、押せ――押してやれ！（門扉ガタガタする）

守衞の二（大聲で）この野郎供、門を毀はしたら、非常手段に訴へるぞ！

勞働者の三　非常手段たあ何でえ？　零下何度のこの寒さに、俺達を冷凍魚みたいに立たせて置くことぢやねえのか？（一同笑ひながら押し續ける）

守衞の二（呼子を吹く）おいッ、集まれ！　早く消火ポンプのホーズを持つて來い！

勞働者多數　ワッショイ、ワッショイ、押せ押せ、押してブチ開けろ！（門扉はれかかる）

勞働者の三　そら、開いたぞ！　もう一と息だ！

門扉めりめりと音がして、彈みを打つてぐわんと開く。勞働者四五人、その勢ひで門内に轉ろがり込む。ハイランド・パーク工場の整然とした遠景。

と、いきなり、左方奥から一道の水が、勢良く迸つて來る。

勞働者の二三人（爆發物のやうな水を眞向に喰つて仆れる）ぶるぶるッ！　冷めてえ！　何だ？

しかしあとから押す連中は、それと知らずにどしどし門内へ繰込む。守衞の一人空彈のピストルを打つ。皆急に立ちすくむ。水が頭上に直射する。一同雪崩れを打つて右へ退却する。

空漸く明るくなる。

守衞達（蔭から大聲で哄笑する）ざまア見ろ！（水收まる）

勞働者の一（こつそりと忍んで來て、後方へ合圖する）もう大丈夫だ！（拔き足で門内へ掛かる。忽ち、凍つた水の上で眞逆さまに轉ろげる）

守衞の一（つかつかと表はれて來て）面談時間は、午前七時だ！

（幕）

2

（裏　門）

鐵材が左右兩端に山積してある。その間に、狹さい鐵柵の門がある。守衞二人が兩側に立つてゐる。夕暮近く。

勞働者の一（ペッと唾を吐いて）畜生ッ、一日立たせやがつて、たつた百人しか取りやしない！（去る）

勞働者の二　何んだあの人事課長の野郎は！　胸糞の悪りい。（去る）

勞働者の三　面つきが悪りいとぬかしやがつた。二度とこんなところへは足踏みもしねえぞ。（去る）

勞働者の四　五、六、七又あぶれた！（去る）

勞働者の八（守衛の足を踏む）いけ忌々しい！

守衛の一　こらッ！（對手は逃げる）けしからぬ奴だ、どうも近頃は性質の悪るい奴が這入つて來やがる！（ピストルを改め見る）

勞働者の九　又これで南京虫と合宿か――ああ、寒むッ！（去る）

勞働者の十　あ――ア、一日立たせられて、お拂ひ箱か……。（去る）

無言でうなだれた失業勞働者の群が奥から奥からと出て來る。……

……

太い汽笛の音。舞臺そろそろと冷めたい濃霧に襲はれる。勞働者の力ない歩みはつづく。日暮れる……。　（幕）

3

（内　部）

巨大な音響に充ちた空間。セメントの柱の立列んだ斜めな長廊の一部である。天井はあまり高くて見えない。しかし、空間には、いろいろな柱や架線が張つてあつて、折々、奇怪な水棲動物のやうな鐵材や鐵鎖などが通過して行く。セメントの柱の間から、四角い物、圓るい物、尖がつた物などが、ぎらぎら黒光りに光つてゐる。

柱のすぐ前に、柱と並行して、長い軌道のやうなコムヱーヤーが横はつてゐる。これはエスカレター式な鎖状の鐵の自動廻轉車であつて、その上に載つた物は獨りでに、勞働者の前へ運ばれて來て、次ぎのパーツを受持つ他の勞働者の組へと動いて行く。

電燈があかあかと點つてゐる。

午後一時頃。

幕あくと、天井からフォード自動車の骨組にモータアだけのついた物が靜かに降りて來て、ぴたりとコムヱーヤーの軌道へ嵌まる。

勞働者六人一組が、軌道の兩側から、骨組に吸ひ寄せられたやうにすがりつく。

勞働者の一（急がしく）前輪だ！

勞働者の二（同）ハブだ！　ハブだ！

勞働者の三（同）後輪だ！

勞働者の四（同）俺の方の後輪だ！

勞働者の五（同）それ、ハブ！

勞働者の六（同）よく締めろ！

組長（突然一團の横からやつて來て、勞働者の一へ）何をぼんやりしてるんだ？　さッさとやるんだ！

勞働者の一　このレンチぢや仲々締まらない。（組長には機械の軋音のために聞えない）

組長　何を愚圖〱してるんだ！　早く早く！

勞働者の六（急がしく）それッ上りか？

勞働者の一　まだ、待て、待て！

組長　貴樣、駄目だな！　出て行けッ！　一人が手遲れすると、この車體工場ぢや三千人の手遲れになるんだ！　出ろ！　そこから出て來い！

勞働者の一　俺は何もしやしねえぢやないかね？――唯ちよつと待つてくれと云つただけだ。

組長　この野郎。口應へしたな。おい、この男を人事課へ廻はしてくれ！（右方へ叫ぶ）

工場スパイ（右から駈けつける）これだな？

組長　解雇だ。即時解雇だ！

コムエーヤーに載つた骨組は、がらがらと左奥へ流れるやうに走つて行く。もう一つの骨組が、降りて來る。勞働者の二、受け留めようとして腕を出すと、機械の重みで押仆される。

組長（駈け寄つて）馬鹿ッ！　機械の前に腕を出す奴があるかッ！（他の勞働者達へ）引摺り出せ！

勞働者の三　駄目だよ。腕が食ひ込んでらア。

組長　仕方がねえなア。晝飯を食ひ過ぎたんだろ。又、これで十分ほどの作業が中止になるのか？（右上方に向つて呼子を吹く）おーい！　ちよつと上げて！（手眞似で知らせる）へまな馬鹿が腕を噛まれたんだ！（車體の骨組がそろそろと上がる）よし！

勞働者の三（勞働者の二を抱き起こす）腕が折れたらしな。氣を失つてる！

組長（急がしく）早く　早く。おーい、（右方へ手を擧げる。工場スパイの一人駈けつける）早く代りをよこしてくれ！　二人だ！　それから、手がすいたら、このどぢを醫者へ連れて行つた。――そら、前輪だ！　何をぼんやりしてる？　ハブはいいかな？

勞働者七と八走り來る。

組長　代りだな？――そこへ行け。お前はここに立つてろ。前輪だ、前輪を嵌めたら、ハブを當てるんだ！　そら、何をまごまごしてやがるんだ！　大體、お前達は、唯で六弗貰ひに來たつもりだな？

勞働者の三　唯ぢやねえや、畜生ッ！　やめた！（ジヤックを投り出す）

組長（呼子を吹く）おーイ、又、一人失業者が出來たッ！（勞働者の三、いきなり組長を毆ぐる）あいたッ、畜生、毆ぐつたな！　まア、いいや、そんなことに懸り合つてゐちや仕事の能率が上がられえ。（工場スパイ三人駈けつける）この男を、即刻解雇だ。――無條件、暴行を働らく奴だ！（スパイ達の二人勞働者の三を手取り足取り連れて行く。スパイの一人、勞働者の二を引曳つて行く）

骨組滑り行く。高いベルが長い間鳴る。

突然、全作業がパタリと中止する。

監督（右から大股に歩いて來て）今日からT型にパーツの改良があるので、明後日まで作業を一時中止する。全員明後日午前七時十五分までに出勤するやうに！

會社は、成るだけ殘業を奬勵する！（左へ歩み行き退場）

勞働者の六　チヨツ、これで今日の日給はフイになりやがつた――あと、二時間のところを！

勞働者の四　休みの方がいいや！（腰を叩く）もう何をする元氣もねえや！

（幕）

第六幕

1

（最近）

ルーヂ河畔のフォード邸内の庭。日光。

宏大な、よく苅込まれた一面の芝生である。左から、なだらかな斜面を形造つて流れてゐる青々とした場所の右寄りに、贅澤な長椅子を横たへて、ヘンリ・フォードがうとうとしてゐる。普段着、飾りは、ポケツトの時計だけ。その周圍には、手紙やら新聞紙やらが散亂してゐる。秋日和。

芝生の右端で、三四人の勞働者が、高い塀を築造しにかかつてゐるが、別に目立たない。すぐ下は大道である。塀は純白の大理石で、監督一人が一々それを指圖してゐる。石を刻む鑿の音。

庭の眞上――即ち舞臺の奥は、一ケ處だけ窪みになつてゐて、そこから、大理石の幅びろな階段が二つ三つ見える。そのほか邸はちつとも眼に入らない。

フォード寵愛の鳥の類が、遠くから百種百様の囀るい、滑らかな、朝の饒舌を邸内一杯に送つてゐる。

遙かに遠く、じよくじよくと流れる水の音。もつと近く、瀑布のや

うな機械の操音。時々蒸氣のエキゾーストの響。

すべて、これらの音響は、期せずして、一つの複雑な、近代産業の空氣と牧歌的な逸樂とをなへまじへた、微妙な快感でフォードの聽覺を刺戟するのである。

突然右から、三人の紳士がやつて來て、フォードの面前に立ちふさがる。……

フォード　何ぢやい、いきなり？──

紳士の一　フォード閣下、新聞關係でございます。

フォード（起き上る）フォード閣下つて、いつからわしが『閣下』になつたかね？

紳士の二　昨日首府ワシントンに於て大統領フーバア閣下と御會見になりました刹那からであります。

フォード　よせやい。──どりや、薪割でもして來るかな。（起つて左方へ行かうとする）

紳士の三（立ち塞がつて）ど、どうぞ、御樂に！　この無電通信の者でござりまするが、實はほんのちよつとでいいんですから、閣下──いや、フォードさんの、現在の失業問題について、何なりと御話が願ひたいもので。

紳士の一　大統領との御會見には、フォードさんは、失業なんか救濟するのは屁のカッパ──いや、易々たるものぢや、と仰せられた由ですが、一體、どういふ見地から仰せられたのでございませうか？

紳士の二　もう御約束の何千萬弗とかを御出しになつて、事業の方は御擴張になりましたのでござりませうか？

紳士の三　もうアメリカの繁榮時代は下り坂でせうかな？　それとも、もう一段と世界的に大飛躍を試みる機會でも──？

フォード　一體、お前さん方は、どこから這入つて來たのかね？

紳士の一　え──と、御令閨の方からで。

フォード　嬶のゆるしを得て來たのかい？

紳士の二　え──え、その奥さんの前を通つて參りましたので。

紳士の三　御ゆるしを得たも同然です。今日は！　と御挨拶は申上げましたから。

フォード　叶はないね、お前さん達には！　見ろ、あの塀を。これから、新聞記者除けに、ああやつて邸をずつと圍んぢまふんだぞ。

紳士の一　差し向き、關稅引上げと同手段ですな？　フォード・モーター會社の海外發展策としては、現在どんな御方針でありませうか？　例へば、ソヴエート・ロシアのトラクターですとか、東洋への飛行機の輸出とか、支那への自動車賣込みとか云つた方面で──？

フォード（呆れたやうに眼を瞬りながら、再び掛ける）よく、お前さん方の機械はモーターと調子が合ふね。機械もそこまで行かないと本物ぢやあるめえな。——よし、俺も、これからは、お前さん方みたいな機械を拵へるぜ。

紳士の二　ロボットとか、テレヴオックスとか云ふ種類でございますか。

フォード　さう、そこへ腰をおろさんでくんなよ。長つ尻はごめんだぜ。——ロボットなんか古るいさ。人間を機械にするのが早いからな。——切角、ニュー・ヨークからここまで來たんなら、一つだけ話してえことがある。俺の失業問題の解決法ちうのは、手取り早く話すりや、かういふことなんだ。わかりきつたことを、何のかのと云ふから、俺は大統領との會見も、半分にして打切つて歸へつて來たのさ。（記者達鉛筆を揃へて待つ）市民の購買力を増さにア、どんな不景氣でもなほるもんぢやアあるまい。市民の購買力を増すためにア、勞働者の賃銀を殖やしてやらにアならん。そこで、俺は云つたんだ、わしの工場には十五萬人も人を使つてるんぢやが、一人として首になんかしません、賃銀もずつとこれから上げてやるつもりです、とな。話はそれつきりよ。新聞の廣告にもさう出してやつたぢやないかな？

フォード夫人（左上から降りて來る）おやッ、この人達は、あんなに御斷りしたのに、まア非道いわね！

紳士の三　いや奥さん——御令閨閣下、實はのつぴきならぬ次第で、どうも甚だ失禮でございました。どうも大變結構な御庭で。すると、フォードさん、今の御話につきますと、フォード・モータアでは、別に失業者は殖えてゐないわけですな？

フォード夫人　この人が見えてよ。どうしませう？

フォード（名刺を手にし）ほう、ヤコブ・ハートフイルド、三文代言だつたな？ それ、ずうつと昔、マルカムの手下で株主になつてゐた。——よし、ちよつと會つてやらう。ここへ通るやうに。

フォード夫人　汚い身裝をしてよ、大丈夫？

フォード　馬鹿云ひなさい。汚い身裝をしてる時こそ、人間は恐いこたア出來ないもんだ。お前こそすこし近頃派手な着物を着過ぎるぢやねえのか？

新聞記者達一生懸命に聞き込む。

フォード夫人（記者達へ）これですからね、うちのお父さんと來たら、アメリカ一なんて云はれる富豪の癖に、まだづぶのお百姓なんですもの！ すこしは書いてやつて下さい。馬鈴薯は皮つきのままをテーブルへ載せる。女中がたつた三人しか使つてゐない、食事の

給仕なんか贅澤だと云ふ、何のために金を殘すのかわからないツこ——。(去る)

フォード　やれ、やれ、女つていもんは、小鳥と同じことさ。時に、お前さん方はもう歸へる時だな。

紳士の一　その失業問題で、まだ二三腑に落ない點がございますが——。

フォード　もうええて。今日はその位にして置けよ。

紳士三人　ハッ、では、又、明日にも。(右へ去る)

法律家ヤコブ、やや粗末な洋服で左から降りて來る。

監督靑地圖を持つて、右から上がつて來る。

監督　ヘンリさん、ここんとこは、どうも圖面のやうに行かないね。すこし角を削らないと高低が出來ますぜ。

フォード　ジョオ、お前アその方のエンジニアだから、みんなお前に任せるよ。

監督　ハツ、ぢや、ちよつとサイドウオークへ跨くかも知れませんぜ。(右へ去る)

法律家ヤコブ　御久し振ですな、フォードさん！

フォード　よう、古狸、どこに燻ぼつてゐたね？　相變らず、猶太人なみに達者ぢやあないか。見たところ？

法律家ヤコブ　益々御盛んですな。——時に、今日は、ちよつとこの邊まで用があつてやつて來た途中なんで御寄りしたわけですがね。それで、ちよつと御訊ねしたいこともありましてな——。

フォード　ふむ、何だね？　今、お前さんは、何をしてゐるのかね？

法律家ヤコブ　勞働者の救護をやつてゐますよ。名前は、まあ、何でもいいのですが——。

フォード　寄附かい？

法律家ヤコブ　眞平ごめんです、その方は。

フォード　ほう、偉らい。それでなけりや駄目だ。前から、お前さんはすこし眼のつけどころがちがつてゐたつけな。で——？

この時、二人の守衞つかづかと右から登場して、ヤコブの兩腕を摑まへる。

守衞の一　この野郎、太い奴だ！

守衞の二　社長さん、これですよ、この惡漢です。こいつが、組合の親方なんですよ。先刻も表門で演說してましたよ。集まつた連中がわいわい大騷ぎをやつとるんです。怪しからん奴だ！

フォード　何、組合の？（ヤコブへ）さうか？

法律家ヤコブ　さうだ。

フォード（守衞へ）お前達、あつちへ行つとれ。組合の親方がこわく

て、ヘンリ・フォードは仕事が出來ない。

守衛の一　だつて、その危險な奴ですぜ。何をするかわかつたもんぢやないので。

フォード　ええから、向うへ引込め。(守衛達去る) それで、お前さんの勞働者救護とやらは、やつとわかつたとして、わしに何の用ぢやな？

法律家ヤコブ　新型『A』式をやるまでに、全國の工場を何日間休ませて置く考へですか？――それだけ御訊ねしたいのですよ。

フォード（愕然として）休ませる？――冗談だらう、あの煙を見なさい、あの通り作業はつづいてるんぢや。どこからそんな嘘つぱちを聞込んで來たんかね？

法律家ヤコブ　ニュー・ジヤージイのキヤーネー工場、ペンシルヴアニアのチエスター・セントポール、コロラドのデンヴアー、サンフランシスコ、それからこのデトロイト、わけてもキヤーネーとここは一番非道いやうですな。

フォード　みんな見て來たのかい、お前さんが？

法律家ヤコブ　調べて見ましたよ。商賣ですからね。

フォード　それぢやお前さんの方がわしの知らんことを知つとるのかも知れんよ。又、わしの眼の屆かんちうこともある。したが、それで何をお前さんがしようとするのかね？

法律家ヤコブ　私は何もしませんよ。しかし、勞働者をあいふ風にして置くことは、どんな結果になるか、考へたことがありますかね？――貴方は、賃銀を昇せると云つては、たしかに昇せる。したが昇せて置いて、作業中止をどしどしやりや、結局下げたと同然さ。貴方の御客さま一點張りの商法から、貴方は自動車の値段を下げた。下げたのは、そりや、自動車業のほかの資本家を打ち仆すための良い口實であると同時に、代理店のコムミッションを減らした。つまり、貴方の懐ろには、下げない時と同じ儲けが轉ろがり込んだわけだ。しかも、大戰前の値段と比較べると、まだ貴の自動方車は高い！　どうも、仲々貴方の商賣上手には驚きますが――唯一つ、貴方のちつとも考へてゐないことがここにあるのでね。そりや、貴方の巨億の富の生産をやつてる機械のやうな人間ですよ。

フォード（つとめて寛大に）考へてやつてるぢやないか？　働く時間を短くして、金をどしどし拂つてやつてる。一日日給最低六弗だぜ。この不景氣に、どこの會社でそんな日給を出してやつとるところがあるかい？

法律家ヤコブ　表面は大變結構な話ですよ。殊に商賣仇をブッ潰すには以て來いの手だ。しかし、一日六時間、貴方の工場で働いてごら

ん、人間は三年で不具になりますぜ。それに、貴方のとこで働いた勞働者は、自動車の知識なんかちつとも持たない、ほかの自動車會社ぢや傭つてくれない、つまるところ、不具にしてその人間を一生貴方は飼ひ殺しにして使ふことになるんです。それも、毎日仕事があればよし、時々作業停止だ、新型輸入だ、と云つちや、十日も三十日も休ませりや、人間一體どうなるものと思ひますかね。まして、近頃は失業者が多いので、どしどし解雇や馘首が多くなる。貴方の工場を放り出された勞働者は、一體どこへ行つてパンを食ふのかね？――實に貴方といふ人は、貧乏をまで食ひ物にする恐るべき人だよ！

フォード（少し機嫌が悪くなる。塀の監督へむかつて大聲に）おい、ジョオ、この馬の骨、そのサイドウオークをうんと削らなくちや駄目でねえか！　馬鹿ッ！――ふむ、それで、云ふことはそれつきりかね？

法律家ヤコブ　私は別に何も云ふことはないんだがね。ただ、どれだけ貴方の内情を知つてるか、ちよつと御話したまでのことですよ。――で、今度の作業停止は何時までつづくか、それだけ私の方から改めて御訊ねしようと思ふんです。

フォード　商賣の秘密は絶對に洩らせないぜ。こりや、商賣だ！

法律家ヤコブ　勞働者十五萬人が、大部分一生不具になつて造り上げた産業を、貴方は平氣で、自分の商賣だと仰曰るのか？

フォード　當り前さ、俺の商賣だよ。一體、誰がはじめたと思ふかい？

法律家ヤコブ　勞働者ですよ。

フォード　俺の頭だよ！

法律家ヤコブ　貴方の頭は、技師の頭腦以外に値打はないんだよ。その技師の發明は、それ相應の値打はあるとして、あとは全部勞働者が拵へたもんですよ。

フォード（苛立たしく）お前は、俺のやつてる仕事は自動車だけだと思つてるらしいが、ほかの事業を見ろ！

法律家ヤコブ　何を見ても同じですよ。私はね、これで、貴方の會社は、目ぼしいのは百十五六ヶ所歩いてますぜ。平職工としてですよ。私は、一生かかつても、貴方の事業をどん底まで發いてやる心算でゐるんだ。その決心をしてから、もう十二三年にはなる。貴方が口に平和を說きながら、戰爭でどんなに儲けたかもちやんと數字で調べ上げてあるよ！　農村々々といかにも地方農民のことを考へてるやうな廣告をしちや、とどのつまりは、トラクターを賣り込む手さね。――いいかね、フォードさん、二つの重大な危機が貴方に

迫つてる。一つは原油の缺乏だ。千九百二十七年のアメリカ重油保護局は、アメリカに石油のあるのはあと六年だと云つてるぢやないか！ もう四年だぜ、アメリカのガソリン自動車が幅を利かしてゐるのは！ それならと云つて、貴方は、メキシコや南米へ手をつけなさるだらう——どつこいさうは、世界がゆるさない！ 戰爭だ！ 英國と先づ戰はにアならん！ 誰が——？ それ、貴方の不具にした××××がかい？ どつこい、これもさうは承知しないよ。もう一つの危機は、勞働者さ。貴方が、この間六萬人から全國で首にした勞働者は、不具になつて、どこへも行き道がなくなつて、毎日アメリカ中をフォードは詐僞だ！ 山カンだと云ひ觸らして歩いてますぜ。まだある、貴方の下で仕事をしてゐる人間、これア殆ど全部と云つていい位精神病者だよ！ 誰が見たつて、貴方の工場の組長や監督連を、普通の正氣な人間とは思ひやしない。それこそ良い看板だ。フォード工場で働くなといふいい看板さ！——もう、さうさう勞働者を日給や時間で釣り込んで、甘い汁が吸へなくなるね。その證據、今貴方のところで使つてる人間と云へば、だんだん人間の單位が低くなつて、片眼だの、手んぼだの、跛だの、××の古手だの、盜人、暴力團などばかりになつてるぢやないか。さア、ヘンリ・フォード君、この二つの困難を前にして、貴方はどう切り拔けるつもりかね？——どたん場だ、はつきり返事をしろ！

フォード（嚇となつて）やい、ジョオ、手前どちだな！ 構はねえ、そのサイドオウークなんか閉ぢちめえ！ いゝよ、人間が通らなくたつて、そこは俺の土地なんだ！ 塞いで高く塀を築け。——もう云ひ分は、それつきりかい？

監督と勞働者、次第に大理石を高く積み重ねる。

法律家ヤコブ もう一つある。お前さんの生命が貰ひたいのだ！（ヤコフ、ピストルを出す）

フォード 面白い。取れ。欲しけりや持つて行くがいいぜ。見ろ、この脅迫狀を！（椅子から一束の手紙を出して、草の上へ投り出す）生命の欲しい奴、金の欲しい奴、そんなのは、毎日この通り何百となく俺を脅かしてるんだ。そんなことでビクつく俺ぢや仕事がやつて行けねえぞ！

守衞二人ヤコブの背後から近づいて、いきなり羽搔いじめに捻ぢ上げる。

フォード うむ、今呼ばうと思つてゐたところだつた。この客はすこし性質がよくない猶太人だて 構はない、警察へ引渡してしまへ！ ヘンリ・フォード、いくら年はとつても、（ヤコブの鼻を捻ぢる）貴樣ら猶太人にケチをつけられて堪るかい！ 行けッ！

守衛達、無理矢理ヤコブを捻ぢ上げて右へ退場する。

フォード　さア、飛行機の用意だ。フイラデルフイアに重役會議がある！

と、突然、積み上げた頭上の大理石の大角材が、何かの機みで・一つ眞逆樣にフォードの頭上へ墜落する。……

フォード（椅子から轉ろがり落ちて二間ほど下へ行つて手を突く）あッ！

監督ジョオ　親方、どうしやした？——よく眠つてゐなすつたが、夢にでもうなされたんでせう？

フォード　なアーんだ、お前達は、先刻からこゝにゐたのか？

監督ジョオ　ゐやしたよ。東側はもう大部出來上りましたぜ。

フォード　やつぱり、夢か——？

フォード夫人（階段から降りて來る）御晝飯ですよ。良い天氣ですこと！

フォード　お晝飯は御免だ。——どうも今朝すこし馬鈴薯をやり過ぎたよ！

（幕）

2

（その日の正午）

フォード・モータア會社工場構內の一部。

正面奧は切つて落したやうな、白い、高い壁である。上方に「フォード・モータア會社」と書いてある。壁のまん中に、窓が一つある。その傍らに柱が立つてゐる。壁と直角に、左端に、同じ色の高い塀がある。

右だけが通路、そこから人は出入する、そして塀で行詰まる。この近代科學の産物である顏のやうな息苦しさに午後の斜な日光が、烈しく照りつけてゐる。ちやうど、晝飯の終つた三十分の休みの時間。幕開くと同時に、夥しい人間の喧噪する聲が塀の外に聞かれる。

右から、二人三人づつ、工場勞働者が、その方へ引つけられて集まる。

工場勞働者は、右肩の釣り上がつた種類と、絶えず兩手を上げ下げする種類と、背をかがめて歩るく種類との三つしかない。彼等は、蒼ざめた無表情な顏をして、聲も人間並みではない。

今便宜上、右肩の釣り上がつた組を『肩』と呼び、兩手の上げ下げをする習慣のものを『手』と呼び、最後の種類を『背』と呼ばう。その他、片眼や、片手や、老人連などを加へて、始めは三四十人の人數であるが、最後にだんだん殖えて來る。

その一團が、二た組三組ほど、軟球を持つてキヤツチ・ボールの眞似をする。わづかに退化したスポーツ本能があるといふだけで、すこぶる元氣のない、幼稚園式な運動である。それでも、傍觀者は感心して見てゐる。

フオード、何か不安に驅られて出て來る。勞働者達一同敬禮する。

フオード　皆よく遊んでるね。人間は遊ぶ時が、その正體を出すもんだ。それツ、力を罩めて！——やア、今のは良い球だつた、キヤツチしつかりしろ！

肩の一　どうも、社長さんにさう賞められると、倍やり惡くくなりますよ。

肩の三　全くだ。まぶしいおてんと樣に顏を見られるやうだよ。

フオード　ああ、天下は泰平だな。スポーツの精神と、技術の練達と、利益の分配——これで、俺の工場も文句はないわい！

塀の外に、意外な大聲が聞える。フオード歩み寄る。そこに塊まつてゐる勞働者の一團が平身低頭する。

背の一　何だい、大騷ぎやつてるのは？

背の二　喧嘩ぢやあるまいな。

背の三　演說かな？——

背の四　この塀は俺らには高過ぎらア。

手の一　昇つて見ようぜ。ボールはやめた。肩が張る。

手の二　見ない方がいいぜ。又、監督に怒られるから。

手の三　見えないとなほ見たくなるもんだね。何かありさうだ。

手の四　大方、ほかの工場の連中がフツト・ボールでもしてるんだらうよ。

手の一　フツト・ボールをする元氣があるもんか——この近頃のスピード・アツプぢや。

手の三　叱ツ、社長だ！

肩の三　ちよつと、お前肩車を貸せよ。

肩の二　よし來た、俺が下で踏ん張つてやらア。

フオードもしきりに聽耳を立ててゐる。

塀の外の聲　フオードB工場の諸君！——

背の一　やつぱり演說だつた。

肩の三　もうすこしだ、我慢しろ！立ち上がれ、見えないぜ。

塀の外の聲　今日われわれデトロイトの失業勞働者五萬人は、これから市の大公園で、失業鬪爭デモンストレーションを行ふんだ！——失業鬪爭大會のデモをやるんだ！フオードB工場從業員諸君、諸君は、今セメントと鐵とで築かれた、工場といふ獄屋に働いてゐる賃

銀奴隷だ。だが、諸君の賃銀も職業も、果して絶對安心の出來るものかどうか、考へて見ろ！——この三日後には、フォード・モータア會社の全國工場では十萬人の職工を首切ることにちやんと幹部の間に內相談が出來てるんだぞ！

フォードぎくりとして、壁にすがる。

この間、肩や背や手や、その他の不具者達は、我れも我れもと塀に攀ぢ登らうとしては挫れ落ちて、一と溜りになつて渦を描いてゐる。

塀の外の聲　そんな風の前の籾殼みたいな諸君の職業は、縱ひ一日日給六弗で、時間短縮と云はれても、結局三日間の生命にしか過ぎないんだ！三日間だけ、諸君はその牢屋の中で生命を搾られる！三日間だけ、諸君は片輪になつて右の手だけを動かす！三日間だけ、自動車王のために小人島の小人達のやうに、むごつたらしい搾り取りに會ふんだ。それからあとは、どうだ？——俺達と同じやうに、諸君は街のまん中へおッ投り出されるのだぞ！　その時、諸君は何を持つてゐるか？利かなくなつた頭と、片輪な手足と、いびつな頭と、ものの見えない眼と、血の出るやうな貧乏だけだ！——ほかに何一つ持つて出る物がないぢやないか！おい、塀の中にゐる兄弟達、その三日間に未練を殘さずと、工場を出て來い！俺達失業勞働者は、諸君現業勞働者と手をつながないでは、アメリカ勞働者の問題が解決出來ないんだぞ！

塀の外から、赤青白黄の撒きビラが、颯と投げ込まれる。勞働者達、それを爭ひ拾つて讀む。フォードも近よつて、その一枚を手にして讀む。

フォード（讀む）『ヘンリ・フォードの正體暴露！おれ達の手で拵へた機械を、資本家の手からフンダクレ！おれ達は機械の奴隷ぢやない、機械をおれ達が使つて、農村の開發に、自然力との鬪爭に、そして一般文化の促進にするのが當り前だ！』

（ビラを揉みくちやにして投る）

フォード衝動的に職工達の間を掻きわけて塀の下へつかづかと歩み寄る。

塀の外の聲　諸君、大公園へ集まれッ！　門を開いて堂々と外へ繰り出せ！　即刻ゼネ・ストをやれ！

フォード　野郎共、待て！　誰か肩を貸せ！

片眼の男　親方だよ、社長だぜ！　貸して上げろ！

二三人肩を列べる。フォードその上から塀に躍り上がり、下を睨む。と同時に、失業大會組合の旗が颯と塀の向うにひるがへる。

フォード　おい、お前達は、ここは誰の所有地だと思つてるのか？

塀の外の聲　フォードだな？――ここを現在所有してゐるのは、イカサマ師のヘンリ・フォードだ。しかし、明日は誰が持つかわからねえ！　きつと明日×××だらうよ。

フォード　よし。現在の所有主である俺が、お前達にすぐここを立退いて貰ふことにするぞ！（下に向つて）おい、お前達、守衞を四五十人引張つて來てくれ。腕つ節の強い奴に來いと云へ。

職工達もじもじしてゐる。誰一人行くだけの勇氣も持たない。

フォード　さて、失業何とやら會の代理人ども、俺の云ふことをよく聽け！　現在、俺にはお前達の十萬や二十萬は樂に暮させてやるだけの金も力もあるんぢや。

塀の外の聲　それは××が拵へたものを、お前が×××したんだぞ！

フォード　その考へ方がまちがつてる！　事の序だから云つて置くが、俺は仕事をしないで遊んで、しやべつてる奴には、金は出さない方針だ。そんなに大聲で傳書鳩を驚かして歩るいてるより、何故俺んとこへ來て職業を求めないのか？（背後を顧みて）まだ來ないか、守衞は？

塀の外の聲一　やめろ、やめろ！　百萬遍繰返へしたつて同じことだ。

塀の外の聲二　俺達は、お前の工場へ何日通つたつて、一人として傭つてくれないんだ。噓をつけ！

フォード　そんならそれで、考へなほしてやる。俺も今度のA型をはじめるので、これから澤山の手が必要なんだ。

塀の外の聲一　はじめる前にア、十萬人の首をチョン切るのか？

塀の外の聲二　突き墜せ！　その野郎、見るも胸糞が惡るくならア。

塀の外の聲（多數）墜とせ！　墜とせッ！（旗竿をガラガラと振り廻はす。フォード放々の態で飛び降りる）

塀の外の聲　おうい、塀の內輪の兄弟達、勞働者はお互に手を握るんだぞ！　×××××××××！　即刻公園へ出ろッ！

フォード（うろたへて）おい、誰か守衞のところへ行つたか？（一同平伏する）この野郎供から意氣のねえ奴等だ！　お前等はそれでもアメリカ人かい？　早く行つて來い、あの外の狼が聞えないか？　あいつら、勞働者の生血を吸ふブローカーだぞ！

塀の外に、失業大衆がだんだん增加して行く氣勢。塀の內の勞働者も、次第に數を增して、互にビラを奪ひ合つて讀む。

フォード　仕方がない。監督のケーネーを呼べ！（一人走り去る）うむ、考へても癪な奴等だ。こいつら、俺の拵へた工場だ、散々食ひつめた揚句、すこしこちらの手都合があるとこの騷ぎぢや。えー

ツ、一と思ひに、飛行機から催涙弾でも投げつけてやりたいな！

鍛冶屋（すさまじく發達した體格になつてゐる）親方、何か荒療治ですかい？

フォード　この職工達を、早く工場へ押込めろ。塀の外に狼共がゐやがつて、咬みつかうとしてるんぢや！

鍛冶屋　ようがす。やい、野郎共、くたばり損ひめ、とつと職場へ駈けつけろ！　歩かねえと、この俺さまの拳が物を云ふぞ！（揮り廻はす）

平伏してゐた勞働者、じりじりと塀の下へ押し固められる。この刹那、一人の失業鬪爭大會代表、外側から塀の上へ乘つて、組合旗を勞働者達の上へ翻へす。

代表者　起て、勞働者、奮ひ起て！　××、×××、××に恐れるな！

平伏してゐた勞働者の中から猛然とした聲がある。

聲　行かう！　門を開かう！

多數の聲　門だ！――突進しろッ！

守衞達、右側に立列らぶ。勞働者群集、鍛冶屋、フォード、守衞達をも引包んで、一氣にわーッと右へ押し出す。代表者、高く旗を振りながら、向う側へ飛び降りる。

塀の外の群集の歡呼の聲。

稍長い間。

正面奥の窓開いて、×××××ヘンリ・フォード、そこから顔を出す。

フォード　どうも、社會主義ちうものは、不思議な怪物ぢや――。こりあ、ちと俺より發明者が、偉ら物だわい！　（幕）



隧道

未定稿「安城家の兄弟」の一部

善魔（自昭和二年二月至十二月　改造所載）
不動（自昭和三年一月至　五月　女性所載）
大地（自昭和四年一月至十二月　改造所載）
以上三篇の續篇

里見弴

その一

千葉を送り出して、まづこれで一段落と、胸の閊はおりたやうなものゝ、然し昌造は、決してからりと晴れ亘つた氣持ではなかつた。世の中には、男、女、男、或は、女、男、女の所謂三角關係で、身神を消耗し、時には一生をも犧牲にするほどの事件が、日々の新聞に現れるだけでも夥しい數にのぼるのだが、三人よつて、ひと晩話し合つただけで、綺麗に解決がついたといふ例は、さうたんとはあるまいと思はれるほどの、謂はゞ大出來の部で、自分が先に立つてそこへ導いて行つた昌造としては、相應得意を感じてもいゝ筈だつた。而もその結果を生むための仕向に、または言葉に、一つで

も正義を蔑し、得手勝手な暴壓を加へるやうなものがあつたとは思はれないのだ。正々堂々、公平無私の立場にゐたと信じられるのだ。それにも拘らず、我ながら正體の摑めない滓のやうなものゝ、胸底ふかく澱んで、墓參りをすませたあとの爽かさへも得られなかつたとは……。

玄關の戸締りをして、二階へ戻つて來て見ると、おしげは、八角火鉢の、あらかた灰になりかけた炭火に目を据ゑたまゝ、力なげに頭垂れてゐた。机の前の席について、昌造も、暫くは、云ふべき言葉を知らなかつた。──かうして、夫婦差向ひになつてみると、形の上では綺麗に片づいたこの事件も、寧ろこれからが始まりといふやうな感じにもなつて、千葉のゐた時には、決して聞かうとは思はないと云ひ切つた過去の事實を、隅から隅まで、一つ餘さず知りたいといふ煩惱が、抑へがたい力で盛りあがつて來た。二人の間の氣持に、平衡を持ち來たすためには、可哀想ではあるが、告白を強いることもまた止むを得まい、──そんな理窟までつけて、まさに昌造も、その知りたい欲念に己を任せやうとした。然し、目の前の、しよんぼりとした妻の姿を見ては、有繋にそれも躊躇されて、

「まアよかつた」

と、やがて口を切つて、「何事もなく、こんなことで片づいたのは、不幸中の仕合と云はなければならない」

意識して云つたわけではないが、手もなくこれは、「いろ〳〵御心配をかけて、申譯ありません」といふ風な、妻の謝罪を催促してゐるやうな言葉になつた。それに氣がつくと同時に、昌造は、自分たち夫婦の間の、心の離隔を、今更のやうにまざ〳〵と思ひ知つて、我ながら情なかつた。

いゝ按配に、と、この場合だけは云つてもいゝ筈なのだが、おしげは、然し、千葉がゐた間と變らない、頑な沈默を守りつゞけた。さうされると、折角和みかけた昌造の氣持も、いくぶん歪みを生じないわけにいかなかつた。

「今夜の俺のやり方に、なんかちつとでも不服があつたら聞いて置かう。遠慮なんぞ要らないから、正直に云つてごらん」

「いゝえ、そんなことありません」

「なければ、どうもすみませんでした、ぐらゐの挨拶はしてもよからうと思ふがね」

自發的に云はれゝば、てれて、顏を赤める方の昌造だつたけれど、云はないとなると、矢つ張りそこまで押しつけ、ねぢ伏せにかゝつた。

「どうもすみませんでした」

子供のやうに、たゞ云はれた通りを繰り返したに過ぎなかつたが、

然しその裏の心持は、わりにすなほに、平かなものらしかつた。少し席をいざらせ、ちやんと疊に手を突いて、昌造の膝頭すれ〳〵に頭もさげた。

「ぢア、今夜は、お前もさぞ氣勞れがしてゐるだらうから、これで寢ることにしようぢやないか」

頰にあてがつた右掌の小指の先を、輕く前齒で嚙みながら、頷き返した。

「床とつてくれないか」

八疊の方には、おしげのほかに、子供が四人ずらりと枕を並べて寢るので、いつも昌造だけ六疊へはみ出してゐた。おしげが、押入から夜具をとり出す間に、火鉢を片よせたり、座布團を積み重ねたり、手傳つてやつたあと、寢間着に着更へた。半分から上を硝子にした南緣の雨戸には、そろ〳〵もう曙の色が映つて來たが、雨のせいか、まだ雀の囀りは聞えなかつた。

立つてゐるおしげのそばへ行つて、靜に胸へ抱きよせながら、

「仲よくしようね」

と云つたのは、俺もしよつちうちをあけたりして惡いんだが、これからは仲よく暮さうぢやないか、の意味だつた。が、それと同時に、鼻の先へ來たおしげの襟もとから、魚の腐つた腸のやうな、とてもたまらない臭氣をかいで、昌造の心は、はツと竦みあがつて了つた。——昨夜風呂にはいり損ねたことは知つてゐるが、一日おきのその前の時にも、何かの都合でぬけたかどうかで、さういふ體臭を發したのか、或は寢間着に重ねた浴衣の洗濯の仕樣でも惡かつたのか、兎に角、そんな臭ひはあとにも先にも覺えがないのだから、何かよくよくの偶然に違ひないのだけれど、その突嗟、昌造は、全くそれを不義の臭ひと感じた。不義を罰して、天から下された體臭と感じた。——偶然の不幸は、なほそればかりでなかつた。おしげの方では、「仲よくしようね」といふ言葉を、全く違つた意味にとつて、困惑と羞恥とを全身に現しながら、

「でも、今夜は……」

と、微に呟いた。

昌造には、全くその氣はなかつたのだけれど、然しさう釋られてから、それを思ひ違ひだと明すわけにもいかなかつたし、また、「さうだね、、、、、」と、すぐ同意して了ふべき性質の事柄でもなかつた。

更にまた第三の、偶然の不幸が起つた。——おしげが立つて行つたあとに、昌造の布團の上に、丁度隱元豆の形に押しつぶされて、、、、、、、、、が一粒ころげてゐたのだ。——おしげの袂からでなし

に、どこからこぼれ落ちよう……。

「おい！」

昌造には、未かつて覺えのない、己を失ふほどの憤怒が破裂しかけてゐた。

「はア？」

「これはなんだ、これはなんだ！」

「…………」

「こゝイ來てみろ！」

あと戻りして來たおしげは、昌造が指し示す敷布の上へ、目を凝らしたが、それと知るや、さツと顏色が變つた。

「なんだ、これは！」

へたへたとそこへ崩折る耳もとで、

「きたならしい！　早く取らないか！」

紙を出して、震える指先に摘み取つた。

「どうしたんだ、それは！　なんの必要があつて、そんなものを袂に入れてゐるんだ！」

「…………」

「云へまい！　さつき千葉が、何邊も、自分たちは公明正大だと云ふから、俺も、無理にもさう信じたんだ。それに……。今夜でも、俺が歸つて來さへしなければ、それを使ふ氣でゐたんだらう！」

「いゝえ、そんなことありません」

「ぢア、なんのために持つてたんだ」

「昨日用箪笥を片づけてたら、抽斗のなかにこぼれてましたから、捨てようと思つて、ついそのまんま忘れちやつてたんです」

「何も捨てないだつて、ほかのと一緒に、箱にしまつとけばよささうなもんぢアないか。……嘘つくと承知しないぞ！」

「いゝえ、箱はもうほかへしまつちやつて、荷造りしたあとだつたもんですから……」

「昨日お前は、晝間ッから寢間着を着て鼾いたか！　馬鹿！」

「ですから、それは、まだ昨夜のつもりで云つたからで、今朝から云へば、つまり一昨日の晩のことなんです。嘘ぢやアありません」

「俺は、さういふことがあつたからつて、急に憤りだしたんぢアないぞ。なければ許すが、あつたら許さないなんて、さつき、ひと言でもそんなけちなこと云つたか。そんなことはどつちでも仕方がない、とちやんと諦めをつけてたから、一切聞かうともしなかつたくらゐぢアないか。さういふことがあつたといふ過去の事實は、今更どうにもしようがないんだ。それより、今お前が、俺の前で嘘をつくかどうかといふことの方が、もつと事は重大なんだ。俺はその嘘に對して腹を立

てゝるんだ」

「いゝえ、嘘ぢやありません、嘘ぢやありません」

まるで子供のやうな澁面をつくつたと思ふと、おしげは、聲をあげて泣きだして了つた。

「そんなに、夢中になつて頑張ると、俺はその通り信じちまうぞ！　いゝか！」

から怒鳴りつけるやうに云つたが、この言葉は、たゞそれだけでは、おしげにはちよつと嚥み込めなからうと氣がついたので、やゝ調子を鎭めてつけ加へた。「嘘といふものも、相手が信じてくれなければ、つまり嘘としての役目を果さなかつたわけで、結果から云へば、その嘘は、つかなかつたも同然といふことになるが、一旦相手を信用させて了つたが最後、そこに肇て嘘としての効力が發揮されて、それからはもうぬきさしならないことになつちまうんだ。いゝか。だから、俺が、お前の云ふことを信用しないでゐるうちは、嘘なら嘘だと、すなほに白狀しちまつた方が、あとでお前が樂なんだ。今のお前の心持では、こればかりは死んでも明せない、さうと知られて、このさき、夫婦としてやつて行けるもんぢアない、といふ風に思ふのも無理アない。今さら、實はかう〳〵でした、と話すことは、それアお前として、どんなに辛いか、俺ンだつてよくわかつてる。また俺としても、はつきりさうと知ることは辛いんだ。が、然し、そんなことは、總て一時のこつた。月日がたつにつれて、だん〳〵薄れて行く辛さだ。ところが、これに反して、お前が今夜つく嘘は、今夜を振り出しに、お前の一生涯、最期の息をひきとる瀬戸際まで、必ずお前を苦しめずには措かないんだ。いゝか。今までの行きがゝりから、こゝで綺麗に足を洗つて了ふか、これからさき一生涯の苦勞の種を蒔くか、さういふ問題なんだ。少し考へてみれば、どつちがいゝか、子供にだつて思案のつくことなんだ。乘りかゝつた船だといふやうな氣持から、今お前が頑張り通せば、仕方がない、俺も信じるよりほかないといふことになるんだ。信じられた事柄がほんとうなら、それアもうこれ以上結構なこたアない。が、もし、萬一嘘だつた場合には、信じられると同時に、その嘘が、嘘としての役目を果すことになるんだ。さうなつたら大へんだぞ。今の俺は、いくらお前が泣いたつてどうしたつて、まだ〳〵お前を疑ぐつてる。この、疑ぐつてゐられる間が、お前にとつては、最後の考へ直しどきなんだ。この期をはづして、俺に信用させちまつたら、——いつかまた折を見て、なんて思つたつて、その時には、尚更きり出しにくゝなつちまうんだし、まづ一生涯の苦しみを背負ひ込まなくつちアならないもんと覺悟しなきやアならないんだ。いゝか。——俺は、決してお前を責めて、無理やり白狀させよう

とかゝつてるんぢアない。ほんと云やア、俺だつて、そんなこと聞きたかアないんだ。だけど、お前に、一生涯つき絡うやうな苦しみの種を蒔かせたくないから、それでこんなに縷く云つてるんだ。いゝか。わかつてくれよ。よウくわかつてくれよ」

　いつか、背なかに手をかけ、顔を覗き込むやうにしてゐたが、こゝまで云つて來ると、昌造は、自分自身の言葉に感動して、不覺にも、喉がつまりかけた。

「でも、……でも、嘘ぢやなんですから……」

「まア、さう直ぐ返事をしずに考へてくれよ。これを考へてくれ、――一時のことゝ一生のこと。切りをつけることゝこれから始まること。はつきりこの區別を考へてくれ。どつちがいゝか、――どつちが今後のお前が仕合か、それだけを、構はないから、ごく利己的に考へてみてくれ。すぐわかるこつた、すぐわかるこつた！」

「いくら仰有つても、……もう勘忍してください！　苦しいから、……苦しいから……」

　まるで腹痛みか何か、肉體的の苦痛に襲はれたやうに、兩掌を鳩尾に差し込んで、身を揉み、のたうち廻つた。この苦悶の樣が、昌造に、とてつもない聯想を起させた。と云つても、彼としては別に不思議でもないのだが、飲みすごして歸つた翌朝の五六時頃、きまつて始まる自分自身の嘔吐の苦しみだつた。それが、たいてい月三四度はあり、苦しさも苦しいし、癖のやうになつて了つたのも氣になるので、前年の初夏の頃には、一時病院通ひをしてゐたくらゐで、場合が場合だけに突飛ではあつたが、然し聯想の糸筋は存外短いのだつた。

　と思ふと、昌造の手は、殆ど反射的に、妻の背筋を逆撫に撫であげてゐた。

「よし、よし。構はないからお吐き！　惡いものが胸にこだはつてゐるから苦しいんだ。吐いてお了ひ！　なんでも構はないから、あらひざらひ吐いてお了ひ！　ね、さうおし！　吐いちまひさへすれア、あとはすぐ樂になるんだから……」

　これを、比喩として云つてゐるやうなつもりはなかつた。さうして元氣をつけながら、背筋をさすつてやつてゐれば、何か必ず形あるものが、げろ／＼と出て來るやうに感じてゐた。その汚いものゝあと始末も、決して厭ひはしない、といふ氣持だつた。

「さア、ひと思ひに吐いてお了ひ！　恥しいも何もありやアしないぢやないか！　さア、お吐き！　お吐き！」

　然し想ひは、消化しきれない飲食物と一緒に、胃の腑にこだはつてゐるものではなかつた。撫ぜやうとさすらうと、そこからは、何ひとつ出て來さうな道理もなかつた。

たうとう昌造は、癇癪を破裂させた。魚の腐つた腸の臭ひのする譫言を、力いつぱい突き退けると同時に、

「これほど云つてもわからないのか！　馬鹿！」

自ら堅く封じて十年あまりにもなる癇癪の、この突然の破裂のあと、すぐ彼に飛びかゝつて來たものは、極度の口惜しさだつた。兩掌に顏を覆ふ遑もなく、齒を嚙み鳴らして泣き叫んだ。

「マ、ア、マ、ア」

身を起して、隣の八疊へ出ようと、おしげの手をかけた襖は、彼方からあいて、長男の昌一が、ものに脅えた顏つきで、寢間着の裾に蹴躓きながらよろけ込んで來た。――遽に取り繕へるその場の有樣ではなかつた。有樣に憚りはないにしても、さう、おいと云つてそれと鎮まる亢奮ではなかつた。

「マ、ア……」

「あつちイ行つて、大人しくねんねなさい」

さう云ひながらも、おしげは、ぼろ〱涙を落しつゞけてゐた。

「昌一！」

鼻の穴を擴げ、口尻に力を罩めて、一生懸命嗚咽をこらえながら、昌造は、母親の膝にとツついた子供に、嚴しい聲をかけて了つた。「ママは、嘘をつきかけて、今パヽに叱られてたところなんだ。お前も、一生、どんなことがあらうと、決して嘘だけはつくんぢやないよ。いいかい。何が惡いと云つて、嘘ぐらゐ惡いもんはないんだからね。いいかね！　わかつたね！　よく憶えとくんだよ！」

云ひかけてから、昌造も、氣違じみるまでに愚しい自分の行爲を反省し始めてゐた。で、手短にそこで切つて、今度は母親の方へ、

「いゝから、お前、つれてつて寢かしておやり。もうぢき女中たちも起きるだらうし、……兎に角さア、お前もよウく考へときなさい」

子供の背なかから延した右の掌先に、袖口をしやくひあげ、兩の目を交互に拭いてゐたおしげが、何を思ひ出してか、また一段と泣き聲を高めて來た。

「さア、早く行つて寢なさい！」

子供の背なかを、輕くぽんと叩いて、「昌一！　なんでもないんだから、安心してよく寢なくつちア駄目だよ」

八つになる、もう可なり重い體を横抱きに、やつと腰を切つて、なほしく〱すゝりあげながら、おしげが八疊へはいつて了つたあと、昌造は、頭からくるツと布團をかぶると、力いつぱい我と我が胸を抱き竦め、バリ〱齒がみをして、たゞ一人の悲しみと口惜しさに溺れた。

溺れるといふことは、潮水では知らず、ほかの大抵のものならば、決してさうわるい氣持ではないのだ……。

一の二

その翌日、昌造は、前もつて、川崎といふ懇意の役者から、晩飯の招待をうけてゐた。場所は、この頃どうやら地震前のやうな客足を回復したと云はれる赤坂の沖津で、久振りにお民に逢ふだけを樂しみにしてゐたやうなもの丶、一昨日以來降つて湧いた事件に、極度の心勞やら寢不足で、そんな席へ出たい氣持などさら〳〵なくなつて了つたのだが、主賓として急に斷るわけにもいかず、兎に角、ちよつとでも顏を出すことにした。

　雨だけはあがつたが、銀灰色に曇つたまゝの日暮時だつた、着物を着更へ、自動車を呼んで置くやうに云ひつけてから、塀一重隣りの健吉のうちへはいつて行つた。これといふ職のない、このすぐの兄は、茶の間の長火鉢の緣に、一昨日の晩とはうつて變つて血氣のない顏つきを、兩掌の甲に支へ、ぐんなり氣ぬけのした樣子だつた。

「やア」

「やア」

　そばに細君の富子がゐたので、第一に耳に入れて置かうと思つて來た話はそのまゝに、袴の膝をきちんと折つて、「こないだはどうも…………」

「いや、……どつかイ出かけるのかい」

「うん、ちよつと、晩飯に呼ばれてるもんだから……」

「いかゞです」

と、そばから細君が、「大抵もう荷物、お片づきンなつて？」

「あゝ、さう〳〵。昨日一昨日、女中さんを貸して頂いたつて。すみませんでした」

「いゝえ。お役にもたゝなかつたでせうけど……。そイで、いつお引越です？」

「さア、まだはつきりきめてないんですがね……。成可く早く行きたいたア思つてるんですけど……」

「よござんすわねえ、田舍住居は。これからは、また特別よござんすわ」

「えゝ」

　氣のない返事をしてゐるうちに、富子も、それと察したか、次の間に立つて行つたので、昌造はひと膝すゝめ、聲を落して云つた。

「一昨日は、どうもいろ〳〵有難う」

「いや」

「昨日、あれから歸つてみると、丁度いゝ按配に來てゐたから、早速昨夜、話をもち出したよ」

「さうかい。そイで、どうしたい？」

「存外簡單に、すら〳〵ッと片づいちやつた」

「ふーん。それアよかつたね」

「どつちも、きつぱり思ひ切るつて云ふから、……千葉君には、今後一切僕のうちには出這入して貰はないことにしたよ。地震の時いろいろ世話になつた恩は恩として、どうもこれア、さうするより仕方がないだらう」

「無論それアさうだとも。君ンとこの引越がすむまでは、成可くこゝイも寄せつけないやうにしよう」

「そんな必要はないさ。……靴やなんか、昨夜持つて歸れなかつたもんを、ひと纏めにして、こゝイ屆けるやうに云つてといたから、來たら渡してやつてくれたまい」

「あゝ、いゝとも」

「君にも、とんだ心配をかけちまつたけど、まアいゝ按配に、何事もなくすんでよかつたよ。君が知らせてくれなかつたら、引越の手傳とかなんとか云ふんで、鎌倉まで事件をもち越すことになつたらうし、さうすれば、から簡單にやア片づかなかつたかも知れない」

「よく然し、さう簡單にすんだもんだねえ」

「うん。……なに、まださう深入りもしてなかつたらしい。體の關係なんぞ、斷じてないつて云ふんだ」

「ないつて？ ふーん」

この「ふーん」は、昌造をはッとさせた。遠慮から、あからさまに云はなかつただけのことで、健吉が讀んだといふ、おしげから千葉へ宛てた手紙のなかには、はつきりその事實を裏書するやうな文句もあつたのかも知れない。現に、鼻音に唸つた健吉の「ふーん」には、言葉にすれば「へーえ、事件はさういふ風に解されてゐるのかい」とでも云はふか、兎に角、意外の感が露骨だつた。町内に、知らぬは亭主ばかりなり、——この、誰の口にも馴染のある、昌造自身も、これまで、なんべん氣輕く誦んだか知れない川柳から、今日、これほど謎のきつい刺で突きさゝれようとは、全く夢にも思ひ設けないところだつた。この川柳を、一生、別に秀拔でもない戯畫として眺め去ることの出來る「亭主」には、それを鏡として、あんまり正直すぎる鏡として、つく〴〵己の影を映し見てゐる「亭主」の心事は、恐らく火星の出來事だらうけれど、爾後彼が、舊い芝居にある「お家の重寶、何何の名鏡」を差しつけられた「怨敵」のやうに、この一駄句の前に慴伏して、敢て起ち得ないのを以つても、その一斑を察知すべきだ……。

千葉は敢然として「公明正大」を主張し、おしげは、泣き喚いて

「嘘ではない」と云ひ張るのだ。疑念は、それをもつ者の恥だ。——この考へを力に、危くも昌造は、朦朧として眼前に浮びあがつて來た「町内に」の名鏡を、押し退け、振り拂ひながら、

「うん。いゝ按配に、まだそこまではいつてなかつたんだ」

と、きつぱり云ひ切つて了つた。

「さうかい。それアまア何よりだつた」

云ひ切る言葉といふものは恐ろしい、——今度は健吉も、他意なく頷き返し、あまつさへ喜びを述べた。

「いろ／＼心配して貰つたから、ちよつと、そいだけ報告しとかうと思つて……」

丁度、自分のうちの門前に、自動車のとまる音も聞えたので、昌造はさう云ひながら腰を擡げた。

「それア、態々どうも……」

襖をあける音に、

「おや、もうお歸りですか」

と、愛想のいゝ細君も送りに出た。

一の三

いつもほどの元氣はなかつたけれど、酒席の好きな昌造は、ちよつとのつもりでも、歸りは矢つ張り十二時ちかくなつて、無論うちぢう寢靜まつてゐた。玄關の戸は、呼鈴の音に起きて來た女中があけてくれた。茶の間で着物を着更へ、足音しづかに二階へあがつて行つてみると、間の襖をあけ放した八疊の、おしげの寢床がむく／＼と動いて、そばに寢かした末の子の目を醒させないやうに、そうッと身を起しかけてゐるところだつた。亂髪を掻きあげながら、低聲に、

「お歸ンなさいまし」

「ふん」

鼻音で答へて、「寢てゐたのかい」

「いゝえ」

「大して眠むくなかつたら、ちよつとこちイ來ないか」

「はい」

はだかつた襟元を掻き合せながら立つて、掛布團の上へ脱ぎ捨てゝあつた羽織に手を通した。その間に昌造は、座布團を出して、机の前の自分の席と差し向ひに置いた。

「こゝイ來てお坐り」

昌造もきちんと端座した。だいぶん飲んでゐる筈の酒が、どこにどうなつたか、冴々としたあたまだつた。

襖の蔭で、寢間着帶を締め直してゐるらしい音がして、暫く待たせ

てから、おづ〳〵とはいつて來たおしげを顧て、

「そこ、締めとき」

と、顎で、間の襖を指して、「昨夜みたいに、また子供を起しちまうといけないから」

改つた席に招かれた客のやうに、おしげは、座布團をはづして坐り、伏目に、膝の上の掌先を絞りあげてゐた。

「お敷き。……なんにも、そんなに、固くなることアないよ」

口尻を引き歪め、片頰の靨を渦のやうに深くする、——これは、てれた場合、きどつた場合、反感を抑へてゐる場合、內心の喜しさを嚙み殺してゐる場合など、可なり用ゐる場所の廣い、おしげ獨特の表情だつたが、こゝでは、いくぶんの反感を含んで、その顏つきになり、座布團の上へ席を移した。昌造も、その心持を映すと、彼としてはやゝ意地わるいもの云ひで切り出した。

「每晩々々とツ捉つて、やりきれないと思つてるかも知れないけど、俺の方ぢア、まだ話の結末がついてるタア思つてないんだから……」

「いゝえ、そんなこと思つてやしません」

「うん。そんならいゝが、……どうだい、よく考へてみたかね、今朝俺が云つたこと?」

「えゝ。……でも、あたし、ほんとうにそんなことなかつたんですから……。一體、そんなこと、誰が云つたんです?」

「云へば、お前は、その人を恨むだらうが、それアとんでもない間違で、恨むどころか、却つて有難いと思はなきやアならない……」

「恨みやアしませんけど、……吉井のお兄さんでせう?」

「そんなことを、第一にお前が訊きたがるのからして、甚だ不謹愼だと思ふけれど、ちつとも隱す必要はないんだから云ふが、——さうだよ、健ちやんだよ」

きゆうツと、口尻を吊らせて、

「さうでせうねえ」

「それごらん。すぐその通り反感をもつぢアないか」

「いゝえ、でも、それア、ちつと氣をつけたら、ぐらゐの注意なら兎も角、そんな……」

「あて推量だつていふのかい?」

「ずゐぶんひどいと思ひますわ」

「お前がそんなことを云ふんなら、聞かせてやるが、健ちやんは、何も、はたから見ての樣子やなんかで、あてずツぽうを云つたわけぢアないんだよ。證據、つて云ふのもへんだけれど、偶然、お前から千葉へ出した手紙を讀んで、これアこのまゝほつて置けることぢやないと思つて、そこで肇て俺の耳へ入れようつて決心をしたんだよ。おツち

よこちよいに、餘計なお節介をしたもんだ、といふ風に、もしお前が考へてゐるとすれば、大間違で、それこそばちがあたるくらゐなもんだ！」

今夜は、わりに潤達に口を利くな、と、内心うれしく思つてゐたのに、それで、急にまたおしげは、むづッと默り込んで了つた。昌造も、然し、自分をおしげの立場に置いてみて、この第三者の告口を、有難い、忝いと思へる日が、──一生來ないでもそれまで、來るとしても、相應永い年月を經ての後だらう、と、その察しは充分についてゐたので、

「尤も、今のお前として、有難いなんて氣持は、逆にしてふるッたつて出る氣支はないが、──それアまた、實際無理のないことなんだが、然しだね、だアれも俺にその話をしてくれなかつたとしたら、一體、このさき、どういふことになつて行つたと思ふ……？」

「いゝえ、それアあたしだつて、良心にとがめて、苦しくつて苦しくつてたまらなかつたんですから、いづれ近いうちに、自分からお話しするつもりでゐたんです」

「ふーん」

腑に落ちかねた返事だつた。「然しお前、俺に話すつたつて……。かう〳〵いふわけだから、離縁してくれ、とでも云ふつもりだつたのかい？」

「いゝえ」

とんでもない、といふ風に、肇て目をあげて、「あたし、一度だつて、そんな氣になつたことありませんわ」

「をかしいぢアないか、だつて……」

「ほんと云ふと、今度の引越を幸に、綺麗にあの人と絶交しちまつて、それから、すつかりあなたにお話して、許して頂かうと思つてたんです」

「だつて、お前は、昨夜、千葉のゐる前で、立派にちやアと、一生あたしはあなたが好きですつて、さう云ひ切つたぢやアないか」

「嘘よ、あんなこと……」

身をくねらせ、甚だ場合に適はしくないしなをした。

あまりの事の意外さに、昌造も、すぐには口が利けないほどだつたが、やがて憤怒は、じり〳〵と、肚の底から煮え沸つて來た。

「嘘だ？」

その調子の烈しさに、ちらとあげた目が、昌造のとかち合ふと、忽ち伏せて、石ころのやうに身を固めた。

「ほんとうに嘘か？」

睨め据ゑた目に、妻の姿が、遠く、小さく、すうッと引き退いて行

くやうな錯覺を感じながら、「嘘だとすれば、お前は實に恐ろしい女だぞ！ 一生を賭けて誓ふ言葉に嘘がつけるといふだけでも、とても俺なんぞは思ひも及ばないくらゐだが、而もその相手が、假にも自分の愛した男だといふに到つちア、それアもう立派な毒婦だ！ お前がそんな、白々しいからくりの出來る女だとは、ほんとは俺ア、夢にも思つてなかつたぞ！ 一體それア、どうしたつてことなんだ！」

こう／＼に身を竦めて了つたまゝ、無論これには答へられなかつた。

「俺の前で、ついうつかりあんな風に云つて了つたことを、あとンなつて後悔して、なんとかして取り返しをつけようと思ふんなら、――そのお志は有難くうけるが、それこそ實際餘計な斟酌だからな。そんなこたアしてくれない方がいゝんだ。良人のゐる前だらうとなんだらうと構はず、お前が、自分の本心を吐露したつてことは、――それが俺にとつて、どんなに辛い事實だらうと、結局俺としては嬉しいんだ。よくそれだけの眞劍さをもつてくれた、といふ意味で嬉しいんだ。然し、これに反して、愛した男と別れようといふ、その最後に、一生を賭けてまで誓つた言葉が、その場かぎりのお體裁だつた、といふことが平氣で出來る女つてものが、一體どういふ質の女か、お前にやアそれがわからないかなア」

「でも、あたし、可怕かつたもんですから、つい……」

「可怕かつた？ 何が可怕いんだい！」

やゝ暫く躊躇してゐたが、やつと、消え入りさうな細々とした聲で、

「一緒に死なうのなんのて、この頃、そんなことばかり云はれてたもんですから……」

それきり絶えて了つたあとを、昌造の方で云ひ補つて、

「あんまりすげなくして、殺されでもしたら、と思つたのか？」

微かに頷き返すのを見ると、烈しい憤怒のなかにも、微風のやうな憫笑の、柔かく、おのづと胸に通ふのを覺えた。「二人ッきりでゐたわけぢアなし、そんな馬鹿なことがあるもんかな」

「ですけど、昨夜だけのことぢアありませんから……」

「いつどこで、刄物三昧に及ばれるかわからないつて云ふのか」

「鎌倉に引越してからなんぞ……。めつたにあなたは、うちにはいらつしやらないし……」

「だいじよぶ、だいじよぶ」

いつの間にか、笑ひ帶びた聲になつて、「そいだけの元氣があるくらゐなら、昨夜、あんなみじめな返事をしさうな筈アないぢアないか。お前を引きとつて、立派に添ひ遂げてみせる、つて云ふんなら、俺の

方ぢア、それを妨げようとはしない、とまで、こつちから云つてゐるのに、さうしたいのは山々だけれど、生活のあてがないから見合せる、つて風な、すこウし虫のある人間なら、意地にも人前で云へないやうなことを云ふ男ぢアないか。何がお前、こつちから頼んだつて、そいだけ思ひ切つたまねが出來るもんかな。——なんて、あんまり惡るく云つたら、お前は不愉快かも知れないけど……」

「不愉快なんて、そんなことありませんわ。……でも、あの人のことなら、一生涯、出來るだけの世話はやくんだとかなんだとかつて、よくそんなこと云つていらしつたあなたが、急に……」

「それアお前、世話になつた恩は恩、人としての値うちは値うち、それとこれたア全く別問題で、恩人なら、どんなくだらない人間でも褒めなきアならないつて理窟はないんだからね。それに、急に、つて云ふけど、決して急ぢアありやアしないよ。これまでだつて、惡口こそ云へ、あの男の、人間としての價値を認めるやうなことを云つた覺えはないがね」

　日常の會話では、辛抱のなる限り、「然り」の形で返事をし、めつたに「否」では答へない昌造だつたけれど、少しでも叱言めいた言葉になると、相手の出ようとする鼻、出ようとする鼻を、一々手嚴しく叩きのめして、仕舞までとツくりと聽いてやつたり、少々の無智、無謀なら、大目に見すごして、時には彼方も立てゝもやる、といふやうな、——惡く云へば老猾さだが、よく云へば寛忍大度をもつてゐなかつた。頭ごなしにぽん〳〵やり込めるだけが、決して叱言の能事でないことぐらゐ、平生はよく承知してゐるのだけれど、いざとなると、それだけの餘裕を欠いて了ふのだ。それどころか、時には、そのやり込める面白さに溺れて、肝心の叱言の主旨を忘れて了ふことさへあつた。今も、いくぶんさうなりかゝつてゐることに氣がついたので、本題に立ち歸らうとして、

「そんなことより、先刻の續きだがね、一生千葉が好きだ、といふ方がほんとで、可怕かつたから、いゝ加減なことを云つて歸した、なんていふ方は嘘なんだらう？　そんなこと、ちつとも俺に遠慮する必要なんぞないんだから、正直に云へよ」

「それア、一時、好きだつたことはありますけど、この頃では、先刻も云つたやうに、あんまり死なう死なう云はれるんで、可怕くつてたまらなかつたんです」

「そんなら、何も、あのとき默つて別れちやつたつてすんだこつちアないか。それも、かうして別れることになつても、あたしは一生あなたを愛し續けるが、あなただつてさうでせうね、つていふ風に、彼方から念を押されでもしたのなら、つい、あとの祟りを可怕がつて、えゝ、

さうです、と云つて調子を合せちまつた、つてこともあらうけれど、彼方ではなんにも云つてないのに、わざ〳〵お前の方から持ちだしたんぢアないか。それまでにして騙す必要はなかつたらうと思ふがな」

「でも、どうせ、これッきり逢はない人なんですから……」

「何を云ふ！」

昌造は、もう一度またかッとなつた。「これッきり逢はない人なら、尚更のこつちアないか！ほんとうの心の底をあかし合つて別れてこそ、いつ思ひ出してもいやな氣持をしないですむんぢアないか。たつ鳥あとを濁さず、つて云ふが、お前のは、どうせ飛んでつちまふもんなら、あとは濁らうとどうしようと、こつちの知つたこつちアない、つていふやり方だ。俺ア、お前を、今が今まで、そんなひどい女だとは思つてなかつたぞ！」

ぢッと睨め据ゑたまゝ返事を待つたが、やけになり、ふてくされて了つたのか、おしげは存外こたへない顔つきで、もぢ〳〵と、尻の置き場を變へたりしてゐた。

「さういふ際に嘘のつける女だとなると……」

昌造の氣持も、いくぶんひねくれて來た。「昨夜の藥の一件だつて、ちつともあてになりやアしない。あれもみんな嘘だらう！　一緒に玉川邊へ出かけたことなんぞも、お前の手紙に書いたつたさうだが、……さうでなくつたつて、俺の留守中にも、しよつちうちで泊つてたんだし、機會はいくらだつてあつた筈だ。かういふ時に、ひと思ひに、正直に云つちまつて、あとさば〳〵した方が、どのくらゐお前としても仕合か知れないんだぞ。云へよ、思ひ切つて云つちまへよ！」

「でも、ほんとに、そんなことなかつたんですから……」

「然し、二人ッきりで、玉川なんぞへ出かけるつてことは……」

「二人ッきりぢアありません。敏ちやんをつれてきました」

まだ第二回目の誕生日も還つて來ない末子の敏三を伴つたことを、さも立派な證人でもあつたかのやうに云ひ返した。

「一體、それア、いつ頃の話なんだ」

「つい先月でしたか、先々月の末でしたか、兎も角そんなに舊いこつちアありません」

「そんな時には、なんてつてうちを出てゐたんだ」

さも苦しさうに上體をくねらせてゐたが、

「そんこと、もうどうだつていゝぢアありませんか」

と、存外氣樂さうな笑ひ顔を向けてよこした。

「どうでもいゝことなもんか！」

「だつて、あなたは、過ぎ去つたことは一切聞かないつて仰有つたぢアありませんか」

「それア云つたさ。然し、お前が嘘をつくとなれば、俺としても訊さないわけにいかないからね。それに、第一、お前だつて、千葉と絶交した上で、俺の前に一切を告白するつもりでゐたんだつて云ふぢアないか。一旦それだけの決心をつけたもんなら、悪びれずに、すつかりほんとうのことを話しちまつた方が、どんなにあとさば〳〵するか知れやアしない。……今の、その玉川行きのことは、俺には全然無斷だつたのか」

「いゝえ、それは、一日お暇を頂くやうにお願ひしたことはしたんですけど、津田の節子さんと、久振りで、買物やらなにやら少しゆつくりして來たいからつて……」

「ぢア、その時分から、節子さんだけには明してあつたのか」

「まさか！ たゞあなたにさう云つてお願ひしただけで、節子さんなんぞ、なんにも知りやアしませんわ」

「ふーん。なか〳〵大膽なまねをするな」

「どうしてです？」

「どうしてつて、その留守に、偶然節子さんが訪ねてでも來たとしてみろ、一度にばれちまう話ぢアないか」

「どうせ、でも、あなたは、うちで留守番なんぞしてくださりやアしなかつたんですもの……」

「そのほかにも、どつかイ行つてるだらう」

「いゝえ」

「然し、四谷の停車場とかなんとか、落ち合ふ場所をきめてやつた手紙が多かつたつて話だぜ」

「四谷の停車場は、その、玉川へ行つた時ですよ」

「然し、ほかにもあつた筈だ」

「それア、四谷通りに買物に行く時やなんか、前に打合せて置いてほんの一二時間一緒に歩いたくらゐのことです。そのほかには、牛込の穴八幡に、虫封じのお札を頂きに行くのにつきあつて貰つて、歸りに田原屋で御飯を食べて來たことがありますけど、その時なんぞ、子供たちもみんな一緒でしたし、歸つてから、その通りあなたにもお話したと思ひますわ」

「無論、伊賀町のうちイも行つたことがあるんだらう」

「えゝ、一遍か二遍……。うちから貰つてつた長火鉢やなんかで、部屋がきちんとなつたから、一遍見に來てくれつて云はれて、行つたことがありますけど、いつだつて、長谷部さんも一緒にそこにゐたんですから……」

「一體、いつ頃から、どういふ機縁で、そんなことに、……そんなことツたつて、つまりお互に好きだつて氣持を通じ合ふやうなことにな

つたんだい」

「一番初めは、あの人からあたしに手紙をくれたんです」

「いつ頃？」

「去年の、……さうですね、兎も角まだ小野田さんのうちにゐた時分です」

「どんなことが書いてあつたんだ」

「どんなつて、たゞなんでもないことなんですけど……」

「なんでもないつたつて……」

「たゞ、あたしのことを、氣持が純だとか、感じのいゝ方とかつて書いて、これからさき仲よく交際つてくれつて云つてよこしただけのことなんです」

「それ、郵便でよこしたのか」

「いゝえ。お暇のとき讀んでくださいつて、置いてつたんです」

「その時分には、お前の方でも、可なりもう好きになつてたんだね？」

「嫌ひぢアありませんでしたけど、別にそんな……」

「その程度とすれば、第一そんな手紙を、默つて受け取るつて法がないね。ひとの細君たるものに對して、たゞそれだけでも失禮ぢアないか。その場で突ッ返すなり、俺に相談するなり、……すんぢやつたこと、今更云つたつて仕樣がないけど、一旦そんな手紙を、默つてすなほに受け取つちまへば、あとはもうとん〳〵拍子に、結局仕舞には、行くところまで行き着くにきまつてるぢアないか。それくらゐのことが、わからなかつたかなア」

「あたし、別にそんな、深い意味には釋つてませんでしたから……」

「そんな手紙を、默つて受け取つとくくらゐぢア、無論、お前からも返事をやつたな。さうだらう」

「どうでしたか、はつきり憶えてませんけど、……口で云つたのかも知れませんけど、仲よくしませうつて、返事はしました。……だつて、その時には、ほんとに、たゞ普通のお友達として、いつまでも交際つて行かうつてだけの、……そいだけの意味だとばかり思つてましたから、別にあなたに相談するのなんのつて、そんな……」

「それは、お前が、滿津島の夫婦なんかもつれて、逗子にあと片づけに行つたね？ あれよりも前かい？ 後かい？」

「さうですね、たしか、あのあと間もなくのことだつたらうと思ひますけど」

「ぢア、お前の方でも、その時分もうだいぶん好きなつてたに違ひない」

一昨日の夕方、松葉で、健吉からひと言切り出された時、夢にも知

らなかつたことでありながら、同時にまた、その瞬間に、まるで盲人の目があいたやうに、はッと、さまざまな過去の事實に、一々思ひあたることだらけだつた。それから引き續いて今日まで、殆ど小歇なく、あたまのなかに浮んで來るものは、あの時のあれはあゝ、この時のこれはかう、と一々その事實に結びついて思ひあたる節々の細部情景だつた。おまけに、想像力は、小説を書くといふ仕事の性質からも、永年の間に、鋭く、逞しく鍊へあげられてゐるのだからたまらない、なんの氣もなく看過して來た過去へ、改めて投げかける探照燈の烱さは、我ながらもの凄いばかりだつた。その光りは、夙に、逗子のあと片づけから、二人だけ先に追ひ歸されて來た滿津島夫婦の言葉の裏へも強く射つけられてゐた。——汽車のなかや、荒れ果てた別莊の庭さきなどで、若やぎはしやいでゐるおしげ、狎々しく、淫蕩な冗談も平氣で口にするやうな青年たち、いくぶん邪魔者扱ひにされて、苦りきつてゐる滿津島夫婦、——さういふ登場人物の一擧一動まで、手に取るやうに思ひ描くことの出來る、過剩と云つてもいゝほどの想像力のために、この二日間、昌造の心は寸時も憩まる暇はなく、ひと晩で頭の毛が眞白くなるかと思はれるほどの苦惱をも嘗めて來てゐたのだ。それだけに、抑の事の起り、——良人の留守にあの大震災に會ひ、潰れた家のなかに、二三十分もかゞまつてゐたあと、力と頼む者もなく、極度の不安のうちに野宿の一夜をあかしたおしげのもとへ、途中の艱難をものともせず、勇しく自轉車を乘りつけて來た若者が、どういふ第一印象を與へてゐるか。さういふ使はよこしても、自分自身は、玲瓏のお梅と一緒に、番町のうちから、せいせい及び腰の心配しかしてゐてくれない良人が、その際、特にどういふ人間に思はれたか。——そんな察しはつきすぎるほどつくし、男女の心が、近づき相倚るに、殆ど間然するところのない情況と、その點も重々無理のないことゝ思つてゐた。

では、なぜ健吉の話を聞くまで、そこに爪の垢ほどの危險も思ひ描かず、疑へばいくらでも疑へるやうなあまたの事實をも、輕く、氣樂にばかり看過して來たか、と云ふに、——ひと口に云つて了へば、それほどまでに昌造といふ人間は、お人よしなのだ。例の手ぶらの構えで、——構えといふと、なんか奧に潛めた術でありさうに聞えるが、誠に氣樂な、明るく開いたたゞの手ぶらで、一切警戒といふことを知らない性分なのだ。なほその上に、とてつもない自信家なのだ。ところが、度を過ごすと、ものは却つてその逆に見えるかして、往々ひとからは、なんでもすぐ裏の裏まで見透しながら、而も知らん顏ですまし込んでゐるやうな利口者と買ひ被られたり、優和な謙遜家と思はれたりしがちだつた。無論それは、二十世紀の人間だから、

もつて生れた性分一本槍といふわけではなく、事實それらの批評に添ふやうな場合もあるのだが、蕊の蕊、奥の奥はと云へば、まづさういつた風の男なのだ。だからして、いかに自分が、うちをそとなる放蕩三昧に暮してゐようと、女房が、假にもほかの男に心を移すなどゝいふことがあり得ようとは、夢にも思はないのだ。面と向つて、「あたし、おそい初戀よ」とまで云はれても、それをたゞ抽象的な願望とのみ聞き過ごし、それもよからう、ぐらゐの氣持でゐたのだ。自信の強さは、延いては女房にまで及んで、——これがもし、千葉の代りに、もつと才幹豐な、容貌秀麗な青年ででもあつたなら、多少心配もしたかも知れないが、おしげほどのものが、千葉なんぞに……、と、相手から云つても、てんで問題にもしてゐなかつたのだ。

然し、事實くらゐ強いものはない。手ぶらも自信も、何もかも、その前へ出てはぺしやんこだつた。——昌造の人生觀は、底の底から搖ぶられてゐた。——半年前に、地殼を震ひ、劈いて來たやつよりも、更に更に大きな搖れが、今度は心に來てゐた……。

昌造は、言葉を續けて、

「あの、お前たちが逗子に行つた時だつて、ずゐぶんはたから見て、醜態ぢアなかつたかと思ふんだ。これア、俺の想像だけれど、然し、決して根據のない、いい加減のあてずつぽうぢアないんだ。その時には、なんの氣もつかずに聞いてたけれど、今から思へば、滿津島の夫婦が、盛に千葉や長谷部の惡口を云つてた意味がよくわかる。……みんな、へんにはしやいでやアがつたんだらう」

「いゝえ、そんなことありませんわ」

「兎に角、あの二人だけ先に歸して、お前たちは、鎌倉の安井君のうちに泊めて貰うて來たんだつたね。……俺がもし、疑ぐりぶかい人間だつたら、きつとその時分からそろ〳〵警戒しだして、或は、結果は却つてよかつたのかも知れないんだけれど、どうも俺は、ひとを疑ぐるとか、邪推するとかつてことが、生れつき嫌ひなんでねえ……」

「ぢアもう、それでいゝでせう。それ以上、なんにもお話することありませんわ」

「まアいゝよ」

「まアいゝつたつて、昨夜も夜あかし、今夜もまた夜あかしぢア、……あなたは晝間ゆつくりおよれるからいゝでせうけれど、あたしはたまりませんわ」

「ひと晩やふた晩の夜あかしが、一昨日からの俺の苦しみと一緒になるか！　よく考へてみろ！　馬鹿！」

昌造は、胴震ひを抑へやうとして、胸高に組んだ兩腕に、しつかりと我が胸を抱き竦めてゐた。

「毎晩々々辛いと云ふんなら、今すぐ綺麗に白狀しちまつたらいゝぢアないか！」
前の一喝に、ひとたまりもなく縮みあがつたおしげが、クスンと鼻を鳴らしたと思ふと、伏目の睫に涙の玉がつたはつて、ぽたりと膝へ落ちた。今夜は、それももうそら涙のやうにしか思へず、昌造は、その手に乘るか！ と心のうちに叫んだ。
「昨夜までは、俺も、どうかしてお前たちの言葉を信じたい、——決してそんなことは聞かなかつたといふ證據を、出來ることなら、はつきり目の前に見せてほしい、と云ひたいほどの慾があつた。こつちに、それだけの弱味があつた。然し、もう今夜は——お前が、嘘のつける女だといふことを知つた今夜は、そんなけち臭いそら頼みなんか、綺麗さつぱりうつちやつちまつたんだから、そのつもりでゐてくれ。お前の胸のなかに、たつた一つの嘘の破片でも殘つてゐる限りは、夜があけようと、日が暮れようと、一歩もこゝから動かさせないから、さう思へ！」
その時にはもう、兩の袂に埋めた顏を、肩から絞り出されるやうな泣聲と共に震はせ、とても口などの利けさうな樣子ではなかつた。
「泣いたつて、駄目だ！ いくら泣いたつて、そんなことで俺の氣持は和ぎアしない。お前が、何もかもすつかり白狀しちまうまでは、いつまでだつて、俺は頑張り通すから！」
そのあと、昌造は堅く口を噤んで了つた。どうせ荒つぽい言葉よりほか出せないこの場合に、ものを云ひ續けてゐることは、それと競爭のやうに、また彼方の泣き聲をも、どこまでも引き伸ばさせて置くだけのことだ。それより、泣き聲を、沈默の壁で受け止めて了へ。さう思つて、いつまででも根氣よく待つことにした。待つ、といふ氣持がある間は、然し、泣き聲か耳から離れず、氣になつて仕方がなかつた。いい加減、もうこつちからなんとか言葉をかけてやらうか、といふ弱氣が、自然そこへ兆して來た。これではならない、と思つて、煙草に火をつけ、さも氣樂さうにあたりを見廻したりして、氣を紛らした。階下の時計が三時をうつのも、はつきり聞き、これがこの次四ツ鳴らうと、五つ鳴らうと、彼方から口を切るまでは、斷然ものは云はんぞ！ とます〳〵決心を堅めた。
然しそれから二十分とはたゝないうちに、おしげの泣き聲は、次第に細まり、遂に歔欷に變つて來た。
（やらうと思へば、俺だつてなか〳〵これで慘酷なまねも出來るんだなア）
ひとり、胸のうちにから呟いてみたが、それは、決して自ら悲しむとか、惧れるとかいふ嘆聲の調子ではなかつた。寧ろ、今まであまり

氣がつかなかつれた方面に、思ひがけない精神生活の分野が展開けて來たことを悦び祝ふ、——といふほどでないまでも、ちよつともの珍らしく、面白がる、ぐらゐの氣持は慥にあつた。

たうとう、歔欷の間から、おしげの言葉が洩れた。

「あなたは、なんにも訊かないで、……たゞそのまんまで許すと仰有つたんぢアありませんか。あの人がゐる前だと、そんな體裁のいゝことばかり云つといて、今ンなつてから、……あたし一人ンなつたと思つて、そんな、そんな……、ひ、ひ、卑怯だと思ひますわ」

「今だつて、立派に許してるぢアないか」

我ながら吃驚するほど、昌造の調子は、落ちつき鎭まつてゐた。これは、おしげにとつては、白刄の冷たさだらうと、一方、そんなことを考へるほどの餘裕すらあつた。

喫いかけの煙草を灰にさして、

「許さないといふのは、離縁するのなんのつてことになる場合だらう？ 俺は、そんなこと、ひと言だつて云つてないつもりだ。頭ッから、無條件に許してるぢアないか」

「そんなら……」

「お前がしでかした今度の間違は、既に無條件に許してゐる。昨夜から今夜にかけてお前に訊かうとしてゐるのは、あからさまな事實だ。それは、お前の胸のなかに、嘘の種を殘して置きたくもないし、また俺としても、眞實でないことをさうと信じたまゝで一生を終るのも可厭だからだ。が、それはそれとして獨立した問題で、こゝで今お前が、眞實のことを云へば許すとか、さもなければ許さんとか、或はまた、事實、もし體の關係があつたのなら許さないとか、いよ〳〵さうでないときまれば許すとか、さういふ風に、前の問題と繋りをもつてゐるわけぢアないんだ。前の問題は、とうに無條件で片づいて了つて、これはまたこれで、——無論事件としての繋りはあるが、また改めての別問題なんだ。どうだ、わかつたらう？」

「どうせ許してくださるんなら、さつぱりと、……そんなに根掘り葉掘り諄くお訊きなさらなくつたつて、綺麗さつぱりと……」

「その、綺麗さつぱりした氣持に、お互がならうと思へばこそ訊いてるんだ。いゝぢアないか、お前がどんな事實を聞かせたところで、前の問題——お前を離縁するとかなんとかいふやうな、その方の問題には、少しのさし響きもないんだから。その方は、夙にもうきちんと片づいちまつて、あとからどんな事實が現はれて來ようと、小動ぎひとつさせアやしないんだから」

「そんなら尚更もう勘忍してくだすつてもいゝだらうと思ひますわ」

「勘忍つて云はれると、なんだか俺が、責め折檻でもしてゐるやうに

聞えるが……」

「そらさうですとも！ ぶッたり叩いたりこそなさらないけど、さうされるより、何層倍辛いか知れやアしませんわ。あたし……」

と、そこでまたおろ〳〵聲になつて、「こゝこんな辛い思ひをしたこと、生れて初めてです。もう、もう、死ぬほど辛ござんすわ……」

例によつて、その涙のおさまるまでのひとしきりを、昌造は、張合のない無言のうちに過ごした。

「だから」

と、やゝ鎭まりかけたところで、徐ろに口を切つた。「それは、昨夜も婉く云つた通り、今の辛さはほんのいつ時だが、先へ持ち越して了つての心苦しさは一生涯だ、——齲齒が出來たら、ひと思ひに拔いて了ふがいゝんだ、そのひと思ひを辛がつて、三日も四日も、一週間も、痛い思ひを永びかせるにやア及ばないんだ。さうだらう？」

「でも、あたし、……どうぞそれだけは……」

自ら白刄の冷澄を以つて擬してゐた昌造が、その「それだけは」といふひと言を、ぐざりと下ッ腹へ突ッ込まれたシャベルのやうに感じた。ひとつ鋤き起されゝば、五臟六腑は、めちや〳〵に引き裂れ、一緒くたになつて、流れて出して了ひさうな氣持だつた。が、ぐッとこたへて、

「そればかりは、と云へば、兎に角、さういふ事實があつたことはあつたんだな」

「そ、そ、さういふわけぢアありませんけど……」

「事實はあるが、それだけは訊かないでくれつて云ふんだらう」

「でも、でも、あたし、あゝ、あゝ、あゝ」

と、身を悶え、泣き崩れて了つた。昌造は、布團から乘り出して行つて、背後から左の手を廻し、切腹した人間を抱き起すやうに、胸へ、——丁度心臟のあたりへ、びたりと、おしげの肩を擁へ込んだ。

——と、ぷーんと、また、魚の腐つた腸だつた……。

「さア、お云ひ！」

「勘忍して、勘忍して、……もう勘忍してエ……」

「齒を一本拔くつたつて、齒醫者の、あの椅子を、うしろへぐうッと倒される時にやア、誰だつてあんまりいゝ氣持はしないんだ。苦しいのはよくわかる。だけど、そこを辛抱して、思ひ切つて云つてお了ひ！かうして、俺が、しッかり抱いてゝやるから」

「あゝあ、あッ、あッ」

息が喘いで、蒼み亘つた額際に、玉なす汗だつた。

「可哀想だと思つて今まで云はなかつたが、昨夜ッから、お前の體は、とても鼻もちがならないほど臭いんだぞ。なんだと思ふ、この臭ひ

は！　俺に内證で、お前がしたことの臭だ！　何もかも云つて了はないうちは、神様が、この、魚の腐つた腸みたいな臭を、お前の體からぬいてくださらない。俺には、この臭さだけでちやアンとわかるんだ。神様が敎へてくださるんだ！」

「……かにしてエ、……もうかにしてエ……」

杜切れ杜切れる息の下から、譫言のやうに叫びつゞけた。

「いけない！　半分生れかゝつてる赤坊がもとへ押し込めるか！　さア、もうひと息だ！」

「これだけは、……でも、これだけは……」

「いけない！」

「一生、決して云はないつて……、殺されても云はないつて……」

「俺に話す眞實のことゝ、そんな、別れた男との約束が、比べものになると思つてるのか！　どつちが大切かわからないのか！　さア、そこまで云つちまやア、あともうひと言ぢアないか！　お云ひ！お云ひ！　云つてお了ひ！」

亢奮で、いつか昌造の目からも、ぼろ〱ぼろ〱涙はこぼれ落ちてゐた。しとゞに濡れた頰がすう〱した。

出産の苦しみにも、おさ〱劣らなかつたらうと思はれる身悶えの後に、遂に、そこに、なんでもない二言三言が日の目を見た。――三度、――、、、、、、――恐ろしさに、、、、、、、、、、、……。

夫婦とも、そのあとは、もうへと〱に萎え疲れてゐたが、然し、蒼白く冴えきつて來た亢奮から、そこで打ち切つて、ひと息いれるとか、眠りに就かうとか、さういふ考へは毛頭浮んで來なかつた。その點からは離れたが、なほ昌造は、さま〲な細部へ、鋭い訊問の錐を向けて行つた。峠を越して了つた氣安さから、おしげも、わりにすらすらと、どんな問ひにも答へた。例へば、

――同じ二階に間借りしてゐる長谷部が、この事件を知らない筈はないが、どうだ。

――或る時、床のなかで泣いてゐるのを聞き咎められ、問ひ訊されて、遂に一切を打開けたとのことだが、堅く口止めはしてあると云つてゐた。

――彼方から來た手紙がとつてあるだらう。

この答へには、おしげが、ほんのちよツピリばかり、その代り純粹に、その性分うちに保つてゐるユーモアの、偶然の流露で、場合も忘れて、二人ともくすッと笑つて了つた。

「みんなぢアありませんけど、なかでいゝのだけ……」

この「いゝのだけ」には笑はされたが、なほ昌造は言葉をつゞけて

――それを持つて來て見せろ。

――荷造りして了つた用箪笥の抽斗だから、鎌倉へ行つて、荷ほどきしたら見せる。

――岩井が肺病らしいと云ふので、北海道へ歸したのは、お前と千葉との發議だつたが、あれは、自分たちの間を勘づかれる惧れがあつたからではないか。

――別にそのつもりでもなかつた。

――然し、歸る前、俺に挨拶に來た時、さも何かもの云ひたげにしてゐたが、或はちやんと知つてゐたんではないか、と今から思ひ合されるが……。

――それはどうだか知らないが、岩井が肺病で、使ひとつ頼みにくかつたことは事實だ。

――去年の歳尾に、おこうへ下駄を贈つたのは、意味が深いと思ふ。あゝして厚意を示して二人の氣持を樂にし、屢々うちをあけさせやうといふ下心も、いくらかはあつたんだらう。

――そんな細な、氣持のことまでは憶えてゐない。

――小野田のうちへ引越して行つてから、こゝに住んでゐる間に、何か兇いことが起りさうな氣がする、と度々俺が云つてゐたが、お前の心が千葉に傾いて行く時分に、それを思ひ出して、俺の豫感に對してもすまない、といふやうな氣はしなかつたか。

――それは、ちよつとそんな氣もしたことがあるやうだ。すまないと云ふより、可怕いやうな氣がした。

――この頃は、千葉が可怕うて、別れたいと思つてゐたといふが、俺のゐる前でさへ、あんな云はないでもすむお世辭をつかふくらゐで、どうして二人きりの對座で、別れ話がもち出せると思つたらう。

――答なし。

――それこそ、殺されはしまいかと思ふ筈ではないか。

――答なし。

――そんな計畫をたてゝゐたなどは嘘で、實は、鎌倉に引越してから、俺が留守になるといふやうな時には、尚更逢ふのに都合がいゝと思つてゐたのではないか。あつちへ行けば、隣に吉井がゐるわけでもなし……。

――そんな氣はなかつた。ほんとに、どうかして別れたいと思つてゐたのだ。

――あの貸家を見に行つた時でも、お前たち二人は、最後までうちのなかで愚圖ついてゐたではないか。

――戸を締めてゐたからだ。

――金錢の關係はなかつたのか。

――昨年の歳尾がどうしても越せないと云ふので、二百圓貸した。

──それはどうした金か。

──自分のへそくりだ。

──返してよこしたのか。

──返さなければすまない、すまないと云つてゐたが、たうとう今だに金は出來なかつた。

──それをどうするつもりか。

──長谷部を介してでも、返して貰はうと思ふ。

──馬鹿なことを云ふな。それは綺麗にくれてやれ。

──では、さうしよう。

──一緒に死んでくれと云はれたのはいつ頃か。

──つい最近、十日ばかり前からだ。

──それに對して、お前はどう答へてゐたのか。

──子供があるから、自分にはそれだけは出來ない、と、いつもそれを云つてゐた。

──俺と離緣して、夫婦にならうといふ相談をしたことはないのか。

──それは、最初から出來ない相談と思つてゐたから、自然話にものぼらなかつた。

──お前は、純粹に千葉を好いたのか。それとも、俺におこうといふ者があつて、勝手氣儘な振舞をしてゐるから、その面當といふやうな氣持もいくぶんあつたのか。

──それは慥にあつたと思ふ。然し、面當さへ出來れば、相手は誰でも構はないといふわけにはいかないのだから、好きなことも、慥に好きだつたのだ。

──お前は、あゝいふ、自分より下の、萬事につけて安く扱へるやうな男が好きなのか。

──自分はさうも思つてゐない。

──現にお前は、始終安く扱つて、少しの尊敬でも拂つてゐるやうには見えなかつたではないか。

──然しあの人のおかげで、あなたの留守中も、うちのなかが賑かに、明るくなつてゐたことは、自分として、可なり有難く思へた。それで、毎日でも來てゐて貰ひたいと思ふやうになつたのが、心の傾く始りだ。

──今後もさういふ人物を、家庭に要求するやうだと、また同じやうな間違を繰り返さないとも限らない。俺も今後は、出來るだけうちをあけないやうにするが、お前も、あゝいふ安値な賑かさなどを、やたらとさうほしがるやうなことは愼んでくれ。子供たちにだつて、あまりいゝ影響は與へないのだから。

擧げて行けば切りがないが、まづかういふ風なものだつた。

朝が來て、次々に子供たちが起きる度に、女中を呼んで、片ッぱしから階下につれて行かせた。兩親對座の、嚴しい空氣は、小さな末の子にまで、唯事でないといふ感じを起させたか、マ、、マ、とやかましくも云はず抱かれておりた。

强弓の滿を引き絞つたまゝに、いつまでも夫婦の亢宿は續いた。飲まず食はず、——便所にさへ立たずに、發つた一日が暮れて行つた。その間には、度々子供たちが、梯子段のあがり口へ顏を出したが、その都度昌造は、優しく優しくと努めながら、階下に行つておいで、と云ひ聞かすのだが、おのづと罩る嚴しさに、言葉も返し得ず、すぐばたくくと駈けおりて行つた。そのいぢらしさだけが、もうよさう、もうよさう、といふ反省を、昌造の胸へ蘇らせた。

「大抵これでもう、訊くだけのことは訊いたと思ふが……」

夕闇の色が刻々と迫つて來るなかに、昌造も、今度こそは打ち切らうと思つて、かう云ひ加へた。「然し、肚の底の底を割つてのほんとうの話が、實はまだ、靑天白日に、からッとしないところがあるんだ。まだ二つ三つ、お前の言葉のなかに、噓がありやアしないか、と思はれる節があるんだ、腑に落ちきれないものがあるんだ。それだけは保留して置くが、こんなことを度々やつてたひには、お前だつて俺だつて、それこそ壽命を縮めちまうから、いま云つた二三の點を除くほか、今後一切この件については話をしない、といふ約束をしよう。ずゐぶん昨夜はお前も苦しかつたらうと思ふが、よく然し云つて了つた。當分はお前も、實にこの上もない慘酷な責め方をされた、と思つて、俺を怨しく思ふだらうが、今にごらん、あゝ、あの時、あゝして何もかも云つて了つて、ほんとにいゝことをした、と自分ながら嬉しく感じる時がきつと來るから。實際、可哀想だつたけれど、おそかれ早かれ、一遍は通らなければならない苦しみなんだから、……まア、ほんとにこれでよかつた。その代り、今も云つたやうに、二度とこの話でお前を苦しめるやうなこたアしないからね。たゞ一つ二つ、俺の腑に落ちきれないことだけは、いづれいつか、また折をみて聞くから、それだけは前もつて承知して置いてくれよ」

「まだあるんですか」

緊張の緩んだ顏に、うんざりだなア、といふ表情が、いやにありあり描き出されて可笑しかつた。

「然し、それアまア、そんなに肝心な點でもないんだから、いづれ追てのことにしようよ」

昌造も久振りの笑顏でうけて、「今夜はお前も、早寢をして、ゆつくりおやすみ。あれだけのものを吐いちまへば、ずうッと胸も樂にな

つてる筈だから、きつと安眠できるよ。體の臭いのもぬけちまふよ」

「ほんとですか、臭いつて」

「ほんととも。よく自分で嗅いでごらんな」

「さうかしら」

胸に顋を引いて、スン〳〵鼻を鳴らしてゐた。——かういふ子供ツぽい様子を見ると、昌造は、綺麗な珠に、いらせないでもいゝ襞をいらせて了つたやうに、今更また目のなかの熱くなるのを覺えた。引きよせて、輕く額に接吻してやり、

「えらかつた、えらかつた！　よくあの苦しみを我慢した！」

と、心の底から褒めてやつたが、然し、それによつて掻きたてられ、反射して來る感情といふものは皆無だつた。體も、力なく　たゞぐにやッと倚りかゝつてゐるだけのことだつた。

——昌造は、それを、過度の疲れと、簡單に解した。

編輯だより

◇不景氣は益々深刻になつて行くと共に、失業者も激增して百五十萬にも達したと見る向もある。世界的不況時代とは云ひ乍ら、斯うした濕つぽい時代を何とか切り拔けられぬものか。炎暑を控えて心痛の限りだ。

◇此の重大時期に當つて、本社は、安達內相、井上藏相をはじめ、安部、阿部、高橋、那須、末弘諸氏の參集を願つて眞摯な態度で一夕の失業問題討論會を催した。どの階級たるを問はず必讀すべき最高價値がある。

◇夏が來た。山と海を慕ふものに、三浦氏の海魚の話、藤木氏の氷河の話は、樂しい讀物だ。

◇「ゾラの審判」は好評嘖々たる「ドレフユス事件」の續篇で、事件は愈々本筋にはいつてきた。大佛氏の名筆と相俟つて息をもつかせぬ讀物だ。

◇創作三篇いづれも堂々たる雄篇、天晴大改造の貫祿を示した。生田氏の「小公子」は釋迦の幼年時代を描いたもので、氏が多年研鑚の蘊蓄を傾けて成つたものである。

◇前田河氏の「ヘンリ・フオード」はフオード王國の裏面を遺憾なく暴露したもので、その精密にして然も雄大な構想は、群少プロレタリア作品を斷然壓倒してゐる。

◇我が文藝のあらゆる分野の尖端を切つて、華々しく立働いてゐる龍膽寺雄、武田麟太郎、外十四家の作品集を『新鋭文學叢書』として大系付け、出版部より刊行された。それ〴〵の勞作は、皆文壇急旋廻の尖端に立てるものであり、また『明日の文藝』を指標するものである。裝幀清新にして鄭重、定價は各冊僅かに三十錢である。

◇『社會科學大辭典』は、類似の小川版の續出するにも拘らず、泰然として王者の如き勢威を斯界に指示しつゝある。而して購讀者の懇請によつて、特價期日を七月二十日に延期した。

◇我が社は更にまた『自然科學』に關する大出版の計劃を整へつゝある。大衆の知識慾は漸く實證科學に動向しつゝある今日、此の出版は、明かに大衆の心を心とする我社の抱負を如實に語るものである。

◇獨逸の大學教授デイル氏の『社會問題二十五講』が近く本社から出版される。これは同教授が獨逸の大學で學生に講義したもので、社會問題についての世界的名著である。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵稅不要
壹ヶ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和五年六月十八日　印刷納本
昭和五年七月一日　發行

編輯兼發行人 印刷人　東京市芝區愛宕下町四ノ四〇　山本三生

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下町四ノ四〇　改造社
振替東京　八四〇二
電話芝(43)　二二三一　二二三二　二二三三　二二三四

(特價七拾錢)
(郵稅四錢)